

一般人生徒リツカ！

ブタどもの一人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生をした、手の甲には令呪。家に帰れば押掛け女房。

見事な原作介入フラグですね、だが断る。

俺はただ彼女と毎日騒がしくも穏やかに暮らしたい。

そんな元マスターのぐだぐだな日々。

※すぐく今更なんですけどfgoのネタバレ激しいです。

EORとか二部も関係なくさらっとネタバレしますのでご注意。

※これまた今更なんですけど、独自解釈、オリ設定が乱舞してます。ネギまとfat  
e、少なくともfgo知ってた方が良いかもしれないです。

# 目次

どうやら藤丸立華ではなく、ぐだ男らしい。	1
交流関係とか誰かの策略にしか思えない	13
い	13
俺はエリちゃんと静かに暮らしたいだ	33
け……いやマジで	33
何気ない日常が俺の幸せ、とか言つて	56
みたい	56
動き出すとき	81
キーアイテムはいつも都合がいい時と場所にある。	105

混沌の中から始めにガイアが現れました。	134
動き出した時は止まらない。止まるん	166
じゃねえぞ……	166
小さな差異	191
無駄な争いは悲劇を生むだけだって、	225
どうして分からないんだ!!	225
破綻した正義の聖人	256
万能の人	277
幸運のランクはEだ。	294
一章 三年生	
閑話 ■■少女と■■■■	313
進級	331

反英雄

351

審判の刻

380

霊長を律するもの、裁定を下すもの

二章 京都動乱

旅支度

554

408

学園を襲う天災

426

京都・一

571

また小さい子の話してる……。

京都・三

619

469

閑話 山門の守護者

491

京都・五

668

エンディング後のドタバタは割とシヤ

京都・六

700

レにならないものもある。

508

京都・七

721

先行量産型は謎の格好良さがある。な

京都・八

748

い？

525

京都・九

774

光と闇が両方そなわり最強に見える。

京都・十

802

538

京都・十八	1028
京都・十七	999
トその2	993
マテリアル1	
オリジナルサーバ	971
京都・十六	962
トその1	
マテリアル1	
オリジナルサーバ	942
京都・十五	926
京都・十四	901
京都・十三	870
京都・十二	840
京都・十一	

どうやら藤丸立華ではなく、ぐだ男らしい。

やあ、俺の名は藤丸立華<sup>ふじまるりつか</sup>。

麻帆良学園高等部に通う二年生の男子高校生さ。

エスカレーター式といえど学生の本分である勉強は欠かさないし、友達と一緒に遊ぶのだから全力さ。

それに二年生も、もう一月、数ヶ月後には三年生ともなれば大学で専攻する学部や将来のこともちゃんと考えなきゃならない。

寮制なのに毎日電車通学だし、車を追い越すレベルで走る人やオーバートクノロジーなロボットや、気合いで気弾みたいなのを出す格闘家もいるけど、頑張つて勉強してちゃんとした会社に就職するんだ！

色々と規格外な麻帆良だけど、部屋に帰れば可愛いサーヴァント（※使い魔や奴隸の意）が出迎えてくれるんだ！

だからどんなに辛いことがあつたつてへつちやらさ！

あの、『おかえり、ご飯にする？ お風呂にする？ それともお……私のライブ』の一  
言だけでやる気満タン！

ヒヤッホーウ！ 思い出したらやる気が満ち溢れてきたぜえ！  
だから今日も、元気にいつてきまーす！

……うん。たぶん、みんな色々とツツコミがあると思う。だが待つてほしい、これつて俺のせいじゃないと思うから。

とりあえず俺が現実として認識している『前世』とか言うやつの記憶を探ろうと思う。俺の前世はフジマルリツカとかいう今頃、ブラツクな職場で命懸けの戦いを強いられていそうなコミュ値カンスト逸般人じゃなく、ごく普通のサラリーマンだったと思う。間違つても古代ローマ兵とサシで戦つたりしない。

サラリーマンと書くと、とりあえずスーツ着て朝の満員電車で揉みくちやにされてるイメージだが大体合つてる。



もつと詳しく言うとはチエーン展開している雑貨店の社員だったのだが、特に関係ない。

大事なものはその会社が倒産してしまったことにある。最悪なことに社長は夜逃げだ。そして不幸は続くもの、運悪く、朝の電車で痴漢の冤罪をかけられ裁判に発展した。あの時の周囲の人々の目が嫌だった。やっていけないことに対して侮蔑の目を向けられるのだ。堪ったものではない。

あげくには痴漢の件が未だ片付いていないうちに車で事故に巻き込まれ入院。幸い、一月ほどで帰宅できたが、その間に同棲していた彼女は男を作った上で金目のものを持ち去って姿を消していた。

その男というのも俺の高校からの友達であり彼からのメールによつて浮気が発覚した。

痴漢の件により彼からも侮蔑の感情を向けられており、元カノが窃盗したなんて話は一切聞いてもらえなかった。

両親や兄弟のいない俺は一瞬で孤独になった。

そうして全てを失つて、茫然自失としながら大通りを歩いている時にけたたましいクラクションの音と眩しい光に包まれた。

……と、ここまでが俺が『前世なんじやないかなあ』と認識している記憶。その後は目が覚めて見知らぬ若い女性の腕に抱かれていたりとお約束ごとが続いてとうとう高校二年になってしまった。

幸い、両親は優し“そう”な人物で俺を麻帆良に入れたこと以外は特に恨みもない。ただ、幼い俺を麻帆良に入れたこと、それだけは許せねえ。

麻帆良という名前でお察しなのだが俺が生まれ変わった世界は『ネギま!』という漫画作品の中だった。いわゆる転生である。

特に神様とかには合わなかったが、まさか現実で自分が体験することになるとは思わなかった、とテンプレのごとく驚いたものである。

まあ、だからと言って“そういう世界”に関わらなければ何の支障もないとは思っている。だからこそ俺は初めに男として生まれたことに感謝した。

『ネギま!』の作中において主舞台となるのは女子中等部である。物語の開始時期は2002年で今年度だが俺はもう高二である。

特に主要人物と血縁関係もなし、交流関係も“ほとんど”ないし俺が物語に引き摺りこまれる心配は皆無だと言える。

だがここで前述した致命的な問題が一つ存在する。

そう、『英<sup>サヴァント</sup>霊』の存在だ。

ことの始まりは二年前、あれは中学最後の麻帆良祭の夜だった。

ふと、何の脈絡もなく俺の手の甲が焼け付く痛みに襲われ見てみればそこに見知った令呪が刻まれていた。

その時の感情といつたら『ああ、来てしまったか……』の一言に尽きる。世界観をガ  
ン無視した唐突な令呪出現は原作介入の予兆である。

半ば諦めながらも寮に帰ればそこには、

『あら、遅かったじゃないマスター？ お風呂にする？ ご飯にする？ それ・と・もお  
……』

俺は迷わず扉を閉めた。ちなみに一人部屋だ。

『ちよつとお!! せっかく私が“ごっちに”来てあげたのにひどくない!!』

扉越しにそのような大声が響いては他の部屋の寮生に聞こえてしまう。仕方なく中  
に入つて事情を聞くことにした。

曰く、俺がマスターであることは確かでありやはり俺が召喚してしまつたらしい。だ  
がいつだ？ 令呪が現れてからもその前もこれと言って怪しい儀式とかしてないんだ  
が。

そう問うと不思議そうな顔をした彼女が答えた。

『え？ したじやない、〃カルデア〃で。何言ってるのよ、ボケた？』

カルデア？ 全く覚えがない。そもそもこの世界では魔術師は存在せず今はまだ2002年だ。人理焼却事件など起きていない。

それと、俺はまだ精神的にも還暦前だ。

『あー、そうじゃなくって。あなた、生まれ変わったんでしよう？』

続くその言葉には衝撃を受けた。何せこれまで誰一人として転生のことなど話していない。いや、話したところで精神病棟行きだろうが。

だが、それも次の言葉である程度合点がいった。

『おかしいわね、記憶は続いてるってお花の魔術師が言ってたのに』

マリーリンシスベシ。

事情は分からないがとにかくアイツの所為らしい。あの爽やかイケメンクソ野郎が絡んでいゝなら大抵の無茶は通る。伊達に宝石翁に並ぶ機械仕掛けデウス・エクス・マキナの神と呼ばれていない。

だが、それで俺のところへ彼女を送る意味がわからない。そう問いかける。

『なんでも、〃なかなか引けない恨みを送られて困ってるから代わりに行って来てよ〃って話だったわ』

まさかの自業自得だった。確かに前世では一度とて召喚に応じてくれない彼に恨み言を述べていたりもしたが。あくまでゲームの話だ。そんな、来世にまで復讐されるほどのことじゃない。

というか、カルデアからこっちに来てしまったらカルデアは困るのではないだろうか？

あれ？ そもそもカルデアって最後の記憶だと崩壊して英霊も退去してしまっていたような？

こいつ、一体、どこから来たんだ？

『崩壊?! デジマ?!』

彼女も知らなかったらしい。

一体どういうこと？

更に詳しく話を聞いていくと、どうやら彼女は退去までの記憶を有した状態で新たに召喚されたサーヴァントという扱いらしい。つまり、f g o 世界線の彼女とは別個体という扱いになるとか。 b y マーリン

そうなるなら、仮にぐだ男が彼女を呼び戻しても現れるのはここにいる彼女とは別個体ということか。ややこしい。

だが、彼女自身もよく分かっていないらしくこれ以上問い質しても意味がなかった。

正直、困ったことになった。俺は正確には彼女の知るマスターじゃないしぐだ男みたいにコミュニケーション力が高いわけでも、あんな眩しい清らかな精神をしているわけでもない。

自分で言うのも辛かった、なんだか、自分が同じ名前をした偽物みたいな感じがして。だが伝えなければいけないことなので渋々伝える。

『は？ え、いや、子イヌでしょ？』

しかし彼女は「何言ってるんだこいつ」みたいな反応を返す。だから違うと言ってるだけだろ。

『やっぱ覚えてないのかしら……でも魂は確かにマスターなのよね』

魂とか怖いこと言うなよ。なにそれ、魂って見分けつくもんなの？

『うーん、見るといふより感じる、の方が正しいわね！』  
なんだそれ。

そう言われても俺の前世は確かにサラリーマンだし人理修復などした覚えはない、ゲームでしか。

『ゲーム!?! なにそれ、めっちゃ気になる』

ふとこぼした眩きに過剰に反応する彼女。渋々、f g oについて話す。ゲームのキャ

ラに『お前、ゲームのキャラだから』と言う行為は死刑宣告にも等しい『残酷なことだ』  
と思いつながら事も事態の究明のために話した。

のだからー

『なにそれなにそれ！ え、私ってそんな人気なの!? いやー、やっぱり時代はドラゴン娘よね!』

予想外にも好意的な反応を見せた。少々、彼女の人気に関して話を盛ったのが良かったのかもしれないが別に不人気なわけじゃないし嘘じゃないし。

その後もEXTRA系統の話やら fate について熱く語り合った。

ふと、冷静に考えてこの状況が限りなくカオスなことに気づき話を戻す。

『なーんだ、やっぱりマスターじゃない。間違えたかと思ったわよ』

だが、それでも俺はマスターらしい。曰く、子イヌを導いてたんでしよう？ つまりPね！ とよく分からない解釈されていたが俺もよく分からないので流すことにした。

さて、続いて気になるのは『それでこれからどうするの?』ということであり先ずは彼女に令呪が使えるか試しておきたい。いざという時、これがただの刺青だったら目も当てられない。

『令呪をもって命ずる、お茶を入れろ』

特にやってほしいこともなかったのでお茶を入れてもらった。機能はすっかり本物だと確かめられた。

とんだ瑣末ごとで令呪を使う俺に彼女は若干引いていたが、入れてくれたお茶を『美味しい』というとすぐに機嫌を直した。そういうところがチヨロインとか言われちゃうんだと思う。

次に現界に際しての魔力だ。生憎とこの世界の魔法も、型月の魔術も使えない俺はとんだだけ魔力を有しているのかてんで分からない。伊達に十七年も一般人していない。本当に何もしてこなかった。

そもそも英霊一人現界させるだけでも規格外の魔力量の持ち主でなければ不可能だった気がする。あれ？　じゃあなんでこんなにも普通にいるんだ？　すでに彼女と会ってから数時間が経過している。

『んー、なんか外にあるデツカイ木から魔力貰ってる気がする』

とは本人の談。気がする、とはなかなか曖昧だが俺には確かめようもないのでどうしようもない。本人は大丈夫と言っていたのでたぶん大丈夫なのだろう。

そして最後に、彼女を今後どうするか、である。



『え、まさか、捨てられちゃうの……？』

話を切り出せば彼女はそんなことを述べた。あの純粋な瞳で上目遣いをされるとクリティカルヒットだ。

ぶつちやけ彼女は彼女なりになかなか聡いしそれなりに暗い過去というか未来を背負っているので純粋かと言われると疑問符だが、こういう場面に対しては恐ろしく天然だ。

まあ、正直、原作と違って一人部屋な寮では少し寂しい気持ちもあつたしサーヴァントなら魔力さえ供給できれば食事もいらないし、なにより彼女は「可愛い」。

要するに最後の一言で十分だった。

なのでとりあえずこのまま部屋で匿うことにする。

『やった！ この喜びをライブで表したいわ、会場の準備を頼むわよ子イヌ！』  
それだけはやめてください。麻帆良の住民が死んでしまいます。

一息ついたところで唐突に思い出したことがあつた。

「そういえば、名前を聞いていなかったな。まあ、聞く必要もないが改めて口上を聞いた気分だ」

「ふふ、しようがないわねえ」

一回しか言っていないし別に嫌ならいい。

「ああ、うそうそ！ やっぱり一回は言つとかなないと格好つかないわよね！」

そうか、なら俺から名乗ろう。

「麻帆良学園本校高等部二年、藤丸立華だ」

先に名乗る俺に対して彼女は手に持つ「マイクスタンド」をくるりと回して名乗り返す。

「サーヴァント・ランサー。真名エリザベート・バートリーよ。これからもよろしく、マスター！」

うん知ってた。その真つ赤な髪、爛々と輝く碧眼、長い爪と竜の尻尾にマイクスタンドを持ったアイドルといえぱー

「やっぱエリちゃんだよね」

## 交流関係とか誰かの策略にしか思えない

「ねえねえ子イヌー」

俺のベッドの上で寝転びながらパタパタと足を揺らすエリちゃん。

……お前、潔癖症なんじゃなかったのかよ。

「え？　なんか言った？」

いや、何でもありません。たぶんその設定忘れ去られてるよなあ。とぼんやり思いつつ、こんな状況に陥っている経緯を思い出す。

とりあえずエリちゃんを受け入れたのはいいけれど、そうなると問題となるのが麻帆良にある結界と魔法先生たちである。

エーテル体、すなわち魔力の塊であるエリちゃんがいることでもう既に彼らには気づかれていることだろう。

もう数分もすれば突入してくるんじゃないかと思う。

そうなつてくると必然、魔法業界に関わることになるので原作のインフレ上等魔境バトルに巻き込まれる危険性が飛躍的に上がる。どころか下手にネギ君たちにちよつかいを出して、まさかのバッドエンドになってしまったらもう目も当てられない。

旧世界に住む身としてはあまり関係ないと思うだろうが、MMに残党でも残っていれば確実にやややこしいことになる。後々の歴史にも大きな歪みを齎すだろう。

それくらい、ネギ君の活躍は重要なのだ。

「子イ又つてばー」

「はいはい、なんだいエリちゃん」

しつこいので返事をする。すると彼女は手に持っていた雑誌をぐいっとこちらに見せて来た。

「これ！　このでっかいやつ！」

そう言つて見せられたのは麻帆良に数ある劇場の一つだった。

「これが？」

「私、ここでライブやりたいわ！」

とワクワクしながら語つて来た。

なんて無茶なことを。

「あのね、一介の学生でしかも中学生だよ？ 貸してもらえないわけじゃないでしょ」  
呆れつつ雑誌を取り上げて棚に戻す。

「あー」と残念そうに手を伸ばしていたがやがてその手もパタリと落ちた。

しばらく沈黙が続く。ベッドに倒れ伏し微動だにしないエリちゃんとそれを気にせず本を読み耽る俺。

痺れを切らしたエリちゃんが動いた。

「うがー！ なんだか子イヌ、おとなしくなっちゃったわ！」

急になんだようるさいなあ。思いつつ「なにが？」と返す。

「だって、カルデアにいた時はもつと構ってくれたもん！」

「いやいや、だから俺はお前の知る立華じゃないの。Pだって言っただろ」

「だから立華でしょ!？」

確かにプレイヤーではあったが。

ふと、そういえば、と気になったことがあった。

「エリちゃん」

「え、なに？」

真剣な表情で俺は語る。

「カルデアでのこと、詳しく聞かせてくれない？」

“この” エリザベートの記憶を聞く。そうして分かったのは、どうして彼女が俺の魂がマスターと同じだと言ったのか。その一端。

FGOというゲームのシナリオについて二つの憶測が俺にはある。

一つはシナリオパートにおいて語られたストーリーそのもの。もう一つはプレイヤーとして俺が戦ったバトルパートにおいて連れて行ったサーヴァントとのストーリー。

普通に考えれば前者だろう、しかし、バトルパートにおける激闘を示すのならば後者だ。

つまり何が言いたいのかといえ、ほとんどマシユ一人をサーヴァントとして戦い抜いたシナリオパートではどう考えても無理があるということ。

そして先ほどエリザベートと会話した限りではどうにも殆ど全ての特異点において出向いた記憶を持っている可能性があった。

以上の推論からの質問だったのだが、果たして事実は後者であった。

確かに俺はプレイヤー時代、つまり前世でエリちゃんをこよなく愛していた。いや、今でも愛しているがそれは一先ず置いておこう。

とにかく、俺は殆どの特異点攻略にエリちゃんを連れて行つた。シナリオパートで登場していなくてもちゃんと、連れて行つていたので。

だから、彼女からちゃんとその記憶があることが聞けただけでも俺は嬉しかった。無駄ではなかった、と。単なる自己満足ではなかったと。

まあ、絆はついぞ十にならなかつたけどな。

それはさておき。

「そうか、時間神殿での戦いも覚えてるんだな」

「当たり前じゃない！ あ、でも魔神柱狩る時の子イヌはちよつと怖かつたと思うけど」

そうかあの採集決戦のことも。

マシユやロマンだけじゃなくて、ちゃんとエリちゃんもその場にいたのか。

ああ、安心した。

「おーい、子イヌー？」

眼前で手を振るエリちゃんの姿にふと我を取り戻す。

だが、そうか。エリちゃんも覚えてるかー。

「これからもよろしくな」

「え、ええ。さつき言ったばかりだとおもうけどー」

妙にテンションの上がってしまった俺に若干引き気味のエリちゃんだったが、不意にその顔が真剣なものに変わった。

先ほどまでの明るくアホっぽい姿から一瞬で凜々しいサーヴァントのそれになる。

実際見ると、やつぱりカッコ可愛いと思った。

「二、いや三人……来るわ！」

と和んでいたら突然部屋のドアが開け放たれた。そこから二人の教師がズカズカと入ってくる。いくら教師とはいえ夜に生徒の部屋に勝手に入ってくるのはどうかと思えますけど。

「こんばんわ、リツカ君」

「こんばんわ、高畑先生」

果たしてその教師は見知った男だった。



高畑・T・タカミチ。女子中等部二年B組の担任を務める男で、度々、不良生徒への正義の鉄槌を下していることから『デスメガネ』などと呼ばれていたりする。

そして俺のゲーム友達だ。

「夜分にすまないね」

「いえいえ、先生と俺の仲じゃないですか」

終始穏やかに話す俺たちに、高畑と一緒に来ていたもう一人の先生、葛葉刀子が困惑した表情をしている。

まあ、先生と俺はもはや戦友とも呼べる間柄なのでお互いの言いたいことくらいなんとなくわかる。とりあえずモ〇ハン最高。

「ありがとう、で、要件は分かるよね？」

「はい、でも、エリちゃんは絶対渡しませんから」

「子イヌ……」と横でマイクスタンドを構えていたエリちゃんがキュンとした顔でこちらを眺めていた。

本当に渡す気はない。

「では、ついて来てくれるかな？ さすがにこれは断ってほしくないけど」

言いつつ高畑の腕に力が入った。

「ええ、話します。だからエリちゃんには指一本触れないでください」

「子イヌ」

横のエリちゃんの好感度が天元突破しそうだ。警戒など忘れて胸の前でいじらしく手をモジモジさせている。

その様子に高畑も若干引きながら苦笑している。

「えーと、じゃあ行くこうか」

高畑と刀子先生に連れられて歩く間、後ろからはグラサンの渋いおじさんがこつそりつついて来ていた。多分監視だろう。

確か魔法先生の一人だった覚えがあるが名前は忘れてしまった。グラサンしか覚えていない。

誰だったか。

そんなことを考えているといつの間にか学園長室についていた。部屋には魔法先生がずらりと並び、あのグラサン先生もいつの間にか列に加わっている。

そして目の前には妖怪ぬらりひよん、じゃなかった、学園長が座っていた。

「ほう、君が藤丸立華くんかね」

「初めまして学園長先生」

ぺこりと頭を下げる。たとえ相手が妖怪だろうと、十歳の子どもに先生をさせる鬼畜だろうと学園長だ。礼儀は忘れない。

「というかこの人がネギ君を先生に据えなきや魔法世界は終わってしまう。」

「ほほ、そう畏まらずとも良い。さて、では質問といこうかの」

朗らかに笑ってからスツと真剣な色を見せた学園長。こうして直に見ると迫力が違った。学園最強と言われるだけはあると思った。

前世での印象は『マジ傍迷惑なジジイ』だったが、とてもそんなことは思えなかった。

「彼女は何者かな、おそらくは君が召喚したのだろう?」

「ええ、彼女は俺が召喚したサーヴァントです」

サーヴァントという単語に疑問の声が部屋のうちから聞こえる。これまで一般人と見ていた少年がいきなりサーヴァントとか言ったら驚くよな、普通。

「サーヴァント、使い魔ということかね?」

「ええ」

それで合ってる。サーヴァントとは聖杯戦争において駒として召喚される使い魔だ。

聖杯戦争においてはサーヴァントの存在が儀式の最高に関わってくるのだが詳細は省こう。

「ふむ、しかし見た所、平均的な使い魔よりも高位の存在のようじゃが」

まあそうなるよな。魔法使いとやらは、魔力の機微に敏感らしいし、特に学園長ほどになればその格も分かるのだろう。

「ドラゴンに連なる種族かの？」

「まあ、あなたがち間違いじゃありませんね」

だが探るようにこのままちまちまと話しても仕方ない。

「ここはネタバレしておこう。」

「厳密に言えば彼女は英霊、人類史に名を残した英雄の魂を現世に転写したいわば分霊にあたります」

「なんじゃと？」

いぎネタバレするといよいよ部屋の空気もどよめいた。やれ「ありえない」だの「こんな子どもが……」だの。だが実際問題としてこうしているのだから現実的な建設的な話をしよう。

「彼女の名は――」

「ちよちよ、ちよつと子イヌ！」

いざエリちゃんの名を語って、バババーン！ とみんなを驚かせようとしたら寸前で彼女に止められた。

「どうしたの？」

「いやいや、これいつもの特異点じゃないのよね？ 言っちゃって、いいの？」

まあ、その危惧は正しい。俺が転生者でなければ絶対にこんなところで言わない。

だが何の戦闘能力もない俺がこの場で彼らに対して出来ることは、出来る限りの信用を得て戦闘を回避すること。

まず俺は戦力になり得ず彼女も戦闘向きのサーヴァントではない、文字通りのアイドル系だ。

相手は戦闘慣れした達人が少なくとも二人、加えて囲まれた状態でおまけに相手の領域のど真ん中だ。

どう足掻いても勝ち目はない。いや、エリちゃんのみならワンチャンあるが俺という足手まといがいる。

だが、これが麻帆良の魔法使いというのが幸いだった。これがMMだったら目も当てられない結果になっていただろう。最悪、俺が瞬殺されてあっさり終わっていた。

麻帆良の魔法先生は「比較的」良心的だ。その良心を信じることにする。

ただ、ガンドルフイーニだけはあの妙な正義感からMMに密告する恐れがあるのが痛

い。いや、別に嫌いなわけではないのだが。

「そうだね、安易に真名を知らしめる必要性もない」

「ふむ……」

少し学園長の威圧が増した気がする。

確かにエリちゃんの言う通りこの場でこのメンツに言うのは好ましくない。

「高畑先生と、学園長にのみお教えいたします」

学園長の指示により高畑を除いた先生が退出する、その最中、やはり彼らは少し不満げだったが学園長に対する信頼が勝るのかまはたまた命令に従っただけか特に反論はなくおとなしく部屋を去った。

「さて、では詳しい話を聞かせてくれるかな？」

高畑に促され俺はゆっくりとサーヴァントについて語った。

「まず、使い魔と言つても彼女たちは学園長の言う通り高位の存在です。普通に使役できる存在ではなく、俺自身も完全に支配下に置いていないし置きたくない」

俺はおもむろに手の甲を先生方に見せる。そこにある令呪が見えるように。

「これは令呪と言います。どうしてもサーヴァントを強制的に動かしたい時、奥の手としてこれを使用することで大半の無茶は通ります。ただし使用回数は三回のみ。すでに一角使用しているので残り二回。加えて三画全て使い切れればもはや干渉は不可能となります」

つまり実質一回しか令呪は使えない。我ながらお茶ごときに使ってしまったことを悔やむ。

「そして彼女らが英霊と呼ばれるからにはそれ相応の伝説があり、逸話があり、それに付随する弱点があることになります」

伝説の部分でエリちゃんの顔が曇る。彼女にとっては辛い『未来』であり、だが絶対に忘れてはならない『過去』。

俺はカーミラさんも大好きだ。

「なるほど、だから皆には聞かせたくなかったと。でもどうして僕たちなのかな？ 最悪、学園長だけでも良かったと思うけど」

「俺の信用できる相手が他に貴方しかないからですよ」

「それは光栄だが、はは、少し買ひ被り過ぎじゃないかな」

困ったように後頭部をかく高畑。いや、俺の経験則として正しく自分に謙遜を抱く人間は信用できると思っている。

それにゲーム友達だし。

「エリちゃんも、それでいいかな？」

少し、恐る恐る聞いてみる。エリちゃんの心情を鑑みて場合によっては敵対ルートも厭わない覚悟だ。そもそもが彼女を優先すると決めた俺だ、彼女が拒むならやむなし。

「子イヌがそう決めたならそれに従うわよ、いつもそうだったでしょ？」

しかしエリちゃんは嬉しい返事とともに笑い返した。

「分かった。なら、改めてご紹介いたします」

刮目して見よ！ 彼女こそサーヴァント界一のアイドル。

拝聴せよ！ これこそ彼女の真名。

「エリザベート・バートリー。俺の自慢のサーヴァントです」

彼女こそ最カワサーヴァントだ！

エリザベート・バートリー。別名バートリ・エルジェーベト。

『血の伯爵夫人』の異名を持ち、あの伝説の吸血鬼『カーミラ』のモデルとなった人物。



処女の娘の生き血で満たされた『血液風呂』<sup>ブラッドバス</sup>があまりにも有名でありその血を絞るのに使ったとされる傲慢器具という名の処刑道具『鋼鉄の処女』<sup>アイアンメイデン</sup>もまた彼女のイメージとして付いて回る。

連続殺人鬼。それが彼女の後世における評価である。

「エリザベート・バートリー……バートリー・エルジーエーベト！」

高畑はそちらの名の方が馴染み深いだろう。いや、殆どの人間がそちらの名で認識する。

あとは吸血鬼としての『カーミラ』あたりか。

どれも今の彼女にとっては辛い話だ。が、同時に受け止めるべき話だ。俺はどちらであつても弁解する気はない。これは彼女自身が己の問題として覚悟していることだから。

「まさか、あの伝説の」

「彼女はエリザベートです」

ただ、俺は藤丸立華であつても最後のマスターじゃない。マシユはおらず他の多くのサーヴァントもない。

今はエリザベート・バートリーのマスターだ。

「諸々、逸話はご存知と思われませんが今の彼女はあくまでエリザベートでしかありません。そこを誤解なきよう」

「子イヌ……」

と言つても難しい話か。仕方ない、サーヴァントの別側面についても語るべきか。

「英霊には別側面というものがあります。例としてアーサー王を出しましょう彼女は通常ならば清廉潔白な騎士の王として召喚されます。ただ稀に何らかの要因によりそれが反転し別側面の彼女が出る、その場合は戦のために村を焼き払った冷酷な側面の彼女として召喚されます。」

つまり、英霊とは同一人物でありながら複数の個体が召喚される可能性がある存在なのです」

「ああ、なるほど。わかったよ、リツカくん」

高畑は俺が何を言いたいのか分かったようだ。学園長も何かを察したように目を瞑る。

やはり彼らに話して良かった。彼らは優しい、大人としては甘すぎる面もあるがこの際はありがたい。

「そしてこれが本題なのですが、俺は彼女を使つてどうこうするつもりは一切ない。言うなれば彼女の召喚は再召喚であり俺は彼女と静かに暮らしたい」

「ええ、こゝこゝ子イヌ!」

「そそ、それって!」と顔を赤くしながらエリちゃんが詰め寄る。いや、別に愛の告白じゃない。いやいや、確かにエリちゃんは愛してるけどそういうのじゃないとか。

「ふおふおふお、なるほどのう……だが、さすがにワシらもただそう言われて素直に頷くん立場なのじゃ」

でしようね、頷いたらそれはそれでちよつと不安だった。

「では今後、全面的にあなた方に協力することを誓いましょう。なんなら強制契約も厭いませんが?」

本気だ。ただし全ての事柄はエリちゃんを優先させる条件付きだがな!

「いや、そこまではせんていいよ。君はそういう人間には見えんからの」

バ〇タン星人みたいな笑い声を上げながら述べる学園長。俺としてはありがたいがそれで本当にいいのだろうか?

というか彼は何かしら魔眼のようなものでも持っているのでは、と疑いたくなる。それとも長年鍛えた人を見る目とでもいうのか?

どちらでも構わないが。

「ではそのように。有事の際は俺までどうぞ」

「ありがとう、そしてすまなかつた」

頭を下げる学園長に「いえいえ」と返す。彼の判断は立場的に正しいものだ、そしてちよつぴり甘いね。

「……すまないね」

部屋を出る際に高畑にも謝られた。

謝るならやらないで欲しかったけど。

「これも仕事でしょう、少なくとも俺は正しい判断だと思えますよ」

ちよつぴり甘いけど。ただ俺としては御の字だ。

俺は悠々と学園長室を出た。

「子イヌ……その、ありがとね」

帰り際、エリちゃんがそんなことを言い出した。しおらしいエリちゃんもたぶん可愛い、それでもいつもの元気一杯な姿の方が好ましい。

「なんのことう？」

だから惚けてみる。

心底わからないといったアホヅラで首をかしげた。

「……ううん、なんでもない!」

エリちゃんもそれ以上何も言わずすぐにいつもの見ていたあの明るい雰囲気に戻った。

EXTRAの彼女は確かに悪だった。だが“あの彼女”は自身の過ちを認めて消滅した。

FGOでは過ちを認めた状態で召喚された。だからこそあんなにも愛される存在としてみんなに愛でられていた。

そしてこの場にいる彼女は全ての記憶を持ちながら全く新しく“俺のために”来てくれた彼女だ。

だから俺は彼女の味方であることを決めた。俺と一緒に戦ってくれた記憶を持ってると知ったから。余計に彼女と共にあることを選んだ。

今後は魔法関係のいざこざに巻き込まれることも増えるだろう、当然ながらネギ君に関わることも増えると思う。

「これから、二人で頑張っていこうな」

「うん!」

だが、彼女と一緒にならきつと大丈夫。

そう思えた。

冬は本番を迎えたばかり、未だ寒い夜の続く夜道の中で、俺と彼女の周りだけは少しだけ暖かい気がした。

俺はエリちゃんと静かに暮らしたいだけ……いやマジで

二年だ。エリちゃんがうちに来てから二年が過ぎた。

学園長との協定通りに度々招集された時には素直に応じてエリちゃんと共に事件の解決に奔走していた。

それ以外は特にこれといって魔法に関わることなくエリちゃんダラダラゴロゴロしたり、アウトドアな彼女に連れ出されて面白い物に出かけたりライブに付き合ったり。あと、高畑とゲームした。

そう、ライブ。俺は転生を果たしてようやくエリちゃんの生ライブを聴いた。酷い怪音とは聞いていたが実際聞いてみるとそんなチャチなもんじゃなかった。

あれは嵐だ、いや、まったく新しい自然災害とでも言おうか。

一種の概念のごとく、ただただ人体を破壊していく音など初めてだった。そりゃあ宝具になるのも納得だ。

その反面、彼女の歌を聴けたことは素直に嬉しかった。さすがに連日は死ぬ覚悟がいらなかったまに聞くなから問題ない、本当にたまになら。

交流関係での変化と言えば麻帆良の教会に属するシスターの一人ココネという少女と顔見知りになったことか。

あとはその関連でシスターシャークテイーや美空嬢とも交流を持つようになった。

まあ、肝心の主要メンバーとは関わっていないから最終決戦に連れて行かれる事態には陥らないと思うが。

……いや、綾瀬夕映と宮崎のどかというネギ先生の生徒とも交流があったか。

図書館島にて魔術や英霊に関する書物を探していた時に迷子になった、それを助けてくれたのが彼女たちだった。

それから図書館島に行く際は案内役を頼むようになったんだった。

そうだ、そんなのよりも特大の地雷と知り合いになってしまったんだった。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。ネギま本編はもとより続編作品でも重要な立ち位置にいるあのロリババアだ。

きっかけはエリちゃんだった。麻帆良に突然現れた高位精霊を小賢しくも察知した彼女から接触を図られたのだ。

その後は色々あつて、彼女とも交流を持つようになった。

俺だつてできるなら関わりたくなかった。何が悲しくて本編続編に渡るヒロインと知り合いにならねばならんだ。



だが彼女も決して嫌な奴じゃないので何となく話しているうちにゲーム友達になっ  
てしまった。ちなみにFPSである。

あと、FPS関連で何だか「マナポン」とかい奴がやたらと銃器に詳しくてよく一  
緒に戦場を駆けている。あとは「チャオ」とかい奴もいたか。

いや、こいつらとゲームしてる時が一番落ち着く。これぞ日常。ほんの少しだが長谷  
川千雨の気持ちがあつた気がした。

着々と外堀を埋められてる気がする。絶対、これ神の策略だわ。

穏やかに暮らすとか許さねえから、みたいな意志を感じる。

くそ、存在Xめ！ 俺は最後まで抗ってやるぞ！

「そういえば子イヌ」

「なんだいエリちゃん」

通学途中の道で不意にエリちゃんから話しかけられた。

俺が高校の制服なのはいつも通りとして彼女も中等部の制服を着ている。まあ、何が

言いたいのかというと彼女も例のクラスに入ってしまったということだ。

というのも、一年前、いつものように魔法絡みの事件を解決して報告に学園長のもとを訪れると。

『エリちゃんも中等部入らない?』

と話を持ちかけて来たのだ。段々と原作のような“余計なことする爺さん”の面が出始めた彼に少し辟易としていたが、丁重にお断りした。

というかエリちゃんとか呼んでんじゃねえ!!ブツ●すぞ!!

だが、当のエリちゃんが学校というものに非常に興味を抱いてしまい彼女の意思を尊重する形で渋々入学を認めた次第だ。

しかも入れられたのがA組、見事にネギ君のクラスだ。まだ高畑が担任をしているクラスだが後々、ネギ君を中心に物語の中心となってしまうクラスだ。

これまで主要人物と極力関わらないように気をつけてきたのに、ここに来て学園長が特大の爆弾を投下して来た。シエルターの準備などしていなかった俺は見事に爆発四散。目下最大の重要案件がA組に入ってしまった彼女を如何にして本編から遠ざけるか。

しかし彼女もクラスにすんなりと馴染んで仲良く楽しくやっているので邪魔はしたくない。

俺の今の悩みの種である。今度、シスターシャークティーに相談に乗ってもらおうつもりだ。

「なんかね、今日、新しい先生が来るんだって」

エリちゃんのその言葉に俺は「遂に来てしまった」と思った。

今は二月、正確な日には忘れてしまったがこの時期に来るとなればあの少年だろう。

きっと、これから色々巻き込まれてなし崩し的に造物主と戦わされることになるのだ。憂鬱でしかない。

というか実質戦力になるのがエリちゃんというこの状況。どうしたって俺の死亡フラグである。たぶん、ネギ君を庇ってポヨ姉さんあたりに消しとばされるのだ。そして伝説へ……。

いやだ、そんな伝説刻みたくないよ。まだ死にたくない、だってまだエリちゃんとキスさえしてないのだから!!（血涙）

ちゃんと潔癖症設定の生きてる彼女。それはいい。それが彼女だ。

だから時間をかけてゆっくり仲良くやっていきたい。だから原作は嫌だと言ってい

るのだ。夏休みまでで約四十巻とかそんな、キツキツスケジュールでバトル漫画したくない。

夏休みつてまだファーストミッションクリアくらいじゃないの、普通？  
なんでラスボスまで行っちゃうかなー。

「子イヌ、聞いてる？」

「うんうん聞いてる」

エリちゃんの話はちゃんと聞いている。思考が戦国乱舞しそうだがちゃんと聞いている。何でも昨日は佐々木たちとプリクラを撮ったらしい。へーそうか。

「エリちゃんも立派に女子中学生しちやって……」

少しウルつときた。初登場時はかなり頭逝っちゃってる癖にAUOのキャストオフで吹き出すお笑い要員だったのに。今では普通の女子中学生とプリクラ撮るまでになつていた。

ちゃんと成長してるんだなあ。

「え、なんで泣いてんの？ ……あ、ごめんね子イヌとも後でプリクラ撮ってあげるから」

なにそれ嬉しい。一生の宝にするわ。

「……と、俺はここで。エリちゃん、頑張つてね」

「うん！ 子イヌもね！」

俺の高校の前で彼女と別れる。この瞬間が朝で一番辛い。

「相変わらず朝から熱いなお前ら」

「衛宮」

振り返れば錬鉄の弓兵、じゃなかった。我がクラスメイトの衛宮士郎くんがいた。穂群原のじゃない制服姿はなかなか新鮮だったがもう見飽きた。

「今日は遅いんだな」

「まあな、連日弓道部に顔出すわけにはいかないだろ、俺もう部員じゃないし」

などと普通に会話しているが、この世界の彼はモノホンの一般人だ。だがその本質はそのままに『麻帆良のブラウニー』と呼ばれる便利屋紛いの少年という立ち位置にいる。

「あー、でも桜ちゃん期待してたんじゃないかな」

「そうなのか？」

他にもシンジくんや桜ちゃん、遠坂凛嬢もいる。みんな何となく fate 本編と似た立ち位置でかつ一般人だというのだから驚く。

俺も最初に同じクラスになった時は「これつてもしや聖杯戦争？」と疑ったりもしていたがそんなこともなく日々は過ぎた。

衛宮と駄弁りつつ教室に入ると俺の隣の席に静かに座る女の子が目に入った。前髪の切り揃えられた黒っぽい茶髪にロングヘアの美少女、岸波白野・通称はくのんだ。

「おはよう」

「ん、おはよう」

いつもの無表情で挨拶を返された。彼女の表情筋はテコでも動かないことで有名なので問題ない。

「やあ、立華」

「おはよう黒桐」

爽やかな笑顔で挨拶してきたのは黒桐幹也。その後ろには仏頂面で佇む両儀式の姿。奥の席に目をやると窓の外を眺めながら黄昏る青年が一人。

彼の名は遠野志貴。ちよつと高校生特有の病気にかかっているめんどくさい青年だ。

「おはよー!」

俺の後に教室に入って来た元気な金髪つ子はアルクエイド・ブリュンスタッド。席は志貴の隣だ。

「おはよー!　志貴!」

元気百%で志貴に抱きつくアルク。鬱陶しそうにしながらも満更でもない顔の志貴。

「おい、衛宮。熱いのはあいつらの方じゃないのかい？」

「いやー、アレはもはや恒例というか」

俺のは違うのか。

「少し、羨ましいよね……」

そう言つて羨望の眼差しを志貴たちに向ける後ろの席の少女。セミロングの黒髪と眼鏡という一見地味な彼女だが学校でも指折りの美少女だ。

名を沙条綾香。

「……そうだな」

改めてクラスを見回すと錚々たるメンツが揃っている。これで全員一般人だというのだから信じられない。一周回つて嘘だと思つている。

他のクラスにも見たことあるような姉妹の妹とか玲瓏館とかいう屋敷のお嬢様とかユグドミレニアとかいうルーマニアの貴族のお嬢様とその弟とか、なんか既視感があり過ぎる奴が揃っている。

ここはち○ちゆき！かよ。

そんな今更なことを考えているとチャイムが鳴った。

同時にガラリと教室に入ってくるのは虎のような教師。

「はいはい席ついてー、HR始めるよー」

先生、ここは冬木じゃないんです、お帰りください。

「というか遅刻しない藤ねえとか藤ねえじゃないよ。」

相変わらずすごいメンツに囲まれながら学校での授業を終えて下校。今まで気にしないようにして来たけど、この集積率は異常だ。

きつと、ここも安全ではないのだろう。放課後にカルナとギルガメッシュが校庭でバトつても不思議じゃない。

あ、ちなみに不登校児のジナコとはよくゲームする仲です。あいつマジで辛辣とか口悪いからたまに本気でムカついて無視することあるけど。

あとは金髪凜が転校して来て黒髪凜と一悶着あつたくらいか。そこにルヴィアさんも参戦して三つ巴のとかくカオスで醜い争いに発展していた。

嫌な事件だったね……。



とりあえずトツキーは奥さんに土下座ね。

そうそう、マキリ、じゃなかった。間桐家にはなぜかゾオルケンがいなかった。士郎に誘われてシンジの家に行ったことがあるのだが、f a t eと違って桜も遠坂だし魔術師でもないしで普通に両親しかいなかった。あ、いや、海外を飛び回ってる雁夜おじさんがいたわ。

あの人、普段帰ってこないくせに金髪凛ちゃん事件で飛んで帰って来て色々引つ掻き回してくれた。

ホント、嫌な事件だったよ……。

俺としても金髪凛ちゃん仲間になつたくらいしかメリツトなかったし。とりあえず遠坂家の食卓がギスギスしただけの事件だった。

やめだやめ、これ以上考えてるとこっちまで憂鬱な気分になる。

楽しい話題といえば、この前留学で来てたレティシア嬢にボーイフレンドが出来たらしい。滞在期間中になんとかアドレス交換にこぎつけたのに写真付きでメールが来たと思ったら彼氏が出来ました、と来た。

しかもご丁寧にジークくんという。なんだよ、ここf a t eじゃねえだろそんなところで抑止力働いてんじゃないよ。

ちなみにフィオレ嬢とも知り合いらしく、間接的に知り合いになることが出来た。

とはいえ交流があるのは弟の方だけだ。

彼とはA Cで競い合うライバルだ。俺はずっとレイレナード一筋だ。偶にオーメルに浮気するくらい。

あとはそうだなあ、西欧の大財閥からはるばるやって来たレオナルド君が校内、主に女子に絶大な人気を誇っている。エジプトらへんから来たラニ嬢もちよつとマニアックなファンがついているが、彼女は隠れ変態というかぶつちやけ露出狂の癖があるから少し距離を置いている。彼女、他人も露出させようとするのだ。

それももう犯罪だから、いや、自分自身で出すのも犯罪だけだ。

とにかく色々な奴がいて殆ど見たことある奴だけど、校長が菌糸類じゃないだけマシだと思う。

「子イヌー!!」

下校時間、校門を過ぎると遠くから駆けてくるエリちゃんが見えた。

「エリちゃん!」

「エリちゃん……?」

たまたま一緒に帰ろうとしていた岸波が疑問の声をあげていたが、気にせずエリちゃんに意識を向ける。

「子イヌも帰りなのね? 一緒に帰りましょ!」

「もちろん」

「え、あの、私は……?」

すまん、岸波。お前とは帰ってやれないんだ。俺はエリちゃん第一なんだ。

だから鉄拳はまた今度な。

「……って、えー!?! 子リス!? あんた子リスじゃない!」

そういえばはくのとエリちゃんは初対面だったか。あまりにも似ているからエリちゃんもこいつを月の女王と勘違いしている。

「待て待てエリちゃん。こいつははくのんだけどはくのんじゃないだよ」

「なにそのなぞなぞみたいなの」

「いやいや、どう見ても子リスでしょ!? え、あんたも忘れちゃったの!?!」

しかし聞く耳持たずはくのんの肩をガクガクと揺するエリちゃん。

……ん？ いや待てよ。エリちゃんって確か魂で判断したりできたんだよな。

「……人違いです」

はくのんも顔を背けながらダラダラと冷や汗をかいている。

え、マジで。こいつマジではくのんなの？

「エリちゃん、魂チエツクは？」

「百%子リスよ！」

なるほど。

全てを理解した俺はエリちゃんと並んでジリジリとはくのんににじり寄る。

「……あの、私これからー」

「まあ待ちなよ」

逃げようとするはくのんの肩をがっしりと掴む。両肩。

顔を引攀らせるはくのんにつこりと笑いかける。

「少し、お話、しようか」

近くのカフェに入り尋問を執り行った。

その結果、彼女があのはくのものであることが判明した。

つまり彼女も転生してきたのだ。この世界に。

「いやー、まさか本物に会えるとは思わなかった」

「え、この話信じるの。自分で言うけどかなり嘘臭いというか」

おいおい、水臭いぜはくのもん。どうせあんたも俺と同じ口だろ？

せつかく第二の人生もらったと思ったら麻帆良に入れられちゃって困ってるんだろ

？

どうせ原作ブレイクするなら一緒にやろうぜ。

正直、こいつが何の能力持ちか知らんがはくのもんに転生するような奴だ。きつとこい

つも何か持つてるに違いない。

「ちよつと待つて。……あの、私、本当に岸波白野なんだけど」

俺の勧誘にちんぷんかんぷんといった具合で首を傾げるはくのもん。

あざとい！ あざといよはくのもん！ 此の期に及んでしらを切る気かい？

「だから……そのプレイヤーとかよく分からないんだけど？」

しつこく問い掛けるとマジギレし出すはくのん。

……え？

「じゃあ、お前の月での記憶ってのは？」

「だからそれしかないんだって。……言っただしよ、私はNPCだったって」

おいおい、マジかよ。こいつ本物だぜ。

え、じゃあまさかマジであの高校ち○ちゆき！……なの？

いやまだその推論は早い。とにかく目の前の女子高校生は岸波白野ご本人で間違いはなさそうだ。というかここでこんな嘘ついても仕方ない。

「うわあ……ごめん、さっきの話忘れてくれ」

さすがにまずいと思った。先ほどまではくのんの姿に生まれ変わった別人だという前提で話を進めてしまったから色々と余計なことを喋り過ぎた。

だが、漢らしいはくのんは不正を許さなかった。

がしりと俺の両肩を掴むはくのん。そこにはいつもの不思議系無表情美少女の姿はなかった。ただただ、煉獄の悪魔のごとく煮え滾る怒りを瞳に込めた修羅がそこにいた。

「ここでキツチリ、話を聞かせてもらおうか？」

渋々、ほんとーに渋々はくのんに全て聞かせる。彼女を前にして嘘などつけようはずもない。

俺のこと、エリちゃんのこと。そしてfateのこと。

さすがにゲームのキャラとか言われてはくのんも予想外だったのか啞然としていたがすぐに受け入れていた。

曰く、

「元々NPCだったしね、今更ゲームとか言われてもそんなに驚かないよ」

漢。漢だよはくのん。懐広過ぎだろ、これ絶対、俺が女だったら惚れてた。

ちなみにはくのんには全ルート of 記憶があるらしい。当初、そのことで混乱したが徐々に慣れたという。いや、慣れるもんなんだ。

「で、まさかこの世界も、とか言わないよね?」

ここで鋭い一撃を放つはくのん。クリティカルだよ。

いや、真面目に勘が良すぎだろ。もはや直感A以上だよ。

「……実は、そうなんです」

「ええー!? ちょっと子イヌ、それ初耳!」

エリちゃんも心底驚いてる。だよね、そうなるよね。というかA組のみんなと仲良くやってるエリちゃんには言いたくなかった。

普通に嫌だろ、仲良い友達が『実は漫画のキャラなんだ』とか言われても。

「厳密には漫画なんだけどね、ちよつと主要人物たちと絡みたくないなあつて感じなのよ」

「え、なんで？」

はくのんの素朴な疑問。

「いやいや、結構インフレ激しいのよこの世界。というか俺はもう本当に静かに暮らしたいだけなの。だから……」

「ふーん、なるほど。だから私にその手伝いをしろというわけね」

ようやく合点がいったとはくのんが頷く。同時に怖いオーラが再発した。

「いや、そういう小細工抜きにもうなるようになればいいんじゃないかな？」

「なにそれ怖い」

絶対口クなことにならないよ！ この世界の魔法使いも魔術師に負けず劣らず傍迷惑なんだからね！

「そう言われても具体的に何をすればいいわけ？」

それもそうだ。物語から逃げることばかり考えていたけど、はくのんに一体何を手



伝ってもらえばいいんだ？

「それを一緒に考えよう」

「やだ」

ぼつさりと切り捨てられた。まあ、彼女としてはこのまま大人しくしてた方が関わる率も低いし、これは単に俺のワガママだからな。

「というか、物語のどこまで知ってるの？」

「全部。あと続編も読んでたからだいたい分かる」

「ファンじゃねえかよ」

はい。でもだからこそ、あんな死亡フラグ満載のデッドツアーには参加したくないんだって！

「せっかくエリちゃんと暮らせるのに、あんまりだろ!？」

「こ、子イヌ……」

熱弁する俺にはくのが冷たい視線を浴びせる。

「あのランサーがこんな姿を見せるなんて……ほんと、何したの？」

いや俺はなんもしてないよ。主に本編のぐだ男が一級フラグ建築士なだけだよ。

「ぶつちやけアーチャーの百倍くらい」

「なにそれ怖い」

はくのんもぐだ男のたらしつぷりに引いている。真面目な話、あいつ殆どの女性サーヴァントから好意向けられてるからな。

でもたぶんあいつはマシユ一筋だと思う。なんだかんだあの最かわ後輩とくつつくのだろう。

無銘もメルトとかメルトとか、俺もかなり嫉妬の念を抱いたりしたが幸いキャス狐という最高の嫁がいたからなんとか暗黒面に落ちずに済んだ。良妻賢母様様だな。

「まあ、ぐだ男は致し方ないとして。問題はエミヤだな」

「士郎のこと？」

「いや、あいつ実はアーチャーのモデルになった奴っていうか平行存在っていうか。あいつが英霊になった姿の平行存在みたいなのが無銘なわけなんだけど」

「さーりとと言うな、さーりと」

べしつと頭を叩かれる。そういえばはくのんは士郎は知らないのか。うーむ、ややこしい、いつそち○ちゆき！なら良かったのに。

「……まあ、だからさ士郎もかなりたらしなんだよ、天然の」

「あー、なんとなくわかるわ。学校でも結構人気だもんね」

黒髪凛とか金髪凛とか。あとルヴィアに桜ちゃんに怪しいのが美綴と。

思いつくだけでもかなりいる。あいつも大概たらしだ。

「で、それがさっきの話と何の関係が？」

「いや、別の話なんだが。一応知つてもらおうと思つて」

「なぜ？」

「だって金髪凛と仲良いだろお前」

金髪凛とか黒髪凛とか呼んでいるのは彼女たちが同姓同名という少々ややこしい関係にあるからだ。だから校内で遠坂凛というと二人とも反応する。そこからまた喧嘩に発展するのだ。

よくよく考えるとカオスだ。本来ならどうやったって出会うはずのない二人が出会ったが故の弊害というか。

「あの子の気持ちも気づいてんだろ？」

「あー、まあなんとなく。というかみんな知ってるよね」

そう彼女たちは名前だけでは飽き足らず好きな異性も同じなのだ。ここにザビ男がないことが全ての不幸の始まりだった。

あからさまに好きな癖に素直になれない所までそっくりな二人だ。生憎と俺は黒髪側と仲がいいからそっちに付かせてもらう。

「だからお前は金髪の方の味方でいてやれよ」

他にもレオナルドとかラニも密かに応援してくれているしな。

「なるほど。まあ元々そのつもりだったけど……」

けど？

「あいつがアーチャーの前身というなら話が変わってくるかな？」

おいおいおい、まさか余計なこと言っちゃったか俺。

さすがに無銘と土郎ほどになると乖離が激しいし、このまま行けば将来は錬鉄の英雄にはならんと思うのだが。たぶん一番近いのがゼロオーバーだ。

「なんて冗談だけどね」

その真顔で冗談とか言わないでほしい。区別が付かないんだよ……

「とりあえず気にしとくよ、それに、ランサーが召喚できたなら私もワンチャンあるかもしれないし」

さりげなくアーチャーへの未練を残していることを漏らすはくのん。

「やっぱ弓主なんだよなあ」

「?!」

「いや、気にしないでくれ。俺が出来たんだしお前の愛が強ければ出来るんじゃないかな」

知らんけど。

「あ、愛って……」

エリちゃんが少し恥ずかしそうにしている。しっかりと写真に撮っておこう。

「……………ちよつと、そこまでいくと引くけど」

携帯でパシヤリ続ける俺をはくのんが冷たい目で見ていた。

「じゃあ、これお代。私先に帰るね」

「お邪魔みたいだし」と言っただけ置いてさつさはくのんは帰ってしまった。これ絶対部屋でアーチャー召喚しようとしてるよね。

とりあえずはくのんからの好感度がただ下がりしたのは間違いないと思った一日だった。

# 何気ない日常が俺の幸せ、とか言ってみない

ネギ君が来た。

到着早々に色々原作通りのことをしてくれたりらしい。主に自動脱衣とか。さすがネギ君だぜ！

それから数日、帰宅するたびにエリちゃんからネギ君及びクラスの近況を聞いている。順調にイベントを消化しているみたいで安心。

なんだか色々言ってたけど、これつてもしかしてもしかすると俺はスルーなパーティーンですか？

ついでにエリちゃんも置いてって欲しいけど、無理なんだろうなあ。

一番ネックとなってる魔法世界編では魔法関係者を伴っての旅となっていた。絶対、エリちゃんも連れてかれる。というかエリちゃんも優しいからついて行っちゃおうと思う。

そうなるって魔力とかどうなの？って話なわけよ。そこからなし崩し的に英霊云々の話が広がって、俺も行かざるを得ないと。その前に魔力どうにかしないとだけどね。

いや、エリちゃんが行くなら俺も行くけどね。

エリちゃん第一とは言いつつも俺にもちちゃんと自由意志があるから。

エリちゃんの気持ちを優先することに変わりないけど。

エリちゃんがそろそろゲシユタルト崩壊しそうだ。

「おーす、シスターシヤクティーいるー?」

菓子を大量に入れたビニール袋を下げて教会を訪れる。なんかヴァサヴィ・シヤクティみたいなシスターだよなあの人。

未だ正午を過ぎた時間にこんなところをほつつき歩いているのは別に俺が不良生徒だからではない。

今日は日曜日。休日だからだ。

なんだか最近エリちゃんもクラスメイトと遊びに行ってしまったって一人寂しい俺は教会へと足を運んだ。

「まだ……仕事」

教会の椅子にはちよこんと褐色幼女が座っている。

え？ 犯罪的だつて？ ばっかお前、俺は健全な男子高校生だぞ。たとえ褐色幼女と知り合いだろうと脳内で『今日のパンツ何色かなあ』とか『ゲへへ、子どもが一人でいると危ないよ……』な想像をしてるだけで一切、手出ししていない。

YESロリータNOタッチ！YESペドNOタッチ！だ!!

いや、実際、ココネはギリロリだと思う。

俺は健全なロリコンだ（錯乱）

件の褐色幼女の隣に座って袋を広げる。

ちなみにこの薄幸系美幼女……少女はココネちゃんだ。シスターシャークテイーのところではシスターやってる子。なんだか前世のネットでは彼女の過去について色々と凄惨な考察がなされてたけど、そんなことは俺には関係ない。

ただ、幼女と会って仲良くなって、友達になっただけだ。（確信犯）

「リツカ、気持ち悪い」

「え、いきなりヒドイ」

座るなりすぐく嫌そうな顔でそう言われた。なぜなんだ。

ほら、こんなにお菓子持って来たよ。

大丈夫、怪しいものなんてナニモ、ハイッテナイヨ。



「気持ち悪い想像してる顔してた、お菓子はもらうから帰って」

顔に出てたらしい。辛辣な言葉とともに退去を命じられた。

ううん、今のは効いた……！

「いや、普通にお菓子一緒に食べようと思って来ただけだよ」

真面目に不埒な思考はない。いやほんと。

なんだか彼女は友達が少なそうだった、その原因が積極性の無さだと思つてこうして言葉のサンドバッグになりに来ている。

いわばこれは彼女のコミュ力訓練なのだ。

「もっともらしいこと言つても変態は変態」

「いや君、思考読んでるよね？」

そういう能力持ちなの？ 原作ではほとんど出てこないのもまったく分からない。

とりあえずう〇い棒を口に突っ込んでみた。

「いふいふあい、ふぁにふるほお」

「かわいい」

俺の素直な一言が彼女の表情をさらに強張らせた。

そんな反応しながらもモグモグとしつかり菓子食べるあたりやはりお子様である。ふん、こんなお子様に劣情を抱いたりなんかしないんだからね！ いやマジで。

「……んぐ。仕方ないから変態の持つて来たお菓子全部食べてあげる」

嫌そうな顔をしつつもそわそわしていることを隠せないお子様。ふふふ、存分に食べるがいいさ。食べ終わったその時こそ！ 貴様の最——

「とお——う！」

「ぶべらっ!？」

手をワキワキさせて変態おじさんRPをしていると突然、側頭部に鋭い飛び蹴りが炸裂した。

当然、一般人の俺は散々に転がり壁に激突する。

「まあたココネにちよっかい出して。そろそろ警察に突き出すよ？」

マジで身体中が痛みを駆け巡りながらなんとか起き上がって不届きものを目に焼き付ける。……いやほんと痛い。

「き、貴様！ 影薄少女インビジブー」

「誰が影薄だコラー！」

鋭い蹴りが、四つん這いの俺の顎を的確に直撃した。

打ち上げられた俺は今度は頭から床に落ちる。二度も蹴った！ 親父にも蹴られたことないのに！

あと、首が変な音鳴った。すごく痛い。

「まったくあんたは……」

袖をまくりながらズカズカと近付いてくる美空。そう、この短髪影薄美少女はあの春日美空——

「ぶほっ！」

三度目の蹴り。脇腹を直撃したJ.Cの蹴りが俺を壁に叩きつける。

「ちよ、待て待て！ さすがに死ぬって、俺一般人だから！ アレ関係の仕事してるけどあくまで身体は一般人だから！」

必死に止めると美空も「ちよつとやり過ぎたかな」と言いつつ収まった。いや、やり過ぎだろ、死ぬから。後悔する前にやめてほしかった。

なんとか立ち上がった埃を払う。

「なんだ、まだいけそうじゃん」

「このバカ！ 万が一のために『対策』ぐらいしてあるわ！」

全く、その対策も今のおじやんだ。田中星人並みに笑えない。今なら西くんの気持ちも分かる。世界全てが危険に思えてくるのだ、不夜キヤスが怖がるのも尤もだよ。

「で、またココネに手を出そうとしてたみたいだけど」

春日美空。あのネギクラスの一員なのだが彼女は妙に影が薄いので原作ファンでも時々忘れていることがある。

ボーイッシュな短髪に整った顔立ちから男に見えないこともない。それでシスター  
服着てると最早笑えてくるw

「まだ蹴り足りないのかな？」

「何も言っていないだろ！」

「こいつもココネちゃん同様に読心能力持ちなのか？」

おふざけもここまでにして本題。

「シャークティーに用があつてな、ついでにココネちゃんへのお土産を買ってきただけだ」

他意はない。むしろココネちゃんと戯れるために来たとかそんなベタなお約束はない。ほんとだよ。

「ほんとかよ……まあいつもココネに構ってくれるのは嬉しいけどさ」

恥ずかしそうに目を逸らしながらポリポリと頬をかく仕草。小さな声で言ってるけど俺にはバツチリ聞こえてる。ツンデレ乙。

「……なんか、アホらしくなった。用が済んだら帰って」

一転辛辣な言動。お前、キャラブレすんなよ！ そんなんだから影薄いんだよ！

「あー、そういやお前もネギ君のクラスらしいじゃん」

「あれ、あんた子供先生知ってるの？ ってあんだだけ噂されてたら知ってるか」

「いや、うちのエリちゃんの担任らしいからな。よく話を聞くんだ」

「へー、エリちゃんの……え!？」

何を驚いた顔をしてる。あと、今のノリツツコミは五十点。溜めが足りない。

「うちのつて、なに? 兄妹?」

「いやいや、同棲してるからな。あれ、お前知らなかったの?」

魔法関係者である美空はてつきりもう知ってると思つてた。こりやあ俺が単なる変態だと思つてた口だな?

「ど、同棲!? うち寮制じゃなかった!？」

「そうだよ? いやー、一人部屋だったから寂しかったんだけどエリちゃんが来てからは毎日楽しいです」

ほんとそれな。彼女が来てくれたおかげで毎日退屈せずに済んでいる。率直にエリちゃんと一緒にいられるのも嬉しいが、俺の寂しさを吹き飛ばしてくれたことにも感謝しているのだ。

「お、お前。彼女いるのにココネに……」

いやいや、まだ彼女じゃあないさ。だがいずれはー

「このロクデナシ!」

「なんで!？」

いきなり罵倒された。いやいつものことだけどさ。

今回は何でか分からない。別に彼女をからかったわけでもないのに。

「お前、そんな最低な奴だったのかよ……」

え、なんでガチで引いてるの？ ちよつとよくわからないんだが。

「あ、なんだ、使い魔？」

「そうそう、厳密には英霊ね」

仕方なく俺とエリちゃんの関係を説明する。この娘、耳年増が過ぎて俺が『彼女と同棲しながら幼女に手を出すロリコンクソ野郎』みたいな想像してやがった。馬鹿野郎、ほとんど合ってるよ！

「って使い魔!?! あれが!?!」

お前魔法使いなんだから魔力で分からねえのかよ。完全に魔力の塊だろエリちゃん。エーテル体なんだから。あとアレ呼ばわりしたお前は鮮血魔嬢の刑ね。

「マジか……あんた、見かけによらず凄いなだね」

一言余計だなあ、というかそれは必死に戦ってるぐだ男への侮辱でもあるからね。ちやんと謝ってほしい。

「見かけていうか雰囲気の話。あんたも元は整ってるんだからもう少しちやんとしなよ」

と思つたら優しく諭されてしまった。JCに説教されるとか。

新たな快感に目覚めそう。

「ちやんと、つて言われてもなあ。これがデフォだし」

「素で変態なのもすごいよね」

変態紳士であることを主張したい。変態は変態でも、紳士だから。一つ格が違うから。そこ間違えないでほしい。俺は犯罪者じゃねえ！

「で、ネギ少年だっけ？」

「そうそう、最近どうなのかなあって。お前から見てさ」

「うーん、ちやんと先生しようつて頑張ってるのは見てて分かるんだけど。結構空回りしてる感じかな」

「ふむふむ」

「あとは、やっぱりまだまだ子どもだなんて印象」

なるほどなるほど。つまり原作通りなのだ。

よかった、ここで変に覚醒でもされたら今後のイベント丸潰れの可能性もあった。「そうか、やつぱり十歳だからな」

難しい年頃以前に幼過ぎると思った。そんな子どもにも大役を押し付けて拳句には世界の命運をも背負わせるのだからこの世界の魔法使いも相当鬼畜だと思う。

だからって俺が背負う！ とは間違っても言えないけど。彼は人柱になるべくしてなる。そういう運命なのだと思う。今後の歴史も考えれば彼に逃げ道はない。百年単位で重要になってくる偉人であるのは確かだしな。

たぶん、彼も英霊の座に登録されるのだろう。さすがにあれだけやって登録されないのも悲しい。

今はまだ未来の話だが彼は人が人として当たり前の自由のために戦った。文字通り世界をかけて戦ったのも一度や二度ではないだろう。

俺の預かり知らぬことではあるが、正史の彼が辿った人生はまさしく世界のためのものだったと思っっている。

「ん、どした？」

ポカんとこちらを見ていた美空に気付いて声をかける。

「……いや、珍しく真面目な顔してたから、つい」

失礼なことを言う。俺はいつでも真面目で不真面目だ。つまり全力投球。もつと熱



くなれよ！

「まあな、ネギ君の将来を思うと少し。俺だって人並みの感情はあるんだぜ？」  
結構容赦ないけど、お前。

「あはは、変態ペド野郎に人権とかw」

「ちよつとオブラートに包んで。直に言われると心に来るものあるから」

本当に容赦ない、俺でなきゃ自刃してるところだ。

「ま、あんたに関しちゃう一定の信頼は置いてるよ？ もし本当にクソペド変態クズ野郎  
だったら今頃牢屋にぶち込んでるからね」

ちよつと蔑称がグレードアップしてる気がするけど。

「そうかい。……ただ、俺が幼女にしか興奮しないなどいつ言った？」

「え？」

「ククク、俺の本分はロリコン。JCである貴様も漏れなく対象内なのだあ！」

「へ……………」

あれ、なんか思ってた反応と違う。まいつか。

「こんなボーイツシュでかわゆるすなロリツ子を俺が見逃すわけがなからう。さあ、大人  
しくおじさんのお部屋にー」

「……………（かああ）」

え、あれ？ なに顔赤くしてんの？

ちよつとそういう安いラブコメな反応やめてよね。なんか、調子狂うし……。

顔を真っ赤にさせてフリーズする美空を見ていてだんだんと気まじくなつた俺はR  
Pをやめた。だつてバカみたいだし。

そんな純粋な反応されたらやり辛いよ。

「おい、美空？」

「え……あ、ああ！ ちよ、JCとか。そんな単語使う時点で……その、き、気持ち悪いよ」

歯切れ悪つ！ ちよ、ほんとどうしたいきなり。俺何もラブコメ発言してないけど？

なんだよ、お前つてもつと気楽つていうかいじりがある奴じゃなかったのかよ。

「あー、なんかシャークティー帰るまで掛かりそうだし、一旦帰るわ」

「そ、そつか。ま、まあ、お菓子持つて来てくれるなら、また、来なよ」

ちよつと気まじすぎるのでさっさと教会から退散する。

「……へタレ」

奥の椅子に座つたままのココネちゃんが何か言った。それつてどつちに向けて言つたんすかねえ、ちなみに俺の場合は大正解だ。今度、ポテチも持つて来てやるよ。

帰り道、ふと美空の真っ赤になった顔を思い出した。

結構、可愛かったなあ。

もともと美少女なんだし、普段の斜に構えた態度を改めればさうとうモテると思うんだけどな。

「まあ、意外な一面が見れたということではよしとするか」

教会での収穫は美空の可愛い一面をゲットといったところだ。

「おや、リツカ。教会に来ていたのですか？」

帰り道、ちよつと歩いたら偶然にもシャークテイーと出会った。なんだもう少し待つてたら会えてたな。

まあ、ここで会えたんだし。

「いや、ちよつと相談に乗ってほしくてさ」

「そうでしたか、なんなら今聞きましようか？」

微笑みかけてくるその姿はさながら聖女である。一年前まであんなに辛辣だったのに。

「また今度にするよ」

「そうですか？ 別に私は構いませんよ？」

その好意は嬉しいが今はそんな気分じゃないし。急ぎの用でもない。

「いいっていいって、じゃあまた任務の時にでも」

「わかりました、ではまた」

優雅なお辞儀をして去る彼女の背中をしばし見つめる。

今でこそ俺もタメ口で彼女も優しいが、一年前まではそれはもう美空を叱る時よりも辛辣だった。

まず、態度がなっていないと叱られ、次に実力を疑われた。

後者に関してはその通りだが、前者に關してもぐうの音も出なかった。

だが、一年前のある任務の際に一緒になって以降は一転して先ほどのような優しいシスターになってしまった。

一体なにが彼女の心に刺さったのかは知らないが態度が和らいだのは良いことなの

で放っておいた。

しかし今更ながら無性に気になった。

「……ま、いつか」

不利益を被るならまだしも役得なら特に問題なし、俺は疑問を振り払って歩き出した。

「……その優しき心に安らぎのあらんことを」

教会を出たはいいが未だ昼過ぎ。暇なことに変わりないので街をぶらぶらとあてどなく練り歩いていった。

そんな折、自動販売機の前で唸る女子中学生と出会った。ちなみに電撃少女ではない。確かに成績は下から数えて三番目かもしれないが。

「おーす、綾瀬」

「おや、リツカですか」

綾瀬夕映。デコ助といえれば大体通じるロリっ子だ。

ネギ君のクラスに所属するネギハーレム要員の一人でもある。

「なんかすごく雑な紹介を受けた気がするのですが」

「気のせい気のせい。それより何してんの？」

言動がなんとなく凸森を思い出させる子だな、と思いつながら問う。

「いえ、ここにある納豆いちご牛乳オ・レと銀杏パワフルミックス野菜ジュースのどちらにしようか迷っていたのです」

「……なんて？」

ちよつとよく分からない単語が出て来た気がする。全体的な話の内容は分かるが。

「だから、納豆いちご牛乳オ・レ。と、銀杏パワフルミックス野菜ジュース。どちらを買うか悩んでいるのです」

あー、麻帆良のゲテモノ自販機か。そういえば彼女の趣味の一つに麻帆良のゲテモノジュースを飲み歩くとかなんとかあった記憶がある。

いや、でも、そのチョイスはダメだろ。なんか、普通に嫌な組み合わせだと思う。主に臭いが。

自販機を見れば飛び出そうな納豆のイラストの背景にいちごと牛乳が描かれたものと、銀杏の後ろに野菜がゴロゴロ並んで脇に謎のマッチョキャラが描かれたもの。その二つがあつた。

イラストからも悪意しか感じない。

「悪いこと言わないからどつちもやめとけ」

「いやです。本当はどちらも飲みたいのですがお腹がたぶたぶで」

そんなことしてるからいつもトイレ近いんだよ。

「そんなことしてるからいつもトイレ近いんだよ」

「なつ、今の発言はレディに失礼です!!」

思わず心の声そのまま口に出してしまった。でも仕方ないと思う。図書館島で案内してもらえるのは助かってるけど頻繁にトイレにまで戻るから一向に調査が進まない。

顔を真っ赤にさせてプンプンと怒る姿はまさしくお子様だ。

「はいはい、先にトイレ行って来てから飲めばいいじゃん?」

「つつつ! それは盲点でした。さすがリツカ、無駄なところで鋭いですね」

一言余計だよね。

「一言余計だよね」

いかんいかん、また本音が出てしまった。どうにもこのお子ちゃま相手だと本音がダ漏れになってしまつて困る。

でも、ほんとちよつと生意気が過ぎるのではと思う。

「あんまり生意気言つてるとお腹押すよ？」

ガチだ。公衆の面前で放尿してしまえ。

「ちよ、目がマジですよね!? わかりました、謝ります！ ごめんなさい！」

「お辞儀の角度がなつてないなあ、これじゃあお兄さんも許せないよ」

「へ？ あ、いや、今改めて意識したらお、お手洗いに行きたくなつてしまつてるので。

その、どいてくれると、助かるのですが」

ほほう、いいことを聞いた。これはマジで公開放尿プレイが楽しめそうだ。

「いやいや、お兄さんに謝るのが先でしょ？ はい、もう一回」

「うう、生意気な口を聞いて、も、申し訳ありませんでした」

「でした？ あと感情がこもつてない。やり直し」

「ううう、お兄様に不敬な物言いをして誠に申し訳ございません!!」

土下座する勢いで頭を下げるゆえつち。プルプル震える身体と真っ赤なお顔を流れる冷や汗から限界に近いことを悟る。



「うーん、どうしようかなあ。まだちょっと反抗的だし」

「そ、そんなあ。お願いします！ どいてくれたら何でもしますから！」  
ん？

「今、何でもするって。言った？」

俺の言葉に顔を真っ青に変えるゆえ。今頃失言に気付いたか。

「そうかそうかなら通してあげようかな」

「え、いや、その。さ、さすがに何でもは言い過ぎー」

「え？ なにそれ、萎えるわー通す気失せちゃったわー」

「うわわわ、分かりました！ スカ○口でも○尿でもファイ○トファ○クでも何でもしますです!!」

いやなんでチヨイスがどれも変態的なの？ 俺は普通に全裸お散歩で許してあげようと思ってたのに。

「そっちなかなか変態的です!!」

「まあいいや、はいどうぞ」

俺は仕方なくどいてあげる、するとゆえは一目散に駆け出した。

おっと足が滑った。

「……なんてやるほど鬼畜じゃないからね」

走り去るゆえを尻目にひとりごちる。

……ちよつとだけ、本気でやってみたくなくなったのは秘密だ。

たぶん大惨事になって貴重な場面が観れると同時にゆえからの好感度と今世の俺の人生に前科が加わることになるが。

「……」

いや、ワンチャン——

「リツカさん？」

と、邪悪な策略を練り始めたところで透き通るような可愛い声が聞こえてきた。

そこにはメカクレ娘こと宮崎のどかちゃんの姿。

「のどかちゃん、こんにちは」

「は、はい、こんにちは」

ぎこちないながらも挨拶を返すあたり俺もなかなか懐かれたと思う。人見知りの激しい彼女がこうして年上の男に対してちゃんと挨拶を返せることが俺にとっては、なんとなく親目線で嬉しく思えた。

「うん、偉いねのどかちゃん。最初はあるなに人見知りしてたのにちゃんと挨拶できるようになったじゃないか」

「イイコイイコと頭を撫でてあげる。」

「ふわわっ、あのあの、少し恥ずかしいです」

俯きながらのセリフ、最高です。恥ずかしがり屋のロリっ子とか小動物以上に可愛いからね、ロリコンとか言われても構わないと思えるくらい。

「はは、のどかちゃんももうすぐ三年生だからね、さすがに撫でるのは失礼だったかな」  
「い、いえ！　あまり、人のいないところでなら、撫でて、欲しいです」

素直なところもグッド。なんだか前よりも正直に言える子になったよね。

案内役を頼んだ当初はゆえっちの後ろに隠れて一言も喋ってくれなかったからね。そう思うと成長したと思う。やはり小さい子の成長は早い。

だからこそロリコンはそこに神秘性を見出すんだろね、ほんの僅かしか存在しない未成熟な時期の、未来不確定型の少女たちに幻想を抱いてしまうんだろね。これ多分、ロリコン魔術とか作れる気がする。

「リツカさん、ここで何、してたんですか？」

「うん？　あー、俺も散歩だよ。そしたらさっきゆえっちに会ってね、今はお手洗い行っちゃったけど」

「あー……それは、しょうがないですね」

なんだか納得したのどかちゃん。やはりゆえっちの早漏、じゃなかったトイレの近さ

は前からなのか。授業中とか心配だな。

身体がちっちゃいからなのかね？

「そういえばのどかちゃんはもうしたの？ 散歩？」

「あ、私は本を買いに行こうとして、それで、リツカさんの姿が見えたから」

だんだんと顔を赤くさせていくのどかちゃん。うんうん、何も恥ずかしいこととしてないんだからそんな顔真つ赤にしなくていいんだよ。

どうやら人見知りは健在らしい。

「嬉しいね、お兄さん最近、いろんな女の子に冷たくされてちよつと自信無くしてたんだよ。」

のどかちゃんがそう言ってくれて救われたよ」

本当に、最近の女友達たちが軒並み辛辣すぎて辛い。エリちゃんも最近はあまり一緒に帰ってくれないし。

そこには段々と孤独になりつつある変態の姿があった。

「そ、そうなんですか？ リツカさん優しくて頼り甲斐があるから、私なんかつい声をかけちゃうのに」

なにその嬉しい発言。今のでロリコンパワー200%突破したぞ。

「のどかちゃんは本当にいい子だなあ」

なでなでを再度行う。この、滑らかな頭髮の手触りも妙に心地いい。

ずっと撫でていたい。

「あわわわ……！」

だかのどかちゃんはメダパニを食らったみたい混乱してしまっているので適当なところでやめる。

ふわわ、とかあわわ、とかこれを天然でやっているのだから2002年のサブカルチャーは恐ろしい。例えるなら氷属性が弱点の相手にブリザジャ食らわすみたいなんだ。普通は他の能力とか鑑みて戦略を練るRPGで初手から最後までブリザジャでごり押しする感じ。

「うう、たぶん、他の人たちもリツカさんが優しいからついつい冷たい態度とか取っちゃうんじゃないでしょうか？」

的確なラブコメ推理を展開してくるのどかちゃん。その発想はすごく可愛いし俺的には大正解にしたいけど彼女たちはたぶん素で俺に辛辣なんだと思う。そういう扱い受けてるもん毎回。

「ありがとうね、のどかちゃん」

「っ！ い、いえ……！」

すっかり茹で蛸みたいになっちゃったのどかちゃんを見てそろそろ離れた方がいい

かもと思う。

人見知りつてあんまり無理に人と話させると悪化するというし。

「じゃあここらでお暇するよ、また今度島を案内してね」

「あ……はい！ お、お待ちしてます！」

必死にペこりと頭を下げる姿は実に微笑ましく可愛らしかった。相棒のゆえとは大違いである。

いや、ゆえもゆえで可愛いけどな。

まあ、まだ中学生だ。これからもっと色々学んで大人に成長していくのだろう。A組のみんなは軒並み美人なので将来はすごい美人になって旦那を得て暖かい家庭を得ることだろう。そう願いたい。

「柄でもないな……」

とりあえず今の思考は無かったことにする。無責任にも保護者でもない俺が烏漕がましい考えだった。

## 動き出すとき

「感傷だが、別の形で出会いたかったぞ……」

「そうなるとお前は刑務所行きだと思うがな」

機体からスパークを出しながらゆつくりと水底へと沈み行く。黒塗りの先鋭的な機体の肩にはレイレナードの商標が貼られている。

赤くなったモニターから段々と光が失われていく。

数秒と経たぬうちに俺の視界は真っ暗になった。

「ズルクね？」

いや、コジマもグリントも俺が許可したけどさ。

「ズルくない。というか貴様の月光よりはマシだろ」

当然だとばかりに澄まし顔の金髪幼女が述べる。

いや、俺の月光舐めんなよ？ 近接技能ゼロなんだからな！

お互いにそれほど得意ではない機体で挑み、そして負けた。

俺は月光の格好良さに惹かれてシュープリスに無理やり組み込んだのが敗因である。彼女は冷静に俺の月光対策で攻めただけ。

間違っても一ヶ月ちよつとしかやってない初心者に技能で負けているはずがないのだ。(言い訳)

「ふ、負け犬の遠吠えとはまさにこのことだな」

愉悦たつぷりの笑みを漏らす幼女。

てめえ……俺のレイレナード怒らしたらヤベェんだからな！

続く二戦目。

「いけ、俺のメフィストフェレス(高機動型四脚)！」

「貴様！ 謀ったな、レイレナードではないではないか！」

はて、何を言ってるのかな？ もしかして肩部に貼つてあるマークが見えない？

「ふざけるな！ 完全にアルゼブラじゃないか！」

あーあー、聞こえません。

言ってるうちに俺の散弾銃がオーギルの装甲をぶち抜いた。

「ハラシヨー！」

「くそつたれ！」



場所はエヴァンジェリン宅。屋敷のリビングで俺たちはゲームに興じていた。ちなみに4ではなくfaである。

「じゃけん、女は向かんのんじゃ」

「やっぱりかああああー！」

パイルバンカーを打ち込み仕留める。隣の少女が叫んだ。

やっぱりK I K Uは最強だぜ。当たればの話だが。

「お二人とも、交流を深めるのはよろしいですが本題を忘れぬよう」

俺たちの座るソファの後ろから無感情な声が響いた。

「茶々丸……分かってている。だがあといつk」

「そうだな、そろそろ真面目な話をしよう」

金髪少女エヴァの言葉を遮るように真剣な顔で応える。

「貴様……」と隣で出しちゃいけないオーラを出しているが気にしない。

足掻くな。運命を受け入れろ。

漁るエヴァをなんとか言いくるめて勝ち逃げをした俺は、彼女を伴い書庫へと移動する。ここは彼女の保有するコレクシヨンたちの保管場所でもある。

立ち並ぶ本棚には古めかしい本が所狭しと敷き詰められている。

「ソロモン王の書物？　これでいいか？」

「ああ、助かる」

本棚から抜き出されたそれを受け取り読み出す。当然のごとく日本語じゃないので魔導具を使って。

隣の椅子で悠々と本を読むエヴァだが、最初はかなり難儀した。

当たり前だ、これは彼女が彼女のために集めた大事なコレクシヨンなのだ、おいそれと他人に触らせたくはあるまい。

色々と交渉した挙句に、ゲームでの勝負に勝ったことで俺はコレクシヨンを漁る権利を獲得した。

「今更そんなもの見て、一体どうなるというんだ？」

写本だぞ、それ。と指差しながらエヴァが問う。

「まあな、だが写本とてバカには出来んぞ。僅かでもオリジナルの力を有している可能性もあるからな。ルルイエ異本とかルルイエ異本とか」

まあ、fate世界と違ってこの世界では狂気の神々はカケラほども干渉してきていない。つまりは存在しないと考えていいだろう。

fate世界でも架空ではあったが、その有り様を正しく言い当てたという理由で世界線を越えて干渉してきていた。

大雑把にアレとfate世界が同一の大きな『世界』とするならばネギま世界には少なくとも干渉できる範囲では奴らは存在しないと考えて良い。

つまりはこの世界のクトウルフ魔法書は毛程も役に立たないというわけだ。

「クトウルフ神話群か。確かにアレを魔法体系として組み上げれば或いは使い物になるやもしれんが。所詮は作り話だ」

と、このように古参魔法使いのエヴァも戯言と一蹴している。魔法体系とやらの話は分からないが、神秘が絶対の魔術でそれは下策だろう。

或いは、fate世界を經由して――

「……それこそ下策か」

間違えちゃいけないが、かの神話群は狂気の塊だ。その干渉を許すということは即ち、この世界に滅亡を招くのと同義。

わざわざ災厄を持ち込む必要もあるまい。

そもそもアレらを倒せる気がしないし。

「テウルギア・ゲータティアか」

エヴァから渡された書物の名だ。中身はすでに他の写本で読んだことがあるために、さして目新しい情報は出てこない。

他同様に単なるオカルトアイテムだ。

結局、最後まで読んでも魔術に繋がるものは無かった。

俺は元あった場所に本を戻す。

そしてその横にあった本を新たに手に取り読み始める。

「……時に、リツカ」

先ほどまで読書に耽っていたエヴァがこちらに向き直し問いかけてきた。

俺は書物を読み進めながら返事をする。

「お前が言っていた魔術、だったか？ 本当に存在していたのか？」

「さてな、だがその産物たるエリちゃんが存在しているならあるのだろうよ、もしくは限りなく近い別の力かもしれないが」

だが十中八九魔術だろう。令呪もエリちゃんの在り方も魔術による英霊召喚のそれ

だ。

この世界出身の英霊でも召喚できれば詳しく分かると思うが、現状では未だ魔術の存在も定かでない。ともかくは魔術を見つけられない限りはどうにもならない。

ソロモン王の書物を漁っているのも彼が召喚術におけるエキスパートだからだ。魔術もそうだがその中でも召喚術に関しては彼が後世の術式を確立させたと思っている。ゲーティアのネガスキルもサモンだったしな。

結局、土曜日一日を丸々費やしても成果は無かった。やはり図書館島が最も有力か。

明日はあの島を探索しよう。

ぶつちやけた話、マツピングは済んでいる。ただし探検部の回っているエリアに限るが。それ以降は危険も増えるのでエリちゃんを連れて行かないとどうにも出来ない。

本当はエヴァが来てくれれば、魔法による罫も守衛もどうとも出来て楽なのだが。

エヴァにこれ以上を頼むのは不可能だ。あくまで俺が勝ち得たのは彼女のコレクションを閲覧することのみ。

「それじゃそろそろ帰るよ」

「そうか。なんなら夕飯くらいは食っていつでも構わんが？」

ありがたいお誘いだが大丁重に断らせていただく。

「うちでエリちゃんが待つてるからな」

サーヴァントには食事など必要ないが、それでも俺は彼女と囲む食卓が一番だ。

「お熱いことだな。まあいいさ、何かあれば相談に來い。乗りかかった舟だ、魔術とやらをこの目で見るまでは付き合つてやる」

お、マジか。案外彼女もノリノリらしい。

ゲームばつかしてるからつきり興味を無くしたと思つていたが。

「ありがたい、なら早速頼みたいことがあるんだが」

俺は明日にでも図書館島へと探索に向かうこと、その際に深部まで進むため同行してもらいたい旨を伝える。

「ほう、まああそこの方がより確実性が高いな。いいだろう、私も同行しよう」

すんなりと了承を得た。こんなことならさつきと頼めばよかつた。

彼女も長いこと生きて楽しみが少ないのかもしれない。

ロリババア最高。

「ん？ ちょっと待て」

帰ろうとしたらがっしりと肩を掴まれた。

え？ ま、まさかこいつも読心能力を？

「ご、ごめんなさい。歳のこと言っでごめんなさい。

「……よし、これで大丈夫だ」

と思っただら俺の懐から取り出した藁人形に何やら細工をしてまた懐に戻した。

単純に俺の「対策」のメンテナンスだった。

「まったく、こうも易々と壊されるとはな」

「あ、そういうえば教会で手酷くやられたわ」

思い出すのは先週の日曜にボコボコにされた時に「おじやん」になったこと。

危ねえ、俺、一週間も無防備に暮らしてたのかよ。

いくら学生だからって俺も立派な魔法関係者、もしものことがあれば一瞬で殺されて

いた。

「あくまで貴様自身をベースに作られているのだからな、それを忘れるなよ」

「悪い悪い」

この藁人形。厳密には『携帯型物理硬度強化術式』なんだが、エヴァが作ってくれた

ものだ。

単純な障壁と異なり使用者の身体を覆うようにぴったりと張り付くタイプで、人体に

致命的なダメージを受けると判断された際に自動で保護してくれる優れもの。

要はガンツスーツみたいなものだ。

ただし、俺の身体をベースに作られているのでよく壊れる。もし使用者がくーふえ並みの身体能力者なら早々壊れないだろう。

この魔道具の欠点は使用者の素質に左右されるところか。

「まあいい、明日は私もいるからな。早々死ぬような目には合わんだろ」  
「気をつけるよ」

あながち絶対とは言えないところがネックだ。俺のラック値はぐだ男とはかけ離れたものだからな。

いや、巻き込まれ体質は同じか？

俺はエヴァに今日のお礼を言って帰路についた。

「マスター、よろしいのですか？」

「何がだ？」



あの小僧を見送つて早々に茶々丸が問いかけてきた。こいつの方から質問とは珍しいが。

「マスターは未だ魔力を封じられている身。『あの計画』を実行に移す前に危険な場所に赴かれるのは如何かと」

「ふん、図書館程度なら問題ない。触媒を使えば魔法も使える。十分だろ」

何を気にしているのか。しかし茶々丸は未だ何か言いたげだ。

「ですが、彼、フジマルリツカにそこまで付き合う必要はないかと」

「ほう」

本当に珍しい、こいつが私の意見に反論を述べるなど。

……いや、日頃から結構、小言がうるさかったりするが。

真面目な話で『茶々』を入れるのは珍しい。

「はつきり申し上げて、彼は一般人です。魔法関係者ではありませんが魔力も少なく魔法も使えず、使い魔に頼り切りの存在です。加えて彼は学園側。」

「マスターがそこまで面倒を見る必要はないかと」

なるほどな、私があいつに執心している？

勘違いも甚だしい。

「間違えるな、単に私は奴の言う『魔術』とやらに興味があるだけだ」

魔術。奴と私が知り合いになつたきつかけ。

それはあのサーヴァントとかいう存在が現れた時に遡る。

それまでは他の生徒同様に単なる一般人に過ぎなかつた奴が突然、あの様な“強大な存在”を使い魔として従えたのだ。断然興味も湧いた。

だがいざ接触してみれば奴は結局、素人で一般人に過ぎなかつた。

それなのに。やつはあの使い魔をサーヴァントと、魔術とやらの産物だと宣つた。

普通なら一笑に伏すところだ、素人、或いは狂人の戯言だとな。

だが確かにあの使い魔の詳細は掴めなかつた。伊達に数百年を生きていない私をしてアレがなんなのか、分からなかつた。

続けて奴はこう宣つた。

『これは“この世界にも存在している”と。』

この世界？ 妙に引つかかる言い方だ。まるで自分が異なる世界から来たと言つて  
いるような。

魔法使いの常識的に考えれば異なる世界とは魔法世界のことを言っていると見るだ  
ろう。しかし、魔術などというものはあの世界でも一切、見たことも聞いたこともない。

魔法の本場とされる世界には存在しない技術。

断然、唆る。

「あれ程の使い魔を魔力の塊として呼び出す未知の技術、解明する他に手はあるまい？」  
問い返す。自然と口角が持ち上がる。

「マスター……」

茶々丸も私を見て、ようやく合点がいったと頭を下げた。

「差し出がましい振る舞いをお許しください」

「許す。分かったのなら構わんさ」

そう、そんな瑣末ごとなど今はどうでもいい。今の私にあるのは魔術とやらに対する興味だけ。

「ククク、久方ぶりに楽しみを見つけた。見させてもらうぞ、貴様のいう魔術とやらを」

「マスター、とても悪い顔をしています」

「ふ、そう褒めるな」

なんだかんだもう三月、ネギ君が来てから一ヶ月ちよつとかな？

毎日、帰宅することにエリちゃんにネギ君の近況を聞いているが順調にイベントこなしている。順調過ぎるくらいに。

クラスメイトもエリちゃんの分、一人増えているのに大して変わらないどころか殆ど原作通りの流れ。

これが俗に言う『修正力』というやつなのだろうか。

抑止力とか結構しっかり働いてるのかね。

なにはともあれ僥倖だ。このまま順調に成長していざれ世界を救って貰わねば。

ちなみに、彼のような幼な子に世界の命運を託したり辛い使命やらを背負わすことに俺はなんら罪悪感を感じない。

当たり前だ、彼はもともとそういう歴史を歩むはずでありその素質も器もある英雄だ。

たかが一般人一人加勢したところで焼け石に水、どうにもならんだろ。寧ろ規定コースを乱す可能性すらある。

正真正銘、一般人代表たる俺には関係ない話、遠い世界の存在なのだから。

仮に力を得たとしてもそのスタンスは変わらないだろう。

いくら強大な力を得たとて、扱うものの精神が懦弱では単なる災いにしかならない。それは歴史が証明していることでもある。

突然、チートをもらって転生して無双してハッピーエンドなど所詮はフィクションでしかないのだ。

世界を救えたのは、その者にそれだけの資質があつたか器があつたか、はたまた俺などには分からない英雄としての資格を持っていたからに過ぎない。

要は持つて生まれた“役割”の話だ。

そもそも、俺がエリちゃんのマスターをやつてるのもあの非人間の要らぬお節介に過ぎない。コズモなんちゃらとか全く関係ない。

だからこそ俺は“英雄たり得る資格を持つ”エリちゃんが巻き込まれないように動かすだけだ。

序でに、今後のために魔術について調べる、と。

今のところ、俺のほのぼののハッピーエンド計画は順調である。

「それでね、朝倉つたらひどいのよー」

「そうなのかー」

いつもの食卓。俺の作った夕食を囲みながらエリちゃんが今日の出来事を語る。

俺はそれを聴きながらほっこり気分で夕食を食べる。

たぶん、ここは俺にとつての幻想郷なのだろう。

「危うくバレると……つて聞いている？」

怪訝そうなエリちゃんの顔が迫ってきた。

「うん聞いているよ。まあ、朝倉はジャーナリストとしての素質はあるからね、これからもバレないように気をつけよう」

すでに何度かバレて記憶を消しているが。

あの魔法つて改めて思うと人道的にどうなの、つて思う。だって絶対脳にダメージ与えてるつて。

正直、何度も使つていいものじゃないと思う。何回かバレるようならいつそバラしてしまつた方が問題もないんじゃないかな。

「子イヌー」

「ん？」

なんだが面白くなさそうな様子のエリちゃん。どうしたのか、ちゃんと話は聞いてたけど。

「子イヌがげんさく？ てのを気にしてるのは分かるけど。それだけじゃなくて、もつ

と普通に聞いてほしい」

「エリちゃん……」

俺としたことが、エリちゃんを優先すると決めていたのに彼女の気持ちを考慮していなかった。致命的な失態だ。

「ごめんなエリちゃん。次からはちゃんとありのままの君の日常を聞くことにするよ」

「わ、分かればいいのよ。さ、お夕食食べちゃいませよ？」

ちよつと顔を赤くしながらも分かりやすく機嫌を直してくれたエリちゃん。彼女はやっぱりいい子だ。

とても、魅力的だと思う。

俺は改めて彼女と平穏な生活を送ることを決意した。

同時刻、麻帆良図書館島。

その一角に一人の男が降り立った。

「ハイッか」

真っ白なローブに身を包み顔をフードですっぽりと覆った姿。有り体に魔法関係者に酷似した装いだ。

しかし、彼は少なくとも麻帆良の関係者というわけではなかった。

夜闇に紛れ顔すら見せずに男は図書館島内部へ、魔法関係者のみに進入を許された地下区画へと潜り込む。

火を灯す魔法すら使わず全くの無手でスタスタと闇の中を進んでいく様子から彼が夜目のきく方であることが伺える。

或いは、進入する前の一瞬、手の甲にぼんやりと浮かび上がった緑色に発光するラインが何か関係しているのかもしれない。

「おっと」

本棚の隙間から飛び出してきた矢を危なげなく片手で掴んで折る。

「危ないなあ、これってもし一般人が入り込んできたら危険過ぎない？」

彼が思うのは図書館島に入る際に何の警備も見当たらなかったこと。正門からでなく裏の勝手口から侵入したのだが、どうにも何の警備も見当たらなかった。おそらく一般区画なのだろうが、そこからすでにトラップの嵐だった。



魔法関係者区画との境も曖昧だ。万が一を考えるならトラップの前に魔法による境界を張るべきだと思った。

彼がこのような思考についてい夢中になってしまっているのは最早性分であった。特に麻帆良に義理があるわけでも関係者でもない、なのに他人の心配をしてしまうお節介なところは、彼の万単位の年齢の中でついぞ変わることがなかったもの。

いや、厳密には本体はずでに……

無駄な思考を続けながらも無意識で魔法トラップを避けていく彼は並みの実力者ではない。

ある程度内部に精通している者が、警戒しながら初めて安全に進める道を、初見でもかも無意識に回避していくのは尋常ではない。

「ここら辺かな」

男はいつの間にか拓けた場所にまで辿り着いていた。

眼前に広がるのは水没した本棚たちと、木の幹のようなものが幾つも立ち並び柱の役割を担い、壁がぼんやりと発光する。

そんな、幻想的な風景。

「地下図書室とは、思っていたよりも綺麗だね。近右衛門もなかなか粋な真似するようになったじゃないか」

その光景に満足げに微笑む男。

「おっと、本来の目的を忘れるところだった」

ふと思いい出したように懐から一冊の本を取り出す。

それは、一目見て「普通ではない」と分かるほどの魔力を有していた。

加えて、学園の結界が一切感知出来ない事実が彼の異常性を物語る。

「さて、何処がいいかな？」

キヨロキヨロと辺りを見渡して何かを探す男。

数秒して何かを見つけたように男が動いた。

「ここ、かな？ うん、なかなかいい感じ」

男は半分水に浸かった本棚の中に紛れ込ませるように手に持っていた本を押し込んだ。

驚くほど雑である。

「ふー、一仕事すると気分がいいね」

額を手で拭い一息吐く男。彼がしたのは図書館島の地下に侵入して本を置いただけである。

他には何もしていない。

ただ、「魔法ではない技術」を用いて侵入した点を除けば。

男は何度か満足げに頷いてからそそくさと館内を脱出した。もちろん回避してしまつたトラップを直すことも忘れない。

変なところで律儀な侵入者である。

しかも、悪態をついていたトラップを直しているあたり彼がそれほど深く物事を考えられない人間なんじゃないかと疑いたくなる。

「後は彼ら次第かな。うまくやつてくれるといいけど」

一瞬、不安げな顔を浮かべてから彼は何事もなかつたようにその場から消えた。

夜、麻帆良に存在する全ての者から全く感知されずに彼は目的を遂げて去つていった。

それはもちろん学園の結界にすら一切の感知を許さずにだ。

麻帆良は旧世界においても重要な霊地だ。もちろんのこと警備に関しても他の木っ端な霊地とは比べものにならないほどに嚴重だ。

幾重にも張り巡らされたその警戒網をいとも容易く抜けて男はことを成し得たのだ。

その意味が今後の麻帆良、ひいては『世界』を巻き込む騒動に関わるものだとこの時点では誰も予想していなかった。

仮に、予想できているとしたらそれは彼只一人だろう。

だからこそ彼は現れた。

だからこそ彼は世界に穴を開けた。

だからこそ彼はあの本を創り、託した。誰とも分からぬ、しかし最も信頼できるだろう。『運命に導かれし者』へと。

彼は全てを知っている。しかし子細を知ることとはできない。

ただ、彼という存在は『人間を信じることに特化していた』というだけの話。

動き出す『観測者』と、それに対抗する『残滓』。

始まりからしてこの世界は正史とは異なっていた、始まりからこの世界は『怪物を孕んでいた』。

事の全ての始まりたる『かの存在の残滓』は希望を託した。

その功績は誰にも知られることはない。

その良心はもう誰も覚えていない。

それでも彼は動いた。残る力を全て使い果たして。

ここで彼の物語は終わった。そも彼の物語ではなかったのだ、この世界は。

語られるべきは凶らずも彼の『嘆き』を受け止めた『被害者たち』の物語。『運命』

などという悲劇に見初められてしまった正史の英雄と一般人の物語。

時を同じくして、麻帆良にはもう一人の侵入者がいた。

当然のごとく結界はおろか熟練の魔法使いすら感知出来ない。

男は、彼とは異なる真つ黒なローブに身を包んだ男は高台から町並みを見下ろしていた。

ふと、その視線が動く。

びたりと止まった先にあるのは『世界樹』。

この霊地最大の象徴にして根源。この地を管理する魔法使いたちですら気付いていない。『宝』を目的に男は動いていた。

「もうすぐだ。ほんの半年で我が悲願は果たされる」

苦節、????万年。やっと、我々は辿り着いた。

これで、ようやくー

『人類は次のステージに向かうことができる』

それは凡そ人間の思い付く思想ではなかつた。

狂気の沙汰だつた。

妄執の果てにある狂つた願はなしい事だつた。

全ては偶然でありその果ての必然であつた。

『人理を観測する』。その願はなしいさえ捨てていればこのような結末を迎えることもなかつただろう。

そもそも、この世界に彼の魂が迷い込むことが無ければ。

時は戻らない。すでに発生してしまつた事柄は無かつたことには出来ない。

それが人類の始まりからのものであれば尚更。

この世界の始まりから続く呪いは遂に動き出す。人類を守護する古き楔を断ち切らんとして。星を守護する古きしがらみから解き放たんとして。

当人達の預かり知らぬところで滅亡へのカウントダウンは刻まれていた。

キーアイテムはいつも都合がいい時と場所にある。

「では、行くか」

「おう」

三月某日、日曜。俺はエヴァを伴って図書館島の探索に赴いていた。

探検部が使っている裏口から入りそのままを進む。

図書館内部はハリポ○ターの摩訶不思議空間になっていた。具体的には足場が複雑怪奇に入り乱れ、所々水路のようなものが通っていたりする。

その中に本棚が置かれているのだ。

「改めて見ると作り雑じゃね？」

「まあ、素人が増改築など繰り返せばこうなるだろうな」

しかも担当素人だったのかよ！ そりゃこんなカオスな作りになるわ！

一応、貴重な書物も保管してるんだからもっとしっかりした作りにしろよ。

「用があるのは魔法関連のエリアだ、一気に抜けるぞ」

「ああ」

俺は先日、修復してもらった藁人形の力を使って疾走する。

この『対物理硬度強化術式』はガンツスーツと称した通り、使いようによつてはこうして擬似身体能力強化として使える。

一般蔵書領域にあるトラップを越えて一気に魔法領域に至る。

地下深部にあたる場所だ。

周りの景色もハリポタから、どこか暗い雰囲気普通の本棚に変わっている。

もつとも、その広さは上階に負けず劣らず、広大だ。

立ち並ぶ本棚の先が全く見えない。

「さて、この中から探すことになるか」

「いや、もつと奥に行こう」

長期戦になると思ひ辟易としてしているとエヴァが提案してきた。

「どうしてだ?」

「貴様は風潰しに探すつもりだろうが、ここらの蔵書なら純粋な魔法関連しかないのは

私が確認済みだ」

マジかよ、伊達に長年ここに住んでいないというわけか。

「あまりに暇だったのにな、私でもまだ下は見えない」

「この下つていうと。」

「地下図書館、とかいうやつか」



「当たりだ。奥に行けば行くほど重要な書物というのが通説だがここも例に漏れず、だ」  
俺は彼女に頷き、地下へと歩を進める。

俺とて図書館島に関してはここ最近の知識と経験しかない。  
経験豊富な彼女に従うべきだろう。

地下図書室。もはやうろ覚えに等しい前世の知識を必死に絞って出てきた水没図書館というイメージ通りに、まさに水辺に浸かった本棚たちが散見される場所だった。

壁が発光している関係で辺りは昼間と同じくらい明るく、上階の薄暗い雰囲気からは一転して幻想的な印象を受ける。

「いろいろ突っ込みたいところがあるけど、とりあえず探すか」

なんで水に浸かっているのに本が無事なの、とか、なんで壁光ってんの、とか。

「っ！ 待て。その本棚、上から三段目、右から二番目だ」

「え、なんかあんの？」

突然、何かを察知したように早口で述べる彼女に従って本を抜き取る。

よく見れば他の本と違って新品同然の綺麗さで――

「『英霊召喚』だと？」

まんまなタイトルが表紙にデカデカと書かれていた。

「当たり前だな」

「いや、怪し過ぎるだろ」

なんだこれ、明らかに人為的につい最近置かれたような本。これ見よがしに英霊召喚とか書いて。

絶対、罠だろ。

「まさかお前が置いたわけじゃないよな」

「なんでそんな無駄な労力を割く必要がある」

呆れ顔のエヴァ。まあそうだよな。

じゃあ誰がこんなこと。

「とりあえず読んでから判断したらどうだ？」

妙にノリノリなエヴァに違和感を感じるが、言う通りなので素直に従う。

中は丁寧に日本語表記だった。

「えーと、『初めての英霊召喚を御手に取っていただきありがとうございます』」

すごい俗っぽい入りだ。

「『本書では誰でも簡単に英霊を召喚できる方法をお伝えしていきます。どうぞごゆる

りとお楽しみください』

前書きだ、普通の前書きだこれ。間違っても魔導書に書いちゃいけない類のやつだよ。雰囲気ぶち壊しだよ。

『では、ここからは本書のマスコットキャラに案内をお願いしましょう。令呪くん！』……は？』

読み進めていくと、次のページに突然現れたのはまさに令呪と言うべき赤い線の集合体、令呪そのものに手足が付いたような気持ち悪いキャラだった。

『やあ、僕は令呪くん！ これから君の初めての英霊召喚をサポートするよ！ 大丈夫、ちやんとできるように僕も手伝うから！』

果てしなく気持ち悪い。何がって、令呪が手と足を付けてコミカルなセリフを吐いている図が。

『……それ、本当に魔術の本なのか？』

「俺に聞くなよ、おふざけ気味に書いてあるが少なくとも英霊召喚の方法は俺の知っているものだ」

触媒を用意して魔法陣を敷き、詠唱。

その詠唱もまさに英霊召喚のものだ。

「じゃあ、やってみろ」

「マジかよ」

こんな見るからに怪しい奴、使いたくない。

「ならば他の本を探すか？ それこそ確実性に欠けるが」

「あー、分かったよ」

仕方ない。現状、この本がこの世界で初めて発見できた魔術に関連する書物なのだ。今、手掛かりがこれしかないのなら例え嘘っぽい文面だろうと試した方がお得だ。

『じゃあいよいよ召喚だ！ 大丈夫、僕も君が良い出会いを出来るように祈っているからね！』

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公」

『本当は触媒があつた方がいいんだけど。』

……まあ君ならそんなもの無くても縁で引き寄せられるよね？』

っ!!その一文にぞくりと悪寒を感じた。

何処の誰だか分からんが、藤丸立華という人物を知っているような口ぶりだ。

「降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

描いた魔法陣から僅かに風が巻き起こった。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

ふと、脳裏をよぎるイメージ。

「繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

銀の鍵。その背後には禍々しき触腕が無数に――

「ぐっ！ つ、告げる！」

「おい、大丈夫か？」

呻き声を上げた俺を心配してエヴァが手を伸ばす。それを振り払い、俺は詠唱を続ける。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

触腕が蠢く、鍵を絡め取らんとそのおぞましき腕を銀の肌に通わせる。じわじわと、じわじわと甚振るように絡まり絡まって――

「ち、誓いを……ここに！」

詠唱を始めてから突然脳裏に入り込んできたソレ。

じわじわとこちらの精神を削るような狂気を流し込んでくる。

気を抜けば正気を失ってしまいそうな、そんな『狂気』を。

壊したい、殺したい、潰したい、引き裂きたい。

——犯したい。

「つー、お前つー！」

視界に捉えたエヴァが無性に魅力的に見えて、その肌を汚したくて、その無垢な心を蹂躪したくて。

——待て待て。何考えてんだ。今は召喚の最中だろ。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

なんとか、自我を保ちながら絶えず脳内を掻き乱す狂気から逃れる。

さつさと召喚を終えてしまえばこっちのもんだ。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」  
告げる。最後の一節を。

途端、視界を覆う光が魔法陣から放たれ思わず目を覆った。

まったく、気軽に英霊召喚とかするもんじやないわ。

危うく永続的発狂に陥るところだった。まったくもってシャレにならない。

いきなり変なイメージが入り込んできた時は驚いたが、映像を見てからすぐにクトウルフ関連だと気付いた。

というか“あの神”を見てしまったらSAN値直葬だったと思うのだが。

「こんには」

ふわり、と幼い少女の声が聞こえた気がした。

閃光からしばし時を置いてから放たれた空気を震わせるその音は、とてもさつきまでの狂気とは無縁に思えるほどに幼く美しく無垢だ。

やつと目くらましから解放された俺が瞼をしばしばさせながら開くと、魔法陣の上には一人の女の子が立っていた。

「き、君は……」

見たことがある姿だった。

いや、前世では見慣れた姿だった。

フリフリのドレスのような衣装をまとった小さな女の子。

金髪碧眼の少女。

首から下げるネックレスには『銀の鍵』。

「私、アビゲイル。アビゲイル・ウィリアムズ！」

アビゲイル・ウィリアムズ。史実に記されるセイラム魔女裁判の中心人物にして最重  
要参考人にして事件の発端となった少女。

二十名以上の死者を出した痛ましき事件だ。

誰も彼もが魔女だと告発されて問答無用で処刑された、狂気の事件。

真相は集団ヒステリーだと言われている。

彼女が歴史に記されているのはそれだけ。本来なら英霊でもなく辛うじて幻霊と認  
められるかどうかの存在だ。

当たり前だ、彼女に戦いの逸話などなく、能力もなく、ただ凄惨な事件の発端となり  
引き金を引いてしまっただけのただの女の子なのだから。

ただ、f a t e 世界においてはそうはいかなかった。



とある作家の残した架空の神話に関わる物語において、彼女は関連付けられていた。その所為か定かではないが、かの世界において彼女は『あの世界』とつながる巫女としての力を有してしまっていた。

それを悪用した魔神の策略により世界は危機を迎え、紆余曲折の末にカルデアが解決するのだが。

とにかく、その出来事により彼女には『あの世界』を繋ぐ力が宿りその状態で座に刻まれる事態となってしまうた。

俺は前世において彼女を引き当てていた。給料をつぎ込んで。

希少な新クラスであったこともあり、なにより可愛いのでめっちゃくちや使っていた。パーティーには必ず入れていた。

もしかしてその所為で彼女が呼ばれてしまったのか？

「アビー……」

「うふふ、お久しぶりねマスターさん」

ふにやりと年相応の笑顔を浮かべて嬉しそうに述べるアビー。

うわあああああ！ 可愛い、可愛いよアビー！

「驚いたな、まさか君が来るとは。いや、それ以前に」

あの本が本物であったことも。

「っ！」

不意に、手の甲に痛みが走った。令呪がある方とは別の方に。

次の瞬間、刻まれる赤い線を見て衝撃を覚えた。

「二つ目の令呪？」

それはまさしく令呪だった。もう片方を見てもしつかりと二画の令呪が残っている。つまり、まったく新しく三画の令呪を賜ったということ。

「チートじゃねえか」

「おい、勝手に納得しないで私にも説明しろ！」

じわじわと後戻りできないところまで来てしまっているような予感を感じていると、エヴァからの怒声が耳に響いた。

「そうだな、とりあえず魔術は成功だよ」

「なに？　では、あの小娘が英霊とか言う奴なのか？」

どうにも納得していない様子のエヴァ。

確かにアビーは見た目ただの女の子だ。普段の言動もとても微笑ましいものが多い。だが、その身に宿す業は並みのそれではない。

「ああ、紹介しよう。彼女の名はアビゲイル・ウィリアムズ」

「こんにちは！ 気軽にアビーと呼んでくださいな」

「むっ」

アビーから差し出された手をエヴァはしばし見つめてから渋々握った。

「あなたのお名前は？」

「は？」

名前を尋ねられ呆れた顔をした彼女はアビーの手を放してズカズカとこちらに近付いてきた。

「おいリツカ!!」

「はいはいリツカさんですよ」

「何だあれは！ どこからどう見てもただの小娘ではないか！」

だろうね。だって第一再臨状態だし。

「うん」

「うん、じゃない！ どこが成功だというのだ！」

他にも色々うまく立ってエヴァはすっかりヘソを曲げてしまった。

あれだ、彼女はアビーのことを本当にただの少女だと思ってる。

あれ？ 魔力とか感じないのかな？

それともこの状態のアビーは一般人ほどの魔力なのか？

「落ち着けエヴァ。それでも彼女は立派なサーヴァント、英霊だ」

「証拠を見せてみる」

そんなこと言われても。

仕方ないなあ。

困惑気味なアビーの方へと向き直りさつそく指示を出す。

「ごめんなアビー、ちよつとだけ力を見せてやってくれないか？」

「力？ これでもいいかしら？」

スツと彼女が手をかざすと突然地面から光り輝く触手が幾つも生えてきてエヴァを

一瞬で絡め取ってしまった。

「うおおお!! な、なんだこれは!？」

突然触手に捕まりエヴァも混乱したように叫んでいる。

はは、魔力を封じられた状態では手も足も出まい。もつとも、力を取り戻してもこれに勝てるとはあまり思えないが。

「は、離せー!？」

「アビー、もういいよ」

「そう?？」

彼女がもう一度手をかざすと触手はパツとエヴァを放して消え去った。

突然宙に投げ出されたエヴァはそのまま地面に落下する。

「ふぎやー！」

「これで分かったら、この子も英霊だって」

落ちた時に尻を痛めたのか涙目でさすりながらこちらを睨みつけてきた。

「ああ……こいつ、先ほど一瞬だけ膨大な魔力を放ちおった。ともすれば全盛期の私に匹敵する量だ」

そうだろうな、だって時空を支配する神だもん。

アビーを介しての間接的な干渉とはいえ相当な魔力量を放っていることだろうよ、アビーにもそれは反映される。

「アビゲイル・ウィリアムズ。確かセイラム魔女裁判の関係者だったな」

魔女という単語に、アビーが露骨に嫌な顔をしたが彼女を語る上ではその話も抜かずわけにはいかない。

「だが、あれはただの茶番でありアビゲイルという娘はただの少女だったぞ」

「その通りだ。ただこのアビーは色々あつて神の力を宿しているんだ」

「神？」

「ヒントは『銀の門』『戸口に潜むもの』。クトゥルフ神話に詳しくれば分かると思うが」

「ヨグソトースだど!?」

ヨグソトース、或いはヨーグルトソース。ヨーグルトとも。

クトゥルフ神話に語られる外なる神という神の一柱にして副王の地位にある存在だ。

この神は時空の秘密を解き明かしているとされ、過去未来現在の全ては彼にとつては一つでしかないらしい。

要はどの時間帯にも彼は存在しているという、ちよつと意味わかんないですね、という反則チート野郎だ。

まあ、王であるアザトースに至つては宇宙の生みの親とか見るだけで死ぬとか色々つぶつ飛んでいたりするが。

「馬鹿な！ アレは作り物だ、架空の話だ」

「〴〵この世界では〴〵な」

「……何が言いたい」

「だから、彼女がいる世界では存在していて過去のいざこざでその力を宿してしまっただけの話ということだ」

「そんな話があるか、英霊とは歴史に刻まれた英雄なのだろう。異世界の話など持ち込

めばキノコ野郎とか緑の帽子の勇者とかなんでもありじゃないか！」

例えが古い。あと、怒ってるのか興奮してるのか分からない顔はやめろ。そんな『くやしい、でも興味津々なの！』みたいな。

確かに最近の英霊判定はなんでもありな風潮があるが。

俺も彼女が来るのは予想外だった。よりにもよってエクストラクラスの中でもややこしい奴が来てしまった。

「マスターさん、もしかして私はお呼びじゃなかったのかしら」

だが、しゅんと落ち込んだアビーを見てしまつてはそんな考えは破棄する他無かつた。

だつて俺が呼んじやつたんだしね。

来ちやつたものはしょうがない。

「とりあえず関係ありな本は見つけたからな、今日はここまでにしよう」

「仕方あるまい。結局、正体不明の輩が二人に増えただけだったが、それはそれで面白い」

左様ですか。

俺はこの後、どうやってエリちゃんに説明すればいいのか悩んでいる。

だって二年も彼女と二人でやってきたのにいきなり他のサーヴァント加えるとか言ったら拗ねちゃいそうなんでもん。

俺もちよつと複雑だけど、

「マスターさん……」

こんな困った顔のアビーを無慈悲に送還とか出来ないじゃんね。寧ろ送還とかしたら彼女の『お父さん』に外宇宙に放り出されかねない。

あいつ、普段は子ども作っても放置なくせにアビーに関してはご執心らしいからな。まったく勝手な野郎だ。

「大丈夫だよアビー。エリちゃんもいるから」

「え！ エリザベートさんもいらつしやるの!？」

一転、花が咲くような笑顔を見せるアビー。やっぱ知り合っていると安心するよな。ところでリツカさんも知り合いだと思うのだけど。男はダメ？

それとも変態紳士だからかな？

「マスターさん、なんだか少しだけ気持ち悪くなった気がするわ」

「ひどいなあ」



「ええ!? あなたアビー?!」

「お久しぶりエリザベートさん!」

帰宅するなり先に帰っていたエリちゃんのアビーが感動の再会を果たした。

聞くとところによると、カルデアではフォーリナーという得体の知れないサーヴァントゆえに大半の面々が距離を置く中でエリちゃんは持ち前の「凶太さ」で、外なる神とかまったく気にしないで親しくしてくれたらしい。

さすエリ。

「子イヌ子イヌ」

「はい子イヌだよ」

「アビーもこれから一緒に暮らすのかしら?」

「まあね、故意ではないとはいえ呼んでしまったのなら一緒に暮らした方が安全だし安心だよね」

たぶん俺のサーヴァントという扱いなのだろうし。

あとでアビーに聞いた話ではやはり魔力に關しては世界樹が一任されているらしい。

サーヴァント二人ぶんの魔力とか、枯れちやったりしないのだろうか？

前々から思っていたが、あの世界樹には謎が多い。ただ魔力を溜め込むだけのタンクならわざわざあの樹の周囲に街を作つてまで囲い込む必要はない。

まあ、地下にはトンデモナイのが封印されていたり古いゲートが落ちてたりするが。それはあくまで後世に付けられたものであつて、始めにこの地を街にしようとした奴は一体何を知っていたんだろうな。

考えても分かることではないので今は推測をやめる。

令呪もあの樹から貰つてゐるみたいだし、もしかしたらこの世界の『聖杯』に相当する存在なのかもな。

「美味しいわ！ マスターさん、お料理も上手だったのね」

「はは、一人暮らしだったからね」

二年前までの話だが。

それからはエリちゃんのおかげで賑やかな生活を送ることができた。これからは更

に賑やかになりそうだな。

「ご飯粒をほつぺたにくつつけながら微笑むアビーを見て思う。

「ほらアビー、ほつぺにご飯粒付いてるわよ」

エリちゃんに指摘されアビーが急いで頬をペタペタと触る。

「え!? ほんとだ……恥ずかしいわ」

頬を赤くして手で顔を覆ってしまうアビー。ぶかぶかの袖で顔を覆う姿はとても可愛い。(語彙力)

夕食を終え、就寝と相成った。

エリちゃんの布団はそのままで、アビーの分が足りないので俺の布団を貸し出し俺はソファで眠ることにした。

「俺ので悪いけど我慢してくれ」

「そ、そんなことないわ。でも、いいの?」

申し訳なさそうなアビーが寝巻き姿で布団をぎゅつと掴む。

「別に気にしなくていいよ。学園長に言えば新しいのくれるだろうし」

「でも、サーヴァントに睡眠は必要ないわ。そう考えたらマスターさんが使った方が

ずっと合理的よ」

実にロジカルです。

いやまあ、そうなんだけどね。

「俺が居た堪れない気持ちになるからさ、アビーに使ってもらった方が俺も嬉しいよ」

自分だけ寝てアビーを一人夜中に起こしておくとか正気の沙汰じゃない。罪悪感で

死んでしまう。

「ありがとう」

嬉しそうにはにかんだ彼女は布団に横になった。

ちなみにエリちゃんはすでに寝ている。

「おやすみー!」と言つてすぐに寝てしまうのは長所だと思う。

アビーの言う通りサーヴァントに睡眠は必要ない、食事も不要だ。

でも、それって寂しいじゃないね。別に気にするほど金に困ってるわけじゃないし、魔法関連の事件を解決すれば金ももらえるし。

結局、俺は俺のやりたいようにやってるだけなので誰も何も気にする必要はないのだ。

「さて、俺も寝るか」

一人つぶやいてソファに横になる。すると、気付かないうちに疲れが来ていたのかすぐに睡魔に襲われてー

「ねえ、マスターさん」

夢の国に旅立とうとして、身体を揺すられる感覚に起こされた。

「……アビー？」

目を開ければ、不安そうな顔のアビーが立っていた。

両手で枕とぬいぐるみをぎゅつと抱きしめながらこちらを見ている。

「あの、出来ればでいいのだけれど……一緒に寝てくれないかしら？」

金髪碧眼幼女の上目遣い。いいと思います。

「しっかりし、彼女がそんなことを言うとは。いや、怖がりなんだろうなあっていうのは知ってたけどね。」

「なんというか、俺にそんなことを言うとは思わなかった。」

「え、と、それって一緒に布団でつてこと？」

「……」

「恥ずかしそうに頷く彼女。きつと、こんなこと言うと子どもっぽいとか考えてるのだから。」

大丈夫、俺得だよ。

ふと、エリちゃんに頼めば、と思ったがそういえば彼女は未だに潔癖症を持っていたことを思い出す。イマイチ彼女の潔癖スイッチが分からないが、俺が触れるのはダメらしい。

かなりシヨックを受けたのを覚えてる。

ともかく。

「じゃあお布団行こうか」

「う、うん」

未だに顔を赤らめたアビーを伴って布団に横になる。

身長差からか自然、俺の腕を枕にする形になる。

「マスターさんの腕、やっぱり落ち着くわ」

おいおい聞き捨てならんな。まさかあっちの立華くんはアビーに腕枕とかしまくっていたのかい？

俺と似てる魂といえは確かにそんなことしそうだ。

「程よく筋肉が付いていて、でも暖かくて頼り甲斐のある……」

リツカベタ褒めトークの途中でアビーはうとうとし出して、そのまま眠ってしまった。

静かな寝息だけが横から聞こえてくる。

「寝ちゃったか」

こうして寝顔を見てみると、本当にただの女の子だ。

ずっと見ているとこつちもほんわか暖かい気持ちになってくる。

ロリコンだなんだ言ってるが子ども好きなのは本当なので素直に微笑ましいと思っ  
た。

世のお父さんはこんな気持ちになっていたりするのだろうか？

まだ見ぬエリちゃんとの新婚生活を思い描きながらいつの間にか俺も深い眠りに落  
ちていた。

『リツカよ……』

暗闇の中、俺を呼ぶ声がする。

『リツカ、転生せしマスターよ』

こいつ、脳内に直接！ え？ まさかルルイエの主人とか言わないよね？

怖いけど、ずっと呼んでくるので仕方なく目を開く。

『リツカよ……』

……。

『……』

よ、ヨーグルト!?

『ヨグ||ソトースである』

目を開いたら七色の肉塊が喋ってた件。

伝説のスレになると思います。

ぎやああああ!! 俺の正気があああ!!

『くだらぬ三文芝居はやめろ、貴様も我らと同じだろう?』

やめてください、俺は一般人なんです。前世は少なくとも一般人だったんです。間違っても音の塊とか光の柱とか肉の塊ではないんです。

『まあいい、それよりも我が娘をまたしても呼び出したらしいな』

なんですか、しようがないじゃないですか。俺だって誰が来るか分からなかったんだもん。その場のノリで呼んでしまったのは申し訳ないけど戦力的には大アップなので得した気分です。

ダメなんですかお義父さん。

『お義父さんと呼ぶな!! まったく、性懲りも無くポコポコ呼びおつてからに……』



ぶつぶつと文句を言いだすお義父さん。

え、まじでヨーグルトなの？ 夢とか入ってくるの？

というか、娘が心配で夢にまで干渉してくるとかキャラ崩壊どころの話じゃねえよ、例によって俺のSAN値は無事だし。

純粹に気持ち悪い肉の塊としか思えない。

『……であるからして、貴様にもアビーの契約者としての心構えをだな』

ヨグの説教が長い。なんでこんな過保護なの？ そんな心配なら直接出てきてアビーに語りかけてやれよ。

『出来ないからこうして貴様に頼んでいるのだろ』

結局何しに来たんだよ、もういい加減寝させてくれよ。

『貴様が彼女をどうするつもりなのか、だな』

どうするつもり？ うーん、今の所は特に願うこともないけどとりあえず前みたいにサーヴァントとして戦ってもらおうとか？

『彼女を危険な目に合わせたりしないだろうな？』

状況によるな、ただ、彼女を故意に危険な目に遭わせるつもりはない。

『ほう、貴様ごときが彼女を守ると？』

そりゃあ、時空の神の化身とか俺なんかの助けは必要ないかもしれないけどな。

でも、俺だって彼女のマスターなんだ。前のリツカがどうだったかは知らないが、俺は彼女も守るつもりだ。

『笑わせる。どこまでいっても凡人に過ぎない貴様が？ あの最後のマスターとて唯一無二の才覚を持っていた。それすら貴様にはないのだぞ？ あるのは実に凡庸な精神と身体。』

罷り間違つても貴様では人理を守ることまできんだらうな』

そんなことは分かっているよいちいち言うな。

でも、だからこそ今、俺のサーヴァントである彼女たちに関しては最後のマスターに負けるわけにはいかない。

『なるほど、実に凡人らしい矮小でくだらないプライドだ』

お前にはそうだろうよ。それでも俺にだって意地つてのがある。

『……ふん、まあいい。とにかくアビーに変なことしたら外宇宙に放り出すからな』  
へーん、ヨーグルトごときにやられるかっての。

『その威勢がどこまで続くか、時空の果てより見ているぞ』

それだけ言い残すと肉塊はヨーグルトに変化してそのまま溶けて無くなった。

133 キーアイテムはいつも都合がいい時と場所にある。

やっぱヨーグルトじゃねえか！

混沌の中から始めにガイアが現れました。

「リツカ、ご同行願おう。理由は分かるな？」

「……はい、刀子さん」

「待って、マスターさんは悪くないの。本当に悪い子は私なの……」

「もう大丈夫よ、私たちがあの変態を連れて行っちゃうから、安心して」  
「連れてつちやうおばさんですか」

「連行しろ」

「イエッサー」

「うわっ、なにをする！ やめー」

「……ふん、犯罪者が」

「あ、ああ、マスターさん……」

ひよんな事から俺は朝一に学園長室に来ている。

高校には学園長直々に連絡を入れ公的な遅刻だひやつほう。

朝っぱらから同業者の葛葉刀子さんが訪ねてきた時は何事かと思つたが、学園長が呼んだつてことはアビーのことだろう。

ここに来るまでに刀子さんと一悶着あつたが無事に事なきを得た。具体的には彼女にアビーを預かつてもらつてゐる。

ちなみにエリちゃんも終始冷たい視線を向けていた。予想外にも一切助けしてくれなかつた。危うく犯罪者になつちやうとこだよ!?

「ではリツカくん、話を聞かせてくれるかね？」

「はい。まず彼女は私が新たに呼び出した英霊です」

「ふむ、話が早くて助かるよ」

だつてそれしかないもんね。ていうかいくら重要案件とはいえ朝から叩き起こさないでほしい。とりあえず、アビーと気持ちよく寝ていた（意味深）俺の頭頂部を木刀で

叩いた刀子への慰謝料を要求します。

「彼女の名はアビー。キャスターのサーヴァントです」

ちなみに二年間の付き合いで学園長と高畑にはクラスや英霊の概要は伝えてある。

尤も、クラスについては七騎と他にエクストラクラスがあることを伝えたのみだが。

「キャスター……魔術師のサーヴァントか」

「ええ、ただ、彼女自身は逸話を持つ英霊というわけではなく、後世、複雑な経緯でサーヴァントとして成立してしまつたただの人間です」

「複雑な経緯、のう……」

すつ、と細められる学園長の眼。

さすがにあからさまに濁したところ追求をやめてくれそうにはない。

だが、彼女に関してはおいそれと真実を口にするわけにはいかんだろう。彼女自身の危険性もさることながら、何がトリガーで“あの世界”を刺激してしまうか分からないのだ。

とうか説明するのもめんどくさい。

「……俺は、サーヴァントといえど彼女らにも人権というものがあることを信じたい」

「……」

「いや、与えられるべきだと思います。エリちゃんしかり、アビーしかり。功績の裏には

悲劇があるように、彼女らもかつては人間で、今も人間性のある英霊がほとんどでしょう。

その過去を無神経に詮索するのは、それが残酷なものであるのなら尚更、人道に反する行いと心得ます」

「……」

ピクツ、と眉を動かす学園長。

「俺は、これ以上、彼女の古傷を抉る真似はしたくない。散々、魔女と罵られてきた彼女の名をこれ以上穢したくない」

「ふむ」

「アビーに関してはエリちゃん同様に私が面倒を見ます。彼女の召喚に際して追加の令呪を授かりました、制御に関してはこちらに力がないほどに万全でしょう」

これにて俺の弁明を終える。出せるだけの安心材料は出した。

ぶつちやけ保険といえど令呪しかないが。

学園長は一度深く頷きこちらを見つめなおした。

「よかろう、今後も英霊に関しては君に一任することにする。……どうせ、アビーくんも君の知り合いなのだろう？」

「まあ、そんなところです。彼女が故意に事件を起こすことはないでしょう」

いや、あなたが絶対とは言い切れないけど。彼女も覚醒するとかなりヤバイやつだからな。

「……なんか自信なさげだけど」

「いえ、大丈夫です……たぶん」

「うおい」

心配する学園長をなんとか言いくるめて俺は部屋を後にした。

なんでも英霊に関してはワシらの手に負えないから君が頼りなのだとか。……俺の知らぬ間に一体何をやらかしたんだエリちゃん。

ふと、ライブを行う彼女の姿が思い浮かんだ。あれはなかなか壮絶なライブだった。一時的にだが麻帆良が壊滅状態になったほどだ。

原因は麻帆良全域に放送してしまったことだったが。

のちにこの事件は『ジャイアンリサイタル事件』と呼ばれている。間違っても本人には聞かせられない呼称だ。

「あ、マスターさん」



待合室で刀子さんと共に待つアビーの元を訪れる。

「終わったよ」

「お疲れ様！」

「はい、お茶！」と湯呑みを手渡してくるアビー。

有り体に天使と呼ぶべきだ。

そんなところに済まなそうにしながら刀子が声をかけてきた。

「リツカ、朝はすまなかつたな」

本当だよ、藁人形持つてなきやお陀仏だよ。

殺人未遂だからね。

「いえ、状況から見てそう勘違いしても仕方ないでしょう」

「そう言ってくれると助かる。私も守るべき者がいるからな」

例の一般人彼氏ですか。でもいつまでも隠し通せるとは思いませんけどね。

まあ、俺には関係ないのでそれ以上は何も考えない。

「だが、これからどうするのだ？」

そうなんだよなあ、俺もエリちゃんも学校があるからその間はアビーが一人になってしまふ。

サーヴァントなんだから霊体化させて侍らせておけと思うかも知れないが俺として

はあんまり縛り付けたくない。

せつかく、平和な世界に来たのだ。あまり戦いばかりにこき使う必要はないだろう。

「それなんです、学園長に一つ提案されましてね」

うちの初等部入らない？って。

いや、お前들んだけ英霊を学校に入れる気だよと思う。

この先もしも英霊が増えたらその度に入れようとする気がする。

その旨を伝えるとー

「学校!」

ほらやつぱり。学校の話をするればアビーも食いつくだろうと思った、学園長もそれを分かっていて言ってる気がする。ふざけた態度ばかりとっているが彼も組織の長だ、策略にも長けている。

たぶん、英霊を自分たち側に引き込んで俺への牽制としているのだろう。万が一にも裏切ることはないように。

エリちゃんやアビーが学友と交流を深めれば深めるほど情が移って学園側に逆らうことができない。

ぶっちゃけそんなことしなくても俺は裏切るつもりはないんだが。この世界で一番安全なのここだと思っし。

なんとか学園側を味方にしてしまえば強固な城塞として機能する。

ここらで本当にキヤスターでも呼べればより盤石な構えとなると考える。

「外見からして六年生からになると思うけど」

一年で中等部に上がる。だが今更中等部一年として入ってもすぐ進級だけど。

「それなら新年度から一年として入ればいいだろう」

刀子さん、そんな簡単に言っちゃいけないよ。どう見たってアビーは中学生に見えないでしょ。主に言動が。

「あら、マスターさん。私は中等部からでも大丈夫よ、それまではマスターさんの側に居ればいいのでしょうか？」

なんてことないように言う彼女。

サーヴァントとは召喚時におけるその地、その年代の常識を聖杯から与えられる。

それとは別に聖杯戦争における常識も叩き込まれる。

つまり、彼女もサーヴァントのなんたるかは心得ているということだ。

英霊の中には知った上で「そんなもの知らん」と一蹴する困ったちゃんが大勢いるから殆ど空気な設定ではあるが。

「こんな小さい子どもを……」

「刀子さん」

複雑な様子の刀子への声を掛ける。

俺とて貴女が言おうとしていることは理解できている。

「彼女はあくまでサーヴァントとして呼ばれて存在している。その役目を他人がどうこう言うのはそれこそ彼女に対して失礼だと思えますよ」

「ぬう……」

少し呻いた刀子。やがて渋々頷いた。

ふ、チヨロいな。

これで合法的（違う）にアビーを四六時中侍らせられるぞひゃっほー！

「霊体化、って分かるかな？」

「ええー！」

元気に応えてすぐにスウッと姿を消すアビー。

いきなり消えてしまったアビーに刀子は目を見開いている。

それから数秒でまた姿を現わす。

「どうっ？」

「完璧だ。さすがアビーだな」

「うふふ」

褒めてやると満更でもなさげに微笑むアビー。マジで普段はただの女の子なんだよ

な。

いまだに『悪い子モード』のアビーを見たことがないからかもしれない。

「では刀子さん、アビーがお世話になりました」

「お世話になりました！ また遊びましょう、刀子さん！」

無邪気に微笑むアビーに刀子はメロメロになった。

「あ、ああ。また、な」

少しだらしのない笑みを返した刀子。刀子はアビーにメロメロだ。

「刀子さんならきつといいお母さんになりますよ」

「なあ!? いきなりなんだリツカ！ セクハラで訴えるぞ」

そんな怒らんでも。ただのジョークですよん……。

「うふふ、学校ってどんなところなのかしら」

アビーを伴い俺も登校する。彼女には霊体化して付いてきてもらっている。

「そうだなあ、まあ、勉強してお友達をいっぱい作るところかな」

正直、勉強に関しては中身大人なので今更必要ない俺なのだが。

「お友達、いっぱい……」

声からして多分目をキラキラさせているアビー。

彼女と話しながら登校していると、すでに校門まで来ていたことに気付いた。

「そうだな、アビーならすぐ出来るとおもー」

ぞくり、尋常ではない悪寒が背中を駆け抜けた。

校門を抜けたあたりだ。

素人の俺でさえ分かる殺気、いや、警戒？

ともかく誰かが俺を見ているという確信があった。

一体、どこのどいつが……そう思っただけで校内を見渡すと。

「……マジかよ」

俺の教室、その窓からほぼ全員がこちらを見ていた。軽くホラーである。え、なに、俺なんかした？

凄まじい覇気を一身に受けながらも俺は渋々教室まで向かう。

これってアレだよな、たぶん俺のこれまでの所業がバレたんだよな。

俺は校内でも屈指の変態紳士として通っている。

覗きとかスカートめくりとかそんなチャチなものではなく、何気ない仕草から「イメージ」することを可能とした一ランク上の変態だ。

例えば髪をかきあげる仕草から俺はいく通りもの妄想を瞬時に走らせることができると同時に、その娘の身体情報がある程度測定できたりする。

しかしこれはJKまでに限るが。

だがこれまで男子にのみ明かしていた秘密だったはずなのだが、まさか奴ら、俺を裏切ったんじゃないや（ガクブル

「リツカ」

教室に向かう途中、廊下で声を掛けられた。

「遠坂……」

声を掛けてきたのは黒髪凛の方だった。声だけだとわかんねえんだよな。

「いや、誤解だ。俺は変態ではあるがあくまで紳士ー」

「なんで、あなたがサーヴァントを連れているのかしら？」

予想外の質問だった。瞬時に頭を駆け巡る推測。

なぜだ、あくまでこいつは一般人のはずだった、学園長とか他の魔法先生に聞いても

一般人だと口を揃えて言っていた。

なのに、なぜ？

こいつはサーヴァントを知っている？

「マスター！」

困惑する俺の前に実体化したアビーが立ち塞がった。俺を庇うようにして警戒MA Xで凜を睨んでいる。

「待てアビー！ こいつは、まだ敵と決まったわけじゃない」

「アビー……クラス名で呼ばないのは真名を悟られる心配がないからなのかしら」

黒髪凜は冷静にアビーの真名予想をしているが、たぶん気付かれることはないだろう。気づかれても何の問題もないが。

確かに、連れてきたのがアビーで良かった。

だがしかし、仮に彼女が“あの”凜だとしてなぜ今になって仕掛けてきた？

これまでもエリちゃんと俺で帰ったりしたと思うのだが。

「エリちゃん？ 誰よそれ」

一瞬、ホラー的な展開かと思ってしまったがよくよく思い出してみるとエリちゃんと帰る時は校門を出てからだし、この前もはくのんは初対面だった。

どうにも奇跡的な綱渡りを毎回していたようだ。



「まあいいわ、貴方もすぐに敵対する意思はないのでしょ？　なら教室まで来てちょうだい」

それだけ言うとな俺を先導するように歩き出す凜。おいおい、教室つて。まさか全員あれ〃してきたとか言わないよな。

「マスター、危険だわ」

「いや、俺は信じるよ」

苦言を呈すアビーに俺は躊躇なく答えた。

だって、もう二年も一緒にやってきた奴らだぜ。なんとなくあいつらの人となりは理解できているつもりだ。

まあ、ダメだったら俺が死ぬだけの話だ。

「そんな……！」

「かといって、死ぬつもりとかないからね」

教室に着くなりクラスの殆どが俺を見てきた。怖い。

あのお、今は授業中だったと思うのですが。

「安心して、先生は眠らせておいたから」

「あと関係ない生徒たちもね」と黒髪凜が指差す方にはぐーすかと寝息を立てる先生とクラスメイトたち。どいつも型月とは関係ない名前と容姿の奴らだった。

「それよりも、問題は貴方よ」

一層語気を強めて凜は尋ねてきた。クラスを見回してみると、クラスメイト以外にも型月風の見え目と名前をしていた奴らが学年を飛び越えて集まっていた。

皆、一様に俺を見ている。

なにこれ、怖い。

その端っこで一人だけ明後日の方向を向いて、関係ないように振舞っているのははくのだ。こいつ、知ってて黙ってやがったな。

「やあ」

黒髪金髪両方の凜に促されて俺は洗いざらいゲロった。

「なるほど、つまり貴方も私たちと同じというわけね」

「はい」

「しかし、人理修復とは……段々と規模が大きくなっていないか？」

確かに田舎の聖杯戦争から月の覇権からついに歴史を世界を巻き込んだ大災害に発展した。そろそろ宇宙行くんじゃないかな。

ちなみにゲロつたと言つても俺は型月から転生してきたことになっている。さすがに「てめーら全員ゲームのキャラなんだよ」とか混沌を招きかねない真似は控えられた。もし俺が言われたら死ぬと思う。シヨックで。

「で、貴方はそこで縁を結んでいた英霊を二年前に一体偶然にも呼び出して、最近、もう一体呼んでしまったのね」

「その通りです」

仁王立ちする黒髪凛がもはや仁王像にしか見えない。金髪凛と二人で阿吽の呼吸というやつだ。

「……はあ、まったく、なんてことしてくれたのよ」

ため息ひとつ黒髪がそんなことを漏らした。

「いい、今から説明してあげるからちゃんと言のよ」

そこからは俺の知られざる高等部の秘密が明かされた。

曰く、この高校には揃いも揃って型月から転生してきた奴らが集まったという。これは故意にはなくまったく偶然というところから何かしらの存在の意図を感じたという。

転生した者たちは総じて、前世よりも良い暮らしを送っており魔術も存在しないとあって中等部までは普通に暮らしていたらしい。

しかし高校に入ってから知り合いばかりに合う羽目になって、そこから芋づる式に他の転生者たちも見つかっていった。

彼らは何らかの存在が意図的に自分たちをここに集めたと推測した。そうでなければ、本来なら会うはずもない年代もバラバラの人間が殆ど同じ世代で生まれてくるなどあり得ないからだ。

そして、この世界に魔術の代わりに魔法とやらが反映していることを知った。

当初こそ型月風の魔法かと狂喜乱舞したが、すぐに汎用的な魔術と大差ないことに気付いた。

自分たちのものとは根本から異なる技術、しかし限りなく魔術と近い扱いの力が存在することに彼らは警戒を強めた。

そして、この世界に自分たちが集められた意味と黒幕を突き止めるために彼らは結束――

「そこで発足したのがこの『麻帆良本校高等部裏生徒会』よ！」

ババン、と効果音がつきそうなドヤ顔で金髪凜が告げた。

「あ、あたしのセリフ」と横で黒髪が涙目でポコポコと金髪を叩いていたがスルーしておく。

「俺たちは表向きにも裏向きにも一般人ということになっている」

衛宮士郎が真剣な顔で説明する。

「これは俺たちが最初に定めたルールなんだ」

「魔術師ほどではないとしても、この世界の魔法使いとやらも結構ゲスいからね」

金髪が説明を受け継ぐ。

「幸いなことに奴らは魔術に関して全くの無知だった、だからこそ私たちの魔術を感知できない」

「……補足すると、根本的にあいつらと私たちの魔力の扱いが異なるのよ」

黒髪が説明を変わる。

「私たちは基本的に回路を通して生命力を魔力に変換して使っているわ。

でも、魔法使いたちはそのまま魔力を使っている」

黒髪が説明を続ける。

「そして、その上で私たちの魔術には気付かない。

ここから一つの推測が成り立ち、すぐに証明された。

つまり、私たちの魔力は魔法使いとは別扱いなのよ」

その推論は全くの予想外だった。

要は認識の相違だ。

少なくともこの世界において『魔法使いの使う魔力と魔術師が使う魔力は別物』と  
なっている。同じ魔力であっても違う存在として扱われているのか。

それはこの世界の理を読み解いたに等しい。同時に魔術師側に圧倒的なアドバン  
テージが生まれる。

こちらは広く普及した魔法とやらを存分に学べて、あちら側は魔術師が扱う魔力とい  
う名の『正体不明のエネルギー』を感じできない。

それを用いているから魔術は分からないし正体もバレないと。

あれ？ でもアビーの魔力はエヴァに感知されていたが。

「当たり前じゃない。だって同じ魔力なんだから」

んん？

いや、そういうことか。自分で言っていて忘れていた。

認識の違いというやつだ。

あくまでも魔力というものは同一だ。そこから認識を違えていた。

つまり、魔術というこの世界には存在しない基盤を通して起こす現象をこの世界が正しく認識出来ずに魔法とは別のよく分からない存在だと判断しているのか。

つまり、魔術を通して魔力を扱うぶんにはバレないと。回路を通して生成した魔力も同じ扱いなのだ。

「つまり、アビーやエリちゃんのもこの世界に正しく認識されている？」

「そこが分からないのよねえ。まあ、私たちも下手に向こうを刺激しないように英霊召喚なんかやらなかったから、どっかのおバカさんと違って」

悪かったな一般人で。いや、ほんとごめん。軽々しくやるもんじゃないわ英霊召喚。

「これは私の憶測だけど、貴方が行なった英霊召喚は魔法技術によるものだったのではないかしら？」

「そうするとアビーたちが俺らの世界の記憶を持つてるのもおかしくないか？」

「それもそうね……もしくは、私たちがこの世界に来たのと同じ、何者かの意図。或いは

この世界に穴が開いているとか」

「穴？」

確かに、黒髪の言うように世界に穴が空いてるとかそんなのなら転生云々も理解できなくもない。

だがそれは神の領域の話じゃないのか？ 少なくとも俺の知識では魂を弄れるのは

第三魔法くらいだったのだが。

「本当に神様の作業なのかもね」

いたずらっぽく述べる黒髪。

いや、シャレにならんぞ。彼女は冗談のつもりのようなのだが俺はFGOで神霊とかそれに準ずる存在が結構無茶やらかしてきたのを知ってる。

魔神とか結構なんでもありだったしな。並行世界閲覧とか宝石爺かよ。

「とにかく、問題はあなたが学園側と通じて英霊について話してしまっていることよ」

本題に戻す黒髪。くそ、うまく話をそらせたと思ったのに。

「彼女たち英霊が魔法使い側に感知されてしまうのは仕方ないとして。そもそも召喚なんかしなければバレなかったのよ」

仰る通り。でもエリちゃんはノーカンでしょ!?

「まあまあ遠坂。俺もリツカの行動は軽率に過ぎると思うが、知らなかったんだ今話



しても仕方ない」

士郎……お前やっぱいい奴だな。

「相変わらず衛宮くんは楽観的よね……」

「そんなことないわよね、士郎！」

呆れる黒髪をよそに、金髪が士郎の腕に抱きついた。

「お、おい遠坂……の金髪の方」

「なあに、士郎？」

「あー！！ 何してんのよアンタ！ 離れなさい、よ！」

士郎にこれでもかとデレる金髪と、それを必死に引き剥がそうとする黒髪。朝からぐちそうさまです。

「そういうえば、結局なんで今まで俺に気付かなかったんだ？」

結構、バレバレというか考えなしの行動を取ってたと思うのだが。

「あー、それに関しては色々あるんだけど。大きいのは結界の存在よね」

麻帆良結界。侵入者探知や大き過ぎる魔力の抑制など結構ハイグレードな性能をもつ麻帆良の重要な防備。

「あの変な結界と私たちが高校に張った結界が相互してしまつて上手く働かないのよ」「つまり、両方感知できなくなつてると？」

「その通り。まさかこちらに干渉できる術式があるなんて思わなかったから」

項垂れる黒髪。たぶん、しようがないと思うぞ、俺も殆どちんぷんかんぷんというか理解が及んでいないし。

ただ、士郎がエリちゃんに気付かなかったのも理解できた。

「要するに、高校内部でしか感知できないと？」

「あくまで、これまではの話よ。貴方の話を聞いて気付いたんだから、アレがサーヴァントの魔力だと認識しておけば問題ないわ」

余計なことを言ってしまった。これからは麻帆良で英霊召喚を行えば彼女たちに知られるということだ。

「それで、俺にどうしろというんだ？」

「ふふ、簡単な話よ。あなた、学園側のスパイになりなさい」

悪い顔で述べる黒髪。なるほど、あかいあくまだな。

横で士郎も苦笑している。

「別に学園側に敵対するつもりじゃないが、普通に考えてこの高校を置いた学園側に黒幕がいると考えるだろ？」

士郎が補足する。なるほど道理だ。だがそんなことするやつはここ二年間でも見当たらなかったが。

「スパイと言っても、魔術や私たちについて知っていそうな怪しい奴がいたら知らせてくれるだけでいいわ。現状、手掛かりはこの高校しかないわけだしね」

彼女たちも動くに動けないのだろう。

話に聞いたところでは、魔法世界や旧世界の魔法業界にも調べを入れているが今の所手掛かりはないのだからか。

今後調査は続けると言っていたから確定事項ではない。

「とりあえず今日のところは昨日見つけたって言う魔導書を預らせてもらうだけでいいわ」

「え」

「え、つてなによ。まさか、私に文句でもあるのかしら？」

「イエエ、ソナナ、オソレオオイ。」

「よろしい。なら、そのカバンに入ってるやつをとつと出しなさい」

「くそつ、そんなのまでお見通しかよ！」

「アビー、さんでよろしかったかしら？」

「……悪い人とはお話しちゃいけないってマスターさんに言われてるの」

俺が尋問を受ける最中、沈黙を保つアビーにフィオレ嬢が声を掛けていた。

さすが姉御、俺らに出来ないことをやってのける！

そこに痺れる憧れる弟くんが羨望の眼差しで姉を見ていた。

「私たちはリツカのお友達よ、だから安心して」

「そ、そうなの？」

こらアビー。そんな簡単に騙されちゃいけないぞ。

彼女たちは俺に二年も黙ってたんだ。たとえ神様仏様が許しても俺が許さねえ。

「ああ、俺なんかアイツとよくゲームして遊んでるしな」

こそこぞとばかりに弟が援護射撃に出た。くそ、真実だけに否定できねえ。

「そ、それなら……」

アビーは呆気なく陥落した。

「私はフィオレ、こっちは弟のカウレス」

「よろしくな」

「ええ！ 私はアビー、よろしく！」

ニコニコして二人と握手を交わすアビー。一応、真名を告げないあたり分かっているらしい。妙なところで聡い娘だ。

「で、スパイの件だけど」

図書館島で見つけた本を読みながら黒髪が声をかけてきた。

「ん、ああ。怪しい奴を教えればいいんだろ？ いいぜ」

「そ、そう……結構あつさりしてるのね、てつきり情が移つてると思ってたのだけど」  
情か。確かに情はある。なんだかんだ二年の付き合いだ。魔法関係者の友人も出来た。

高畑との仲はそれ以前からだし。

「ただ、お前らと過ごした時間の方が濃密だしもつと信頼できるからな」

学園長たちには悪いが俺はこいつらを信じる。

どう足掻いてもM Mに頭を抑えられてる麻帆良よりも、自分で未来を切り開いてきたこいつらを俺は信じたい。

別に裏切るわけじゃないしね。

お互いにより良い方法を選ぶだけだ。

「……ありがとう。貴方からその言葉を聞けてよかったわ」

よせやい照れる。そんなしおらしい顔はあかいあくまには似合わない、というかそういうのは士郎に取っておけ。

たぶんイチコロだと思うぞ。

「じゃあ、今後ともよろしくリツカ」

黒桐がタイミングを見計らったようににつこりと語りかけてきた。

だが、その後ろから両儀式がこちらを睨んでいる。

「おい、そんな簡単に信用していいのかよ」

「式……」

「こいつは俺らと同じようにずつと黙ってたんだぜ」

まあ、ぐうの音も出ないわな。

俺がこいつらを信用していなかったという証明だ。

「それでも、僕は彼なら大丈夫だと思うけど」

「……………まあ、お前がそう言うなら」

だが黒桐の一言であっさり引き下がった。拍子抜けである。

そういうえばこいつら娘儲けてたな、たぶん寿命で最期を迎えたのだろうし俺には分からないような深い絆で結ばれているのかもしれない。

思えば、士郎と黒髪凛も一見して原作通りだが、どこか、お互いを理解し合っている

ような不思議な雰囲気を出す時がある。

「おいおい、金髪凛ちゃん付け入る隙ないんじゃないか。」

「……今更なんだけどき、もしかして志貴と彼女も?」

「呼んだか?」

「んー?」

士郎に耳打ちしたつもりだったが、地獄耳のごとく志貴が反応してきた。彼女に至ってはなぜかアイスを頬張っている。相変わらずマイペース過ぎる。

「いや、お前も直死の魔眼持ちで彼女に至っては……」

「なんでお前が知ってるのか分らんが、持ってるぞ。だから眼鏡掛けるんじゃないか」

「ちなみに青子さんからの贈り物だ」と謎のドヤ顔を披露する志貴。

「私も一応、真祖の姫ってなってるけど」

マジかよ、って。

「それ仮契約カードじゃねえか!?!」

これ見よがしに見せてきたのはまさしくそれ。ちなみに志貴が従者となっている。するつてえとあれかい? もうラブラブチュチュしてるわけかい?

「例えばオヤジ臭いが、まあ、そういうことになるな」

「そうそう、志貴ったら照れちゃって可愛かったんだから！」

いやーん、と志貴に抱きつくアルク。もう、お前ら結婚しちやえよ。

「あら、カードなら私も持つてるわよ」

そんなことを言ってみせてきたのまさかの黒髪凜。

「一応、お相手を聞いても？」

「そんなのー」

バツ、と土郎の懐からカードを抜き去る黒髪。

「こいつとに決まってるじゃない」

「やっぱり……」

「ええ!？」

分かり切っていた俺とは対照的に金髪凜は衝撃を受けたのか心底驚いた顔してる。

「ちよつとちよつとちよつと！ なあに一人だけ抜け駆けてんのよアンタ!!」

ズカズカと黒髪に詰め入る金髪。黒髪金髪戦争の再発だ。

「あらあ？ ご存知なかったのかしら、私と土郎が前世でどういう関係だったか」

「な、なな、な!？」

みるみるうちに顔を赤くしていく金髪。ほんのりと目尻に涙を浮かべている。

最初からそれ言っとけばよかつたんじゃね？



「そ、そんな、そんな……そんなのあんまりよおおお!!」

金髪は教室を飛び出してそのまま走って行ってしまった。

たぶん、屋上とかで泣いている。

「おい、遠坂、やり過ぎじゃないのか?」

「いいのよ、いい加減あの娘にも現実見てもらわないと。」

そ・れ・に。元はと言えば貴方がはつきりしないからでしょ!」

ギギギ、と出しちゃいけない音を出して土郎の耳を引つ張る黒髪。

仲のよろしいことで。

「あー、やっぱりそういうことか」

「はくのん」

「……今更だけどその気持ち悪い呼び方やめてくんない?」

颯爽と現れたのははくのん。いや、最初からいたけどね。

なに何事もなかったように俺に話しかけてんだお前。

「お前、知ってて俺に言わなかったろ」

「良かれと思って……」

そんなPみたいなこと言っても許さないからね。あとなんでPの持ちネタ知ってんだよ。

「まさか藤丸くんも関係者だったなんてね、今まで黙っててごめんね」

ふざけるはくのんに憤慨していると我がクラスの癒やし綾香ちゃんが申し訳なさそうにそう告げた。

「いや、いいさ。俺も隠し事してたしな」

綾香もいるということは、彼女もプーサーと戦ったあとの彼女なのだろう。

だが現状、綾香の物語に關しては一切語られていないために俺も彼女への知識は浅い。プーサーと主従を結んでプロトアーチャーとプニキに気に入られてたのと、お姉ちゃんがラスボスってことしか知らない。

上級生でそれらしき人物を目撃した気がするがたぶん空似だろう。そう思い込むことにする。

「ありがとう」

改めて見ると、本編よりも成長してるといふか断片的な情報から思い浮かべていたイメージとはかけ離れた優しいお姉さんみたいな印象を受ける。

彼女の物語も、いつか聞かせてもらいたいものだ。

その後、他の面々と交流を深め金髪凜が帰ってきた頃に裏生徒会は取り敢えずお開き

となった。

正午までずっと眠らせたままだった教師やクラスメイトには記憶処理をしたりと隠蔽工作を重ねて、何事もなかったかのように午後の授業は行われた。

もう、色々とかオスだが、とりあえず彼らとは今後も友人を続けられることに俺は安堵していた。

存外、俺も彼らには情を抱いてしまっているらしい。

動き出した時は止まらない。止まるんじやねえぞ……

三月某日。

高校の連中、遠坂凜を始めとした『裏生徒会』の面々に俺の素性が知られてから、特にこれといって面白いこともなく数日が過ぎた。

もう今年度もあと僅か、来年からは怒涛のハードバトル展開が続く。

すでに原作に突入している現状、俺も暇だからどうかうかしてられない。

ヘタを打てば死人が出る魔法世界編に向けて、俺も準備をせねばならない。

当初の予定では全く関わる気はなかった本編だが、エリちゃんのネギクラス行きに始まり、型月転生者まで登場してしまった今となつては俺も何らかの策を講じるしかない。

しかし、現状唯一の手がかりたるあの『初めての英霊召喚』も遠坂凜に没収されてしまつており、仕方なく、俺は教会に通うことにした。

「いや、ほんと仕方ないよね。仕方ない仕方ない、こうしてココネちゃんにお菓子を持ってきちゃうのも仕方ないよね」

「むぐむぐ……全然仕方なくない、お菓子はいいけどリツカはだめ」

しかし、ココネ嬢はビニール袋いっぱいのお菓子を貪り食いながら顔色一つ変えずにそういった。

土曜の教会にはココネ嬢とミソラ嬢しかおらず、相変わらずシャークティーは仕事だった。休日だって、この世界には存在しない概念なのだろうか？

あの人、会いにくたびに運悪く外出してるんだけど。

もしかして、これがすれ違いの恋……？

「リツカ、お菓子無くなった」

しょーもないことを考えていたら、ココネ嬢が持つてきたお菓子を平らげていた。

あれ、スーパのお菓子コーナーで大人買いしてきたはずなんだけど……。

「ごめんねえ、お菓子はそれでおしまいなんだ」

「じゃ、もう帰っていいよ。バイバイ、リツカ」

無表情で手を振るココネ嬢。

俺はお菓子輸送機として扱われているらしい。……だが、そこがいい!!

こんな小さな子どもに召使いのごとくお菓子を運び奉仕する、そして持つていくたびにチクチク罵られる。

大枚はたいても買ったものが、ここにはあった。

ああ、我が桃源郷はここに……。

「はいはい、掃除の邪魔だから退いてねー」

そんな俺の至福の時を邪魔するのはミソラ嬢。

手に持つモップでグイグイと顔を押してくる。

「つて、これ！ 水！ 水すごいから！ お兄さんびちよびちよになつちやうよお！」

「気持ち悪い嬌声を上げるな!!」

ベシツ、とモップで叩かれる俺。地味に痛い。いや普通に痛い。

「ちよ、お前！ やめろつて！ いたつ、痛いから！」

べしべしと容赦なく振るわれるモップ。

それ、そういう使い方するもんじゃないから、床を綺麗にするやつだから。

「いやいや、しつこい汚れは念入りに擦らないと」

怖いっ！ 目が座っておられる!!

これは完全に殺られると感じた俺は座っていた長椅子から離脱する。

「わかったわかった！ お前にも飴ちゃんやるから！」

「いや、そんなので釣られねえよ!! あたしを何だと思つてんだアンタ！」

流れるようなツツコミ。個人的には満点をあげたい。

うそ、五十点。

「……猫？」

「どうか何だと思ってるか、と問われると。」

「割とまともじゃねえか……なんて反応すりゃいいんだよ」

「なんとも言えない反応を返すミソラ嬢。」

「そうだよね、何とも言えないよね。ごめん。」

「つていうか、シャークティーまだ仕事？ 俺、一ヶ月近くあの人に会ってない気がするんだが」

「教会を訪ねた時はもとより、魔法関連の仕事でも一切会ってない。」

「出張でも行ってるんか？」

「んー、どうにも教会関連でなんかあったらしいよ。なんでも、新しい『神父』が来るとかどうとか」

「神父。」

「……」

「いやー、ぶっちゃけ麻帆良に教会とかここだけで十分な気が……つて、あれ？ おーい、リツカ？」

「神父、てあれだよな。魔法使い関係者の神父だよな？」

「間違っても、素で大木へし折ったり、マシンガンの弾を叩き落としたり、心臓を一撃」

で破壊したり、コンクリート壁に素手で大穴開けたり……あれ、ネギま！の世界的にありえそうな感じがしてきたぞ？

いやいや、そうじゃなくて。

このタイミングでどうしても勘ぐってしまうのが、『あの破綻者』のことだ。  
言峰綺礼。

最近のスマホで打つと一発で変換に出てくるくらい有名過ぎる神父だ。

詳細は語らずともググれば出てくるくらいの有名人。

神父といったら彼というくらいには名が知られているラスボス候補。

だが、さすがにそれは出来過ぎというものだ。

いくらちびちゆき！学園があるからといってそうホイホイと関係者が集まってきたまるか。

第一、型月主人公たちと彼では致命的なほど相性が悪い。

FGOでも擬似サーヴァントっぽい感じが出てきたばかりである。

神父Ⅱ言峰綺礼というのは安直な考えである。

「おーーい、リツカーー!!!」



「聞こえてるよ、そんなに大声で叫ばれると鼓膜破れるからやめてね」

脳を震わせる大音声に苦言を呈す。

「じゃあ返事くらいしろよ……」

「うん……ちよつと神父って単語に敏感になっていてね」

FGOでも現れてしまったのが運の尽き。彼が冬木以外でも現れる可能性、それどころか擬似サーヴァントとしてどの世界でも現れる可能性が出てきてしまったのだ。

あいつが出てきてロクな展開になっただけじゃない。

「ちなみに名前とか、分かるか？」

「神父？ 苗字が、確か言峰とか言ってたような……」

はい、言峰綺礼さんですね。

あの神父の皮を被った暗殺者さんですね。

八極拳という名の人体破壊術の使い手さんですね。

つたく、まるで天啓とでも言うように型月関係者がワラワラと。

何度も言うがここはちびちゆき！じゃねえ！！

「なあ、美空。俺たちは果たして生き残れるのだろうか？」

「藪からステイックだな……どうしたよ？」

うん、とりあえずステイックは古いね。

あ、いやこの時代だと別にそうでもないのか。

2002年だということを忘れていた。

「もし……もし、お前があからさまに死地に送られるフラグが立ちまくったらどうするよっ。」

他愛ない質問。その答えに意味はない。

しかしミスラ嬢は真剣な顔で悩んだ。

「逃げる。これに限るね」

そうだよな、君はそう答えると思っていた。

たぶん、それが正解なんだよな。正直、その気になれば何処へなりとも亡命は出来そうではある。

頑張ればなんとかそれくらいはできると思う。

「……それが正解だよ。うん。お前は正しいよ美空」

「お、おう。なんかあんたにそんな言われると不安になるけど」

どういう意味だよ。

俺だつてセンチメンタルな気分になることがあるんだ。慰めてくれよ。

まあ、だからと言って逃げるという選択肢は存在しない。

俺はあえて取らない。

エリちゃんの意味を尊重する場合、きつとそれは悪手となるからだ。彼女はきつとネギたちの手助けをしたいと思うはず。

必然、マスターたる俺も側にいなければならぬ。

とうか俺がエリちゃんから離れたくない。

「はあ……」

なんだか気が重くなる。

これから始まるドタバタ死亡フラグパーティーを思うと胃がストレスで死にそうになる。

『……心配しないでマスター。あなたは私が絶対に守ってみせるわ』

不意に、霊体化したアビーが声をかけてきた。

「アビー……ありがとう」

「アビー？」

思わず口に出てしまったが、彼女は天使か何かなのだろうか？

あまりにも可愛過ぎる。

そりゃあヨグソトースも目をかけるわけだ。

「そうだ、まだお前に飴ちゃん渡してなかったな」

「まだそれ続けんのか……いらないよ」

そんなこと言うなよ、ほら、サ○マドロップだぞ？

おはじきじゃないから安心しろ。

「……じゃあ、貰つとくわ」

サ○マドロップ推しをし続けると、渋々受け取るミソラ嬢。

「んー、結構美味しいね」

「だろ？ 俺昔から飴はサ○マドロップって決めてんだ」

「リツカ」

サ○マドロップ談義を開始しようとしたところ、いつの間にか横にココネ嬢が立っていた。

相変わらず無表情だがなんとなく剣呑な雰囲気を放っている。

「リツカ、嘘ついた」

「え!?! な、なんで!?!」

冷たい声でそう告げるココネ嬢。

いつもは冷たいながらも、次に持つてくるお菓子のリクエストを混ぜたりしてきたのだが。

「まだ、お菓子ある」

そうやって指差すのは俺のサ○マドロップの缶。

振ればジャラジャラと音を立て、まだいっぱい残っていることを証明する。

「っ！ いっぱい、いっぱい入ってる！ リツカ、リツカ!!」

おお、そんな無表情で興奮されると少し引くぞ。

ただ、一心不乱に俺のサ○マドロップ缶を指差して叫ぶ彼女は見ていてほっこりした。

もっこりはしていない。

「いや、でもこれ俺のだし……」

生憎と、俺専用缶なのだ。

こいつは俺の私生活で実に役立っている。

ストレスを感じれば甘い飴を食べ、眠気覚ましにハツカを食べ。

用途に応じて様々な活躍を見せてくれる。

俺の相棒といっても過言ではない。

……エリちゃんには内緒だ。

「飴……くれないの？」

「はう!?!」

しかし、ウルウルさせた瞳で彼女に上目遣いをされると流石の俺も嫌だとは言えな

い。

「とうか可愛い。どうしよう、麻帆良製の最新デジカメ持ってきてない!!

「とりあえずパシヤらせて。そしたらあげるよ」

携帯を構え要求する。

「ぐぬぬ……リツカのオカズにされるのは死ぬほど嫌だけど、仕方ない。お菓子のために我慢する。心底嫌だけど、吐き気を催すくらい嫌だけど」

三回も言うなよ。ゾクゾクするだろ。主に興奮で。

ぐぬぬ顔を披露するココネちゃんをとりあえずパシヤる。

「うんうん、じゃあ今度はスカートを持ち上げてー」

「させねーよ!」

ミソラ嬢の鋭い平手が俺の後頭部を打ち抜いた。

パコーン、という漫画みたいな音が響いて一瞬、意識が飛ぶ。

「……あのさあ、俺まじでいつかお前のツツコミで死ぬと思うんだわ」

視界がチカチカする中、背後にいるであろうミソラ嬢に物申す。

「え、ロリっ子に殺されるなら本望じゃないの?」

信じられない一言に思わず振り返る。

そこにはキョトンとした顔のミソラ嬢。

ふざけてやがる。

ちよつと幼女にセクシー写真をねだったからつて。何も殺すことはないだろう。世の中間違つてるよ!!

「大変よ、子イヌ!!」

その後、なんとかココネちゃんのフルヌードを撮影しようとしてミソラ嬢と格闘していると、教会の扉をぶち破つてエリちゃんが現れた。

な、何を言つてるのか（ry

「どうしたんだエリちゃん、俺は今、ココネちゃんのフルヌードを撮るのに必死で」

「子イヌの性癖なんかどうでもいいの! それよりも大変なのよ!」

なにい!?! 俺の性癖をドウデモイイだど!?!

そんな、待つてくれよエリちゃん。俺は今まで君がいない間どれだけ寂しい思いをしてきたと思つてる。

その寂しさを埋めるためにy

「さらつと流してるけどウチの教会! ここウチの教会だから、扉壊しちゃダメだから!」

ミソラ嬢が何か言っているがたぶん些細なことだ。それよりもエリちゃんが取り乱すなんて一体……。

「バカレンジャーのみんなが、図書館島に行ったまま行方不明になっちゃったのよ！」  
おおっと、まさかの期末試験編か。

すっかり忘れていた。確かそんなイベントがあつたわ。

期末試験で赤点回避する自信がないバカレンジャー五人が図書館島にあるという『魔法の本』を探しに行くという今考えたら途轍もなく阿呆らしいイベント。

まあこのイベント、ネギくんは先生権剥奪、強制送還とか勘違いしてるし。

生徒も退学などという与太話を信じてしまっているわけで。

かなり学園側に踊らされてるのだけどね。

「どうしよう、このままじゃみんな退学だわ!!」

エリちゃんまでも信じてしまっている。

いや、エリちゃんは純真無垢だからね、仕方ないね。

「任せるエリちゃん、図書館島なら俺は最も詳しい男の一人だ。一緒に探しに行こう」

「子イヌ……! 子イヌならそう言ってくれと思うていたわ!

さあ行きましょう!!」

まるでブレイブのように槍を掲げるエリちゃん。



……さすがに外で槍は出さない方がいいと思うのだが。

「おうさー！」

残念ながらココネちゃんヌード写真集の撮影は今度に持ち越した。

今はエリちゃんの意味に答えてネギくんたちを助けに行こうじゃないか！

「おい、ちよ、待て！ リツカ、扉！ 扉直せリツカアアア!!」

俺は虚しく吠えるミソラ嬢の声を背に受けながらエリちゃんと共に図書館島へと走った。

美空、お前の犠牲は忘れない。シャークティによろしくな。

「着いたわよ、子イヌ!!」

エリちゃんの宣言通り、俺たちは図書館島についた。

片道十五分、意外と近かった。

「うわああ!!」

……なぜか、遠くの方で悲鳴と爆発音が響いているが、俺には関係ないことだろう。

あと、なぜかシスターシャークティの怒声が聞こえてくるけどこれも関係ない。

あと、教会から抜け出すのに必死で忘れていたが。

このイベント、別に俺が絡む必要はない。だってこれ、学園長が仕組んだ話だから。ネギ君の正式な教師への昇格試験として2―Aの学年最下位を阻止するミッションを与えた学園長だが、バカレンジャーのあまりの頭の悪さを考慮して、『魔法の本』の噂を聞いてやってきたバカレンジャーたちを勉強させるために図書館島地下に叩き落とし、勉強道具一式と生活用品一式まで揃えて勉強させる、という計画を立てた。

というのが今回のイベントの概要。

そして、学園長の目論見通りしつかりみつちりと勉強した彼女らはなんとか地下を脱出して期末試験に臨み。

見事、学年一位に輝いてしまうという顛末。

徹頭徹尾、俺が出張る必要性がない、皆無である。

しかし。

「さあ、子イヌ、行きましょう！ 私たちでバカレンジャーを助けるのよ!!」

ノリノリなエリちゃんを前にして、ここまできて「必要ないから帰ろ」なんか言えるわけもなく。

「ああ、やってやろうぜ!!」

とりあえず図書館島内部へと入るしかない俺なのであった。

素直に裏口から入り、地下を目指す。

一回行ったことがあるのです。道は知っている。途中のトラップもエリちゃんは元から平気だし、俺もアビーの手助けで足止めされることもなく地下に到達した。

「はい、じゃあこの単語の意味が分かる人」

本棚の陰に隠れながら何やら集まっている人影を観察する。

教室を模した作りの一角には、綾瀬夕映を始めとしたバカレンジャーの面々。

何気に俺も初めて見るメンバーがいた。

赤に近いピンクの長髪をツインテールにした活発そうな女の子・神楽坂明日菜。

同じような髪色で二つ結びの穏やかそうな女の子・佐々木まき絵。

中学生には見えない高身長の子目女子・長瀬楓。

そして、中国拳法という今もつとも聞きたくない単語を得意としている褐色美少女・

アルヨ。……違った、くーふい古菲。

これにデコ助を加えた五人がバカレンジャーと言われる集団である。

そして、それらの前、教壇に立って授業を行なっているのが、赤髪の少年、ネギ・スプリングフィールド。通称・ネギ先生である。

「おお、やはり原作主人公は違うな。オーラが出ている。俺のようなパチモンには真似できないぜ」

「ちよつと、こそこそしてどうしたのよ子イヌ……つて、あー！！！」

俺の後ろからネギくんたちを見たエリちゃんが唐突に叫んだ。

……いやあ、これはバレバレですね。

「やつと見つけたわよ、バカレンジャー!!」

バカはお前だ。この時は素直にそう思ってしまった。

だって、何のために俺がコソコソしていたと思っている。

バカなのか、やはりエリちゃんはバカなのか!?

でもそこがいい。

「わっ！ え、エリザベートさん!？」

えらい。慌てながらもよくエリちゃんの名前を言えたねネギくん。

というかバートリ・エルジエーベトつて英国で有名なんだけどどう認識しているのだ

ろうか、ネギくん。

「エリちゃん!? なんであんたがいるのよ!？」

一番困惑気味なのは明日菜嬢だ。彼女は実にいいリアクションをしてくれる。ネギクラスでのリアクション担当だ。

他の面々はそれぞれ「へー」みたいな顔であまりにも驚きが薄い。

まき絵嬢を見習え、うつすらと汗を浮かべて実にお手本通りの驚きを表現しているぞ。

よし、現実逃避終了。

「もー、探したんだからね。……ほら何してんの子イヌ、こつち出てきなさいよ」

ちよ、袖引つ張らないで。……って、触ってる!? エリちゃんが俺に触っている!!!?

「あれ、その人……どこかで」

引つ張り出された俺は、ネギくん含めてバカレンジャー五人組にしつかりと注目されていた。

そりやそうだ、突然、エリちゃんが連れてきた男だもんな。怪しいもんな。

「どうも。藤丸立華です」

「ゴ、ゴ、ゴ丁寧に、僕はネギ・スプリングフィールドと……」

お辞儀をすると慌ててネギくんも返してきた。

「何馬鹿正直に自己紹介してんのよ!？」

明日菜嬢に叱られるネギくん。大丈夫、君は間違っていないよ。

明日菜嬢の反応も正しい。

「え、エリちゃん。その人と、どういう関係なの?」

そんな中、恐る恐るエリちゃんに尋ねるのはまき絵嬢。

なんだかんだ肝が座っている子だ。

「子イヌのこと? 私のプロデューサーに決まってるじゃない」

「ぶ、プロデューサー。本当にいたんだ……」

なんだか彼女たちの間で、俺はいつの間にか都市伝説のような扱いを受けていたようだ。

「まあ、そんな感じのことさせてもらってます。『あのライブ』の時も一枚噛ませてもらいまして」

「ちよ、あれ仕組んだのあなたなんですか!？」

驚きと怒りを込めた声を発する明日菜嬢。そうだよ、俺がやったんだ。エリちゃんのライブ聴きたさにな。

反省してる、だが後悔はしていない。

ごめんね。

「それよりも、早くあの子どもたちを連れてー」

「おおっと、そういうえばエリちゃんも一緒に勉強したくてここに来たんだったよね？  
そうだよね？」

「は？」

「……ちよつと、こつちきて」

察しの悪いエリちゃんを本棚の裏に招いて密談を開始する。

「エリちゃん。ずっと黙ってたんだけど。これ学園長が仕組んだことなんだ」

「えー!？」

大きい大きい、声が大きいよエリちゃん。

慌てて口を抑えるエリちゃん。

「でね？ これ別に俺たちが助けなくても上手くいくんだよ」

「そ、そうなの？ よく分からないけどそうなの？」

だよね。俺もなんて説明したらいいか。アホらしすぎて説明する方が恥ずかしい。

とにかくここまで来てしまった以上は引き返すわけにはいかない。

エリちゃんには俺と口裏を合わせてもらう。

「とりあえず、エリちゃんと一緒に勉強しようとしてここに来て地下に落ちちゃった設定で  
行くから、OK？」

「お、おーけー!」

少し心配だが、とにかく話し合わせてくれればいいと言っておく。

そうして本棚の裏から出てきたのだが、みんな疑惑の視線を向けてきた。

だが、まだ大丈夫。彼女らはバカだ。なんかノリで誤魔化せる。

「それじゃあエリちゃん、みんなと勉強頑張つてね」

「う、うん。私頑張るわ!」

それは果たして勉強に対してなのか、それとも俺と口裏を合わせることに對してなのか。

たぶん後者だ。

「それじゃあ、ネギ先生。私も授業の手伝いをさせていたできたいので少しお話よろしいですか?」

「え? あ、分かりました!」

未だ二巻の頃のネギくんは実に素直だ。

こちらに走り寄ってくる。

大丈夫だよお、僕はいい高校生だからね。

「ちよつとネギ! 絶対怪しいわよ!」

そのあとを追うのは明日菜嬢。作戦通りだ。



未だ未熟なネギくんのサポートをするのが彼女である以上、共に来ることは把握済み。

さて、とりあえず素性をバラしておかなければ。

明日菜嬢を除くバカレンジャーの面々から距離を取ったところで俺は口を開いた。

「……さて、ネギ・スプリングフィールドくん」

「は、はい」

「はじめに言っておくと、俺は魔法関係者だ」

魔法生徒でも教師でもないが、学園長との関わりは深い。あと高畑。

「ええ!? あれ、じゃあエリちゃんも!?!」

「その通りだ明日菜くん。彼女は俺の使い魔、という扱いになっている」

「つ、使い魔!? でも彼女、エリザベートさんはクラスの皆さんと変わらないように見えますが」

ほほう、あのエリちゃんをして普通に見えてしまうとは。

2—Aというのは思った以上に魔境らしい。いやあ、高校生で良かった。

「まあね、彼女は英霊という普通の使い魔よりもずっと高位の精霊なんだ。端的に言えば後世の信仰によって人から上の霊的存在に昇華したものだ。それが英霊と呼ばれるものなんだ」

「昇華……それって、つまり英雄と呼ばれる人たちのこと」

やはり頭がいい。これだけの情報ですぐに辿り着く。

「その通り。君が一番分かりやすいのがアーサー王とかかな」

ただし女性だが。

まあ、この世界では普通に男かもしれないし、そもそも呼んでいないので分からない。

「アーサー王……いや、そうしたらエリザベートさんは！」

もうそこまで思い至るか。

さすがに察しが良すぎるぞネギくん。直前のエリちゃんの鈍感っぷりを見習ってほしい。

「ああ、彼女はそのまま本名を名乗っている」

「エリザベート……バートリ・エルジーベト!!」

「なになに、なんか凄い人なの？ 全然話についていけないんだけど」

明日菜嬢が寂しそうに言う。

だがもう少し待ってくれ。詳しい話はネギくんから聞いた方がいいだろう。

『血の伯爵夫人』とも呼ばれているね。

ただ、彼女は少々特殊だね。確かにエリザベート本人なのだが、伝説に聞くような残酷性はかなり鳴りを潜めている」

「え……？」

「つまりね。彼女は死後に成長したんだ。まあ、何が言いたいのかと言えば、『彼女は安全で、どうかこれまで通りに接してほしい』というだけのことだ」

それだけは伝えておきたかった。

後世で色々と語られる彼女だが、少なくともエリちゃんは過去の罪を自覚してそれに向き合おうとしている。

だから、個人的にはそこでとやかく言っただけで欲しくないのだ。

「……分かりました」

「ありがとう、その言葉を聞けてよかった」

「任せてください。エリザベートさんも僕の大切な生徒、絶対に守ります！」

おっと、エリちゃんのボディガードは俺の役目だけ？

いや、エリちゃんが俺のボディガードなのか。そっか。

「……じゃあ、俺は授業に使う参考資料を見繕っておこう。ああ、大丈夫、今の君たちの状況は概ね把握している。」

では、ネギくんは明日菜くんに事情説明をしておいてくれ」  
そう言つて足早に本棚に向かう。

いやあ、まず最初に救助を頼まれなくてよかつた。

誤魔化すつもりではあつたが先にこれを話せて良かつた。

まあ、今はまだ土曜日だ。これから存分に勉強の時間は作れる。

二回も中学生を体験した俺の手腕、存分に振るわせてもらおうとしよう。

## 小さな差異

「……なぜ、リツカがここにいるのでしようか？」

本棚を漁っているとデコ助が声をかけてきた。

怪訝そうな顔で。

「ん？ 言っただろ、エリちゃんのプロデューサーだつて」

自己紹介したと思うのだが。

「いやおかしいでしょう！ なぜプロデューサーが中学生の担当アイドルとこんな場所まで勉強に来るんですか！」

「ご最もな意見で。」

「違うなゆえつち。プロデューサーだからこそ付いてきたのだ」

「は？」

「プロデューサーとは、アイドルをサポートする人間だ。それはただ仕事の斡旋、営業をすればいいってだけじゃない。」

エリちゃんという学生の身分でアイドルを務める子にこそプライベートにおけるケアも必要、必然、学業におけるサポートも必要となる。

現に346プロダクションでは、その年代に合わせて遊園地に連れて行ったり晩酌に付き合ったり、もちろんだが勉強に付き合ったりもしている。

果てには、アイドルの恋愛欲を紛らわすために擬似デートをー」

「……いや、騙されませんか？　なにそれらしい理論付けで逃げようとしてるんですか？　ぐ、こいつ意外に知恵をつけて来やがった。もちろんだがこの世界に346も765も存在しない。後世になれば設立されるのかもしれないが2002年の日本にはない。全国のPは泣いていい。

あ、パラケルススさんはご遠慮ください。

まあ、ゆえっちはバカレンジャーの中でもかなり聡い。

それどころか非現実に対する対処も他のクラスメイトよりも早い。

頭の回転は早いのだ、彼女は。

それが勉強に向かないというだけで。

「あー、まあエリちゃんとは元々知り合いだったんだよ。

で、お前達が行方不明だっていうから一緒に探しに来たわけ。一応お前には恩があるしな」

「あ、そ、そうなのですか？　それは申し訳ないことをしました……」

少し気まずそうに俯くゆえっち。

言った手前、気にするなつてのもおかしな話だがー

「特に気にすることじゃない。俺に関しては空気と思つてくれて構わないから」

「そ、そんな……私のせいでこんな場所まで来ていただいて、まだ帰れるかも分からないのに」

まあそうだよな、普通に授業してる方が神経図太いというか、鋼メンタルというか。普通は勉強なんぞよりも脱出を優先する。

「ほう、ではいつぞやの約束を果たしていただきたいのだがね」

「? なんの、ことですか?」

不思議そうに小首を傾げるゆえつち。

忘れたとは言わせんぞ。

「この前の自販機での一件、まだ約束を果たしてもらつてないのだが」

「なっ?! ま、まさか本気で言つていたのですかあなた!?!」

顔を上気させて怒るゆえつち。まさか冗談だとでも?

俺はいつも全力全開、お前の全裸お散歩を今か今かと待ち続けていたのに。ゆえつちときたらガン無視スルーなんでもんな。

正直、痺れを切らしています。

「ほら、今ならネギ先生とクラスメイト五人に見られるだけで済む。ダメージは少ない

ぞ」

「いや、大ダメージですよね!? 身内に知られるのが一番ダメージデカイですよね!」  
いやそれは間違いだぞゆえっち。

「公然猥褻で前科を食らう方がよっぽどダメージがでかい。なにせその後の人生全てで『変態』という業を、公に晒しながら、背負い続けなければならなくなるからな」

履歴書以前の問題、〃やっていようとやってなからうと〃、『実刑』が降ってしまえば  
そいつは『変態』なのだ。

ムシヨに入れられれでもしたら目も当てられない。

経験者は語る。

「なんか、妙に説得力を感じる言葉です……もしや、あなたー」

「おっと、俺はまだ捕まったことはないぜ。というか法に触れることはしていない」  
性に関する法律にはな。

暴行とかは知らん。魔法使いさんたちの法的に〃得体の知れない使い魔を連れた高校生〃がどれだけ手を出すことを許されてるのか。

神のみぞ知る。

「まだって何ですか、まだって……」

胡散臭そうに見つめてくる。そう見つめるな、照れるだろ。



「というかそんなので誤魔化されんからな。早く全裸お散歩始めるぞ」

「やらないですよ!」 なに当然のように催促してるんですか!」

「おいおい、そりやないぜゆえっち。そうなると、もうー」

手をワキワキさせてゆえっちににじり寄る。

彼女は反射的に身の危険を感じたのか己が身を抱きしめながら後ずさる。

「直接的手段に出るしかなかろうて!!」

一気に駆け出す。

ちなみに俺の短距離のタイムは7.20。しかし、ロリツ子を前にした時、俺の身体は限界を超えてー

「ハイヤー!!」

「ぶほお!」

藁人形を使って速度を上げようとしたら唐突に俺の腹に飛び蹴りが突き刺さった。

何が起きたのか理解する間も無く吹っ飛ばされ壁に激突する。

「ぐ、はっ!」

ばたり。

訳も分からぬまま俺は地に倒れ伏した。もはや指一本動かせない。

よもやエリちゃんといチャイチャするとい夢を叶えることなくこの世を去ること

になろうとは。

無念。

「アイヤー、危なかったアルね夕映」

「くーふえ!!」

俺が立っていた場所には道着姿の拳法少女・古菲が立っていた。

そのほどほどに豊かな乳房に、ゆえつちは泣きながら飛び込む。

「ぐす、こ、怖かったですう……」

「よしよし、もう大丈夫アルよ。変態は始末しといたアル」

咽び泣くゆえつちの頭を優しく撫でる古菲。

中国拳法の使い手により変態は滅んだ、世は平和を取り戻したのだ。

「……なんて言うと思ったか小娘どもめ!!」

「まだ生きてたアルか!？」

「いや、さつきからずっと寒いナレーションを一人でぶつぶつ言ってたです」

寒くねえよ、俺の心はいつでもぬつくぬくだ。

あとガチで殺す気だったのか君。

危うく意識を飛ばしそうだったがミソラ嬢に日々殺されかけていたおかげで大事にならず済んだ。未だ藁人形も効力を保っている。

俺はまだ、戦える！

「見誤ったな拳法少女……変態の底力を舐めるな！」

「変態の底力……恐れ入ったアル。まさか必殺の一撃を耐え抜くとは」

やっぱり殺す気だったのか。

これ、一応少年漫画だよな？　なんでこんな一般人に殺意満々なヒロインがいるの？

「いや、一般人では無い。そう、俺は変態。紳士のマナーを破った恐るべき変態！」

「お、恐るべき変態？」

「クク、変態とは常、自らの欲求と良心の狭間で揺れている。

これを制御できるものの変態紳士と呼び我々変態は畏れ敬う。……だが、この欲求を抑

えることなく解放した時！

我々変態は真なる力をー」

「長いアル」

鳩尾に一撃。俺の意識は一瞬で刈り取られた。

「で、こいつどうするよ、ネギ?」

気がついた時、俺は何処かに吊し上げられていた。

ギッチギチに身体を拘束された俺の前で明日菜嬢が鋭い視線を向けている。……ア  
リだな。

「えーと、この人、変態さんなん?」

先ほどはお手洗い（場所はヒミツ）に行っていたこのかお嬢様も合流していた。

初対面からこの状態である。第一印象は最悪であろう。

間違いない。

「ええと、本当にそんなことしたんですか、この人?」

気まづげにゆえつちに問いかけるネギくん。

「ええ、この人は私に全裸・首輪付きで連れ回そうとしていた紛うことなき変態です」  
断・罪。暴かれる罪にリツカはただただ黙ることしかできなかつた。

でも首輪は言ってなくね?

「あと、ファイ○トフ○ックやス○トロプレイも要求してきましたです」

言ってねえよ! どんだけアブノーマルな性癖だと思ってるんだ!!

ていうかそれお前が言ったことだろ！

俺は健全なロリコンだ!!

「俺は健全なロリコンだ!!」

「え……」

思わず口をついて出てしまった言葉に、明日菜嬢が凍りついた。

いや待て、もし高畑だったら許したのかお前は？ 年齢的にはそっちの方がアウトだろ。

でも許すだろうなあ、致し方なし。

それとこれとは話が別なのである。

「うわあ……」

「変態でござるな」

「極刑しかあり得ないアル」

まき絵嬢、楓嬢、そして古菲。三人ともに軽蔑の視線を送られた。

「うん、これは変態さんやな」

おまけにお嬢様まで。ニコニコしているが何処から持ってきたのかその手にはフライパンが握られている。いやほんと何処にあったのそれ？

「う、嘘よね？ 子イヌ、お願いだから嘘って言ってよ!!」

でも必死の形相で涙ながらに訴えるエリちゃんはかなり心にきた。いや、ガチな方で。

まさか、ただこちよこちよで済まそうとしただけでこんな大事になるだなんて。誰が予想できただろう？

まあ、殆ど俺の言動のせいなのだが。

「スカ……？ とかってなんのことですか？」

一人だけポカンとしているネギくんが眩しい。

こんな純真無垢な子どもが今時いるだなんて。

2002年という時代を考えても珍しい。

「とりあえずコイツは放置しとくしかないわね」

「まったく、無駄な時間を費やしたアル」

「ニンニン」

「なんとというか、可哀想な人だったね……」

「うちも変態さんはお断りやわ〜」

バカレンジャー+αから物凄い侮蔑の感情をひしひしと肌を感じる。

「子イヌ……」

一人、俺のもとで静かに泣くエリちゃんに俺の心もそろそろヤヴァイ。

精神を十七分割されそうだ。辛い。

「……」

そんな俺のもとへトコトコと歩み寄ってきたのはゆえつちだ。

「……なんだ、笑えよ、この無様な変態の末路を。俺は終わりだ、こんなにもエリちゃんを悲しませて。」

ただ、おふざけ感覚で変態行為をした結果がこれだよ。

……なんで、俺はもつとエリちゃんのそばにいてやれなかつたんだ」

「いや、これは使い道がありますね」

涙を流す俺に、ゆえつちがニヤリと笑った。

「はい、じゃあこの問題を解いてください。制限時間は十五分。解けなかった場合は——」

あちらの変態が解き放たれます、とネギくんに代わりゆえつちが指を指すのは俺。

俺は今、なぜか置いてあつた動物用の檻に入れられている。

「こ、これは一大事、是が非でも解かねば」

「……（古菲がアルを付け忘れるとは、これは侮れない御仁でござるな変態殿）」

「うわわわ、早く解かないと……！」

「なんでウチまで〜！」

「く、こんなところで変態の餌食になるわけにはいかない！ 高畑先生を射止めるまで

は!!」

射止めた後なら味わつてよろしいと？

ほう、俄然やる気が湧いてきた。

俺の変態。パワーも最高潮に達している。

「な、なんか変態さんがフーフー言ってます……」

「ご心配なくネギ先生。我々は奴と同質の檻に守られてるです。奴の解放はこのボタンをポチッと押すだけです」

変態も使いやすいですよ、とゆえつちはこちらをチラ見して宣う。

檻に囲まれた教壇というシユールな光景を物ともしないその自信。素直に感服する。だんだんと俺の扱いが分かつてきたみてえじゃねえかゆえつち。

もうデコ助とは呼ばない、お前を俺のご主人様と認めてやろう。



「ああ、もう五分切ってます！ 明日菜さん!!」

ネギくんがあわあわしながら告げる。

「わ、分かっているわよ！ ああ、早く解かないと!!」

「明日菜早く！ 変態がウォーミングアップを始めてる!!」

「急ぐアル、明日菜!!」

「フライパン、もしもの時はウチのフライパンを使うんや!」

先に問題を解き終えたバカレンジャー+ $\alpha$ から熱い声援が送られる。

それを聞きつつも俺は完全なる変態RPへと移行していた。

「あ、明日菜さん!」

「うう……あ、と、解けた!!」

ストッププウオツチの針が頂点を指す直前、バン! とネギくんの前に提示される明日

菜の解答案紙。

苦虫を噛み潰したような顔でストッププウオツチを止めるゆえつち。どうにも彼女は

変なスイッチが入ってしまったているらしい。

「ふむふむ……す、すごい、正解です明日菜さん!!」

まるで自分のことのように喜ぶネギくん。それを見て明日菜の表情もペア、と明るくなった。

「やったー!! これで全部の問題を終えたわね!？」

「はい! 皆さん、これ以上ないほどに学力を上げています！」

これなら期末試験も安泰でしょう」

ネギくんからのありがたいお言葉にバカレンジャー+αはようやく安堵の表情を見せた。

そんな中――

「ふふん、私の名案に感謝するです」

ゆえつちは誇らしげに無い胸を張った。

「はい! 本当にありがとうございます！」

じゃあ次は綾瀬さんの番ですね!!」

「え?」

ネギくんの言葉にフリーズするゆえつち。

バカレンジャーの中でゆえつちを除く面々は、俺という恐怖の変態を背後に感じながらも設問を解くという試練を見事乗り越えた。

復習も兼ねて何度も同じ範囲の問題を出して、それらを完璧に解いて見せたのだ。これほどの集中力向上に繋がるとは俺も思っていなかった。

しかし、最初から先生側に立っていたゆえつちは一切勉強をしていなかった。

「さあ、綾瀬さん、あちらの席に」

「え、あ、いや……」

ニコニコと一切の悪意を感じない笑みで席に誘うネギくん。子どもはいつだって残酷である。

「た、助けてくださいみなさん!!」

涙ながらに懇願するゆえつちに、しかしバカレンジャーは救いの手を差し伸べることはなかった。

「が、ガンバだよ、夕映ちゃん!」

「この試練はなかなかになるでござる」

「私の普段の修行にも引けを取らないアル!」

「言い出しつぺのあなたがやらないでどうするの?」

「ごめんなあ、ウチにはどうにもできんのだや」

これまた熱い声援を送るバカレンジャー。そんな彼女たちを見てガクリと膝を折るゆえつち。

「そ、そんなあ……」

まさか想定していなかったわけではあるまい。

もしそうなら詰めが甘い。

因果応報というのは現実に起こり得る現象なのである。

俺は静かにウォーミングアップを再開した。

「綾瀬さんはずっと授業を見ていたので上達は早そうですね、じゃあ制限時間は十分に設定しておきます！」

本当にニコニコといい笑顔をしながらストップウォッチを設定するネギくん。たぶん、ゆえつちに絶大な信頼を寄せているのだろう。

彼女なら大丈夫だ、と。

「お、お慈悲を……!?!」

「それではスタートです！」

ならば、俺も全力で役目を全うすることにしよう。

さあ、勝負だ、ゆえつち!!

結論から言つて、バカレンジャーの勉強はこれ以上ないほどに上手くいった。

気づけば原作通りに徹夜での勉強会となったが結果として皆の学力は原作通りに上がったようなので安心である。

「いやあ、助かりました藤丸さん」

「なに、俺は俺にできることをしたまでだ。これは紛れもなく君たちの努力の賜物だよ」  
「簀巻き状態でそんなこと言われても素直に喜べないのです」

俺は今、檻から解放されている。が、野放しには出来ないという皆の意見によりロップのような何かでぐるぐる巻きにされた状態でエリちゃんに運ばれている。

「……」

「本当にごめん。もうこんな暴挙には出ないから、許してほしい」

しかし、先程から常々謝り続けている俺をガン無視しているエリちゃん。

どうやら本当に怒らせてしまったらしい。

これまで平気だったからと調子に乗りすぎた。

俺は藤丸立華であっても最後のマスターでは無いのだ。彼のような眩し過ぎるほど綺麗な人間ではないのだ。

そこを履き違えてはいけなかった。

「こんな状態で言うことじゃないのだけど、俺が本当に愛しているのはエリちゃんただ一人なんだ」

「浮気する男の常套句ですね、聞き流して良いですよエリちゃん」

ゆえつち、ちよつと黙っててほしい。

「頼むよ……俺、エリちゃんじゃなきゃダメなんだ。他の誰かじゃなくて、エリちゃんしかあり得ないんだ。

お願いだ、俺を見捨てないでくれ」

ホロリと涙が溢れる。

思えば、ここ最近、エリちゃんと過ごす時間が減っていた。

原作だ、英霊だ、などと他の事柄に気を取られすぎていた。

中三から二年間も俺と共にいてくれた彼女を蔑ろにしてしまっていた。

全ては過ぎたこと、けど、それでも俺はエリちゃんと共にいたい。

「……本当に、私が一番大切なの？ 欲しいの？」

しかし、女神は降臨した。否、すでにここにおられた。

「っ!! 欲しい! あ、いや一緒にいられたらそれで十分なんだ!! どうか、どうか最後の慈悲を!!」

「し、仕方ないわね。子イヌだったら本当に私がいないとダメダメなんだから」

ツン、とした態度で顔を背けるエリちゃん。

ああ、何ということだ。俺は、俺はエリちゃんに許された!!

こんなしょーもない男を、彼女は見捨てないでいてくれた。とても不愉快だろうに、潔癖症の彼女が、俺を、側に置いてくれると!

……俺には本当にもつたいないサーヴァントだ。

「ありがとう……ありがとう、エリちゃん」

どうしよう、涙が止まらない。いや無理に止めることはない。

この喜びを素直に感じよう、そして脳裏に刻みつけるのだ。

俺は改めて生涯をエリちゃんに捧げると誓った。

「おかしいですね、どう聞いても駄目男の言い訳にしか聞こえないのに」

「すっかりデレてるね……」

ゆえつちとまき絵嬢の言葉が痛い。

ぐうの音も出ないほどの確な発言だから。

「ま、まあ今の暮らしも悪くは無いし? 子イヌが本気でロリコンだなんて思っていないけどね」

……。

「そそそ、そうだよ。ろ、ろり、ロリコンなんて、そんな変態的な趣味が、おお俺にあるわけないだろ。ジョークだよジョーク！」

「ポーカーフェイスは完璧なのに噛み過ぎですね」

「うん、残念なイケメンって感じだよね」

まき絵嬢の言う通り、ガワはいいのだ、あくまでガワは。

事ここに至り、俺は並行世界で戦う藤丸立華ご本人に非常に申し訳ない気持ちになった。

ほんと、〃他人のガワ〃で失礼な真似しちやダメだよね。

「じゃあ皆さん、一応これまでの復習をもう一度しておきましょうか」

「あ、ちよつとだけ待つてネギくん」

準備をしつつ告げるネギくんにまき絵嬢が待ったをかけた。

ほら、あれだよ。ここ二日間お風呂に入っていなかったから。

「あ、なるほどアルね。私も時間が欲しいアル」

意外に気の利く少女、古菲が手を挙げた。

「そうですね、そろそろ休憩時間にしましょうか」

ネギくんの一言により女子たちは一斉に水辺へと駆け出した。



「どうしたの、エリちゃんも行きなよ?」

「え、でも……子イヌが」

気まずそうにこちらを見つめるエリちゃん。

察するに俺が簀巻き状態なのに自分が水浴びに行くことを戸惑っているようだ。

なんという気遣い、月の聖杯戦争の頃には見られなかった細やかな気遣いが出来るようになっていたとは。

「ありがとう。でも、俺はいいんだ。これは言うなれば俺の罪、その贖罪と見ていい。それよりもエリちゃんが楽しめないのはもつと嫌なんだ」

俺の痴態の末路、それが簀巻き。

なんだかんだ言って、最近は俺の方がエリちゃんを振り回してしまった感があるからね。

ここらで息抜きの一つでもしてもらわないと。

次の休日は二人でどこかへ遊びに行こう。

「……うん、子イヌなら大丈夫よね。じゃあ私も水浴びしてくるわ!」

そう言ってエリちゃんは元気にみんな元へと走っていった。

一瞬、微笑ましげな顔で俺を見てから。

「……ああいうところなんだよな、ほんと」

俺もこれからはもう少し頑張らないとな、色々。

とりあえずは遠坂に奪われた本の奪還から開始せねば。

いや、まあ、俺よりも魔術に詳しい彼女が持っていた方がいいとは思うけどね。

「本当に、仲がよろしいんですね」

簀巻き状態で地面に横たわっていると、おもむろにネギくんが話しかけてきた。

そういえば彼とはしっかりとした自己紹介をしていなかった。

主に魔法関連について。

「時にネギくん」

「はー？」

俺の学園での立ち位置というのもしっかり説明しておくべきだろう。

「昨日、俺が魔法関係者であることは語ったと思うが、俺は魔法生徒というわけじゃない。  
い。

厳密には雇われに近い身でね、魔法関連の事件に協力する代わりにこの学園において  
もらってる」

「へえ、そんなんですね。じゃあ以前はどこかで魔法を学ばれたんですか？」  
おっと、そういう質問が来るか。

「あー、ぶっちゃけ魔法に関しては専門外だ。というか知らん」

「ええ!!」　じ、じゃあどこで魔法のことを？」

そりゃあ学ばなくても存在を知る機会なんて数え切れなくらいあるだろうよ。

ただ、俺に関してはその限りではないが。

「なんとというか、俺は特化型でね、使い魔召喚専門というか。正直俺の価値はエリちゃんが大半だよ。学園もそう見てる」

あくまで俺という個人ではなく、エリちゃんやアビーという英霊。加えてそれらを召喚できるという特異性をこそ学園は注視している。

極端な話が、英霊とそれらを召喚・操る術さえ剥奪されれば俺は用済み、魔法の存在を知っているだけの一般人、最悪の場合、英霊や魔法に関する機密のために消されるだけの存在だ。

これが学園と俺の関係を複雑にしている。

俺単体ならどうとでもできるが、仮に俺を消した場合は英霊が野放しとなり十中八九復讐に来ると考えられている。

英霊単体にしても高畑や学園長レベルの実力者でない相手ですらならないうえに、

エリちゃんはともかくアビーは正体不明。

学園側は手を出せない。

対して俺も、社会的立場としては学園側よりもはるかに低い位置におり、仮に学園側から追い出されでもすれば味方は実家の一般人両親しかおらず、機密のために刺客を差し向けられでもしたら目も当てられない。

故に、学園側に取り入る必要がある。

つまり、学園は俺に手は出せず、俺も学園に逆らうわけにはいかない。

互いに利害の一致した状態での協力関係、共生関係となっているのだ。

だが、今のネギくんに語ったところで意味はない。

「……まあ、単なる傭兵みたいなもんさ」

「よ、傭兵ですか……」

学園に雇われた傭兵。まるでアニメや漫画のような設定である。

いや、魔法とかある時点でお察しどころかぶつちやけこの世界そのものが漫画なんだけど。

そんなこんなネギくんと交流を深めているとー

「キヤーーー!!」

水辺の方から悲鳴が聞こえてきた。

……そういえば、このタイミングで学園長が入ったゴーレムが襲撃してくるんだっ  
た。

なにぶん、十年以上も前の記憶なのでそこらへん曖昧なのだ。

あと、すごくどうでもいいがネギくんと全裸の女子たちが戯れるサービスシーンが、  
簀巻きの変態との会話でカットされてしまった。

許せ、ネギ。

「この声は、まき絵さん!？」

声でわかるとかすげーな。まあ、色々と個性的なクラスだけどさ。

「あ、でも、藤丸さん……」

今すぐにも生徒もとに行きたいが、此の期に及んで変態の身を案じてくれるネギく  
ん。なんて優しい子なんだ。

「案ずるな少年、俺はこのままでも行ける!!」

そう言つて地面を転がって移動する俺。

「あ、ま、待ってくださいいー!」

後からネギくんも追いかけてくる。

目指すは水辺、大体的見当はついているので一目散に転がり進む。

……運良く行けば彼女らのポロリも見れるかもしれないからな。

ゴロゴロと高速で転がっていると、ようやく現場らしき場所が見えてきた。女子たちは布一枚だ。これでもかなり満足してしまう。

いやあ、眼福眼福。

そのまま一気に転がり進む。ていうか意外と痛いな。

「とおーうー！ ぶほっ！」

斜面を利用して勢いよく飛び上がったのだが、なぜか古菲に叩き落とされた。勢いよく水面に落ちる。

着水。

「いぶあ!! いぼいぼ!!」

い、息が!! 簀巻きなので泳ぐこともできずひたすら身体を捻ることしかできないまま沈んでいく。

「よっつ」

だが、我らが救いの女神エリちゃんやんが男らしく俺を持ち上げてくれた。

その姿はさながら大魚を抱える釣り人のよう。

「び、ピチピチしてる……」

「ゴーレムに捕まっているまき絵嬢も俺を見てなんとも言えない顔をしている。『な、何をしとるんじやお主……』」

心なしかゴーレムもげんがりしているように見える。黙れぬらりひよん!

元はと言えば貴様のくだらん計画のせいで俺はこんな目にあつてんだぞ!! (八当た  
り)

「すまんエリちゃん、拘束を解いてくれ!」

「任せて!」

二つ返事で頷き、俺を縛る縄をマイクスタンド型の槍で引き裂く。

解き放たれた俺は一回転して着地、もとい二本足で着水する。

「へ、変態が解き放たれたアル!!」

「バカ言ってる場合か、早くまき絵嬢を!」

俺の言葉にハツとした古菲は一瞬でゴーレムとの間合いを詰め、その巨体に拳を叩き込んだ。

「よっ、と」

ゴーレムが緩んだ隙を突いて今度は楓ちゃんがまき絵嬢を取り返す。

忍者の歩法はやはり常識はずれである。

というか忍者なのにニンニン言うなよ、バレバレだよ。忍べよ。

「あ、本!!」

その最中、ゴーレムの首元に置かれた『魔法の本』に気づいたまき絵嬢が、どこから出したのか新体操用のリボンを器用に操って本を篡奪する。

『フオ!!? 本が!?!』

ゴーレム改め学園長もワタワタと慌てている。

いや、ジジイのそんな姿は誰も求めてねえ。

「よし、今こそ日頃の恨みを晴らす時だな。エリちゃん、俺らでこの古いぼれを畳んじまうぞ!!」

よくよく考えたら俺が原作云々で四苦八苦してるのも全部、このジジイがエリちゃんをネギクラスに入れてしまったからに他ならない。

今まで二年間我慢してきたが、それもここで終わりである。

「ネギくん、ここは俺たちに任せて君たちは脱出口を探しに行け!」

「じ、じゃあ僕もー」

「ばか、お前まだ使えないだろう!」

思わず荒っぽい言い方になってしまったがネギくんも自分が『三日間魔法を封じて』いるのを思い出したようだ。

実は彼は、図書館島に来る前のいぎこぎで自ら魔法を封印しているのだ、詳しくはネ



ギま！二巻を読んでね！

『フオフオフオ、無駄じゃよ、歩いてここを抜け出すには三日はかかるのじゃから』  
隠す気のない喋り方でゴーレムが語る。

というかそれならなぜこんな場所に誘い込んだのか、それとも自分の魔法で送り届けるつもりだったのか。

ご乱心期の学園長の迷惑やいかに。

「いいからさっさと行けネギくん！ エリちゃんなら俺が責任持つて届けてやるから心配するな！」

「そうよ、ネギ先生！ 私と子イ又ならこんなへなちよこエネミー、チヨチヨイのチヨイよ！」

実際そうなのだから他に言いようがない。

学園長が中の人とはいえ相手はゴーレム、エリちゃんが本気を出せば一撃でスクラッブだ！

「……わかりました、必ず、また会いましょう!!」

涙を飲んで駆け出すネギくんを確認して、俺はゴーレムに視線を戻した。

まあ、ぶっちゃけネギくんがいると色々やり難かったというのが本音ではある。

『というか、お主、こんなところで何してんの？』

正論ありがとう、しかしお前は許さん。ここで会ったが百年目、ドサクサに紛れて暗殺してやるわあ！

「何気安く話しかけてんだゴーレム！ 貴様なんぞ知らん、やってしまえエリちゃん!!」  
「OK！ 久々の戦闘だから、昂ぶるわ!!」

好戦的な笑みを浮かべるエリちゃん。

その顔は加虐精神を刺激されているようにも見える。

一応、サドだからなあエリちゃん。

というか、エリちゃん水浴び出来なかつたんだね……幸運Bもあるのになんてついてない。

それもこれもこのゴーレムのせいである。

「よし、プランBで行くぞ!!」

AMSから光は逆流しないよ？

「ラジャー!!」

元気に駆け出すエリちゃん。

すでに一般人たる俺の目には追えない速度を出している。

『フォウ!!?』

おいこら、フォウくんのモノマネとか許さんぞクソジジイ。

とか言ってる間に、ゴーレムの側頭部にまでたどり着いたエリちゃん。

「もらったあ!」

振るわれるマイクスタンドもとい槍がゴーレムの頭を打ち払った。

『グオ!?! 待て待て待て、ワシじゃよ?! 気付いてるよね?! わざとだよね!』

知らんな、貴様など記憶の片隅にもない。

「俺にゴーレムの知り合いはいねえ」

「行つくわよお!」

尻餅をついたゴーレムの前にはすでに槍を頭上に振り上げたエリちゃん。

「これでチエックメイトだ。」

「やったれえい!」

「やらせませんよ?」

だが、唐突に乱入してきたローブの人物に掌打を叩き込まれエリちゃんは吹き飛ばされた。

「ぐう!?!」

「エリちゃん!」

ローブの人物はふわり、とゴーレムのもとに降り立つ。

「やれやれ、何をやってるんですか近右衛門」

『た、助かったわい。こいつら、ドサクサ紛れにわしを葬り去ろうとしおってからに……』

ゆっくり起き上がったゴーレムが恨めしげにこちらをチラ見した。

お、なんだやんのか？

というかエリちゃん殴るとか隣の teme エは死刑な？

処す。

「出番だ、アビー!!」

「やっとなー!」

俺の声に、霊体化からようやく実体に戻れたアビーが嬉しそうに声を出した。教会からここまでずーとと、霊体化させて忍ばせて置いた甲斐があった。

突然、俺の横に降り立ったフリフリドレスの女の子にゴーレムとローブの人物までもが驚愕する。

「に、二体目ですか。それに、なんだか彼女の方が危険な気がするのですが……」  
たじろぐローブの人物の背後から、エリちゃんが奇襲を仕掛けた。

「そおれ!」

「っ!」

槍の横薙ぎをスレスレで躲すローブの人物。その姿は未だ余裕を残しているように

も見える。

ん？

「ローブに敬語……？」

その後、闇雲に槍を振り回すエリちゃんを軽くあしらい続けるローブの人物。埒があかないと見たエリちゃんは離脱して俺の近くに着地する。

「く、手練れみたいよ子イヌ」

悔しげにエリちゃんが告げる。

案ずることはない、こちらにはアビーもいるのだから。

「一撃でも貰えば致命傷ですからね、慎重にいかないよ。」

「ここは私に任せて、あなたは生徒たちを」

『かたじけない……なんとか本だけは取り替えさんとなあ』

ゴーレムがドシンドシンと駆け出しネギたちの追跡を開始した。

しかし、目の前のローブの人物の警戒が凄まじくこちらにも動くに動けない。

結局、ゴーレムの相手はネギくんたちに任せることになりそうだ。

「さて、では私たちも始めましょうか」

ローブの人物、いや男が余裕綽々に告げる。

素人目にもわかるほど魔力が高まっていく、というか魔力風で周囲に突風が。

まあ、これだけの魔力、戦闘技能、そしてここが地下ということからこいつの正体は大体は割れていた。

「一体、何のつもりなのかな？」

「アルビレオ・イマ」

無駄な争いは悲劇を生むだけだって、どうして分からないんだ!!

「……」

「そのローブと胡散臭い敬語、おまけに似合わない近接格闘術とくればあんたしかいないだろアルビレオ」

俺の問いかけに、しかしアルビレオはダンマリを決め込んだ。

アルビレオ・イマ。

ネギま! 本編においても度々登場し、物語の謎を解く重要参考人、謎の一端を知るものとして物語を盛り上げてきた人物。

ネギくんの父君であるナギ・スプリングフィールドのパーティーの一人でもあり、ナギと比肩する実力者。つまりチートキャラ。

強力な重力魔法と、その容姿からは考えられない抜群の格闘術を誇る作中でも屈指の猛者。

その正体は魔道書らしいが詳しいことは原作でも書かれなかったので俺の知るところ

ろではない。

続編でも色々活躍してるがそれは完全な蛇足。今は関係ない話だ。

「で、アルビレオさんよ、あんたは本来まだ出てくる時期じゃないだろ。なんでもってこ  
んなくだらないイベントに出張ってきた？」

「……」

先ほどまでの胡散臭さが嘘のように黙り込んでいる。

微笑を浮かべたその優顔が不気味ですらある。

「だんまりね、いいよ、じゃあぶっ飛ばして吐かす」

こちらにはサーヴァントが二体、おまけに片方は宇宙の副王の娘。エリちゃんも宝具  
を使えばそれなりに有効打は与えられる。

アビーに関しては結構危険な賭けになるが、そうそう暴走はしなないと思ってる。

正直、アルビレオとか俺に対してオーバークルな戦力に思う。

例えるなら、幼少期のリュカがゲマと戦うようなものである。

無理ゲー過ぎる。

ただ、それはあくまで通常のお話、アビーが本気を出せばどうということはないと思  
う。



「……ていうかなんか喋れよ、おい、あんただよアルビレオさん」

「……」

え、いや待って。なんでこんな無視するの？

さつきから一人で喋ってもものすんごく虚しいのだが。

……ん？ まさか、こいつー

「おい、クウネル・サンダース」

「はい、なんでしよう？」

にこやかに返事をするアル、改めてクウネル。

こいつ、ほんとに偽名で反応しやがった。

ちなみに、クウネル・サンダースとは某鶏肉のお店とはなんの関係性もなく、ただ単にアルビレオ・イマが偽名として使っているだけの名前だ。

しかし、こいつはこの偽名を何故かいたく気に入ってしまっており本名で呼んでも返事をしないという珍事が原作において発生していた。

他にもナギの過去を濁したり仄めかしたりと本当に面倒くさい奴なのである。

「とりあえず、なんで俺らに敵対してくんのか理由を聞いてもいいか？」

「そりやあもちろん、あなた方が学園長を暗殺しようとなさったからでしょう」

すごく正論、分かりやすい、ごもつともなお言葉。

なんのことはない、いつもの『俺が原因』というやつだった。

「なんだ、じゃあ、もうここらで休戦といこうぜ、俺はもう学園長は暗殺しないよ」  
「信じられませぬね、というか隙をつけて私を殺るつもりでしょう」

バレたか。その通り、俺は原作とか今、どうでもいい。とりあえずエリちゃんを殴った貴様に制裁を加えねば気が治らんのだ。

「オーケー、大人しく殺られる気がないなら仕方ない……アビー！」  
「任せて！」

俺の掛け声にアビーが手を振り上げた。

すると、クウネルの足元が途端に白く輝き出す。

「っ！ これは」

急いでその場を離れたクウネルに、輝く地面から無数の輝く触手が飛び出した。

「くっ！」

咄嗟に重力魔法を発動して触手に放つ。

一瞬、大き過ぎる重力に形を歪められるも、潰れはしない触手。

「っ、バカなっ!？」

クウネルも驚いている、と言ってもこれはアビーというよりは――

「まあ、仮にも『神』の身体の一部だからな」

アレ自体が時空の神の身体の一部なのだ、宇宙の副王がその程度で怯むはずもない。まあ、クウネルも手加減して放ったのだろうがな。

そうこうしてるうちに、重力魔法を抜けた触手がクウネルに追いつがる。

それらを躲しながら絶えず重力魔法を放つクウネル。

「ていー！」

しかしアビーも黙って見ているわけではない、クウネルの行く先々に新たに触手を召喚し続け、それらで彼を袋叩きにする。

「いけませんね」

だがクウネルも辛うじてそれらの猛攻を躲していた。

宙空で身を捻り、暴れる無数の触手を紙一重で躲し続ける様は素直に感嘆の一言だった。

チートって間近で見ると本当にチートなんだと実感する。

どころか、休む間も無く襲ってくる大量の触手の攻撃を掻い潜り、その僅かな隙間をついてアビーに突進してきた。

「ひっ、来ないでえー！」

「っ、なに!?!」

しかし、ギユツと目を瞑りながらも額から白色の光線を放つアビーによつてクウネル

は地上に叩き落とされた。

そこへ、間髪入れずに新たな触手を放つアビー。

クウネルの周囲を囲むように現れた空間の歪みから一斉に触手が現れ、彼に向けてその白く輝く肢体を畝らせた。

「……ぬんー！」

だが、クウネルは両手を左右に広げ自身の周りに無数の重力玉を作り出し対処する。

高重力を持つ球体に触れた触手は、絞られるように、身を縮め拘束された。

「やああー！」

そこへ、アビーが放った『無数の紫色の虫』が突撃する。

紫色の怪しい光を放つ虫たちは、そのサイズを利用して重力魔法が置かれていない隙間をぬってクウネルに襲いかかる。

「なんとっ！」

ブウン、という耳障りな羽音を響かせながら高速で迫る虫たちに流石の彼も驚いた声を上げている。

とはいえ、クウネルもすぐに平静を取り戻し、群がる虫たちへ極大の重力魔法を放つて消し去る。

その余波は周りの触手にも及び、纏めて何本か弾かれる。それによって触手の包囲網

に風穴が空いた。

「ふふ……」

小さく笑みを浮かべたクウネルが一直線にアビーの元へと駆けてくる。

残念ながらアビーの俊敏はさほど高いわけではないのでクウネルの、しかも直線的な速度に追いつくことはできなかつた。

「これでー」

一瞬でアビーの目前まで迫つたクウネルはその首元へ手を伸ばす。

「いやあ!!」

アビーは咄嗟に手に持ったぬいぐるみで殴りかかった。クウネルはそれを意に介さず手を伸ばす。

……子どもの悪足掻き、そう彼は思ったことだろう。

しかしー

ベキイ、と奇妙な音が辺りに響いた。

「は……う？」

音源を見れば、アビーのぬいぐるみに当たった部分、左手首辺りがあり得ない方向に折れていた。

そして、そのままアビーに殴り飛ばされる。

「ぐう!？」

ペキペキ、とクウネルの腕から嫌な音が聞こえ、それと同時に数十mは飛ばされる。咄嗟ながらも受け身を取り、今一度自身の腕を見るクウネル。

「……随分、力持ちですね」

右手で回復魔法を使用しつつこちらに笑みを向けるクウネル。僅かながらその額に汗を浮かべている。

「ああ、ごめんなさい！ 私はいけない子だわ……」

クウネルの皮肉にもアビーはビクビクと怯えたように謝罪した。

……何処と無く話が噛み合っていないようにも見えるが、どうなのだろう。

「いけない、いけないわ……ああ」

ブツブツと呟きが多くなってきたアビー。

ちよつと、アビーさん？

「アビー？」

ちよつと心配になって声をかけてみる。

「だめ、いけないわ……私、悪い子になっちゃうわ」

その横顔は言葉とは裏腹に愉悅の笑みをこぼしていた。

ちよつと、ヤバイかもしれん。

これはフォーリナー全体（今のところ二人だけだが）に言えることなのだが、彼女らは根本的にあの架空神話の神性をその身に宿している。その影響でたまたに精神的に支障をきたしているような描写が見受けられた。

特にアビーは肉体年齢は少なくとも12・3歳、もう一人の方と違って神性の狂気を飲み下したわけでもない。

ただ、その身に宿しているだけなのだ。

だからこそその精神は狂気との闘ぎ合いの最中にあると俺は推測している。

これも、おそらく『それ』の一種なのだろう。

スキルに『狂気：B』とか入ってるしな。

となると、これ以上戦闘を行わせるのは危険か。

「ああ、ああ………」

悲壮な声をあげながらもクウネルに触手を曠しかけ続けるアビー。

ぶつちやけラリってるようにしか見えない。

クウネルは今の所、触手の攻撃を捌くのに意識を向けている。

「……どう？　ぶつちやけこの戦闘、入っていけるエリちゃん？」

隣で休息に努めているエリちゃんに問いかける。

「ムリ」

速攻で返事が返ってきた。ですよねえ、俺も割り込める気がしない。入っても何もできないが。

クウネル……アルビレオもこれで地味に世界クラスの猛者なのだ、そこが厄介なのだ。現状、彼と対等に渡り合えるのはアビーしかない。だがアビーも現在悪い子モードに入りかけている。

「……これで詰みか……」

もう俺に打つ手はない。というか俺単体では何もできない。

エリちゃんが先の不意打ちで呪いを受けてしまっているのが致命的だ。

この呪い、厳密には魔法の一種っぽいのだがアビーが戦っている間にエリちゃんのステータスを見て初めて気がついた。

ざっとステータスを見ただけでも『全ステータスダウン、スキル宝具封印』と地味に面倒なバットステータス付与となっていた。各々の効果は微々たるものだが、全体的に負荷を加えられている状態。

アトラス院制服を所持していない俺ではどうにもできない。

ダ・ヴィンチちゃんでもいればなあ。

正直、これ以上戦っても危険しか増えない。

というか俺なんでこんな戦ってんだ？



はい、エリちゃんをぶつ飛ばされたことで頭に血が上り過ぎていました。ごめんなさい。

「クウネル」

「はい、なん、でしよう?」

四方八方から現れる触手をなんとか回避しながらクウネルが返答する。

お前よくその状況で喋れるな。

「(こ)こらでやめておこう。……アビー、もういいぞ」

「あら、そうなの? それは、残念ね……」

「本当に残念そうに首を垂れるアビー。すっかり悪い子モードである。再臨はしてないが。」

触手の攻撃が止んだところでクウネルも息を整えながらこちらに視線を向けた。

「おや、私はまだやれますよ」

いいから下がらなさいよ。こんなところで変なプライド出すなよ。

「……というか、あんたも足止めが目的だろ? これだけ戦えば学園長も無事に本取り返してるさ」

冷静に考えて、彼が出張ってきたのはあの『魔法の本』のためだと思う。

原作でも本を見たネギくんが『メルキセデクの書』だとか言っはしゃいでいたのを

見るに、おそらく本物。

となれば、アレを取られたままというのは学園としては由々しき事態なのだろう。

じゃあこんなところ置いとくな、とか。そもそもこんなアホみたいな計画で罔に使うな、とか色々言いたくなるが黙して語らずが正解だろう。

ともかく、そんなところで俺が足止めをってしまったばかりに、見兼ねてアルビレオが助太刀に現れた。と、そんなところだと俺は思ってる。

「……違うか？」

「ええ、その通りですよ。……まあ、学園に現れた得体の知れない召喚士の実力を測る意味もありましたが」

パンパン、とローブについた埃を払いながらにこやかに彼は告げた。

……なるほど、確かにアビーのお披露目はまだしていなかった。

学園側としては得体の知れない新しいサーヴァントの調査の意味もあるのだろう。

「そうか。じゃあ目的は達せたな」

「話が早いのは助かりますが、察しが良過ぎて逆に怪しいですねえ」

ほつとけ、というか怪しきで言ったらお前の方が断然、だと思うぞ。

「とりあえずエリちゃんに付けやがった呪い、さっさと解いてくれない？」

「まあ、いいですけど……ホントに不意打ちとかしたりしません？」

しないしない。フリかよ。

これ以上戦ってもこちらがギリ貧、というかアビーがヤバイ。いずれは悪い子モードになってもらう必要もあるのだろうが、今やる必要はないだろう。

ちゃんとアビーと話し合ってからにしたい。

「しねえよ、というかさつきと解かないとアビーの宝具ぶち込むぞ」

外宇宙放り出すぞ。

「それは怖いですねえ。……出来ればそこらへんのお話も少し聞いておきたいところですが」

そういうえば宝具に関しては何の説明もしていなかった。

……だが、遠坂にああ言われた手前、おいそれと話すわけにはいかない。学園側に黒幕がいる可能性だって無いわけじゃないのだから。

「まあ、話せる範囲なら……」

「それはありがたい。私も地下に居座っている手前、学園側に手土産の一つくらい用意しないといけませんから」

ああ、そういう。

あくまで、自分は学園側ではないと言いたいわけか。

ただ、そう闇雲に疑ってかかっても現状仕方ない。

「魔法関連の事件には呼ばれば行ってるし、魔獣退治だって俺らだけで請け負ったりしてる。」

「こちらも相応の対価を頂かないと」

「ええ、私がお話できる範囲でしたら、なんなりと」

相変わらずにこやかな笑顔で彼は述べた。

話が早いやつは俺も好きだ。

遠坂から頼まれた件もある。こうしてアルビレオ・イマという数少ない知恵者と会えたのだ。聞き出せるだけ聞き出しておいた方がいいだろう。

そうして俺たちはなし崩し的にクウネルとの話し合いを行うことになった。

場所は麻帆良地下にあるクウネルの家。

あのかいワイバーンが門番してるでかい家だ。

クウネルの魔法を使えば一瞬で移動できる。

ただ、エリちゃんは試験を明日に控えているために先に帰っていてもらうことにした。ごめんね。

ちなみにクウネルの転送魔法で一瞬である。

「ようこそ、藤丸立華くん。歓迎します」

そう言つて紅茶を差し出してくるクウネル。

俺は今、彼の家のリビングにあるソファに腰掛けている。対面には営業スマイルのクウネル。

俺の隣にはアビーがちよこんと座っている。

テーブルには各々に紅茶とケーキが配られていた。

「ほら、遠慮せずがつつり食えアビー。おかわりもいいぞ」

「ここ私の家なんです……」

クウネルが何か言ってるが生憎と聞こえない。

ていうか、こいつの家、改めて見ると生意気にもすごい幻想的だ。俺の近くにあるテラスとかオサレ過ぎんだろ。

ちなみに俺に流れるのは地下水だ。

「で、でもマスターさん。この人、さっきまで戦つてた人よ？」

絶対、毒とか入ってるわ……」

クウネルに対して疑いの目を向けるアビー。

そりやそうだわ。

でもここはネギまの世界。単なる照れ隠しで神鳴流奥義とかぶつ放す世界である。問題ない。

加えて、クウネルもそんな姑息な手を使ってくるやつではない。やるならもつとエゲツない暗殺の仕方をする。

「こいつはそういうやつじゃないよ。だから安心してくれ」

「おや、随分と私について知っているような口ぶりですね。どこかで会いました？」

白々しい、初対面に決まってるんだろ。

「単なる情報として、だよ。それよりさっさと話始めようぜ」

時間もない。俺だって明日学校があるんだ。

「それもそうですね。では単刀直入にー」

紅茶を啜りつつ俺は奴の声に耳を傾ける。

「ーあなたの目的はなんですか？」

予想外にも凄い重圧をもって質問を投げかけてきた。隣のアビーもすでに警戒態勢に入っている。

どうどう、お二人さん、そんな熱くなりなさんな。

「目的、とは？」

どうにもクウネルがどういうつもりでそんな質問をしているのか俺は測りかねていた。思い当たる節が多過ぎて。

いったい、どれのことを言ってるんだ？

「先日、あなたが図書館島でキティといっしょになって何やらしていましたね、おそらくは英霊召喚というやつなのでしょうが」

知ってたのね、それ。

確かにあの時アビーを召喚した。

「……そこまでしてあなたは何を成そうとしているのです？」

特に何も成そうとはしていないのだが……。

強いて言うなればネギくんの手助けだろうか。いや、遠坂の件も今は優先事項である。

答えを決めかねていた俺を置いてクウネルは話を続ける。

「学園での記録、先ほど実際に手合わせを試みて感じた所感を申しますと……英霊と  
いうのは尋常ならざる戦力です」

「……」

だろうな、仮にも戦争に呼び出す使い魔だ。それも聖杯という規格外の願望機を巡る戦争に。

それなりに常識外れでなくては話にならないだろう。

「……あなたが最初に英霊を召喚したのが二年前、それまではごく普通の中学生であつたあなたは、しかし、反応が現れた直後の質疑応答に対しても明朗に答えていましたね。

そこがまず第一の疑問点」

「そこからの二年前は特に行動を起こすことなく素直に学園の指示に従っていた。

しかし今月に入って急に図書館島地下に降り立ち新たな英霊を召喚した。

これが第二の疑問点。まあ、これに関してはある程度推測はできます。

ズバリ、ネギ・スプリングフィールドの登場でしょう」

ほう、さすが鋭い。確かに俺はネギくんが現れたことでこれから始まる原作を前に、

その準備としてここ最近は動いていた。

「となると必然的に最初の疑問が浮上するのです。

そもそも、あなたはなぜ英霊を召喚したのか」

「それについては事故だと言ったはずだが」

「ではなぜ英霊の存在はあらかじめ知っておられたのですか？

記録を見るにまるで最初から知っていたような口ぶりです」



まあ、知ってたからな。その詮索についてはするな、と学園長にしてあると思うのだが。

「あんた、ジジイからどこまで聞いてる？ 正直に答えてくれ、それ次第では俺が話せる範囲も決まる」

「……英霊と呼ばれる強力な使い魔を使役すること、英霊の管理はあなたにしかできないという二点です」

「真名については？ クラス、使役方法は？」

「いえ、私が知っているのはそこまでです。ですから殊更、あなたの行動に不信感を覚えませんでした」

素直だな。まあ、俺が魔法先生の何人かから疑われているのは知っているが。ちなみに魔法生徒たちにも怪しまれている。仕方ない。

「……そうだな。下手に敵を増やしたいわけでもなし、あんたが他言無用を守るならいくらか話しておこう」

怪しいとはいえ、クウネルもあのナギの仲間だ。特に黒い政治絡みの思惑や企みも原作を見たかぎりなかった。

味方として見た方が気が楽でもある。

「わかりました、それではギアス・スクロールをお持ちしましょうか？ ご存知とは思ひ

ますがスクロールでの契約では不正は行えません。いかがでしょうか？」

「いや、そこまではしなくていい。仮にも大英雄のお仲間さんだ、情報の悪用はしないと信用した上で話そう」

「よろしいのですか？ スクロールを使用すれば確実ですが」

俺は何も特別頭が良いわけでもなく、敵を作りたいたいわけでもない。

なるべくなら平穏な日々を送りたいときえ思っている。

だからこそ信用をできるかできないかで人を見るしかない。

「いや、必要ない。改めて言うが、俺は敵を作りたいたいわけじゃない。寧ろ平和がなにより  
の事勿れ主義者だ」

現状、そんなことも言ってもらえんが。

「だから正直に言うが、俺は何も企んじやいない。強いて言うなら防災準備のようなものだ」

「では学園を害する意思はないと？」

「当たり前だ。そもそも俺の行動原理は二つ、エリちゃんとアビーだ」

そう言っ隣のアビーの肩に手を乗せる。

「ほう……」

「魔法とか学園とかぶつちやけどうでもいい。どうなろうと俺自身はなんとも思わん。

が、ことこの二人に関しては話は別だ。

俺は当初、事故とはいえ呼び出してしまったエリちゃんと静かに暮らすつもりでいたんだ。

だが、あのジジイが学校に入れた拳句、今年に入って代わった新しい担任はあのナギの息子だ。

齡十の幼子が大英雄の息子にも関わらず単身、祖国を旅立ってこの地に来た、それで何も起こらない方が不自然だ。

だから俺は来るべき時に備えて自分とエリちゃんを守ること兼ねてアビーを呼んだ。

とはいえアビーを使い捨てにする気なんぞさらさらない。

そもその話、俺と彼女らは『知り合い』だ。それならと俺ら三人でこれからを生き抜くために準備をしている、ていうのが事の真相だよクウネル」

洗いざらい、とはい言いが出来る限り、話せる範囲で真実を告げた。

俺の根源的な願望は三人で生き残ることである。

それがブレたことはないしこれからもブレない。俺の身内として数えるならギリ、高校のあいづらも入るが絶対に守ると決めているのは彼女たち二人だけだ。

「ま、マスターさん……」

かあ、と顔を赤くしたアビーが俺の腕をギュツと握った。

いやそんな照れることじゃないから、当たり前のことを言ったまでである。

「ふうむ、少々乱雑な話ですが一応、理には適っているというか。……いえ、正直言つて、これってただの惚気ですよね？」

真剣な顔でなんてこと言うんだお前。

いや、見方によつちやそうかもしれないが。

肝心のお二人としては有り難迷惑かもしれないし。

「一応言つておくが、『知り合い』って部分は黙秘権行使するからな？ プライベートに  
関わることだし」

というか異世界転生とか、人理焼却云々とか、言つても信じてもらえんだろ。我ながら無理ゲーに思う。

遠坂たちは奇跡的に全員が全員転生者だったからスムーズに話が進んだだけだ。

「なるほど。どうにも私の思い過ごしだったようですね。なにやら学園の結界をすり抜けた形跡があつたものですかから」

少しだけ、気を緩めたクウネルがそう言った。

「それってかなり大事だろ、学園結界つて一応すごい結界なんだろ？」

強大な魔力を封じ込めるくらいしか知らんが、あと侵入者探知。

「ええ……もつとも、何か被害があったとは聞いていませんが」

そういう問題ではない気がする……。

それとも、この学園にいる規格外の実力者だけで対処できると考えているのだろうか。

慢心も過ぎると足元を掬われるぞ、どこぞの金ピカみたいに。誰とは言わんが。

「そんなことよりも、私としてはもう少し英霊の皆様の情報をいただきたいところですね」

目をキラキラさせながらクウネルは問う。これ絶対、自分の興味本位で聞いているよね？

「じゃあ、まあ、宝具の概念については教えておこうか」

思えば、未だに宝具を使うほどのピンチに陥ったことがないので一度も試し打ちをしていなかった。

とはいえ、エリちゃんのはぶつちやけ大音量ライブだし、アビーのはそもそも危険過ぎて使えば相手は死ぬ。

外宇宙放り出されて無事に帰還できる奴とか少なくとも俺の知り合いにはいない。

「宝具つてのは、その英霊の象徴。その英霊を英霊足らしめている概念だ。分かりやすい言い方をするると必殺技みたいなもの。」

例えば、アーサー王。彼女ならエクスカリバーが有名だ。

当然ながら彼女を召喚した場合はあの聖剣が宝具としてついてくる。

他にも、物質的な象徴を持たない英霊、持てない英霊。彼らにおいては生前の生き様がそのまま概念宝具として昇華されることがある。

これも分かりやすい例を挙げれば『ヘラクレス』。

こいつの場合は少々特殊な例なんだが、彼の生前の逸話『十二の試練』は有名だと思う、この逸話がそのまま概念として宝具になり、効果は十二個の命のストックとなる、といった具合に英霊になることで新たな能力を得る英霊もいるんだ」

「なるほど、ではその両方を持ち得る英霊もいるということですね」

「その通り。これまた分かりやすい例がアーサー王関連の円卓の騎士なわけだが。

例えば『ランスロット』。こいつは物質的宝具としてアロンダイトを所持している。

それとは別に、こいつの生前、『咄嗟に落ちていた枝を使って勝利、他人の武器を使って勝利』といった逸話が昇華されて宝具になったものがある。

それが『騎士は徒手にて死せず』。効果は枝であれ機関銃であれ手に取れば自分の宝具として強化して使用可能になると、他人の宝具を自分用にしてしまうというものだ」

Zeroではあの慢心王の宝具の一部を奪って憤慨されていた。

元々の技量が凄まじいランスロットにとっては無数の宝具を打ち出してくれるギルガメッシュはいいカモというわけだ。

「勉強になりますね」

まあ、この程度の情報ならくれてやったところで何ら痛くも痒くもない。

アビーはそもそも在り方が本来とは変質しているし、エリちゃんも逸話からは予想できない特殊な宝具を持っている。

『キレンツ・ザカーニイ竜鳴雷声』がいい例だ。

どこの魔術師が、血の伯爵夫人とその地域に伝わるマイナーなドラゴンを関連付けるというのか。自己申告しなければ絶対に分からないと思う。

『バトリ・エルジエート鮮血魔嬢』においても、誰がスピーカー代わりに使うなどと予想出来ようか？

エリちゃんは黙ってれば有能で美少女なのである。

「俺ばっか話してるけど、あんたもなんか情報寄越せよ」

「情報ですか、その辺はどうにも貴方は既に知っている気がするんですよえ」

まあ、知ってることの方が多いな。

世界樹の下に埋まってる造物主とか、あんたが魔導書とか、ネギの母親とか、魔法世界の秘密とか。

限定的な未来予測（原作知識）も可能である。

とはいえ、それだけでもできないことだつてある。バタフライ効果で今後の流れが変わる可能性だつてある。

「じゃあ俺から質問。」

「なんで、俺がエヴァと図書館島地下に来ていたのを知ってる？」

「単純な疑問だ。」

あの場には少なくとも俺とエヴァしか居なかった。誰かいればエヴァが反応するだろうし、アビーだつて何か察知するだろう。そうなるとこいつが知っているのが不自然に感じるのだ。

突飛な考えではあるが、あの本を置いたのはこいつなんじゃないかとも考えている。

「ああ、それに関しては図書館島からお二人、いや三人で出てくるところを見たからですよ。」

「いやはや、エヴァが高校生と二人つきりで図書館島に入っていくのを見て、遂に彼女にも春が来たかと思つたんですがね」

「ふうん、ほんとかしら？」

「ただまあ、そう答えられたら他に追求のしようがない。」

「ではもう一つ。」

「英霊について、ここまで興味を持つのはあんたが初めてだ。」



ぶっちゃけ、あんた英霊について前から知ってたんじゃないやねえか？」

まあ、これは建前だ。興味を持っていただけなら他にもエヴァとかいるし。

本音は、遠坂が言っていた黒幕じゃないかと疑っての発言である。

「そうですねえ……私も、あなたの信用に答える必要がありますし、この際だからお話しておきますか」

だが、妙に黄昏れながら紅茶を啜るクウネルの反応に、俺の思惑とは少しズレがあることに気がついた。

「なぜ、私が興味を覚えたか。

もちろん、知っていたから。というのが妥当でしょうね」

いや、やはり知っていたのか？

未だこいつの疑いは晴れていないが、こちらにも慎重に言葉を選んだ方が良さそうだ。

「厳密には、魔法とは異なる技術といったところですが」

魔法と異なる技術？

それはもしかしてー

「会ったことがあるのですよ、その技術、秘術を操る御仁に」

「っ！」

やはり魔術か。しかし会ったことがあるとは……もしかしたらそいつが黒幕か？

いや、今はとりあえず話を聞くべきか。

「彼と会ったのは、そう、二十年前。」

大英雄と今も持て囃されるナギが活躍したあの大战の時でした」

二十年前。

随分と昔の話だ。その時代の人物が今更、俺なんかちよつかいをかけてきたのか？

いや、黒幕と仮定すると遠坂たちにもか。

「現在語られているナギパーティーには記されていない影の英雄。それが彼。」

まあ、目立つのが何より苦手でしたらねあの人は」

目立つのが苦手で影、裏方か？

まだ情報が少ない。

「……ただ、彼の使う魔法は誰も聞いたことがないものばかりでした。」

仲間の誰かが聞いても『単なる秘術だ』としか答えてくれませんでした」

おそらく魔術。確定ではないが話の流れから見てもそう判断して間違いはないだろう。

「ですが、一度だけ彼が答えてくれたことがあるのです。」

あの魔法は魔法に非ず、遠い過去に魔術と呼ばれた奇跡である、と」

「魔術……」

やはり魔術師か。過去というのが気になるが、そいつは型月式魔術師で間違いない。

いや、型月の魔術師が人助けとかするとは思えないが。

「……ですから、あの日、あなたとエヴァが口にした魔術という単語が妙に引っかかりましてね、こうして接触を試みたわけです」

なるほど、会話も聞いてたのか。ストーリーカーかよ。

お前実はエヴァのこと好きなんじゃねえの？

「なるほどな、まあ、あんたの予想通り、英霊召喚は魔術儀式の一種だよ」

厳密には、雛形は抑止力の防衛装置だが。

「やはりそうでしたか！ いえ、失礼。」

どうにも、私の性と言いますか、秘匿された神秘というのに対して抗い難い好奇心を掻き立てられてしまいました」

意外と研究者気質なのねあんた。

こんなところで、こいつの人間味ある一面を見てしまった。

と、アビーが唐突に俺の袖をくいくいと引っ張った。

「ん、どしたアビー？」

見れば、何やらもじもじとしながら言い淀んでいる。

もしかしてもしかして、おトイレですか？

しょうがないなあ、俺と一緒にやってやるよ！

「あ、あのねマスターさん」

「なんだいアビー」

「け、ケーキ……おかわり、欲しいの」

ケーキ。

テーブルを見るとアビーに配られた皿は空っぽになっていた。

どうやらクウネルが出したケーキを気に入ってしまったらしい。

「おかわり、マスターさんに言えばくれるっておっしゃったから……」

「おう、お代わりね。いいよ。……クウネル、ケーキのおかわりだ、早よもってこい！」

「いや、私の家ですから……」

やれやれ、と言いつつケーキを取りに席を立つクウネル。

なんだかんだ言つて、あいつも子どもには弱いらしい。

「ああ、ケーキのおかわりをしてしまうなんて……やっぱり私は悪い子だわ」

そう言つて俯くアビー。

いやいや全然悪くないよ。寧ろアビーが嬉しそうに何かを食べてる姿は俺の癒しだ

よ。

いっぱい食べる君が好き。ただし腹ペコ王、あんたはダメだ。食べ過ぎる。

「はい、今度はモンブランにしてみましたよ」

「わあ、とっても大きいモンブランね！」

アビーの言う通り、クウネルの持ってきたモンブランはかなり大きい。

「ついでにパフェもご用意しましたが、いかがでしょうか？」

ついでに片手にはフルーツと生クリームの乗ったプリンパフェ。

いや、奮発しすぎだろ。ほんとにお前アルビレオ・イマか？

「素敵だわ！ あ、できたらでよろしいのですけど、大きいパンケーキとかも食べてみ

たいなあ……」

「わかりました。少々時間がかかりますがご用意しましょう」

いやいやいや、待って待って。

なんでそんな張り切ってるの？ ロリコンなの？ ロリコンなのね？

「お前……意外と良いやつだな」

健全なるロリコンに悪はない。

俺はクウネルのことを少しでも信用しようと思った。

## 破綻した正義の聖人

「……わかりました。良い結果を確約いたしましたでしょう」

「そうだな、してくれなきやお前は死んでしまおうし」

結局、俺らの話し合いは『ある密約』を交わしたところで終了となった。戦果としては上々だろう。相手が研究者気質であって助かった。

傍らには甘味類をたらふく食べて満足そうなアビーがニツコニコで立っている。いくら太らないサーヴァントとはいえ見ていて胸焼けがするほど食うとかやめて欲しい。

「では、地上までは私がお送りしましょう。ご安心を、最速でお部屋まで送り届けます」  
「うむ、頼む」

クウネルの魔法によって俺たちは学生寮までひとつ飛び、もといワープした。

後日、エリちゃんからネギくんのクラスが試験の成績学年トップとなりネギくんが正式な教師として就任したことを知らされた。

順調にイベントは消化しているようだ。

他にも、長谷川千雨が服を剥かれたり、双子姉妹とネギくんが散歩したり、お嬢様のお見合いイベントがあつたりしたらしい。

どれも人づてでしかないので定かでないが、ここまで来ても原作の流れは崩れていない。

毎度毎度、面倒なことだが逐一確認しておかないとこの先、何が起るか分かつたもんじやない。今の所、俺がネギくんに深入りしている部分はないので安心してゐるが。

「あの本を返して欲しい?」

俺は相変わらず高校にキチンと通っている。

高校では特にこれといった出来事もなく平穩に過ごしていた。

その最中、俺は意を決して遠坂（黒髪）に『英霊召喚』の本の返却を求めた。

「あ、いや。別に遠坂が待つててもいいんだけど、すこーしだけ貸して欲しいなあ、なんて」

現状、俺が手がかりとしてしているのはあの本だけなのだ。黒幕がアルビレオじゃなかった今、捜査は降り出しに戻ったと言える。

というか、今こそキャスタークラスを召喚すべきなのではないだろうか？

「とか言つて、また英霊召喚する気でしょ。だめよ」

だが遠坂はバツサリ切り捨ててその場を去ろうとする。

「待て待て、今の俺たちはすべて後手に回っている。あの本を誰が置いたのかすら分からないのだ。」

ここは、思い切つて前進するべきじゃないのか？」

正直な話、俺はキャスターが欲しい。

いや、ナーサリーとかさういうんじゃないやなくて真面目な話、ここらで後方支援の適任者を引いておかないと色々とまずい気がする。

今俺の元にいるのはどちらも戦闘型。エリちゃんはアイドル型だが。

戦闘においては万が一も死はあり得ないと思う。



ただ、こと魔法や魔術といった捌め手には弱い俺らだ。

遠坂があくまで転生の黒幕を追っている今、バタフライ効果についての対処は俺のみになる。というか知ってるのが俺だけなので俺がやるしかない。

もちろん、原作ブレイクを恐れるならエリちゃんを素直に学園に押し込めておけばいいのだが。

果たして、それで大丈夫なのだろうか？

原作がネギくんたちの視点で描かれている以上は、そちらに支障がなければさしてる問題は無いと見ている。というか言い出したらきりが無いのでそこで判断するしかないのが現状だ。

とはいえ、他の場所で大きな影響が出ていて、それが回り回って原作に致命傷を与えればどうなるか分からない。

つまり、何が言いたいのかと言えば、俺の味方としての後方支援が欲しいのだ。

サーヴァントであればある程度命令に従ってくれる。だからキャスターが欲しい。

我ながらサーヴァントに対して失礼だがそんなことを言っていて全滅エンドとか怖くて考えたくない。

目下、敵は『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』。これはネギくんの敵であるので無理に俺が出張る必要もない。

しかし、先日、クウネルから聞いた話が真実ならばこの世界はとつとくに型月汚染を受けていることになる。

もし、フェイト一味が魔術を得ていたら？　さらには英霊についても知っている可能性だつてある。

だつて首魁は魔法の祖・造物主なのだから。

二千うんちゃら生きてるらしいし、神代についても知つていておかしくない。

魔術を知らないエヴァが七百年とすると、少なくともそれ以前から生きている奴らは魔術の存在を知つていてもおかしくない。そう仮定しておくべきだ。

あんまり召喚すると世界樹が枯れてしまうかもしれないが、二体で何の異常も見られないので三体目くらいは大丈夫だと思いたい。

「あのね、前も言つたけど英霊っていうのはそうホイホイ呼ぶもんじゃないのよ。

例外として聖杯戦争や、白野が言つていた電脳空間、あんたの言つてた人理焼却事件という大事件に召喚が許されているの。

そもそも、英霊は抑止力が扱う分野よ、人ごときが軽々しく扱うものじゃないわ」

正論だ。実に正しい。

しかし、俺だつて死にたくないのだ。エリちゃんがネギくんたちと関わつてしまつて

いる以上、厄介事は降り掛かるものとして見た方がいい。その度にサーヴァントで蹴散らすだけではいずれ問題もでてくるのだろう。

俺は何としてもキャスターを手に入らねばならない。それもあらゆる分野において有能な英霊を。

「分かった。ならば一つ提案だ」

「なによ、言つとくけど個人的な協力はしかねるわよ。私たちはあくまで転生なんていうぶつ飛んだことをしでかしたやつを見つける目的で集まってるんだから」

それも正論だ。下手に動くのは下策。

でも俺はすでに色々手遅れなのだ。ネギクラスにエリちゃんが入ってしまった以上は。

「俺が召喚するのはレオナルド・ダ・ヴィンチだ。」

かの万能の人の協力を得られれば、お前たちの目的も少しは前進すると思うぞ？」

「つ、まさかあんたダ・ヴィンチとも契約してたわけ？」

いや、複数のサーヴァントと契約してたのは知ってるけど……いったいどれだけの英霊と契約してたのよ」

遠坂は呆れたように溜息を吐いて片手を頭に添える。

まあ、通常の聖杯戦争では考えられない数だよな。だって三桁だもん、頭おかしい。

とはいえそれらを纏めていたぐだはコミュニケーション力りよくカンは間違いないと思う。どれだけ魅力的な人間なら最終決戦に座から応援に駆けつけてくれるというんだ。

「カルデアでの経験として、ダ・ヴィンチの頭脳は実に優秀だった。逸話通りの万能サーヴァントに間違いはない。

アトラス院の七大兵器があつたとはいえ虚数潜航艇なんてのを作り出してるんだからな」

名探偵や他のサーヴァントの協力もあつたらしいがそれは些事だろう。ちよつと誇張して伝える。

「虚数潜航ですって?! それに七大兵器って……待って、詳細を聞かなくても機能はなんとなく分かるわ。まったく、どうなってんのよあんたのこの世界は」

全くだ。おまけにラスボス倒したと思つたら今度は異星からの神と来た。三千年の歴史が燃やされたと思つたら今度は地球全漂白である。

世界を滅ぼしすぎだと思う。

三部はどんな形で滅ぼされるのか、今はもう知ることも叶わないが興味はある。

地球の全滅回数だけで言つたらドラゴンボールに迫る勢いである。

まあ、俺はぐだ本人ではないのだからな。

ぐだには是非とも今後も頑張ってもらいたい。

俺も頑張んなきゃいけないけど。

「呼んでおいて損はないと思う。結界対策も彼なら鼻歌交じりにこなしてみせるだろう」

「そうよね、ダ・ヴィンチだもんね……なんか、ほんと、新しい転生者を見つuckerたびに  
とんでもないことになっていて、なんとというか。御愁傷さま」

とか言つて、あんたの身体も女神の依り代にされてるけどな。

しかも二柱も。

金星の遠坂と冥界の遠坂である。

「ちなみに記憶を引き継がせた自分のコピーも作ってるぞ」

もはやなんでもありである。ダ・ヴィンチちゃんにできないことはない。

「なんでもありね……いえ、だからと言って英霊は呼ばせないわよ」

なんでや！

「有能だろ、彼?! なんでそうまでして呼ばないんだ!？」

「何度も言わせないで。本来、英霊は抑止力の分野。人の身では扱えないものなのよ  
……私も前世で嫌という程、実感したわ」

「遠坂……」

そういえば、彼女は本編でアーチャーと強い絆で結ばれていた。衛宮との関係からお

そらくはUBWルートなのだろうが、それでもアーチャーが全部が全部言うことを聞いたわけじゃない。

後日談で彼女は聖杯を解体している。あの戦争で多くの悲劇を見てきた彼女だからこそ、ホイホイ英霊を召喚する俺を認められないのだろう。

当たり前のことだった。

「……そうか。分かった。遠坂は引き続き本の管理と解析を頼む」

「言われなくてもやってるわ、ラニたちの手も借りてるけど、これがなかなかプロテクトが固くて……」

そんな高度な作りなのかアレ。てつきり即興で作ったもんだとばかり……

「いや、召喚は行うべきなんじゃないかな」

唐突に、第三者の声が部屋に響いた。驚いて目を向けてみると――

「なんだ、レオか」

「ノックはしたんだけどね」

金髪緑眼の美少年。前世は西欧財閥の首領であったレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。

今世では西欧の複合企業のお子さんだが、なぜか極東の島国の高校に入学している。絶対、何者かの仕業である。

ちなみに、今俺たちは拠点として活用している空き教室の中で密談している。この部屋は防音は元より、隠蔽のためのあらゆる魔術を重ねがけしてあるためにこうしてペラペラと魔術について話し合える。

ちなみに内外防音なのでノックは無駄である。

「ちよつとレオ、英霊の件については私に一任したはずよね？」

「あなたが口出しする問題じゃないわ」

少しイライラしている遠坂はきつめにレオに言い放った。ごめんよご兩人、俺が怒らせてしまったんだ。

「そうだね、だが、我々が今手詰まりとなっているのは事実だ。そうだろう？」

「ぐつ、わざわざ彼の前で言わなくてもいいんじゃない？ 彼はー」

「一般人だと？」

見透かしたようなレオの一言に遠坂も口を閉じた。

「どれだけの経験があるうが彼が一般人であり、魔術界のいざこぎに巻き込むべきではないと提案したのは確か君と衛宮くんだったね」

「ちよつ!?!」

慌てる遠坂をレオは実に楽しげに眺めている。

え、もしかして遠坂たち、俺を気にかけてくれてたのか？

「やはり君は魔術師としては人間性が有り過ぎる」

「……ふん、ど素人に勝手に動き回られても面倒だと思っただけよ。それに衛宮くんがどうしてもつていうから」

「お前ら……」

なんだか俺は彼女たちを誤解していたようだ。

いや、正確に理解していなかった。

なんで、アーチャーが彼女に手を貸したのか、それを明確に理解しておくべきだった。無駄な気遣いをさせてしまっていたようだ。

……というか、言えない。彼女たちに黙って「あいつ」を味方に引き込んだとか、絶対言えない。

「僕たちがよく知る遠坂凜と本当に似ているね」

「ちよつと、今あいつの話はやめてくれない？　というか基本的に私の前で彼女の話はしないで。ただでさえドツペルゲンガーみたいで気分が悪いってのに……」

それはすまなかつたね、と言いつつ部屋に置いてある椅子に腰掛けるレオ。その仕事は高貴な身分に相応しいほど華麗である。

「話を戻そう。」

今、僕たちはこの高校に僕たちを集めた何者かの行方を追っている。おそらく、その



方針は間違いじゃない。同じ世界からの転生者がこும்集積している状況は普通じゃない。

だが、それを成したのが僕たちの世界を知り得るものなら何らかの術式、儀式、あるいはもつと別の何かの手がかり。何らかの手がかりがあるはずだ。

しかし、現状そのようなものは一切、見つかつていない。魔術師として優秀な人材をこれだけ集めておいて何も分かっていない。

それはつまり、相手がそれだけ強大な存在ということになる」

それは道理だ。

衛宮士郎や遠野志貴、両儀や黒桐などの魔術に傾倒していない者たちを除けば実に優秀な魔術師が揃っている。

その上で、何も分らないのだ。

そんなことができるのは神霊でも一握りだろう、或いはもつと根本的な、世界の理を司る――

「とはいえ、その存在に敵対の意思があるのかは疑問に残るところではある。

僕たちを集めたということは、僕たちに『何か』をさせたい、と見るべきなのは既に結論として出ている」

レオはどうやら俺のために話してくれているようだ。

「……分かったわ、この子ももう色々と知ってしまったているようだしこの際だから話せるところは話しておきましょう」

諦めたように、また溜息を吐いた遠坂が口を開いた。

「何をさせたいのかも分からない。だって手掛かりが何もないのだもの。まあ、異世界から魂を引っ張ってくるなんて常識外れも甚だしいこととしてかしてくるくらいだからよっぽどなんでしょう。」

もしかしたら貴方が経験した人理焼却事件くらいの規模の話なのかもね」

やめてくれ。ほんとに彼女の冗談は冗談に聞こえない。

今は情報がなくてなんとも言えないが、普通の、上位世界から現世を見守っているよ  
うな神霊ではないのは確かだと思う。

あの本がまず怪しい。正規の手順ではなく、簡略化した儀式、それも代償が皆無など  
絶対におかしい。

魔力がどこから来ているのかも不明だ。

まあ、エリちゃんの発言から世界樹かなあ、とは思ってるが。

「私たちも表立って派手には動けないの。一応、学園に対しては一般人で通してるから  
ね。」

だから、どうしても調査が遅くなる」

それは仕方ないことだ。彼女らはこの世界では圧倒的に不利な立場に置かれている。魔術が感知されないというのは大きなアドバンテージではあるが、数が足りない。

対して魔法使いたちは世界中に溢れているし、魔法世界にはそれこそ億を優に超える戦力がある。

何かと黒い噂が絶えないMMに至っては現実世界でも絶大な権力を誇るのだろう。

「僕たちもいつまでも高校生でいられる訳じゃない。現実社会での生活がある以上は卒業後のことも視野に入れなければならないんだ」

レオは真剣に、そう言った。

「……そうね」

「だからこそ、高校という拠点があるうちに、卒業までに、何としても事態の究明に動くべきだ。」

それに、何事もなく卒業して仕舞えば、僕たちを集めたであろう存在に何をされるかわからない。

今の僕たちには情報も戦力も人手も技術も足りていない」

「……その通りだわ」

「ならば、使える手は使うべきだ。切れる手札は多いに越したことはない。幸い、結界のおかげで高校内ならばサーヴァントも感知されない。」

「どうだろう、僕は今この時こそ動くべきだと思うけど」

レオの言葉に、遠坂は暫く沈黙していた。

彼女が俺に述べた言葉はどれも正しい。

少なくとも俺を危険に晒さないように配慮してくれたことには感謝の言葉だけでは足りないほどの恩義を感じる。

レオの言うことも正しいのだろう。おそらく、彼も動きたくても動けなかったのだ。そこへ現れた俺という存在、おまけに英霊召喚ができる本まで所持している。

これを好機と捉えるのは実に理にかなっている。

「……分かったわ。ただし、他のメンバーにも意見を聞くべきだわ」

「もちろんだ。我々は共同体、志を共にする仲間だ。誰か一人を王に戴く組織ではない」  
レオの口から出たとは思えない言葉だ。いや、別に彼が変質したわけではないのだから。ただ、今は目的のために合理的な判断を下しただけだ。

「じゃあ、明日の放課後、この拠点にみんなを集めましょう。レオは白野たちに連絡を、私はユグドミレニア姉弟に、リツカは魔眼コンビに連絡を」

「了解した」

「ああ」

こうしてその日はお開きとなった。

原作はすでに始まっている。ネギくんから離れているが、こうして遠坂たちのもとに異変が発生している。

エリちゃんたちと暮らすにはこれらの状況を打開するしか道はない。

学校からの帰り道、なんとなく教会に寄り道していた。

一応、お菓子はスーパーで購入済みだ。

「ちーす、ココネちゃんいるー?」

教会の扉は新しく取り付けられていた。

新品独特の匂いを鼻に感じながら、扉を開く。

「ついに、本音を出した」

そこには案の定、ココネ嬢がいた。いつも通り椅子にちよこんと座っている。

が、その横にー

「あんた……よくものこのこ現れやがったね！」

教会に入るやいなや、ミソラ嬢が全力で襲いかかってきた。一般人たる俺には避けることすらできない。

俺に飛びかかりそのまま押し倒す。少しドキツとしてしまった。

だが、すぐにミソラ嬢の怒りの原因に思い至る。

「すまんかった、だが俺もシャークテイの怒りを受けるのは怖いんだ」

怒った時の彼女はもはやシスターではない。鬼、いや悪魔にも等しい恐怖のオーラを放っている。

「あたしだってやだよ！　　というか全然信じてもらえんかったし！」

それは日頃の行いのせいだ、諦めてくれ。

「あ、ココネちゃん。お菓子はこの袋に入ってるからー」

「わーい」

棒読みのセリフとは裏腹にすごい速度でお菓子袋を搔つ攫っていくココネ嬢。すでに椅子でもぐもぐと食べ始めている。

よかつた、これで悔いはない。

「さあ、美空よ、存分に俺に罰を与えるがいい」

俺は五体投地でミソラ嬢を迎える。

エリちゃん優先とはいえ、やったことのツケはしっかり払わねばならない。

「へえ、覚悟は出来てるってわけね……じゃあ存分に恨みを晴らさせてもらおうか!!」  
俺はその日、またも藁人形を損壊させた。

「あー、痛い。すごく痛い」

教会の椅子に座りながら俺はボコボコになった顔を押さえていた。

ミソラ嬢はいつから暴力系ヒロインになってしまわれたのか。

影薄いのもいけないが属性の盛り過ぎも危険だ。

生足魅惑の彼女のようになってしまっぞ。

「あー、清々したわ。ついでに日頃のストレスも解消されたわ」

それも含めてたのかよ。

「というか、またシャークテイいないな。今日は日曜でもないから仕方ないとは思う

が……」

会えないと、それはそれで寂しいものがある。

原作ではさほど描かれなかったが、彼女はあれで立派なシスターなのだ。

「あ、それなんだけどころそろそろ戻ってくると思うよ?」

「なんか知ってるのか?」

「いや、アレだって。例の神父の件」

ミソラ嬢の一言で思い出してしまった。せつかく忘れてたのに……。

「なんか一緒に来るらしいよ、挨拶だつてさ」

なん、だと。

「……うむ、ココネちゃんにお菓子渡したし俺もそろそろ帰ろっかな」

「いやいや、急にどうしたリツカ。いつもならもちよつと遊んでくだろ」

遊ぶつてあんた、主にあんたら二人に罵られてるだけじゃない。遊びなんかじゃない

よあれは。

でも、そこがいい。

「いや、今日は遠慮しとくよ。たまには早く帰つてエリちゃんと過ごしたい」

一応本音だ。半分。

もう半分は是が非でもあの神父に遭遇しないためだ。



この世界でも良からぬことを企んでいるとは限らないが、そもそも精神が破綻している彼と出会っても良いことがないと思う。

だから逃げる。

「じ、じゃあシャークテイによろしくなー!」

「え、あ、ちよつと!!」

全速力で逃げる、藁人形は壊れてしまったけどそれでも俺の足は平均よりはマシなはず。

本気出せばいけるはず、そう思い込んで俺は一目散に教会を去った。

リツカが去った教会、そこへ彼と入れ替わるように二人の人物が訪れた。

「ただいま帰りました、大人しくしてましたか美空」

「毎度のように聞くけど、私もそう毎日イタズラなんてしないでですから」

一人はこの教会の管理者、シスターシャークティだ。美空やココネと同じく修道服に身を包んだ褐色の美女。

「ふふ、お話に聞いた通り、元気がいい子ですね」

そしてもう一人、白髪褐色の神父が穏やかに述べた。

「ええ、元気が良過ぎるくらいですよ。どうせなら一日くらい預かってみますか?」

冗談交じりに述べるシスターに、神父の青年はやんわりとお断りした。

「シスターシャークティ、その人が噂の——」

美空が恐る恐るといった具合で尋ねる。

シャークティも思い出したように応えた。

「ああ、そうでした。今回は新しく赴任される神父様のご挨拶に参ったのです。しっかりと傾聴するように」

「そう、畏ることはありませんよ。私もそんなに偉いわけではありませんから」

言い聞かすように述べるシャークティに、神父はあくまで穏やかにそれを制した。

そして優雅に胸に手を当て己が名を告げる。

「私は『シロウ・コトミネ』。この麻帆良学園都市内に新たに設置されることになった言峰教会を管理する神父です。

リトル・レディ  
よろしくお願ひしますね、お嬢さん」

## 万能の人

「今日集まってもらった理由はすでに聞き及んでると思うけど、改めて言うわ。

ズバリ、英霊召喚についてよ」

例の空き部屋に置かれた長机、その最奥で一人立ち上がってホワイトボードを叩くのは黒髪凛。

その横には衛宮士郎と、レオが座す。

俺はというと衛宮の隣に大人しく座っていた。

「それは聞いた。リーダーとしてはどう考えてるんだ？」

俺と同じ列に座るユグドミレニア弟・カウレスが発言する。

「リーダーじゃないって……はあ、まあ私の意見としては召喚すべきと考えてるわ」

リーダーの言葉に今度は姉の方、フィオレが声をあげた。

「召喚するのは如何なる英霊なのでしょう、遠坂さんが決めたということとは既に候補はいるのでしょうか？」

「ええ、暫定だけど、今回は藤丸くんの縁を頼ってレオナルド・ダ・ヴィンチを召喚するわ」

今回使用するあの本、中に書いてある記述の通りならば縁が必要となってくる。ランダム性であることは痛いがなんとかそれっぽい触媒を集めて使用する他ない。

あくまで記述を鵜呑みにするのであれば、簡易的な触媒でも召喚可能らしいが、いくらなんでもチート過ぎると思う。頼らざるを得ないのが現状なのだが。

「待った。それってつまり他のサーヴァントが来る可能性もあるんだろ。さすがに血迷い過ぎじゃねえか？」

両儀式は召喚には反対のようだ。あくまで確実性が認められた方法での召喚を望むのはごく自然、当たり前前の帰結である。

「ええ、彼女の言う通り。私は反対よ」

沙条綾香は強い意志の籠った目でそう宣言した。

「俺も反対だ。何も急ぐことはないだろう、調査は少しづつだが進んでいると聞く。魔術による調査に参加できない俺がいうのもなんだが、仮に召喚するとしても確実に引ける手段を探した方がいい。」

なにより、あの本の記述はふざけている」

少しばかりの憤慨を含んで遠野志貴は述べた。

「僕は賛成だ。」

現在の我々の状況は非常に思わしくない。これは我々を引き寄せた存在も感じてい

ることだと思う。何せ、まだ何も分かっていないのだから」

レオは当初と同じく召喚に賛成している。

「私は……ええ、召喚はすべきだと思う。使える手札を使わないのはそれこそ慢心に近い下策よ」

金髪凜も賛成派のようだ。

「私も。確実性を求めるだけでは足りないと思う」

はくのものも賛成派らしい。彼女も金髪凜と同じく厳しい環境での生存を強いられてきた者としての意見かもしれない。

「やめといた方がいいと思うぜ。得体の知れないモノを信用するのは、経験上俺は反対する」

両儀式は腕を組んで顔をしかめた。

「いいや、それでもやるべきだと思うよ。確率の話は正しいが我々の現在と比較するほどのことじゃない。」

失敗を視野に入れた上で決行すべきだ」

レオは――

「待て。俺たちはお前を王に置いているわけじゃない。」

焦る気持ちは分かるがお前だけの意見で強行するべきじゃない」

遠野——

「私は反対します。今、すべきことではない。」

現状、あの本の解析は進行しています、それを待つてからでも遅くはないと私は判断します」

ラニー——

「姉さん……」

すっかり影の薄かった桜は姉を心配そうに見つめて……いるように見せかけて衛宮をガン見していた。

ちなみに原作と異なり髪の色は黒髪凛と似たものになっている。

その後も、召喚反対派と賛成派のメンバーによつて激しい論争が繰り広げられていた。

どちらも道理はある。しかし、俺個人の願望としては召喚一択だ。

……俺はエリちゃんたちとの生活の方が大事なのだ。

結局、会議の結論として召喚することになった。

決定打となったのはやはり、調査が一向に進んでいないことと、あの本の解析はまだ

一割も進んでいないという事実だった。

それでも確実性を欠き、得体の知れない魔導書を用いることに懸念を示す声があったが、渋々といった具合で最後には首を縦に振った。

落とし所としては『危険なサーヴァントなら俺が即自害させる』というもの。

俺も、責任を取れるほどの力もない凡人ではあるが召喚の際には俺一人で召喚陣の前に立つことを進言した。

まるで意味のない提案だが、俺にはもはやこうすることでしか責任を果たせない、というか俺の方が罪悪感で潰される。

やるのであれば早い方がいい、と召喚は当日のうちに言うことになり、早速ながら俺は描かれた陣に向かって詠唱を行なった。

「――抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!!」

詠唱と共に陣から突風が吹き荒れた。

円の周りに置かれた触媒、モナリザのレプリカがガタガタと揺れる。

本の記述通りならば、それで十分。あとは俺の縁でどうにかできるらしいが果たして。

ちなみに召喚の間際にも、反対派はちゃんとした触媒を用意することを提案してい

た。その通りだ、本来ならそれでも不十分過ぎるくらいなのだが。

ともあれ、英霊の召喚は上手くいったらしい。俺の左胸に令呪が刻まれていく。三度目ともなれば痛みも慣れた。

やがて、吹き荒れる風も止み、召喚陣の中央の人影がその正体を現す。

長い杖を持ち、長い髪を垂らし、抜群のプロポーションを誇る肉体を誇るように堂々と立っている女性。

「ご機嫌よう、諸君！

キヤスター、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

君たちの求めに応じて参上したよ」

それは、まさに俺が前世で見た通りの姿だった。

あの懐かしき、万能の人。画面越しではあったが、俺も彼女には色々と世話になった。

俺はぐだ本人ではないが彼女を知っている。だからこそ間違いないと確信を持てる。

俺以外の面々は未だ警戒を解いていない、当たり前前だ。ここで彼と顔見知りなのは俺だけなのだから。

「ちよつとちよつとー、呼ばれたから来たのにそんな殺気ばかりぶつけないでよね。

ひどいなあもー」

ぶーたれる彼に、俺は意を決して声をかける。



「レオナルド・ダ・ヴィンチ、本人に間違いないな？」

我ながら不自然な言葉運びだ。しかし、彼女ほどの知恵者と相見えるに当たって、俺はぐだを演じ切る自信がなかった。

だって、彼と絆を築いたのはこの俺ではないのだから。

間違いなく、俺ではないのだ。

「……うん。久しぶりだね、リツカくん。元気そうだなによりだ」

しかし、彼は優しく微笑んでそう応えた。すべて、全て見透かしたような声で。尚も、俺をあの最後のマスターのように扱って。

きつと、彼はすべてもう理解している。俺があのだ立華ではないことも、それでも俺と彼に縁が結ばれている意味も。

それだけで、俺は二の句を継げなかった。

「なーに辛気臭い顔してるんだ、君はリツカだろう？ ならば問題ない、こうして縁も結ばれた。呼ばれたからには期待に応えるよ、マスター」

……彼がどういふつもりで俺を立華と扱うのかは分からないが、それでも俺が今取るべき行動は立華を演じることであると判断した。

「ああ、久しぶりだ、ヴィンチちゃん。色々と分かっちゃってるかもしれないけど、敢えて言うよ。」

俺に、手を貸してくれ」

「うん、もちろんさ」

彼の一言に、周りの面々もようやく警戒を解き始めた。

その中の一人、衛宮が初めに声をかけてきた。

「間違いないか？」

「ああ、彼はレオナルド・ダ・ヴィンチ。俺が知ってるキャスターのサーヴァントだ」  
「彼？」

二人称に疑問の声を発した衛宮だが、すぐにダ・ヴィンチちゃんが声をかけてきた。  
「やあやあ諸君、何やら尋常ならざる事態にあるようだね。顔に書いてあるよ？」

とりあえずは、そちらの事情を聞こうじゃないか。いいかい、マスター？」  
確かめるように問う彼に俺は頷きを返した。

「ーと、というのが我々が今置かれている現状です」

机を挟んでダ・ヴィンチちゃんと対面するのはレオ。その横に遠坂と衛宮が座ってい

る。

俺はダ・ヴィンチちゃんの隣だ。

理由としては、まあ、一応知り合いだからということだろう。ちなみに彼と反対側には遠野志貴が控えている。

「ふうむ、なるほどね。つまり私の叡智が必要、ということだね？」

キラ、と目を光らせながらダ・ヴィンチちゃんが述べた。

「……なんだか、思ってた人物像と違うな姉さん」

カウレスは姉に耳打ちしていた。真後ろなので丸聞こえだが。

「よろしい、ならば存分に我が万能を見ていてくれたまえよ、諸君。必ずやご期待に応えて見せるとも、いや、期待を上回ってしまうかもしれないけどね」

「ず、ずいぶん自信ねキャスター」

ダ・ヴィンチちゃんの謎のハイテンションに金髪凛は若干引き気味だ。

「まあ、期待して待っていてくれまえ。……とりあえず、私の魔力の隠蔽とあの本の解析だったかな？」

「ええ、そうよ。私たちは学園側に存在を知られるわけにはいかない。魔法使いを名乗る連中に見つかるわけにはいかないの」

黒髪凛は冷静に告げる。

「了解だ。……それにしても、魔法とはね。魔術に代わる技術なんだって？　まあ魔術のない全くの異世界となれば法則も変わってくるのだらうが」

ま、とりあえずは調査から入るのは懸命だね、と言いつつダ・ヴィンチちゃんは杖を一振り。

「つ、ホントに魔力を隠しやがった」

「うんうん、カウレスくん、君のような反応を返してくれると私はとても嬉しいよ」

満足げに頷くダ・ヴィンチちゃん。どうやら周りの反応を見る限り彼の魔力の隠蔽はちゃんとされているらしい。

「とはいえ、この状態ではろくに魔術を振るえない。」

この学校には結界が張つてあるんだろ？　ならこれは一旦解除して問題ないかな  
もう一度杖を振るう。

今度は隠蔽を解いたらしい。どうにも俺は魔法も魔術もからつきしなので分からな  
い。時間のある時に遠坂たちに見てもらったが見事に才能なしの判定を下された。こ  
んなところまでぐだに似なくてもいいと思う。

「ではキャスター。今日のところはリツカくと自身の拠点に帰ってもらって構わな  
い。なに、隠蔽工作が可能ならば返しても問題はないだらう。いいね？」

問いかけるレオに否を突きつける者はいなかった。

「……お氣遣い、感謝するよレオナルドくん。」

では、行こうカリツカくん、我が新しいマイルームへ！」

俺の肩に手を乗せダ・ヴィンチちゃんは上機嫌にそう述べた。

「解散、てことかな？」

「ええ、そうね。サーヴァントとマスター、呼んだ直後から色々と任せる前に一度、二人きりで話してもらった方がいいわ」

黒髪凜の言葉に俺は「ありがとう」と返した。

「みんなも済まない。今回は完全に俺の責任だ。」

本来なら万全を期して行わねばならないものを強行したのは俺だ。

この負債は実績で必ず賄う」

ぶっちゃけ今回ののは俺のワガママがレオの方針と噛み合っただけのことだ。つまり、俺が今回の召喚を強硬した原因だ。

それを未だギスギスしていた裏生徒会にはつきりと伝える。

俺はこの中で一番の新米だ。加えて、組織内に不和を齎したとなれば責任の所在はつきりとしておくべきだろう。

「……なに、カッコつけてんだ。誰もお前の意見に流されたわけじゃねえよ」

しかし両儀式は不服そうにこちらを睨みながらそう言った。

「全くだ、何を勘違いしている藤丸。これは相談の上で決まったことだ。誰かに責任を押し付ける問題じゃない」

「結果として良い方に転がった。それで十分だぞ」

志貴、衛宮が続く。

「ええ、今は成功したことを喜びましょう。本の解析その他諸々の作業は後日行ってもらうわ、今は帰って休みなさい」

最後に黒髪凜が諭すように述べた。

「……分かった。じゃあ、また明日」

そうして彼らに別れを告げ、俺は新たに契約したダ・ヴィンチちゃんを連れて自室に帰った。

リツカの帰ったあと、他のメンバーもぼちぼち帰路についていた。

そんな中一人ぼう、と佇むアルクエイドが目に入った遠野志貴は心配して声をかけた。

「おい、大丈夫かアルクエイド？」

「え、ああ、志貴……うん、大丈夫よ」

少しの動揺を挟みながらもアルクエイドはいつもの調子で答えた。

「……本当か？」

「ええ、本ただけど。志貴こそ急にどうしたの？」

キョトンと首をかしげたアルクエイドに志貴は、自らの懸念が思い過ぎであったと判断した。

「いや、もし疲れてるんだったら送ろうか？」

「ううん、平気。志貴こそ、あんまり無茶しちゃダメよ」

ちよん、と志貴の額を小突くアルクエイドに、志貴は顔を少し赤くして背けた。

「なあに、イチャイチャしてんだアンタら。ほらそろそろ引き上げるぞ」

二人の甘いムードを見兼ねたカウレスが嫉しそうに声をかける。志貴は「イチャイチャはしてない」と言うものの、自身の顔がだんだんと赤くなっていくことを自覚してか目を合わせようとはしなかった。

「ふふ、志貴ってば、やっぱり可愛い！」

「おわつ、だ、抱きつくなくて！」

口ではそう言いながら顔を綻ばす志貴に、カウレスは一層げんなりしながら「もう勝手にやってくれ」とその場を去った。

「ええ……ええ、分かつてるわ」

宵闇の中、アルクエイドは自室として充てがわれた学生寮の一室で一人、何事か呟いていた。

彼女の他に部屋には誰もいない。居たとしても彼女はきつと眠らせてこの交信を行っただろう。

『お前とて理解しているはずだ、アルクエイド。奴の復活だけは何としても阻止せねば



ならないと』

その声は部屋に響いているのではない。彼女、アルクエイドの脳内に直接届けられる概念的音声だ。

「……それにしても急ね。まさかここ数ヶ月でいきなりそんなこと言われるとは思わなかったわ」

応答する彼女も慣れた様子だ、つまりはこの交信は今回が初めてではないということ。

加えて、彼女ほどの存在が気安く話しかける存在ともなればごく限られた人物だけだ。

『儂として予測できんことがある。今回はそれほど相手のいうわけだ』

彼女に届けられる声は概念ではあるが声質は臙げにも伝わる。

少々年老いた、しかし力強さのある声。

「私たちをこの場所に集めた奴と関連しているってわけね。……まあいいわ、仕事に変わりはないんでしょう？」

確認するような口ぶりに、交信相手もただ肯定だけを示した。

それだけで彼女には十分だった。

「わかった。見つけ次第、排除するわ」

『頼む』

その言葉を最後に交信は途切れそうになる。

アルクエイドはなんとなく、ふと感じた違和感を頼りに最後にもう一度確認を行った。

「ねえ、これは本当に学園側への警戒よりも大事なことなのよね？」

それは僅かな違和感。すべてが自分の知り得る知人と感じながらも引つかかりを覚えた歪な綻びからの確認だった。

『ああ、最優先事項だ。生憎と儂直々に干渉できる世界でもないようだしな。今回はお前に頼むしかない』

しかし、答えを聞いてもどこもおかしいところは感じなかった。

真祖の姫、アルクエイド・ブリュンスタッドは地球においておよそ最上位に位置する生命体である。

それは、地上を去った地球の触覚としての神霊に代わる、真祖という新しい触覚、その中でも限りなくオリジナルに近い彼女は地球の代弁者と言っても差し支えない。

本来なら自我すら希薄な存在、それが彼女という存在だった。

それを今のような明るい性格にしたのは紛れもなく前世からの付き合いである魔眼持ちであることは確かであり、それが何の奇跡か今世でも維持されていることにアル

クエイドは深く感謝を抱いていた。

だからなのかもしれない。

昔の彼女であれば知性を働かせるまでもなく見破れていた虚偽を見逃してしまつたのは。

ただ一つ確かなのは、今尚、地球の化身として絶大な力を誇る彼女を欺くことができない存在がこの世界に存在し。

そして――

――彼女らに破滅を齎そうとしていることだろう。

## 幸運のランクはEだ。

「ほほう、ここが今の君の部屋かあ」

自室に戻るなり、ダ・ヴィンチちゃんは部屋をじっくりと見回していた。実に興味深そうに観察している。

「おかえり子イヌーって、あんたなんでここに!？」

ニコニコしながら部屋の奥から駆けてきたエリちゃんは、傍らのダ・ヴィンチちゃんを見るなり目を見開いて驚きの声をあげた。

「やあ、久しぶりだね。今日からまたよろしく頼むよ」

あくまでいつも通りに挨拶をするダ・ヴィンチちゃん。

対してエリちゃんは、少し責めるような目つきでこちらに視線を移した。

「子イヌ?」

「ああ、彼にはまた力を貸してもらうことにした」

昨日の今日で薄情かもしれん、だがなんと言われようと俺はこれから訪れる災厄に立ち向かわねばならないのだ。

俺は藤丸立華であっても最後のマスターではない。

そんなことは分かっている。

だからこそ、使えるものは使う。

そうしないと俺はただの凡人のまま大きな力に押しつぶされて消えてしまうことだろう。

「まあ、ダ・ヴィンチさん。万能の人ね！」

遅れて何事かと玄関に来たのはアビー。

エリちゃんとは対照的に、また増えた顔見知り顔に顔を綻ばせていた。

「久しぶりアビーくん、元気にしてたかい？」

「ええ、ええ！ 日に日に増えていくのね、まるでカルデアにいた頃のように懐かしいわ」

無邪気に喜ぶアビーは、ダ・ヴィンチちゃんの手を引いて部屋へと誘う。彼も困った風に諫めながらも、満更でもないように口角を上げていた。

「カルデア、ね」

俺はそれを直接目にしたことはない。されど彼女らとの間に縁を結んでいる。

俺は直接、魔神王と相對したわけではない。されど人理焼却事件の解決は俺の実績となっている。

後者に関しては転生の話をスムーズに進めるため自らついた嘘だが、前者は俺が知ら

ないうちに結ばれていたものだ。

俺は思う。

果たして、最後のマスターではない俺を呼ぶ意味はなんなのかと。

素直に『彼』の方を転生させておけば良かったのでは、と。

結局、何と口にしようと俺は偽物でしかなく彼のように強い意志を持つことも、万人に慈愛を向ける博愛精神などさらさら持ち合わせていないのが俺だ。

「……子イヌ？ 大丈夫？」

気づいた時には、エリちゃんの顔が真横に迫っていた。

透き通るような青い瞳が俺の視線の先で揺れている。

とても綺麗な瞳だと思った。

「ああ、大丈夫だよ。さ、部屋に戻って。急いでご飯作るよ」

いや、今するべき考え事じゃない。今はとりあえず彼女らにご飯を作らないと。

「いやあ、君がまさかここまで料理上手なんてね。……もしかして前からだったかな？」  
夕食を終え、エリちゃんたち二人を寝かしつけた俺たちはリビングに置かれた椅子に腰掛けながら談笑していた。

わずかに、探るような物言いだと感じた。だが悪意の類は感じない。

「……ダ・ヴィンチちゃん、防音、できたかい？」

表情に出すことなく自然にそう問い掛ける。

「うん……大丈夫だよ」

ダ・ヴィンチちゃんは少し戸惑うような仕草を見せて、頷いた。

彼は聡い人物だ。どれくらいかというと、俺を基準としてその千倍くらい。

万能の人、そう呼ばれる彼はあらゆる分野に精通すると共に、人の心の機微に対しても敏感に感じ取ってくる。

「じゃあ、改めて。」

初めましてレオナルド・ダ・ヴィンチ

彼に対しては限りなく誠実でなければと俺は思った。

「ああ、初めまして、だね。藤丸立華くん。最後のマスターと同じ名前を持つ少年」

やはりこちらの全てを見透かしたような目で応える彼。

隠し事などする気はないが、もししたとしても形骸でしかないだろう。

「率直に聞きたい、貴方はどこまで分かる？」

「君があの子と同じ名前、同一の魂、同質の魂をしていることくらいかな。色々と予想は成り立つんだけど、君の反応を見る限り、おそろく」

「いや、自分で話すよ。自分で話さなきゃいけないことだと思うからね」

俺は素直に彼に全てを打ち明けた。転生の詳細、俺がなぜ彼らを知っているのかも全て。

自分でも不思議なくらい口が軽いと思った。もともと、俺ら以外の人物を諦めて見えてきた俺だからこそ、彼に対して感じる不思議な抱擁力に心地よささえ感じていた。

「……なるほど。君は、やはり、彼とは違うんだね」

全てを話し終えて、俺は妙な脱力感を感じていた。

清々しいと思う反面、もはや何事をも些末なものと感じてしまうほどに不思議なほどの虚無感を覚えた。

「ああ、全てを知っているように見せかけて誰でもない、その他大勢の一人に過ぎないのが俺だ」

覆しようがない事実。



俺は、これまですべてにおいて自身とエリちゃんとアビーのみを優先していた。その他の数多関わる人物は根本的に自分と相容れない存在であると判断し、自身が管理下に置いていた彼女たちを愛していた。

改めて考えることも憚られるような悍ましく浅ましい欲得だ。

だが、先日、遠坂たちが俺を気にかけてくれたことを知って、俺の心には迷いが生じた。

果たして、俺の選択の数々は合っていたのか、切り捨てるかと判断したのは本当に正しい選択だったのか。

疚しい、卑しい、浅ましい。

それだけが俺の考える俺の評価だった。

別に構わないと信じてきた。いずれは道を違える存在。せめて俺のハッピーエンドの礎になってくれとさえ。

そんな、くだらない俺を遠坂たちは気に掛けた。如何程の覚悟も、能力も無いと知りながら、なおも気にかけた。

そして、エリちゃんは、エリザベートはこんな俺でも側にいると言ってくれた。

これまでの二年が虚偽であったとは思わない。しかし彼女もいい加減気付いているはずだ、彼女の知る藤丸立華とこの俺は別々の存在なんだと。

いくら魂が似ていようが俺にカルデアでの記憶など無いし、たった一人で人類史を焼却した相手に立ち向かえる勇氣もない。

所詮はその程度の凡人なのだ。

……だから、そんな力不足な俺が、全てを救いたいなんて。

そんな思いを抱くのは傲慢だろう。

「……俺は最後のマスターではない。それでも俺に力を貸して欲しい」

渦となつて脳内を掻き乱す数多のバッドエンドを必死に思考の隅に追いやりながら俺は平静を装い問いかける。

「……」

ダ・ヴィンチちゃんは俺の瞳をジツと見つめながらしばらくの間沈黙を続けていた。

「……ああ、全く。これは彼というよりも、『君』に似ているよ■ ■ ■」

そして、ゆっくりと瞼を閉じて呟いた。その言葉は耳に入つて来なかつたが。彼が何らかの決断をしたのは確かだった。

「いいよ、何せ君は私のマスターだ、命令には素直に従うさ」

やはり令呪は偉大。そう思った。

「ありがたい。俺の当面の目的は話したと思うが……」

「ああ、こちらの世界に転生してきた彼ら。魔術師の集団・裏生徒会への助力だね」

話が早いのは良いことだと思う。

「その通りだ。ついでに調べて欲しいことも幾つかあつてな—」

「ふむふむ—」

「—で、—の開発もお願いしたい」

「なるほど、そりゃ面白いね！」

「ついでに—」

「—ほう、それは」

新たに契約したサーヴァント、ダ・ヴィンチ。

彼の洞察力、発想、叡智は噂の通りで、俺は理解力のある彼に次々とお願いを伝えていった。

「……おや、いつの間にやら日が昇っていたようだね」

ダ・ヴィンチの言葉に、窓へと視線を向ければ穏やかな朝日がカーテンの隙間から漏

れ出ていた。

布団で安らかな寝息を立てる二人のサーヴァントが実に微笑ましい。

「すまないねマスター、興味深い話だったからついでに話し込んでしまった」

「いや、礼を言うべきはこちらだ。やはり貴方を呼んでよかった、俺の目的も裏生徒会の目的もスムーズに進むことだろう」

本の解析、その他調査はもとより、新たな礼装の開発にも存分に力を発揮してくれるに違いない。

魔術だけではない。

魔法という異なる技術であつても彼なら十全に使いこなしてみせるだろう。

「……だが、最優先すべきことは」

「彼女たちと、私の安全だろ。そう何度も言わなくても分かっているさ」

「ならいい。まだ道は長いのだから……万全に」

少しばかりの目眩。視界がブレて平衡感覚が乱れる。

「おっと、大丈夫かい、マスター？」

「ああ、ありがとう」

ふらついたところをダ・ヴィンチに支えられた。むにゅん、と頬に当たった柔らかい感触ですっかり目が覚めた。

「大丈夫だ。それより今、何時だ？」

「五時だけど……君、休んでる？」

心配そうに尋ねるダ・ヴィンチに「ああ」と答える。

別に徹夜したわけでも激しい運動をしたわけでもない。

ただ、アルビレオの話が本当なら今この時でさえ一刻の猶予もない。出来ることはなるべくやっておくべきなのは確かだ。

「そうか……どうだろう、朝食は特別に私が作ってあげようか？」

ニヨニヨしながら顔を近づけるダ・ヴィンチ。

「……ああそうだな、一度、ダ・ヴィンチちゃんの手料理を食べてみたかったんだ」

そう答えるとダ・ヴィンチは「任せてくれたまえ！」と腕を捲って、鼻歌交じりにキッチンに向かった。

「……」

なんとなく、俺はキッチンでテキパキと料理する彼の姿をしばらく眺めていた。

その後、裏生徒会本部にダ・ヴィンチちゃんを送り届けた俺はその足でエヴァのもとへと向かった。

学園の外郭に位置する大きなコテージ、その扉をノックする。

「おや、藤丸様、マスターにご用ですか？」

扉をあけて出てきたのはエヴァの専属メイドにして相棒たる絡繰茶々丸。見た目からして明らかな口ボである。いや顔は可愛いが。

「ああ、休みにすまないな。メンテナンスだ」

ちなみに学校は春休み期間。あのエヴァのことだ、今頃はベッドで惰眠を貪っていることだろう。

「なるほど、マスターはすでに起床しておられます。中でお待ちください」  
「お邪魔します」

無機質な声に誘われ、コテージ内に入る。

エヴァが朝から起きているなど、珍しいこともあるものだ。

リビングに誘えられたソファに腰掛けながら静かに待つ。

「なんだ、休みに」

そうこうしていると階段から気怠そうな声が聞こえてきた。

見ればネグリジエ姿のエヴァが不機嫌そうに目を擦っている。

あれ、起きてたんじゃないのか？

「すまん、また壊れちゃった」

藁人形を懐から取り出してみせる。

「お前……なんだ、最近の一般人はそんなに死亡フラグ立ちまくってるのか？」

まさしくその通りである。

俺は改めて並行世界の藤丸立華に敬意を捧げた。

「分かった分かった、いいから貸してみろ」

俺から藁人形をふんだくっていじり始めるエヴァ。

修理に集中している彼女をよそに、俺はその身体をじっくりと脳裏に焼き付けてお

く。

透き通るような白い肌、露わになったその太腿、足、腕、端正な顔もしっかりと脳に

記録する。

……ふう。

「藤丸さま。不潔な視線をマスターに向けなくてください」

じつくりとロリババアの身体を堪能していると、急に目の前に茶々丸氏が現れた。というかぎつくりバラすなよ。

「……おい、せっかく私が直してやってるのに、そんなことしてたのかお前」

俺の視線に気付いたエヴァが憤怒のオーラを出している。

「いやまて、逆に考えるんだ。

「私の身体に恥ずかしいところなんてないんだから、見せちゃってもいいや」と考えるんだ」

ジョースター理論は偉大である。

「アホか貴様！　好き好んで貴様のような変態ロリコン野郎に見せる奴がいるか!!」  
やっぱ知ってたのね、俺がロリコンって。

「しょうがないだろ！　お前がそんな格好してるから、俺だって内なる獣ビーストが抑えきれないんだよ!!」

「逆ギレするな！　おい、寄るな、それ以上こちらに近づくな変態!!」

藁人形片手に必死にこちらをしつつ、と拒絶するエヴァ。ああ、なんていじらしい。魔力も封じられか弱い少女でしかない君に俺を拒むことなどできようか？

「お戯れが過ぎます、藤丸様。それ以上進まれるなら即刻排除いたしますよ」



ガチャン、と腕を砲台に変形させた茶々丸が立ち塞がった。

「待て待て、本気で××するわけないだろ。ジョークだよジョーク」

俺の今世での貞操はエリちゃんに捧げると決めている。

「いえ、貴方はデータ上変態ロリコンとして登録されています。その発言は信用に値しません」

データ上ってなんだよ、そんな不名誉なデータ残ってんのか。

いや普段の行動からして他の記録にもそんな感じで残ってそうだが。

「ふむ……よく見るとお前もなかなか可愛らしいデザインじゃないか」

「は？」

茶々丸。ネギクラスの葉加瀬とエヴァ、超の共同開発で完成した魔法と科学のハイブリッド人形。

その関節部はロボのものではあるが、顔立ちは整い、そのプロポーションは十分美女のランクにある。

「俺の守備範囲は広い。ケモノやもちろんロボ子だってばっちこいだ」

「……理解不能」

無表情で無機質な声だがなんとなく侮蔑の感情が込められているのは理解した。

「問答無用!!」

だが俺は行く。嫌われようとボコられようとそこに幻想郷があるのならば行かずしてなんとする。据え膳食わぬは男の恥、は違うか、

「そうですか」

「え」

予想外にも微動だにしなかった茶々丸の胸部に勢いのまま突っ込んでしまう。

ゴチ。

「い……っつてえ」

しかし思っていた感触とは真逆の、胸部の鋼鉄具合に俺はジンジン痛む額を必死に抑えて悶えた。

それを見下ろしながら茶々丸は平然と告げる。

「私のボディは鋼鉄製、それでも辱められるというならばどうぞ好きになさってください」

どこか勝ち誇ったような物言いに、しかし反論する気力は残っていなかった。

「お、お、おのれ……俺のキューティクルなお顔に傷を、おお」

「なにやってるんだお前ら……」

その様子を呆れたようにエヴァが見ていた。

納得できん。

「納得できんぞ茶々丸うう!!」

「はあ……懲りない方ですね」

飛びかかる俺を意に介してもいないような冷めた視線、ちよつとキタのは内緒である。

しかし甘い茶々丸。俺が貴様の弱点を知らないとでも？

「隙あり!!」

「つ、まさか!」

俺は飛びかかった勢いで後ろに回り、茶々丸の後頭部にあるネジへと手をかけた。そして全力で回す。

「うおおお!!」

「ぐっ! あなた如きの脆弱な魔力、で……うひゃん!!」

え。

「……う、うおおお!!」

「ああ、やめなさい! 今すぐやめーひう!」

……聞き間違いではない。

ネジを回す手を緩めずに俺の脳内は茶々丸が発した嬌声に興味を集中させていた。

バカな、俺でも彼女を喘がせることができるとは。

「うおおおお!!」

「な、なぜ、このような、ひゃん! お、男のーはあん!」

なぜかは分からない。しかしこれが実に良い結果であることは確か。俺は夢中になってネジを回し続けた。

「魔力、こんな量、ひっ! ど、どこからああん!」

俺に聞かれても知らん。

だがとてつもなくいけないことしてる気がする。

「いい加減、やめんか」

「も。ぶ。っ!」

エヴァが投げつけたクッションを顔面にくらい、俺の手からネジが離れていく。ああ、我が友よ!

「くっ、こ、この!!」

慌ててクッションを退けると、見たこともないくらいに憤怒の感情を顔に浮かべた茶々丸が複数の砲身をこちらに向けていた。

バリバリの戦闘モードである。

「ちよ、待て待て待て、シャレにならんぞ!」

「吹き飛びなさい!」

しかし俺の声は届く間も無く、砲口が火を噴いた。

ドドド……ともはや部隊規模の砲弾がこちらに迫る。

「うわああああ!」

俺は無心になってとにかく走った。避けた、のかも分からないほど心を捨て今を生きぬくことだけを考えた。

「ほう、辛うじて避けているのか。すごいな」

「まだ生きていますか、これで!!」

がしゃん、と嫌な音がして見てみれば茶々丸の背中から特大のミサイルが現れていた。

いや、サイズが明らかにお前よりも大きいんだけど!?

「対象・変態ロリコン、いや、アガルマトフィリアクソ野郎に固定。

ロツクオン……」

ロツクオンすんなよ、狙い撃つのは兄貴の特権だよ!

「吹き飛びなさい!!」

「待て茶々丸、それ私の家も吹き飛ばすから」

今まさにミサイル発射! といったところの茶々丸の肩にエヴァは手を置いた。

「あ……」

我に返ったかのように冷静な眼差しで家を見渡す茶々丸。

それはもはや家と呼べる状態にあらず、無残な瓦礫が積み上がった廃墟のようになっていた。

ちなみに、奇跡的にも階段と柱が生き残っていたらしく二階は無事だった。

「私、は……」

「うん。私もあの状態には腹に据えかねるものがあつたが家は壊しちやダメだよな」

悟りを開いたような眼を向けるエヴァ。そうだな、今のお前では茶々丸は抑えきれないよな。

エヴァのコテージは、一階が開放的になった。

「ま、マスター！ 私の即刻破棄を具申いたします！ もはや、もはやこのような!!」

あの茶々丸からは考えられん、実に感情のこもった声と仕草にしばし放心してしまつた。

「……すまん。家、直すの手伝うよ」

居た堪れなくなつた俺は素直にエヴァに投降した。

「うん……そうだな。今度は開放的なのもいいか、あははは」

家の修理の前に、壊れてしまったエヴァの修理を請け負うことになった。

## 一章 三年生

## 閑話 ■■■少女と■■■

桜の花が咲き乱れ、草花もよくその花卉を広げる頃合い。

人間社会においては新年度にあたる季節。

進学に進級、あるいは就職といった時期に誰もが春風を感じて心を暖める始まりの陽気。

そんなとある春先に、山林地帯で日課の鍛錬に勤しむ少女がいた。

「せいっ！ やっ！」

誰が見てもすぐにピンと来る独特の動きを持った拳法。すなわち大陸東部原産の中国拳法を振るう拳法少女の名は古菲。

道着に身を包み、若いながらも精錬された拳を振るう。

「とおー！」

それは誰に習ったものか、単一の流派のみにあらずあらゆる流派、拳法を振るう彼女は、麻帆良学園の中国武術研究会の部長を務めている。その肩書きは伊達ではなく、研

究会で随一の使い手であるのはもちろんのこと、裏表を含めた麻帆良住人の中でも一目置かれるほどに卓越した戦闘技能を持つている。

交友関係においては、同校同クラスの超鈴音チヤオリンシエンとは親友と呼べる深い仲にあり、彼女が運営する中華料理屋台『超包子』チヤオバオズにて用心棒を務めていたりする。

その超包子の関係者とも良好な関係にあり、料理長・四葉五月よつばさつき、店員・絡繰茶々丸・同・葉加瀬聡美はかせさとみの三名とも交流がある。

宇宙との合一が到達点とされる中国武術の真髄を理解しているのかは定かでないが、技量でいえばすでに世界有数であることは明らか。

当然、振るわれる拳や脚は並みの者では止めること敵わぬ達人の一撃と化していた。そんな彼女の鍛錬風景を観察する者は普段ならばいないはず。或いは同じく山籠りを行う甲賀忍者あたりが目撃することもあるかもしれないが、それも常ならぬことである。

「ふうん……八卦拳、形意拳。見よう見まねで八極拳といったところかな」  
木々の合間、太枝に乗りながら古菲の鍛錬の様子を眺めるのは、『当世風』の服装に身を包んだ黒髪の伊達男。

彼女との距離はさほど離れていないにも関わらず、相手は彼の気配に気付いた様子もない。



拳法家として高い実力を持つ古菲をして、その気配を全く察知させないという事実から、男が並ならぬ力の持ち主であることは明らかだった。

「惜しいな、ああ、惜しい……」

普段の彼ならば少女一人見つけようと、積極的に関わることなどしなかった。それは彼の性格よりも既に与えられた仕事の方を彼は優先させるからであり、彼が非常に義理堅いことは雇い主も承知の上であった。

ゆえにこそ、主の不在という一大事においても肅々と仕事をこなす彼を見越していた。

だが。

その義務を上回るほどに、彼女の才は稀有であった。

それは、仮にも流派の開祖として語られる彼をして興味を惹かれるほどに。

愉快、とはまた違った『楽』を感じるほどに。

仕事における義理と人情の彼ではなく、プライベートにおける享樂的な彼でもなく。

全く新しい、師としての彼の個性を発露させるには十分な条件であったのだろう。

或いは、流派の開祖としての信仰がそうさせているのかもしれない。

何はともあれ――

「よお、お嬢さん。その拳、もう少し上達させてみる気はねえか？」

「つ!! だ、誰アルか。気配はどこにもー」

「なあに、ちよつとこの無頼漢の指導を受けてみなつてことさ」

「ー正史においてはあり得ない出会いがそこにあり、結果として彼女の人間性を育むことになったという事実だけが重要である。」

「いいねえ、そこでもう少し腰を下げてみな」

「こ、こようアルか？」

「そうそう、その調子だ。筋はいいいぜお嬢さん」

邂逅から数分後、古菲は無頼漢の指導を熱心に受けていた。

経緯としては出会ってすぐに、仕掛けてきた古菲をあつさり返り討ちにしてしまったことが大きな要因となった。

全く抵抗を受けずに瞬時に自分を無力化した彼の技量に惚れ込んだ彼女は目を輝か

せて、指導を申し出る彼に素直に師事したのだ。

実直にして一途な彼女らしい単純な結論である。

「俺が本格的に教えられるのはこいつだけだからな」

「秘宗拳アルね！ 習うのは初めてアル！」

目を輝かせる古菲に小っ恥ずかしさを感じながらも男は指導を続ける。

「手の捻りで受け流したり、逆に威力を増したり、関節技なんかも一応あつたりするが。

まず第一に意識するのは歩法だ。少なくとも俺の型じゃこいつを基本としてマスタ―しておかないと何事もままならん」

彼の基本戦闘スタイルからしてこの歩法は大いに活用されている。

もちろんのことながら敵との距離を詰める際、その懐に潜り込む術、姿勢の高低も絡めた複雑な技術ながら会得すれば戦術に幅が広がることは間違いない。

「絶招歩法アルか!？」

「そんなもんだ、呼び方は様々だが……そうだな、まず手本を見せておくか」

そう言つて距離を取り、スツと僅かに腰を落とした彼は、瞬きの後にすでに古菲の目の前まで移動していた。

それはほんの数10mの距離、しかし距離と速度がかみ合っていない。どう足掻いてもあり得ない速度で距離を詰めている。

おまけに、その腕はすでに古菲の首筋に添えられていた。

「お、おお!」

「つと、こんなもんだ。本来は懐に潜り込むのが上策なんだがな、初めはこのくらいだろ  
う」

手を退けるついでに彼女の頬をすすつと滑らせる。

彼としては仮にも少女である古菲を怖がらせない配慮のつもりだったのだが。

「す、すごいアル! どうやったアルか!」

そんな配慮は無用であったとすぐに後悔した。

それよりも、彼女の果てない探究心に添えるように全力で指導することを改めて決意した。

「なに、単純な初歩を突き詰めただけだ。お嬢さんもすぐに出来るようになる」

それだけの才能が彼女にはある、と男は確信していた。

「よおし、じゃあ足の配置からー」

予想以上に興が乗ったと、男は夕暮れまで彼女の鍛錬に付き合うのだった。

手始めに、と歩法のみを重点的に指導していた男は、山間に沈む夕陽を見てそれなりの時間を費やしていたことに気付いた。

「おう、じゃあ今日はここまでにしとくか」

「はあ、はあ……なかなかむつかしいアルね」

汗ひとつつかいていない男とは対照的に激しい呼吸を繰り返す古菲。膝に両手を当てて必死に呼吸を整えていた。

「……でも、面白いアル！ もっともつと教えてほしいアル！」

「あつはは、いいねえ、俺もなんか楽しくなってきたしな。またここに来たら指導するよ？」

今日の指導だけで古菲は歩法のコツは掴みかけていた。他の武術にも精通していることもあるのだろうか、それでも上達、飲み込みの早い彼女を見ていて彼も喜びを感じたのは確かだ。

「ほんとアルか!?! 私、毎日来るアル！」

「それはちよつと来すぎかなあ、ま、時間ある時に来なよ。教えられることは教えるからさ」

「感激アル！ あ、でもまだ名前も知らないアル。

私は古菲、麻帆良女子中に通ってるアル」

「俺はえん……つと、そうだなあ、俺のことはシンシンって呼んでくれ。そっちの方が都合もいいし呼ばれ慣れてる」

「シンシン師匠、いや老師アルか！」

「どっちかって言うとなら師匠の方が嬉しいかなあ、老師って見た目でもないだろ」

自分のどこを見てそう思ったのか、と真面目にショックを受けていたのは彼だけの秘密である。

「分かったアル、シンシン師匠！ これからよろしく頼むアル！」

「おう、じゃまたな」

「また明日アル〜！」

手を振りながら下山していく古菲に、手を振り返しつつ「明日もか」と予定を入れられてしまったことに悩んでいた。

とはいえ、彼も嫌なわけではなく仕事の方も今はひと段落ついてる。というか古菲のことも仕事上で知り得たわけであつて。

その存在は兼ねてより既知のものであつた。

古菲が無事に山を降りたのを気配で確認した彼は、スツと表情を引き締めてその場を

離れた。

木々の合間を縫って山をかける彼は、もはや何者からも感知されていなかった。堪に優れた野生動物すら欺く『氣配遮断』、そして普段学園で何食わぬ顔で練り歩きながらも魔法先生、生徒含め何者からもその『本質』を悟られない高ランクの『諜報』。

命令を下す主を失いながらも、魂を食らうことなく現界を続けるサーヴァント。

『黒幕の敵対者』が召喚した英霊は、与えられた任務をただ忠実にこなす。飄々としつつも根は聡いのが彼だ。

複雑な任務だろうと完璧にこなしてみせる。義理堅く、忠義に厚く、そして頭の回転も速い有能な英霊が彼であった。

中国拳法という技術を規格外のランクで有した天功星の侠客。

架空の英霊とはいえ文字通り、規格外の技量を有した彼が、敵意も気配も感知させずに街中に潜む。

それだけで十分な脅威である。

「古、なんか最近楽しそうネ」

「え、そうアルか？」

中華料理屋台『超包子』の用心棒をいつも通り務める古菲に、親友たる超鈴音は興味深そうに聞いてきた。

「なんか、いつもそわそわしてるネ。超包子が休みの日はすごい速さでどこかに行ってるネ」

これはまさか彼氏……と訝しむ超に古菲はおかしそうに笑い声をあげた。

「違うアルよ。この前、すっごい師匠に出会ってしまったアル。だから稽古に付き合ってもらってるだけアル」

「師匠？」

珍しいこともあるものだ、と超はなおさらその話に興味を持った。

超の知る限りこと武術戦において古菲は麻帆良最強に近い実力を持っている。その彼女をしてスゴイ師匠とは。

「超も会ってみるアルか？　こんど師匠に聞いてーん？」



ふと、何かを見つけた古菲が視線をどこかへ固定する。

つられて超が見れば――

「シンシン師匠!!」

「シンシン……?」  
「パンダ」アルか?」

対象を見つける前に、古菲が突然走って行ってしまった。

超も万が一の護衛を茶々丸に一言頼み、急いでそのあとを追う。

「シンシン師匠〜!!」

「げっ!? マジか!」

拳道家アホの子に見つかってしまった彼は心底驚いていた。

それもそのはず、彼は古菲がいるなどまるで知らずただ『仕事』に来ていただけなのだから。

加えて、超包子と彼がいる場所、すなわち喫茶店とは百mは離れているはずで本来なら気付かれるはずもないのだ。

もつと言うなら、彼は今、バリバリにスキルを発動している。どう足掻いても見つけられるはずがない。

それはつまり、これが天然の為せる業ということ……。

「……」

(どうする。すでに見つかつてる。逃げられない。

ならば他人のフリ……は成功する気がしない。もはや複合サーヴアントではない俺じゃあたかが知れてる)

ドドド、と猛進してくる愛弟子を前にシンシンは高速で思考を巡らせていた。ちなみにこの間、約2秒。

「シンシン師匠おおお!!!」

すでに誤魔化しきれない距離まで来ていた愛弟子に、シンシンは諦めた。

「よお、偶然だな。学校はいいのかい?」

なるべく自然を装って声をかけるシンシン。だが予想外の事態に上手く言葉を繰り出せない、スキルもなぜか機能していない。

そんな彼に古菲は嬉しそうに応える。

「何言つてるアルか、今は春休みアルよ」

そうだった、調査で分かつてたことじゃないか、とシンシンは自身の発言を悔いる。

「それより師匠こそどうしたアル? てつきり山に住んでるかと思てたアルヨ」

どこの山の賢者だ、とシンシンは内心ツツコミを入れた。というかこんだけ派手なナリをしていて山暮らしかキャラブレも激しい、とも。

「ほうほう、この方が古の彼氏さんアルネ」

「(なんか付いてきた……)」

いつの間にか古菲の横で顎に手を当てこちらを観察していた謎のお団子ヘアーに、シンシンは　こんらん　した！

「(いや、冷静に考えて思い出した。こいつは超鈴音、古菲と同じクラスにいる同じ中華圏の人間か。」

確か、調査では戸籍の偽造に経歴の偽装、吸血鬼のエヴァンジェリンとも交流を持ち、裏では何やら企んでいる、と)」

その顔に見覚えがあったシンシンはすぐに調べ上げた素性を思い出す。それは調査の一環で判明した怪し過ぎる人物だった。

……とはいえ、彼女が何を企んでいるようとシンシンに与えられた『仕事』には含まれない事情なので特にこれといって手を出す気はなかった。

それに、なんとなくだが彼女が悪性に寄らない人物だとも感じていた。

「紹介するアル、この人が私の師匠！」

その名もシンシン師匠アル!!」

ババン、と効果音が付きそうなほど大仰に紹介されシンシンも少し照れくさくなる。

「あー、その新弟子の言う通り。師匠のシンシンだ」

「ほお、古にしてはなかなかの美男子を捕まえたネ。

おっと、私の名は超鈴音。古と一緒に中華料理屋台やってるネ」

よろしくネ、と手を差し出されシンシンも素直にその手を取る。

握手をして、その手の小ささ、柔らかさに気付き改めて彼女も年相応の少女なのだ、と思いつく。

「……ああ、よろしくな」

なるべく穏やかに。無頼漢ながら根が真面目なシンシンはそれを心掛けながら微笑む。

「あ……」

しかし、何の因果か。はたまた『災いを招く星』ゆえの宿命か。ぶっちゃけイケメンすぎるそのフェイスのせいかな。

穏やかな彼の笑みは、超の心にクリティカルヒットしてしまった。アサシンのクリ威力は馬鹿にできない。

「よ、よろしく、ネ……」

「? おうー!」

上気する自分の顔、途端に激しくなった鼓動に超は真面目に困惑していた。なぜならばそんなのは『初めて』だったから。

十数年生きて中で戦いと殺戮の毎日が殆どだった彼女に『ソレ』をする暇などなく、この時代に来て『計画』のために時間を無駄には出来なかつた彼女が、初めて『ソレ』をした。

だか彼はそのことに全く気付いていない、それどころか何か不審な点があつたか自分の行動を確認しているほどだ。

シンシンは何かと罪作りな男なのである。

もじもじ、としながらも握手した手は離さず、どころかニギニギしている超に、古菲もシンシンも違和感しか感じなかつた。

どうした、と。

そんな一人だけ甘いムードを出していた超の貴重な時間を奪い去るように、大通りの方から女性の悲鳴が聞こえてきた。

「きやああああ!!」

「何事アル!？」

瞬時に構えた古菲の元に、悲鳴をあげた女性の方から一人の男が近づいてくる。その手にはカバンとナイフが握られていた。

「ど、どけええ!!」

一瞬で状況を把握した古菲は、ナイフを突き出しながらこちらに向かってくる男に静

かに構えを見せた。

「ふっ！」

腰を落とし、瞬時に相手のもとへ移動した古菲は男の懐に入り込み、まず手首をはたきナイフを落とす。

続けて無防備な腹部に掌打を叩き込んだ。

「おっ！」

ズズン、というおおよそ少女が出してはいけないような効果音での攻撃に男はうめき声一つ、一瞬で倒れ伏した。この間、約二秒。

まるで映画のような光景に、周囲の人々も無意識のうちに拍手を送っていた。

「ふう……っ！ まさか！」

しかし、人ごみの先、目立たない箇所から逃走を図ったもう一人の男が、シンシンに夢中な超の元へとナイフ片手に突撃していた。

「超っ！」

しかし、人混みが多く、この距離では間に合わないと古菲が諦めかけたその時。

「……」

「あ……！」

すらり、と立ち上がったシンシンが流れるような仕草で男のもとに駆ける。その際に

離れてしまった手を超が名残惜しそうに追う。

その間にも、シンシンは一瞬で男に拳撃を食らわしていた。

まず、歩法で男の懐に入り、即座に顎を打ち抜く。その残像の消える前にすでに腹部へと掌打を放っていた。

傍目には一瞬で移動したシンシンと、いつの間にか吹っ飛ばされた男しか目に映らない。

たとえ鍛えた武闘家だろうと、辛うじて、拳を放ったシンシンの残像が見えただけの、本当に一瞬の出来事。

この間、約0・2秒。

バタリ、と倒れた男を冷たい目で見下ろし気絶していることを確かめたシンシンはくると振り返る。

そして、放心状態の超の肩に手を置いた。

「大丈夫だったか？」

「はう!? ヤ、ダダ、ダイジョブ、アルヨ」

心配そうなシンシンの顔が目前に迫り、超は心臓の動きをさらに早めていた。

「アワワ……（近い近い近い近い近い!）」

「そうか……よかった」

ほっとしたため息ののち、安心したような微笑みを浮かべたシンシンに、超はついに耐えきれなくなった。

「あ、あ、アアアアアア!!!」

両手で顔を覆いながら全速力で駆け出す超。

「超っ!?! ご、ごめんアル師匠! 超、追いかけるアル!」

「お、おう。行つといで」

凄まじい速度で駆ける超に迫る勢いで古菲も全速力で走っていった。

一方、残されたシンシンは――

「……嵐みたいだねえ」

なんとも言えない表情を浮かべた後、静かに自分の席へと戻っていった。



## 進級

「いい加減起きなさいよ〜子イヌ〜!」

ゆさゆさと身体を揺さぶられる感覚で目がさめる。

気怠さを感じながら、枕元を手探りで漁る。

こつん、と指先に当たったソレを驚掴みにして目前に持つてくる。

「七時……起きねば」

時計の針は起床時間を過ぎていた。

俺は時計を元あつた場所に戻しごそごそと布団を抜け出す。

「うう……身体が痛い」

身体中の筋肉が悲鳴をあげている中、キッチンまでフラフラと足を進ませる。

「ちよつと、大丈夫、子イヌ?」

心配そうに声をかけてくれたエリちゃん、見ればすでに制服に着替えていた。

「ああ、悪い。すぐにご飯作るから待つててね」

「おはよう、マスター!!」

エリちゃんに声をかけている間に、妙にテンションが高いアビーが挨拶してきた。

「元氣だなあ、おはよう。今日はどうしたー」

ゆつくりと視線を向けると、そこには麻帆良中等部の制服を着て満面の笑みを浮かべたアビーが立っていた。

その姿を見てようやく、今日から彼女も学校に通うのだと思い至った。個人的には複雑な心境だが、当人がこうして嬉しそうにしているとこちらも心が温まるというものだ。

「そういえば今日四月一日か……なら、なおさら早くご飯をー」

「おや、お目覚めかい？ ご飯ならもう出来るよ」

いるはずのない人物の声に、朦朧としていた意識が少し覚醒した。

声の先にはエプロン姿のダ・ヴィンチちゃん。

彼が料理の乗った皿を置くテーブルにはすでに全員分の朝食が並べられていた。

「顔を洗っておいで。そしたらみんなでご飯にしよう」

「悪い、そうする」

優しげに微笑む彼に促され、俺は洗面台へと向かった。

「ありがとう、ダ・ヴィンチちゃん。この礼はー」

「ああ、そんなの後でいいよ。……行つといで」

朝食を終え、着替えも歯磨きも済ませた俺たちは、エプロン姿のダ・ヴィンチちゃんに見送られて玄關を出る。

まるで新婚夫婦だ。

「それじゃ、行つてきます!!」

「行つてくるわ!」

「ああ、気をつけてね」

朝から元気な二人の女の子サーヴァントに手を振るダ・ヴィンチちゃん。

俺も気を引き締めて眠気を飛ばす。

「行つてきます。ああ、あと例の件はー」

「はいはい、それも放課後に聞くから。あ、ほら、襟が」

不意に、俺の襟を掴んで整えてくれるダ・ヴィンチちゃん。

男とは分かっているけど、綺麗な顔をそう近づけられると朝から煩惱が増幅されてしま  
う。

「これでよし。……気をつけて行つてらっしゃい、リツカくん」

「い、行つてきます……」

眩しい笑みで見送られ、こっぴどくさかしさからどうにも目を合わせられなかった。

ちなみにここは一応、男子寮の一室にあたるので偶然、目撃した他の男子生徒がこちらをガン見していた。

「貴様は、何も、見ていない。オーケー？」

「すぐさま詰め寄りいい含める。」

「は、はい……」

「よろしい」

俺はこれ以上厄介ごとを増やす前に早足で学校まで急いだ。

時は2003年、世界は核の炎に包まれていない。

春休みを終えて進級した俺は今日から高三。エリちゃんも中三。アビーは今年から中学生である。

周りが春休みをゆったりと過ごす中、俺は丸々エヴァのコテージの修復に取り掛かっていた。俺のせいでもあるが、それでも休みが潰れたことに違いはない。

春休みなんてなかったんや……。

おかげで、俺は全身を筋肉痛で痛めながらも新学期を迎えることになった。昨日も遅くまで修復作業を行っていたのだ。

もちろんながら、茶々丸を中心としてロボの手を借りた作業ではあるが。

その中で俺が手伝うには、応援に駆けつけた葉加瀬の『作業用ロボ』を活用するほかなかった。

というか、作業のためといいつつ、新開発したロボの実験に付き合わされたため倍の労力を費やすことになった。

よって、この気怠さの残る身体で登校を余儀なくされているのである。

「おかげで、あの朝の大レースに参加する羽目になったよ」

「惚気か、惚気なんだな？ よおし、お前は今日からぼっち同盟から除名する」

とほほ、と項垂れる俺の背中に何やらべたりと貼り付けるカウレス。

無事に始業式を終えた俺はいつもの裏生徒会本部へと足を運んでいた。

「いや、お前始業式いなかったろ？ すっぽかして自分のサーヴァントの入学式見に行つてたよな、なあ!？」

何を言っているカウレス？

俺は確かに始業式に参加していただろう？

「嘘つくなよ！ ていうかあんな雑なコピーで騙せると思つてんのかお前!？」

新入生の子の乳談義振つたら、

『そんな不純な目で後輩を見てはいけないよ（キラッ）』

なんてお前が言うはずねえだろうが!」

ち、ダ・ヴィンチちゃんに頼んで作つてもらつた自信作だつたのに。

「そんなしよーもないことに天才を使うな!」

「いや、カウレス。論点はそこじゃないだろ」

怒り心頭のカウレスの代わりに衛宮が声を出した。

「乳談義で見破られてることの方が問題だろ。そっちの方がしよーもない」

まるで自分は清廉な人間だとしても言わんばかりの衛宮の物言いに俺は異議ありと申し立てた。

「自分は乳に興味がないと？ 本気で言つてるのか貴様?」

「お、おう。どうしてもそこに食いつくのなお前」

若干引いてるが、俺は誤魔化せない。

原作で貴様がどれだけの女と組んず解れつして来たか画面越しに嫌というほど見せつけられてきたのだからな。眼p……けしからん。

3Pとか高校生がするもんじゃないからね。

「魔力供給。お前も結構ノリノリだったって聞いたぞ」

「つ!!! お、おい、どこでそれを!!」

慌てて俺の肩を掴む衛宮。ふふふ、貴様の情事はすべて脳裏に刻まれているぞ……冷静に考えるとそれはそれで哀れだな。

「いや、前世でな? 色々召喚したって言ったろ。そんなにお前の関係者も含まれていてだなー」

「もういい、分かった。それ以上は口を開くな」

有無を言わせぬ威圧感を出しながら衛宮ははつきりとそう口にした。

何かを悟ったのだろう。例えば生前の関係者に囲まれ、胃痛に悩まされながら料理を作る褐色オカンの図とか。

「え、なになに、めっちゃ気になるんだけど?」

興味津々なカウレスが身を乗り出して続きをせがんできた。

いやあ、純朴な少年にそこまで言われちゃ話すしかないっしょ。

「何でもない。いいか、さっきの話は全力で忘れる。脳裏に一片たりとも残すなよ？」

「お、おう……恵りい」

全力で脅しにかかる衛宮にカウレスもさすがに口を閉ざしてしまった。

「……なんだ、減るもんじゃないだろ」

「いや、減るだろ。主に俺の心とか胃とかそこらへんが」

そう堅いこというなよ。この中にはお前が唯一、勝ちg……

いや待てよ。こんな年相応な悪ふざけしていて忘れてたけど、そういやカウレスも原作で生き残ってたよな？

「まさか、カウレス、お前、結婚とか……してないよな？」

「え……あ、ああ、いや。前世の話はもうやめようぜ？」

気まずげに語るカウレス、それを見れば大体予想はつく。

この中で円満な家庭を築けていないのは俺だけだと。

自然と、身体中の力が抜け、膝をついた。

「馬鹿な、それじゃあ、何か？ 彼女に逃げられた挙句、痴漢の冤罪までかけられて車に

跳ねられて死んだ負け組は俺だけだったのか？」

「お前、そんな悲惨な死に方してたのか……」



「リツカ……」

ご両人が哀れみみの視線を向けてくる。やめろ、そんな目で俺を見るなあ！

ちくしょう！ 何が家庭だ、何が結婚だ！

俺は何が何でも今世で貴様らが羨むほどのラブラブな家庭を築いてやるからな？

「……覚えておけよ!!」

ビシツと指をつけつけるが、目の端からはキラリと光るものが落ちていた。な、泣いてないんだからね、これは汗なんだからね！

「ああ、俺は全力で応援するぞリツカ」

「……そうだな、姉さんはやれないけど同じくらい女性のいつかお前に見繕ってやる

よ。姉さんはやらないけどな」

お前ら……。

「くそつ、泣けること言うじゃねえか……嬉しくて、目にゴミが入っちゃったよ!」

ぐしぐしと涙を拭く俺の肩に衛宮が手をそつと乗せた。

「お前はいつもみんなを笑顔にしてくれる。その良さに気付ける女性が必ず現れる」

もう片方の肩に今度はカウレスが手を乗せる。

「ああ、お前を捨てた元カノを見返してやるくらいのとびっきりの美人が、お前を待つて

るや!」

「くう……お、俺は絶対、エリちゃんを射止めて……うう」

男泣きをする俺に、二人は優しい笑顔で慰めてくれた。

ああ、俺は今、こんなにも満たされている……。

「えーと、その茶番はいつまで続くのかな？」

割と酷い言い草のダ・ヴィンチちゃん。ごめんね、そうだよね、真面目に礼装作ってくれてるダ・ヴィンチちゃんに失礼だよね。

「一応、私たちもいるんだけど？」

若干、顔が赤い黒髪凜。おやおやあ？ 前世での彼氏との魔力供給思い出しちゃった？

あ、今もやってたりするのかな？

「コホン、カウレス、後でお話があります」

シスコン弟に厳しめの口調で物申すフィオレ。

でも満更でもないような顔してるのが明らかに彼女もブラコンを発症してしまっていることを悟らせた。

「ははは、レデイの前でする話じゃないよ君たち。……乳談義の件、後で詳しく聞かせてもらってもいいかい？」

にこやかに俺らを窘めつつ、ぼそりと耳打ちするレオ。

こいつ、CCCのノリだな？

裏生徒会とか名付けたのも絶対こいつだと思ってる。

「はいはい、くだらない話で盛り上がらないで。例の本の解析結果をお伝えするよー！」  
パンパンと手を叩いて「はいちゅーもーく」と声をあげたのはダ・ヴィンチちゃん。  
その話の内容からふざけていたみんなも、静観していたみんなも静かに視線を向けた。

「例の本、『初めての英霊召喚』と銘打たれた魔導書の解析。ここ一週間ちよつとしてみたんだけどね。」

……ぶつちやけ分らない！ てへべろ！

こつん、と頭に拳を当てながらちろりと舌を出すダ・ヴィンチちゃんに、なぜか魔眼勢だけがズッコケタ。

「え、えーと……そういうノリなの？」

幾ら何でも古い反応に俺はたまらず声をかけた。

「古くないだろ！ 今は2003年だぞ?！」

なぜか猛烈に反論する志貴。どうしたお前。

「いや、魔眼で一括りにするなよ、あんな寒い反応してないぞ俺」

全力で志貴から距離を取る両儀。そんな冷たいこと言うなよ、ほら志貴涙目だぞ。「こらー、志貴をいじめるなあ！」

私はちゃんとズッコケタよ？　ね、偉い？」

それを庇うのはあーp……真祖の姫・アルクエイド。

まるでペットのようななつき方をしている。

「君たち、どんなギャグ時空で生きてきたんだ……。」

これ、結構真面目な場面だからね？」

なんとも言えない、といった様子のダ・ヴィンチちゃんを珍しくまともなことを言った。でも原因はあなたにあると思う。

「すまない、私の叡智を持ってしてもこの本のプロテクトを解除するのは不可能だ。

何せ、セキュリティに使われているのは神霊の『権能』に値する力だからね」

権能。その言葉に皆がピリツと意識を張り詰めた。

権能とは人類史以前、まだ神が地上で好き勝手していた時代にのみ許されていた力。物理法則が確定した西暦以後にはもはや発動すら許されなくなった、文字通りの神にだけ許された権能。

神霊の扱う人智を超えた力のことだ。

それが、この本に掛けられているという。

なんとも馬鹿げた話があったものだ。

「いや、値するとは言っても権能そのものというわけじゃない。だって今の世の中では発動できない力だからね。いくらこの世界のマナが濃くてもそれとこれとは話が別だからだ。

改めていう必要もなさそうだから説明は省くが、このプロテクトが人間には解けない領域にあることは確かだ。

それがたとえ『英霊』であつてもね」

ダ・ヴィンチちゃんをして解けないとは。それつてかなりやばいんじゃないかと思う。とはいえ、ラニまでいるこの集団をして解析できないという時点でなんとなくこの結果は見えていた。

「でも、何も分からなかったわけじゃないんだろ？」

「ああ、もちろん。判明した部分もあるさ」

俺の言葉に待つてましたとダ・ヴィンチちゃんは笑顔で頷いた。

「私の力で解析出来たのは全体の40%。これ以上は我々人類ではどうあつても辿り着けない領域だ。

そしてその40%の中で分かったのは三点。

まず、この本の力は本物。呼ばれる英霊は座から来ていることは分かっている。

次に、触媒や代償の話なんだが、これはどうにも本の記述の通りであるらしい。つまり、私含め今現界している英霊たちは藤丸立華の縁だけを頼りに来ている。無茶苦茶な話だがこれも確かだ。

そして、肝心の魔力の源泉。これなんだがね……なんとも信じ難いことに『世界から直接』来ている」

「世界、ですって……」

黒髪凜が驚き半分、戸惑い半分に言う。

「ああ、世界……それはつまり自然に生える木々であり、草木、山、大地。空から来たりもする。もちろん自然に生きる野生動物からもほんの少し来てるね。

当たり前だが、人類種からも来ている。ぶっちゃけこれが殆どの魔力を賄っている」

「文字通り、世界、か……馬鹿げてるな」

信じ難い、が、他の誰でもないダ・ヴィンチちゃんの言葉ゆえに事実として受け取るしかないとかウレスは呟いた。

「最後に……これらすべての信じ難い事象、その全てにおいて方法、術式、その他詳細含め一切分らない。この先はプロテクトの向こう側なのだろう」

まさしく神の所業。あるいは『世界の理を司るもの』の仕業だ。大スケールの話だが、一つ気になることがあった。

「ダ・ヴィンチちゃん。人類種って言ってたけど、それってつまり『アラヤ』のことだよ  
ね?」

人類の集合的無意識・人の抑止力アラヤ。

英霊の座を管轄する時間の概念を超越した大いなる力、概念そのもの。星の抑止力たるガイアと異なり、人類種の危機に対して発動する防衛装置。

「分からない。いや、確証を持ってないが十中八九そうだろうね。でなければここまで膨大な供給が成り立つはずがない。まあ、それは他の供給源にも言えることなんだが何せ方法が解明できない。

私にはもうお手上げだ」

諦めたように述べたダ・ヴィンチちゃんに、俺もこの本の解明が無理ゲーであることを悟った。

「まあ、全部ではなくても解明できた部分はあるわ。お手柄よキャスター」

「そう言ってもらえるとありがたい。それ代わりというわけでもないんだが……」

遠坂に感謝を述べつつこそこそと取り出したるわ、一着の服、いや、全身タイツに近いプラグスーツみたいなもの。

「チャララララッチャチャャー♪」

『ダ・ヴィンチちゃん式魔術戦闘服』——!」

変な効果音で広げてみせたそれは、まさしく f g o で使用していた『カルデア戦闘服』のパチモンだった。

全体のデザインは大体合ってるが、細部に相違点が幾つかあった。中でも背中のごつい十字架みたいな装置が目を引く。

「ふっふーん、リツカくんにはカルデア戦闘服に見えるだろうけどこれはちよつと違うんだよねえ。」

ぶつちやけ性能は下だ」

劣化品かよ。いや、作ってくれただけありがたいけどさ。

「まず、ガンドの威力は大幅に落ちている。対魔力 B くらいならなんとか貫通できるけどさすがに A を超えると弾かれちゃうね。前みたいにティアマトレベルだと足止めなんかも無理」

なるほど、でもそれって普通に考えたらすごいんじゃないかな。

「ティアマトって……いや、それよりもガンドよね？ 今、ガンドの話をしてるのよね？」

黒髪凜が若干混乱気味に問いかけてくる。うん、『ガンド（確定麻痺）』の話だよ。

というかあんたもマシンガンみたいに撃てるんだからたいがいだよ。

「うん、ガンド。まあ、これについてはリツカくんなら今ので大体使い勝手は分かったと



思う」

「ああ、でも足止めならAもいけるんだろ？」

ぶっちゃけ手傷も負わせられないのがガンドだ、足止めできれば十分である。

「まあ、気をひくくらいならね。」

で、次に全体強化なんだけど、これも出力自体は落ちちやつてる。でも効果範囲は広がったよ。

これまでは契約してある英霊だけだったけど今回は範囲内なら誰でもだ。対象の固定が必要になるけど人間に対しても強化できるようになったよ」

なるほど、現在の状況が人間主体になってくることを見越しての仕様か。やはりダ・ヴィンチちゃんも優秀だ。

「最後に君も気になってる後ろのでっかい装置。これなんだけど」

コンコンと例の装置を小突きながら話を続ける。

「簡易令呪と言ったら分かりやすいかな。さすがに本来の令呪とか以前の令呪にも及ばない力だけど、限定的な治療、魔力の補充くらいなら可能だ。あ、効果はさっきの機能とは比べものにならないからね、ちゃんと簡易令呪名乗るくらいの出力はある」

すご過ぎるだろ。これ約一週間で作り上げたんだぜ？

万能とかそういうレベルじゃないだろ。

他の面々も言葉が出ずただダ・ヴィンチちゃんの解説に耳を傾けている。

「最後にこれら全部に言えることなただけ……正直、燃費はすごい悪い。どれくらいかと言うと全部の機能が一発限りの一か八かになるくらい」

そうか、f g oでは何ターンか経ったら再使用できたが今回はそうもいかないか。

「先の標準機能の回復に約一日。簡易令呪に至っては三日でギリギリ再充填できるかどうかだ。

原理としてはすべての機能で、リツカくんの魔力バックアップ能力を利用している。正直言うと、これを無理やり機能の方に引っ張るのだけでもかなり魔力を使ってる、燃費はそのためだ。

ちなみに、簡易令呪は三回に分けて使用するのでも一気に使って大きな効果を出すのでもどちらも可能にしてある。状況に応じて使い分けてくれたまえ」

そう言うって、俺に戦闘服を手渡すダ・ヴィンチちゃん。

「機能的にこれは君専用だからね。他のみんなの礼装も随時作製していくよ。もう少し待っていてくれ」

素直に受け取ってしまったが、冷静に考えてこれを速攻で作り出す彼は改めて只者ではないと思う。

その旨を伝えると彼は謙遜するように応えた。

「いやいや、カルデアでの記憶が残っているおかげでもあるさ。

以前、作製した戦闘服の設計を元にして今ある資源と時間で作った試作品だしね、メンテナンスは定期的に行う予定だ。

時間をもらえれば機能の強化もできるだろう」

まじかよ、至れり尽くせりじゃないか。

確かにこういうの作って欲しくて呼んだけど、なんとというか予想以上に有能過ぎて怖い。

「あ、それと後ろの装置は取り外し可能だ。だってそれ付けてると制服着た時に目立ちちゃうしね」

「ぱかっと装置を外して「ほら」と見せてくるダ・ヴィンチちゃん。ほらじゃないよ、そんな簡単に外すなよ、怖いよ。」

「作ってくれたのは嬉しいけど……休みだけはちゃんと取ってくれよ?」

彼の労働環境が心配になってしまった俺は心配になってそう伝える。

「ありがとう。でもこれくらいなら問題はないさ、それに優秀な助手もいるし」

そう言って視線を移したのは褐色露出狂・ラニ。こちらの視線に気づくなりぺこりと頭を下げられた。

「やっぱ優秀だね、彼女。」

「……なんか、色々予想以上で今も信じられないくらいなんだけど、改めて感謝を述べるわキャスト。」

「今後も協力してくれると助かるわ」

「もちろんだ。そのために呼ばれたのだからね。現界と工房の分くらいはしっかりと働いてみせるよ」

こうして終始穏やかながらも裏生徒会の面々とダ・ヴィンチはお互いの距離を縮めた。まあ、一週間もいれば自然と絆も生まれてくるだろう。

その後も他の面々との交流を深めながら、例の礼装や、本の解析結果の話で盛り上がった。

ダ・ヴィンチちゃんは主にその方面の話だとW凛やレオ、ラニあたりと話が弾むようだった。

何はともあれ準備は順調に進んでいるようなので俺も少し気を緩めていたのは確かだった。

この後、俺を含めた裏生徒会全体に大きな影響を与える事件が発生するとは露にも思わす。

## 反英雄

「ネギ君からかうとホント面白いよねー！」

「この一年間、楽しくなりそーね」

わいわいと賑やかな教室。

ここは麻帆良本校女子中学校にある三年A組の教室だ。

新年度早々に身体測定を予定している彼女らは教室にて着替えを行なっていた。

ただ、女子中ということもあり、さらにはこのクラスはその身体測定でさえも騒がしかった。ちなみに測定の都合上、下着姿にも関わらず色気は皆無である。中学生では致し方なし。

その際に必然、話題となるのは『胸』のこと。

「まき絵はぺったんこだからねー！」

パンツ一丁で仁王立ちするのはクラスの中でも一番の低身長、ロリ体型を誇る双子、鳴滝姉妹の姉。

「お姉ちゃん、言ってる悲しくないですか……？」

極めて冷静な妹のツツコミはしかし姉の耳には届いていなかった。

その一方、我らがエリちゃんの方でも同じ話題が繰り広げられていた。

「暴力です、あれは暴力装置ですよのどか」

クラスメイトの那波千鶴なばちづるをガン見しながら語るのは綾瀬夕映。クラスの中でも慎ましい胸を備えた貧乳勢の幹部だ。

隣には親友ののどか、エリちゃんと続き奇跡的にも貧乳三人娘の様相を呈していた。

「ぼ、暴力とか……那波さんに聞こえたらどうするのー」

ワタワタとしながら親友の暴言を諫めるのどか。やはり親友同様に下着姿でも色気はない。

「まったく、胸の大きさと女の良さは決まらないわよ」

そこで極めて真つ当な反応を示したのは同じく貧乳であるエリちゃんだった。

予想外の反応に夕映は驚いた。

まさか、仲間と思っていたのに、と。

「意外と、冷静ですねエリちゃん」

「はあ？ ふ、所詮は肉の塊よ。……それよりも」

すす、と滑るような動きで夕映の背後に回るエリちゃん。その動きはリツカにも通ずるところがある。

滑らかな手つきでエリちゃんが弄まさぐるのは夕映の全身。

「ひゃあ!？」

「うーん、すべすべね。やつぱり女の子の肌は新鮮で……ピチピチね」

じゆるり、と舌舐めずりを繰り返すエリちゃんの表情は妖艶で、唯一目撃したのどかは無意識に身体を強張らせた。

「うふふ、ここかしら？　ここがいいのね、夕映!」

「あ、ひゃん!　だ、だめ……ですう」

「あわわ……」

すりすり、と手指を這わし夕映の全身を○撫するエリちゃん。見た目とは裏腹に恐ろしく熟練された手つきで夕映の太もも、腰、脇、そして首筋を撫で回す。

それをのどかは両手で顔を覆いながらも、指を開いてガン見していた。親友を助けることができない、という不甲斐なさと、嫌なのに感じちゃう!　という倒錯的な快樂に身を苛まれながら……。

「ちよ、エリちゃん何やってんの!？」

そこへ、夕映・のどか両人の親友にして保護者役の早乙女さおとめハルナが駆けつける。

「あらあ、ハルナ。貴女もやりたい?」

「ふあ……。パル……。た、助けー」

ビクンビクンと身体を痙攣させながら必死に、ハルナことパルに手を伸ばす夕映。

しかし無情にもその手が取られることはなかった。

「やりたい!!」

恐ろしく真面目な顔で即答するパルに、夕映とのどかは凍りつく。

悪ふざけに定評のあるパルまで参戦しては、もはやどうあつても自分たちは助からないだろう、と。

「そうねえ……じゃあ、そこで見ている白くて柔らかそうな肌の彼女を貸してあげるわ」  
「え」

ねっとりとした眼を向けるのはのどか。先ほどまで弄り回される親友を見てモジモジしてしまっていたいけない子だった。

「大丈夫、私が教えてあげるわ。貴女は身を委ねていればいいのよ」

エリちゃんの優しくも悪魔のような囁きに完全に硬直してしまうのどか。さながら蛇に睨まれた蛙のようでもある。

「ひ……」

「あらあら、怖がつちやつて……可愛い。うふふ、ついでだから貴女も可愛がつてあげるわ、ハルナ」

「え」

予想外の展開にパルの表情も固まる。まさか、自分まで標的にされようとは。いじる



のは慣れていないが、いじられるのは慣れていないのが彼女であった。

「さあ……」

だが、『嗜虐のカリスマ：A』をフルに発動している彼女に逆らえるはずもなく――

「何?! まき絵がドーしたの!?!」

突如、ざわめき出した教室に、エリちゃんも名残り惜しそうに絡めた手足を解いた。解放されたのどか・夕映の両名は立つ気力もなくその場にへたり込む。

「ふにゆ」

「ふにや」

そのまま床の上でビクビクと痙攣したままな二人を前に、パルはただただ戦慄していた。

「ま、まさか……このクラスにあんな逸材がいたなんて」

ただ、湧き上がる感情は恐怖というよりも、寧ろ新たな『性癖』を開拓してしまったような歓喜に似ていた。

早乙女ハルナ、BLに加え百合の園への扉を解き放つ。

地味に、原作よりも創作の幅を広げてしまったハルナなのであった。

「ほんの少しだけど、確かに『魔法の力』を感じる……」

保健室にて件のまき絵の様子を見に来ていたネギは微かに残された犯人の残滓を読み取る。

身体測定を行っていたネギクラスに慌てて駆けてきた和泉<sup>いずみ</sup>亜子<sup>あこ</sup>から受けた報告は、クラスの人である佐々木まき絵が倒れたというものだった。

急いで、彼女の運ばれた保健室にきてみれば、未だ彼女の意識は無くその身体には僅かに残った魔法の痕跡しかなかった。

「……（僕の他に魔法を使えるのは……ま、まさかエリザベートさん!）」

だが、悲運というべきか彼がまず思いついたのはネギクラスの一人たるエリザベート・バートリーであった。

ただ、それも無理からぬことである。

なにせ、エリザベート・バートリーが歴史に記される彼女本人の英霊であると知り、その逸話まで知っているとなれば真つ先に疑うべきは彼女となる。

エリザベート・バートリー。『血の伯爵夫人』と呼ばれた彼女は老いをなによりも嫌い、美貌を保つために何をトチ狂ったか少女の生き血をその身に浴び、飲み、若さを保とうとした。

その末に貴族の令嬢を手に掛けたことで幽閉され、獄中死にも等しい非業の死を遂げるのだが、それは歴史に記されたことだ。

この場には、その彼女を英霊と、使い魔として召喚された存在がおり召喚者である人物からの直接の報告も受けた。

「いや……まだ決まったわけじゃない」

だが、他ならぬ召喚者に『守る』と言ったこと。何よりも自分の生徒でありいつも明るく快活な彼女がこんな卑劣なことをするはずがないと。そう思ったことも確か。

結局、彼は原作と同じくまき絵の見つかった桜通りでの張り込みを行うことを決めるのだった。

「ただいま、子イヌ！」

「おー、おかえりー。ご飯もう出来てるからな、手洗つといで」

バン、と扉を開けたエリちゃんに俺はにこやかに言葉を返した。

時刻はもう夜と行つて差し支えないもので、すでに晩御飯は出来ており、アビーなんかテーブルの前でスタンバイしていた。

「おかえりなさいエリザベートさん！」

エリちゃんの帰宅に気付いたアビーは彼女にダイブに近い形でハグをする。筋力：Bの少女の突撃にエリちゃんは若干よろめきながらもしつかりと受け止めていた。

これが錬鉄の弓兵なら難なく受け止めていただろうに。(唐突なdisり

「もう、しょうがない子ね。ちよつと手洗つてくるから先に待つてなさい」

「はーい」

なんだかんだ言つてエリちゃんは面倒見がいい。いつも破天荒な彼女だから心配していた頃もあったが、当初からアビーの面倒をよく見ていた。

俄かに信じがたいかもしれないが、彼女がアビーを見る目はとても愛おしそうで……

あれ？ もしかしてエリちゃんアビー食べようとしてる？

「ダメだぞエリちゃん。絶対に腹壊す」

「は？」

手を洗って戻ってきたエリちゃんに釘をさす。何言っただこいつ、みたいな反応を返されたが俺は騙されんぞ。

確かにアビーは柔っこいし、プニプニほっぺただし、抱き枕にしかくなることだって『俺もある』。

だが、彼女はその身に得体の知れない異形を宿しており、何より大切な『仲間』である。セクハラは俺が許さん。

「え、なんでそんな怖い顔してるの……わ、私、何かしちゃったのかしら」

とはいえ、「うるる」と今にも泣き出しそうなエリちゃんを見てしまったらそんなのは『頭から飛んで行った』。

「ご、ごめんエリちゃん。怒ってないよ、怒ってないから泣かないで！ ほら、今日はシチューだよ、美味しいよ？」

「え、やったあー！ 子イヌ大好き!!」

しかし、食べ物でつればほらこの通り。

エリちゃんはだから考えない性質なのだ。

すでにホクホク顔で席についている。

「じゃあ、いただきます」

「いただきますーす!」

「神よ、あなたの慈しみに感謝してー」

アビーは信仰者だ。何のかは言わなくてもわかるだろうがいつも食前の挨拶が長いので俺たちは先に食べ始める。

「あ、そういえば子イヌ。今日はね、なんかまき絵が倒れちゃってたんだって、桜通りで」  
「ほう……そりゃ大変だったな」

もうそんな時期か。確か、これはエヴァによる吸血鬼騒動だったはず。

エヴァといえばこの間まで家の修理してきた仲だが、精神も無事に持ち直していたようだし原作通りにネギくんとか戦って彼の成長を助けてくれることだろう。

とはいえ、あれだけ関わってにおいて問題がないところを見ると、意外と原作を気にしなくても大丈夫かもな。歴史の修正力というかなんか抑止つぽいの働いてそうだし。

「それでね……私、たぶん、なんだけど。エヴァちゃんが犯人なんじゃないかと思うの」  
見事今回の犯人を言い当てるエリちゃん。こういう変なところで勘がいいのも困り者だ。そういうのはここぞという場面で発揮してもらいたい。

「そうだな、たぶんあいつだろ」

「やっぱり!」

「でも、手を出さなくても問題ない」

「ええ!？」

あつさりと言い切った俺にまたもエリちゃんが驚愕していた。これ何回やるんだろう。でもエリちゃんだから可愛い、許す。

「言つたろ、俺は限定的に未来予測ができる。だから彼女にクラスメイトを害する意思はないと言い切れる」

「そんなこと言つたつけ？ でも子イヌがそう言うなら……」

エリちゃんとも長い付き合いになる。さすがに慣れてきたのかあつさりと引き下がった。俺を信頼してくれるのは有難いがそこを敵に付け込まれないか心配だ。

あ、ダメだこれフラグ臭い。今のなし！

エリちゃんは完璧！ はっきり分かんだね！

なんとなくこの先の展開に妙な不安を感じながらも、食事を終え風呂も入ってその日はさつさと寝た。

「ううん、マスターさん……」

ちなみに、夜は怖がりなアビーと同じ布団で寝ている。

同じ布団で寝ている。

大事なことなので二回言った。

あと、変なこととは何もしていない。していない。

これも大事なことなので（ry

「……子イヌ、私、ちゃんと見てるからね」

「ひっ!?!」

少しだけ、匂いだけでも体内に取り込んでおこうとしたら背後から冷たい声が聞こえてきた。

夜だからか小さい声なのに、なぜかはつきりと耳の奥、鼓膜を的確に揺らされるように聞こえてきた。

「だ、大丈夫だよ。アビーは仲間。変なことほしくないよ」

「今、匂い嗅ごうとしたよね?」

バレている。すごい怖い声で、全身が震えるような声ではつきりと言われた。

「え、エリちゃん……俺はー」

「別に、子イヌはそういう奴だって知ってるからいいけど。」

もう寝るね、おやすみ」

言い訳もさせてくれずエリちゃんは終始冷たい声で言い切ってそっぽ向いてしまった。振り返った時にはもう彼女の背中しか見えない。



「すう……すう……」

すでに寝ていた。微かに向こうから寝息が聞こえてくる。

本当に寝るなよ……。

「まあ、別に俺だって本気でアビーに変なことしようとは思ってないけどさ」

だって、アビーも俺の数少ない『味方』なのだ。

どうして無闇に傷つけられようか。

少し思考が鬱になってきたので大人しくアビーの髪の毛の香りを嗅いでさっさと寝ることにした。

翌日、特にこれといった出来事はなかった。

強いて言えばエリちゃんから、『わ、私の洗濯物、やっといてくれてもいいんだからね

！』と謎のツンデレを聞いたくらいか。

洗濯カゴを見てみればパンツにブラに靴下と一式揃えて放り込まれていたので素直に洗ってあげた。

翌日、この日も何もなかった。放課後は裏生徒会に集まったのでダ・ヴィンチちゃんに頼んでいたモノの製作状況を聞いたり、士郎をからかったり、黒髪凛に殺されかけながら楽しく過ごして帰宅。

帰宅早々にエリちゃんから洗濯のことを聞かれたので、ちゃんと変なことしないで洗っておいたことを告げる。

だが、なぜか怒ったエリちゃんから槍で突かれた。

運良く着ていた戦闘服が無ければ即死だった。いや、藁人形もあるからストックだけは二つほどか。

とはいえ、なんでそんな怒ったのか訳もわからず俺は混乱しながらも口を聞いてくれないエリちゃんに謝罪を続けた。

まあ、俺はエリちゃんになら殺されても別に構わないが。寧ろ他の奴に殺されるくらいなら彼女に殺してほしい。



て昨日のブスリってやつちやったことだよね。

「ご、ごめんなさい!! わ、私、危うく貴方を殺してしまうところだったわ!」

とか思っていたらなんかすごい勢いで謝られた。どうした。

「私、ついカッとなっちゃって。私の槍で刺したら絶対死んじゃうのに……本当に、ごめんなさい!」

そう言つてポロポロと泣き出してしまったエリちゃん。

え、なんでなんで!?

慌てて彼女に駆け寄り震えるその肩を掴む。

「待て待て。別に怒ってないよ、なんでそんな泣くんや?」

「ひっく、だ、だつて……し、死ぬところだったのよ? 私、貴方のことを……ぐす……

うわあああん!」

そして声をあげて泣き始めてしまったエリちゃん。

何がどうしたのか、咄嗟にアビーに目線で訴えかける。

どういう状況や、これ。

「マスターさん。エリザベートさんはあなたに槍を向けたわ。英霊の力でそんなことをすれば普通の人間であるマスターさんなんか一瞬で肉の塊さんになっちゃう。

だから、叱つたの!」

恐ろしく冷静な声で語るアビー。

俺はなんとも言えない気持ちになる。

「叱ったってお前……」

「ち、違いの……わた、私が、相談したの。どうしたらいいのかって……あなたを命の危険にさらして……こんなの……前の私と同じー」

その一言に、自然と俺は反論していた。

「待て。まず、俺は何も怒っちゃいない。そりゃ死にそうになって少しちびったかもしれないが……」

とにかく怒ってない、いいか、二人とも？」

「こ、子イヌ？」

「正気なの、マスター？」

困惑するエリちゃんと、鋭い視線を向けるアビー。君からその言葉が出てくるとは意外だが。俺は至って真面目だ。

「ああ、何かエリちゃんの気に触ることをしてしまったのかと落ち込んだだけだよ。別に怒ってないし嫌いにもなっていないよ」

嘘偽りなしにそう言い切れる。

「マスター？　ちゃんと、私たちの言ってることを理解しているの？」

あなたは死にかけたのよ!」

「それが? 強いて言うならお前たちになら殺されても全く構わないが?」

だつて愛しているから。

そもそも一度失つた命だ、さして執着はない。

まあ、原作のゴタゴタで死ぬとか真つ平御免ではあるが、一度は愛を失つて死んだ人生だ、彼女たちに殺されるならば本望である。

「何か、おかしいなこと、言つたか?」

「子イヌ……?」

混乱にも似た状態のエリちゃん。どうやら俺の意図が伝わっていなかったようだ。

「えーとな、つまり、俺は基本死ぬ気はない。でも、お前らは俺の仲間で家族……とか言つたら厚かましいか。

少なくとも他の奴より断然、大切に思つてる。

だから別に殺されても平気なんだ」

それが俺の愛である。

「知識の成長が早い我が子を内心恐れた両親」とか、権謀術数でこちらにカマかけをしてくる老いばれに、「可哀想な運命」に囚われた少年少女なんかよりも、俺を見て、信じてくれる彼女たちを大切に思うのは何もおかしいことではあるまい。

だが返せるものが少ない俺だ。

「だから命で返す。殺したいほど憎くなったら殺してくれて構わない」

「マスター……あなた」

複雑そうな表情を見せたアビーを見てから、エリちゃんに視線を戻す。

「あとさ、この際だから言っとくけど、俺、エリちゃんの過去とかで軽蔑とか説教とかしないから。そういうのは散々受けただろうし俺には言う資格がない。

俺は世間体とか倫理観よりもエリちゃんの方が大事だから」

これを世間では悪と呼ぶのだろう。俺もそう思う、およそ、殺人鬼に発している言葉ではないし、百人に聞けば大半が俺を非難するだろう。

でも、それがどうした？

正直、俺はこの世界なんかどうでもいい。

俺が大切なのは彼女たちだけだ。もちろん、ダ・ヴィンチちゃんだって含まれてるが、彼はきつと合理を選ぶ、そういう人だ。

「……でも、もし罪悪感とかで辛くなったら俺に言ってくれ。俺が背負えるもんは少ないかもしれないけど、でも俺は絶対にエリちゃんの味方だから。何があっても、永遠に」俺とて、当初はそんな気はなかった。もともと二度目の生など興味がなかった俺だ。ただ、痛いのはやだし死ぬのも怖かったから生きていただけ。

でも、彼女からカルデアの話聞いて、日常を過ごす中で彼女の優しさに触れて、明るさに救われて。今がある。

結局、この場に俺がいるのは彼女のおかげだと思ってる。

「守るよ、絶対。頼りないかもしれないけど、命は賭けるから。それぐらいしないと割に合わないし、それしかないからね」

「子イヌ……本当に……？ 本当に、私を見捨てない？」

「約束する、何なら契約でもなんでもしたらいい。本気で命賭けてるから。」

「というか前から言ってるでしょ？ 俺、過去現在未来関係なくエリちゃんの味方だつて」

「初めて聞いたわ……でも、よかった」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃな顔で、エリちゃんはようやくホツとしたように表情を緩めた。

「だから安心してよ、エリちゃん」

「うん、うん……！」

ひしつ、と俺に抱きついて静かに彼女は嗚咽を漏らしていた。なんとか理解してもらえたか。

一応言つとくが、俺は別に彼女に好かれなくても構わない。そこは大したことじゃない。



いのだ、大事なのは彼女の幸せ。それが成されるなら他はどうでもいい。

魔法世界など滅んでしまつて一向に構わん。

こつちの世界が滅ぶのは結果的に俺らが死ぬから困るが。

「でも、しっかりと私を律して。私、まだ怪物だから。絶対にルールを守れるとは思わない、それが……私は怖い。」

だから、もし以前のような悍ましい所業を成すなら絶対に私を止めて」

「それが君の望みなら守るよ。絶対に、死なせないけどね」

エリちゃんが俺を抱き締める力を強める。ちよつと痛いけどここは我慢しておこう。

「マスター。もう一度問うわ。ちゃんと意味を理解して言っているのね？」

アビーは未だこちらに鋭い視線を向けている。だがそこには煮え滾るほどの激しい感情が潜んでいた。

「ああ、本気だ。」

それに、お前もだぞ、アビー」

「え……？」

何を惚けた顔してる。言つたはずだ、俺はお前たちが何よりも大事だと。

「お前も、俺のかけがえのない存在だ。」

「何があつても守るよ」

「ちよつと、子イヌ……私、今結構本気で信用してたのに、早速浮気？」

「いやいや、勘弁してくれよ。どちらも本気だし、エリちゃんが一番大切だ」

「!! そ、それなら、ゆ、許してあげないことも、ないけど」

「なんてひどい方……マスターさん、私は遊びなのね」

よよよ、と袖で目元を覆うアビー。

「いや、そつちの方が燃えるだろ、お前？」

俺の問いかけに、アビーは確かに口の端を歪めた。

やっぱ、悪い子だなお前は。

「ええ、ええ……つまり貴方は私が悪い子でも構わないのね？」

「構わない。とはいえ世界を滅ぼされたら皆で暮らせないから全力で阻止するけど」

それについては無責任にならざるを得ない。

だって、本気でアレらが世界を侵食してきたら俺個人ではどうあつても止められないだろう。

まあ、諦めることはないと思うが。

「まあ、まあ！ うふふふ……本当に、無責任でちっぽけで、救いようがない方なのね貴方」

本当にその通りだ。絶対、俺、最後のマスターみたいになれないし。彼のことは本気で尊敬するが絶対に同じにはなれない。

「お前も気付いてるだろ、俺が彼とは違うって」

「もちろんよ、だってあの人なら私のことを絶対に救うと言うわ」

そうだろう。彼ならば救うことを諦めない。

でも、俺にはできない。約束する勇気も力もない。

だから、救うとは言わない。

「俺は悪い人だ、それでも構わないなら今後も力を貸してくれ」

「アハハハ、本当に言うのね。救うことは約束出来ないって、私が悪い子なのは認めるくせに」

「そうだな。でも味方であることは絶対やめない。お前を敵と認識することはありえない」

お前が世界を壊すなら止めよう、世界を痛みに堕とすなら阻止しよう、大いなる異神を召喚するなら叩き返す、その上で娘をもらおうと宣言してやる。ヨーグルトを見ても発狂しなかったんだ、ならやりようはあるだろう。

「なんて楽観的な、いえ、お粗末な結論かしら」

「そうだな。でもお前の味方ではやめない」

「矛盾してるわ。悪い子だって、私が世界を救<sup>壊す</sup>うのを看過出来ないといいながら、味方ですって？」

「そう言った。……確かに世界を壊すなら止める、だが憎まないし嫌わないし恨まない。さつき言ったはずだが？」

「っ！ 本当に、度し難い凡人よ。本当……救いようがない悪い人だわ」

そう言いながら俺の背中にそつと寄り添うアビー。

俺は、おそらく何よりも無責任で横暴な願望を口にした。

秩序や『善性』とは程遠い宣言をした。

「……なら、絶対に、私を離さないでね。マスター」

だが、震えながらこちらに手を差し伸べてきたこの少女の味方でいようとすることはきつと間違いではない。

いや、間違いとは思わない。

「ああ、必ず、永遠に離さないよアビゲイル」

「うん……よかった」

そう言つて俺の背中にもたれ掛かった彼女は、すぐに寝息を立て始めていた。

彼女は不安定な存在である。その身体も精神も。あの忌々しい肉塊に毒されている。

だが、それを彼女が許容するなら俺も許そう。

「子イヌ……」

「安心してエリちゃん。俺、死んでも君だけは守るから。絶対に裏切ることも見捨てることもしないからね」

「……ありがとう」

子どもに言い聞かせるように、優しくそう語りかければ、エリちゃんはとても穏やかそうな顔で、アビーと同じように眠ってしまった。

ポスツと俺の胸板に頭を預けて寝息を立てている。

「どうやら毎日睡眠を取らせていたら人間と同じような睡眠習慣が身につけてしまったらしい。」

べつにそれは構わないが、どうやってこの二人を起こさないように布団に運ぼうか、という難題を俺は小一時間考える羽目になったのはきつと幸せなことなのだろう。

なんとかして二人を布団まで運び、俺も自分の布団敷いて就寝した頃、おそらくは夢の中なのだろうと臆げに理解している曖昧な時空にて、俺は精神を漂わせていた。

「またお前か」

『ヒトザルの分際で随分な言い様だ。小僧』

なんとなく予想はしていたが、やはりというか目の前には以前にも見た七色の肉の塊、即ち時空の神『ヨグ＝ソトース』がいた。

これも予想していた通りなのだが、俺の精神は発狂することなく平静を保っている。理由もなんとなく予想付いてるのだが――

「何の用だよ。言っとくが俺はお前に用はないからな」

『よく吼える獣だ。だがそれも許そう、貴様は我らと同じ存在なのだから。当然の権利である』

「いや、俺ちゃんと手足ついた人型だからな」

肉の塊どもと一緒にされたくない。

『貴様はこの世界では異物だ。それは他の漂流者共も同じ、しかし貴様の場合はそもそも魂からして上の存在だ。』

我々でも干渉できぬ圧倒的上位者、或いは我々の行動をも自在に操ってしまう絶対的存在。それこそが貴様の魂』

言わんとすることは分かる。メタいことを言えば、クトゥルフ神話も fate も架空の存在だと確定している世界のことを言っているのだろう。

まさしく俺はその世界の出身だ。

『故にこそ貴様には多くの権利があり、同時に多くの義務があるが、それを強制することは我にも出来ぬこと。』

しかし、肉の体は紛れもなくこの世界のものであり、こと物質での戦いとなれば貴様は塵芥にも等しい』

わざわざ嫌味言いに来たのかこいつ。

すごい嫌な奴だ。

『だが一つ、我には一つだけ貴様に確認せねばならぬことがある。』

貴様も気付いていようが、それは我が娘のことに他ならぬ』

「アビーは俺が守る。……どうやらお前の言うことを間に受けるならこと精神の戦いで俺はお前に負けないらしいしな」

全くいい事を聞いた。精神が重要になってくるクトゥルフにおいて俺の方が上手とは。

『貴様は、あの子の味方でいると言った。同時に世界も守るとも言った。その真意を問いたい』

「真意も何もそれがすべてだよ肉団子」

『……本気で、そのような甘い考え、稚拙な理想を掲げるといふのか？ 貴様には現実世界で満足に戦える力も無いといふのに？』

それでも我が娘を守りながら世界も守ると？

まったくもって笑わせる。これは傑作だ』

「なら笑えよ。稚拙なもの到底難しいことも理解してるさ。」

だが、絶対に心は屈しない。俺はそう決めている。

いや、さっきの出来事で腹を決めた」

『なんと、加えてその決意の底も浅いか。』

なんとも哀れな魂よ、捨て切れぬ、憎みきれぬと迷い続けた挙句、その迷いのままにハリボテの理想を掲げるか。

よもや、『あのマスター』を模倣したわけでもあるまい？』

「それこそ悪い冗談だ。彼は俺なんかよりも強い。どう足掻いたって俺には追いつけない境地にいる。」

それでも、俺は俺の境地を目指す。いや、決意だけは決まってる。なんならここでやり合うか？ 俺ってばお前の世界よりも上位の世界の魂だぜ？

負ける気がせん」



『ふん……。ならばこれまでと同じく我はそれを眺めよう、見定めよう。味方でありながら破壊を阻止せんとするならばやって見せよ。

行動の伴わぬ決意など塵も同然、*“まつろわぬものども”*でさえ目も向けぬだろうよ。*“愚かしくも救い難い醜悪なもの”*としてな』

「言いたいことはそれだけか？」

『……。ふむ。やはり貴様、面白いな』

それだけ言うと、肉の塊はやつぱりヨーグルトになって溶けて消えた。

今更ながら、なんで一回ヨーグルトに化ける必要があるのか俺は疑問に思うのだった。

## 審判の刻

昨晚、ちよつと一悶着あつたりもしたが、特に生活に支障はなく夢に出てきた乳製品もまったく眼中にない。

サーヴァントの二人は昨日の出来事がまるでなかったことかのようにいつも通りに振舞っていた。

なので俺もいつも通りに、朝飯を作り一緒に家を出た。

高校について彼女らと別れ、普通に授業を受ける。

そしたらあつという間に放課後だ。

何事も無さすぎて逆に気持ち悪い。

根拠とかまつたくないがこれって『嵐の前の静けさ』ってやつなんじゃないかと思う。

現在は放課後に集まる裏生徒会本部にて衛宮との談笑に興じていた。

いや、よく考えたらここってそういう場所じゃねえし。

ちゃんと今後について話し合う場だし。

「ところで、調査ってどうなってるんだ？」

なんか、いつの間にか無いもののように話題にも上がらなかつたけど」  
心配になつて黒髪凜に尋ねる。

「だいぶ進んだわ。」

魔法関係の重鎮くらいなら名簿作つてあるわよ」

マジかよ、言つてくれよ。そんな大事なこと。

「だって、あなたサーヴァントの入学式に行つてて居なかつたじゃない。仕方ないでしよ」

そういえば俺があの日合流したのはだいぶ遅れてだつた。

それというのも葛葉刀子とアビーの写真撮影で揉めたからに他ならない。あいつ、自分の子ども出来てからそういうやる気出せばいいものを。アビーの保護者は俺である。学園長も認めている。

そう言つて言い負かしてようやくアビーを独占することに成功した。当のアビーは顔を真っ赤にして「マスターのバカ」と罵つていたがそれって俺にはご褒美である。

結果、俺の『麻帆良製デジタルカメラ』のフォルダはアビーの写真で埋め尽くされたのであつた。ま。

「自分で言つてて気持ち悪くない?」

「え、なにが？」

心底理解し難いといった様子の金髪凜が声をかけてきた。

気持ち悪いとか、失礼だよな。

「な？　つて俺に聞くなよ。俺までそういう趣味かと思われるだろ」

同意を求めた衛宮はしかし、俺と距離を置いた。

解せぬ、イリヤにバブみを感じていたくせに。

「お前は守備範囲広いだろ衛宮」

「なんで俺ばっか仲間にしようとしてくんだよ！

お前のせいで最近、『衛宮くんってロリコンなの？』って聞かれ始めて困ってるんだよ

！　やめてくれよ！」

なんだなんだ、凶星だろう？　固いこと言わず素直になれって。

「いやあ、このメンバードと断然、衛宮の方が守備範囲広いわ。だって十は離れたおぼさ

まから下は小学生まで……」

「あることないこと言うな！　あ、いや全部嘘だから、丸っ切り捏造だから、頼むからその人差し指を下げてくれ、ガンド撃たないでくださいお願いします」

静かに怒りを滾らせた黒髪凜がガンドを衛宮に向ける。あれって人差し指向けた状

態で体調不良の呪いかけられるんだよね？

もしかしてもうかけられてね？

「うぐつ!! き、急にお腹が!」

ほら、めつちや腹痛そうな衛宮が身を屈めている。あれ絶対本来のガンダかけられてるよね？

「安心して、今日一日は効果続くようにしといてあげたから」

にこやかに語る黒髪凛に衛宮は顔を青くした。

かわいそうに。

「お前のせいだろ!! 今のは絶対お前のせいだったぞリツカ!」

叫びながらも教室を飛び出していく衛宮。君が生きて帰ってくることを心から祈ってるよ。

「なにやら衛宮くんが凄まじい形相で廊下をかけていったけど……

何かあった?」

困惑気味のダ・ヴィンチちゃんが部屋に入ってきた。

ちなみに彼の工房は本部とは別にちちゃんと確保してある。

「いや、何もなかったよ。な、遠坂?」

「ええ、何もなかったわ。それより用があったんでしょ、キャスター」

俺と遠坂のケロツとした様子にダ・ヴィンチちゃんも深く追求せず衛宮の件は闇に葬

られた。

「ああ、今日はマスターが来ていると聞いてね。彼に一つ報告だ」

「お、なんだなんだ」

「君の魔力についての話さ」

「そういや細かな範囲の特定を頼んでいた。」

「具体的には俺がどれだけ離れるとサーヴァントに影響が出るか。」

「だって修学旅行とか控えてるし、魔法世界編もたぶんこれ出る羽目になる。」

「もし行かなくなってもいずれば必要な調査である。」

「いいよ、ここに言ってくれ」

「別に裏生徒会メンバーにバレても問題ない。少なくとも黒髪凛と衛宮は信用してる。」

「彼女らが実質的なリーダーである以上は俺はこのメンバーとも仲間にいるつもりだ。」

「そうか、なら伝えよう。」

「……ぶっちゃけどこに行っても平気だ」

「は？」

「え、と。それって修学旅行とか平気ってこと？」

「というかサーヴァントの話だよな？」

「そっだよ？」

君の契約は『世界との契約』だ。どこにいようが君が『世界』に存在するならば『世界』から魔力が供給される。サーヴァントとは別行動しても問題ないということだ。

ちなみに、魔法世界とやらに行っても平気だと思ふよ。あれもおそらく『世界』の一部にカウントされている」

マジかよ。散々心配してたのに、初めから対策いらすとか。

いや、素直に喜ぼう。これでどこに観光行っても平気だし、修学旅行も魔法世界もどこでも行き放題だ。

「ただ、無いことだとは思うが宇宙はダメだ。当たり前前の話だけどね。『世界』の影響が及ばない、例えばこちらの世界の月とかね。

宇宙空間だけでもおそらく即供給を打ち切られるだろう」

そんなところ行く気はさらさらない。唯一、火星の異世界たる魔法世界がネックだったがあれば『世界』の一部というなら問題ない。

いや、というかこの世界の『アラヤ』強過ぎね？

絶対、錬鉄の弓兵とかパワーアップしてるよ。

……なんかこれもフラグ臭いな。今のなし。

「あと、これもマスターの話なんだけどね」

俺の話多いな、いやあの本からこつちずっと俺が原因のゴタゴタが起きてはいるが。

「私含めて彼女たち、やつぱりあちらの世界の座から来ているようなんだ。正確には座ですらなくて、『記録帯』。君と別れた時点での私たち、と言ったところかな」

なるほど、つまりー

「この世界の座もあるということか」

「それは不明だ。ただ、これだけアラヤが強いなら十中八九いるだろうと思うけどね。あくまで推測でしかないが」

それを言ったら大体推測でしか測れないのが現状だ。

なにせ『権能』に匹敵する力を秘めた本なんてものがあるんだから。それを使ってアビーたちを呼んだ俺が言えた義理じゃないが。

「本、ね。」

ちなみにこれも蛇足なんだがね、あの本、もしかしたらまだ使える機能があるかもしれない」

「召喚以外にか？」

題名からてつきり召喚オンリーと思っていた。もしかしたらバックアップ機能があるのかもしれない。

「ま、今はなんとも言えないけど」

まあ、ダ・ヴィンチちゃんに解析できなかったことから最早あの本を制御しようなど



とは考えてない。ただ、俺の利、彼女たちの利になるうちは使うまでだ。

「そうなるよ、やはりあの本を置いた者の思惑が気になるわよね。」

何か大きな存在に対抗してのこととは思うけど。

てことなら、その大きな存在というのにも気になるし。

こんな大掛かりな事してまで止めようとするのは、一体なんなのかしらね」

全くその通り。同意しかできない、他のことは分からんままやし。

型月の魔術師を呼び、英霊まで呼ばせて、一体何と戦わせようとしているのか。

まあ、俺はアルビレオからの情報で大まかなことは分かるが詳細までは突き止めていない。伝えられるだけの情報がないのだ。

依然、謎は謎のままである。

「まあ、今、急いでもしようがない。

気長にやっつけていこう」

「呑気なものね藤丸くん。でも実際そうなのがなんか悔しいわ」

俺に言われても困る。

だが、転生者たちの選考基準も考察に入れるべきだろう。

なぜ、彼女たちなのか。

なぜ、俺だけ異質な魂なのか。

その黒幕とやらが出てきてくれないとこれ以上は分からんちんだ。

帰宅後、エリちゃんから今日の報告を聞く。

今日は茶々丸あたりがネギくんと交流を深めていたようだ。

うん、順調。

なのに物凄く嫌な予感しかない。

どうやら俺は疑心暗鬼に陥っているようだ。

そのため、寝る際はより一層アビーの匂いを嗅いでから就寝した。

翌日に寝起き早々エリちゃんからビンタをもらった。

今度はなにをやってしまったんだ俺。

曰く、『アビーの匂いを嗅ぐなら私のも嗅げ』と言われた。

なるほど、ならばお言葉に甘えて。

エリちゃんはちよつと甘酸っぱい匂いがした。

感想を述べるとまたもやビンタをもらった。

槍ではないとはいえ、英霊のビンタである。

機能不全が出ていないかダ・ヴィンチちゃんに戦闘服を見てもらう必要があるだろう。

エリちゃんに深い感謝を述べてから高校に向かった。

今日は土曜日。学校は休みなので真つ先にダ・ヴィンチちゃんの工房へと足を運んだ。

「おや、マスター。どうかしたのかい？」

扉を開けると、魔術工房らしい機器や礼装、触媒がごちゃごちゃと置かれた雑多な部屋が現れる。

雰囲気はカルデアのものに近い。

「ちよつと用事があつてね。

そういや、他のメンバーの礼装とかどうなってる？」

ダ・ヴィンチちゃんという後方支援にはうつつつけの存在を召喚したのだ、遠坂管理の本を使わせてもらったこともあり裏生徒会面々の礼装の開発も彼には頼んでいる。

素が弱い俺にばっか作っても焼け石に水だろうし、それなら味方全体を強化した方が効率も良いだろう。

「ああ、一通り各人にあつた礼装は渡してある。あとは個人的な受注を受けたものが数点かな」

仕事早いな、さすがダ・ヴィンチちゃん。もうこの言葉だけで全部片付きそうで怖い。

とはいえ彼にも出来ないことはあるので無茶は頼めないがそれは瑣末な問題だろう。これ以上は本当に神様に頼むしかなくなる。

「流石だな。」

毎度聞くようだが俺の頼んだヤツはどうなってる?」

俺も、彼には個人的に頼んだ礼装が何点かある。

その進捗を聞きたい、主に一点について。

「そちらも随時開発中。いずれも順調に進んでるよ。」

……ただ、君が熱心に頼んできた礼装ね、あつちはちよつと時間かかるかなあ」

まあ、そうだろう。元が一般人でしかない俺だ。戦闘が可能な域にまで引き上げるのは至難の技、彼にししか頼めない高難易度の発注である。

「多少な無茶は許容するよ、核さえ無事なら治せるだろ?」

ダ・ヴィンチちゃんなら」

とはいえ『あの礼装』の完成は俺の悲願にも等しい。

だから何が何でも作って欲しい。

「核って……私はあくまで技術粹だ、治療は他の英霊にはるかに劣るよ。まして『死』を迎えた人間を蘇生なんてできないから。

それに、軽々しく肉体を捨てるもんじやない。エーテル体の私が言えた義理じやないがね」

捨てる気は無いのだが……。

あくまで必要なら捨てるまでだ。

「……それに、正直私はアレの開発には乗り気じやないよ。だって明らかに無茶な設計コンセプトだ。君に備わる『世界の加護』が無ければ甚だ不可能な品物だよ。

改めて確認するけど、本気で欲しいのかい？」

こちらを氣遣うような眼差しに、少し嬉しさを覚える。だからこそ彼は好きだ。

「欲しい。どこまでいっても現代一般人でしかない肉体だ。何らかの補助を付けなければこの先、やっていけないだろうさ」

具体的にはポヨに殺される予感がする。理由は特にないけどあのお姉さん結構容赦なさそうだし。

これまでの俺なら龍宮隊長に命運を預けていた。

「……まあ、君の頼みだ。それに令呪まで使われちゃやるしかないよね」  
「ごめん。この件については貴方に汚名を着せてしまいかもしれないが、それでも俺は強くなりたい」

カルデアで行われていたデミ・サーヴァント実験に猛烈に批判を述べたという彼だ、『例の件』にも同じくらしいの嫌悪感を感じるのだろう。

でも、俺は欲しい。

今後のためでもあるが、何より守られるだけなのは忍びないから。最早この身は彼女たちのために捧げると決めた今は撤回することはあり得ない。

「とはいえ技術的にも困難なものに変わりはない。完成には時間がかかると思うけど、我慢してくれ」

声のトーンを少し落として述べた彼は言うなり作業机の方を向いてしまった。少し不機嫌そうな雰囲気を出している。

嫌われてしまったかも、と思いつつ後悔はしていない。

そうは言っても気まずいので何か他の話題を探して部屋を見渡す。

すると、テーブルの上に無造作に置かれた紙束が目に入った。

手に取りページをめくる。

「ほう、これが黒髪凜の言ってた」

それは魔法世界の重鎮たちのリストだった。

名前に判明している経歴、役職、その他諸々の情報が書き連ねられている。いくら魔術が探知されないからと言ってここまでの情報を集めるとは、やはり彼女たちは只者ではない。

「うは、ゲードル総督まで赤裸々に……いや、『寝取られ趣味、また稚児趣味の可能性』とか、絶対関係ない情報でしょこれ」

プライベートすぎる情報、正直知りたくなかった。

他には、ヘラスの皇女に、アリアドネの総長。

あ、リカード！

そういやそんなおっさんもいたな！

つか、メガロの情報多過ぎだろ。なんか恨みでもあんのか？

「イザヤ・メガロ・エフライム・ネビーム、に。

ラピス・スウインドル・アエテルノ・エリクシャー……妙に長い名前だな。つか、元老院議員ほぼぼコンプリートしてるし」

おまけにイザヤとやらはネギくんの故郷を襲撃した悪魔たちの雇い主・反アリカ派の筆頭格らしい。

さらにはMM創設メンバーの最後の一人とか。どんだけ生きてんだよ、亀仙人かよ。

「ラピスは保守派、大戦期には一貫して和平を主張し紅い翼にも協力していた、と」  
ふーん、穩健派ってことかな？

案外、漁夫の利を狙う策士かもしれないが。

「……ただし女癪が悪く、その甘いフェイスで著名人を誑かしては度々スキヤンダルをすっぱ抜かれている、ってこれただのナンパ男じゃねえか！」

「あー、うるさい！ 用が済んだのならさっさと出ていきたまえ！」

突然杖を振るったダ・ヴィンチちゃんに不可視の力で部屋の外まで吹っ飛ばされる。

そのまま廊下に派手に転げ落ち、後頭部を痛めた。

「はっ！ そーいやメンテナンスしてもらおうの忘れた！」

とはいえ今の不機嫌モードにはあまり近づかない方がいいだろう。しようがないのでメンテは今度にする。

何はともあれ、もう高校での用事は済んだので、今度はアルビレオの元へ向かう。交渉は依然続いているのだ。



「おや、あなたでしたか。ようこそいらっしやいました」

「ああ、手土産も持ってきた。とりあえず中で話そう」

いつものようにワイバーンに挨拶してアルの家に入れてもらう。

一度目の交渉からこっちアルの態度も穏やかで平時の飄々としたドS気質は鳴りを潜めていた。

まあ、話の内容が内容だけにふざける気分にもなれないのだろう。

「紅茶でよろしかったですか？」

「構わん。たまにはコーヒー以外もいいもんだ」

アルの家に來るときは決まってコーヒーを頼んでいるのだが、わざわざアルが申し出たということは豆を切らしているのだろう。

ならば、と素直に申し出を受ける。

「それで、開発はどうなってる？」

渡されたティーカップを口に運びつつ最初の問いを投げる。

「そうですね、雛形は完成しています。あとは機能の多様性を持たせるための変形機構ですかね。正直、どのくらいまで搭載する予定ですか？」

「そうだな、出来れば入れられる限り入れたいがそれも無茶だろう。なら最低限、姫御子の力を入れられればいい」

「っ！」

最後の一言にアルはピクリと眉を動かした。

当然の反応だ、彼とて紅い翼の一人、かつて仲間の一人が命をかけて日本に逃がした少女を狙うような発言には敏感になるだろう。

「そう構えなくていい。別に本人をどうこうするつもりはない。力さえ使えれば他はどうでもいい。おそらくアレは相当にレア、こちらの世界の歴史上でも類を見ない力だ」  
例えるなら上条さんのアレ。もはやチートと呼ぶしかない能力が完全魔法無効化能力である。効果はそのまんま魔法を完全に無効化、消し去ってしまうというバランスプレイカーもいいところ。

魔法世界ではその力を持つ存在が歴史上少なくとも複数体いたというのだから、よく今まで世界崩壊しなかったな、と感心する。

「……一応、忠告しておきます。」

彼女をどうこうしようというなら私は容赦しません。それは私が果たすべき義理であり責務だからです」

「当然だ。その時は『裏切って』構わん。もともとあんたとは利益ありきの関係だろう？

なら、俺が不利益と判断したなら遠慮なくやれ、俺も遠慮せずお前を殺す」

馴れ合う気はない。互いの利となる関係を保っているからこそ俺たちは敵対せざにいられる。

「それに再度言うが本人には興味はない。あくまで力だけだ。それさえ搭載してくれば最早、神楽坂明日菜には関心はないさ」

でもあの子結構面倒見いいし、性格は好みだしなにより可愛いんだよね。

……あ、いやいや俺にはエリちゃんとアビーがいるから。煩惱退散、煩惱退散。

「そうですか、なら良いでしょう。」

その代わり、今後も『情報の提供』、お願いしますよ」

「もちろんだ、そちらも引き続きの『協力』を頼む」

「ええ、存じています。こう見えて義理堅いですから私」

爽やかな笑顔を浮かべているが、こいつがDSなのを忘れてはいけない。俺は騙されんぞ。

「じゃあ本日『意見交換』といこうか」

「ええ、お願いします」

そうして幾つかの『原作知識』を俺は与え、アルからは『開発』と『情報』を聞き出

し、その日は夕方まで語り合ってから帰宅した。

もちろん、今後の展開に差し支えない辺りをチョイスして小出しにして与えている情報。いずれはストックも無くなるだろうが、どうせ魔法世界編までの関係だ。

それまでに『アレ』を完成させてもらいたいがはてさてどうなるやら。とりあえずもうダ・ヴィンチちゃんがいるので俺としてはどっちに転んでも痛くも痒くも無い。

翌日、俺は裏生徒会本部に顔を出し、ダ・ヴィンチちゃんに再度謝って戦闘服のメンテを行なってもらった。

結果、特に異常はなくついでに、エリちゃん用の礼装の件の進捗を聞く。

こちらも随時開発中で今の所、一つくらいならできるかもとのこと。テストも兼ねて今度試作品を試してみることにした。

あとは、レオの子飼いかから得た調査報告を裏生徒会会議にて拝聴し、金髪凜のハツキング能力によってこの世界にも『魔術協会に似た組織』がロンドンにあり、また、『アトラス院らしき組織の存在』が出てきたとの報告も受けた。

後者については噂の域を出ず、ほんの僅かな記述からの推測であるとのことから断定するのは見送られた。

その日は日曜ということもあり各々予定を入れているらしく早々に会議はお開きとなった。

俺？

俺は当然、エリちゃんとアビーを連れてデートだよ。

クレープが美味かった。

あと、道中になにやら見覚えがあるような若い男を見かけたが、二度見した時にはもういなかった。

確か、アレは――

翌日、放課後に久々にエヴァのところに顔を出すか、と思うもそういえばいつのタイミンクかにネギくんが彼女の看病に来る、ということを思い出し寸前で思いとどまった。とりあえず、吸血鬼騒動が終わるまでは会わない方がいいだろう。

帰ってからエリちゃんに聞けばやっぱりその日はエヴァは風邪で休んでおり、俺の神がかった回避スキルに自画自賛してしまった。

俺ってば直感スキル持つてるんじゃないかなあ。

また翌日、もはや修学旅行までは準備や調査と、地道な活動しか行えないため衛宮に戦闘訓練を付けてもらうことにした。

衛宮曰く『才能はない』らしい。

魔術のみならず近接戦闘すらままならないとは、この肉体はほとほと非日常に適應していないらしい。

そうは言っても護身くらいは出来るようになりたいので稽古をつけてもらう。

結果は見事にボコボコ。護身のごの字も習得できなかった。

衛宮は地道にやればいい、と言っていたがどうにもこれ以上上達できる気がしない。やはり俺は非戦闘員なのか……。

落胆しつつも帰宅、今日は麻帆良中が二十時に停電する日なので早々にご飯とシャワーを済ませる。

もう最近普通に生活しちゃってるけど、当面は俺が出張る必要のない、寧ろ出たら掻き乱しかねないイベントだらけなので裏での活動をするのみと結論付けた。

ふと、停電といえばその日にエヴァとネギくんが激突するということを思い出した。だから出て出て行く必要はない、エヴァには是非ともネギくんの成長の一助を担ってもらいたい。

と。

『リツカくん！ 起きてるかい!?!』

うとうとし出した俺の脳内に激しい音声が響いてきた。

こいつ、直接脳内に……!!

『あー、はいはい。この声はダ・ヴィンチちゃんね』

とまあ、これはマスターとサーヴァントの念話であつて声もダ・ヴィンチちゃんのものなので驚きは少ない。

とはいえ夜に何の用だ？ 随分と慌てた様子だし。

『ああ、良かった。とりあえず私の工房まで来て欲しい、内容は来てから話す』

それだけ早口で言うとブツリと念話が切れた。

なんやなんや、ただ事じゃないっぼいなあ。

寝る寸前だったのですごく気怠いが、彼が慌てるなどそれこそ何か大きな事態が発生しているに違いない。

朦朧としながらも急いで着替えて部屋を出る。

スヤスヤと安らかに寝息を立てる彼女らは……わざわざ起こさなくてもいいだろう。戦闘の可能性があるなら、ダ・ヴィンチちゃんは伝えてくるはずだ。

「んん……マスター？ どこに行くの？」

「ん？ ああ、ちよつと高校までね、朝までには戻るからゆつくり寝てな」

物音を立ててしまったからか、アビーが目をこすりながら起きてきたが、心配ない旨を伝えて早々に部屋を出る。

寮からは電車に乗る必要があるが、それほど時間がかかるわけでもない。おとなしく座って本を読む。こういう時こそ冷静さが大事だ。

俺は慌てない男なのである。

電車に揺られ、最寄り駅に着いた俺は歩いて無事に高校に辿り着く。ダ・ヴィンチちゃんは工房に来いと言っていたので大人しく彼の工房である部屋に入った。すると――

「ああ来たか。ちよつとのんびりし過ぎじゃない？」

なるべく早く来て欲しかったのだけど

「いや、無茶言うな、電車乗る距離なんだからこれでも最速だよ」

『ハハ、なんとも愉快的なマスターだ。やはり君を選んで正解だったねリツカくん』



……何か、聞き覚えのない第三者の声か聞こえた気がした。

『こつちだよ、こつち。……君が手に入れた本だ』

声の主人を探して見渡し、ようやく見つけたそれは本。

それも『初めての英霊召喚』と表紙に書かれたもの。

俺が図書館島で見つけたもの。

……しかし、本はページがめくられその上に『ホログラム状の人物』が浮かび上がっていた。

「誰だ……お前」

真つ白なローブ、艶やかな金髪、何よりも宝石のように輝く瞳がもはや人外の者であることを現している。

『これは失礼、挨拶が先だったね』

その人物は優雅に胸に手を当てて礼をした。

どことなく飄々とした、あるいはふぎけているような態度に不快感を覚える。

「いいから早く答えろ」

『私に名は無い。』

だが便宜上、呼称は必要だ。

ゆえに、『精霊さん』とでも呼んでくれ』

ソレは悪びれることもおどけることもなくあくまで穏やかにそう述べた。  
「は？」

自然と怒りが湧いてしまうことも仕方ないと思う。

そこへ、見兼ねたダ・ヴィンチちゃんが口を開いた。

「彼はあの本に棲まう精霊だ。それも人工的に作られた人造精霊。」

私も先ほど初めて遭遇してね、幾度か言葉を交わしてから、君を呼んでほしい、と言うので念話で報告したんだ」

なるほど、わからん。

「そもそも、こいつ……信用していいのか？」

「さあ、だが彼の語った話はどれも真実だった、だから私も君を呼んだんだよ」

彼がそう判断したなら仕方ない。

「で、精霊さんとやら。俺に何か用でもあるのか？」

今まで解析に散々苦勞させられて結局分からなかったのに、今更ノコノコと出てきて自己紹介とか。

ふざけてんのか、と言いたい。

『いやね、私も出てくるつもりはなかったんだが……少し厄介なことになってね』

「困ったこと？」

顎に手を当てながら困ったように彼は述べた。

『率直に言おう。』

今日、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとネギ・スプリングフィールドの両名は死亡する。

君には私の意図が伝わると思うが?』

「なっ!?!」

予想外の発言に俺は絶句した。

唐突な原作ブレイク発言もそうだが、俺が原作知識を有していることを知っているよ。うな発言まで飛び出した。

何がどうなつてー

『ぶっちゃけ、時間がない。』

私の予測が正しければあと半刻もしたら二人とも無残な肉塊、吸血鬼の方は塵すら残らないだろう』

「待て待て待て! 最初から説明してくれ!

いったい、なんでそんなことが。

そもそも、どうして俺のことをー」

『知っているからさ。この続きは帰ってきたからにしたい。』

今はとにかく時間が惜しい、私を持ってあの橋まで行きたまえ」

一方的な発言に一方的な命令。あまりにも癪に触る、が。事実であつたならば一大事である。

まさか原作主人公と準ヒロインが三巻で死亡など、この先の魔法世界編とかどう進めていけばいいんだ。そもそも修学旅行とかもなくなるし、そもそも原作が終わってしまふ。せつかくここまで配慮してきたのに。

というか、確実に今後の歴史に大きな歪みを生み出すことになる。

『迷う時間はないよ。私を所持して橋に向かうんだ』

「くそつ、信用できるかそんな与太話！

だいたい、それならなんでサーヴァントの同行の必要を伝えなかった！ 二人が死ぬような場面に生身で行くなんて自殺行為だろ!!」

『必要ない。寧ろ足手纏いだ。相手は生半なサーヴァントで対抗できる存在ではない』

エリちゃんやアビーでも無理？

おかしい、そんな存在がこんな序盤で出てくるなんて。聞いていない。

造物主？ いや、奴はまだ封印状態だとアルに聞いている。

ならテルティウム？

それこそあり得ない。学園結界はもとよりここには学園長を始め、手練れの魔法使い

が大勢いる。今のタイミングで突っ込んでくる理由がないし、そもそも目的が不明である。

「……なら、相手の正体を教えてくれ」

『ふむ、強情だね君も。素直に私の指示に従ってほしいところなんだが、君ならば名前を聞けば全てを理解すると思うし、うん。

じゃあ良く聞いてね』

「早く言葉」

『今後の歴史の重要人物たる二人を狙う相手。

それは—————。—————』

——その名前を聞いた俺は、本を掴んで一目散に橋へと向かった。

## 靈長を律するもの、裁定を下すもの

「バカが、バカが、バカが!!」

我武者羅に走りながら己の浅はかき、無謀さ、愚かさを罵り続ける。

どうしてこうなった？

何を間違った？

俺は、どこで選択を誤ったんだ？

考えれば考えるほどに訳がわからない。

このような事態に陥る経緯が不明だ。

『アハハ、そう心配せずともいい。私に考えがあるからね』

しかしそんな中でも小脇に抱えた本の精霊は呑気に笑っていた。思わず投げ飛ばし  
そうになる。

「策とかそういうレベルじゃないだろ、アイツは!!」

率直に倒せる気がしない。寧ろ倒そうなんて考えは浮かんで来なかった。とにかく  
退いてもらう。

何をしてでもそうしてもらわなければならない。

アレはそもそも戦おうなんて考えちゃいけない存在なのだから。

『落ち着いて落ち着いて。万事私に任せなさい。』

まあ、ちよっぴり手伝ってもらうけど、あとは静観しているだけで済むからさ』

何を、呑気な!!

「くそくそくそつ!!いいから急ぐぞ!!」

『君がね』

一瞬、本能で本を投げてしまいそうになったが、僅かに残った理性で抑えた俺は偉いと思う。

――屋上、彼女は静かに下界を見下ろしていた。

ここは麻帆良の中でも端の端、おまけに橋の近くにあるとある古い建築物、周囲に比べて高い作りの屋上であった。

「……やつと見つけた。やつちやうけど、いい?」

『構わん。アレは危険な種子だ、摘める時に摘まねば』

脳に直接響く声に、彼女は答えることもなくジッと『対象』<sup>ターゲット</sup>を見ていた。

彼女は、此の期に及んで未だ『この討伐』に疑問を持つていた。

知人からは『同時期の生まれ』『巧妙に隠されている』などなど様々な説得を受けたが、それでも彼女の勘が違和感を感じていた。

本当に、アレは『器』なのか? と。

事実としてそれは正しい疑問である。

しかし、それを教えてくれる人はそこにはいなかった。或いは、彼女が最も信頼し大切にしている彼ならば答えを示してくれたやもしれない。

だが、永い時を以前と同じような『殺戮』で埋めてしまった彼女は、彼に相談するという大事な要素を忘却してしまっていた。

あるのは漠然とした愛。

ゆえに個人的な問題は己で解決するという結論を出してしまっていた。

それが此度の悲劇の原因の一端である。



ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス  
「闇の吹雪!!」

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス  
「雷の暴風!!」

二つの大魔法が橋の上で炸裂する。

かたや『闇の福音』と呼ばれた強大なる吸血鬼の大魔法。

かたや『英雄の息子』という肩書きを持って生まれた齡十の子どもの最大出力。

それらがぶつかり合う波動は嵐となって、十分離れた位置にいた俺のもとまで飛んできた。

「うわっぷ! うえ、砂が口に」

『砂だけで済んで寧ろ良かったんじゃないかい?』

君のような一般人では魔法が掠っただけでも吹き飛んじやうと思うし』

天然か? ナチュラルでdisってんのか?

俺は空間把握能力だけは高いと自負する。  
エンデュミオンの鷹とは俺のこと。

橋に辿り着いた時、エヴァとネギくんの戦いはちょうど終盤を迎えていた。  
おそらくは明日菜とチュツチュして契約更新、茶々丸の抑えを頼んでネギくんは二対一の戦いにもつれ込んでいるのだろう。

羨ましい、俺も明日菜とチュツチュしたかった。

『……間に合ったようだね』

「うーん、これ普通にネギくんとエヴァのイベントだよな。

本当に彼女たち死ぬのか？

というか今なんとなく隠れてるけど急いで行った方が良くね？」

『いや、まだだ。不確定要素が乱入すれば彼女は即座に排除に動き出す。

おそらく彼女も測りかねている。願わくばこのまま退いてほしいのだが……』

何やら事情を知っていそうな精霊だ。

だが、今はネギくんたちを救うために動くべき。

「で、今のうちに詳細を聞きたいんだがね？」

『まあ待ちたまえ、こういうのは待つてこそだよ。』

……正直、君にどれだけ情報を与えるべきか悩んでいてね、このまま彼女が退くなら何も問題なく、帰って寝てもらって構わないんだけど』

まどろっこしいやつだ。

その後も問い掛け続けるも精霊殿は一向に口を開かない。

そうこうしているうちに、二人の戦いも終わってしまった。

麻帆良の停電が早めに復旧したために、学園結界が復活、エヴァにかけられた呪いが即座に発動してエヴァ落下。

それをネギくんがまるで王子様のように助けて一件落着。ちゃんちゃん。

「おい、終わっちゃったぞ？」

まさかブラフか？

あいつの姿なんてどこにもー」  
ぞくり。

その時、俺の全身を怖気が走った。

前世今世含め、感じたことのない、魂まで震わせるような恐怖。およそ予想し得る範疇にない圧倒的な恐怖。

もしくは霊長類として、地球の生命としての本能からの恐怖。

あらゆる絶望を混ぜ合わせたかのような絶対的な存在感。

俺は、震えることもできない手足を無理に起こしてなんとか、その根源へと目を向けた。

そこには――

「あ、名簿に『僕が勝った』て書いてこ」

「何すんだ貴様、やめろー！」

「えーと、仲直りつてことでもいいの？」

「……どうなんでしよう？」

やいのやいのと橋の上で騒ぐのは、先ほどまで激戦を繰り広げていた四人の男女。

学園結界の復活により辛くもエヴァに勝利したネギと、結界のせいで負けてしまったエヴァ。ついでに命まで助けられてしまった。

とてもこれまで殺し合いに近い戦いをしていたとは思えないほどの空気。だが、そこそが彼らの長所であり……短所でもあった。

「っ!!!」

最初に『ソレ』に気付いたのは、同じ吸血鬼種であるエヴァであった。

「? エヴァンジェリンさん?

いつたい、どうされー」

遅れて、ネギがその『絶望』の存在を感じ取る。

それでも、二人が『ソレ』に直接目を向けるのにはしばしの時間がかかった。

根源的な恐怖、種としての『優先順位』。『星』から定められた無慈悲な『優劣』。そして、どう足掻いても死ぬという直感が、何よりもそれを直視することを拒んでいたから。

「っ!! レーダーに反応! マスター!!」

科学技術にて『ソレ』の反応を察知した茶々丸が叫ぶ。それは恐怖からではない、ただ、マスターの身に最大級の危険が迫っていたから。

しかしエヴァにはそれに応える余裕はなかった。

「え、ちよつとどうしたの茶々丸さん?

……ネギも、エヴァちゃんも」

魂まで凍りつく二人に、明日菜だけが困惑していた。

そして、そんな彼らの元にゆっくりと、『ソレ』は舞い降りる。  
「探したわよお、おチビちゃん」

身に纏うのは至って普通の服装。白のハイネック、紫色の長いスカートとそれだけなら普通の人間と変わらなかつた。

……ただ、美しい金髪と真っ赤に輝く瞳さえ除けば。

「あ……………?」

『ソレ』を視界に捉えたことでようやく明日菜の全身は『理解した』。星が遣わした大いなる存在、人類の上位存在、あまねく人類種の律者。身体の奥底にある地球生命としての叫び<sup>本能</sup>を。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

別に恨みとか無いんだけど、人類のため、志貴のために――

――殺すわ」

『ソレ』から暴力的なまでの覇気が放たれた。

ただでさえ直視することを拒んだ身体は最早、全てを差し出す以外の行動を取れない、全てを諦めることしか理解できなかつた。

そんな中、この中でも一番の年少たる『英雄の卵』は理性で無理やり脚を動かし前に出た。

「ぼ……僕の、生徒……手を出すな!!」

震えることを理解した身体はもはやそれ以上の動きを拒否していた。それでも、彼女を前にして動くことを思い出せた彼は人類でも稀な存在である。

「へえ……やるじゃない、少年。」

……でも、アレだけは殺さないといけないの。悪いけど、邪魔するならみんな殺すわ」  
だが、無慈悲な執行者は少年のなけなしの勇気を消しとばした。的確に狙って飛ばされた強烈な殺気にネギは尻餅をついたままその動きをとめていた。

「さあて、じゃあお仕事始めましょうか」

「待てよアルク」

ゆっくりと歩みだした彼女の前に、本を小脇に抱えた彼は立ち塞がった。

個体として彼女は彼を認識している、覚えている。しかしなぜここにいるのか、なぜ邪魔するのかは分からない。

「……なんのつもりかしら、リツカ。私、今忙しいんだけど」

故に、邪魔をするなら殺すだけである。

たとえ志貴が悲しむとしてもその命には代えられないのだから。

怖い。怖い怖い怖い。

あらゆる恐怖が、絶望がこの身に襲ってくる。

早くその場から去れ、と。目をつけられる前に逃げ出せと。

だが、理性はいたって冷静である。

それはさつき出会ったばかりの精霊の言葉のおかげか、もはや正体不明のアレに賭けるしかない自分が情けなくて。

それでも、使えるのなら使う、と判断した。或いは魂の――

「そこ、どいてくれない?」

いつも、とは違う彼女。

星の触覚、物理法則の頂点にある真祖の中でも頂点とされる金色の姫君。墮ちた真祖すら屠る究極の地球生命体。

「真祖の姫君、アルクエイド・ブリュンスタッド」

「あ、やっぱり知ってたんだ。」



でも、それが何？ 知ってるなら分かるでしょ。

貴方ごときが私の邪魔をしないで」

放たれる殺気は、おそろくこの世の誰よりも強烈なのだろう、比較対象がおらず、そもそも感覚すら最早ないので分からないが。

「マスター、マスター!!」

後ろでは再三にわたって己が主人に声をかける茶々丸がいた。

だか、今は無駄だろう。だってその瞳は既に戦意どころか、生きることすら諦めてしまっている。

「くっ!!」

だが、何を思ったか、茶々丸はこちらに向かった急発進。

そのまま腕を構えてアルクエイドに突撃した。

まさか、玉砕でもする気か!?

「ああああああ!!」

「……」

ジェット噴射を利用した高速の拳撃。

しかし、アルクエイドは軽く手を振っただけでそれを無力化した。どころか、茶々丸の半身を吹き飛ばした。

「つ、茶々丸!!」

その光景によくやく理性を取り戻したエヴァが声をあげた。

彼女の視線の先では今にも崩れゆく茶々丸が克明に写っている。

「ま、すたー……」

ガシャン、と地面に落ちた茶々丸は駆動音を出しながら発声すらできないほどに損傷していた。

「ロボットか。」

じゃ、次はお前だね、エヴァンジェリン」

ゆつくりとだが動き出したアルクエイドに、俺は咄嗟にエヴァに声をかけた。唯一、この中でマシに動いているから。

「エヴァ、茶々丸を連れて後退しろ!!」

「っ!! お前」

「早くー!」

俺の叫びに、エヴァはすぐに茶々丸の回収に動いた。

「あー、ちよつと。逃がすとかそれこそあり得ないから」

「待てよ。お前の相手は俺がしてやる」

「は?」

彼女の前に立ち、精霊に言われた通り本を開いた。

『はろー、じゃあさつき言った通り、やってみようか』

まさか彼女を前にしても狼狽えないこいつに少し不気味さを覚えたが、とにかく精霊の言う通り地面に本を叩きつける。

『いったあ！ そつと置いてくれよ！ 表紙が傷んじやうだろー！』

……全くもう』

精霊の声を無視して、言われた通りに本に手を置く。

そして、想像した。

『いいよお、もう少し具体的に。彼女を倒せる英霊は果たしているかなあ……？』

こちらを煽るような物言いを、しかし無視して想い描く。

彼女を、星の絶対者を倒せる英雄を。

誰でも構わない。

とにかく、この場を凌ぐことを、アルクエイドを倒せるだけの力を！！

「頼む、誰か助けてくれ!!!」

ねがう。

それだけを。

瞬間、本から眩い光が放たれた。

『よし！ 成功だ、お手柄だね！』

精霊の嬉しそうなその声、視界は光に染まった。

ガシヤン。

重苦しい鎧の音がする。

「……全く。不甲斐ないにも程があろう」

傲岸不遜なる『王の声』が響く。

ガシヤン。とまた一步、『彼』が歩みを進める。

「だが此度は許そう。何せ、貴様は『前世』にて俺への忠節を尽くした功がある」

ひどく愉快そうな声がする。

「古き神を経て……今度は人間どもの『法則』<sup>ルール</sup>に沿ってまで律することを望むか。クク、愉快愉快」

やがて、光が収まり代わりに眩い『黄金』が視界を占領した。

「その惨めな走狗を、よりもよって我が前に晒すとは」

この世のあらゆる財を手に入れた王にのみ許された黄金の甲冑、財という点において敵うものは存在しない孤高なる王。

「だが許す。此度の我は機嫌が<sup>オレ</sup>良い。

そこな雑種の献身に感謝するのだな」

過去未来現在、この世の隅々、あらゆる真理すら見通す最高位の千里眼を有し、世界

最高の頭脳と謳われたホムンクルスを知で圧倒し。

その溢れんばかりの豊富な財と、それに基づく圧倒的な戦力によつてあらゆる英霊を討ち滅ぼす英霊。

「精々、我を<sup>オレ</sup>樂しませてみせよ。星の化身よ」

神々が創り出した最高傑作。天と地をつなぐ楔でありながらそれらを決別させた王。

人類最古の叙事詩に語られる孤高にして絶対なる王。

「……何を惚けている。戦の支度をせい。

これは貴様の度重なる功に対する褒美である。

死ぬ気で我の期待に応えてみせよ、雑種」

凶悪ながらも今は頼もしさしか感じないその笑顔。

「英雄王、ギルガメッシュ!!」

「不敬にも我の名を呼び捨てるか。

だが許す。我が退屈を紛らわせ続けた前世の貴様の献身、星の化身の討伐劇にて労おう。

……分つたならば伴をせい。

此度の宴、我も久方ぶりに本気を出してやる」

——英雄の中の英雄、絶対なる英雄王がここに降臨した。

## 学園を襲う天災

「英靈ゴトときが、私に勝てると思ってるの?」

あくまで悠然と、アルクエイドは絶対者の余裕のままに佇む。

「ハッ! 吠えるな女。たとえ雌の形をしていようが星に傳くだけの人形デクならば雑種と同じく間引くまでよ」

「……雌ですって?」

明らかに見下した視線、態度にアルクエイドの沸点は超スピードで限界を迎えた。

「なら……やつて見なさいよ金ピカア!!」

地を蹴り、アルクエイドは爪を構えてギルガメツシユへと突撃した。

「……フツ」

それを躲すことも、動くことさえせずにギルガメツシユは立っていた。

その背後から無数の黄金の波紋が生まれ、中から無数の『宝具』が射出された。

「っ!!」

仮にも『アーチャー』、射出の速度は速い。

アルクエイドは咄嗟に爪で迫ってきた宝具たちを叩き落とし、その場から退避した。



「フハハハ!! まだ終わりではないぞ!」

後方へと退避したアルクエイドの視線の先、新たに現れた三十を超える波紋から間髪入れず宝具が放たれる。

「く、そ!!」

群れを成して迫る槍に矛に剣、おまけに矢の形をしたものまで。それらすべてが『宝具』である。

中には著名な宝具の原典も含まれ、真名解放こそできぬものの、常時発動型の能力は発動されている。

そんな文字通り一級品の武器たちを一斉に叩き込まれて立っていられる英雄は数少ない。

それこそ、ギリシヤの大英雄くらいだろう。

あるいはギルガメツシユの盟友か。

「がああ!!」

とはいえ相対するこの女性も星の化身と謳われる絶対なる強者。迫るそれらを無我夢中で爪で捌き切る。

「ほう……」

僅かに関心したような声を発したギルはしかし、攻撃を緩めることはしなかった。

雨あられと休むことなく放たれ続ける宝具の数々。

もはやアルクエイドの居る場所は爆炎と硝煙に包まれ周囲から彼女の姿を見ることができない有様だった。

「……………」

そんな中でも、ギルにはアルクの動きが見えていた。正確にはその位置が、だが。

星の化身たるアルクエイドにはとある制限が星より齎されていた。星そのものと言っても過言ではない彼女の力が世界に強い影響を及ぼさないように、能力そのものに制限を掛けているのだ。

それは敵対者の全力の僅かに上を常に維持するという過酷なもの。つまりアルクは常に相手よりも少し強いだけの存在なのだ。

その正確な基準こそ不明ながら、現状の敵対者の中で一番強い素体能力を持つのはギルガメッシュであり、今は基準を論点とするべきではないだろう。

対してギルガメッシュはいえ、アルクの『相手よりも常に少し強い』という制限を掻い潜る裏技を持っていた。

それこそはギルガメッシュの宝具の一つ。

『ゲート・オブ・バビロン』  
『王の財宝』

これはこの宝具の所有者の財によつて中身の種類、貯蔵量、強さなどが決定される特殊な宝具。とはいえ財を開けるには『王律鍵バヴ||イル』を必要とし、バヴ||イルは取り出す財宝に応じて形を変える特殊なもの。さらには蔵の中身は常時増え続けており、それらを状況に応じて瞬時に選別、合う鍵の形で解放しなければならない。

実質、ギルガメツシュのみにしか使えない宝具である。

そして、アルクの制限の対象は『相手の素体能力』に依存する。

つまり、自身の素体能力を大きく上回る宝具や用途の異なる膨大な量の宝具を湯水のごとく垂れ流すことが可能であるギルガメツシュは彼女に対して特に天敵となり得るのだ。

「まさか、彼が来てくれるなんて……」

ギルガメツシュとアルクエイド。まさしく頂点と頂点の戦いに俺はただただそれを

眺め惚けていた。

伴をせよ、とは言われたがぶっちやけ俺はどうやって加勢したらいいのか分からない。  
い。

声かけたただけでも消し飛びそうだ。

『やるじゃないかあ、数多の英霊からあの英雄王を引き当てるなんてき。君、英霊召喚の素質あるよ〜』

こいつはマジで言ってるのか煽ってるのか判断が難しいということもこの短時間で学んだ。

絶対後者だと思うけど。

ていうか素質あるんだったら前世であんなに爆死してねえよ!!

「リツカ……この状況、分かりやすく説明しろ」

アルクの敵意が逸れたことでまともに動けるようになったエヴァが声をかけてきた。

「僕にもお願います。リツカさん」

おっとネギくんもか。あれだけ怖い思いしといて強いね君は。

二人とも深刻な表情をしているが、もはやあの二人の戦いが始まってしまったからにはどちらかが勝つまでは何者も干渉することはできない。

大人しく見守ることを俺はオススメする。

あと、半壊した茶々丸には明日菜が付き添っていた。その瞳は痛ましいと言わんばかりに潤んでいる。

大丈夫、たぶんまだ生きてる。メインデータが無事なら修復可能だってハカセが言っていた。

「説明、ね。見ての通りだ、『天災』と『天災』。強大過ぎる存在同士がぶつかり合ってる。さながら怪獣大決戦というやつだよ」

勝った方が我々の敵です！ みたいな。

いや我王さまは俺の味方だと思っただけね、今の所。

俺がハマしなきゃ大丈夫。きつと、メイビー。

「ふざけるな！ じゃああの女は？」

あの、化け物はいったい何者なんだ!!」

ようよう落ち着けよ兄妹。錯乱したって事態は好転しないぜ？

なんにせよ俺らにはもうどうすることもできない。

ちなみにギル様には令呪とか効かないので俺は単なる縁要員である。つーか、下手に強化してアルクまで手に負えなくなったら困るし絶対干渉しないよ？

というか速すぎて俺の目には追えない動きで戦ってるし。

そもそも英霊の戦いは目で追うもんじゃない、感じるものだ！

そういうのは動体視力が謎のザビーズに任せておけ。

とはいえ、エヴァもあんな死ぬような思いして何も聞かされないのは酷だろう。

どうせ、こんだけ派手にドンパチやってしまつたら学園側にも察知されてしまつてい  
るだろうし。というか今頃学園長室は大パニックだろう。

すまない、俺にはこうすることしか出来なかつたんだ。

いやいや、事後処理とか考えてるけどまだギル様が勝つと決まつたわけじゃない。相  
手は星である。地球である。アースである。

「真祖を滅ぼすお姫様だよ。片方は我らが英雄王、語るまでもなく偉大なお方さ」

マジ、英雄王。彼は前世でもとにかくパーティーに突っ込んでいた。だつて強いし、  
困つたらヘラクレスみたいな感覚でとにかくぶち込んでいた。高笑いしながらクリ  
ティカル連発して次々に敵を屠る我王さまは見ていて爽快だった。正直超カッコよ  
かった。

最初に来た星5というのもあつたが初めて絆をMAXに出来た英霊だ。だから助け  
に来てくれたのかなあ、と幻想を思い浮かべてしまうのも致し方ないだろう。

「姫……アルク……。それはまさかダーナが昔言っていた、あの!!」

ダーナ？ ああ、そういえばそんな名前のバグキャラが続編で登場していたな。なんでも吸血鬼の中の吸血鬼、貴族とか名乗ってたが。

「ダーナのb……マダムは何て言ってたんだ？」

「私も断片的にしか聞いていないが。」

曰く、『マジ無理、調子に乗ってみんなで作ったら手に負えなくなったからもうその話やめて』だそうだし

真祖かよ！ あのババアこの世界だとそんな役回りなのか。

そうなるけどダーナ含めてあと何人か真祖の生き残りが今もいるってことか。なるほど、アルクに前世の記憶が残ってたから暴走で全滅することなく生き長らえているのか。

「あと、ダーナ以外の奴らはトラウマにならずと引きこもっているらしい。世捨て人同然だとか、一説には考えるのをやめて廃人になってしまったらしい」

まるで柱の男のような末路である。

何したんだよアルク。まあ、大方調子乗ってた奴らに制裁を加えたとかだろうが。

星から直接バックアップ受けてる彼女が相手では真祖たちも形無しである。あくまで真祖には全面バックアップ機能が付いてないと思うし。

「なあ、リツカ。私、死ぬのか？」

「は？」

まだ見ぬ真祖たちに想像を膨らませていると、エヴァが不安そうな声でそんなことを言ってきた。

「まあ、王様が負けたら確実に殺されるだろうな」

「ひい!!」　そ、そそ、そんな……ダーナさえ語るのを恐れた相手に……い、いったいどんな殺し方をするんだ？

あああ、嫌だ、やっぱ聞きたくない！　口を閉じろリツカ!!」

閉じてますが……。

そんなに怯えなくてもサクツと殺してくれるよ。

「お前、魔力抑えられてる状態だし痛みを感じる暇もなく吹き飛ばんじゃね？」

「ひえ……!」

それはそれで怖かったらしい。可愛らしい悲鳴を漏らして硬直した。惜しい！　ついでにおしっこ漏らしてくればよかったのに!!

『君、意外と落ち着いてるね。さっきまであんなビビってたのに』

黙れ精霊。

もう、ヤケクソになっただけだよ。だってこれ最早天運にかけるしかなくね？

あ、ダメだ。天の神様はガイア側、星の味方だったわ。ここはエミヤ様に祈っておい



た方がいいだろう。

「エミヤさま、どうか我らに救いを……」

「あ、あの、真祖つて。エヴァンジェリンさんのことじゃないんですか!?

話が見えないんですけど!」

ネギくん。君はまだ知らなくていいんだ。あんな化け物連中のことは考えなくていい、考えても無駄だからね!

「いいかい、世の中には知らなくていいことつていうのがあるんだ。その最たる例がソレさ」

「は、はあ……」

「ああああ……こ、殺される。殺されてしまう」

ガタガタと隣で震えるエヴァはなかなか新鮮である。しまったカメラを持ってくるのを忘れていた。

と、思ったけどフォルダはアビーの入学式の写真で埋まってるんだつた、てへぺろ!

「が、頑張れー!!!」

頑張れ、王さまー!!!」

とか考えてたら急にエヴァが大声を上げ始めた。

「ちよつ?! 何やってんの君イ!」

王様への勝手な声かけはNGである。勝手にご尊顔を拝見するのもNGである。勝手に名前を口にするのもNGだ。

許されるのはギャグ時空だけ。

今は絶対殺される。

せっかく、我王様召喚したのに、その我王様にエヴァが殺されてしまう。

「フハハハハ!! 良いぞ、幼子であればその目に我が威光をよく焼き付けておくがいい!!」

だが、英雄王はさらに上機嫌になって高笑いをした。

あ、あれ？

もしかしてエヴァを肉体年齢相応だと思ってる？

「いや、王様に限ってそんなはずは……」

とか思ってたら脳内に直接声が響いた。

こい……危ない、ギャグで死ぬところだった。反視神経というのは厄介な代物である。

『戯け、そんな雑種が紛い物の化け物であることなど当に知れているわ。平時ならば疾く消し去っていたところよ。』

だが我は今、機嫌がいい、そして貴様はその雑種を守るために無謀にも星の化身に立

ち向かったのだろうか？

ならば此度は許す。その、精神も幼き雑種に存分に声援を送らせよ』

「……とのことだ。存分に応援してやってくれ」

「うおおおお!! 王様あああ!! 絶対、絶対に勝ってくれー!!!」

命がかかるところも必死になるものか。それとも吸血鬼として本能的にアルクに恐怖を感じているのかもしれない。

ふと、気になって戦場へと視線を戻した。未だ爆音と爆炎、バトル漫画相応の激しいエフェクトの連発で見続けているとポリゴン事件の再来になりそうだった。

「……長い戦いになりそうだぜ」

その頃、学園長室では魔法先生、生徒その他関係者が緊急招集され各所の対策に追われていた。

原因はズバリ、学園都市の端にある橋（ダジャレじゃないよ）で起きている謎の爆発と爆音、閃光と大規模な地震 e t c

とにかくものすごい超常現象が起きているということである。

「学園長！ 結界強度、保ちません!!」

「学園長！ 現場周囲の崩壊率、70%越えてます!!」

「学園長!!」

「学園長!!!」

「「学園長!!」」

「うるさい!!」

わかつとる、全部分かつとるわい!

ワシとて手が足りんのじゃ!

順番に処理するからそこに並べえい!

ドタバタと行き交う魔法関係者。それらの多くは裏方専門の者たちだ。結界の維持、世間への魔法発覚の阻止などあらゆる後方支援を担当するものたちでこつた返していた。

ちなみに現場担当の先生たちはすでに向かった後だ。

「結界の維持には情報処理班から割け!

足りんなら謀報班から抜いてかまわん!!

結界の維持が最優先じゃ!!」

「ですが、すでに魔法関係者、一般人問わず度重なる現象を目撃されています。もはや、結界程度では……」

「いや、結界を甘く見るな。アレとて千年モノの大魔法じゃ、そう簡単に破られはせんし効果も薄れたりせん」

とはいえ、学園長たる彼もこの事態の收拾には頭を抱えていた。

それというのも、現場にいち早く到着した先発隊の報告では、『姿さえ見えないほどの高速で動き回る正体不明の超々々々高エネルギー体が、これまた測定不能なエネルギーで激突している』。

という訳のわからない状態であり手を出す前にお手上げ、介入というものを行う手段がないのが現状なのだ。

そこへ、後発として発った高畑から通信が入る。

彼ならもしかしたら、と淡い希望を抱いて通信に応じる。

「高畑くん、現場はどうなつとる!？」

『……なんと、申し上げればよいのか。』

黄金の輝きを放つ物体の周囲から黄金の波紋が出ておりました』

途切れ途切れながらなんとか報告した高畑は褒められるべきだろう。本来なら思考を放棄してしまう現象の説明をなんとか行おうとしていたのだから。

「ごめん、ちよつと何言ってるかわからない」

だが聞いた側も理解が及ぶ現象ではなかった。

『いえ、すみません。表す言葉がなく。』

……そちらに映像を送ります、モニター準備を』

諦めた高畑は素直に映像を送る魔法を使うことにした。

それを受け、学園長も素早く部下に指示を飛ばしモニターを用意させる。

そこに映し出されたのは――

「なんじゃこれ」

黄金の軌跡が無数に飛び交い、その合間で何者かが暴れている。

そう形容するしかない光景。

時折、氷が発生したり炎の壁が出たり、特大の雷が落ちたりしているのは見ないことにした。

そうして学園長室に集まっていた者たちは考えることを放棄した。

ちなみに、橋の周囲はこの時間なら無人の建物が多い。

人的被害は、もしかしたら平気かもしれないという淡い希望もあった。

その現場に、今まさに魔法先生と生徒がいることなど露にも知らず。

「おっと、集まってきたか」

気づけば、周囲に人が集まってきた。

未だ遠くではあるが魔法先生らしき者たちが瓦礫に潜んでいるのが確認できる。

だが、介入は諦めているようですっかり観戦している。

だよね、そうだよね。

「頼むぞ、王様……」

呟きながらもそれが意味をなさない言葉であることも理解していた。アレらはまさしく頂点の戦い。俺には何かをする権利も力もないのだ。

と、ここでアルクの様子に変化があった。

「グウ……ア、アアアアアアアア!!!」

突然、雄叫びと共に純粹な魔力を嵐として周囲に解き放つたのだ。それだけで周囲の建物……だった瓦礫は吹き飛び塵となり風に乗せられてどこかへ。

遠くに隠れていた魔法使いたちにも届いたらしく何人かが宙を舞っていた。

「死者とかでなきやいいけど」

事後処理で揉めるからな。アルクの立場はなるべく残しておきたいが、そもそもギル様に生かしておいてもらえるか。

無理か。

そんなことを考えていると、アルクは今度は静かに宙に静止していた。

そんな特大の隙をギルが見逃すはずもなく、無数の波紋から無数の宝具がアルク目掛けて放たれた。

しかしー

「っ、なんだと!?!」

思わず声をあげたギルの視線の先ではアルクの周囲でピタリと動きを止めた宝具たちの姿。やがて、それらは弾かれるように吹き飛ばされた。

「ガア、アアアア!! アアアアアアアアアア!!!」

彼女の周囲には不可視の壁、いや段々とソレに形が付けられていく。



それは空気であり、草であり、水であったもの。あるいはそのどれにも分類できない自然そのもの。それらがアルクの思い描く『自然』へと形を絶えず変化させていく。

アルクが発動したのはまさしく俺が知っている『空想具現化能力』のそれであった。「まさか、この状態でもここまでなのか!」

確かに能力制限下においてのアルクの空想具現化については曖昧な部分があるが、まさかこの局面で使ってくるとは。

規模にして、周囲半径百m? いや、今も増大している。

そんな呑気なことをかんがえていた俺の視線から唐突にアルクの姿が消え去る。

これまでのスピード、それよりも断然、速い。

激しい金属のぶつかり合う音に引かれて目を向ければ、そこには二つの剣で必死にアルクの爪を抑えるギルの姿。

まさか、王の財宝を抜いたのか?

「ぐつ、やるではないか女。ならば我も、全力だ!!」

だがギルは不敵な笑みを浮かべて、膨大な魔力、威圧感を放ち始めた。

宝具による身体のバックアップ。それが頭をよぎる。

「待った! 王様、そいつはー」

「騒ぐな雑種!! そんなことは分かかっておるわ!!」

堪らず声をかけた俺にギルは否を突きつけた。  
ならば、なぜ。

疑問に思う俺をよそにギルはなんとかアルクを剣で弾き返した。そのまま黄金の波紋を無数に展開する。

アルクが体勢を立て直す前に、今戦いで最多の波紋から宝具が射出された。

絶え間なく宝具を放ち続けながらギルは話の続きを述べる。

「奴が私の身体能力を上回る性質なのは知っている。

だが、もはや今の奴にはそのリミッターがない……!!」

憎々しげに語るギル。それは予想外の一言だった。

「リミッターが……外れた？」

それはつまり、あいつは暴走している？

だが、それは星が許さないはずだ。それに完全暴走状態ならば流石にギルでも対処しきれない。

なら、なんだ？

どうしてリミッターが外れたんだ？

『……どうやら、僕の予想以上に『相手』の干渉が強かったみたいだね』

ふとそんな眩きを漏らすホログラムの精霊。

「おい、説明しろ。どういうことだ？」

『おっと、聞かれちゃ仕方ない。』

今回の彼女の暴挙、真相は『敵対者』による奸計なんだよ。僕たち、つまり『魔術の世界』を知る者たちを仲違いさせて同士討ち、出来なくても裏生徒会の彼らを表舞台に引き摺り出すためのね』

奸計？

いったい、どんな方法を使えばあの最強のお姫様をだまくらかせるというのか。

『まず、『敵』は世界の理に属している。いや、かつて属していたと言った方が適当か。』

その名残でね、ことこの世界の中に限ったことなら『外部』からの干渉に直接対処することが可能なんだ』

「外部の干渉？」

『君も知っているだろう。並行世界の運用という奇跡……魔法に辿り着いた一人の男を。』

そして、あのお姫様の後見人を務めていることも』

「まさか、宝石翁?! 馬鹿な！」

あの爺さんを出し抜くなんて、それこそ同じ魔法使いでもなきやー」

……いや、そういうことか。

極めて絶望的な結論に思い至り俺は自然と顔を青くしていた。

『そう。あくまでその紛い物でしかないが、世界から許された権利は絶大なものだ。』

『記録帯』。およそ、彼の観測し得るすべての事象において『記録』を残すことが『彼の仕事だった』

「じゃああなたにか？ 奴は宝石翁とアルクの回線に割り込んであまつさえアルクを騙したって？」

『話は最後まで聞いておくれよ。』

まあ、その通りなだけどさ。原理としては『彼』の持つ能力が関係しているのだが、君もこの世界を『上位から観測』していたのなら分かるよね？

観測するために必要なのは千里眼だけかい？

見るだけじゃない、他の方法もあるはずだ』

「無限、共感能力」

それは、ネギまという作品内で最大の敵として続編でまでラスボス枠に収まっている強大な存在。

造物主、ヤルダバオト。

彼女が有する能力の名前だった。

「……？ いや、あいつは女だぞ？」

『その通り。彼女は造物主であり、魔法世界側の存在だ。』

……だが、それよりも昔、彼女が生まれる遙か昔に『同じような力を持つて』、『あちらの世界から転生してきた存在』がいたとしたら？』

転生。

それは俺が自身で体験した不思議体験だ。

他には衛宮士郎や遠坂凜、といった者たちが型月世界から転生してきている。

「……いや、おかしい。そんな能力を持つている奴が fate にはいなかったはずだ、少なくとも魔法の域にあるそんな能力を」

『正しい認識だ。そしてこれは君にとつては反則に近い経緯でね、彼の存在を君は知らないだろう。なにせ『物語が始まる前に死んでいる』のだから』

「物語、ね」

やはりこのホログラムの精霊は俺がメタ知識を持つていることを知っている。あるいは気付いている。

『どこまでなら分かるか……ああ、そうだ。この単語は君には聞き覚えのあるものだろう。』

人理継続保障機関カルデア。そしてその初代所長、マリスピリー・アニメスファイア

「アニメスファイアだと……？」

それはf g oで幾度となく聞いた名前。

天文科のロード・アニメスファイア。そして冬木の聖杯戦争をソロモンをパートナーに勝ち抜き、見事聖杯を手に入れた人類愛の人。

だが、その死には幾つもの謎と疑問点が残されている作中随一の謎キャラクター。

それがマリスビリー・アニメスファイア。

まあ、プロログで所長だったオルガマリーちゃんのパパだったりするけどオルガちゃんは早々に退場してしまったので言及に値しない。

『その後継者候補について知ってるかな?』

後継者といえれば俺が最後にプレイした二部で登場したクリシュタリア・ヴォーダイムが思い浮かぶ。

ちなみに皇女は辛うじてゲットしていた。

でもあまり使う暇もなく物理的に昇天してしまったが。

「クリシュタリアと記憶してる」

『お、よく知ってるね。そう、クリシュタリア。彼は非常に優秀で合理的で、魔術師としては最高峰の逸材だった』

べた褒めしてるけど二部一章までの時点でかませフラグが大量に乱立していたのが。

それと、型月のエリートは碌な末路を迎えないから。

この法則崩したらオルガちゃんが無駄死にだろ!!

『君が知っているのはそこまでかい?』

「まあな、知る前に死んだし」

あー、思い出したら急に続き気になってきた。

どうにかしてこの世界で f g o が出来ないものか。

今度、ダ・ヴィンチちゃんに頼んでみよう!

『……まあ、『あの人』は記録からも消しただろうし『僕』はさほど重要な人物でもないしね。』

いいよ、ネタバラシをしよう』

大仰に手を広げる精霊。

『僕』が君らをここに集めた理由、その敵。今回の黒幕。その正体。

名を『アルバート・ヴォーダウム』。ヴォーダウム家の養子であり聖杯戦争にてマリス

ビリーの補佐を務めた男さ』

「……」

まったくもって聞いたことがない名前だ。

養子?

キリ様の家に養子とかいたか？

『ちよつと、反応薄いよ。まあ、知らない名前出されたら仕方ないかもしれないけどさ。とにかく、彼は補佐を務めて、勝利したマリスビリーに証拠隠滅でぬつ殺されちゃったんだ』

「証拠隠滅？」

『詳しくは知らないけど、最後に『僕』はそう聞いたよ？』

まあ、かくかくしかじかでの世界に偶然にも転生というものを果たしてしまった彼。

実は前世から不思議な能力を持っていたんだ』

「それが無限共感能力？」

『いや、『無限同調』といった方がいいね。世界と同調したり波長の合う相手を『取り込んだけ』』

「取り込む!？」

なんだその魔人ブウみたいなの。

『ああ、取り込むよ？ 加えて波長が合う相手なら無限に取り込み続けることができる。そして対象の全てを吸収して擬似的な不老不死を成すことも出来る』

「不老不死……」



『もちろんストックはあるさ、とにかく能力で世界中の人間と共鳴、共感出来る彼は、これまでと同じ望み『人類史の観測』を行うことを決めたんだ』

「……それは根源のためか？」

『そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。』

この力のおかげで彼は神代からこの方うん万年？うん億年？とにかく果てしない月日を記録し続けた』

「それは、最早……」

『そう、アカシックレコード人理記録体だよ。』

ソレに彼はなつた。世界から認められ、その存在そのものを概念と為した。それからも彼はひたすらに記録を続けたよ。

でも、ここからが厄介でね、あれは紀元前ー』

話の途中、俺らの近くのコンクリートに『何か』が凄まじい勢いで落下してきた。爆音と爆風、俺は咄嗟に目を向けた。

「ぐ、くっ……おのれ、貴様あー！」

それはまさかのギルだった。

ボロボロの鎧と傷付いた身体をなんとか起こしながらギルは空中を睨みつけていた。

「っ!!」

その先を追えば今まさにこちらに突撃せんとするアルクの姿。俺は反射的に瞼を閉じた。

こんな至近距離で突っ込まれたら俺も死ぬ！

「失せろっ!!」

しかし、激しい金属音が複数回響いただけで衝撃は襲ってこなかった。音のした方を見れば今も宝具の連射に耐え続けるアルクの姿。

どうやらギルが宝具で迎撃したらしい。

「ふん、余所見をするな雑種。それと、魔力を寄越せ、アレはこの場で何としても仕留めねばならん」

「ま、魔力って……まさか使う気!?!」

直感で気付いたけど、ギル、エア使う気だ。

俺が躊躇していることに気付いたギルは苛だたしげに口を開いた。

「最早、仕置きなぞでは済まぬぞ? アレは。

ここで確実に仕留めねばすぐにでも貴様らに牙を剥くだろう。

分つたならば礼装を起動せよ、雑種」

仕留めるのか。

俺は僅かに迷いはしたものの言われた通りに礼装を起動、全体強化の項目からギルだ

けを選択して一点強化。

「ふ、良い。それでこそ我が雑種よ。

では、この場から即時離脱せよ、もはや貴様らに気を遣えるほどの余裕は残っておらぬ」

そう言つて空中に飛び去るギル。

……まさか今まで気を使つて戦つていたのか。

というかギルが優し過ぎて地味に怖い。

アレ、本物？

とはいえ、エアを開帳するならばこの場においては巻き添えだ。俺は即座にエヴァたちに退避を促す。

「王様が本気を出す。すぐにこの場を離れるぞ！」

「お、おい、大丈夫なのか？」

大丈夫だよね？」

まだ怖がつてるエヴァ。

「どのみちここにいれば勝敗に関係なく吹き飛ぶ。

ネギくんは明日菜ちゃんを連れて、エヴァは茶々丸を！」

「先生方は!？」

「知らん!!」

……心配なら魔法でもなんでも使ってさっさとこの場を離れるように伝えてやってくれ」

俺として自分の命が惜しい。

ネギくんたちへ伝えた後は即座にその場を離れた。礼装も活用した全力ダッシュだ。

それなりに走ってからちらりと後ろを見れば、既にギルはエアを取り出していた。その周囲では魔力が嵐を巻き起こし、ギルに近い位置ではもはや空間に亀裂が入っていた。

『うん……アレ、40%は解放しているね。』

いやー、星がどちらを止めに入るか見ものだ』

空中で相対するのはギルガメッシュとアルクエイド。両者とも距離を保ち『必殺』の準備をしていた。

王律鍵を形状変化させ『王の財宝』の最奥までを解き放つ。

鍵に成り替わる形で姿を見せたのは螺旋を描く刀身(?)を有した剣のようなもの。

対して、アルクは己が今出せる全力で『空想具現化』マール・フアンタズムを行使する。リミッターの外れた領域から魔力が染み出し、やがて『自然』を変化させる。彼女の背後には、いつしか大きくまん丸な『月』が現れていた。

一方、ギルは取り出したる最強の宝具を手に、ゆつくりとそれを振り上げた。応じて、螺旋状の刀身は回転し始め、周りを、空間を破壊していく。

その剣の名は『乖離剣エア』。もつともこの呼称はギルが便宜上付けただけで本来の名は『無い』。無銘の神造兵装こそこの宝具。

大地を裂き、空を赤く染めていた原始の地球、その地獄、その自然そのものを現代に解き放つ原初の理。

禁断とされる完全解放とはいかずとも、およそ目の前の星の化身に対抗しうるだけの威力をギルは想定していた。

やがてエアが回転を強め周りの空間は見事に崩壊、ついでに学園結界はすでに事実上崩壊していた。

上半身部分に残っていた半壊した鎧は即座に魔力に変換され代わりにギルが『友』と

呼ぶ『天の鎖』が彼を律するために巻き付く。  
「貴様には、特別に原初の理を見せてやろう」

応じるアルクの『必殺』も準備を終えていた。

彼女の背後に圧倒的存在感、質量感を持つて『再現』されたのは『月』。彼女のオリジナルが住まいとしていた星。

その1/1スケールの再現体、およそ目で観測されうる全てを再現した『月の複製』が彼女の奥義であった。

「グウウ……！！」

「もはや言葉すら解さぬ獣と成り果てたか。

ならば、疾く消え失せよ！

これなるは始原にして終わりの理である！」

「グガアアア!!」

ギルはその手を、乖離の概念を封じた宝具を厳かに、しかし激しく振り下ろす。

「受けよ!!」

『天地乖離せし開闢の星』!!!」

そして、星が生まれたその時の力がアルクに向けて撃ち放たれた。

「ガアアアアア!!!」

対して、アルクも自らが生み出した『故郷』を咆哮と共にギルへと押し放つ。

世界を崩壊させるだけの力を持った二つの力が、進路上の『全て』を破壊しながら前進する。

空気も水も空間も。あらゆる概念が混ざり溶けて消失する。

周囲にいるだけでも身を即座に蒸発させてしまうだろう強大なる力は、互いにぶつかり合えば学園というちっぽけな存在など一瞬で消してしまいう圧倒的なエネルギーを持つていた。

震えることしかできない『ヒト』達は、星の振るう理不尽な理をその身の消失をもつて知ることになるだろう――

「アルクエイドツッ!!!」

——瞬間。

激しくも確固たる意志を持った声が、戦場に響き渡った。

それは本来なら力の発する音に掻き消され誰の耳にも届くはずのなかつたか弱き人間の声。

しかし、アルクエイド・ブリュンスタッドという少女にとっては何よりも世界よりも大切な、待ち望んだ声だった。

「っ!! 志貴!!」

なんたる奇跡か、或いは奇蹟か。



自らの力に飲み込まれ、暴走していたはずの真祖の姫君はその声だけで即座に正気を取り戻した。

応じて、『間者からの干渉』も断ち切られ、星からの制約も復活する。これら、ほぼ同時に発生した事象である。

これにより、『天地乖離す開闢の星』へと向かっていた大質量体はその自然エネルギーを霧散、星の自然の中へと還元され消失した。

それは本来ならあり得ないこと。既に確定してしまった確率は変わることなく『月』のままエアの真名解放と激突するはずである。

……そのカラクリはもしかしたら復帰した彼女の知人が干渉に成功したというデータラメかつ足長おじさんの真相なのかもしれない。

とはいえ、依然として『天地乖離す開闢の星』は健在であり射線通りならば順調にアルクに衝突して彼女の肢体を蒸発させてしまうことだろう。

ただ、こちらにも運命の悪戯に等しき『タイムリミット』が訪れた。

「っ!?! おのれえ!!」

圧倒的なエネルギーで進んでいたエアの最大出力は、しかし空中にて『霧散』した。

あるいは『空間が捻じ曲がり』消失した。

もしくは『時空の概念の歪み』により消え去った。

あらゆる『可能性』が『渦巻いた何か』によりギルの奥義はこの世界から消滅した。

それは、星が齎した『抑止力』。ガイアと呼ばれる星の意思が、アルクが正気に戻ったことにより干渉に成功し、アルクを通じて『抑止力を働かせた』ために成功した事象であった。

これら奇跡的な、『天文学』的な確率により両者の放った世界崩壊のエネルギーは両者消滅という形で一応の収束と相成った。

戦いを終え、奇跡的にも街以外全てが無事という穏当過ぎる結末となった頃、俺の元にギルが舞い降りた。

その身体はボロボロで、しかし、さして機嫌が悪いわけでもなかった。

「雑種」

「なに？」

その顔はどこか物憂げでギルガメッシュとは思えないほどの穏やかさを持っていた。

そして、その衣装が段々と変わっていくのも。

「ギル……いや、賢王様だったのか」

「は、どちらであろうと我は変わらぬ。

……ふむ、此度の戦、中々に楽しませてもらったぞ。

惜しむらくは幕引きに抑止力などという邪魔立てが入ったことか」

最後に悔しげな顔をして吐き捨てた彼。

その身体から黄金の粒子が漏れ出していた。

「時間か。令呪すら齎せぬ召喚など所詮はこんなものだろうよ」

精霊からこの召喚の条件は聞いていた。

曰く、簡易召喚、インスタント召喚というものらしい。

正式な召喚にはあらず、一時的に英霊の力を借り受けることのできる召喚なんだとか。あと、俺の呼びかけに応えてくれる英霊じゃないと来ないらしい。俺の人望エ……。

そもそも以前に行った召喚のせいで俺の身体は――

「雑種よ。此度は我が貴様の前世にて受けた功に免じてこの力を貸し与えてやったまで。

謂わば褒美。だがこれで貴様から受けた『礼』は返した。これから先の戦いでもし我を呼ぼうものなら。

もし、浅ましくも再度、我が力にあやかろうなどと考えたなら。

……その命、消えるものと覚えておけ」

重く、のしかかるような言葉に俺はしっかりと頷いた。

「ふん、分かっているならば良い。

貴様は根は聡い男だ、雑種にしてはな。だがこと決断することにおいて『半身』に劣る。迷い、惑うことに慣れるな。

貴様に行ける道は一つだけだ。己が分を弁えぬ行いをするのであればその末路は相應のものとなろう」

「ああ、胸に刻んでおく」

ギルはふっと口の端を歪めた後、あつさりと粒子となって消えていった。おそらくは座かどこかに帰ったのだろう。

俺はギルから語られた言葉に深く感じ入りながらも、視線の先で抱き合う一組みの男女のもとへと向かった。

「アルクエイド、アルク!!」

叫びながら腕に抱く少女に必死に呼びかけるのは、裏生徒会メンバーの一人である遠野志貴であった。

その手に抱く少女は見た目はボロボロで、もはや死に絶えてもおかしくない傷だらけの姿だった。

「し、き……」

震えながらゆっくりと志貴の頬へと触れる彼女の手。それを慈しむように志貴はその上に片手を重ねた。

「ああ、ああ……!!」

ここにいる。だから、だから!!」

泣き囁る子どものように、志貴は震える声で叫び続けた。

「ばか、私がこの程度で……死なないからね?」

困ったように笑いながらもそこに覇気は感じられない。

そんな彼らの元へ、リツカはやってきた。

「……藤丸」

複雑な感情が籠った瞳。

だが、俺はお前に謝る気はない。

お前が、愛した女に一途なのは知ってる。

それ以外をどうでもいい、と捉えているのも知ってる。

俺たちはその点において似ている。

「アルクを連れてさっさと行け。じきにここにも学園の奴らが来る」

「つー、どういう、つもりだ？」

先ほどまで最愛の人を殺そうとしていた相手。

だが、結果として殺さずに済んだ。

なら助けてもバチは当たらないだろう。

「アルクの魔力は減衰している。姿も、はつきりとは捉えられていないだろう。今ならまだ、間に合う」

ギルとアルクの戦いは文字通り頂点の戦いだった。

だからこそその状況をはつきりと目視できる存在など限られてくる。あるいは『特殊な瞳』を持つ者ならば別かもしれないがそんな奴はいない。

「……わかった」

志貴はアルクを抱えてその場から即座に離脱した。

そういえば今世での志貴は病弱だとかは聞いていない。まあ、アレはロアなんとかさんのせいなので、奴がいないなら起こらない事件なのだが。

『リツカくん、何やら魔力反応が多数接近。急いでこの場を離れた方がいい』

「そうだな」

俺は礼装の機能をフルに使いその場から走り去る。

もし手練れであったなら立ち去ることも出来ずに志貴たち諸共捕まっていた、だから

今来ているのはヒラなのだろうと思う。

あるいは、意図的に見逃したのか。

「リツカ！ 無事だったか!!」

橋の方まで戻つてくると、エヴァが俺を見るなりそう叫んだ。

その言い方だと俺が死線を潜り抜けたみたいでかつこいい。

実際はギルの近くでビクビクしてただけだが。

「ああ、なんとかな。……おお、高畑！」

なんでかニコニコなエヴァの隣に我がゲーム友達を見つけて声をかけた。

「今更だけどそつちで呼んでくるの君くらいだよね」



「いや、学園長も呼んでるだろ」

「いやいや、学園長は学園長だよ」

「どういう理屈だよ。」

「なにはともあれ……無事に終わったみたいだね。」

一応、聞くんだけど……黄金の方が君の英霊だよね？」

煙草を啜えながらそれとなく聞いてくる高畑。

だよ、あんなだけ派手にやったらどつちも敵だと思っよ。怪獣理論である。

「まあな、報告は学園長宛てにしたいんだけど、いいか？」

「もちろんだ。……やれやれ、これで事の詳細が掴めるよ。一応、ネギくんとエヴァくん

にも出席願いたい」

彼らに向き直り確認する高畑。ネギくんたちも立派な目撃者なのでこれは当然の対

応。

「ふむ、俺はどう話すべきか。」

「うん、もちろんだよ」

元気に頷くネギくん。いや君ほんと立ち直り早いね。

アルクに睨まれたはずなんだけど。

「私は行かなくて。なんでそんな面倒くさい……」

エヴァはいつものズボラを発症していた。

お前学園の警備員だろ、アルク倒すのは本来ならお前の役目だろ（無茶振り

「わ、私は……？」

「ああ、明日菜くんにも、ご同行願いたいな。どうだろう？」

微妙に気が利かなくてやっぱり気の利く男・高畑。

高畑専用チョロイン明日菜は二つ返事で了承した。

高畑お前まじ、こんな可愛い子に惚れられといて振るとかマジ考えられんからな？

俺だったら速攻部屋連れ込んで抱く（クズ

とまあ冗談はさておき。

この報告こそが俺の、俺らの命運を分けるものとなるだろう。

かなり気を引き締めねばなるまいよ。

また小さい子の話してる……。

「では、此度の騒動、その詳細の報告を聞こうか」

学園長室、そこに集められたのは俺とネギくんと明日菜、ついでに無理やり連れてきたエヴァ。

相対するのは学園長と高畑のみ。

これは俺のたつての頼みでこの二名だけに聞かせることをお願いした。もちろん、理由としては『英霊に関する秘密事項』に規定されるからだ。

また、ここに来るまでに精霊からお願ひされたこともあり、俺は例の本を所持した状態で報告に臨んでいる。

「はい。まずはじめに、ここまでの被害を出してしまったことをお詫び申し上げます。

誠に、申し訳ございません」

俺は開口一番に頭を下げた。どうあれ、この事態は明らかに俺の責任だ。裏生徒会の面々や学園ではなく、すべての事情を知りながらこの被害を防げなかった俺にこそ責任がある。

だからこそ俺は頭を下げなければ気が収まらなかった。

「待て待て、こちらとしても想定外、予想外の事件だったが君にのみ責任があるわけではなからう」

しかし学園長の言葉を聞き、やはりしつかりとした説明の義務があるとして俺は頭をあげる。

「温情、痛み入ります。……では恐れながらも私から説明をさせていただきます」

「たまに、妙に律儀になるよね、君」

なぜか呆れた様子の学園長と高畑に疑問を抱きながらも、俺はこの詳細を語る。

まず、この報告にあたって俺は『真祖アルクエイド』と『ギルガメッシュ』についての言及は避けられないと判断していた。

理由はエヴァやネギくんにもその単語、詳細をある程度聞かせてしまっているのと、これだけの被害を出しておいて今更、あからさまな隠し事は避けるべきと思ったからだ。

「まず、今回の事件の犯人。それは吸血鬼の中でも最強と目される真祖の姫君たる存在です」

「吸血鬼とは……いや、まさかあれほどの力を持った存在がいたのか？」

学園長の疑問は最もだ、この世界でどれだけ真祖が暴れたか知らないが、魔法先生や関係者の間で話題になるのは竜種や大戦で猛威を振るった『完全なる世界』などの悪党

で、吸血鬼の話題としてはエヴァのものくらいしか聞かなかった。

だからこそ吸血鬼という存在について詳しく知っている者は少なくとも学園では限られていると見ている。

「ええ、最も、私よりもエヴァンジェリンの方が詳しいのでしょうが」

「なぜここで私に振る!?! いや、私も知り合いにその存在を又聞きしたに過ぎない。

……というか、お前の方が知ってるだろ」

ううむ、そうだよ。いや、そうなんだけどさ。

ここで、それ言っちゃおう?

言わないとダメ?

だって、絶対高校まで突き止められるよ。

裏生徒会発覚間違いなしだよ。

いやあ、精霊の言ってた奸計ってそういうことね、どちらが勝とうが、結局、俺や裏生徒会は引き摺り出されることになる。

まったくクソ面倒くさいことをしてくれたものだ。

まあ、今更隠すなんてのは難しいのかも知れないしやったことは事実なのだからどうしようもないか。

「……そうですね。彼女が言うならば」

俺は語る。この場において最適と思われる情報を。

「この襲撃については私も想定外でした。しかし結果として対抗しうる英霊の召喚に成功し『撃破』したのは事実です」

嘘は言っていないよ、事実、あの状態では復活には時間かかると思うし。

「ふうむ……ネギくん、そしてエヴァくん。この発言に誤りはないかね?」

こちらを見定めるように眺めてから学園長はネギくんたちに確認をとった。

「は、はい。英霊の方は消えてしまいましたが」

「ああ、間違いはあるまい。ま、倒したのは王様だけだな!」

なぜかどやってくるエヴァ。そんな王様気に入ったのか。でもあれかなり機嫌よかったからね?」

いつもなら一秒と経たず塵にされてたからね?」

「ふむ。では、今後吸血鬼による襲撃は考えられるかね?」

「いえ、奴は個体性能は高いですが単独行動を好むタイプです。仲間と呼べる吸血鬼はいないでしょう」

まあ、基本的には吸血鬼の敵だしな。吸血衝動を抑えきれず本能に生きることを選択した真祖・魔王を討滅するために生み出された存在だ。そうそう吸血鬼と友好関係になることはあるまいよ。

「ならば今後の襲撃はないと?」

「極めて低いと思います。第一に麻帆良を狙う理由がなく、吸血鬼という種自体が単独プレイを好むアウトローどもの総称でしょう」

「おう、こら、私に喧嘩売ってるのか? ん?」

いちいち突つかかってくるなこのロリババア。

間違っちゃいねえだろ。

「まあ、私も知識で知っていただけなのでなんとも言い難いですが」

「そうか。まあ、既に撃破したというなら問題なからう。

……それより、ワシ、弁償代の方が心配なんじゃが」

割とあっさり話題が変わる。

「というか弁償代って、確かにアレらの修理ってどうなるのかなあとは気になってはいたが。」

「まあまあ、そこはいつも通り。なんとかかするしかないでしょう」

あくまで冷静な高畑だが、なんかフワッフワした表現である。いやマジで大丈夫なの?  
?

「……いちおう、討伐報酬ということで。修理、お願いいたします」

俺は素直に頭を下げた。いやだって仕方ないじゃん、寧ろアルクとやり合ってその程

度で済んでるの奇跡だからね？

「まあ……君に背負わせようなんて思っていないけどさ。ワシも金欠なんじゃよ、今度から気をつけてね？」

「はい……」

ちよつと元気ない声の学園長に俺は居たたまれなくなつた。

「じゃあ、明日菜ちゃんとネギくんはもう帰つてよろしい。……すまなかつたね、君たちは巻き込まれた側だろうに。」

今日のところは帰つてゆつくり休んでほしい」

「え、あ……は、はい」

やけにあつさり帰されたからかどこか戸惑い気味に答えながら、部屋を出て行くネギちゃんと明日菜。

……おおつと、これは嫌な予感してきたぞ。

案の定、ネギくんたちが去るのを確認してから学園長が爆弾発言をかました。

「……次に、麻帆良本校高等部にて確認された正体不明の組織のことなんだがね」

その一言に俺は内心ドキつとしてしまった。

あくまで普段通りの口調で述べられたあたり、結構調べついてそうではある。

俺はあくまで平静を装い応える。



「初耳です。それはいかな組織ですか？」

「ほほう、いやな、先ほど結界の修復をする際に、一部結界の効果が中和されてしまった部分があつてな。」

……それがその高校。加えて何者かが出入りするところも確認されておる」  
なるほど。カマをかけてきているか。

おそらくは結界のあたりまでが本当だろう。

あとは確証を掴めていないはずだ。出入りで見つかるなど彼女らに限って有り得ないだろう。

だがどうしたものか。

俺が一番懸念するのは学園長がMMに降ってしまうこと。事あるごとに本国という単語が出てきていたあたり、この学園も例外ではなくMMが上を抑えているはずと。

「失礼するわ」

ボタン、勢いよく扉が開かれ中にゾロゾロと若い男女が入ってきた。

「ぬっ!？」

反射的に居合い拳の構えを取る高畑。

……いや、というか入ってきたのは遠坂たちだった。

「なんで、お前ら」

困惑する俺に、遠坂がニツと笑みを一瞬浮かべ、隣の衛宮に何事か呟いた。すると、衛宮が俺を守るようにして立った。

「……何か、用かの？」

「ええ、こちらも隠れてばかりではいられなくなったからね。少しばかりお話をしたくて」

実力者として、学園の長としての覇気を放つ学園長を前に遠坂は取り乱すこともなく堂々と立っていた。

「ミス・遠坂、変わろう」

そんな彼女に後退を申し出て代わりに前に出てきたのはレオ。いつもの堂々とした王者の風格をそのままに学園長の前に。

「率直に、話し合いに来た。」

我々は既に警戒し合う時期を過ぎてしまった。

「そうなのでしよう、精霊さん」

『いやあ、もしかしてキャスターの言葉を聞いたのかな？』

レオの呼びかけに、素直に応える精霊。

俺の抱える本から突然響いた声に、レオと俺以外驚愕する。

そんな中、本は勝手に俺の手を離れページが開かれていく。

その上にホログラムの人物が現れた。

『ご機嫌よう諸君。知っている人も知らない人もいるだろうが僕は本の精霊さんだ。とりあえずよろしくと言っておくれよ』

場違いなほど明るいノリで話す精霊に、しかし学園長が予想外に反応を示した。

「あなたは……!!」

どうやら知り合いのご様子。

おそらくはこの精霊の元となった人物に心当たりがあるのか。

『やあ、近右衛門。久しぶりだねえ、元気してた?』

相変わらず軽いノリの精霊に、学園長は渋い顔をした。

「おい、じじい。アレと知り合いなのか?」

「まあ、知ってるっちゃ知ってるが……」

エヴァの問いにも歯切れの悪い回答を返した。

『はは、混乱しないでくれ。僕は『彼』を基にしてる。アバターが似ているのは当たり前  
ヤ』

「こいつが、彼の言ってた精霊ってやつね」

「なんだか軽いノリだなあ」

衛宮が締まりが悪そうに述べた。

「『彼』と『彼』から話は聞いている」

レオの言葉に精霊は嬉しそうに頷いた。

『そうかそうか、じゃあ、改めて近右衛門たちにもお話しておいた方がいいね。』

その方がお話もスムーズに進むはずさ』

「話？」

訝しむ高畑に精霊は「YES！」とテンション高めに応えた。

いやマジなんなんだこいつ。

『此度の騒動、その『黒幕』。目的、というべきかな、とにかく今回の事件の詳細について』

そうして精霊は語り始めた。

『黒幕』、アルクを嵌めた存在とその目的、これからの指標について。

『敵は『観測者』。人類の歴史を体現する人類史そのもの、記録の集合体とも言おうか。』

『彼』がかの真祖の姫を罠に嵌め、唆し今回の襲撃を行わせた』

「……やはり、彼女は嵌められたのね」

悔しげに遠坂が呟く。

レオは至って冷静に、衛宮は僅かな怒りを滲ませている。

『目的は言わずもがな。この状況がまさにとそうさ。』

僕が『彼』に対抗するために集めた彼女たちと、近右衛門、君たち学園の魔法使いを争わせ矛先を自分から逸らすため』

「む……では、彼女たちは貴方の？」

ピクリと眉を動かした学園長は精霊に問う。

『ああ。『彼』がいずれ『大逆』を犯すことを見越してね、対抗できる存在を集めた。』

いずれもが頼もしい味方さ』

「ふむ……学園長、彼は信用できるのですか？」

もつともな高畑の問いに学園長は間を置かず頷く。

「ワシの知っておる人物ならば、な」

『疑り深いなあ、確かに『コピー』だけど人格は本物だよ。』

おどけるような精霊の態度に学園長も溜息を吐く。

「はあ……まあ、この様子ならば間違いはあるまい。」

高畑くん、彼はねこの学園の創設期に共に尽力してくれた賢者だ」

「っ!!」

それは初耳だな。

まさか麻帆帆良学園創設にも関わっていたとは。

この精霊の正体について色々と憶測はあるがそれは予想外だ。

『まあその話は置いておこう、今は関係ないし、『ここで話す内容』でもあるまい。

では、今後、僕たちがどうするべきか。『彼』にどう対処していくべきか。それを、ゆっくりと話し合おうじゃないか』

その場を仕切るような物言いの精霊。

どうでもいいけど今、夜中だからね。ここにいるメンツは色々と人間離れしているから大丈夫だと思っけど、俺は今、かなり眠い。

そういうえば遠坂も朝は苦手だったと記憶してるけど。

「そうね、そのためにここまで来たんだし」

凛々しい姿で立つ彼女の姿を見ればそんな心配は無くなった。

とりあえず、今はこの話し合いに集中しよう。

今後の方針も決めねばならない。

「やはり、奴は怪しい」

職員室。

学園長室にてリツカたちが話し合いに臨む中、待機を命じられた魔法先生たちはこの一室にて大人しく座していた。

そんな中、話題となるのはやはり近年、魔法関係者の仲間入りを果たした高校生・藤丸立華であった。

「ガンドルフィーニ先生、彼も一応学園の生徒なんですから、そう敵視しないでください」

宥めるように述べたのは同じ魔法先生たる瀬頼彦（せらひこ）だった。

「そうは言いますが、我々の仲間になってこのかた、大事な部分については全て学園長と高畑先生にしか話さない。

おまけに今回の事件でも我々は除け者だ。おかしいとは思わないのか？」

「ううむ……ただ、僕個人としてはそんなに悪い子には見えなかったんですけどね」

懸念を示すガンドルフィーニに今度は式集院（しきゅういん）が応えた。

「いずれにせよ、私たちがやることに変わりはありません。学園長が待機を命じるのなら従うまでです」

冷静な意見を述べたのは魔法先生の中で唯一、京都神鳴流の使い手である剣士・葛葉刀子であった。

「だが、彼の意見にも一理あるのは確かだ。藤丸くんは強力な使い魔を従え、あまつさえその詳細を我らに秘匿している。

その経緯についても突発的にであり、不審な点は幾つも言及できよう」

それに苦言を呈したのはヒゲグラの異名を持つグラサンのダンディなスーツ男・神多良木である。

「それよりもなによりも重大なのは彼の素行だ！」

突然、耐えきれなくなつたようにガンドルフィーニが叫んだ。なんだなんだと他の先生たちが注目する中、彼は絞り出すように語る。

『『ロリコン変態少年』ってなんだよ！』

魔法関係者でそれなりの実績もあげてるのに、なんだ変態って！

何がどうしたらそんな情けない異名がついてしまうんだ!!」

「そこですか……」

瀬頼彦は呆れたようにぼそりと呟いた。



「ええ、確かにそこなのよ問題は!!」

この間だつて、アビーちゃんの入学写真撮ろうと思つたら『いえ、彼女の保護者は私なので。無関係なおばさまは下がっていただけますか?』つて!

誰が年増だゴラアアア!!」

激おこぶんぶん丸(死語)のごとく怒り狂う刀子は天に向けて咆哮する。

「うわあ、例えば事実でも禁句ですよ、それ。

結構容赦ないですよね彼」

同情するように語る瀬頼彦に刀子はギロリと鋭い視線を向ける。

あまりの怖さに彼は「ひい!」と悲鳴をあげた。

「だ・か・ら!」

私は、年増じゃ、ねえつての!!」

瀬頼彦に向けて放たれた鋭い斬撃を彼は間一髪で避ける。

背後にあった机は綺麗に真つ二つになった。

「落ち着け葛葉。彼だつてカツとなつていつてしまっただけさ。本心では若々しい君の姿に青春してしまっていたことだろう。」

全く、天邪鬼の彼らしい照れ隠しじゃないか」

流れるように嘘を述べた神多良木に、刀子は「えっ?」と頬を赤らめながら振り向く。

「そ、そんな……あ、あんなクソガキのことなんてなんとも。

でも、そっか。男の子だものね……。」

ああ、だめ、私には彼がいるのに」

両手で頬を撫でながら身体をくねらせる彼女に周囲は若干引き気味だった。

若いと言われると嬉しくて堪らなくなってしまう可哀想な年増の姿がそこにあった。

「助かりました神多良木さん。」

それにしても扱い上手いですね」

命拾いした瀬頼彦がこそそと神多良木に耳打ちする。

「まあな、仕事で何度も組まされたら流石にこのくらい扱えるようになるさ。いちいち

発狂されてたら仕事もままならんし」

悟ったように述べる神多良木に瀬頼彦は尊敬の眼差しを向けた。

「あのおう、皆様何やら苦労されたようですけど。」

彼、根は優しい良い子ですよ？」

騒ぐ先生たちに、不思議そうな顔で告げるのはシスターシャーケティ。厳密には先生

ではないが学園に協力する魔法使いとしてこの場に待機している。

「……一番分らないのが、あんだだけ嫌っていた貴女がどうしてここまで彼を信頼する

ようになったかですよ」

なぜか疲れた様子の方ンドルフィーニは問いかける。

「それは、ええ、私の不徳が致すところ。彼の本質を見抜けなかった私の落ち度です。

でも、自らをも顧みずに「シスター」を救った彼は紛れもなく優しい子であるのは確かですよ」

「「オルテンシア修道院」の件ですか……確かにアレは彼にしては珍しく真面目な……いえ、立派な功績ですね」

微妙に納得のいかない顔をしながらも方ンドルフィーニは頷いた。

「でもそれって、シスターが幼い子だったからですよね？」

ここで要らんこと言ってしまったのは瀬頼彦。彼に悪気があったわけではないが、その一言でまた方ンドルフィーニが発狂した。

「やっぱり！ やっば彼変態ですよ！

何がどうしてあんな性癖歪んじやったのか知りませんが、ロリコンなのは確かなんですよ！

ああ、仕事はちゃんとやるのに。

そこだけがどうしても納得いかない」

方ンドルフィーニは生真面目な男であった。ゆえに、仕事の面だけを見ればリツカを認めているし、優しい子だというシャークテイの言葉も納得できた。

ただ、彼には娘がいる。その関係かは分からないがどうしても、普段の未成年への変態的行動を繰り返すリツカが許容できなかった。

まあ、この学園のトップからして自分の部下にセクハラしたりしてるので今更な話ではあるが。

しずな先生は優しい。ハッキリ分かんだね。

「そんなこと……！」

彼はウチのココネに毎回お菓子を持ってくるくらい子供好きなだけです！

確かに偶に『お兄さんのキノコの里食べるかい？』とかよく分からない発言をしています  
ますが」

「ガチですね、ガチのロリコンですよ彼。

……気が合いそう」

熱弁するシャークティに瀬頼彦はぼそりと呟いた。

「……怖いな。こいつら、俺たちの同僚なんだぜ？」

冷静に、隣の式集院に語りかける神多良木。

式集院は微妙な顔でリツカをフォローする。

「いや、まあ、彼も常識は弁えているでしょうし……」

「君の娘も守備範囲だぞきつと」

「肉まんにして食ってやる」

話し合いという名の交流会により、裏生徒会と学園側は無事に同盟を結ぶに至った。

決め手となったのはやはり『精霊』。こいつと学園長が旧知の仲にあり何らかの密約を交わしていたことが、学園側の警戒を解く鍵となった。

その際に『結界』について二人で話していたが、生憎とそれ以外のことが聞こえてこなかったのだからなかった。

まあ、裏生徒会の癒しキャラである衛宮と高畑も意気投合し仲良くなっていたので、懸念していた事態は概ね避けられたと見ていいだろう。

結果として、魔術に関する機密を守った上での一部技術提供、人的支援、その他双方の支援体制の詳細を詰めたところでお開きとなった。

帰る頃には日が昇り始めていたので俺含め裏生徒会面々は急いで帰宅してまた登校

することになった。

そして、帰宅した俺にさらなる災厄が襲い掛かる。

「た、ただいまあ……」

そつと玄関を開けて中を伺う。

暗い。カーテンを閉めたままなので部屋の中は薄暗かった。

まだ二人とも寝てるのだろうか？

そんなことを考えていると、急に何かに身体をぐるぐる巻きにされて部屋の中に引きずり込まれた。

「へぶう!!」

べちやり、と床に放り出された。なにやら身体中がべたつく液体で包まれていて気持ち悪い。

と。

パチリと部屋の電気が付けられた。

「いったい、どこに行っていたのかしら子イヌ?」

ぬらり、と目の前に立ちふさがったのはエリちゃん。なんとも言えぬ威圧感を漂わせ

ながらこちらを見下ろしている。

「うふふ、私も悪い子だけマスターさんも相当悪い子ね」

その隣には、悪い子モード（第三再臨状態）のアビーが寄り添うように立つ……いや、ふわふわと浮いていた。

「待て。話し合おうじゃないか、俺たちは家族、そうだろう？」

色々と悟った俺はあくまで冷静にいい含める。

「はあ？ 私はただ、躰のなっていない駄犬にお仕置きをしてあげようっただけなんだけど」

だめだ、エリちゃんの目は完全に絶対許早苗状態だ。

「腕、脚？ あ、そういえばダ・ヴィンチさんから貰った礼装で頑丈になっているのよね？」

なら、多少無茶をしても、いいわよね？」

アビーも語るに及ばず。すでにお仕置きする気満々、許してくれる様子はなかった。というか二人ともハイライト失ってるよ！

「ひえ……！」

その後、言葉に表すのも憚られるような悍ましいお仕置きを受けてしまった俺は、その日、欠席した。



## 閑話 山門の守護者

桜咲刹那。

麻帆良学園長・近衛近右衛門の孫にして関西呪術協会長・近衛詠春このえいしゆんの娘、近衛木乃香このえこのかの護衛役を務める少女である。

一応、近衛家の一員に数えられる彼女だが厳密には彼女は京都神鳴流を受け継ぐ血を持つていない。

彼女は親もなく家もなく彷徨っていたところを、近衛詠春により保護され養子として迎え入れられたのだ。

なぜ、年端もいかぬ少女がそのような経緯を持つているのかと言えば、それは彼女の生まれが原因となる。

彼女は、人間と鳥族うづめくの間に生まれた混血ハイブ。加えて、持つて生まれたその翼は一族では禁忌タブーとされる純白の翼であった。

これらの事情により彼女は嫌われ恐れられ虐げられて住む場所も追い出されたのだ。事の詳細については語るべき時にないが、これらの経緯により刹那は近衛家の加護に入ることになる。

その際に、詠春の一人娘である近衛木乃香と仲良くなり川で溺れかけた一件で彼女を守り抜く決意をするのだが、それもまたここで語るべき話ではない。

今回重要なのは、彼女が近衛家に入るにあたって顔見知りとなつた一人の『剣士』との交流である。

刹那が初めて彼にあつたのは、近衛家に入る時だつた。

傷付き衰弱していた彼女が、詠春に抱えられながらもぼんやりと彼の姿を見たのが最初。

なにやら慌てた様子の詠春と、至つて冷静に話を聞く彼。

やがて意識の薄れた刹那はこの時はそれ以上のことを知らなかつた。

近衛家に入り、木乃香と遊ぶようになって久しく。その頃になつてようやく彼のことを知るようになった。

曰く、彼は山門の門番を務める剣士らしい。

とはいえ近衛家のある本山には強力な結界が張られており、彼も四六時中門番をする

必要もなく、夜には家の者たちと酒を飲んでいることもあった。

使用人やその他親戚によれば形だけの門番らしく、腕は立つらしいが詳しくは知らない人ばかりだった。

ある日、ふと気になった刹那はいつも通りに門番を務める彼に声をかけた。

「門番さん、あなたは どうして門番をしているの？」

純粹な疑問。必要がないならば別にしなくていいのでは、と。

しかし彼はふっ、と笑ってから刹那の頭を撫でた。

「門番には縁があつてな、別に好きというわけでもないが『主』に頼まれた故に、勤めているまでよ。」

それに、門番をしていると何かと落ち着く」

どこか遠い過去に想いを馳せるように語る彼に、しかし幼い時分の刹那は不思議そうに小首を傾げた。

「でも、ここには『けっかい』があるから門番は必要ない、つてマホさんは言つてたよ？」

「ははは、マホさんとはあの使用人の女子おなじのことだな？」

そういえば、何度か彼女を酒の席に誘つたことがあるが」

意外と軟派な人なのかもしれない、と当時の刹那は思った。

「……しかしな、いくら『結界』を張つてもそれを超えて来るものが居らぬとは限るまい。事実、この山門は結界の一番弱い部分ゆえにな。

ならば、ここを超えんと襲い来た強者つわものと果たし合う機会にも恵まれるかも知れぬ、そう思い、ここで静かに待つておるのよ」

「? おじさんはたたかいたいの?」

「おじ……いや、まあ、そうだな。戦いたい、のかも知れぬ。

幾たびの時空を超えて来たりてみれば、平和の世。かつての主人殿の時代と変わらぬようだが、戦が足りぬ。

この刀も振るわねばいずれ錆びついてしまおう」

そう言つて背中に背負つた長すぎる太刀の柄を撫でる彼。

その顔は嬉しさの中に哀愁を秘めた複雑なものであつた。

「せつちやーん!」

屋敷の方から幼い子どもの声がある。

「ふむ、どうやらお嬢様が呼んでおるようだぞ?」

「あ、うん! またね、おじさん!」

「おじ……」

元気に手を振り去る刹那、その背中を彼はなんとも言えない顔で眺めていた。

それからも刹那は時折、門番を務める彼のもとに来ては談笑するようになり、いつからか彼も過去の話をポツポツと刹那に聞かせるようになった。

というのも、ポツリと漏らした過去話を刹那が聞きたいとせがんだからなのだが。

「おじさん、今日もおはなしして！」

「ふむ、それはともかくおじさんは無いのではないか？」

ほら、見た目はまだ若く見えよう？」

「おはなし！」

度々、彼も呼び方に関して抗議することがあつたがいつも聞き入れられず仕方なくおじさん呼びを許すことになった。

「では、今日のはかの名高き剣豪・宮本武蔵と斬り結んだ話をしてやろう」

「わーいー！」

ドヤ顔で語る彼だが、普通に考えて時代的にあり得ない話である。しかし刹那はまだ子ども、細かいことは分からず気にしなかった。

「アレは拙者が下総国に呼ばれた時のこと。」

当時は何のために呼ばれたのか、甚だ分からずとにかく飯と宿の恩は返さねばと妖術師殿”に従っていた。

しかし、この御仁、なかなか面白い男であった……ああ、これは聞かせる話ではないな。

とにかく、この妖術師殿はだな実は下総国を滅ぼさんとする悪い妖術師だったのだ」「ええ!?! じゃあおじさん悪者なの!?!」

「はっはっは! しかし拙者も一宿一飯の恩義がある。悪さに手を貸したことはなかったが、言いつけだけは守った。」

まあ、安心めされよ。悪い妖術師はかの宮本武蔵が討ち取った」

「よかったあ……そうじゃなきゃわたしたちも『あんしん』してくれないよね」「その通りだな。」

まあ、その際に拙者は宮本武蔵と出会い勝負を挑んだ!」

「なんで!?! 悪い人をたおしたんだからいい人でしょ!?!」

「そうだろうな、しかし剣の道を行く者にとつて善悪はさほど重要なものではないのだ。」

腕の立つ剣士、それも東西無双の域にある剣豪ともなれば、拙者も刀を抜かすにはいられまいよ」

「うーん、わたしわかんない!」

「はは、それでよい。分かる必要はない、お主はまだ子どもだしな。」

結果はまあ、負けでしまったのだがな」

「あたりまえだよ！ みやもとむさし、は強いんだから！

おじさんじゃかなわないよ！」

子ども特有の容赦のないもの言いに彼は内心傷付いた。

「その通りなのだが……改めて言われると来るものがある」

それから何度も話をせがみにきた刹那へと、彼は様々な話を聞かせた。

彼が剣の道をいくきっかけとなったとある老人との戦い。彼が世界に刻まれる要因となったとある地方都市の戦い。その際に世界の名だたる英雄と斬り結び、尽くを退けるも西洋の女騎士に斬り伏せられたこと。

そして、〃とある普通の高校生に呼ばれ、世界を救う戦いをしたこと〃。

ついでに古代ローマで百人斬りをして歴史に残ってしまったことも。

未だ無邪気な刹那に語って聞かせる彼は、側から見ればとても楽しそうに思えたとは詠春の言葉。

幼い刹那にとって、たとえ現実離れた話であろうとも、心躍る話を聞かせてくれる彼は、そのどれもで剣士たる彼は強い憧れの対象となっていた。

更に時が過ぎ、川で木乃香が溺れかける事件が発生し、その際に助けられず結局大人の手で二人とも救われたことに刹那は自らの無力さを自覚。

今後、何があるかと木乃香を守り通すために力を求めた。

それからは京都神鳴流を師範の元で師事し、厳しい修行に堪え着々と力をつけた。

その合間にも、神鳴流の任務として依頼を受けていた魔獣の退治や悪しき妖怪の討伐。それら実戦を踏まえた鍛錬の末に、心まで刃と為した刹那は神鳴流でも指折りの剣士となっていた。

その頃には門番の彼の事など忘れ、ただひたすらに斬って斬って斬り捨てることのみを続けていた。

そんなある日。

刹那はふと、山門の彼のことを思い出した。

だからと言ってどうということもないが、無性に気になった彼女は久々に山門へと赴いた。

「まだ、いらつしやったのですね」

感情を感じさせない声。しかしどこか嬉しそうな雰囲気。彼女を出していた。

「ほう、誰かと思えば、あの幼子か。」



随分と、大きくなったものよ」

「あなたは、あの頃と全く変わりませんね」

刹那の言う通り、彼の姿は幼い頃と全く変わらなかつた。あの頃には美青年であつた彼は本当ならもう少し老けているはず。

魔法使いであればさして珍しくもないのかもしれないが。

「……しかし、胸は育たなかつたようだな」

「ちよ、今せつかくしんみりしてたのに！」

どこか憐れみを込めた視線と言葉に刹那は反射的に胸を腕で隠して吠えた。

「とはいえ、美しく育つたことには変わりあるまい。

将来はさぞ美人になるであろうな」

「はあ……その飄々としたところも、お変わりないようで」

「はて、そう軽薄であるつもりはないのだが。」

それに、お主が美しいというのは事実。拙者は女子を口説く時も至つて真剣なのだが  
？」

「は、はあ!?! じ、冗談はほどほどにしてください!」

なぜか無性に焦りを覚えた刹那はそう吐き捨てて稽古場へと走つて行つた。

「……まあ、あまり気負い過ぎなければ良いが」

その後、多くの鍛錬に日々を費やした刹那は、守るべき主人であり親友でもあった木乃香と会うことは殆ど無くなっていた。

それでも、まだ足りない、と一層の鍛錬に励んだ刹那は時が来て、麻帆良へと入学することになった木乃香の護衛として共に麻帆良に赴くことになった。

その手続きについての話を長である詠春としていた時のこと。

ふと気になった刹那は詠春に門番の彼について尋ねた。

「え、彼？」

うーん、そうだなあ、あまり詳しいことは言えないけどね、かなり強いよ。だからこそ山門の守りを任せている」

「では……長とどちらが強いのですか？」

この頃になって、やはり結果があるのに山門に守りを付けていることに非効率であるとの疑問が刹那の頭には残っていた。

それゆえにこのような問いを投げた。

彼女としては当然、神鳴流の剣士としても凄まじい実力を持つ詠春の方が上だと考え

ていたのだが。

「そんなの彼の方が強いに決まってるじゃないか。

というか、比べるのも少し恥ずかしいくらいだよ」

「え……」

なんてことないように語った長の言葉に、対して刹那は言葉を失った。以前よりそれなりに強いとは聞いていたが、不要な門番を務める彼が戦ったことは殆どなくその戦闘を見た者など皆無であつた。

だからこそ、彼の實力をまだ知らないということに彼女は気付いた。

「試合？」

「ええ、長は自分よりもあなたの方が断然強いとまで言いました。しかし私にはそれほどの腕を持つようには見えない。

だから、この目で確かめたいのです」

自らの愛刀・夕風を腰に提げ刹那は言った。

「門番などこの地には不要。それなりに腕が立つのならば魔獣退治に出てもらった方がよっぽど利になります。」

それでも惰眠を貪るというのなら、私がこの手で叩き出します」

「つまり、お主が勝つた場合は拙者に門番の任を降りろ、と？」

「ええ。代わりに妖怪退治でも魔獣退治でも、実力に合った仕事についてもらいましよう」

刹那とて、それらを決める立場にも無ければ興味なども本来無かった。しかし、なぜかどうしても彼に関してだけは興味を捨てきれなかった。

だからこそ腕がありながら不要な任につく彼に納得がいかなかった。

「良いだろう。真剣で構わぬ、いつでもかかってくるがいい」

しかし、構えも取らぬまま、ただそのままに立ったままで彼はさらりとそんなことを宣った。

まるで構える必要もない素人だ、とでも言いたげだ。

そう思った刹那は無性に腹が立った。

「……では、そうさせていただきます!!」

手加減など不要、寧ろ、してやるものか、と刹那は接近すると共に全力で刀を抜き放つ。

が。

「なっ!?!」

あつさりど、構えるまでもなく容易に彼女の剣は止められていた。

彼の方は特に焦ることもなく昂ることもなく至つていつも通り。

「くっ!」

その後も、刹那はあらゆる型、戦法にて彼を攻め立てた。

「奥義・斬空閃!」

ひらり。と躲す彼。

「斬岩剣!」

またもひらりと。

「雷鳴剣!」

ひらり。

「くっ、百烈桜華斬!」

無数の剣撃を素早く放つ。それは一般人から見れば同時に現れたかのような斬撃。刃の群れ。

しかし、実際に同時に斬撃を繰り出せる彼からしてみれば、少し速いだけの剣だった。

「ふむ」

「そんなっ！」

甲高い剣戟の音を響かせながら、全ての向かい来る斬撃を捌ききる彼。本来ならあり得ない光景にしぼし刹那は硬直した。

「おや、これで終わりか？」

「っ!! 真・雷光剣!!」

涼しい顔で述べる彼に、刹那は焦りと怒りと、その他の感情を爆発させた。

「おっと」

大振りで、剣先に集めた電撃を地に振り下ろす刹那。

真・雷光剣とは広範囲攻撃に適した技。さすがに直撃はまずいかと思つた彼は、即座にその場から飛び退る。

「はあ、はあ、はあ……!」

もはや外聞などどうでも良い。とにかく気に入らなかつた。

あれだけ楽しい話を聞かせてくれた彼が、あれだけ戦いたいと言つていた彼が、門番などという形だけの仕事で腐るなど。

それが、許せなかつた。

「いや、なんとも凄まじい技よ。もはや剣など関係なくないか？」

「尤もな意見を述べつつ、煙の奥から現れる彼。」

「ば、ばかな！ 逃げ切れるはずが！」

「隙が大き過ぎるな。拙者のような手合いであればそれを上回る速さを持つ技にて攻めるべきだ」

そう言つて、一瞬、刹那の視界から消え去る彼。

……尤も、彼を超える速さの技など数えるほどにしかないのだが。

「なっ！」

次の瞬間には、彼女の首筋に刃を添えていた。

ひたり、と触れるか触れないかの位置で止まった刃に、刹那は自然と息を飲んだ。

「……まだ、続けるか？」

圧倒的な強者。剣技ではまるで歯がたたなかつた故に反則とも言える大技で仕留めようとした。

しかし、それすらもあっさり逃げ切られた。

完敗。それが今の彼女の状況であつた。

「……参り、ました」

絞り出すように述べられたその言葉に、彼もゆっくりと剣を納める。

「まあ、まだ若い。これから如何様にも成長できよう」

慰めではなく、ただ単純にそう彼は思った。

しかし、今の彼女には何を言っても慰めにしか、哀れみにしか聞こえなかった。自然と、齒をくいしばった。

なぜなら、彼女は幼い頃に彼に憧れ、鍛錬によつてそれを忘れて悔り、勇んで挑めばあつさりと負けてしまった。

滑稽。それすらも生ぬるいほどの一人芝居。

彼女は、ただ、己の浅はかさを呪った。

こんな体たらくで「このちゃん」を守るなど、と。

悔しい、のだろう。しかし、これだけの強者を前にしてそんな思いを抱けるのはきつ

とー

「出直してきます」

すつと立ち上がり俯いたままに述べる刹那。

「うむ、いつでも受けてたとう」

対して然程気にした風もなくいつも通りに返す彼。

結局、その余裕を崩すことも出来なかった、と刹那は更に悔しさを募らせた。

「お手合わせ、ありがとうございます！」

最後に、去る前に潔く頭を下げて礼を述べた刹那。それがせめてもの意地だった。

「拙者も、久方ぶりの仕合、楽しませてもらつた」



嘘偽りのない言葉。この地に呼ばれてから久しい戦いであつたのは確かだつた。しかし刹那にはそれすらも慰めにしか聞こえない。

「っ!!」

溢れる感情を抑えきれなくなつた彼女は駆け出した。

どこへ急ぐ用事もない、しかしとにかくその場から逃げ出したかつた。

この仕合で、彼女は悟つてしまつたから。

彼には、一生、敵わない、と。

事実として、それは仕方ないことであつた。

なにせ、彼は――

エンディング後のドタバタは割とシヤレにならないものもある。

「いやあ、それにしても一昨日の地震、すごかったねえ」

麻帆良本校女子中、3—Aの通称・ネギクラスでは修学旅行を来週に控えた興奮にソワソワしている生徒が多かった。

そんな中で出席番号7番・柿崎美砂かきざきみさが口を開いた。

「というか、変な爆発音みたいなのも聞こえた気がするんだけど……」

「ねー、なんかお祭りでもやってたのかな？」

なにやら違和感を感じていた同クラスの釘宮円くぎみやまどかとちよつとズレた発言をかます

椎名桜子しいなさくらこ。

「あ、あのう、そろそろ授業……」

途中、チャイムが鳴ったことにも気付かず話し続ける三人組。それを見てオロオロとしながらも注意しようか迷っているネギ先生を見兼ねて、クラス委員長たる雪広ゆきひろあやかが声をあげた。

「はいはい、三人とも！」

これからネギ先生が授業をなされるといふのに、私語は慎みなさい！」  
鶴の一声とはこのこと、彼女の叱責により三人はピタリと会話を止めた。

「さあ、ネギ先生。授業を始めてくださいな」

満面の笑みを浮かべたあやかやかがネギ先生へと甘ったるい声で授業を促した。

クラスの面々にはすでに周知の事実となっているのだが、あやかはシヨタコンでありネギの生真面目で誠実、礼儀正しい姿に心を打たれて、率直にゾツコンになっているのだ。

時代を先取りした性癖を持つ女・雪広あやかとは彼女のことであつた。

「あうう……先生の僕が言わなきゃいけないのに」

そんなあやかやかの完璧なフオローに、ネギは自らの先生としての自信をさらに落とすことになったことをあやかは知らない。

「はい、戦闘服のメンテ終わったよお」

ダ・ヴィンチちゃん工房 in 麻帆良にて俺は彼から修理された戦闘服を受け取る。

「いやあ、それにしても。」

防御機構全てズタズタにされるなんて、いったいどんなハチャメチャラブコメディを繰り広げてしまったんだい？」

それについては断固否定……は出来ないが、一般的に考えられるハチャメチャラブコメディでないのは確かだ。

「……ええ、色々。」

心躍る体験をしてしまいました」

一昨日、正確には昨日の夕方までなのだが、俺は二人のサーヴァントから徹底的なお仕置きを受けた。

まず、戦闘服に防御機構が搭載されているのをいいことに触手やマイクスタンドによる苛烈な責めを受けた。

詳細は語るだけでもb……いや、縮んでしまうので省くがとにかく凄まじいSMプレイであった。

続いて、衰弱した俺を触手に絡め取つての緊縛。からの言葉責め、じわりじわりとこちらの精神を抉り取るような言葉に俺は泣き喜び、エリちゃんによる拷問プレイで完全

に正気を失った。

俺の正気度はゼロになった。

まあ、それから暫くして悪い子モードが終了したアビーにぬいぐるんでビンタされて、裏生徒会の人みんなに救助された。

その際にはくのものによるエリちゃんお説教会が開かれていたとのことだが、残念ながらその際に俺の意識はなかった。

当然、戦闘服は壊れていたのでダ・ヴィンチちゃんに修理に出され先ほど目が覚めた俺は彼から受け取ったということ。

「心躍るって……さすがの私もドン引きなんだけど」

いいじゃん、本人が喜んでんだから。

有り体に新たな扉を開いてしまったというやつだ。

詳細は省こう。なんかここで語っちゃいけない気がする。

「いやまあいいならいいんだけどさ。」

それより、体調どう?」

「ん? めっちゃ元気だよ」

なんか疲れが取れた気もする。

どうやら彼女らのプレイは疲労回復の効果があるようだ。

定期的にお願ひするか。

「いや、そんなことで毎回壊されたくないんだけど……まあ、ついでに強化もしいたげどきか」

お、やっぱダ・ヴィンチちゃんは優秀。

素直にありがたい。

これでもつと激しいプレイが行える。

「……ていうか、君の胸下に入ってたコレ、なに？」

ジト目に変わった彼がポイっと机の上に投げたのは藁人形。エヴァからもらったお守りであった。

なんか、ダ・ヴィンチちゃんが怒っていらつしやる。

「まあ？ 君が魔法とやらの恩恵に預かりたいのは結構なんだけどね、私が心血注いで作り上げた礼装の保険に使われちゃあ、気に入くないよね？」

拗ねたように頬を膨らませて語るダ・ヴィンチちゃん。そんなに気に食わんかね。

「ごめんごめん、いや俺も死にたくないし、知り合いの好意を無碍にするのも気が引けて、つい」

「へえ、知り合いね。ざっと見た所、人形作製に長けた人物のようだけど一体どこの誰なんだい？」

「え……この学園にいる吸血鬼だけど」

「やつぱりか！ 君、彼女とも知り合いなのかい？」

「いやあ、物作りの面で何やら気が合いそうな作り方してるからね、ちよつと紹介してくれたりしない？」

「やけに食いつくと思つたらそつちが本音か。」

「まあ、今は学園とは同盟にあり、エヴァ個人とも交流はあるが。正直な話、ダ・ヴィンチちゃんと気が合うとは思えない。」

「ああ見えてエヴァは純情乙女だ、ダ・ヴィンチちゃんの頭一つ抜けた変態具合にはドン引きしてしまうだろう。」

「まあ、予定が空いてたらね？」

「いや、彼女が終始暇してるのは調査済みだよ？」

「ほらほら、減るもんじやないし、ちよこつとだけ！」

「そのちよこつとが怖いんだよ。ちよこつとで新礼装とか作つちやつたり何かぶっ飛んだものを作つちやうのが彼だ。」

「もし、エヴァが悪ノリでもしたら大変な事態になるかもしれん。或いはエヴァが男の

娘になってしまいかもしれん。

なんでも起こり得るのがダ・ヴィンチちゃんクオリティだ。

伊達に同人で媚薬作りやらされてない。

「えー、ケチ。いいよ、それならこっちの実験をお願いするから」

そう言つて取り出したるは、俺が頼んでいた礼装の一つ。

その形状は、一言で言うならばプレスレット。

『擬似霊器変換機』、その名も『ダ・ヴィンチちゃんプレス』！

これを使えばあら不思議、君の英霊が別クラスに変身するぞー！

七色に輝くプレスレット。中央に取り付けられた機械の真ん中にはハートマーク。

どつかで見た記憶はあるが思い出せない、がなんとなくパチモンなのは分かる。

「とりあえず、外見、どうにかしようか」

「えー、いいじゃないかプリティで。キュアってしそうじゃない？」

アウトである。

しかもかなり古いし。今はなんかタッチパネル式だったと記憶している。前世の話だけだね。

「まあ、真面目な解説をするとその名前の通りに擬似的に霊器を変換する装置だよ。最後の詰めが難儀したけどそこは『精霊』の助力だね。」



もちろん制約があつて、『過去に変異した記録』がある英霊にしか扱えない。そして成れるのは当然、過去になつたことがあるクラスだけだ。ついでに時間も限られてるがそれは同封した説明書を見てくれ」

要は別クラスに突然変異してしまつた元となつた霊器があればよいということ。お察しの通り例のお方専用である。

「細かく言うと、乖離が激しい別側面とかはまだ『演算』が不安定だからやめといた方がいいけどね」

なるほど。

それはヴラドとかヴラドの話か？

それとも乳上と無乳上の話か？

「要は夏のアレとかハロウインのアレしか対応してないってことさ」

アレね、理解した。

これで限定水着サーヴァントなんかも元の霊器一つで……って。

「いないしー！」

エリちゃんもアビーも夏仕様になつたことないよ！」

惜しむらくは2018年の夏を迎える前に死んでしまつたことか。無念。

「まあ、そこからへんは素直に水着きてもらえばいいんじゃない？」

わざわざ霊器変える方がどうかしてるからね？」

ごもつともなお言葉。確かに無駄なコストである。

それに、変換とかさらつと言ってるけど簡単なことじゃないからね。

「今の所、例のトカゲ娘専用ではあるが、研究を進めればなんとか別の英霊でも使えるようになるかもね」

「いや、これで十分ありがたいよ。」

感謝してる、ダ・ヴィンチちゃん」

エリちゃんはアイドルサーヴァントである。その戦闘能力に関しては正直な話お粗末なものであるのは確か。

そこそこ強いサーヴァントに出てこられたりしたら正直厳しいのが現状である。まあサーヴァントに匹敵する敵とか早々いないのだけどね。

「ふふ、どういたしまして。」

ああ、でも、あまり無茶なことはしないように。

さつき言った通り別側面とかそういうのは無理だからね。具体的に言うところアルターエゴとか」

「わかってるよ。最初はキャスターあたりから試していこうと思ってる」

f g o初の配布サーヴァントにして、エリちゃんの記念すべき初クラスチェンジだ。

あ、いや、バーサーカーとか既にやってたけどアレはノーカンで。

あくまでゲームの話だが使い勝手がいい性能をしていたと記憶しているし、暴走の危険性が低い、あるいはやらかす可能性が比較的低いことにある。

もし間違つてバーサーカーとかにならねたら死ぬ自信がある。言い含めておく必要があるか。

「ああ、あとね。

……君の身体のことなんだが」

少し言いくさそうに告げる彼に俺は首を振った。

「理解してる。だからこそ『例』の開発も進めてくれ。いざとなれば精霊に頼んで新たな、それこそ『存在を昇華する術』を知る奴でも召喚するさ」

「そうか……君がいいと言うなら私もこれ以上はやめておこう。あくまで君は君なのだからね、自分の思うようにしたまえ。

もちろん、君のサーヴァントである私も手を貸すよ」

慈しむような眼差しを向ける彼に、俺は目を合わせられなかった。

「ありがとう。……じゃあ、また明日」

そう言つて彼からもらつた『ダ・ヴィンチちゃんプレス』というキワモノを手に入房を出た。

「おお!? 目が覚めたのかリツカ!」

廊下にて偶然にも衛宮に遭遇した。

一瞬驚いてからすぐに嬉しそうにこちらの背中を叩いてきた。何処と無くおっさんが激しい気もするが彼の事情を考えれば致し方あるまい。

遠坂さんとはお楽しみでしたね!

「はは、まあ敵に痛めつけられたわけじゃないからね。愛の鞭と考えればどうってことないよ」

「そういう基準なのか……?」

いや、とにかく無事でよかった。お前に何かあつたらきつと志貴さ……遠野も気をやるだろうし」

遠野志貴。俺が気を失う前に、あの戦闘の後に会ったのが最後だが今どうしているのだろうか?

アルクも死んでいないはずだが。

「……アルクエイドは無事だ。今はキャスターの生命維持装置に入ってるよ。回復に時間がかかるそうだが命に別状はないと。」

遠野は……まあ、彼女の側に、な」

彼ならばそうするだろう。

伊達に月姫やってない。

「そっか……まあ、無事で何よりだよ、って俺の言えた義理じゃないけどな」

「遠野には事情をちゃんと説明してある。彼もちゃんと理解している。だからお前は——」

「分かってる。分かってるから大丈夫だ衛宮」

遠野志貴は優しい男だ。ゲームだと世捨て人めいた面があつたが、高校で出会ってから見えていた限り、そういうった面は無くなっていた。

その原因はおそらくアルクだろう。

加えて彼は惚れた女には一途だ。少々朴念仁気質ではあるがアルクの明るさがあればそれも関係なくなる。

だからこそ、俺は彼に会うべきではない。

時が解決するなんて言うがそんなのまやかした。人間は時と共に憎悪を募らせ、時と共に愛を忘れていく生き物。

たとえどんなに長い期間を愛しあっていたとしても一時の不幸で全てが水泡に帰すものだ。

俺は痛みなき愛など信じない。

少なくとも心の底から信じていることができない。

どうしても、そこに辿り着けない。

主人公にはなり得ない。

「……そういやダ・ヴィンチちゃんから実験頼まれてたんだ、じゃあまた明日な衛宮」  
彼の返事を待つことなく俺はその場を去った。

「で、これがその礼装ね」

帰宅後、エリちゃんに『ダ・ヴィンチちゃんブレス』を手渡した。

「うわあ！ これすっごい可愛いじゃない！」

エリちゃんは昨日のことなど忘れたようにケロツとしている。

はくのんのお説教は一日で頭から吹き飛んだようだ。

「ああ、待って。」

これ一応、試験機らしいからね。今回はエリちゃんに実験台になってもらいます」

「な、なんか怖い言い方だけど、分かったわ!」

いいんかい。でもそれがエリちゃん。

細かいことは気にせず己の思うように生きている。

「じゃ、それ付けて……あ、まだ触らないで。これマジで危険だから。下手したら霊核

吹っ飛ばからね」

「ええ!?! そんな危険なものを、私に」

嘘である。たぶん大丈夫。

俺は同時に渡されていた説明書に目を通す。

「えーと、『本機は霊器変換専用の礼装です。特殊なプレイに使用したりしないてください  
い』」

するか。ブレスレット使うとか特殊過ぎるだろ。

使うのならせめてステイックである。

「……とりあえず、ハロウィンで毎回変身してた奴は大丈夫そうだったさ。まあ最初は  
無難にー」

「ハロウィンね！ よーし、行くわよお、ポチツとな！」

アウトである。俺の言葉を聞き終える前にエリちゃんはハートマークをプッシュした。説明する前にエリちゃんに渡すべきではなかった。

ポチツとなつて「エリちゃん、変身！」と謎のポーズをとったエリちゃんは光に包まれた。

何もかもが手遅れ。

これがゲームオーバーの光にならないことを、俺はこの時、ひたすらに願っていた。

やがて光が収まり、視界が明瞭となる。

「ううん、なんか何も変わってない気がするんだけど」

目の前にはさつきと変わらぬエリちゃんの姿。怪訝そうに眉を顰めている。



なにやら良からぬ予感がする。

と、その時、ガシャンという何やら床が抜けたような音が部屋に響いた。

とつさに目を向ければ――

「……重量過多による崩壊。もう少し強度を上げるべきですね。聞いてますか、貴方に言っているのですよ」

随分とメカメカしい姿になられたエリちゃんのお姿。

……いや、現実を見よう。

崩れた床に嵌ったメカエリちゃん初号機の姿がそこにあつた。

ちよつと、恥ずかしそうにしているのは体重で床が抜けてしまったからか。ここが一階で本当に良かった。じやなきや下階の生徒を押し潰しながら下に落下していたところだ。

「あわわ……」

当のやらかした本人たるエリちゃんは、メカエリちゃんを見てひたすらにあわわわ言っている。使い物にならないのは知ってた。だがそこがいい。

「ちよつと。呼んでおいて無視ですか？

随分と偉くなりましたね、パイロット候補生」

若干キレ気味のメカエリちゃん。本当は恥じらいに頬を染める彼女をもう少し眺め

ていたかったのだが。

そろそろ出した方がいいだろう。じやないとロケットパンチで塵殺されるかエリちゃんドリルでミンチにされてしまう。

「……………ごめん、どうやって出したらいい？」

だが、実に4tという大重量を俺の手で引き上げることは不可能だ。かといってジェット噴射を使えばこの部屋は木っ端微塵になるだろう。

「まったく！

心が墮落したと思っただらどうやら脳味噌まで腐ってしまったようですね。

これでは候補生からも除名せざるを得ません！」

静かに憤慨するメカエリちゃん。

どうしよう可愛い。可愛いけどこのままではまた礼装が粉碎されてしまう。今度はダ・ヴィンチちゃんにガチギレされてしまうだろう。早く救い出さねば。

ああ、でも写真だけは撮りたい。

俺は迷った末に後者を選び、見事に礼装ごと肋骨を半数ほど持っていたかれた。

先行量産型は謎の格好良さがある。ない？

「……おそらく、『ブレス』の誤作動。或いは突然変異？

まあ、事故だねこりゃ」

「なるほど、事故か」

いや、そんなの見りや分かるよ！

俺が知りたいのはなんで誤作動起こしたら新たなサーヴァントが増えちゃったのかってこと。

いや悪いのは俺だけだよ……。

「メカエリチャンの回収に部屋の修繕、おまけに君の礼装をまた修復して肋骨の再生……って、なんか私の予想以上に大惨事になってるよね」

それがエリちゃんクオリティ。色褪せない魅力がそこにはある。

「あと君、まだ治ってないからね？」

「何のこれしき……コフツ!？」

突然の吐血。溢れた鮮血が布団を濡らした。

あと胸が痛い、物理的に。

それにこれ某人斬り病弱セイバーの持ちネタだから！

俺がとっちゃいかんでしょ！

「あーあー、言わんこっちゃやない。ほら、胸、見して」

しょうがないなあ、と俺の纏うワイシャツの胸元に手を伸ばすダ・ヴィンチちゃん。

問答無用でボタンを外して開く。

「だ、大胆だな」

「おや、『そっち』の触診が必要なら言ってくれたまえ。君ならちゃんと最後まで手取り足取り教えてあげるよ？」

やめてくれ。俺にはエリちゃんという最高のアイドルがいるんだ。まだ子イヌをやる時じゃない。

「冗談はこれくらいにするけど、結構派手にやられてるねえ。あと少し威力があつたら心臓潰れてたよ」

シヤレにならないお言葉だ。まじか、そんなギャグみたいな死に方したくないよ。俺はただメカエリちゃんの可愛さを永遠に残したかっただけなのに。

「あ、あの……候補生の容態は、どうなのですか？」

容赦無くグリグリと傷を触りながら治療するダ・ヴィンチちゃんに御慈悲をお願いしていたら、当のメカエリちゃんが声をかけてきた。

「んー、だめだね」

「っ!! そ、そんな……」

ダ・ヴィンチちゃん言葉に、メカエリチャンは呆然として、床にガツクシと膝をついた。その衝撃で床にヒビが入る。

「なんて嘘嘘! 頼むから私の工房を破壊しないでくれたまえ!」

今ので割れないなら大丈夫じゃないかなあ。とか考えていたら騙されたメカエリチャンが烈火のごとく怒った顔で立ち上がる。

「な、そんな嘘つかないでください!」

人一人の命に関わることなのですよ!？」

「君がつけた傷だけどね」

「うぐっ!」

そのままダ・ヴィンチちゃんに抗議したメカエリチャンだが彼の一言に押し黙る。

「まあまあ、こうして生きてるんだし。メカエリチャンも加減してくれてただろうし。

もう良くね?」

俺も反省している。いきなり召喚してしまって、いきなり恥ずかしい所を撮られたら誰だつて怒るだろう。

俺は変態ではあるが紳士たるべきであった。

「そういうレベルじゃないんだけどねえ……というか彼女、新規に召喚されたサーヴァントじゃないよ」

さらつと重要な言葉を述べるダ・ヴィンチちゃん。そういうところホームズに似てると思うよ？

「なつ、あんな腹黒探偵と一緒にしないでくれたまえ!!」

私はもつと美しくてチャーミングだよ!」

はいはい万能万能。

「……どうやら君は自分の状況が分かっていないようだね」

そう言ってグリグリと傷を押すダ・ヴィンチちゃん。

「痛い痛い痛い、痛いから!」

ごめんって!」

「ふうんだ、もう教えてあげないもんねー」

子どもかつ!」

結構重要そうな話だから頼むよ。何でも、は出来ないけどできることはするから。

「よし分かった。エヴァに会わせてやろう」

「やった! リツカくん大好き!!」

むぎゅー、と抱きつくダ・ヴィンチちゃん。

「どうでもよくないけど、傷押してるからね？」

「まあ、傷はもうほぼほぼ治ってるしね。このくらい平気平気」

俺は平気じゃない。意識飛ぶかと思ったじゃんか。

やはり本人の言う通り治療には向いていないな彼。

「……じゃ、こっから真面目な話。」

彼女はアルターエゴだよ」

うん知ってる。アビー攻略に重宝した。

そうじゃなくてさ。

彼女はもうやって来たのか、そもそもどこから来たのか。新規召喚じゃないなら一体

？

「あの、Mr. ダ・ヴィンチ……」

「はいミスターとか言ったからバラしちゃうよー」

今日のダ・ヴィンチちゃんは妙なテンションだ。

原因はやはり二度も礼装の修理を頼んであまつさえ俺の治療まで行ったからだろう。

慌てているメカエリチャンを見てほくそ笑んでいる。

「彼女はエリザベートの一側面。それも『この世界に』召喚されたエリザベートから派生したものだ」

「ああ……」

ドヤ顔で真相を述べたダ・ヴィンチちゃんにメカエリチャンは両手で顔を覆って俯いてしまった。

でもごめん、何言ってるか分かんない。

「だから、彼女はメカエリチャンの記録を持ってこちらのエリザベートの中にいたアルターエゴが外に出てきた存在ってことさ」

「なるほど、理解した」

メカエリチャンであってメカエリチャンでない。

つまり、あくまでfgoでの記録を有したメカエリチャンとして、俺が召喚したエリちゃんの中にいた一側面。アルターエゴってわけね。

面倒臭いが、そういうことなら新規のサーヴァントではないという発言もなんとなくわかる。

「要は、ハロウィンでの記録、記憶はあるけどあくまでエリザベートでしかないわけさ」  
「む、その言い方には訂正を求めます。」

私はオリジナルとは違ってちゃんと『秩序』<sup>ルール</sup>は守ります」

メカエリチャンは少し不機嫌そうに語る。

「属性はそうなってるね。まあ、君も記録があるなら分かっているとは思いますが、ここはカ



ルデアとは違う。人理を守る戦いでもない。補給やその他に関してモー」

「分かっています。二年もの間、彼女の中にいたのです。状況も、『彼』がどういう存在なのかも理解しています」

「そうか、エリちゃんとしての記憶も共有しているわけか。」

「それってかなりこっぴどくかしいのだが。」

「……その上で、私は彼を仮の主人と認めましょう。カタチは違えどもオリジナルを大事に思っているのは確かかなようですし、その在り方を否定するつもりはありません」

「メカエリチャン……」

「ただし。私がこうして分離したからには、あくまで私は私です。チエイテの守護は『あちら』に任せるとして、メカエリチャンとして正義を執行することに変わりはありません」

「そうだ、彼女はあくまでアルターエゴ。エリちゃんと違い『秩序』に生きることを見せしとする存在なのだ。」

「ごめんな、俺、本物の候補生じゃないけどー」

「何を言っているのです？」

「貴方は貴方、彼は彼です。そして私は私。『あちらの私』とは別の個体です」

「メカエリチャン？」

「つまり！」

貴方は、まあ、この私の仮の候補生として認めてあげてもいいということ。いや、認めてあげます。泣いて喜びなさい」

つまり、どういうこと？

「だから！ 貴方を認めると言っているのです！

全く、思考処理速度まで低下しているとは……あくまで仮であることを忘れないように」

プイツとそっぽ向いてしまうメカエリチャン。

おお、おお………！

まさか本当に、メカエリチャンに認めてもらえる日が来るとは。

「ありがとう！ メカエリチャン!!」

感極まつて思わず彼女のボディに抱きついてしまう。

「ちよつと!? や、やめなさい！」

このボディは鋼鉄製、おまけに敵を殲滅するためのもの！

ただの人間である貴方が不用意に触るとー」

「ありがとう………」

「っ！ ……仕方ないですね。ですが、あまり不用意に触らないように。一応、乙女です

から」

ああ、分かっている。だが、こうも度重なって俺を認めてくれる存在に会えるなんて。俺は、前世よりもはるかに幸運である。

たとえ得体の知れない敵に狙われていても、死ぬような戦いがあつたとしても、俺は確かに幸運である。

だって、俺を認めてくれる人がいるのだから。

「私は、本来のメカエリチャンではありません。あくまで記録を有したこちらのエリザベートのアルターエゴ。オリジナルには本来あり得ない秩序を依代とする者。

……なので、貴方がもし、この前語つたような悪道に堕ち、正義を蔑ろにするのなら

……」

「……」

「共に、滅びましょう」

メカエリチャンは確かに、嬉しそうに微笑んだ。

「……確かに、君は『あの』メカエリチャンじゃないんだな」

「ガツカリ………しましたか？」

無表情は変わらないが、何処と無く不安そうな声。

全くもって見当違いなことを口にするな君は。

「いいや、愛してるよ」

「……………ほんと、吐き気を催すほどに邪な人ですね貴方は。愛した人物の別側面まで愛するなんて。

悍ましいほどの愛です。私に、愛の本質を理解することは出来ませんが、それが歪んでいることは分かります」

分かつている。歪んでいるのも、汚いのも。

だが、どうしたって善を信じきれない俺はこうするしかない。そうしないと信じられない。

自分も、それ以外も。

ダ・ヴィンチちゃんは少し悲しそうな顔でこちらを見ている。

「ですが、あくまで私は貴方を認めましょう。

チエイテの守護者でなく、エリザベートのアルターエゴたる私は貴方の愛を本物と信じます。

その上で貴方を正しき道に導きます。

混沌という『枷』から抜け出した私ならば導けます。エリザベートではなく私が導きます」

無表情でも、その声に熱が籠っているのが自然と感じ取れた。

「ああ、頼む。俺は弱い。吹けば飛ぶような弱者だ。だが君たちを『守りたい』」

俺も、自然と熱くなつてしまふのも仕方のないことだろう。

「では、共に守りましょう。私は貴方を守ります」

「俺は君たちを守る。たとえ命に代えても」

「……信憑性100%。まさか本気でそんなことを言う人がいるだなんて。以前の私や

『私』は思いもしなかつたでしょうね」

可笑しそうに笑う彼女。

「だが本気だ。俺はお前たちが無事ならそれでいい」

「私は困ります。なので守りましょう。たとえ、このボディを失うことになつても」

それは俺が困るなあ。

そんなことを言い合いつつ、俺は彼女が確かにエリちゃんのアルターエゴであること

を思い知らされていた。

「はいはい、ラブコメするのは構わないけどここは私の工房だからね。やるなら自分家

でしたまえよ」

パンパンと手を叩いて俺たちを追い出しにかかるダ・ヴィンチちゃん。

「ま、待て待て。まだ礼装の修復が」

「はい。君たちがイチャイチャしてる間に治しておいたよ。……さすがに今日だけで三

「回目は無しだからね？」

ぼん、と戦闘服を渡してからすごい威圧感で語る彼。反省してる、今日はなるべく大人しくしてるつもりだから。

もう夜だしね。

「じゃあ、あとはごゆっくり」

パタン、と入り口が閉じられる。

「……じゃ、帰るか」

「ええ、なんなら私の背中に乗せてあげても構いませんよ？」

「いいや、遠慮しとくよ。風圧で落ちる」

「というか、ふと気になったのだが。」

「霊体化って、できるのか？」

「サーヴアントです、当たり前でしょう。」

「……理解しました。この姿で電車に乗るとするのは些か問題がありましたね」

そう、メカエリチャンはメカメカしい。まあ茶々丸も十分メカメカしいのだが。

なにより彼女は、重い。

「なぜか、唐突に貴方にお説教をせねばならない気がしてきました。主にレディの扱いについて」

本当に重いんだもん、仕方ないだろ。

「それに、寮の床はダ・ヴィンチちゃんに補強してくれたらしいし、部屋では実体化できるよ」

「当然です。あと、私のメンテナンスは欠かさないように」

分かってる。ダ・ヴィンチちゃんに見てもらおうさ。

「……別に、貴方がしてくれてもいいのですよ？」

「え、俺無理だよ。知識無いし」

無理無理、と拒否するとなぜか尻尾でピンタされてそのまま彼女は霊体化してしまっ  
た。

……どうやら加減を覚えたらしく生身でも首が吹っ飛ばなかった。

『データはインストール済みです。これで安心してツツコミができますね』

いや結構痛いんだが。

『我慢なさい。男の子でしょ？』

ちよつと楽しそうに言っていることに彼女は気付いているのだろうか？

「まあ、楽しいならいいけどさ」

俺たちはそのまま電車で普通に帰宅した。

光と闇が両方そなわり最強に見える。

「……おい、今の時間を言ってみろ」

土曜日。惰眠を貪っているであろうエヴァの家に早朝から訪れる。

寝る子は育つと言うがお前の場合は育たないだろ、呪いのせいで身体年齢相応な貧弱さなのだから健康には気をつけなさい。

「五時だが？　もう日も昇っている。十分朝だ」

いやあ、日の出を見ながらジョギングするのは気持ちがいい。なんかこう、健康になつてる感があるよな。

「ハロー、いや、グッモーニン！」

朝の目覚めは如何かな？　エヴァンジェリンくん」

「で、コイツはなんなんだ？」

会つて早々馴れ馴れしいが」

朝からテンション高いダ・ヴィンチちゃんを連れての来訪だ。エヴァは早速彼のテンションに辟易としていた。

「うむ、うちの技術屋だ。」



なんかお前の作ってくれた藁人形を見て是非会いたいとせがまれてな。とりあえず連れてきた」

「お前、最近、私の扱いおかしくないか？」

私はこれでも世に畏れられる大悪党なんだぞ？」

そんなことないぞ。俺はロリっ子には優しい男だ。

たとえばババアであつても見た目がロリなら構わない。

雑食系ロリコンだ。

「うっは、大悪党とか本当に自分で言っちゃうのかあ。

あー、いやいや失礼。続けてくれたまえ」

「……まあ、入れ。話は中でしよう」

いちいち反応するのも疲れたのか中へと招くエヴァ。

リビングには茶々丸もおり、俺たちを見るやキッチンへと向かった。

「適当に座れ」

言われた通りにソファに腰掛ける。

隣にもポスン、とダ・ヴィンチちゃんが座った。

「紅茶でございませす」

そう言つてダ・ヴィンチちゃんと俺の前のテーブルに紅茶を置く茶々丸。

モーニングテイーというやつだね？

そう言ううと怪訝そうな顔をされて無視された。

「……なんか、君嫌われてない？

何やったの？」

「いや、彼女のネジを強引に巻き巻きしたくらいしか思い当たらないな」

そう言ううと、ソファの後ろに控えていた茶々丸の方からベキッとお盆を割る音がした。

「朝から茶々丸をいじめるなりツカ。後で苦労するのは私なんだぞ」

疲れたように述べるエヴァ。

だが断る。

「そういえば、巻き巻きしている時に何やら艶つぽい声を上げていたような……」

態とらしく話している途中で、俺の後頭部に拳が炸裂した。鋼鉄の拳だ。間違っても人間に向けちゃいけないヤツ。

じんわりと痛みが広がる。

「……失礼、拳が滑りました」

あくまで冷静に述べる茶々丸。普通拳は滑らないと思うぞ。

あと、ようやく手加減を覚えたらしい。偉いな茶々丸。後で巻き巻きしてやろう。

「おい、だからコイツは誰なんだ」

痺れを切らしたように語るエヴァ。

「待てよ、茶々丸との交流はお前のとこ来ないと出来ないんだから、もうちよつと触れ合う時間をだな。」

「技術屋だ。さつき言った通りだよ」

「ふん。いいや違うな、ただの技術屋には到底思えん。」

見れば分かる、そいつも英霊とやらなのだろう?」

こいつ、ダ・ヴィンチちゃんの偽装を見破るのか?」

いや、そうではない。彼の偽装は完璧、なら他の要素。」

「……やはり、私の纏う才気は誤魔化せないようだね。」

さてどうする、マスター?」

指示を仰ぐような視線。彼としてはエヴァが俺にとってどういう存在なのか未だ測りかねているのだろう。

エヴァは学園にいる魔法使いの中でもずば抜けた実力者、加えて魔法研究も得意であり、有り余る時間で独自の技法を編み出したりもしていた。

腕前もそうだが、彼女はあくまでアウトロー。呪いで学園にいるとはいえ本来なら指名手配中の賞金首。

長い時間を一人で過ごしたために自立精神も確立されている。  
ふむ、そうだな。

「一つ、取引しないか？」

「取引？」

「俺はお前に彼女の正体を教える。一部技術提供も約束しよう」

「条件は？」

「それら一切の他言無用。正体はもちろんだが技術を外部に知らせることは控えてもらう。どうだ？」

「……そんな条件でいいのか？」

「こちらを訝しむような顔で確認してくる。

俺は問題ない。

「ダ……え、と。キャスターはそれでいいか？」

「ん？ 君が構わないのなら、ね。」

彼女に関しては、信用してもいいのだろうか？」

それについては問題ないと見ている。

「お前はそんな狡いことするような奴じゃないもんな」

「ほう、知った風な口を聞くじゃないか。」

だが、どうかな？

「案外、生き汚い女かもしれないぞ？」

「そうだな。だが魔術への興味の方が強いんじゃないか？」

「ぬ……」

以前より交流のある彼女だが、その関係が魔術という一点で繋がっていたことは確か。

一般人たる俺に執着したのはあくまで魔術という未知への興味。

ならば、それがいよいよ明かされるとなれば。

「まあ、いやなら構わんが。他の人物に頼むまでだ。」

なに、物作りに関しては何れにお前でなくともいいのだから」

「喧嘩売ってるのか？」

上等じゃないか、買ってやろう。

私は貴様らや魔術に関して口外せん、だからさっさと教えろ」

「いいだろう。」

ならば本人から自己紹介してもらった方がいいな。

では、どうぞキャスター」

なんとなくわかってたが、無事にエヴァの興味を引けたか。

ならば、とダ・ヴィンチちゃんに先を譲る。

「ノリノリだねリツカくん。」

……さて、私はキャスター。

真名を『レオナルド・ダ・ヴィンチ』。

よろしくね、エヴァンジェリンくん」

「なっ……！」

レオナルド、つて。完全に女じゃないか！

うん、そうなるよね。でもそれが型月クオリティ。そんなことで一々驚いていたら身がもたないよ？

「いや、身体はモナリザになっちゃってるけど生まれは立派な男だよ。ね、ダ・ヴィンチちゃん」

俺は騙されない。たとえ圧倒的母性を感じても俺は騙されないぞ。男の感覚を知り尽くしてる女など認めんぞお！

あ、アストルフオキゆんは別で。

デオンくんちゃんも許容範囲内だ。どちらも楽しめるとかお得過ぎて拒む理由がなさ過ぎる。

「天文学、音楽、幾何学に力学光学にも通じ、その他学問、芸術に至るまでの全学門の発

展に貢献した『万能ウオモ・ウニヴエルサーレの人』

まるで漫画での解説役のように語ってくれるエヴァ。お前、やけに歴史詳しかったりするよな。

ん？

いや待てよ。こいつー

「ダ・ヴィンチちゃんより年上か!？」

「年上とか言うな!! ただ生まれが七十年近く早いだけだ!!」

それもうおばあちゃんじゃね？

年齢的に。そういえばエリちゃんよりも圧倒的に年上であったことを今更思い出した。

「いやそんなのよりも!」

私知っているダ・ヴィンチはこんな姿じゃなかったぞ!?

何がどうなってる!？」

あー、そうか、こいつはこの世界のダ・ヴィンチと知り合いなのか。まあ、世界が違えば英霊も違ってくるよなっていう。

「いや、ダ・ヴィンチちゃんだって」

「嘘つけ!」

まったく、こういうところ妙にこだわるからなあ、エヴァは。

まあ、こいつにもいずれは手伝ってもらうことも増えてくるだろう。遠坂たちが学園との協力を申し出るくらいだ。

精霊が言っていた黒幕が本当にそんなとんでもない奴なら使える手は使っておきたい。

「この前も話したと思うが、『別世界の』ダ・ヴィンチってことだ」

「またそれか！ いい加減その言葉聞き飽きたぞ。分かるように詳細を説明しろ！」  
仕方ないか。

「彼女は別世界の英霊で間違いない。かくいう俺も『別世界出身』だ」

「なに？」

「つまり、『別世界出身である俺が、その世界から英霊を取り寄せている』というわけだ」  
厳密には俺は型月世界とは異なる世界から来ているのだが、これ以上話をややこしくしても仕方ないだろう。

「それが、貴様の秘密というわけか」

「どうやら何か察してくれたようだ。」

「まあ、そうなるな」

「ここは乗っておこう。」



「ふん……どうりで私の記憶と噛み合わんわけだ。いいだろう、その仮説、とりあえずは信じる前提で話を進めてやる」

あくまで魔術に対しての興味が勝るか。

まあ妥当だな。

「そこでなんだが、お前には彼と協力して礼装の開発を行ってもらいたい」  
「礼装？」

「魔術的な力を持った道具、魔道具みたいなもんだ。

別に開発ついても特定の品を作つて欲しいわけじゃなく、有り体に共同開発、魔法と魔術の融合つてのをやってもらいたい」

あくまで仮説だが、精霊の例を見るに過去に魔術が存在したのは確か。ならばのちに広まったと思われる魔法と掛け合わせることが可能なのではないかというもの。

どちらも全く異なるコンセプト、法則で成り立つものではあるが、科学と魔術、科学と魔法がいけるならこの二つもいけるだろうと思う。

「なるほどな、しかしなぜ私に頼む？」

他にも候補はいたはずだが」

そうだな、アルあたりには頼んでみてもいいかもしれん。『例の』開発も大幅に進むことだろう。それに色々聞く口実、対価にもなりうる。

しかしそれは後だ。  
なにより、

「信頼のおける候補はお前だったからな」

「……ハッ、侮るなよ小僧。貴様がどれだけ異端の知識を持っているのか知らんが、私も伊達に六百余年生きているわけではない」

そうだな、侮りは禁物だ。しかし俺はどうしてもエヴァが単なる悪とは思えないし、技術を流出するような輩には見えない。原作知識とかそういうのじゃなくて。

なんというか、不思議な親近感のようなものを感じていた。

だからこそ、彼女に頼むのだろう。

くだらない同族意識、いや、勝手な哀れみか。

「ふふん、侮ってるのはどちらかな？」

高々2600年の歴史しかない神秘よりも、神代から脈々と受け継がれてきた洗練された魔術。果たして知識欲を満たすのはどちらかな？」

結果はもう見えてるとばかりに余裕の顔で語る彼。

「むう……言うじゃないかダ・ヴィンチ」

「ノンノン、ダ・ヴィンチちゃんだよエヴァンジェリンくん」

指を振って訂正するダ・ヴィンチちゃんにエヴァが反論する。

「ならその君付けもやめろ！」

鳥肌が立つ！」

「では、契約成立でいいかな？」

俺の問いかけに、エヴァはフツと笑った。

「……いいだろう。それほど言うのならはこの目で確かめてやるまでだ」

「感謝する。なら初めはエヴァの得意なドール関連からいこうか、ダ・ヴィンチちゃん？」

「そうだねえ、科学と融合した人形というのは興味深いところだ。そうだ、まずはエヴァンジェリン、君の複製を作ろう！（唐突）」

「は？」

あまりにもぶっ飛んだ解にさすがのエヴァも呆けた声を出している。ダ・ヴィンチちゃん、ぶっ飛びすぎ。話の過程がぶっ飛んでるから。

天才にありがちな事である。

「まあ、待てダ・ヴィンチちゃん。エヴァの複製もエヴァの男の娘化もペド化も洗脳調教ももう少し後にやろうじゃないか」

「さっすがリツカくん！」

私の予想を遥かに超える変態的発想をしているね！

そこに痺れる憧れるう！」

「待てえーい！ なぜだ!？」

なぜ、そんな頭のネジがぶつ飛んだ発想になる!？」

というか私をおもちや扱いするのはやめろお！」

ポカポカと殴ってくるエヴァ。実際にロリロリしている（語彙力

「ダ・ヴィンチちゃん。『万能ウオモ・ウニヴェルサーレの人』だ」

「了解だ」

俺の一言で全てを察してくれたダ・ヴィンチちゃんは、例の眼鏡を取り出してエヴァを見つめる。

「な、なんだ。いくら頼まれてもお前らのおもちやにはならんぞ?」

狼狽えるエヴァを興味深そうに見つめる彼。もうお判りいただけただろう。

「はい、解析完了!」

それじゃ行ってみようか、『万能ウオモ・ウニヴェルサーレの人』!」

「ぎゃあああ!?!」

構えたダ・ヴィンチちゃんの手のひらから光の縄が幾つも飛び出した。

それらはエヴァの身体に何重にも絡まり一瞬で彼女を締め上げ床に転がしてしまつた。

さすが宝具。エヴァの弱点を瞬時に把握して専用の緊縛具を作るとは。有能。いや、万能。

「マスター!？」

「おのれ、お客様と言えども許しません！」

「それ、俺絶対入ってないよね。」

「構えた茶々丸が突進してくる。」

「ダ・ヴィンチちゃん？」

「はあい、もう終わってるよ。そおら『万能ウオモ・ウニヴエルサーレの人』！」

「眼鏡姿のダ・ヴィンチちゃん可愛い。」

「すでに解析を終えた彼女の手のひらから、今度は緑の緊縛縄が。」

「ああ!!」

「茶々丸のメカメカしいボディを縛り上げた。」

「ゴトン、と床に転がる音が妙にリアルでちよつと猟奇的だ。」

「は、はなせえ！」

「茶々丸、茶々丸!!」

「バタバタ暴れるエヴァ。ふ、滑稽。」

「ああ、マスター、お許してください」

主とは対照的にやけに大人しい茶々丸。さては貴様——

「おやあ、茶々丸くん。君の機能に縄は対応してないんだけどなあ」

ゲスい顔で煽るダ・ヴィンチちゃん。

「はっ、マスター。誤解です。私は決して、マスターが弄ばれるところとかちよつと見てみたいかも。なんて思っています！」

真顔で赤裸々に語る茶々丸。嘘つく機能は付いてないみたいだね。

「裏切りものめ——！」

くそっ、こんな縄！ すぐに解いて!!」

「はっはっはあ！ そう急くな。ちやあんと立派なお〇ん〇ん付けてあげるからねえ」

無駄な足掻きを続けるエヴァに、ゆっくりと歩み寄る。

「ミニ？ ミドル？ ここは敢えてビッグかな？」

今日はとことん乗ってくれるハイテンションダ・ヴィンチちゃんが後に続く。

「ヒイイ!? や、やめろお……わた、わたしの……」

涙目で抵抗するエヴァにゾクゾクする。

俺は『どちらでも』イける。

今日はモードSでいこう。

そうしよう。

「ああ、あ、やめてえ……い！」

触らないでえええ!？」

二人でガバツと襲いかかる。

早朝のログハウスに幼女の悲鳴が木霊した。

## 旅支度

「というわけで、お主も同行してもらいたい」

「はあ、元からついて行くつもりでしたが」

何がというわけなのか、学園長室に呼び出されて開口一番にそんなこと言われても全く事情が分からん。

「やっぱ付いてく気だったんじゃないか」

「二応、使い魔という扱いですし」

エリちゃんとは俺は運命共同体。どこに行くのも一緒さ。

「……真面目な話、ネギくんの京都市行きがちと雲行きが怪しくての。関西の魔法使いが彼の京都入りを嫌がつとるんじゃない」

それは修学旅行編の話だな？

確か、関西呪術協会とやらが関東の魔法使いを毛嫌いしていて、それで引率のネギくんが来るのを拒んでるとかなんとか。

過去の大战の強制徴兵が原因だった気がするが、早い話が戦争絡みの怨恨というやつだ。



「一応、あちらの長たる媚殿宛に親書を渡すよう言っているんじやが、それまでに何かされては元も子もない」

原作でも天ヶ崎千草あまがさきちくさが色々とちよつかい出してきた挙句に、木乃香お嬢様を攫って封印されていた鬼神を復活させたりと、なんか大事件になっていた。

まあ、エヴァやネギクラスの武闘派四天王の活躍で大した被害も出ずに治まるんだけど。

ただ、この時に初登場となるフェイト・アーウェルリンクスだけは注意しておきたい。この当時からすればオーバーキルに等しい戦力なことから。要は、序盤に出てくる絶対勝てない強敵、イベントボスのようなもの。

「……例の件もある。敵が学園を狙っているのか、個人をターゲットにしているのかは分からぬが、『あの方』が姿を見せるくらいじゃ。万が一を考えて君にも付いていってもらいたい」

例の黒幕か。

まだ姿も見せず目的も分からないのでなんとも言い難いが、強敵には間違いないのだろう。

まったく、とんだ原作ブレイカーが現れたものだ。まあ、『アルの話』などでそれ以前からこの世界がそもそも俺の知ってるものではないことは薄々勘付いてはいたが。

「瀬頼彦くんも同行させる。彼には生徒の安全第一で動いてもらうから、君には有事の遊撃隊としての役目を任せたい」

それが妥当か。もし、英霊に匹敵するような輩が出てきたら俺らでないと対処できない可能性もある。

しかしそもそもが仕掛けてくるとも断言できない。だからこそその人選か。拠点である学園には学園長という最高戦力と他の魔法先生、ネギくんの方は関西の長・詠春などを護衛に使うつもりか。

「分かりました。しかし、アビーはまだ入学したばかりですし学園の守りも兼ねてこちらに残らせましょう」

学園にはアビー、それに裏生徒会の面々がいる。キャスターにはアビーへの連絡役を任せ、二人を学園の守りとする。

俺はエリちゃんと、霊体化させたメカエリチャンを連れて京都市行き。相手が何かしてくるのであれば守りの硬い学園でなく、おそらく京都市の面々となるだろう。

まあ、何かあればキャスターの方から連絡が来るだろうし。

「うむ、では頼んだぞ」

その後、学園長と警備の詳しい内容を詰めて学園長室を去った俺はその足でダ・ヴィンチちゃんの元へ。

「おや、リツカくん。いらっしやい」

「ああ、もしかしてこれからエヴァのところへ？」

なにやら外出の支度をしていたダ・ヴィンチちゃんを見て思う。

「うん、魔法なんていう未知の技術の研究となればやる気も出るさ。魔法について、今分かっていること、聞いてくかい？」

昨日の今日でもう何かわかったのか。いや昨日あれだけ二人で熱心に意見交換やらしていたら分かるか。

ちなみに男の娘計画はエヴァがガチ泣きしたので延期になった。二人で平謝りして彼女の機嫌を直すのに時間を使ったために共同研究はあまり進んでない。

「ああ、頼む」

情報は多いに越したことはない。

俺は工房に備え付けの椅子に腰掛け傾聴する。

「まず、あの技術は2600年前に開発されたものだ。ここらへんは事前の調査で分かっていたことなんだが、改めてこの目で見て詳細なことが分かったと言うべきか。

次に、あの技術、人間ではない『何か』の齎したものだと言え推測する」

「『何か』？」

「悪魔、魔獣に神仏。色々と候補はあるがこの世界で一番有力だと思うのは魔族だ」

魔族といえば原作でもさして語られなかった種族。もっぱら召喚され使役されている奴らしか出てこなかった。

魔界は金星にあるらしいがそれも詳しくはない。

「ただ、魔族についての情報も乏しくてね。何らかの手掛かりはあるはずなんだが、今はなんとも。」

だが術式を見ていてその癖というか、影響を受けたであろう門派は分かったよ。

ズバリ、『拝火教』だ」

拝火教といえば、型月ではアンリマユが様々な物語のキーパーソンとして登場している。

確か善悪二元論を主体とする古くから続く宗教だった気がするが。

「アンリくんとか我々カルデアにとつては懐かしい名前が出てくるだろうが、まだあくまで推測だ。詠唱はラテン語に古代ギリシャ語、そもそも魔術の形態と魔法は異なるも

のだしね。頭の片隅に置いておくくらいでいいだろう」

そうだな。しかし拝火教か。魔法を齎したのはてつきりギリシャ系のオリュンポスとかローマのデーコンセンテスかと思ってたが。

魔族についても謎が多い。

拝火教と魔族を結びつけるのは早計だが、何らかの繋がりと見ておいた方がいいだろう。

「分かった。じゃあ引き続き研究を頼む」

「ああ、任せてくれたまえ」

その後、修学旅行中のことについて簡単に伝えた後、俺は工房を去った。

「リツカ!!」

工房を出た廊下で、今度は衛宮ではなくはくのんと出会った。いつもの無表情はどこへ行ったのかとても焦っているように見える。

「やあ、はくのん。今日もクラスで三番目くらいにかわいいね」

「なんかムカつく言い方だなあ。」

……そんなのより。大変なことに気付いてしまったんだ」

俺の煽りもスルー気味にはくのんはちよいちよいと手招きする。

お、休日の学校で秘密の授業ですか？

はくのんになら……ああ、だめだ。俺はエリちゃんに全てを捧げると決めている！

はくのんに誘われるままに来てみたのは保健室。やっぱり秘密の授業なのだろうか。

いよいよ現実味を帯びてきたR—18展開に俺の鼓動も高まる。

「ちよ、顔怖つ……いいから、アレ見て」

保健室の窓を指差すはくのん。なんだなんだ先客か？

いいぜのぞいてやる。

大人しく覗き込むと、部屋の中には——

「殺生院キアラ……!?!」

この世界にはいけないエロ尼が淑やかに座っていた。

え、どゆこと？

世界滅亡フラグ？ この世界は彼女の玩具（意味深）にされてしまうのだろうか？

だめだ、ここにはBBちゃんもメルトも、保健室A Iの方の桜ちゃんもいない。

終わった。はい、世界は終わいい！

「やっぱり知ってたんだ。あの破戒僧のこと」

破戒僧ってレベルじゃねえよ、歩く18禁というか存在そのものが放送禁止レベルにやばいやつだよ。

いるだけで世界滅亡だよ。

「いや、なんでここにいます？」

まさか、精霊があいつまで呼んだのか？」

それはゼパる。絶対、ゼパる。精霊、死す！

「つ、こつち気づいた！

リツカ!!」

はくのが必死に俺の袖を引つ張ってくる。

分かってる、こんなところで死んでたまるかよ!!

分かったからそんな引つ張るなって！

ガラリ。無情にも扉は開かれた。中からはグラマラス過ぎる尼さんが出てくる。

思わず固まる俺たちに、彼女はにっこりと笑いかけてきた。

「あら、もしかして私の受診に参られた方ですか？」

しかし、俺らとはまるで初対面のような言動。それに、なんだか普通の人みたいな気

配だ。

「あ、あ、えと……」

見たこともないくらい動揺しているはくのん。小声でアーチャーに必死に助けを求めている。

丸聞こえだから。

「え、と。貴女は、どなたですか？」

思い切つて聞いてみる。もしかするともしかするかもしれないし。

隣のはくのんは「何言つてんのコイツウ!?」と睨んでいるが気にしない。

「私ですか？」

私は殺生院キアラ、この学校にはカウンセラーとして参っております。よろしくお願  
いしますね」

あくまで礼儀正しく、淫猥さを一切感じさせない綺麗な雰囲気、優しい声で彼女は述べた。

こいつ、もしかして『キレイな方のキアラ』か？

「(こちら)こよろしくお願います。

……そうですね、もしお時間あるならば診ていただきたいのですが」

まだ分からない。ならここではつきりさせて置かないといけない。もし汚い方のキアラだったら、今のうちに仕留める、なんとしても。彼女には時間を与えることこそ悪手なのだから。



隣のはくのんは、得体の知れないものみたいに俺を見ている。

「ちようど本日の予定は終えたところです。構いませんよ。」

……隣のお嬢様は——

「実は、彼女とのことで相談があつて」

「は？」

はくのん、演技だよ演技。そんなガチで嫌そうな顔しないでよ、普通に傷付くよ。興奮するけど。

「まあ、恋愛相談ですか？」

私で良ければ、はい。とりあえず中にお入りくださいな」

ポワポワした雰囲気のキアラは俺たちを部屋に招く。そこに邪念は一切なくただただ穏やかな空気のみがあつた。

実に信じ難い光景だが、まだ油断はならん。

保健室のベッドに二人して腰掛け、対面には椅子に座ったキアラ。

はくのんはガタガタと震えている。

「粗茶です」

「あ、どうも」

ほんのり暖かい湯呑みを手渡される。

やけどしないように熱すぎずかといって緩くない絶妙な温度だ。

「ゆっくりでいいですよ。落ち着いて。」

「どんなお話でも受け止めますから」

優しすぎて引く。

「だれだ、こいつは？」

はくのんなんか混乱しすぎて目が点になっている。

目を覚まさせてやるべきか。

「え、と。僕たち、学生の身分で、その……い、致してしまいました。生で」

「まあ」

「っ!!?」

一瞬で正気に戻ったはくのんが俺の腕をギリギリと抓っている。

「ありもしないことほぎくな」とドスの効いた小声を出すなどという器用なことまでしてる。

「俺、どうしたらいいのか……」

「先生は、そうだったことは、なかったんですか？」

「一気に切り込む。」

「私、ですか？」

そう、ですね……なにぶん、幼少期は山奥で過ごしていたもので。あのお医者さまに  
出会うまでずっと、一人で。

学生となつてからもずっと勉強ばかりでしたから」

うーん、嘘を言つてるようには見えない。

でも、快樂だけでビーストになつちやうような奴だ。油断はできない。

ただ、事実なら綺麗なキアラの方の経歴と似ている。汚い方は誰も助けてくれなかつたらしいからな。

「いえ、こちらこそすいません。いきなりこんな話を……」

性に食いつかないところを見るとどうやらキレイな方？

「構いませんよ。」

私は恋愛というものをしたことがありませんから、的確なアドバイスをする、というのはお約束できません。

ただ、愛というものは年齢に関係なく、育まれるべきものだと思います。ですから、貴方が本当に彼女を大切に思っているなら、そのような道に進まれるのも良いでしょう。

ですが、他の方よりも一層険しい道となることは心に留めておいてくださいね」

聖女すぎて死ぬ。

快樂じゃ無くて罪悪感で死んでしまう。

もう無理。こんないい人に嘘付き続けるとか無理。

「……ごめんなさい、嘘つきました。」

今迄の全部嘘なんです」

俺は土下座する勢いで頭を下げる。

「まあ！

……嘘はいけませんね。ここは真に心に傷を負われた方のための場所。冷やかしは看過致しかねます」

少しムツとしたキアラが述べる。まったくその通りである。キアラだからと少し軽率に過ぎた。

あと、人を外見で判断しちゃダメだよな。

「ですが、なにやら事情があつてのことと存じます。宜しければその辺りのお話を聞かせていただけませんか？」

だが次の瞬間には穏やかに諭すように告げた。

もうこれ白だよ、あの快樂天ビーストじゃないよ。

ちゃんとお詫びして帰ろう。

「いやほんとすいませんでした。貴女が知り合いに似ていたものでもしやと思ひ、試してみました。」

本当にごめんなさい」

はくのんが怒ってる。「私にもちゃんと説明しろ」と腕を千切れるくらいに抓ってる。

もう出よう、ここにいます、なんか居た堪れなくなる。

「そんな、頭を上げてください。私気にしてませんから」

おどおどとこちらに手を差しのべるキアラ。

そうか、歪まないところなんにもキレイなキアラが出来上がるのか。歴史とは実に不思議だ。

「ほんとごめんなさい。ほら、はくのん出よう」

「??？」

よく分からない、といった顔のはくのんを連れて部屋を出る。

「あ……もし、何かお悩みがありましたらいつでもいらしてくださいね」

聖母のような優しい声を背に受けて、改めてお辞儀してから廊下に出てしばらく歩く。

「ちよつと、一体何のつもりであんなこと！」

「ごめんな、でもあの人。俺らの知ってるキアラじゃないわ」

直接話して分かった。アレはピーストや真性悪魔にはならないキアラだ。

「は？ ……どういふこと？」

訝しむはくのんに、全てを説明する。

キアラがf g o世界にてゼパルが余計なこととしてビーストになっちゃったこと。はくのんの世界のキアラが山奥で医者も訪れずに病に苦しみ、その果てにあんな歩く18禁になっちゃったこと。

f g oでは医者が訪れて病を治し、『誰かに助けられる』という経験を得たことにより持ち前の聖女の才能をフルに使って無償のカウンセラーとして活躍していたこと。

ビーストになったのは、ゼパルがキアラの善性を封印してはくのんの世界のキアラと同期させたのが原因だということ。

全てを聞いて納得がいったはくのんはようやく落ち着いた。

「つまり、あの人を試したのね」

「まあそうなるな。 ……いや、俺もこの目で見たことは無かったから信じられなかったんだ」

俺の転生事情を知るはくのんだからこそ信用してくれる話。

俺だって、この情報を知らなきゃはなから信じなかった。

あのキアラが無償で人の心を救っているなどと。

だが、キレイなキアラか。

「ああなっちゃうと、本当、聖女だよな」

もしかしたらガチでセイヴァーになっちゃうかもしれない。

「まあ、貴方が言うならそうなのでしようけど。」

「どうにも私には信じがたいわ」

それは仕方なからう。だってキアラやし。

「それはそうと、やけに素直に信じるな。俺が嘘言ってるとか思わないのか？」

もしかしたらキアラに操られちゃってるかも。

「いや、それはないでしょ。」

第一、この前もう色々と聞いちゃってたから。私しか知らないこととか、私も知らないこととか。アレだけ知ってて嘘っていうのは考えにくいよね」

そういうもんか。

「まあ、とにかくあのキアラは安全だろう。」

寧ろ、疲れてるメンバーとかに紹介した方がいいかもしれないぞ」

「それは、ちよつと気がひける。」

「……私自身、どうしても信用できないし」

まあ、18禁なキアラ知ってる人からすれば正気の沙汰ではない、か。

まだビーストとか悪魔にならないとも限らないし。

色々話し合った結果、キアラに関しては保留ということになった。



## 二章 京都動乱

## 京都・一

修学旅行当日。

高校は公欠になつてゐる俺は生徒より一足早く集合場所に行く。

アビーにはしばらく帰らない旨を伝えてあるが、すごく寂しそうにしていたのでダ・ヴィンチちゃんに預かってもらうように頼み込んだ。

ただでさえ多忙な彼に頼むのは気が引けたが、裏生徒会のメンバーが交代で見てくれるというのでお願いした。

エリちゃんはまだ布団の中だ。

今回は警備でついでに行くことは伝えてあるので問題はないだろう。

次にメカエリチャン。彼女には霊体化してもらい付いてきてもらっている。

整備は昨日のうちにダ・ヴィンチちゃんに軽く診てもらっているので大丈夫だろう。

「あ、藤丸くん。おはよう」

集合場所にはすでに瀬頼彦先生がいた。

若々しいイケメンだが腕の立つ魔法使いだ。

「おはようございます。遅れてすみません」

「別にいいよ、まだ集合時間前だし。」

今日はよろしくね」

いつもフレンドリーで気のいい人である。

それから、世間話をしながら警備の詳細を確認し合う。

生徒の安全確保のために瀬頼彦先生は前の他の先生方と同じ車両に。俺は生徒たちの乗る車両の一つ後ろに乗ることになった。

分担と緊急時の合図などを決めてから俺たちは一旦別れる。

それからしばらくして他の先生や生徒たちが集まり出した。

俺は彼女らが車両に乗った後に乗車する。

アナウンスの後に車両が動き出す。

「いやあ、新幹線とか久しぶりでちよつとワクワクするよ」

今世で乗る機会には恵まれなかったもので、年甲斐もなくそわそわしてしまう。

『ワクワクするのはいいですが、本来の目的を忘れないように』

ちよつとwktkし過ぎた。メカエリチャンのいう通りだ。

改めて気を引き締めて、警護に当たろう。

そう思い、俺は弁当の蓋を開けた。

その後、カエル騒ぎがあつたりしたが無事に京都に辿り着く。

俺の存在は保険であるため、どうしてもヤバイ時に瀬頼彦先生から連絡が来るようになっていた。

そのため、原作の通りにカエル騒ぎの際は親書は刹那が取り返して、京都に付いてからも天ヶ崎千草の地味な嫌がらせ行為が幾つかあつたくらいで特に危機はなく終わった。

俺は一日、ネギくんたちのストーリーカーをして終わった。一応、戦闘服の新機能である探知機能を使ってあたりを調べたが、特に怪しい存在は確認出来なかった。

そんなこんなで宿についてしまい既に夜。何事もなく一日が終わってしまった。

「いや、何も無いのは良いことか」

このまま原作通りに進んでくれれば、と。

そこでふと思う。

確かに原作通りに進めば一件落着となるのだが、それにしたって千草の存在やこれが

らの出来事を知っていて何もしないのはどうなんだという。出発に際してダ・ヴィンチちゃんから手渡された小型通信機も三つあるし一つくらい……

「いや、下手に乱して取り返しがつかなくなったらマズイ」

忘れちゃいけないが俺は凡人だ。今のところ何事も起きていないのだからこのまま正史のままに歩ませてやった方が危険も少ないだろう。

というかこの考えへの解答は既に出ていたはずなのになんで今更蒸し返しちゃったのか。

「『召喚の影響』か……」

厄介なものである。だが、『恩恵』もあるので今は身を委ねておこう。

と、そんなことを考えていたらなにやら女子の悲鳴が聞こえてきた。

声から察するにお嬢様？

ということとは千草が仕掛けてきたのか。まあ、ここも明日菜や刹那の活躍で無事にお嬢様を取り返して終わりなので気にせず、安心なんだが。

「……様子を見てくるか」

万が一がある。

俺は彼女たちのストーキングをすることにした。

とはいえ、風呂場での襲撃であったため霊体化しているメカエリチャンに偵察を頼

む。

「どうだ？」

『……猿の使い魔に襲われたようですが、無事に取り返しました』

「そうか」

ひとまずは平気、と。

とはいえ安心はできない。相手はアルクを唆すような奴だ。油断はできない。

「これは徹夜かなあ」

そんなことをぼんやりと思いつつも、俺はメカエリチャンと協力して明日菜たちの監視を続けた。

就寝時間。

俺ももうとうとしてきたので、ダ・ヴィンチちゃんに作ってもらった『お薬』を服用する。

一粒飲んだらシャキツとした。

大丈夫、変な成分は入ってないはず。

『ターゲットが連れ去られました』

そんなところにメカエリチャンからの念話が入る。もうそんな時間か。確かこの時は結構遠くまで追いかけてたっけ。

『あの、マスター。本当に監視だけでよろしいのでしょうか』

戦闘服の機能を起動させていると、メカエリチャンが不安そうに語ってきた。

まあ、そうだよな。

「問題ない。俺の知る結末なら無事に取り返すはずだ」

とは言うものの、俺自身迷っている。

果たしてこれで平気なのか、と。

エリちゃんは今もぐーすか寝ているので平気だが、ここでお嬢様が拐われたりしたら。

「俺も行く。万が一に備えて追いかけてよう」

『了解』

下手に動くべきではない。俺は礼装を起動して明日菜たちを追った。

結果として、特に問題はなかった。正史通りである。

千草の挑発にキレた明日菜と刹那が、千草をボコボコにしてお嬢様を取り返す。

懸念していたイレギュラーは起きなかった。

お嬢様に話しかけられて照れた刹那が走り去ったところで、ネギくんたちも宿に戻った。

「……………問題なし、と」

『……………』

責めるような雰囲気のカカエリチャンには悪いが、俺は積極的に正史に介入するほど勇気のある人間じゃないんだ。

原作ブレイクがないならそれに越したことはない。

今はおとなしく見守ろうじゃないか。

翌日、ネギクラスの朝倉に魔法がバレたり、不完全なネギくんの式神が暴走して、ネギクラスでキス争奪戦があったりしたが、特に異常を見受けられなかった。

ただ、ここまで何もないと逆に心配なので、ダ・ヴィンチちゃんから手渡された小型通信機をエリちゃんを呼び出して手渡す。

「ふーん、通信機」

「そ。何かあったらそれで連絡してくれ。すぐに駆け付けるから」

エリちゃんの命には変えられない。そうなればこちらから積極的に介入するのみだ。

そうでないなら、できる限りエリちゃんには旅行を楽しんでほしいというのが本音。

せつかく、学生やってるんだ。それくらい楽しんでもらわないと可哀想である。

「ところで子イヌ、私たちが旅行してる時って何してるの？」

ふと気になったようにエリちゃんが尋ねてきた。

「そりゃあ警護に決まってるんだろ。まあネギくんも明日菜もエリちゃんだっているから

本当に万が一の補欠だけだな」

「ふーん。……エッチなことかしてないよね？」

疑うような目つきでエリちゃんが問う。



「さすがにしないよ。俺だって仕事は真面目にやるさ。いつもそうだったろ？」

魔獣退治とか、魔獣退治とか。

魔獣退治ばっかしてんな俺ら……。

「ならいいけど。みんな浮かれてるからって、変なことしないでよね？」

釘をさすように述べて彼女はさっさと部屋に戻ってしまった。

信用されてない、悲しい。

『当たり前です。普段の言動をよく反省しておくように』

厳しいメカエリちゃんのお言葉を受けて俺はスゴスゴと警護に戻った。

メカエリちゃん来てから結構控えてると思うんだけどなあ。

「あ、エリちゃん」

部屋に戻る途中、エリちゃんは偶然にも明日菜に遭遇した。隣には桜咲刹那の姿もあ

る。

他のクラスメイトと異なり二人ともキス争奪戦に参加していないので新田教諭の折檻を受けずにいたのだ。

「あら明日菜。何してんの？」

「こんな夜更けに出歩くなど、珍しいとも。」

明日菜は夜は早くに寝てしまおうという認識があつての発言であつた。

「ちよつと、魔法関係だね。またイザコザがあつて……」

「ちよ、明日菜さん!？」

刹那は慌てて明日菜を止めにかかる。刹那は未だエリザベートが魔法関係者であることを知らなかつた。

「ああ、平気平気。エリちゃんも関係者だから」

「は？」

衝撃の発言に刹那は思わず素つ頓狂な声をあげた。

そして明日菜の口からエリちゃんが関係者であること、図書館島の一件を説明する。

エリちゃんからは魔獣退治をやつてることを伝えられた刹那は――

「初耳です。いえ、それより単独で任務を……う？」

刹那も木っ端な魔獣に関しては一人で退治してしまうこともあるが、強力な魔獣に際しては同クラスの龍宮との共同任務となることも多かった。

それ故の疑問。

「ああ、あのエネミーたちね。なんかどれも弱つちいから私と子イヌだけでやつつけてるわよ?」

「子イヌ?」

聞き慣れない言葉に刹那は首をかしげる。使い魔か何かだろうか、と。

「さっき話したプロデューサー名乗ってる変態のことだよ」

明日菜が補足する。

「ああ、なるほど。しかし、子イヌ呼びとは、従者か何かですか?」

「違う違う。子イヌはマスターで、私はサーヴァント!」

自信満々に述べるエリちゃんに刹那は驚愕した。

「サーヴァント!?!」

え、と召使い、という意味ですか?」

プロデューサーとやらはそんな呼び方をしているのか、と刹那は顔も知らない変態のことと少し嫌悪した。

「召使いじゃないわよ！」

サーヴァント、英霊よ！」

「英霊？」

さらなる疑問符が現れて困惑する刹那に、エリちゃんは英霊について事細かに説明するのだった。

同時刻。

ネギたちが泊まる宿から少し離れた位置にある林にて、天ヶ崎千草率いる集団が集まっていた。

「くつ、あのクソガキども。もう少しでお嬢様を攫えるところやったのにい」

「まあ、まだチャンスはあるんや元気出しいや」

悔しそうに拳を握り締める千草に、雇われの少年・犬上小太郎いぬがみこたろうが慰めの言葉をかける。

「当たり前や！」

もう後には退けん、なんとしてもお嬢様をー」

「千草さん、それ以上進むと彼の索敵範囲内になります」

怒りのままに、宿の方へと足を向けた千草に、スーツの男性が声をかけた。

「……ほんまか？」

「彼の言葉は事実です」

驚く千草に、白髪の少年・フェイトが声をかけた。

この二人は、千草の呼びかけに集まった中でも新入りのメンバーであった。

初期組たる女剣士・月詠つぐよみ、小太郎に比べて腹の底が知れないところが千草にとっては

薄気味悪かったがそれでも能力は本物。目的のために仲間を迎え入れたのだ。

「というか、ほんまにあんたらの言う厄介な召喚師なんかおるんかいな？」

また、二人の中でも特にスーツの男が熱心に述べた強力な召喚師。男の話では非常に強力な使い魔を二体も使役しているとのことだが千草自身はその話の信ぴょう性を疑っていた。

現に、先ほど自分が木乃香を攫った時は一切手を出してこなかったのだ。木乃香の警護が目的ならば必ず出てくるはずなのに。

「彼にとつて警護すべきなのはお嬢様ではないのかもしれないかもしれませんね」

「なんやと?」

おかしな話である。

桜咲利那も明日菜とかいう少女も魔法使いの少年も。皆、お嬢様を守るために動いている。そんな中で他の誰かとは。

候補に上がるような人物に千草は心当たりがなかった。

「あるいは、全員。なのかもしれません」

「んなあほな。うちらかて、あんな小娘ども襲う必要もない。あくまでお嬢様さえ手に入ればええんや」

馬鹿馬鹿しいと手を振る千草は次の作戦のためにその場を離れる。

「ほら、あんたらも!」

今日は撤収や」

疲れたように声をかけながら去る千草を目で追いながらも、男はフェイトに声をかけた。

「……明日あたり、少し仕掛けますか」

「そうだね。……何か手土産がないと『君の主人』に叱られてしまうものね」

探るように述べたフェイトに、男は軽く笑い飛ばす。

「ご冗談を。私は主人より『使命』と共に『好きにせよ』とも命じられております。何を

するのもしないのも、全ては私の気分次第ですよ」

「……まあいいさ。ただし、僕への連絡は怠らないように」

「承知しております。我が同盟者よ」

わざとらしいほどに紳士的な態度を取る男に、フェイトもこれ以上詮索することを諦めた。

翌日、朝からエリちゃんの小型通信機から通信が入った。

礼装の受信ボタンを押して応答する。

「はいよ、エリちゃん。何かあったか？」

『ちよつと、子イヌ!!』

『明日菜から聞いたわよ!!』

通話に出て早々にエリちゃんに怒られた。何事!?

「な、何がだ?」

明日菜?

昨日もその前の日も、というかエヴァの件以来会ってないと思うのだが。俺、何かした?

分からないが何かしてしまったに違いないと耳を傾ける。

『木乃香たちが襲われたの!』

警護してたんじゃないか?』

おうふ……:そうか、明日菜たちから聞いたのか。

いや全くもってその通りなのだから、言い逃れのしようがない。

『いいからさっさと来なさい! (ブツ)』

カンカンに怒ったエリちゃんはそう言い残して通話を切った。

『自業自得ですね。早く向かいなさい』

通話を聞いていたメカエリチャンから痛烈な一言。俺のライフはゼロだ。

いや、正直な話、これ絶対、エリちゃん以外もいるよなあ。

ああ、やだなあ。

こんなことならさっさと合流しておくべきだったか。



「いや、今言っても仕方ない」

俺は諦めてエリちゃんのある場所に歩いて行った。

「遅い!!」

仁王立ちするエリちゃん。

その周囲にはネギくんや明日菜、桜咲刹那までいる。

あ、ついでにオコジヨも。

「ご、ごめんエリちゃん。

……と、久しぶりです。ネギさん」

「なぜ敬語……」

「ちよつと、ごめんじゃ済まされないわよ。

危うく攫われちゃうとこだったのよ!？」

珍しくエリちゃんがガチギレしてる。

……いや当然か。

エリちゃんも、もう二年もこのクラスで生活してきたのだ。彼女らを大切に思っているのは普段の会話からもなんとなく察していた。

そのクラスメイトの危機を見逃していたのだとしたら、怒るのも当然である。

本当は傍観というもつとひどい仕打ちなのだが。

今更、気付くとは。

「ま、まあまあエリザベートさん。一番近くにいた僕たちが助けるのが本来の役目ですし。」

無事に木乃香さんも助けられたんですから」

「ええ、近くにいた私が防ぐべきものでもありませんので、一概に誰かのせいにするのは……」

ネギくんには刹那が庇ってくれてる。

だが、彼女らよりも年上で、学園長からも任されている俺に責任があるのは確かだ。

第一、見てて放置したのは俺だ。

「いや、本当にすまなかった。」

エリちゃんの言う通り、警護を任された俺の落ち度だ」

「藤丸さん……」

いや、同情する必要はないぞネギくん。

君はまだ10歳。責任は俺ら大人が取るべきだ。

「……ふん。なら、今日からはしっかりと警護してよね！」

……あと、ちょっと言いすぎたわ。

気づかなかった私にも責任はある。

だから！

私もこれから全力でフォローするわ！」

「エリちゃん……」

エリちゃんは優しい。

この二年、共に暮らしてそれは十分に分かっていたはずなのに。自分のことばかりで、俺は彼女の本質を見ていなかった。

彼女も、成長しているのだ。

英霊に対して成長という言葉は間違っているかもしれないが、彼女がこのクラスで過ごして、他者への博愛を育んだのだとしたら、俺もこのクラスに対して礼をしなければならなかった。

「……そういうえばオコジヨ。あんた珍しく静かね？」

思い出したように明日菜がオコジヨ妖精のカモミールに声をかけた。

そういうえば、エヴァの時も一切言葉を発しなかったが。

俺を警戒してるのか？

「い、いやだなあ、姐さん。俺はいつも紳士で静かつすよ」  
激しく動揺しているカモミール。

どうしたんだ？

「自己紹介、してなかったよな。」

俺は藤丸立華だ。よろしく」

これからはこちらから歩み寄るべきだと思い俺は彼に手を差し出した。

「お、おう。俺たちはカモミールつす。よ、よろしくつす」

おどおどしながら手を取るカモ。

なぜそんなに怯えているのか不明だが、とりあえず嫌われてはいないようだ。

彼には、これからも色々活躍してもらわねばならないし。

「ひっ……………」

と、突然カモはネギの首の後ろに隠れてしまった。

「……………変なおコジヨ」

明日菜も不思議そうに見ていたが特に気にはしなかった。

なので俺も気にしないことにする。

「では、改めて藤丸さん。これからよろしくお願いします！」

眩しいネギくんの笑顔に、俺は目を合わせ辛かったがなんとか差し出された手を取ることはできた。

「ああ、よろしく頼む」

「それじゃあ、護衛の件、どうしましょうか。」

藤丸さんとエリザベートさんは一緒の方がいいですよね？」

刹那の言葉に俺は首を振る。

「いや、エリちゃんはこう見えて強い。」

俺とは分けた方がいい」

「こう見えてって何よー」

プンスカと怒るエリちゃんの頭を優しく撫でる。

それだけですぐにふにやりとした顔になった。

今は話を進めるべきだ。

「て、手懐けてる……」

微妙な表情でそれを眺めるネギくんたちはスルーする。

俺とエリちゃんは大体いつもこんな感じだ。

「しかし、藤丸さんは召喚師ですよね？」

エリザベートさんがいた方が……」

苦言を呈す刹那に首を振る。

「いや、もう一人連れてきている。ただここで出すと廊下を破壊しかねないから紹介は後にさせてくれ」

『私の重量について、何か言いたげですね。』

いいですよ、聞きますよ?』

なんか怒ってるメカエリチャンが念話でしつこく語りかけてくる。ごめん、でも本当のことだし。

「そ、そうですか。えーと、じゃあ。

エリザベートさんには私たちと一緒にお嬢様の護衛を」

破壊という単語に若干引いてる刹那。

事実なんだ、すまない。

「じゃあ、僕たちの方に藤丸さんですね」

「げっ……」

ネギくんの言葉にあからさまに嫌な顔をする明日菜。

だが今日はセクハラとかしてる余裕はない。

「今日は仕事だ。仕事はちゃんとやる」

「ほ、ほんとでしょーね？」

疑いの目で見てくる明日菜。

まあ、これは実際に見て判断してもらおうしかない。

ともかく今後の方針は決まったか。

「それではみなさん！」

本日はよろしくお願いします!!」

ネギくんの声に、俺たちは頷いた。

俺は一旦宿を離れ、クラスメイトに見つからないようにこっそりと抜け出してきたネギくんの後を追う。

忘れちゃいけないが彼女らは修学旅行に来ている。そんなところへ見ず知らずの高

校生が混ざるわけにもいくまい、と少し離れた位置からの警護を承った。

ネギくんの後から来た明日菜たちは、案の定、一般生徒の早乙女たちに見つかつていて結局一般生徒も含めた面々で観光することになつていた。

宿を離れる前に確認しておいたのだが、ネギくんは原作通りに親書を届けることを優先したようだ。

つまり、観光のどこかで一般生徒と別れる。

その時は、一緒に行つた方がいいだろう。

「お、ここに行動開始か」

一行がゲームセンターに入り早乙女たちがゲームに夢中になっている隙に明日菜とネギはこっそり抜け出して関西の本山へと向かった。

俺もその後を追つて、合流したのは電車だった。

「うーん、なんか落ち着かないわ」

「すまん。だが護衛はしつかりする」

なんだかチラチラと明日菜が見てくる。

そんな警戒しなくてもセクハラしないから。



今もバリバリ探知機能使ってるし。

というかネギくんを挟んでるんだから、それで構わんだろう。

「……すいません、明日菜さん。こんなことにまで付き合ってもらって」

「……」

申し訳なさそうな述べるネギくんに明日菜はツーンとしている。

やがてー

「別に。まだ10歳のあんたが危険なことしてるのが放っておけないだけ。

……それに。

一生懸命頑張ってる奴は、嫌いじゃないわよ」

少し優しそうな顔でそう語った。

「……」

どうやら彼女たちの絆に影響はないようだ。

と、こんなこと考えてるとまたエリちゃんに怒られてしまうな。

今は警護に集中しよう。そのために俺はここに来たのだから。

「ふわあ、すごいわねえ」

電車を降りてしばらく歩くと、そこにはでっかい鳥居と、その先に幾つもの小さな鳥居が連なっているのが見て取れた。

「どうやらここが本山とやらの入り口らしい。」

『みなさん、大丈夫ですか?』

と、そんな俺たちの元にちっちゃな刹那、ちびせつなが現れた。

「わあ!?!」

驚く明日菜たちに、彼女は自らちびせつなと名乗り、刹那の分身として来た式神であることを伝えた。

「そういえばそんな奴もいたか、と思い出す。」

「そんな俺たちにちびせつなはこの先の警戒を怠らないように注意を促した。」

「ん?…鳥居……」

「何か、忘れてる気がする。」

警護に集中していて、今後の流れをど忘れしてしまった。

何か、鳥居に関係する出来事があつたはずだが。

「よし、行くわよ！」

一人で熟考していると、明日菜たちは既に鳥居に向かつていた。

そこで、ようやく思い出す。

「っ、待て二人とも！」

その鳥居は!!」

「いや、そのネタバレは困りますね」

「っ!!」

ネギたちに声をかけた俺の背後から、急に誰かの声が響いてきた。

咄嗟に振り返りガンドを構える。

「っ！ お前は!？」

「……」

ニヤリと笑つた『その男』は、燕尾服に身を包んだ金髪の若い男。

知らない。こんな奴は *f a t e* にもネギまにもいなかった!

俺がガンドを放つよりも先に、そいつは俺に掌打を叩き込む。

「ぐうう!？」

凄まじい威力のそれは、俺を一気に鳥居内部まで吹き飛ばす。

飛ばされる最中、僅かに男に目を向けた。

「つ!!!」

鳥居の中、即ち原作にあつた結界に入る寸前、俺が見た男の顔は――

「お久しぶりです、最後のマスター」

丁寧にお辞儀するその男、その顔はさつきの金髪の青年とは変わっていた。いや、先ほどの『偽装』か？

俺の方を向くその顔、それは亜種特異点にて初めて明らかにされた人型の――

「魔神、柱……!」

それを最後に、俺は間抜けにも結界に取り込まれた。

## 京都・二

「うおおお!?」

ズガガ、と石畳を削りながら奥へと吹き飛ばされていく。

「うわっ、変態!」

途中で、一瞬、明日菜たちとも遭遇したが、止まらずに奥へ奥へと――

『止まちなさい!』

しばらく進んだところで、ようやく追い付いたメカエリチャンの手で止められた。

「ぐっ……、ありがとなメカエリチャン」

俺を抱き起こしてくれた彼女に礼を述べる。

「いえ……私の方こそ、気づかずに申し訳ありません」

しかし、しゅんとした彼女に謝られた。

「いや、メカエリチャンのせいじゃないよ。」

……それよりも、ここどこらへんだ?」

見渡す限り、鳥居が延々と連なる道と脇には林しか見えない。

おそらくはあのループしてしまう結界だとは思うが。

しかし、こんな重要なことを忘れていたとは。

確かに原作を読んだのは前世で、もはやうろ覚えに近いが。

今は命に関わるのだ。

何としても先に思い出すべきだった。

「くそ……抜け出し方なんか覚えてねえぞ」

なんか、のどかちゃんが持つてるアーティファクトで誰かの心を読んで抜け出していと記憶している。

しかしさすがにその詳細までは覚えてない。

「とりあえず明日菜たちを待つてー」

合流しようと思った矢先、起動しつばなしだった探知機能に反応があった。できればさっきの『魔神柱』にも反応して欲しかったが。

反応が示すのは、背後。

「お初にお目にかかる。召喚師殿」

とつさに振り向いた先にいたのは、和装の男性。

帯刀した姿からは浪人という言葉が自然と連想されるボサボサ頭を笠で覆っている。

「……いや、こいつ。召喚魔か」

見た目でなんとなく。

礼装の反応も平均的な魔力値を示している。

おそらくは魔法で召喚された使い魔。

「いかにも。なにやら近頃は便利な世の中となったものよ、そのような珍奇な服一枚で敵の情報を読み取れるなど」

可笑しそうに彼は笑った。

カタカタと聞こえるのは骨の音。

「マスター、下がっていなさい。」

私が、片付けます」

そう言っただけの前にメカエリチャンが立った。

「ああ、頼む」

力のほどは単なるエネミー。いつも退治している魔獣とほぼ変わらない。ならば彼女なら大丈夫。

「いやはや、そちらのお嬢さんの相手は某一人ではちと厳しい。」

……故に、仲間を呼ばせてもらおうか」

「っ!! 新手か!?!」

男の一言で、複数の反応が一気に現れた。

どうやら新たに召喚されたらしい。

膨大な数の反応を礼装がキャッチした後に、ゾロゾロと男の背後から集まってきた魍魎。

「上等、俺も援護する。やるぞメカエリチャン！」

「当然。……貴方たちみんな、粉碎してあげるわ!!」

リツカたちが召喚魔たちと戦闘している頃。

刹那たち別グループも敵の襲撃を受けていた。

「くっ、白昼堂々街中で仕掛けてくるとは！」

木乃香の手を引き走る刹那の元に、矢が数本射掛けられる。

それを刀で叩き落とす。あるいはエリちゃんのマイクスタンドで叩き折る。

その繰り返し。



「急に、どうしたのよー!」

刹那たちの後ろからは一般生徒も必死に走って追いかけてきていた。思わず刹那は歯噛みする。

一般人を巻き込むなど、敵はどここの外道だ、と。

「刹那、どうするの?」

小声で話しかけてくるエリちゃんに、刹那も返答しかねていた。

「何よ、( )シネマ村じゃない!」

後ろの早乙女の言葉に、刹那はピン、と閃いた。

そして隣のエリちゃんに話しかける。

「エリザベートさんは他の方々を、私はー!」

「わっ!?!」

突然、木乃香を持ち上げた刹那はそのまま凄まじいジャンプ力で塀の上へと登る。

「あ、ちょ!?!」

「すみません皆さん!」

ここからはこのかさんと二人きりにさせてください!!」

そう叫んで塀の向こうへと消えていった。

残された面々は当然、呆けたようにその光景を眺めていた。

「え、今のジャンプ力。あり得くない??」  
珍しく冷静な早乙女がそう呟いた。

一方、ネギたちを閉じ込めた結界の内部を、外側から観察する者たちがいた。彼らは宙に浮かんだままに、内部で戦闘を繰り広げる者たちを眺めている。

「ふむ。やはり、召喚魔程度では歯が立ちませんか」  
ポツリ、と燕尾服の男が呟く。

その視線の先では、メカエリチャンが迫り来る魑魅魍魎を千切っては投げ千切っては投げを繰り返している。

途中、目からビームを出したりミサイルが飛び出たりロケットパンチとか火を噴いたりしていたのは気にしないことにした。

「おかしい。いや、アレは科学なのか？ それとも『魔術』なのか？」

真面目な顔で困惑するフェイトに男は優しく語りかける。

「深く考えてはいけません。あの英霊に関しては何。

感じるのです」

だが、男の言葉のせいでフェイトは余計に訳がわからなくなっていた。

確かに強いのだろう彼女は。しかし、どう考えてもロケットパンチやミサイルなどの威力がおかしい、と。

しかし、男の言う通りメカエリチャンに関しては深く考えるべきではない。そのまま、感じるがままに認識するべきなのだ。

だって、原動力からしてエリザ粒子という謎のエネルギーが使われているのだから。

「あ、合流しましたね。ここらが見納めでしょう」

「……やけにあっさり勝ってしまったね。まあ、彼が使役するもう一体の性能が分かっただけでも良しとおこうか」

二人はそれぞれ感想を残して、その場から去っていった。

その頃結界内では、アーティファクトを持ったのどかが加勢したことにより、ネギが小太郎を圧倒していた。

「右です！」

「ぐお!!？」

「今度は左！」

叫ぶのどかの手には一冊の本。

これが彼女のアーティファクト。

効果はズバリ読心である。

これにより全ての手の内を読まれてしまった小太郎は終始ネギに圧倒されていた。

「くっっ！」

しかし、ネギの身体も限界が近づいており、それを危惧したカモとのどかは小太郎に結界からの脱出方法を尋ねる。

そしてまんまと読心術で暴かれた小太郎は、逃げるネギたちを追跡した。

「ま、待てやー!!！」

と、その脇の林から突如としてメカエリチャンが現れる。

「粉碎っ!!！」

「ギャアアア!?!」

大量の魑魅魍魎を殴り飛ばしながら。

召喚に際しての仮の肉体とはいえ、飛び散った妖怪たちの身体の一部が辺りに散乱する。

「ふむ、どうやら偶然にも合流できたようですね」

ガシヨングアシヨンと機械的な音を出しながら近づくメカエリチャンに、ネギたちははしはし放心した。

あのメカは一体、なんなんだ? と。

「なんか、エリザベートさんに似てますけど」

「聞き捨てなりませんね、ネギ少年」

ぼそりと呟いたネギに耳聴く反応を示したメカエリチャンはピシツと指を突きつける。

「オリジナルと私は別個体。

私はメカエリチャン、よ!!」

ババン、と効果音と共に後ろから謎の煙が打ち上がる。

どうやって、誰が出したとかは謎である。

メカエリチャン専用の演出なのだ。

「メカ、エリ?」

困惑する面々。

そのやりとりに少し遅れて、林からリツカが這い出てきた。

「メカエリ、チャン。速すぎい」

「ぜえぜえ言いながらも彼女の隣に立つリツカ。

「な、あんたら……妖怪ども全部倒したんか!」

彼女らの姿によくやく反応を示したのは小太郎。

「おや、なんですかこの犬は?」

メカエリちゃんは獣化した小太郎を興味深そうに眺める。

エリちゃんアイでは既に小太郎の情報分析が行われていた。

それを他所にリツカはネギに声をかけた。

「おう、ネギくん。脱出方法は掴めたかい?」

「は、はい!」

元氣よく答えるネギにリツカも微笑む。

「待てや!」

むぎむぎ逃がすわけないやろ!」

そこへ、満身創痍な小太郎が立ちふさがる。

「退きなさい、少年。貴方では私に勝てない」

それを堂々と正面から見据えるのはメカエリチャン。

彼女の発言は冷静に分析した結果の事実である。

「な、なんやて!？」

……くつ、女やからって邪魔するなら!!」

メカメカしい姿にちよつとカツコいいな、とか思いながらも小太郎は勇敢に立ち向かう。

メカであることから小太郎は拳を振るうのも止むなしと考えていた。

「ふう。少し、お仕置きが必要なようですね」

そうして振るわれた彼の拳を、メカエリチャンは片手で軽く受け止める。

「なっ!？」

驚愕する小太郎に、その腕を掴んだままメカエリチャンは片方の拳を握り締める。

「エリちゃん、パーンチ!!」

ドスン、と重い音を立ててその拳が小太郎の腹にめり込んだ。

「かつ、は!？」

痛烈な一撃を鳩尾に食らった小太郎の意識は一瞬で刈り取られる。

パタリ、と地面に倒れた彼を一瞥してメカエリチャンはこちらに振り返った。

「戦闘終了、行きましょう、マスター」

一方で、シネマ村に逃げ込んだグループも変装によってやり過ごそうとしたが、呆気なく見破られており、再度の襲撃を受けていた。

さらに合流した一般生徒たちをも巻き込んで大混乱となるシネマ村にて刹那は敵の一人、月詠と剣を交えていた。

「ざんがんけーん！」

「くっ！」

のほほんとした口調とは裏腹に確かな鋭さを持った太刀筋。

刹那は防戦一方に追い込まれていた。

また、一般生徒の方には無害ながらも数だけが多い、マスコツトのようなデフォルメ妖怪たちが群がっており、その対処にエリちゃんは追われていた。

「く、可愛いけど、これって敵なのよねー！」



何事か叫びながら槍を振り回すエリちゃん。

チラリ、と目を向けるのは刹那。と戦う劍士。

確かに劍の腕は凄まじいが、自分が加勢すればなんとかなるような敵だと思つた。

「どきなきーいー」

そして周りの妖怪を消し飛ばしながら、エリちゃんは刹那のもとへー

「行かせるわけにはいかぬ」

「つ、きやあ!」

しかし、突如として襲い来た巨大な『何か』に殴られエリちゃんは吹き飛んだ。

突つ込んだ壁がガラガラと崩れる中、ちよつと頭に来たエリちゃんは立ち上がる。

「ちよつと?」

私の顔を殴るなんて、あんた何様よ!」

ちよつとズレた発言だが敵もそれは気にしないことにした。

エリちゃんに怒鳴られる相手。

それは正確には人間ではなかった。

「ふむ、私の拳を受けてピンピンしているのは些か不自然なのだな」

それは金剛の硬さと輝きを持つ身体の巨軀。二本の角と、下顎から生える長い牙。ま

ぎれもない鬼。

4 mはある身体をゆっくりと起こしながら彼は語る。

「我は『金鬼』。この場にて貴殿の足止めを任された者よ」

「キン？ なんでもいいわ、私を殴った罪、今ここで償ってもらおうわよ！」

相手の名乗りを特に気にせずエリちゃんは槍片手に突撃する。対して金鬼は構えることもなく仁王立ちしたまま。

その身体にエリちゃんは槍を振るつた。

「っ！ 硬っ!!」

甲高い金属音だけが鳴り響き槍の穂先を当てた部分には傷一つ出来ていなかった。

「当然。我が身体は金剛にて、貴殿の脆弱な槍では貫くことかなわず」

「な、なんですって〜！」

悔しがるエリちゃんに金鬼は拳を振るう。

エリちゃんはそれを間一髪で避けた。

その勢いで再度槍を突き立てるも、また弾き返される。

それを何度か繰り返し返していると、

「おおっ！ なんだなんだイベントか!？」

周りでは大立ち回りをする刹那やエリちゃんを見て、イベントと勘違いした一般人たちが集まってきていた。

「く、子ブタたち、今は……」

そこまで言つて、エリちゃんはふと思いついた。

「又オオオ！」

緩慢な動きながら、途轍もない破壊力を秘めた拳が迫り、エリちゃんは身を逸らして躲す。

その隙に距離を取り、槍を地面に突き立てた。

「……もう降参か、小娘よ」

訝しむ金鬼に、エリちゃんは満面の笑みで答える。

「違うわ。負けるのは貴方よ!!」

そして大きく息を吸い込んだ。

腰のあたりから竜の翼がはみ出ているが、気にせず息を吸い込む。

「? 珍妙な……」

そして、口の端に手のひらで壁を作り、溜め込んだ息を一気に吐き出した。

「っ……!!」

「ゴエエエエ!!!」

その声は周囲に広がることなく、金鬼の身体目掛けて一直線に進んでいく。

「一体何の真ん……ぐう!!」

その声が直撃した場所、即ち脇腹に金鬼は突如鋭い痛みを覚えた。

見れば、その部分だけ振動し『僅かにヒビが入っていた』。

「つ、貴様、竜の眷属か!？」

何かを察した金鬼は慌てながらも、エリちゃんの声を止めるべく駆ける。

「あつははは!!」

遅いわよ、私より遅いなんてノロマね!」

そう言いながら、合間にさっきのように声を収束させて放ち、金鬼の身体に傷を入れていく。

それは僅かなものだが、数を重ねればそれなりのダメージとなるのは明白である。

ゆえに金鬼は必死に追う。それを嘲笑うかのごとくエリちゃんは後退しながら声を当て続けた。

『キレンツ・サカーニイ竜鳴雷声』。

端的に言うならば竜の息吹。

厳密に言うならば、魔人化によつて異界となつた肺を目一杯使つた膨大な肺活量から放たれる声、声量と振動を増幅させて放たれるドラゴンブレス。

スキル・無辜の怪物とエリザベート自身も知らぬ、竜血の隔世遺伝による雑竜種化。本来の竜種よりも大幅に劣るものではあるが、彼女は確かに『竜の娘』と化している。

その影響で獲得した宝具である。

この宝具の特徴の一つが『魂への直接攻撃』。

防御を無視したドラゴンブレスの振動による直接攻撃。

これが金鬼の『金剛の守り』を突破した事実であった。

「く、ちよこまかとお！」

逃げるエリちゃんに、追い縋る金鬼。

もし彼女がもう一つの宝具と併用して声を発せば、一撃で大ダメージを狙うことでもできるだろう。

しかし、周りには無関係な一般人が大量にいる。

それが彼女を小出しの攻撃に縛る要因であった。

「しつこいわねー！」

もどかしさにイラつきを金鬼へとぶつかる。音波と共に。

そんな彼女の元へ『さらなる敵』が訪れた。

「我、これ一切にして断ち切る風とならん」

そよ風のような声が辺りに響く。

それに遅れて凄まじい勢いの竜巻がエリちゃんを襲った。

「きやああああ!!」

肌を切り刻む暴風。

それを作り出した張本人は、疲れた様子の金鬼の傍に降り立った。

「いくら『魔力に制限』があるとはいえ、手こずり過ぎだ」

そう述べる男、否、正確には彼もまた鬼であった。

頭部の四方に立つ小さな角。青白い体色の巨軀。その顔にはぼつかりと風穴のようなものが空いており、顔のパーツは辛うじて口を残しているのみ。

プロペラのような奇妙な形の両刃刀を手に涼しげに佇んでいる。

「がっ! くうう……!!」

そこへ、なんとか竜巻を脱出したエリちゃんが着地した。

「諦めよ、竜の娘。汝の息吹では我が風は超えられぬ」

努めて冷静な彼の声は、エリちゃんにとっては雑音でしかなかった。

「うるさいわね。私は私の友達を守るの!」

邪魔するなら誰だって殺すわ!」

確固たる意志を持つその目に、鬼もしばしの沈黙をとった。

「……よかろう。我らは貴殿らの殺害権も賜っている。『抑えきれぬならば殺せ』とな」

「やってみなさいよ!!」

咄嗟に構えをとったエリちゃんが再度、収束型の超音波を発する。それを鬼の片割れは再度、風を招いて打ち消した。

「っ!!」

一瞬の動揺。その間に、もう一体の鬼は彼女の元へと駆けていた。さつきよりも断然速い動き。となれば先ほどまでは『手加減』をしていたのか。考える間もなく、さつきよりも二、三倍は早い拳撃がエリちゃんに襲いかかった。

「――命のやり取りとか、面倒なことになってるなあ」

拳とエリちゃんの間、ふらりと立ち入った人物がいた。

「っ!!」

金鬼が気付いた時には、すでにその拳は二刀によって止められている。

ギリギリ、と刃と刃が擦れる音を出しながら、その人物はケロツとした様子で鬼の拳を止めていた。

突然の出来事に、呆気にと取られていたエリちゃんが、ようやくその人物の正体を思い出す。

「あー! あなた!!」

煌びやかな着物を纏い、大きな笠を被ったその人物。

明るさの中に妙な色気を漂わせる声。  
そして笠から覗く銀の髪。

「ぬんー！」

短い掛け声と共に金鬼の拳を押し返した彼女は、バサツと着物をはためかせる。

「き、貴様！ 何者っ！」

力だけではない、と金鬼は悟っていた。

自らの剛腕を退けたのは彼女の『技』。先の一撃だけで金鬼はこの女が並みの部外者ではないことを感じ取った。

「……私？」

そうだなあ、何やら「ぎやらりー」も多いことだし。

よろしい、ならば教えましょう！」

ひた、と笠に手をかけ、それを一気に脱ぎ捨てる。

はためく着物が陽光に煌めき、その美しき剣豪の容姿を照らしあげる。

『新免武藏守藤原玄信』!!

縁深き友を助けるためならば、鬼をも斬って御覧に入れる!!」

無双の剣豪、異聞の剣豪が京の地に降り立った。



## 京都・三

「新免、武蔵……宮本武蔵だ!!」

誰かがそう叫び、周囲のギャラリーは一斉に沸き立ち始めた。

当初、聞き慣れぬ名乗りにぎわめいていたギャラリーだったが、その叫びで一気に盛り上がりを見せた。

ここはシネマ村、武蔵ファンだっいてもおかしくない。

「すごい……アイドルみたい」

周囲の熱狂は凄まじかった。

それもそのはず、宮本武蔵といえば日本でその名を知らぬものがないほどの有名な剣豪。その剣舞となれば見物人も盛り上がる。

またシネマ村に訪れる者たちは多かれ少なかれ、皆時代劇好きであることが殆どである。

「……その気配。ふむ、『異聞の者』か」

興味深そうに呟くのは風を操る鬼。

その一言は『英霊が召喚される世界を知っている』ような口調。

「情報に無い敵だ。しかし、『邪魔だてする者』は何であれ排除対象だ。金鬼」  
「おうや」

呼ばれた金鬼は既に動いていた。

「っ！」

先ほど見せた『サーヴアントの動き』。人智を超えた動きに、しかしこの剣豪は正面から受け止める。

「ぬう」

音速からの拳撃。止められるのは英霊の域に達した者のみ。

されど異聞とはいえ、女子おなごに止められるのは些か不可解だと彼は感じていた。

「っ、ぐおお!」

加えて、自らが拳を一撃見舞うお返しに数多の剣閃を目にも留まらぬ速さで繰り出されては立つ瀬がない。

「へえ、金剛の守り。金鬼ね、噂通り硬い硬い！」

対して武蔵は、伝承の通りの鬼の硬さに感服していた。

その動きが人外のそれであるにも関わらず、ただ剣を極めたことで獲得した『技』にて彼女は対抗する。

剛腕を寸でのところで避けながら鬼の身体に剣を突き立てる。弾かれるのは承知だ

が、必ずどこかに『綻び』があるはずだと。

音速で繰り広げられる戦いの中で、この鬼の剛腕を一度でも受ければ劣勢になるであろうことを読み取っていた。

金鬼。藤原千方（ふじわらのちかた）が使役したとされる四体の鬼のうちの一体。

その身体は『金剛』にて、いかなる武器をも受け付けぬ鉄壁の守りを持っていたという。

この逸話、あるいはそれが『何物も傷つけられぬ』という単一概念であれば、ついで傷を付けられたことがない事実からまさしく文字通りの無敵となれたことだろう。

しかし、それはあくまで『金剛』の守りであるという逸話なのである。そこに『隙』がある。

また、守りを盤石にしないことによるメリツトもあった。

それこそが武蔵の警戒する『剛腕』。その身が『金剛』であるならば振るわれるその拳も『金剛』。かの帝釈天が使った金剛杵も『金剛製』である。

ランクにしてA相当の筋力値を誇るまさしく剛腕。加えて『人外』ゆえのスキルも持った金鬼の拳は、語られる鬼神の如き力を持っていた。

「ふむ……」

とはいえ、無空に至った武蔵の技を前に金鬼は劣勢であった。残り魔力を気にするとこれ以上の消耗は避けたいところ。

そう思った鬼の片割れは、三度、風を操る。

「むっ！」

持ち前の勘にて背後より迫る『魔の風』を察知した武蔵は咄嗟に回避行動を取る。

これが『魔術師、魔法使いの起こす風』であれば避ける必要はない。

対魔力Aを誇る武蔵には最高峰の魔術、魔法しか届き得ないのだ。

「躲すか。面白い」

しかし、この鬼の操るそれは『魔術でも魔法でもない』。もつと原始的で根本的な。自然のそれ。

術式というカテゴリーに属さないその技は人外たる鬼ゆえに許されたもの。かつて神にのみ許されたものとはほぼ同質の力をこの鬼は操る。

それを勘でなんとなく感じ取った武蔵は、直撃を避けるべく縦横無尽に駆けた。

「潰れよ」

「なんのー」

その僅かな隙を突くべく金鬼も拳を振るう。

かくして、踊り狂う風を避けながら金剛の鬼と、刀と拳をぶつけ合うさながら剣舞の

ごとき見事な動きを武蔵は披露していた。

「す、すげえ……！」

あの風、どうやってんだ？」

「武蔵役の嬢ちゃんの動きもパネエ！」

大作映画のようなアクロバティックかつ雄大な演出に、観客たちはさらに沸き立つ。

「ぬぬぬ、新たなライバル！」

それを見てエリちゃんは勝手にライバル心を燃やしているのだった。

「っ、なんだ？」

月詠と剣を交わしていた刹那も、武蔵に沸き立つ観客の熱狂ぶりに気付き意識を向けていた。

「余所見はあきまへんえ〜！」

しかし、目の前の剣士も十分に強敵。ふざけた態度とは裏腹に的確すぎる攻めに刹那は苦戦していた。

加えて自身と同じ流派の者となれば自分がケリをつけなければならぬ案件。刹那は木乃香を守るといふ思いと、その義務感によりなんとか月詠と渡り合っていた。

「…………お嬢様！」

武蔵、鬼の乱入により混沌とするシネマ村とは対照的に、ネギたちは小太郎らの襲撃を撃退し、結界を抜けると共に逆に小太郎を結界に封じることによって一時の安寧を得ていた。

そうなると必然、堂々と騒動に巻き込んでしまった宮崎のどかへの魔法事情の説明が必要となってくる。

騒動に巻き込んでしまった詫びも含めてネギは彼女へ魔法のことを告げるのだが、のどかは比較的すんなりと受け入れ、逆に楽しそうな様子も見せていた。

その姿にリツカは、危機感の薄さを感じていたが特に何を言及することもなかった。

……隣で何か言いたげに彼を見つめるメカエリチャンをチラチラと確認していたが。

「……えと、リツカさん。ですよね？」

こちらの機嫌を伺うような上目遣い。小動物オーラ全開の、のどかが俺に話しかけてきた。

まあ、そうなるよな。

中学生の修学旅行先に現れた知り合いの高校生。

怪しすぎる。

「うん、リツカだよ」

「リツカさん、って本屋ちゃん知り合いなの？」

なんでこんな変態と、などとつぶやきながら明日菜は訝しむように俺を見る。待て待て、彼女にはセクハラしてないぞ。

「は、はい。探検部の関係で、少し」

恥ずかしそうに語るのどか。いやなんも恥ずかしくないだろ。誤解を招くような態度はやめるんだ。

「ふーん、あんた、何したの？」

黒と決めつけたような明日菜の言動に俺は反論する。

「待て。ただ図書館島の探検に手を貸してもらっただけだ。それ以上は何もなかった、断じて」

「リツカ、さん」

なぜか泣きそうなのどかに、明日菜は益々疑いの目を向けてきた。

結局、のどかの証言で事なきを得たが、どうにも俺はアスナ姫に嫌われてしまっているようだ。

「じゃあ、リツカさんも魔法使いさんなんですね」

「うーん、ま、そんなところだな」

面倒臭いのでそういうことにしておこう。

ちなみにネギくんは小太郎少年との戦いで負傷していたが、それらは明日菜とのどかの応急処置を施すことでなんとかなった。

まあ、これから本山を目指すのだろうしそこで本格的な治療を受ければどうということはないだろう。

『では、皆様、今のうちに親書をー』

と、そこまで言って式神ちびせつなはフツと紙つぺらに戻ってしまった。



どうやら刹那本人に何かあったらしい。

慌てた面々は、カモミールの提案によりネギの式神を作成しそれを連絡用に送ることを決めた。

対して俺は通信機を使ってエリちゃんに持たせてある小型通信機に連絡を入れる。普通の電話の呼び出し音がしばらく響く。

やがて、プツという音の後に通信が繋がった。

「お、エリちゃん？」

そつちでなんか異常はないか？」

確かあちら側も何か襲撃があったような記憶があるが。

『あ、子イヌ！』

今、敵の襲撃を受けてるの！』

やはりか。

「ねえ、誰と話してるの？」

不思議そうに明日菜が声をかけてきた。

今の俺は側から見ると独り言を言ってるようにしか見えない。

「通信だ、エリちゃんに待たせた小型通信機を通じてな。あちら側も襲撃を受けているようだ。……エリちゃん、詳しい状況を教えてくれ」

もしかしたらあちらも正史より戦力を増員している可能性があるからな。

『えと、刹那は敵の剣士と交戦中。でも大して強くなさそうよ。で、そいつが召喚したマスコットみたいな召喚獣たちをクラスのみんなでボコボコにしてる』

カオスな状況だ。口調からして無害な召喚獣なのだろう。

そして、剣士とはおそらく月詠のこと。

あの「べ、別にあんたなんか好きじゃないんだからね!」とか言いそうな声の戦闘狂、  
イツちやつてる女の子。

ネーナ系列のくぎゆである。

『そうそう、それとね!』

今、あの女剣士が助太刀に来てくれたの!』

女剣士?

エリちゃんの知り合い?

誰のことを言ってるんだ?

『名前は、なんだっけ。さつき名乗ってたんだけど……シンメン、タンメン……あ、そう

だ、武蔵!!』

「武蔵だと!?!」

思わず声を荒げてしまった。

予想だにしない名前が飛び出してきたのだ、仕方あるまい。

『うん！』

なんか私を殴ってきたキンなんちゃらって鬼と、増援で来た風を操る鬼を相手取って戦ってくれてるわ！』

キン？ 風？

いや、それよりも武蔵とは……エリちゃんの知る武蔵ってまあ彼女のことを言ってるのだろうが。

一体、あつちはどういう状況なんだ？

「敵は鬼なんだな？」

『ええ、キンなんとかってのはめちやくちや硬くて黄ばんだ体の色してて、もう片方は不健康そうな青い色してる奴。あ、なんかプロペラみたいなの持つてるけど、アレ何かしら？』

キンと名の付くもので黄色、めちやくちや硬い鬼。記憶にある中ではキンキが思い当たる。

そしてもう片方の青くてプロペラ持つてる奴。

「青いやつの顔って、でっかい穴空いてないか？」

『よく分かったわね、子イヌ！』

そうなの、顔面陥没してるわ。

あれってどうなってるの？』

やはりか、そいつはフウキ。

どちらの鬼も女神転生ってゲームで見かけたビジュアルしか知らないが、能力は伝承とも合致している。

金鬼は金剛のような身体を持ってどんな攻撃も受け付けないディフェンス型。風鬼は風を自由自在に操ることしか知らないが、どちらも一軍を退けた逸話を持つ強力な鬼である。

加えて、エリちゃんを殴り飛ばし、武蔵ちゃんと互角に戦うとなればまず並みの鬼とは思えない。

これは助けに行くべきか。

しかし、負傷したネギくんと少女たちを置いていくわけには行かない。その状態で放置するのは危険だ。

俺は引き続き、エリちゃんに状況報告をするように頼んだ。

「ぐぬう、異聞であろうと武蔵の名は伊達ではないか」

幾度も拳と刀を交わすうちに金鬼も武蔵の達人をも超える技の冴えを感じていた。

接近戦で攻める金鬼と、あくまで遠距離から風を操る風鬼。

その連携は武蔵をして侮れないものであった。

「そつちこそ、仲がいいみたいね」

ひよい、と風の刃を避けて武蔵は軽口を飛ばす。

「ふむ。私の生前には見ることもなかった類稀なる武勇よ、異聞の武蔵。ならばこちらも真髓を……」

「っ!!」

ズズ、と周囲の『mana』を吸い取りながら風鬼は魔力を高めていく。何やらデカイ一撃を見舞うつもりであると武蔵は直感した。

しかし、そうなれば周囲の人々にも被害が出る。

「むっ!」

しかし、何かに気付いた風鬼はピタリとそれを止めた。

金鬼も武蔵を追うのをやめて停止する。

そんな彼らの視線を追うと、何やら城の方が輝いているのが見えた。

「……勝負はお預けだ剣豪よ。遠からぬうちにまた見えようぞ」

その間に、金鬼風鬼の両名は即座にその場を飛び退る。

「あ、待ちなさい!」

……えーと、エリザベートさんだっけ?

私はいいつらを追うわ、立華くんによるしく伝えておいて!」

「ちょ!」 ジャパニーズSAMURAI!」

言いたいことだけ言って、エリちゃんの返答も聞かずにすぐさま鬼の後を追う武蔵

ちゃん。

屋根をひよいひよい飛び移り、一瞬で遠くまで走って行ってしまったその姿にエリ

ちゃんは呆気にとられた。

「サムライ、ニンジャ……」

一方、城の方では木乃香を庇って重傷を負った刹那を、無意識に魔法を使った木乃香が治療して事なきを得ていた。

応じて刹那たちに襲いかかっていた敵も撤退、刹那たちの方に来ていた式神を通じてネギたちにも連絡が繋がる。

ネギたちが本山近くにいることから、一旦態勢を立て直すべくひとまずは本山の加護に入るべきという結論に至り、協会本部、即ち木乃香の実家で合流することになった。

「でも、リツカさんも魔法使いさんだったなんて、ほんとびっくりしました」  
合流を待つ中、手持ち無沙汰なのどかが声をかけてきた。

図書館島絡みの関係だったとはいえ彼女にも色々と助けられたことがある。

「ごめんね、一般の人に安易に吹聴してはいけない決まりだったから」

「いえ、またリツカさんと一緒に冒険とか出来るなら、嬉しいですよ」

まるで太陽のような笑みを見せてくれるのどかちゃん。

ほんま天使やで……。

「俺ものどかちゃんたちには助けてもらったから。これからもよろしくね」

……これからは楽しいことばかりではない、過酷で悲惨なものを見ることもあるだろう。俺はその未来を知っている。

だが、今後の『戦力』として彼女は必要である。

俺は彼女が魔法に関わることになるの苦言も呈さなかった。

「そんな、私も図書館島では色々。あ、そういえばリツカさんに教えてもらった絆創膏、ちゃんと使ってますよ」

ほら、とカバンから取り出した絆創膏の箱を見せるのどか。そういやそんな話を彼女とはしていたこともあったか。

サブカルの分野では彼女と意気投合したりもした。結構、ファンタジー系には詳しい彼女。神話等の知識も豊富だ。そこらへんの話が一番盛り上がった。

そのせいかこうして懐かれているのだが。

「はは、それは良かった。でも怪我しないのが一番だからね。危ないことは控えるように」

そう言っって頭を撫でる。

「ふわわ……」



彼女の甘い声を聞いて、もはや癖のように彼女の頭を撫でてしまっていることに気付く。

「ああ、ごめん。つい癖で」

「あつ……」

パツと手を離すと彼女は少し寂しそうな顔をした。

いやいや、公衆の面前で頭を撫でられたら嫌だろうに。

「……」

しゅん、とした彼女を見ていると居た堪れない。

俺だつて撫でたいけどさ。

「……撫でた方がいい？」

「……はい」

一応、確認をとってから優しく、再度頭を撫でる。

相変わらずきめ細やかでサラサラと手触りのいい髪質をしている。撫でる手を止められなくなりそうだ。

「なんか、兄妹みたいねあなたたち」

そこへ明日菜も声をかけてきた。

その言葉にもじもじしながらのどかちゃんが応える。

「は、はい。私も、リツカさんみたいなお兄ちゃんがいたらなあ、なんて」  
マジか。

恥じらいながらも穏やかな笑みで彼女は述べた。それもやはり天使である。もはや『天使』という単語が『ローマ』みたいな扱いになってきている。

俺も君みたいな妹が欲しいよ。

「こんな可愛い妹なら断然欲しいな、俺も」

「か、可愛いなんて……そんな」

顔を赤らめて恥じらうのどかちゃん天使。

そうだ、今度から彼女は天使と呼ぶべきだ。

天から舞い降りた神の贈り物、とかどうだろう？

彼女にぴったりの気がする。

「……まあ、いいけどさ」

少し驚いたような顔でこちらを見つつ明日菜が述べた。なんだよ、文句あんのかよ。  
「……霊体化します。何かあれば呼んでください」

なぜか少し冷たい声でメカエリチャンはさつきと霊体化してしまった。解せぬ。

そんな俺らの元に、なにやらガヤガヤと騒がしい声が聞こえてきた。

声のする方へ目を向ける。

そこには、木乃香たち含むネギクラスの面々が。それも一般生徒も含んでいる。どうなのだろう、これは。

俺がいてはまずくはないだろうか。

「あー!! あなたは!!」

そんなこと考えてる間に夕映吉に見つかってしまった。

こらこら人を指差すもんじゃないぞ。

とてとてと駆け寄ってきてはガン飛ばしてくる。

「奇遇だな夕映吉」

「夕映吉などと、馴れ馴れしいですよリツカ」

「お前こそお兄さんと呼ばび捨てにするとは。ちよつと生意気が過ぎるんじゃないかい？」

「リツカなどリツカ呼びで十分です。変態は牢屋にお帰りいただけますですか？」

「はい文法おかしいですう、やり直してくださいーい」

「何やってるのよ、あんたら……」

呆れたように明日菜が声をかけてくるが、俺はこの小娘を何としても『再教育』してやらねば気が治らん。

セクハラは自重するが、それとこれは別だ。

「あの、そろそろ本山……木乃香さんのご実家の方に」

おずおずと話しかけてきた刹那に、俺も仕事を優先すべきと判断して渋々了承する。  
「おや、逃げるのですか？」

ふふん、やはり変態ロリコンでは私には勝てないようですね」

それ、暗にお前がロリであることを認めちまつてるぞ。

「ちよつと、夕映、この人知り合いなの？」

興味津々な早乙女嬢が夕映にコソコソと耳打ちしている。残念ながら礼装の集音機能を使えば聞こえてしまうのだよ。

「ふん、ただの変態ですよ」

ちよ、お前、初対面の相手になんつゝ紹介を。

内心慌てて、されどあくまで冷静に早乙女嬢に声をかける。

「初めまして。私、エリちゃんのプロデューサーを務めさせていただきます。藤丸立華と申します」

こんなこともあろうかと作ってあった名刺を取り出し挨拶する。ちなみに『カルデア事務所』なるものは存在せず、エリちゃんは未だ無所属のスクールア○ドルである。

「これはご丁寧に。……エリちゃんのプロデューサー、ホントにいたんだ」

まさかの早乙女嬢もそんな反応を示した。

彼女たちの間ではどれだけプロデューサーの存在が都市伝説化しているのだろうか。その後ろではエリちゃんが不服そうにこちらを見ていた。

「やあ、エリちゃん。連絡、ありがとね」

「ふん、子イヌは私たちが戦ってる時にのどかとイチャイチャしてたのね」

再開早々、そんなことを言われた。

全くの誤解である。確かにのどかは可愛いがそれは『ロリっ子ぐへへ』な意味じゃ無くて普通に、妹的可愛いさというか。

欲情はしていない。断じて。

「誤解だ。俺はエリちゃん一筋、変わらないよ」

「ふーん、子イヌってよく耳障りのいいこと言うけどどうにも信用できないのよねえ」

まあ、ね。セクハラしまくってるし。

いや、ほら、でも恋愛的な憧れの的な意味ではエリちゃん大好きだし。

だめ？

「ごめんって、気に障ったなら謝る。でも好きなのはエリちゃんだからね？」

「つ……そんなハッキリ言わなくても、分かってるし」

怒ってたやん……。

「な、なになに、え？ エリちゃんの彼氏なの、その人!？」

話を聞いていた早乙女嬢が熱心に聞いてくる。

いやあ、彼氏じゃないよ。まだ。

「ち、違うし！ 子イヌはプロデューサー！

私の子イヌなの！」

子イヌとは。

エリちゃんの中で子イヌという単語はきつと数多の複雑な意味を持つに違いない。

俺は改めてエリちゃんの偉大さを感じていた。

「ほら、もう行きますよ、みなさん！」

いつまでも進まない俺たちに刹那が珍しく叱責した。

「あ、アレじゃない!？」

「レッツゴー！」

大きな門が見えてきた頃、元気の有り余る一般生徒たちは意気揚々と走って行ってしまった。

「あー、ちよつとみんなー!!」

その後を慌てて明日菜たちが追う。

それを苦笑交じり見つめながら刹那、木乃香もそのあとを追った。

『行かないのですか、マスター』

「いや行くよ。ただ、その前にちよつと確認したくてね。

例の、魔神柱に関して」

姿は見えないながらも、自然と彼女も気を引き締めたのが感じられた。

歩きつつ語る。

「第一に、アレは本物か？」

『残存するデータと照合した結果。

アレは確かに我々の敵、魔神柱に間違いありません』

「そうか」

メカエリチャンも退去時までの記録を有した存在。加えてロボであるため記録に残

されたデータは全て詳細に閲覧可能なのだ。

しかし本物か。

まあそうだろうけどさ、そうなるとあいつほどの個体だ？

確か、亜種特異点の制覇で生き残りは殲滅したはずだが。

『該当するデータがありました。しかし……』

「どうした？」

言い淀むメカエリチャンに違和感を感じる。

なんでもズバズバ言うのが彼女の特徴なのに。

『……あくまでデータ上の話として聞いてください。

あの魔神柱の名は、ダンタリオン。以前カルデアのデータベースに登録されていた、時間神殿の戦闘で死滅した個体です』

「なに……？」

その名前には聞き覚えがあった。

最後から三番目に機能停止した個体だったはずだ。それゆえに記憶にも残っていたのだが。

「確かに、死んだんだよな？」

『カルデアにはそう記録してありました』

時期的にメカエリチャンは時間神殿の戦いを経験していない。だからこそ困惑しているのだろう。

死んだはずの個体。それがこうして自分たちの前に姿を現したのだから。

「どうやったのかは知らんがいるのは確かだ。



……拠点に着いたら、一度ダ・ヴィンチちゃんに連絡をー」

ふと、自分たちがすでに門のところまで来ていたことに気付く。

と同時に、門の側に、どうしようもなく見覚えのある顔を見つけてしまった。

あり得ない遭遇。思わず呆気にとられてしまった。

「おや、これはなんとも懐かしき顔よ。」

よもや、この世界にて再び顔を合わせることになるとは」

粋な着物を纏った青年。青いポニーテールが特徴のN O U M I N。ただ、燕を斬るた

めだけに『魔法』の領域に足を踏み入れた剣豪。

「小次郎……?」

「いかにも。」

サーヴァント・アサシン。

ささきこじろう  
佐々木小次郎。

……会えて嬉しいぞ、マスター」

花鳥風月を愛でる空位の剣士に出会った。

## 京都・四

「積もる話はあるだろうが、続きは中で。

……『例のマスター』が来た。……ああ、頼む」

明後日の方向を向いてなにやらブツブツと呟いた後、小次郎はくいつと中に入るよう促してきた。……あれは念話か？

門を抜けると、先に入っていた木乃香たちが巫女さんたちに歓迎されていた。

そのまま荷物を受け取ったりしながら丁寧に屋敷内に案内されていく。

「フジマルリツカ様、ですね？」

……中でのご挨拶ののち、長の下までご案内します」

俺の元にも一人の巫女さんが歩み出てそんなことを告げてきた。

長というと近衛詠春か。

俺に話とは、アルと同じく何か知っているらしい。

俺は頷きを返して、ネギたちの後を追った。

その後、長・近衛詠春からの挨拶と、ネギくんが無事に親書を彼に渡したところで、一行のための宴が催されることになった。

「うわあ、料亭どころの話じゃないわよ、これ！」

「すごい、美味しそうな料理いっぱい！」

宴の席に出された豪華な料理に一行はすっかりはしゃいでいた。一般生徒たちがそれら料理に舌鼓を打つ中、ネギくんや刹那といった魔法関係者に詠春から幾つかの言葉を賜っていた。

それを視界の端に収めていると、俺の元に入るときに会った巫女さんが近付いてきた。

「お待ちせいたしましたリツカ様。長は別室での対談をご所望です」

「わかりました。案内、お願いします」

俺の言葉に巫女さんは頷き、歩き出す。その後を俺はおとなく付いて行った。

宴の会場から少し離れた一室。その障子の前で巫女さんが立ち止まる。

そして向こう側に小声で声をかける。

「詠春様、リツカ様がいらっしやいました」

「ご苦労、入りましたまえ」

中からは詠春の声が返ってくる。

巫女さんはススッと障子を開いて俺を中へと招いた。

「ようこそいらっしやいました。藤丸立華くん、ですね?」

中に静かに座るのは近衛詠春。穏やかな顔で対面の座布団に座るように促す。

俺が腰掛け、巫女さんが障子を閉めたのを確認して詠春は口を開いた。

「改めて自己紹介しましょう。」

私は近衛詠春。関西呪術協会の長であり、かつて『魔術師』と共に戦った『紅い翼』のメンバーです」

魔術師、わざわざその言い方をするということはそういうことなのだろう。

「藤丸立華です。今は麻帆良学園の加護のもと魔獣退治などの仕事をさせてもらってます」

「なるほど、お義父さんの元で働いているのですね。」

「……今回は我々の内輪揉めで迷惑をかけてしまい申し訳無い」

「いえ、お気になさらず。警護が私の任務ですので」

それを知っていたし。知っていてここまで放置したのだ。

「そう言っていただけだとありがたい。

……では、そろそろ『門番の彼』に纏わる話をしましうか」

「……」

紅い翼、魔術師、そしてアルの話から既に大まかな予想はついていますが詳細を知りたい。それに、アサシンのことも。

「彼は私の召喚したサーヴァントです。大戦の終わり、『あの人』が私に渡した召喚符、『呼符』を用いて」

「っ！」

呼符って、それ召喚チケットじゃん。

てつきり召喚方法と詠唱まで事細かに伝えたのかと思つたが。

「魔力に関しては彼は特に燃費が良いそうで、本山の霊地としての地脈。そして私の魔力で現界させています」

確かに小次郎は架空の英霊であり元が無銘の剣士であること、宝具も無いので燃費は比較的が良い。

それにしたって英霊という存在の召喚維持そのものが莫大な魔力を消費するのだが。

「渡す際に彼は言いました、『いづれそれと同じ存在を従える人物が現れる。その際は協力して事に当たって欲しい』と」

まるで予言だ。俺が来ることもそうだが、協力することを確信しているような……。

……いや、そういうことか、『召喚の影響』を考慮していたのか。

随分と用意周到なことだ。

「そして、先ほどの『アサシン』からの報告で貴方がその人物であると判断しました。いかがでしょうか？」

「……仰る通りです。私も英霊を従えるマスター、英霊が何たるかも心得ています」

『その魔術師』が俺の予想する人物なら目的は単純。俺への助力に相違なく、最終目標は『黒幕の排除』だ。

「そうですか……アサシンから貴方のことは聞いています。ここではない世界を救った英雄であると」

英雄ね、それは俺とは違う立華の話だ。俺はただ画面越しにそれを見ていただけ。救ったのは俺ではない。

小次郎が何処まで分かっているのか、それも定かではないが彼の人柄からして詳細を聞き出すのは困難だろう。

「……買いかぶりですよ。俺は単なる一般人、頑張ったのは俺じゃ無くて……」

俺だ、と断言してしまえば楽なのだろう。それが正しい判断だ。

しかし、俺はここまで来て腰が引けてしまった。いや罪悪感というものか。

「ここでそう言えば『本当に彼の功績を汚す』と思った。今までそれとなく嘘を言ってきたが、彼の優しさを、勇気を、活躍を否定することがどうしても耐え難い。

だから、断言ができない。中途半端な男だ。

「そうですね、この言い方は少しいやらしいですね。

世界を救うのは簡単なことじゃない。それくらいはわかるつもりだったのですが」それは俺ではない。

正しく藤丸立華の功績であり彼の力である。

「この話は、やめましょう。

……では今後について。今、貴方が望む助力を私は与えます。

なに、『彼』には私も世話になった身。私にできることならなんなりと申し付けてください」

優しげな瞳で彼は言う。

『その魔術師』とやらはさぞ立派な人物であったのだろう。少し想像し辛いですが、英雄とは得てして多面的なもの。誰かにとっては敵でも、他の誰かにとっては英雄となる。

救われた人数が多い者が英雄となるだけのことだ。

「ありがたいございます。それでは先ず、今私が有している敵の情報から――」

覚えのない功績と、それを隠れ蓑にしている自分への嫌悪感に鋭い痛みを感じながら

俺は詠春との対談に臨んだ。

「……千方の四鬼ですか」

「ええ、未だ確証がないながらも。そしておそらく、アレらはサーヴァントの領域にいます」

エリちゃんが苦戦する相手だ。ただの召喚魔でそうなるとは考えにくい。となればサーヴァント、一番考えられるのは千方がサーヴァントとして召喚されているということだが。

「っ！ ……それは困りましたね。いざとなれば私が出張することも視野に入れておきま

す。……それと、魔神柱、と言いましたか」

「ええ」

魔神柱。俺は確かに見た。そして奴自身も『最後のマスター』と言っていた。そんな呼び方をするということは本人なのだろう。

「確か、あなた方の世界にて世界を燃やしたという……」

「はい。奴らは根こそぎ殲滅したつもりでしたが、どうやったかこうして現れました。すいません。」



……こいつに関しては特に注意してください。ものによりますが、その個体性能はサーヴァント複数体に相当します。本来ならサーヴァント数騎で対処すべき強敵です」「っ!! なんと、そこまでですか。いやはや世界が違うとはいえ『アサシン』レベルを複数必要とするなど」

乳上やカルナのようなトップサーヴァントなら単騎殲滅も可能だろうが、おそらくあの個体も『自我』に目覚めているだろう。

そうなると固有能力を発現させている可能性もある。

もうフェニクスのようなチートは勘弁してもらいたい。

「そして、フェイト、でしたか」

「はい。アレはおそらくですが『例の秘密結社』の残党と思われます」

確証はない。実際に見たわけでもなし。もしかしたら歴史が変わって、この件には絡んでいないかもしれない。

しかし、もう原作どうこうと言っていられる状況でもない。

今後を考えてネギくんにも成長してもらわねばならないが、それで死なせてしまつては元も子もない。

敵性集団の排除にネギくんの成長。難儀だがこの後の歴史を考えればどちらもこなすしかない。

加えて、『最後の詰め』に關しても。

「それは、まさかつ!？」

『『完全なる世界』』。コスモエンテレケイア 大戦期に幹部として猛威を振るつた銀髪の青年と同型の個体と思われ  
「『完全なる世界』』。コスモエンテレケイア 大戦期に幹部として猛威を振るつた銀髪の青年と同型の個体と思われ  
れます」

正確にはナギが倒した1の記憶を受け継ぐ3だが、それは蛇足だろう。プリームム

それに、個体性能は元より、柔軟性を考慮するとプリームムを超えていると推測する。テルティウム  
今回の件で唯一懸念素材となる相手だ。

彼が、一体何の目的で今回の件に絡んでいるのか。

魔術への知識は如何程なのか。

全ては謎のまま、厄介なことこの上ない。

せめて魔神柱と手を組んでいなければよかつたのだが、今日のことを考えるに、手を組んでいるのはほぼ確定。

魔術への知識も受け取っている可能性がある。

対魔力も貫通可能性があり、素体能力も英霊レベルと思われる。現物を見ないとこれ以上は分からないが、魔法世界の神が重宝するようなやつだ、人形の中でも最高クラスの実力者なのは明白となれば戦闘能力は低く見てもエリちゃんと同等、かそれ以上。

「目的は不明です。しかし、危険性は知つての通り。」

警戒は十分にしてください、おそらくここにも仕掛けてきます」

「まさか……いや、あの青年と同型ならばあるいは結果も。」

わかりました。今夜の警戒は万全に。アサシンにも伝えます」

「お願いします。俺も装備を整え徹夜で警備します」

もはやなりふり構ってられない。

魔神柱、一体何の目的でフェイトと組んだのか、そして此度の騒動に首を突っ込んできたのか。

できるならばこの場で仕留めておきたい。放置するなど危険すぎる。

学校にはキアラさんもいるし。出会ってしまったら世界は滅亡一直線である。

「(こちら)お願いします。」

……それと、先ほど述べていた天ヶ崎千草の目的、両面宿儺に関してなんですが」

そう言って詠春が取り出したのは一冊の古びた書物。

「それは？」

「我が近衛家にかつて仕えていた『とある呪術師』に関する書物です」

呪術師？

「私が見立てでは、おそらく『魔術師』の系列に思われます」

「っ!!」

そいつはなんとも……。

しかし、今回の件とどう繋がるのか。

「かつて、両面宿儺はナギが封印し直しました。

その騒動の際に、封印を解き放ったのがこの呪術師です」

ナギが？

京都に来ていたのは知ってるが、そんなこともあったのか。

「私もこの呪術師の家系には詳しくないのですが、なんでも、近衛家に関する『裏の仕事』、その中でも特に『忌まわしい部分』を担当していたようです」

語りながら書物を開く詠春。

しかし中身は達筆過ぎて俺には読めない。

「それゆえに、周りからは特に嫌悪されていたようで。

……情報が抹消されていて定かでないのですが、その呪術師が両面宿儺を解き放った動機は……『家族の復讐』、と思われます」

「……？」

「騒動の前に、彼の家族は『彼らを蔑む者たちに惨殺されました』」

それは、なんというか。

雲行きの怪しい話になってきたな。

「もちろん証拠はありません。私も、配下の者が噂するのを聞いたのみ、一説では『大戦に恨みを持つ者の犯行』とされています。」

その呪術師も、大戦の折には徴兵に反抗する関西の魔法使いを命令とはいえ多数呪殺したようですから」

大戦か。

関西呪術協会はその件で関東の協会に恨みを抱いていたと記憶している。天ヶ崎千草も大戦の強制徴兵で家族を亡くした被害者だ。それゆえに今回の騒動を起こしているのだが。

逆もまた然り、というわけか。

大戦の際の恨みを受ける生贄とも呼べる。

いずれも俺が何かを言うべきことじゃないが。

「呪術師は、両面宿儺の再封印と同時に自決しました。だからもう真実を知る術はない。家も騒動で崩壊しましたからね」

黙祷するように目を伏せた詠春。この話は戦争によって起きる隠れた悲劇を示していた。

その話をわざわざ俺に聞かせた意味は。

「この両面宿儺。ナギが対処した時は『鬼神に酷似した装甲』を有していました。」

……ナギ曰く、アレは制御装置なのだそうです」

「制御？」

鬼神に酷似とは、まあ原作を見て思ったりもしたけど特に言及はなかったし。

いや、そういうことか。

「……つまり、装甲が剥がれればナギの時以上の力を発揮する？」

「おそらく。……この書物は呪術師の残した研究資料、呪術師に関連するものの中で唯一現存する資料です。その内容を鵜呑みにするならば――」

――装甲の剥がれた両面宿儺は『神霊』に匹敵する力を発揮します。

「神霊……詠春さん、その意味、わかって言ってますか？」

「はい。『彼』から聞いたことがあります。」

神霊とは即ち、神。かつてこの世界におられた本物の神のことだと。そして、我々人の時代に移ってからはここではない世界に旅立たれ、そこから世界を見守っているとも。

加えて、現代に神霊の降臨が不可能なことも」

そこまで知っているか。

なら――

「仰る通りです」

確かに両面宿儺は神だ。だが崇り神、異形の邪神とされたまつろわぬ神。今尚信仰のある天照などと比べると格落ちが激しい。

それを、どうやって顕現させるのか。

「……この書物には『西洋より伝え聞いたる“降霊の儀”にて、大神の御霊を再定義する』と書かれています。おそらくこれが両面宿儺を神霊として顕現させる方法と推測しています。

私には何のことか、詳しくは分かりませんが。あなたならば」

「……」

降霊の儀。再定義。

おそらく、おそらくだが降霊の儀とはサーヴァント召喚のことではないだろうか。まあ、型月では初めにシステムを人の使える域にしたのは日本の魔術師だが。

いや、確か御三家の一つ間桐家は外来のマキリ・ゾオルケンの起こしたものだっただけだ。

もし、冬木の聖杯戦争が起きないなら奴は？

だめだ、そもそも魔術師が今どうしているのかが分からない。推測でしかない。ただ、もし。もしマキリがサーヴァントシステムを海外で作ったのだとしたら。

妄想に過ぎない憶測だ。しかし、そうなると再定義という単語も引つかかる。聖杯戦

争に無理やり当てはまるならクラスのことを言っているとは思うのだが。

「まさか、一つのクラスに落とすし込んだ？」

いや、それなら神霊などとは呼ばれない。

第一、原作でエヴァに瞬殺されていた奴が神霊なんて冗談もほどほどにするべきだ。

「……いや、根本から違うのか？」

当たり前だが原作に魔術や神秘や英霊の概念など無かった。

以前にも考えたが、この世界が根本から異なるならば『両面宿儺が文字通りの神』であつてもおかしくない。

いや、そうでなければこれまでの辻褄が合わない。

もしそうなら、神霊をクラスに落とすとしたところで――

「化け物には変わりない、か」

「何か、分かりましたか？」

ブツブツと呟く俺に詠春が心配そうに語りかけてきた。

「ええ、推測に過ぎませんが。」

……神霊を英霊の格に無理やり落として活用、ということでしょう」

それも問題点が多い。第一、神霊は召喚できない。f g oで出てきたのはいずれも依代を介した擬似サーヴァントや、縁深い英霊に無理やり付いてきたどっかのスイーツ女



神くらいなもんだ。

出来たら、という仮定の話でしかない。

「ただ、現状ではなんとも。」

無難に再封印が最適かと思いますが」

「やはりそうですか。できれば後顧の憂いは絶っておきたかったです。……それで神様に暴れられたら困りますしね」

詠春の言も分かる。

これは、想像以上に厄介な事件となりそうだ。

その後も彼と意見交換をした後、時間もいいとのこととで共に風呂に浸かることにした。裸の付き合いというやつだ。

できればエリちゃん……などと一瞬思ったが、今は非常事態、ふざけている場合ではないし気を引き締めてことに当たるべき。

『メカエリちゃん、すまないが今のうちに『本』と『装置』を取ってきてくれないか?』

その途中、念話で装備の回収をお願いする。昼間も活動することを考えて宿においてきってしまったが、こうなるとフル装備でいた方がいいと思っただが……

『いいでしょう。……報酬は、期待しておきますよ?』

などとメカエリチャンは不敵な笑い声を漏らした。

次の瞬間には側から居なくなっていた。霊体化したまま出発したようだ。当たり前か。

「おや、ネギくん」

途中で偶然にもネギくんと遭遇した。ちょうどお風呂に行こうとしていたようで一緒に行くことになった。

「いや、しかし十歳で教師とは。スゴイですね」

「そ、そんなことは」

他愛ない話をしつつ風呂場に入る。

結構広い風呂だ、大浴場とか言ってたしな。

身体を洗って湯船に浸かる。

その際には色々な話をした。

例えば木乃香の魔力が膨大だ、とか。ナギと詠春が友人であることをネギくんに教え

たりと。

千草の件に関しても明日の昼ごろには増援が来るとのことで一応ネギくんを安心させることができた。

……まあ、今夜仕掛けてくるんですがね。

警備に関してはすでに詠春の指示で、今ある戦力でできる限りの防衛戦を敷いてあるとのこと。

俺も詠春も風呂を上がったら警備に出ることになっている。

原作ではフェイトに不覚を取った彼だが事前に情報を与えた今ならばなんとかなるかもしれない。

加えてこちらにはエリちゃんやメカエリチャンもいる。

また、『本』さえ戻れば新たな戦力を加えることだってー

「……召喚か」

召喚の副作用、これまでの症状から大体分かっているが。

厄介なのは『精神操作』だろう。

普段の俺からは考えられない、まるで『彼』のような行動を無意識に取ってしまうことがある。

それだけじゃない。『今も続く世界の不幸を嘆いている』。気持ち悪い感覚だ。俺で

はない誰かが頭の中に入ってくるような、数多の人の声が聞こえてくるような……

「おっと、これはマズイですね」

ふと、詠春の声で我に返った。

耳を済ますとなにやらネギクラスの女子たちの声が聞こえてくる。

「どうやらご婦人方のご案内を間違えたようです、裏手から脱出しましょう」

「は、はい！」

大急ぎで風呂場を出ようとする彼らに俺も続く。

さすがには堂々と露出狂を演じるのはどうかと思うし。うん。

逃走する最中、前を走っていたネギくんが何かに激突する。

よく見てみると――

「あ、明日菜、さん!？」

倒れた拍子に明日菜の胸を揉みしだくネギくんと、その横で気まずそうにする刹那、

そして詠春。

どこのT O L O V E だよと言いたい。

……まあ、不可抗力で明日菜と刹那の裸を見れたのは素直に得したと思う。断然やる

気が出てきた。

「あ……」

それだけなら良かった。しかし、ネギくんと明日菜が硬直している間に他の女子たちが風呂場に入ってきてしまった。

「キヤーー！」

「お父様のえっちー！」

もはや大混乱である。

まさか俺が騒ぎに巻き込まれるとは思わなかったので、夕映が投じた石鹼を躲すことができずにクリーンヒット。

俺の意識は数多の女体、裸体を脳裏に焼き付けたところで飛んでしまった。

「ちつ、どうするのや新入り。あんたが追うな言うから……」

「大丈夫ですよ、任せてください」

同時刻、本山を遠目に眺める集団がいた。

言わずもがな天ヶ崎千草とフエイトである。

二人とも木の太枝に乗りながら会話している。

「いやあ、遅くなり申し訳ありません。なにぶん、『彼』の命令権を借受ける交渉に難儀しまして」

そう言つて新たに現れたのは燕尾服の男。彼も隣の枝に乗つて愉快そうに語りかける。

「……その人は？」

フエイトが目を細めて問いかける。

視線の先にはもう一人の男性が佇んでいる。

「最強の助っ人ですよ。『彼』には『あの門番』を相手してもらいます。いくら貴方でもアレの相手は苦勞するでしょうから」

「頼んだ覚えはないけど……まあいい」

興味がないとばかりに視線を逸らすフエイト。

対して男は柔和な笑みを浮かべたままに千草に話しかける。

「ご安心をお嬢さん。必ずや木乃香嬢を奪つてみせますとも」

「まあ、できるんやったらそれで……っ!!」

疑わしげに男を見た後、不意に、彼の連れてきた人物を見た千草は『そのあまりの覇気に全身を震え上がらせた』。

「……主の命だ。ひとまずは貴様の指示に従おう、ダンタリオン。しかし、主命は絶対。貴様の手駒になるつもりはない故に、そこを履き違えるなよ」

その人物は西洋風の鎧に身を包んでいた。

黒いマントを羽織り、『黒髪黒目』ながらも日本人ばなれした顔をした青年。

その鎧はとろどろヒビが入り、年季を感じる見た目をしている『黒』。

背中には身の丈ほどの大剣を携えている。

——本来の伝承であれば金髪黒眼の美青年と謳われているはずの人物。

しかし、今は鋭い三白眼を燕尾服の男・ダンタリオンへと向けていた。

そして、『かつては義理堅い王』として知られた面影を欠片も残していない。唯一残るのはその誇り高きオーラのみである。

俗にカリスマとされる覇気は千草はもとより、フェイトでさえも僅かながら影響を受けられるほどであった。

「では、王よ。いや、『■■■■』の担い手よ。今宵は存分にその武勇を振るいたまえ」

「言われずとも。あの『剣士』を抑えれば良いのだろうか?」

ガシャン、と地に降り立つ彼の鎧が音を立てる。

彼は不意にフェイトへと目を向ける。その目は何物の価値も認めていないとばかりに冷酷に、しかし澄んでいた。

「小僧、貴様も来るか?」

彼一人に任せようとするダンタリオンにフェイトが不満げな様子を僅かに見せていたのを、彼は見抜いていた。それゆえの問い。

「……加勢が必要なら、構わない」

「ふん、そういうことにおこう。」

……意思なき人形、貴様は何を見据え、何を得るのか。その末路を見定めるのも我が賜りし命の一つである」

言うだけ言って去っていく彼にフェイトは明らかに不満そうな顔を見せた。

それを見兼ねてダンタリオンが声をかける。

「くれぐれも、機嫌を損ねないように。比較的寛容な方ですが、彼も英雄、その矜持を汚せば貴方とてただでは済まないでしょう」

「……厄介な奴を連れてきたものだね」

「お節介でしたかな?」



「ご安心を、あくまで露払い、保険です。」

かの英雄の卵の相手は予定通り貴方に」

「それも頼んでいない……これ以上くだらない話をつづけるなら僕は行くよ」

そう言つてさつさと木から降りてしまうフェイトをダンタリオンはため息混じりに眺めていた。

「では、千草さん。あなたは『儀式』の準備を。」

……『供物』の用意は我々におまかせください」

「言われんでも……『例のおっさん』にも話しとくわ」

「ええ、お願いします。……さて、長い夜になりそうですねえ」

自分を差し置いて仕切っているダンタリオンに不満げな千草だったがやがて計画を成すべく祭壇へと向かった。

全ての関係者が去った後もダンタリオンは屋敷を見つめていた。

「……あなたが出した答え。その意味、その価値。未だ私には分からない。生きるとは、命とは、人類とは。」

だから、見定めさせてもらいます。この世界にて」

## 京都・五

夜の深まった頃、近衛家の屋敷を抜け、一人の少女が山門へと足を運んでいた。

「む……おや、このような時間に外を出歩くとは。感心せんな」

ゆつくりと歩み寄るその少女に気づいた山門の守護者、佐々木小次郎はあくまで飄々とした態度で声をかけた。

「お久しぶりです……昼間は、その、ちゃんとした挨拶を出来ずに。申し訳ありません」  
気まずそうに頭を下げる少女・桜咲刹那に小次郎は軽く笑い飛ばす。

「構わんよ、このような棒振りに堅苦しい挨拶など不要だ」

棒振りなどと、謙遜も甚だしい。と彼女は思った。

その剣技を直に受けたことがあるからこそ分かる、彼はすでに達人の域を超え、極限られた者しか到達できぬ領域に座しているのだと。

「しかし、お主が夜分にこうして外を出歩くなど。……昔は夜の厠にも付いていく必要があったのに成長したものよなあ」

「なっ!? いつの話してるんですか!? もう!」

頬を赤らめ、ポカポカと涙目で叩いてくる刹那に小次郎は笑うばかりであった。

「ははは……いたつ、ちよ、お主……『氣』を纏つてないか？」  
「……」

無言で叩く刹那、その威力は段々と地味に強くなっている。

サーヴァントとはいえ、小次郎の耐久は最低ランクのE。ずつと気を纏った拳で殴られれば地味に痛い。

やがて、ピタリと止まった刹那を、小次郎は痛む肩を撫りながら見つめる。

「……学園に行つて、私はまだお嬢様を守ることだけを考えてました」

ポツポツと語り出した刹那に小次郎も優しい目で黙つて聞く。

「でも、この修学旅行でお嬢様とまた触れ合う機会を得て。少しだけ、分かったことがあるんです」

刹那の顔はあくまで穏やかであった。

「私、お嬢様と一緒にいたい。ただ影から守るだけじゃなくて、一緒に触れ合っていたいんだって」

まだ迷いはある。だけど、ここ数日の交流で刹那も木乃香に対する愛情めいた友情に、幼い頃のような仲良しな関係に戻りたいと思ひ始めていた。

「だけど、まだ私は未熟なまま。剣も、心も。」

……だから、また稽古をつけてくれませんか？

以前は半ば強引に仕合に誘ってしまつたけど、今回は純粹に貴方の指導を受けたい。だめ、でしょうか？」

最後に少し自信なさげに語る刹那に、小次郎もフツと柔らかな笑みをこぼした。

「やはり子どもの成長は早いな。ここ数年でこつとも移り変わるとは。

いや、嬉しいことだよ。其方の成長を見てきた者として。

……まあ、拙者は主と違い親ですらないのだがな」

それでも、幼少からその成長を陰ながら見守つてきた小次郎としては感慨深いものがあつた。

本来、英霊とはそれほど長い期間を現世で過ごすことはない。聖杯戦争はもとより、世界を救うために呼ばれようとも、十年以上の時を過ごすことなど到底あり得ない。

しかし、此度の現界にあつては一人の幼な子が自立を志すまでの長い期間を過ごすてきた。

成長のない英霊でも、それだけ『生きれば』親心のようなものが芽生えても不思議ではない。

「貴方は……小さい時から私の憧れですよ。

まだ、右も左も分からない頃から私は貴方の話を聞いてきた。どれも荒唐無稽な話だと今は分かりますが、それでも貴方のお話は楽しいものばかりでしたよ」

「ははは、拙者の昔話などでそこまで言われるとはな。

それくらいならいつでも聞かせよう」

「はい、また聞きたいです。……あなたも、お嬢様や長と同じく『余所者』で『得体の知れない』私を受け入れてくれた人だから」

幼い頃から彼女は聡かった。あるいは周囲の人間の心の機微に敏感であつたとも言える。

だからこそ、家中での自らの扱い、陰口が彼女の心に暗い影を落としていたのは確かだつた。

そんな中で最初から偏見なく接してくれた人の一人が彼だつた。

「……以前より、断然強くなつた。

技量ではなく、その心がな」

等しく斬り伏せる刃であつた彼女は確かに強いのだろう。今よりも。しかし、心無くしては絶対に勝てない相手はいる。

つまり、壁に当たつていた彼女はそれを乗り越える道を発見したということ。

技を鍛え、心も鍛えれば彼女とていずれば彼と同じ領域に立てるかもしれない。あくまで可能性の話だが、確かに彼女はその道に降り立つたのだ。

今は弱い。刃と人の間で揺れる彼女はこれまでで一番弱い時期なのだろうと小次郎

は思う。ただ、それを超えた先は以前よりも遥かに強い剣士になることも同時に理解していた。

「……いいだろう。新たな道を見つけし若き剣士よ。拙者の剣で良ければ存分に学び、得てほしい」

小次郎はすでに到達した剣士である。その先には何もなく、ただ『空』のみが広がる境地に彼は立つ。

彼を超えられる剣士は『零に至った剣豪』のみである。

だからこそ、未だ未知数の可能性を秘めた刹那が今後どう成長するのか。あるいは自らを超える新たな剣士となることをも彼は望んでいた。

「はい。これから、出来ればずっと私をー」

強い憧れの眼を向ける刹那に小次郎も照れ臭そうに目を伏せー

「っ!!」

ー背後に迫った『異常』に、即座に気付いた。

「……あの、どうされました？」

突然、後ろを向いて固まった彼に、刹那は不思議そうに問いかける。

その視線の先には夜の闇しかない。

「……急ぎ、我が主の元に向かえ」

しかし只ならぬ声色でそう告げる彼に、刹那も『何か』が迫っていることに気づく。そして、その頃によく、彼の見つめる先の『異常』を認識した。

ガシャン、ガシャン、と。夜道を進み行く鎧の音がする。

「……東洋の剣士。奴の命に従うのは不服だが、これも主命なれば」

やがて、闇の中から一人の男が現れる。

「っ!!」

だが、その闘気、覇気、存在感。どれを取ってもこの現代、この地上にて味わうことなどあり得ない『異常』な『モノ』を醸し出していた。

例えば『魔力』。男の内部の『煮え滾るナニカ』を中心に発せられるソレはおよそ人智を超えたもの。

『神』と人が呼び畏れたモノ。

『勝てない』。そう自然と、しかし確信を持って述べるほどの圧倒的な力を目の前の『ヒト』は放っていた。

それは小次郎として例外ではなかった。

対人戦、特に剣と剣の戦いにおいて遅れを取るなどあり得ない技量を持つ彼ではあったが、こと乱戦、遠距離からの狙撃に関してはあまり得意とも言えない。

あくまで『ただの人』であつた彼は魔力に乏しく、またその身体も人のものではない。

それでも守勢であれば一定の成果をあげることの出来る彼をして、この人物は強大すぎると感じていた。

かつては理性を失いし大英雄をも退けた彼が、明確に守り切る手を見出せなかつた。

「……っー」

守らねば、と無意識に抜刀した刹那は、しかしその決定的な力の差に戦う前から心を折られていた。

それを見ずして感じ取りながら小次郎は再度撤退を促す。

「逃げろ、三度目は言わせるな。お主は急ぎ主へこのことをー」

「それは困る。ゆえに殺す」

膨大な殺意が明確に放たれると共に、男は刹那へと突撃していた。

その速さ、小次郎をして間一髪と言えるもので、寸でのところで小次郎はその凶刃から刹那を守っていた。

大剣と細く長い彼の刀。このままギリギリと鏝迫り合いをすれば幾ばくかも保たず



にへし折られてしまう。

「ぐっ……拙者とて、負ける気は毛頭ない!!」

圧倒的な脅威を前にして、小次郎はあくまで平静を保つ。それは明鏡止水の境地をスキルにまで昇華させた彼の類稀なる技量ゆえ。

ギャリツ、と大剣に刃を這わせ、搦めとるように弾き返す。

「ほう……やるな劍士よ」

筋力で遥かに劣る相手に容易く返されたことに、しかし男は素直に感嘆の意を示した。あくまで彼も武人。

かつては『仁義の王』として国を治め、その死すらも超越した『亡霊の主人の一人』。今は『神の要素』が紛れ込んでいるが、その心に根付く武の誇りは不変のものであった。

「……行けっ! 刹那っ!!」

「っ!!」

似合わぬ大声を出した小次郎に、刹那はようやく砕けた足腰を奮い立たせて、駆け出した。

その背も見ることなく、小次郎は目の前の脅威に慥然とした態度で相對する。

「只人が成り代わっただけと聞いていたが。存外、その気概は英雄に値するものよう

だ。

認めよう、貴様は確かに英雄である」

対して、鎧の男も真に褒め称えるように告げた。

「ハッ……本場の英霊と仕合うことは数あつたが、『神となつた英霊』と刃を交えるのは拙者にとつても得難い経験よ」

小次郎も、男の『本質』を理解しながら怯むことなくその勇壮に立ち向かつた。

ランクにしてA+。単純な数値の上でも最高位の俊敏を持つ小次郎の刃を、男はあくまで大剣を持ち直すことで全て受け切る。

「なかなかどうして、攻め難い技を用いるな。相討ち覚悟の太刀筋とは」

その最中にも相手を讃えることを男はやめない。

純粹に彼は感服していたのだ。小次郎の圧倒的な武技に。

剣の技量だけで言えば、自分など児戯に等しいほどにこの男は超越した剣の猛者なのだ。

「ゆえに、残念だ」

——いくら技量を持つとも、『■血の鎧』を超える力無くしてこの王を仕留めることはできないのだから。

「よおし、感度良好」

風呂を出てしばらく。

戻ってきたメカエリチャンに整備を強請られたりしたが、なんとか『通信機』の設置を終える。

「同期開始……」

メカエリチャンも通信機との同期を始めている。

これで無事に通信が繋がれば、この街の中ならばメカエリチャンを子機として学園側に連絡が取れる。

夜もだいぶ更けてきたが、そろそろ敵も攻めてくるはず。

俺は通信機の呼び出し音を静かに聞いていた。

「っ!! 山門に魔力反応!」

マスター！」

しかし、突如として敵を感知したメカエリチャンに、俺も一瞬ドキツとした。

「……誰が攻めてきた？」

問いながら、メカエリチャンの持ってきた『余剰魔力炉』を礼装の背中に取り付け、『本』を腰のポシェットに入れる。すぐに出れるように準備は素早く整えた。

もう攻めてくるとは、願わくばダ・ヴィンチちゃんとの通信が繋がってからにして欲しかったが。

「データにない反応……しかし、この魔力量は」

新手か。またポコポコと新しい奴出して来やがって。もしかして俺が原作知識持っているの知ってるのかと問いたい。

「とにかく膨大ってことね。周囲には？」

「山門のアサシン・佐々木小次郎が交戦中と思われます」

なるほど、ならさっさと加勢に行こう。

メカエリチャンが動揺するほどの敵となれば小次郎一人に任せるとはできない。

「よし行くぞ」

告げて部屋から飛び出す。礼装の感知機能も遅れて反応をキャッチしている。……なるほど、確かに馬鹿みたいにどデカイ魔力が小次郎の近くにいる。デカすぎて最大値

が測れない、一体どういうこと？

『エリちゃん！ 敵だ、そちらの状況は!?!』

走りながら念話を発動させる。しかし、待てども返事は来ない。  
と。

『んにゃ？ こ、子イヌ……?』

やがて眠そうな声が返ってきた。

可愛い、けど今は急いで合流したい。

『山門に敵だ、急ぎ向かってくれ、そこで合流しよう!』

『デジマ?! わ、分かったわ!』

……おっとと』

何かに躓く音がする。ちよつと心配だ。

だが、そう時間はかからないだろうと気にしないことにした。

すでに、俺も山門に到達している。

「っ!! なん、だ。ありやあ……?」

視線の先、ようやく目にしたことで、今回の敵の『強大さ』に気付いた。

加えて、またも『見覚えのない英霊』であることも。

同じく立ち止まったメカエリチャンが息を飲んだ。

「つ、計測、完了。……マスター」

魔神柱の時のように、メカエリチャンはその先の言葉を洩る。

今は緊急事態、どんな情報だろうと伝達が最優先だろうに。

「なんだ、早く報告をー」

「アレの霊基は英霊を逸脱しています。」

……該当項目、合致するカテゴリを発見。

神霊です」

告げられたその言葉に、俺は言葉を失った。

「神、霊……？」

なんとか絞り出した言葉も、実感を伴っていない。

しかし改めて『敵』を視認し、メカエリチャンから送られたデータをもとに魔力を測

定することで納得する。

「魔力量、規定オーバー。……類似する存在が『獅子王』などと」

送られたデータにある、同率の存在は『獅子王』。

魔力そのものは獅子王に及ばないものの、存在の核、霊基の形は紛れもなく『神霊』の

それであった。

あるいは、まだ力を隠した状態かもしれない。

「っ！ 何れにせよ、小次郎が耐えているうちにどうにかするしかない！」

彼が倒れれば、メカエリチャンとエリちゃんて対処することになる。無茶だろう。魔力量では圧倒的に劣っている。

現状でも小次郎を加えているのみで、魔力量自体の総数は劣るが一人いるのといわないとで違うくらいは分かる。

いざとなれば令呪だつて。

「ガンド!!」

俺は強化してチャージ時間の減ったガンドを敵に放った。

狙いは上々、今は小次郎との鏝迫り合いになっっているから。

このガンド。f g oで当たりまくっていただけはあり速度はある。サーヴァント並みの速度で迫る弾丸に、敵も対処に遅れる。

「っ!! 弾いたか！」

しかし、到達する寸前に見えない壁のようなものに阻まれ霧散するガンド。

そして大剣を操るとなればこいつはセイバーだろう。

三騎士とはまた厄介な。

毛ほども気にしていないことから対魔力はA相当と見る。

そうになると、魔法使いにとっては天敵そのもの。唯一、神鳴流の詠春が頼みの綱だ

がー

「っ、そういうことか!」

そこまで考えて敵の狙いを今更悟る。

なぜ、正面から攻めてきたのか。

なぜ、知らない敵なのか。

残るフェイトは今どこにいるのか。

「囧だ、くそー!」

急ぎ念話を繋ぎ直す。

「マスター!」

今は目の前の敵に集中を!!

援護、行きますよ!?!」

メカエリチャンの声に、小次郎がすでにボロボロであることに気がつく。全くもつて、俺は三下なマスターである。

「っ、援護だ!! どちらにせよあいつの方がやばい!!

最初から全力でぶっ放せ!!」

フェイトはまだ非殺生のセーフティがある。

ならば殺されることはないだろう。



それよりも、この『神霊に匹敵する』敵の方が危険だ。

余剰魔力炉もフルで運用して何としても倒す。

「了解、スカートフレア最大展開！」

宣言と共に彼女のスカートから大量のミサイルが放出される。

それに合わせて、彼女も突撃しながら指のマシンガンをぶっ放す。

「どきなきい、アサシン!!」

「っー！」

彼女の声に、小次郎も限界まで敵を引きつけてから離脱。

「むっ!?!」

回避の遅れた敵をミサイルの爆発が覆う。

凄まじい爆音と煙を出しているが、メカエリチャンは尚もマシンガンを撃ち続け、目からの光線、尻尾からの電撃と口から炎を吐いてミサイル爆心地に猛攻を加えている。

「っ、『鋼鉄<sup>プレストゼロ・エリシエーベト</sup>天空魔嬢』!!」

そしておまけとばかりに、最大圧縮のドラゴンブレス、即ちメカエリチャンの必殺宝具をぶちかました。

レーザーみたいな超音波の光線は爆心地に直撃するとともに、さらなる爆発を齎した。

もはや、山門はおろか、反対側の屋敷の縁側まで爆風で吹き飛ばすほどの威力。俺は礼装で肉体を強化してなんとか踏みとどまった。

「はあ……はあ……！」

やり過ぎました。残留魔力により敵の感知は不能

やり過ぎとは、言い難い。神霊に値する敵ならばこれくらいはやって当然だ。

煙が凄まじいが、中から何かが出てくる気配はない。

呆気ないが終わったのか？

「いや、見事な判断だメカエリチャン。あと、すまない。俺の判断がもう少し早ければ——」

「っ!! マスター!!」

突然、煙にポツカリと穴が空いた。

気づいた時には目の前まで迫る分厚い刃。

「え……」

視界には、刺突の構えを見せた鎧の男の姿が明確に捉えられた。

「終わりだ」

短い呟きとともに駆り出される神速の突き。抗うだけの力を俺は持たない。ただ、明確に、これが俺の終わりの姿だと理解してしまった。

「っー！」

「ーだ、俺の刃が到達する僅かな隙に、その間に彼女が入り込んだ。グシヤリ、と聞き慣れない、聞きたくない音が耳に響く。

「ぐっ、あああああ!!!」

雄叫びをあげながら腹のハッチを開き、残っていた魔力で『鋼鉄天空魔嬢』を撃ち放つ彼女。

その左胸には深々と大剣が突き刺さっている。

「……！」

対して、鎧の男はドラゴンブレスの直撃を受けて後方に飛ばされながらも大したダメージを負っていなかった。

着地と共に、煙をあげる鎧を一瞥しながらも表情すら崩さない。

「……予想以上の対処の速さだ。よもや人形ごときが想定を上回るとはな」

大した感情も込めずに吐き出される男の言葉に激しい怒りを覚える。だがそれ以上に、目の前で膝をついた彼女に俺は動揺していた。

「メカエリチャン!!」

肩を抱いて呼びかける。すぐさま、礼装の霊体復元機能で回復処置を施す。

「回復など、後にしなさい……逃げ、て。」

アレは、倒せる相手じゃ、ない！」

バチバチとスパークを零しながら必死に言葉を紡ぐ彼女を、当然ながら置いていくことなどできない。

俺は必死に、礼装に魔力を込め続ける。

「なにを、しているの!？」

早く、逃げて!!」

「置いていけるかよ……俺がなんのために生きてるのか、知ってるだろ！」

全ては彼女たちのためだ。

命も、魔力も、身体も、心も。

俺が呼び出してしまったことに対する義務だけじゃなく、俺はエリちゃんが好きだからこそ、全てを彼女に捧げる。

「……哀れな人間よ。聞いていたよりも、よほど矮小で脆弱だ。ダンタリオンめ、謀ったか？」

男の眩きを受け止めつつも、もはや眼中にはエリちゃんしか映っていない。

「……ワタシ、ハ。アルターエゴ……あなタの知ル、エリザベートで、ハ……」

思ったよりも損傷が激しい。発声機能まで阻害し始めている。核を傷つけられたのか？

「お前も、エリザだ。いや、メカエリチャンという俺の大切な人だ」

たとえ核が傷つこうと、俺には令呪がある。

余剰魔力炉に溜まった全てを使えば核くらいー

「仮令呪・起動。『靈基復元』!!」

迷うことなく炉心を起動させて、復元機能を発動する。

ギュルギュルと身体を流れる『誰かの魔力』『世界の魔力』が身体組織を傷つけていくが、痛みなどいくらでも我慢できる。

「ヤめ、なさい！ それは、奥の手の……!」

奥の手に取っただけでメカエリチャンを失っては元も子もない。いいから黙って治療を受けろ。

「すまん、小次郎……奴の相手を」

動けない俺たちが変わり、俺は小次郎に抑えを頼む。

すでにその身体はボロボロだ。だけど頼む。

俺には力がない、何も無い。だからこそ頼むことしかできない、エリちゃんを守るために全てを犠牲にすることしかできない。

「……お主は治療に集中しておけ。」

なに、技量では拙者の方が数段上よ」

このような状況でも、重傷に等しい傷を受けながらも小次郎は笑っている。平静を保っている。

俺にはない、正しく英雄のみが持つ気概だ。

「ふん……幾らか期待はずれでもあったが、『貴殿』のみは予想を超えている。受けて立つぞ、無銘の劍聖よ」

あくまで余裕を崩さず、警戒も解かず男は大剣を構え、満身創痕の小次郎に向かっていく。

嵐のような戦い、激しい剣戟が延々と続き、その度に小次郎はその身に傷を増やしていく。

技量は圧倒している、しかし地力が違いすぎた。

この男、セイバーと目される英霊は自前の魔力だけで技量を覆している。例えるならば、怪獣と蟻。いくら技があっても乗り換えられない壁というものが存在した。

「まだか、復元はまだ終わらないのか!!」

対して俺も、未だ衰弱するメカエリチャンの姿に焦りを感じていた。なんでもいい、早く、彼女を助けてくれと礼装に魔力を込め続ける。

……確か、これら機能は俺に注がれる『世界の魔力』を変換していると言っていた、同時に変換にコストがかかっていると。

ならば直に与えれば。

「つ、マスター！ 何を、しているの!？」

「騒ぐなメカエリ。大丈夫、絶対に助ける」

ビシビシ、と身体の組織が壊れる感覚がある。痛い。

身体中が鋭い痛みに襲われている。

だが、耐えられる。

「ほら、傷も塞がってきた!」

先ほどまでは雀の涙ほどの効力しかなかった復元機能が、今では急速に速まり、あつという間に傷を塞ぐに至った。

「そ、そんな……あなた、どれだけの魔力をつ!？」

叫んだ拍子に、どこかが軋んだ音がしてすぐに俯くメカエリ。

「大丈夫、助ける」

身体のあちこちが悲鳴を上げている。

だがやめない。未だ核の復元が終わっていないことは礼装から送られるデータで把握している。

それを治すまで幾らでも魔力を流し続ける。

「……どうやら、対象の回収に成功したようだ」

そんな時、突然、セイバーは剣を下ろした。

対する小次郎はその隙を突くほどの体力を残しておらず、刀を持ったまま静観する。

「はあ……はあ……！」

息は荒げていても、その心は静寂のまま。冷静に敵の動きを警戒していた。

「任務は果たした。見事だった、無銘の剣聖。我が矛を受けてここまで耐えるなど『我が戦友』以来よ」

そう言つて背中中のホルスターに大剣を収めると、セイバーは何事もなかったようにその場を去っていく。

だが、この場にそれを追える余裕のあるものはいない。

誰一人。

「マス、ター……」

やがて、機能の回復してきたメカエリチャンが俺に手を伸ばしてきた。

咄嗟にその手を取る。

「ああ、大丈夫。安心して」

たった一撃で、彼女のボディはボロボロにされていた。主に左半身を中心に損傷が激しい。

こう見えて彼女の耐久はAである。当たりどころが悪かったはいえ、あまりにも重い



一撃。これがあと数cmズレていれば……

「子イヌっ!!」

そこへ、屋敷の奥の方からエリちゃんが駆け寄ってきた。

その身体も幾ばくかの傷が見える。

駆け寄るなりエリちゃんは涙ながらに告げる。

「ごめんなさい、私、木乃香を……」

どうやら木乃香は結局攫われてしまったようだ。

彼女の後からはネギくん、明日菜、刹那も向かってきた。

……詠春はダメだったか。

「っ、小次郎さん!!」

と、刹那は小次郎を見るなり血相を変えて彼に駆け寄った。

「おお……無事だったか。いや、なにより……」

刹那を見て、ホツとしたような顔を見せた小次郎は力が抜けたようにその場に膝をついた。

ボタボタと数多の傷口から鮮血が滴り落ちる。

「あ、あ……そんな、お嬢様だけじゃなくて、貴方まで」

激しく動揺する刹那に、しかし小次郎は強い意志の籠った目を向けた。

「拙者は『英霊』、この程度は死なぬ。それよりもお主はまだ為すべきことがあるだろう？」

「で、でも……！」

「長も、やられてしまつて……貴方まで」

やはり詠春は敗れたか。いや、仕方あるまい。ブランクがあるのもそうだが敵はこの世界でも最強格のフェイト。今後の歴史でも太陽系最強とか称されはじめる奴だ。

「お主は託されたはずだ。木乃香を、この先の戦いを」

「む、無茶です。……私など、貴方がたの足元にも——」

「無茶でも、通すのが義理であり意思であり、心。お主が決めた道だ」

「っ——」

悲壮な顔を浮かべる刹那を見て思う。どうにも、彼女は正史よりも心が脆いのではないかと。

「たとえ、不可能でも、その志が……ぐっ！」

呻き、血を吐き出す小次郎。

もはや彼は限界だ。

当たり前だ、彼はすでにその身体を何箇所も深く斬り裂かれている。すぐに治療しなければ、消滅すらあり得るだろう。

「小次郎さん!!」

「聞け。お前の道が、真にお前が進むと決めた道なら。」

諦めるな。折れようが潰されようが、その道の先を見たくてこれまでの自分から変わろうと思つたのだらう?」

なら、ここで倒れるな。ここでそれすら辞めれば、これまでのお前すら無意味となる」  
「つ……………うう……………わ、わたし」

泣きながら愛刀を握りしめる刹那。

その姿に、何かを感じたのか小次郎は優しい顔で彼女の頭を撫でた。

「……………拙者が、人であれば。あるいは妻を娶っていたなら。」

このような気持ちに、なれたのかもしれない」

やがて、その手すらするりと地に落ちて、小次郎は力無くそのまま倒れ伏した。

「つ……………!」

今にも泣き崩れてしまいそうな彼女を見兼ねたのもあるが、メカエリちゃんの治療も殆ど終わったところ。

俺は小次郎の身体に手を置き、礼装を起動した。

「な、なにを!?!」

「慌てるな。俺が治療する。」

だから行け、俺も後に続く」

もはや余剰魔力はない。が、小次郎ほどなら治せる。直に注げば数分で治るはず。幸いにもその核は傷つけられていないのだから。

「マスター!!」

その手を掴んだのはメカエリチャンだった。

「これ以上、本当につ!!」

「分かってる。だが現状、それしか手はない」

他の人が来ないところを見るに、全員石化してるのだろう。

なら、今この場で治せるのは俺しかない。

「メカエリチャンはこの場に残ってくれ。」

敵が引き上げたのを見るに、もうここには用がないのだろう。たぶん安全だ」

これから敵の本拠地に攻め込むよりも圧倒的に。

「つ!!」

しかし、次の瞬間には俺の頬はエリちゃんのビンタを食らっていた。

「ぐおっ!?!」

遅れて、メカエリチャンからもグーで殴られる。加減してくれてるのだろうがサー

ヴァントの拳はやはり重い。

しかしそんな考えは彼女らの顔を見て吹き飛んだ。

「バカ！ 子イヌつてばほんとうにバカよ!!」

……私だつて、貴方の傷つくところは見たくない、見たくないの!」

「……オリジナルと意見が被るのは不服ですが。」

同じく。マスターたる貴方が私たちより傷つくなど言語道断です」

泣き腫らすエリちゃんと、怒りに震えるメカエリチャン。

「……ははっ、女子を泣かせてまで拙者も生きたくはない」

そして、意識を失ったはずの小次郎ですら起き上がってきた。

待て、お前の治療は終わつてない。

「拙者ならば心配無用。……お主なら知つていよう、ただ一度の勝負のために主を無くしても現界し続けた拙者を」

「っ!? お前、なんで、それを……?」

「なに、見れば分かる。」

さ、続きは帰つたらからにしよう。

今は、お主も為すべきを成せ」

強い瞳、彼はここで出会つてからずっと諦めることをしていなかった。無謀な戦いで、絶望的な局面でも。

これが英雄。

マスターが従える存在なのだと思った。

「……わかった。」

俺も、藤丸立華として。役目を果たそう」

そうだ。この世界では俺が藤丸立華。

現状では唯一、複数のサーヴァントを召喚できる存在。

俺がやらねば、両面宿儺は蘇り、きっと正史よりも悲惨な事態になるだろう。

それだけは止めねばならない。

今後のためにも、エリちゃんのためにも。

やれるのは俺。

ならばやるしかない。

「……お主も、厄介な性格をしているな」

俺を見て、小次郎は不意に苦笑した。

理由はわからなかった。

「刹那、気を迎れるんだよな？」

頼む」

俺は、すでに決意を固めていた刹那に声をかける。

「いけます。奴らの足取りは克明に」

はつきりと答えた刹那に頷きを返す。

「よし、なら行こう。エリちゃん、付いてきてくれるか?」

「当たり前でしょ。……子イヌ、私頑張るから。だから、いっぱい頼ってね」

すつと俺に腕を絡めた彼女に、一瞬二度見してしまう。

そんな、自然にやるなよ。心臓に悪い。

「私も、ですよね?」

反対側の腕はメカエリチャンがギリギリと引つ張つてきた。千切れちゃうから、取れちゃうから。

「うん。行こう。」

エリちゃんたちがいるなら心強い」

確かに技量や力量は足りないかもしれないけど、でも、彼女たちが信頼を向けてくれるから俺も前に進める。

というか、両手に華状態でテンションが上がりまくってる。

神霊がなんぼのもんじゃない!!

軽く捻つたるわあ!

「ネギくん、きみたちはお嬢様の救出最優先。」

絶対に無理な戦いはダメだよ？」

敵はサーヴァント。今の彼らには荷が重すぎる。

「はい、木乃香さんは絶対に助けてみせます！」

ネギくんはすでに強い意志で立っていた。

彼は折れても進む意思を、運命を持っている、まるで『錬鉄の弓兵』のような。

「私も、やられっぱなしはいやだし」

ハマノツルギを肩に背負い、明日菜も戦意はあるようだ。そのツルギがどれだけ効くのか分からないが、魔法は彼女に任せて大丈夫だろう。

「敵はすでに森の奥深くまで到達しています」

刹那の言葉に俺は頷く。

「ああ、マスター。伝え忘れていたが、かの剣豪も動いている。戦力としてはこれ以上ない助っ人ではないか？」

にやりと笑う小次郎。

気づいていたのか、彼女がいることに。或いは『宿命』の関係にあるが故の勘なのか。

いや、彼の発言で武蔵がああ武蔵であると確信した。

「ああ、頼もし過ぎる。」

……あとは任せろ、小次郎」



「うむ、あとは任せる。……拙者も少し休憩に入るとしよう」

そう言つて腰を下ろす小次郎。そのまま消滅とかやめてくれよ？

「行きましょう」

刹那の宣言と共に、俺たちは彼女の先導のもとで敵の追跡を開始した。

## 京都・六

森を駆ける。

刹那を先頭にして、彼女が追う気を頼りに森を進んでいく。

その間に彼女らに近況、つまり他のクラスメイトや詠春のことを詳しく聞いた。

他のクラスメイトは石化。殺されていないようでホッとした。石化なら木乃香のアーティファクトを使えば治せる。

そして詠春。彼はフェイト相手に幾らか善戦したようだが木乃香を餌に使われ隙を見せてしまい不意を突かれて石化。

エリちゃんが到着した時には木乃香は攫われており、その際の戦闘でフェイトの打撃を幾らか受けたとのことである。

結構ピンピンしてるけど、エリちゃんの耐久はあまり高くない。だからこそ無茶はしないでもらいたいが。

そうこうしていると、森の中でも拓けた場所に出た。

立ち止まる刹那に応じて、礼装に反応のあった場所に目を向けた。

「……また、あんたらか。なんやら増えとるし」

川の中程にある大岩の上に乗る天ヶ崎千草。後ろには彼女の式神たる大猿が木乃香を抱えて佇む。

その隣にはフェイト、そして魔神柱。

「これはこれは。セイバーの攻勢を耐え抜くとは、想像以上にやりますね」  
仰々しく両手を広げながら語る魔神柱。

偽装であろう金髪イケメンスタイルが思ったよりイケメンで腹立つ。

「お嬢様は返してもらおう、何人たりとて私たちの邪魔はさせん！」

小次郎と会話してから生き生きとしている刹那。

その背はもはや中学生とは思えないほどの覇気に満ちていた。

「ふむ？ あなたは、確かアサシンと懇意にしていた……」

「桜咲刹那や。取るに足らんガキに過ぎひん、ここで呆気なく終わってもらた方がええやろ」

不思議そうに首をかしげる魔神柱に、千草は興味なさそうに返して、懐からお札を取り出す。

それをピツと木乃香に貼り付け、短く詠唱した。

「貴様っ！」

激昂した刹那だが、しかし千草の周囲に現れた召喚陣に足を止めた。  
「あんたらこの鬼どもと遊んどき」

そう言つて去る千草を反射的に追おうとする刹那たちに、召喚された鬼たちが立ち塞がった。

初手から数十体、今もどんどんと召喚されていく。

さすがにその数を見て、刹那たちもたじろいだ。

「ちよつとちよつと、こんなのアリなのー!？」

「か、軽く百体はいる……」

中でも、溢れる魑魅魍魎を初めて見た明日菜は涙目で叫んでいた。

ネギくんも冷静に敵を見て、その数の多さに少し及び腰になっていた。

「くつ、こんなことで!!」

その中で自らを奮い立たせ、溢れる鬼の群れに向かおうとする刹那。その肩に手を置き制したのはエリちゃんだった。

「エリザベートさん……?」

不審がる刹那をよそにエリちゃんは久々の大舞台にウズウズしていた。それを見越して俺は彼女に声をかける。

「時間がない。宝具の開帳を許可する」

その声に、エリちゃんは素早く振り向く。

「私の歌声、聞きたいのねえ!？」

若干、声が裏返ってるのは嬉しいからだろう。

俺も久々で嬉しい。

「リツカ?」

俺に問い掛ける明日菜に、「任せろ」と応える。

エリちゃんは既に鬼の群れの方へ、一番、目立つ場所に歩いていた。

「ネギくん、耳栓みたいな魔法、ない?」

「へ?」

不意の問い掛けにネギくんも素っ頓狂な声をあげた。しかし今は大事な問いだ。

「あ、ありますけど……初歩の初歩ですが」

「なら、明日菜ちゃんと刹那さんに掛けてやってくれ。たぶん、生で聞くよりはマシだと思っから。もちろん、君もね」

その言葉に、何か気づいたのか明日菜と刹那は顔をサアアと青くしていた。

「まさか、まさか……!?!」

「リツカさん……!?!」

何か、助命を懇願するような仕草を見せる彼女たちだが、俺には見えない。見えな

いったら見えない。

「ネギくん、早く」

「は、はい！」

呪文を唱えて魔法を発動させるネギくん。

明日菜たちはすでに必死に耳を塞いで震えていた。

すまん、時間がないんだ。

「なんやなんや、ガキンチョの中からえらいべっぴんが出てきたぞ？」

「血迷ったか？」

一人で前へと歩みでたエリちゃんに、鬼たちは嘲笑を漏らしたり訝しんだりしていた。そんなこととしてられるのも今のうちだよ。

「ああ、こんな大勢で歌を聴いてくれるなんて……たとえ敵でも嬉しいわ!!」

そう言つて彼女は手に持つ槍を地面に突き刺した。

その上に、羽根を広げて飛び乗る。

「おお!! 嬢ちゃん、人間と違うんか?」

「なんや、尻尾も生えとるやんけ」

口々に疑問を呈する鬼たち。意外とマナーがなっている彼らに俺は敬意と、黙禱を捧げる。

「サーヴァント界最大のヒットナンバーを聞かせてあげる！」

不敵に笑ったエリちゃんの宣言と共に背後に巨大な魔法陣が現れる。

その中からズルズルと、巨大な西洋の城が、チエイテ城が姿をあらわす。

「ちよ!?! 城、城出てますよ、アレ!?!」

「な、なんだありゃあ……」

ネギが謎の興奮度合いで話しかけてくる。うん、城。

隠れてたカモミールもあまりにもあんまりな光景に声を上げていた。

「なんやあれ!?!」

「おい、なんか出しよったぞ!?! マズインやないか?」

「いよいよ鬼たちもぎわつき始める。」

だが、もう遅い。

エリちゃんのテンションはすでに最高潮なのだから。

こうなれば俺にも止められない。

「ふふ、飛ばしていくわ!?!」





カーは反対を向いているにも関わらず、キツイ。

立華は毎度どうやって耐えていたのだろうか？

純粹に疑問に思った。

「……!? ……!!!」

見れば、ネギくんたちもあまりにもあんまりな光景に半ば錯乱状態で何事か叫んでいたが、周囲に響き渡るドラゴンブレスのせいでも聞こえない。

エリちゃんのライブはまだ続いている。サビだけと念話で言い含めておいたが、まあ、このくらいやらないと生き残りがいるかもしれないしな。

薙ぎ倒され消滅していく木々や、蒸発する川。砕かれ砂になる岩などを見て、俺は改めて彼女の『歌』の脅威をしみじみと感じていた。

「はあー、サビだけだったけど。久々にライブ出来て嬉しかったわ！」

サンキュー、子ブタたち！

……あれ？」

歌い終わってノリノリでアンコールを期待していたエリちゃんは、前方が更地になっていることに首を傾げていた。

いい加減、気付いていいと思うのだが。敢えて黙っておこう。

当たり前だが、召喚された鬼たちは根こそぎ消滅していた。

本当に当たり前だ。だって、地形すら変わってるし。

地味に宝具の威力、上がってない？

俺はとりあえず久々に彼女の歌が聴けて満足だった。

「片付いたな、急ごう、早くお嬢様を取り返さねば」

そう言つて振り向くと、ネギくんはおろか明日菜や利那まで耳を抑えて悶えていた。

俺よりも遥か遠くにいるし。

どうやら魔法は効かなかつたらしい。

俺はもう慣れてしまったので、気にしない。

耳は殆ど聞こえなくなるから、今も結構大声で話している。

自分の声すら臆げだ。

「い、いえ。大丈夫、です。先を急ぎましょう！」

それでも利那は立ち上がつて意気込みを新たにしていた。

それにつられてか明日菜も耳を押さえながらも立ち上がる。

ネギくんは――

「……はい。平気です。びっくりしましたけど」

みんな流石だ。

まあ、ふざけるつもりはないので今は急ごう。

耳にダメージを負いながらも俺たちは再び千草の追跡を開始した。

「どのくらいですか!？」

「あと少し……! ……これを抜ければ!!」

走りながら敵の現在地を刹那に確認するネギくん。

俺も礼装の機能で探知しているが、反応はまだ先。

なんとか儀式を終える前に助け出さなければ。

神霊の降臨など、もし本当にやるつもりなら絶対に阻止しなければならぬ。

できるかどうかじゃなく、やる可能性があるなら止めねばならない。

「つ、待て! ……魔力反応感知、来るぞ!!」

礼装が捉えた反応は三つ。いずれもサーヴァントに匹敵するものだ。

俺はネギくんたちを慌てて呼び止めた。

「ほう、小僧が二匹に小娘が二匹……サーヴァントが二体か」

目の前の林から姿を現したのは、紫を基調とした色合いの鬼。頭頂部は虫の腹のような形で、その足にあたる部分から角が生えている。

これまでの傾向を考えてこいつは見た目で判断して大丈夫だろう。

「水鬼か」

「おお、名乗る前に当てられるとは。

いかにも、我は水鬼。貴殿らの足止め……あるいは『排除』を命じられている」

「は、排除!？」

明日菜が怯えた声で叫んだ。

なるほど、こいつは魔神柱の方の子飼いらしい。

フエイトがこの時点で不殺を覆すとは考えにくい。

「左様、貴殿らは首を突っ込み過ぎた。抑えきれぬなら殺せと命じられている」

奥からもう一体。こちらはエリちゃんんの報告にあつた風を操る鬼、風鬼だ。

「我らも、舐められたままではいられんからな」

最後に、隣の木々の合間から黄色の鬼。金剛の身体を持つ金鬼が現れた。

三体の鬼。いずれもがサーヴァントクラス。

有り体にピンチである。しかしこれくらいは想定していた。した上でここまで来た。

どのみち、この後にフェイトやら魔神柱やら、さっきのセイバーともやり会わねばならない。

俺は、『魔力を礼装に込める』。変換など待ってられない。

先ほどと同じく、『直に』魔力を補充する。

「あなた、また懲りずに！」

「止めるなよ、策はこれしかない。逆転できる手なら使うまでだ」

叱責を加えてきたメカエリチャンに、俺は慥然とした態度で返す。

やらなきややられる。やれる手は全て使う。

俺は念話で二人に俺の合図でまず水鬼と風鬼を仕留めるように伝える。合図は『礼装による強化』である。

この二体さえ仕留めてしまえば――

「ぬうー！」

その時、パス、と風を切る音がした。同時に水鬼が額を軽く押さえて小さく呻く。

その直後、巨大な手裏剣がその場に到来した。

「うわっ！」

思わず声をあげたネギくんの隣に、忍者の衣装に身を包んだ女性が降り立った。

その姿を見てこの場の全員が驚いた。もちろん俺を含めて。

「長瀬、さん!？」

その人物こそ何を隠そうネギクラス唯一の忍者。長瀬楓であった。

真面目に、本物の忍者である。

確か、甲賀流一般最高位の中忍だったと記憶する。

「ニンニン。ネギ坊主、ここは拙者たちの助けが必要なのではないかな?」

朗らかな笑顔で語る楓。

その背後にもう二人、降り立つ。

「あいやー、私、本物のお化け見るの初めてアル」

「随分と、厄介な奴に絡まれているみたいだな刹那」

チャイナ服の褐色少女・アルヨ……じゃなくて古菲。

と、同じく褐色だが中学生とは思えないプロポーションのガンスリンガー龍宮真名。

「龍宮!?! あんた、なんで!?!」

驚いてる明日菜に、刹那は龍宮とは以前から仕事を共にする仲だということを説明する。

確か、魔獣退治とかしてたんだよな。

いや、どんだけ魔獣いるんだよ、って話だが。

いるんだな、これが。

「ここは我らに任せて、行け」

そう言い放つや、銃弾もぶつ放す龍宮隊長。

そのまま、水鬼の方へと突撃していく。

「待て、そいつはサーヴァント……!」

並みの怪異と一緒にするな、と言いたかったのだが、存外、龍宮は強かった。ガンⅡカタよろしく接近戦で銃を放ちつつ、水鬼が詠唱を唱えようとするのを妨害している。

水鬼とて素体能力はサーヴァントのそれ。それら銃弾を躲し、時には手に持つ棍棒で叩き落としながら互角に戦っていた。

よく見ると龍宮の左眼がほんのりと輝いている。あれが魔眼つてやつか。

龍宮の奮闘ぶりに啞然としてみると、その間に楓は風鬼へと仕掛けていた。

あの巨大手裏剣を投擲し、その合間に呪符を構えて接近と共に放ち爆発させる。その間にクナイを投擲、紐が括り付けられた巨大手裏剣を操って風鬼に詠唱の隙を与えないように立ち回っている。

あるいは二人とも、速さはサーヴァント並みなのかもしれない。

思いの外、彼女らが奮闘してくれているのを見て、少し安心する。

どうやらこいつらは任せてしまっても大丈夫そうー

「ぬん!!」

「うわっ、かったいアルね〜」

しかし、金鬼だけは少し古菲に分が悪そうだった。

当たり前だ、戦えている他の二人が異常なのだ。

いや、もしかしたらー

まず、どうするべきか、迷った俺は金鬼を先に仕留めることにした。

放置はまずい。それに、金剛の身体らしいからな。

幸い、こちらにはエリちゃんがいる。

「エリちゃん、古菲を援護しつつ『竜鳴雷声』キレンツ、サカーニイを奴にぶち込め!!」

「分かった!」

俺は彼女から金鬼の身体に『声』が効いたのを伝え聞いている。もはやアレは反則に近い『魂攻撃』が出来るので物理防御の硬い奴にはもってこいだ。

エリちゃんが金鬼にリベンジマッチを挑んだのを確認してから、次にメカエリちゃんに指示を出す。

見れば、他の二人も結構苦戦している。最初の勢いは良かったが、やはり相手はサーヴァント。動きも鈍ってきていた。

いつの間にか刹那や明日菜たちも参戦しているが、どうにも明日菜は危なっかしい。



ネギくんにもこれからの魔力を残してもらっておいた方がいいだろう。

「メカエリチャンは水鬼を叩け、崩しやすいのはそこだ!!」

「了解!!」

ジエツト噴射で対象に向かうメカエリチャン。スカートフレア弾幕ミサイルはもちろん、指マシソニックシャワーンガンも全開で使っている。

すでに、二度目の全力戦闘だが、甘いことは言つてられない。

俺もフルで魔力を回し続けている。

すでに身体の一部は感覚が無いが、それでもやらねばならない。

もはや正史とは違うのだ、ここからは自分で考え、自分で動かなければならない。

「えーと、そのガン⇨カタ女子!」

「……呼んだか?」

ガン⇨カタしながら返事をする龍宮。案外余裕ありそうだ。

「くノ一ちゃんの方の援護を頼む。……それと、できれば全力をお願いしたい。こいつ

らは『本物』だ」

「つ! ……何やら知っているような口調だが、今はそうも言つてられまいな」

隙を見て即座に離脱し、楓の援護に入る龍宮。

そちらには刹那もいるが、三人でやればなんとかなると思いたい。

まして刹那は神鳴流。サーヴァントとはいえ風鬼にも効くことを願っている。

「それと、ネギくー」

「ほう、貴様が司令塔か」

不意に、背後から背筋の凍るような悍ましい声がきこえてきた。

それは一度耳にすれば即座に『人外』と分かる異形の声。

振り向くのが下策と即座に判断した俺は首を守るべく急いで屈む。

しかし、『ソレ』の刃は俺よりも数倍速い速度で迫る。

「三郎!!」

刃が目の前まで迫った瞬間、唐突に『ソレ』は動きを止めた。

まるで何かに縛られたようにギチギチと身体を軋ませている。

「ぬう!?! おのれ、『呪術』か!?!」

振り向き確認したそれは黒づくめの巨軀。

黒の仮面には目と口が空いておりそこから赤い光を放っていた。

オンギョウキ  
隠形鬼、その名前が即座に頭に浮かんだ。

だがそれより――

「お前はっ!？」

スタン状態の隠形鬼は『ナニカ』に絡みつかれたままに宙へと振り回され遠方に落とされる。

その後、彼女は目の前に降り立った。

「ご無事でなによりお館様……」

俺を見て一瞬、何かを感じたように眉を動かした彼女だったが、すぐに敵の方へと向き直った。

身の丈はちょうどアビーと同じくらい、長い黒髪を持ち全身に蛇の這ったような痣を持つ。

そして何より『大変けしからん衣装をしている』。なんといえれば良いか、例えるならH  
○T L I M L T。もっと分かりやすく言うと人修羅の使役するエンジェル。

「パライソ……?？」

困惑する俺に、腰のポシエツトから陽気な声が聞こえてきた。

『いやー、間に合って万々歳だね。まだ君に死なれちゃ困るからさ』

お前の仕業か精霊。

だが、どうやって召喚した？

俺は今回何の手順も踏んでいないが。

『ああ、言つとくけど彼女は“はぐれ”状態だからね。長くは持たない。……この世界においては少し勝手が違うが。

とりあえず、今後も“運用”するのなら契約を結ぶ必要があるよ』

ペラペラとポシエツトの中から説明してくる精霊。

お前、単体でサーヴァント呼べたのか。

……詳しく聞こうとする度にはぐらかすから始末に負えない。

「お館様、拙者をお使いいただけれるなら契約を。この身に代えてもお守りいたしまする」  
 パライソが『大蛇』<sup>オロチ</sup>に締め上げられる鬼を警戒しながら告げる。やはり、鬼の名は伊達ではないのか隠形鬼は締められながらもがき暴れている。あまり長く保ちそうに  
 はない。

……それに、これ以上契約したら『俺の身体』は？

「……分かった。パライソ、いや望月千代女<sup>もちづきちよめ</sup>。俺のサーヴァントになってくれ」

「承諾、これよりは新たなお館様の元にて」

『はい契約〜!』

精霊の軽い声でぶち壊しだが、<sup>こうべ</sup> 跪き頭を垂れる彼女は今、はつきりと『俺』を認識していた。

中身が違うと気付いたのだろう。



「子イヌっ!？」

「馬鹿野郎、敵に集中しろ!!」

俺の異変に気付いたエリちゃんやんが俺の方に振り向き声をかけてきた。俺はそれを叱責する。

大丈夫、やれる。

ガタガタと震える左脚を庇うようにして立ち上がり、戦況の把握に努める。

なんだ、まだやれるじゃないか。

ガンドだって撃てる。

『……人の身体は脆い。君が望むなら、前借り交渉してあげてもいいけど?』

精霊がいつもの飄々とした態度で提案してくる。

そういう魂胆で呼んだのか。

「断る。俺の優先順位は彼女たちだ」

『ハハ、思ったより強情だ。でも、いいよ。その不屈の精神が我々人類には必要だ』

あくまで明るく、しかしその声に最初から感情が乗っていないことに俺は初めて気付いた。

## 京都・七

いつだってそうだ。

我ら一族はいつだって全ての怨嗟を受け止めてきた。

『穢らわしい、忌々しい呪術師などっ！』

『人殺しめ！ 貴様らの居場所などあるものか！』

『返せっ!! 私たちの家族を返して!!』

暗殺、策謀、奸計。そして戦争。

事あるたびに我らにそれら全ての負債を背負わせてきた。

『貴様らのせいだ！ 穢れの一族め！』

『お前たちが起こした、お前たちのようなものがあるからっ！』

何も、何も知らない。知らされない。

我らを困う者たちでさえ、我らの裏切りを警戒している。だから情報は渡さないのだ。くれるのは対象を殺すのに必要なものだけ。

故に、本家から遠ざけ、謂れなき誹りを黙認する。

生まれた時から、そういうものなのだと思います。

だから諦めていた。せめて、家族で静かに暮らせれば俺はそれだけで――

『へへっ、西洋魔導師の犬どもが』

燃えている。家が、唯一、安らげる場所が。

『ひひ、嫁の身体はなかなかだったな？』

まあ、穢れの一族だがそこだけは褒めてやらねえと』

『戯けめ、我ら“反西洋魔導連隊”の者が穢れに触れるなど。

……だが、穢れの末路としては順当か』

男たちが、燃え盛る家の前に群がっている。

意味がわからない会話をしている。

『おっ!?! お、おい、旦那が帰ってきたぞ!?!』

『む……ふん、一足遅かったな。貴様ら家族は皆殺しにしておいた。穢れめ、あの世で地



獄の責め苦しむがいい』

『あ、そういうやさつき 娘 も事切れちまってたっけ？』

そう言つて、男の一人がゴミでも投げるかのように俺へと放り投げたのは、傷だらけでボロボロになった全裸の一人娘の死体だった。

『いやあ、嫁も良かったが娘の穴も最高だったぜ』

『最初は泣き叫んでうるさかったけどな 『おとうさーん、おとうさーん！』 ってな！』

馬鹿にしたような口調で男たちが娘の真似をしていた。

理解が、及ばなかった。

『……我らの家族を殺した咎、穢れをこの地に招いた咎、ただ死ぬだけで償えるところな  
よー！』

もはやピクリともしない娘の身体を見つめる。

殴られ、斬り付けられ、激しい陵辱を受けたであろう有様のその身体をただ見ていた。  
股下から零れ落ちる白濁のナニカを俺は理解するのを拒んだ。





「……かくして、『彼』は『鬼神』となった。

実に、実に愚か。すでに作られていた怨嗟のシステムを知りながらも結局は矮小な願望のためにその身を捧げたのですから」

語り合えたダンタリオンに、セイバーは表情を崩さず問いかける。

「貴様。それを知ってそんな想いしか抱かないのか？」

ならば貴様は永遠に魔神というシステムに囚われ続けるだろうよ。

……いや、今の我が言うべきことじゃないな。忘れろ」

「ふむ……ですが事実は事実。実に非効率、非合理的な判断だと思えますが。

だって、それら集めた怨嗟は他者に渡ってしまうのですから。いえ、これは『彼』の知らない事実でしたね」

失礼、と頭を下げるダンタリオンにセイバーはもはや視線すら向けていなかった。

「そういうところだ。我が気に食わんのは。

主人すら知らぬ何某かの情報を得ながら秘匿している。

不義理、不誠実。主人の命が無ければ斬り捨てているところだぞ？」

それでも、濃密な殺気を放つセイバーにダンタリオンは愉快そうに笑った。

「ハハハ、やはり貴方も原典よりも苛烈だ。それは『神の視点』を手に入れたからですか？

まったく、我が主人も酔狂なお人だ」

「黙れ。我は我だ。

たとえ、亡霊の群れに永劫繋がれようとも、根幹は変質せぬ」

それがセイバーの誇り。ただ、召喚の義理を果たしているのみ。

様々な可能性を内包していようとも、不正な召喚でバグを起こしていようとも、誇りは失わない。

それほどまでに、どうしようもなく彼は『人間の王』であった。

「キャスターの準備も整っているようで。

……あとは、彼女らがどこまでやれるか。我らも観戦席でゆつくりと眺めることにしましょう」

そう吐き捨て視線を向けるのは、祭壇にいる千草とフェイト。そして祭壇に括り付け

られた木乃香。

「初動のキーは近衛の血ですが、顕現後の制御はキヤスターに。

あの小娘だけでは些か厳しい。

キヤスターの陣地とした地脈も利用せねば」

ダンタリオンの語るキヤスター。彼のクラススキルの陣地作成のランクはA+。

かつては豪族であり、朝廷軍をも退けた功績、その地の民からの信頼も影響していた。ゆえにキヤスターは己の陣地とした領域を領地とし、四体の鬼を最大限バックアップできる。

しかし、この力は今回必要とされていなかった。

必要なのは『鬼神を操った』という逸話のみ。

それだけのためにキヤスターは呼ばれた。

生前においては立派な統治者であつただろうキヤスターも『伝承の影響』と『不正召喚』の影響を受けてもはやその面影すらない。

怒りと怨嗟に塗れた『英霊としてのキヤスター』だからこそ適任だとダンタリオンは判断していた。

だって、あの崇り神との親和性は最高ランクだから。

「ボエエエエエエエ!!!」

エリザベートの『竜鳴雷声』を幾度も直撃した金鬼は激しく消耗していた。

筋力、耐久ともにランクにしてA。加えて鬼種のスキルにより更にその二つを上昇させている彼をして、二人の敵対者は手強かった。

「ハイヤー!」

まず、ただの人間たる少女の動きが異常であった。

幾つかの拳法を駆使しているのは分かるが中でも歩法といなす技が異常な完成度を誇っている。

打撃を食らわせることが出来ずとも、俊敏な動きで金鬼を翻弄し、その拳をいなすことでエリザベートにすら攻撃を行かせないようにしていた。

それでも、膂力に優れた彼の拳を受け続けた少女の腕はもはや傷だらけで、あと数発いなくてもへし折れ、千切れ飛ぶ。

だが、彼女が未だ生きているのにはもう一つ、要因があった。

「強いな。その歳でその技量は凄まじいばかりよ」

「ほ、褒めてもなんにも出ないアルよー！」

そう言いつつちよつと照れて、内心嬉しいと古菲は思っていたりする。

その技と才、まさしく鬼神たる自分たちに立ち向かう気概に金鬼は素直に感心していた。

「このまま、抑えに徹することができれば良いが……」

金鬼たち三体が受けた命令はあくまで『足止め』。

ならば、この場に彼女らが止まる限りは彼らも本気を出さない。

逆もまた然り。ここを無理にでも越えるならば『殺してでも止めよ』と命ぜられてい

る。まるで、彼らの心境を知り得ているかのような指令に金鬼はダンタリオンに怒りを感じていた。

金鬼は、三鬼たちは。キャストアの現状を憂いていた。

「お主のような気骨ある若人がもう少しいれば……いや、すでに負けた戦など憂いても仕方なし」



必死に拳を振るう古菲にどこか優しげな瞳を向けていた金鬼だったが、その隙をエリザベートが見逃すことはなかった。

加えて、『マスターからの強化を受けた』彼女の全力が炸裂する。

「これで、終わりっ!!」

ボエエエエエエエ!!

渾身の魔力を込めた『竜鳴雷声』。一度、宝具を開帳していて尚、衰えを知らぬ彼女の『肺活量』によつて必殺の一撃となつて飛来する。

超音波のドラゴンブレスが金鬼の胸を直撃した。

「ぐっ、うおおおおお!!」

ビシビシ、とこれまでの攻撃から生じていた大小様々な傷から亀裂が広がる。本来の攻略法とは全く異なる、反則に近い戦法により金鬼は敗れた。だが、彼自身に怒りはない。

寧ろ清々しいくらいだ。

「み、見事……願わくば、他の者も、『理性』を保つ、うちに」

命を果たせず破れたとは思えぬほど安らかな表情で、金鬼は砕け散った。

「く、大蛇!!」

一方、隠形鬼と対峙する千代女も苦戦を強いられていた。

必ず倒すと主に宣言した手前、負けなど死んでも認めない覚悟の彼女だったが、明確な力量差に押し切れないのが実情であった。

「ふっ、さすがはアサシンのサーヴァント。

速さだけでも我に迫るか」

余裕で大蛇を躲しながらお返しとばかりにカウンター気味の攻撃を繰り出す隠形鬼に、千代女は手に持つクナイでなんとか防ぐ。

「ぜあ!!」

負けじと二刀に増やしたクナイを振るい弾き飛ばす、続けて駄目押しとばかりに『呪い』を込めたクナイを複数投擲する。

「笑止」

しかしそれらも全て容易く叩き落とされる。

しかしこの力量差も仕方のないことではあった。

何せ、彼ら四鬼は『忍びの祖』とも称されることがあるのだから。それらの逸話が少なくとも認められているためにこうして隠形鬼は、絶大な力を発揮して、本場の忍を圧

倒している。

それらに鬼種のスキルを合わせれば、もはや勝てるものなど限られてくるだろう。

それがサーヴァント、引いてはそれに匹敵する存在として召喚されたものの力であり、意地である。

「はあ、はあ……！」

「……ふむ」

息を荒げる千代女に対して、隠形鬼は何事か考えるような素振りを見せていた。

千代女にとっては戦闘中に物思いに耽るなど舐められている、と恥辱を感じると同時に、チャンスでもあると複雑な心境になっていたのだが。

「……ひとつ、頼みごとをしたい」

「なに……？」

突然、話し始めた彼に、当然千代女は訝しんだ。

しかし、優勢の彼から態々そのような真似をしてくる理由が思い至らず様子見をすることにしていたが。

「我等、四鬼は偽りの主のもと使役されている。

ゆえに、僅かな隙であればその『命令』を拒むこともできよう」

「っ……!？」

声に出さずとも、千代女はその予想外の内容に僅かな動揺を見せた。  
しかしその隙を鬼は狙わない。

「その間に、貴殿の『全力』を我にぶつけよ。

……それで、恐らくはこの悲しみしかない戦も終焉へと導くことができるやも知れぬ」

嘘を言っているようには見えなかった。第一に先ほどの隙を自覚していたからこそ、それを狙わなかった彼の言葉は少なくとも真実なのではないか、と検討の余地が出たことは確か。

それでも、ここは戦場、敵の言葉に簡単に乗るほど彼女も迂闊なサーヴァントではなかった。

「三十秒、いや一分は保たせてみせよう。それでケリをつけてくれ。頼む」

心からの懇願。もはや彼に彼女たちを害する意思はなかった。

それでも戦うのは『自刃を禁じられている』のと『足止めの命令』ゆえであった。  
「……言葉は、要らぬ。行動で全てを見極めよう」

「分かった。ならば……」

最大限の譲歩を出す千代女、彼女も生前をくノ一として『潜入』や『奸計』を行なったからこそ『心の機微』には聡い自信があったのだ。

それを受けて隠形鬼も自身を封じようとして――

「ぐお!! いかん、これは……!!」

突然、苦しみだした。

「粉塵、爆符!!」

インを結び、風鬼の周囲にばら撒いた呪符を一斉に爆破させる楓。

「甘ん」

しかしそれらは纏めて、風鬼が呼び招いた風によって吹き飛ばされてしまった。

爆風ごと吹き飛ばされたそれは、逆に楓たちに牙を剥く。

「ぐつ、この風は、どうにかならないものか!」

憎々しげに呟く龍宮の言う通り、風鬼の操る風は驚異であった。

彼女の弾丸はもとより、先ほどの爆風ごと吹き飛ばす芸当や、ネギの魔法なども纏め

て弾き飛ばされてしまう。

唯一、刹那の神鳴流のみは接近戦の兼ね合いかあのプロペラのような刃で対応している。

「すまぬ、拙者の爆符が裏目に出た」

「構わん。それよりも、これは予想以上の能力差だな」

飛び回りながら謝罪を入れてくる楓に軽く返しつつ、苦笑交じりに呟く龍宮。

彼女は明確に、風鬼と自分たちの間に埋めがたいほどの力量差があることを感じ取っていた。

それも、この人数で相対してまだ辿り着かない領域なのだ。

銃で、手裏剣とクナイで、魔法で必死に迎撃する彼女らの奮闘を嘲笑うかのように風鬼は呼びまねく風、竜巻、嵐にて全てを弾き飛ばす。その隙を突いて刀を振るった刹那をも、その手に持つ珍妙な形の刃でいとも容易く受け止め、弾く。

はつきり言って、無理ゲーだった。

「あんな、風っ!!」

しかし、その状況に危機感を覚えた明日菜は単身で風鬼の操る風に向かって突撃した。

「待て、神楽坂!!」

それに気付いた龍宮が呼び止めるも、その頃には明日菜はハマノツルギを振り下ろしていた。

「つ、なんと!」

その光景に、風鬼も思わず声をあげた。

当たり前だ、自らが操る風がハマノツルギによつてせき止められているのだから。

まるで、そこから先に進むのを拒否するかのような動きに風鬼や龍宮、刹那や楓、ネギでさえ目を見開いていた。

「ぐ、ううう!!」

しかし、それで止め切れるならば皆、苦労していない。

次第に、明日菜の『魔法無効化能力』……

いや『幻想否定』イマジン・デナイアルだけでは防げなくなっていた。

「も、もうこれ以上、は!!」

しかし、驚きに動きを止めた風鬼の隙を見て、即座に楓と龍宮は動いていた。

まずは、龍宮が所持している特殊弾、威力よりも相手を全力で押さえることに特化したあらゆる束縛の呪文が込められた麻痺弾を二、三発撃ち放つ。

「ぐっ!」

直撃を受け動きを完全に止めた僅かな隙に、今度は楓が、鎖と呪符を持ってさらにその動きを止めるべく動く。

何重にも巻かれた特別な鎖と、封印の呪符を手持ちにある限り貼りまくる。

「が……………ぐ……………!!」

展開された封印の結界に、『幻想封じ』の鎖の効果により風鬼はその場での停止を余儀なくされた。

「今だ！ ネギ先生は神楽坂と刹那を連れて先を急げ!!」

それは最善の策であった。鬼たちの事情を知らなければ最適の方法。

「龍宮さんたちは!?!」

「案ずるな、必ず仕留めて後に続く。それよりも早くせねば近衛木乃香の身が危険だ!」

ある程度の事情を知っているような口調。

「先生、ここは任せられた方が良いかと」

あくまで戦闘に携わるものとしての言葉。

それを理解するからこそ、ネギは少し迷いだけで龍宮の判断に従うことにした。

「すいません、皆さん!」

……明日菜さん、刹那さん! 僕の杖に!!」

ネギの叫びに、明日菜と刹那は即座に対応して杖に飛び乗った。



ふわり、と吹き上がった杖に明日菜は「きゃっ!」と少しの悲鳴をあげるも、ネギは龍宮たちに目を向ける。

「お願いします!!」

「任せろ。……これでも、名の知れた掃除屋だ」

口の端を上げた龍宮に頷き、ネギは木乃香のいる方角へと飛び立った。

それを見て、風鬼は驚愕する。

「待て……今、先に行かれると……!!?」

必死に手を伸ばす彼に龍宮と楓は警戒し構えた。

しかし、風鬼は予想外の行動に出る。

「ぐ!? う、うオオオオオオオ!!?」

突然、特大の雄叫びを上げ始めた風鬼。それに応じて肌を刺す魔力がさらに上昇していく。

「ば、ばかな! まだ上がるのか!」

仕事でもついで見ることはないほどの、膨大な魔力。

ただしく、『鬼である』と思い知らされる絶対的なまでの力を風鬼は見せ始めていた。

苦しみに悶える風鬼はしかし、なんとか言葉紡ぎ、彼女たちに伝える。

「ぐっ……時間が無い、頼む……お前たちの全力で、俺を殺してくれ!!」

必死に、懇願するように述べる鬼に、二人ともそれが真に彼が望む言葉だと感じ取った。

だからこそ、楓は即座に手に持つ手裏剣に呪文を付加していく。あらゆる障害を『打ち破る』概念をありつた付け加えていく。

対して、龍宮も『切り札の一つ』であるリボルバーを取り出してそれに特殊弾を詰める。

そして両者ともに自身の全力と思われる力を同時に風鬼へと叩きつけた。

巻き起こる爆発と衝撃。風圧は放った二人でさえ目を覆うほどのもの。中でも龍宮の『五大属性の衝突エネルギーを利用した弾丸』による威力は凄まじく、反発作用と込めたエネルギーの総量が膨大だったこともあり、それだけでドームを形成するほどであった。

やがて衝撃の止んだ頃、楓は心配げに龍宮に声をかける。

「拙者の手裏剣、壊れてないでござろうか」

「知らん。構っていられる余裕もなかった」

二人とともに、爆発の煙が充満する中で勝利を確信していた。誰でもない敵本人が動きを止めて当たってくれたのだ。

それゆえの溜めを含めた攻撃で死んでいないなどあり得ない、と。

しかし、その予想は呆気なく覆される。

「っ!? こ、これは!」

辺りの煙を吹き飛ばすほどの暴風。それらは四つの巨大な竜巻となって周囲を蹂躞する。

立っているのもやつとなその風は突然吹き始めた。

そして、煙の晴れたその中心には――

「グルウ……」

鬼神と化した風鬼が浮いていた。

頭部だけにあらず、筋力の増大した身体のあちこちから角のようなものが生え、その肩からは天を突かんばかりの巨大な突起が表出していた。

加えて魔力。とても、並の人間が意識を保てるものではなかった。

近づくだけでも意識を失い、最悪弾け飛んでしまうような濃密にして膨大な魔力。いや、恐るべきは本能に突き刺さる悪寒。

生物として、人間としての摂理のように嫌でも理解してしまう目の前の敵の強大さ。

「真名……これは、しくじったかもしれないな」

「ああ……どう足掻いても勝てん」

敗北を覚悟する二人に、風鬼はもはや理性の無くした雄叫びを上げる。

「グルルルアアアアアアアア!!!」

それだけで魔力が放たれ、周囲の木々は吹き飛び粉々になる。  
能力を最大限解放した鬼神がそこにはあった。

「水陣・瀑布領!!」  
ぼくふりよう

短い詠唱で水の防壁を張る水鬼。

「くらいなさい!!」

メカエリはソニックシャワーとスカートフレアで正面から崩しにかかる。

それらを目眩しにして接近した彼女は尻尾の電撃によって内部の鬼ごと攻撃する。

「ぬう」

水の鬼である彼にとってその攻撃は有効なもので、若干の麻痺を生じさせるほどのも

のであった。

俊敏の値が低いメカエリは、豊富な武装を駆使してその差を全力で埋めにかかると、痺れる鬼にチャームサイトを見舞いつつ、拳と尻尾による直接攻撃を加えた。

「ぐ、がはっ!？」

筋力にしてA。膂力と耐久には優れる彼女。

その重い攻撃は一撃一撃が『オールラウンダー』である水鬼の耐久を貫通していく。

「これで!!」

おまけとばかりにロケットパンチをゼロ距離から放つ。

「ぐううあ!？」

ズシン、という重い音が響き、一瞬、鬼の身体が浮き上がる。

しかしそれでも水鬼は倒れなかった。

「くっ、やはり幻想種は手強いですね!」

日本の固有種・鬼。それらは個体差はありながら総じて人間には強大すぎる天敵として古代から激闘を繰り広げてきた存在だ。

中でも『鬼神』に到達する者は、時に神すら凌駕する力量を持つ。

「はは、やるなからくり仕掛けの女傑よ」

「メカエリチャンです。あと、エネルギーはエリザ粒子なのでお間違い無く」

どうでもいい訂正をする姿に、水鬼も思わず吹き出した。

「……何が、おかしいのです?」

少しイラつときたメカエリが聞いたです。

「いや、すまぬ。しかし、貴殿ほどの度量と、力量があれば或いはと思つてな」

敵を賞賛し始めた水鬼に違和感を感じながらもメカエリはそれを聞いていた。当然、

武装の射出準備をしながら。

「ふつ、今告げるは不粋か。よかろう、掛かってくるがいい『めかえりちゃん』とやら。

貴殿の全力が我に届き得るか否か。それこそが今は重要だ」

「言いましたね?」

いいでしょう、貴方は全力でもてなしてあげるわ!」

鬼の宣言に、メカエリは一気に武装を発射させる。

ミサイル、マシンガン、そして己自身も突撃しながらチャームサイトと、接近後は電撃、口からの火炎放射。

あらゆる武装を絶えず注ぎ続ける。

先の戦いで『マスターの治療』受けたメカエリは今一度、全力解放の宝具を放つ余力を得ていた。

使わねば倒せない相手がいる、そして『マスターからの強化』が届いた彼女は今こそ

放つべきだと理解していたのだ。

そして、ゼロ距離から彼女は撃ち放つ。

『鋼鉄<sup>プレストゼロ・エリジューベト</sup>天空魔嬢』！』

「ぬ、おお、おおお!!」

『魔力の封じられた』、あるいは『封じた』状態で直撃を喰らえばサーヴァントとてタダでは済まない。

現に、水鬼は全身に大きなダメージを負っていた。

しかし、それでもまだ足りない。

「生殺しとは……些か、趣味が悪いぞ?」

「全力でした、変な言い方しないでください。」

あなたが頑丈すぎるのです」

それは仕方のないことであつた。

彼も鬼神の一人。いや一柱。

古代日本にて千方の従えた四体の一騎当千の鬼なのだから。

「ふ……トドメを刺せ。それで全て終わる」

「一つ聞きます。なぜ全力を出さなかつたのですか?」

メカエリとてそれは気付いていた。

あるいは相討ち覚悟での自爆くらいしか有効打を与えられないのではと当初は想定していたほどだ。

それが、こうも連撃を受け、あまつさえ宝具を受け止めようとするとするなど。彼の戦闘スタイルにも合っていない。

「我を仕留めた褒美に教えよう。」

……今の主は、主にあつて主にあらず。

貴殿らが阻止せんとする忌まわしき邪神の囚われよ」

「神霊（仮）、リヨウメンスクナのことですね？」

データの上ではそうなっていた。

あくまでマスターの想定する敵としてだが。

「うむう……早めに頼む、もはや我にも抑え切れそうにない」

その言葉を聞き、即座に理解したメカエリは今一度開いた腹のハッチからドラゴンブレスを吐き出した。

「やいよつなら」

咄嗟の展開にしては威力の高いブレストゼロ。

その破壊力は瀕死とはいえ水鬼を跡形もなく吹き飛ばすほどであった。

砂塵となり、やがて光の粒子になって消滅した水鬼を確認してメカエリは次の指示を



マスターに仰いだ。

## 京都・八

龍宮真名は『半魔族』である。

その身に流れる血は人だけにあらず、古の神の血を人為的に配合した人造生命という扱い故に、魔族からも人からも恐れられた。

だからこそ、『研究所』を壊滅させた『彼』の誘いに、当初は乗り気ではなかった。いや、正確には『信用していなかった』。

『魔界の老害ども』の思惑から作られた彼女は、その半生を兵器として費やした。黒幕に魔族の重鎮を置く悪しき魔導師の主導のもと計画は動いていた。

『全てを見る者』を指して造られた彼女は、しかし、計画よりも大幅に『劣化』した状態で誕生した。

“失敗作”

『とある魔眼持ちの男』と『堕ちた女神』の力を同時に宿すことに失敗したことにより、彼女には『在り得ざるモノを見る眼』しか発現しなかった。とはいえ、『因子そのもの』は優秀であったために基礎能力は遥かに高く、失敗作と罵られながらも一定の戦果を上げる使い勝手のいい『兵器』として運用されていた。

それらの経緯により『彼』を最初から信用することは出来なかった。

だが、そんな彼女に『彼』は笑って告げた。

『一緒に来い、俺の望みが真実だと行動で証明する』

かくして彼女は『彼』との長い旅に出てその瞳の真の力を解放することになるのだがそれはまた別の話。

今回重要なのは彼女が『ただの半魔族ではない』ということである。

「グルアアアアアアア!!!」

鬼種としての暴走、いや、『その仕様』により鬼神となった風鬼は、溢れんばかりの魔力を湯水のごとく使い周囲に嵐を巻き起こす。

それを受けて楓と龍宮はいかにこの鬼が『異常であるか』を認識することとなった。

「退魔の術は一通り修得しているでござるが、果たしてあの鬼神に通じるかどうか」

風鬼のあまりの迫力に楓は自信なさげに語る。

それを見て、一つ小さな溜息を漏らした彼女は、次の瞬間には何かを決心したように瞳に強い意志を宿していた。

「楓、すまないが今から見る事については一切の他言無用、加えて言及の禁止をお願いしたい」

「……何か、手があるのでござるか？」

強い決意の籠った彼女の瞳に、楓も何かを悟る。

それは『負い目』であるのか『悲しみ』であるのかは分からないが、彼女が滅多なことでは言わない言葉を発していることは分かった。

「ああ、足止めならできるかもしれん」

「分かった。お主が言うのだ、拙者も誓って約束を守ろう」

故に些細を尋ねることはやめた。

彼女という『人間』が、ただ仕事にのみ傾倒する人物でないことは前より察していた彼女だ。

加えて、あのように憂いを見せられては領く他にないとも。

「奴は私が受け持つ。お前はあちらの忍者の手伝いをしてやってくれ」

龍宮が目を向ける先には、リツカにより使役される新たなサーヴァント、千代女の姿

があった。

「なんと、いつの間にやら援軍が来ていたとは」

僅かに驚きながらもほのぼのと語る楓だが、その忍者が使う技はどこか見覚えのあるものだったことに不思議な親近感を感じていた。

「あそらく『あちらも同じ』だ。油断はするなよ」

「お主もな」

軽口を述べて離脱する楓に、龍宮は「ふっ」と笑いをこぼした。

そして目を閉じ気を鎮める。

「さて」

再び見開いたその瞳は片方だけが『淡い煌めき』を放つ。

加えて、その身体からは『人ならざるモノ』の気配が滲み出し、腰からは魔性を意味する翼が生え出る。

「無闇矢鱈と魔力を垂れ流してくれるおかげで、ちよつぱり本気を出せそうだ」

魔族。知る者が見ればそう判断するだろう『異様な雰囲気』に包まれた彼女は宙に浮かび静観する鬼神を睨みつけた。

その手には二丁の拳銃。愛用のソレを構えて龍宮真名は絶望の具現に立ち向かう。

「私の『魔眼』がどこまで通じるか、測らせてもらおうぞ!!」

威勢良く、地を蹴り彼女は拳銃の引き金を引いた。

対して、隠形鬼と戦う千代女も『鬼神』となつた隠形鬼に押されていた。

「グアッ！」

短い咆哮と共に放たれる刃の一撃は以前よりも遥かに重く、加えてその速さも向上していた。

「くあー！」

さらには得物とするクナイもあくまで使い捨てに過ぎず、隠形鬼の生涯の得物とした『首狩り刀』の一撃に耐えられず四散する。

それでも忍の術を織り交ぜた『伊吹神の巫女術』により呼び招く呪しゅを用いて対等に渡り合う。

「っ、消えた!？」

しかし、理性を失おうとも『隠形鬼』としての特性である『影となり、獲物に襲いかかる』性質は本能に近いものであり、依然として発揮されていた。影となりて必殺の一撃を。

ただしくアサシンとしての戦法を『気配に気づかれてからもう一度実行に移す』出鱈目さに千代女の身体はすでに傷だらけになっていた。

それでも休まずに、今度は背後からの奇襲を仕掛ける鬼の刃をなんとか刀で受け切る。

「くっ！」

鬼種の脅力を、奇襲で食らうなど『必殺』に等しいもの。

それでも千代女は意地でそれを耐える。

「縛鎖・爆炎陣!!」

そこへ、呪符を張り巡らせた鎖で鬼へと奇襲を掛け返した楓が加勢に降り立つ。

不意の一撃に、隠形鬼も直にそれを受けその周囲は爆炎に包まれた。

「退魔の爆符にごさる。いや、効くかは分からぬが」

「……忍びか。お館様の味方なれば共闘ありがたく受け入れる」

楓の技にどこか見覚えを感じた千代女も、素直に彼女の加勢を受けた。或いはこの強敵を相手に、味方での腹の探り合いなど下策と判断したからかもしれない。

すでに炎の中で悠然と佇む鬼の姿が見える。

「されど、貴殿はあくまで人間。拙者の援護に止まるがよろしかろう」

主の味方ならば出来る限り守るべしと千代女は『現代を生きる人間』である楓に注意を促した。

「心配無用にごさる。自分の身は自分で、にごさる」

しかし、忍として『同じ流派の誰かには負けられぬ』と意地を見せる楓は、あくまで共闘を望んだ。

その姿に、千代女もようやく『彼女が自分たちの技を受け継ぐ者』であることに気付く。

だからと言って、正体を明かすなどと失態を晒すこともないが。

「致し方なし。ならばその通りになして見せよ！」

それならば、と千代女も共闘を許し、大蛇の呪を鬼に放ちながら戦闘を再開する。

或いは、『甲賀の末裔』に対する先達としての教示の意図があつたのかもしれない。いざとなれば助けるが、この戦いをあくまで試練として与えるのも悪くはないか、と。

忠義に揺らぎはない。もともとサーヴァントとして呼ばれば素直にマスターの指示に従う類の英霊だ。使命も必ず果たすと決めている。

その上で、『自分たちの子孫』の成長を見るのも悪くないと判断しただけである。



「はあ……はあ……！」

痛む身体を無理やり叩き起こして、追加の『魔力』を礼装に補填して放った『強化』。タイミングとしては両者ともにバツチリだ。

二人ともにほぼ同時に敵を倒してくれた。

「ぐう……!!」

とはいえ、身体の負担も大きいのは確か。

内臓が裂けるような痛みに思わず膝をつく。

『すごいじゃないか。ただの人間のままで、根性だけでこれだけ魔力を使うのは賞賛に値するよ』

相変わらずの皮肉っぽい精霊の言葉に答える元氣もなく、スルーを決め込んで改めて

戦場を見た。

「くそ、どうなってる？」

そうして分かるのは、『風鬼と隠形鬼の変異』である。

突然、枷でも外れたように膨大な魔力を解き放ったと思ったら数段上の能力で急襲を仕掛けてきた。

それも、どこか我を忘れたような暴れっぷりだ。

幸いにして、風鬼の方は『魔人化』した龍宮がなんとか押さええてくれているようだ。

隠形鬼も、楓と共闘する千代女が全力で仕留めに掛かっている。意外にも息のあった連携で戦う彼女らに、もしかしたら隠形鬼すらも倒せるのではと思わされた。

そして――

「行っちゃったか。いや、これも『成長』には必要なイベントだとは思っていたんだが」

まさか三人だけで行ってしまおうとは思わなかった。

急いで追いかけた方がいいだろう。

敵は千草とフェイトだけではない。

あの魔神柱と、神霊レベルのセイバーがいるのだ。

無理ゲーにも程があるが、加えてスクナまで出て来られたら手が付けられない。何と  
しても復活だけは阻止する必要がある。

『千代女、そいつの相手は任せたぞ。

なんかあつたらすぐに連絡するように』

『承知！』

念話でそつと応援を飛ばすと予想以上に元気な返事が返ってきた。千代女のテンションが異様に高い件について。

続けてエリちゃん×sにこの先に進むことを伝える。

こちらもすぐさま了承して両脇まで駆けつけてくれた。

「ネギくんたちは先に行つたようだ。俺らも急いで後を追う」

俺の言葉に頷きを返した彼女らと共に、俺は敵の本陣まで全力で駆け出した。

その頃、杖で移動していたネギたちの元にも新たな刺客が現れていた。

「っ！ 危ない！」

飛行中、突如として向かってきた『犬を模した影たち』の攻撃により一行は地上へと半ば強制的に着地する。

「ふぎや!？」

案の定、いきなり宙に投げ出された明日菜が地上に顔面から落ちて奇妙な鳴き声を発していたが、皆んなスルーした。

「待てやネギ。昨日の続き、ここでやろうや」

好戦的な笑みを浮かべて彼らの前に姿を現したのは先日結界の中で交戦した半獣人の少年・犬上小太郎。

「悪いけど、今は急いでるんだ。意地でも抜けさせてもらうよ」

しかし木乃香の救出が目的であるネギはそれに取り合う気はなかった。なかったのだが……

「ほー、逃げるんか？」

「なんや、やっぱ英雄の息子言うてもただのガキみたいやな」

あからさまな挑発、しかし未だ10歳のネギにとってその発言は何よりも侮辱に相当する言葉だった。

ゆえに「ブチッ」という音とともにネギも激しい怒りを込めた瞳で小太郎を見つめ返

す。

「……いいよ、やろう。決着？ さっさと着けてあげる」

「先生!」

ネギのまさかの煽り耐性の無さに刹那は思わず目を見開いた。

しかしすぐに彼の年齢を思い出し、それゆえの熱しやすさと理解する。

「マズいな、アニキもあれで負けず嫌いが激しい。こうなつちや止まらんねえぞ」

カモも常にネギの側にあつたからこそ、この状態のネギは手がつけられないと判断して唸る。

「ですが、今はお嬢様を！」

ネ、ネギ先生!」

まさか、こんなあからさまな時間稼ぎに嵌るのかと声をかける刹那。しかし返事は返ってこなかった。

予想外の事態。まさかあの鬼どもの他にもこんな伏兵がいたとは。

こうなれば致し方なし。ここは全員で一気に押し切るべきか、と悩み始めた刹那の元に一人の女性が近寄ってきた。

「あれ、もしかしてあの子も敵なわけ？」

……うーん、まああんまりタイプじゃないから倒すのも止むなしだけど」

真剣な顔で呑気なことをいきなり宣う彼女に、刹那は当然のごとき疑問を投げかけた。

「だ、誰ですか？」

しかしひと目見ただけで、この女性が『小次郎と同じ領域にいる剣豪』であることを感じ取っていた。

何せ、放たれている剣気が半端じゃない。

ともすれば剣気だけで押されてしまいそうなほど。

「ん？ 私？」

ああ、ごめん！ いきなりじゃアレよね。

じゃあ名乗りましょう、そうしましょう！」

妙に高いテンションで応える彼女だが、さすがに敵とは思えない陽気な態度に刹那もとりあえずは敵ではないと感じる。

「新免武蔵、よく宮本武蔵って呼ばれてるわ」

軽く、述べられた名前に、しかし刹那は理解が追いつかなかった。

この者は今何と申したのか？

「まあまあ、詳しい話は後々。」

とりあえず、あの子を倒しちやえばいいのね？」

さも些事であるかのように問う武蔵にどう答えたものかと迷った末に刹那はおずおずと頷いた。

「了解！ あ、コレなんかサーヴァントだった時みたいかも。懐かしいなあ」

そう言いながら二刀を抜いてゆつくりと小太郎の元へと歩き出す武蔵。

「あ、君たちは先に進みなよ。たぶん、もう時間ないと思うからさ」

背中越しにそう告げられた刹那は本来の目的を思い出し急いでネギに再度声をかけた。

「先生、我々の目的をお忘れか!？」

「っ!!」

その言葉に反応し、またいつの間にか現れた武蔵に困惑するネギに、武蔵は声をかける。

「うわっ、可愛い。……あ、ゴホン！」

君、ここは私に任せて先に行きなさい」

一瞬、素が漏れ出たもののすぐに気を取り直してシリアス気味に告げる武蔵は二刀を構えた。

「あ、あなたは?」

「なんや、姉ちゃん。俺今忙しいねん。」

邪魔するなら眠ってもらおうで？」

勝負を邪魔されて少し気が立っている小太郎に、武蔵はしかし憚然とした態度で接する。

「そう言いなさんな。これでも結構、武芸には自信があるのよ？」

……舐めてかかるなら、一瞬だからね」

ゾワツ、と急に溢れ出した武蔵の覇気に小太郎は全身の毛を逆立てた。そして、これまでの敵の誰よりも彼女が強大であることを悟った。

その間にネギたちは彼の杖に再び乗り、祭壇を目指して発進する。しかし小太郎はそれどころではなかった。

「……何者や、姉ちゃん？」

「新免武蔵。さつきも言ったけど？」

小太郎でさえ、その名前には聞き覚えがあった。

これでも強い奴は好きな彼だ。いつかどこかで宮本武蔵という剣豪の存在も当然、見知っていた。

だからこそ、女性であるこの武蔵に疑問を抱く。

「嘘つけ、武蔵は男やぞ」

「やっぱ『こゝこ』でもそうなのかあ……ああいや、そうでなきゃ存在できないっばいしね」



残念そうにしながらも諦めたように語る武蔵は、次にこう言い返した。

「なら、実際に戦ってみて判断してほしいな」

達人、それすら超越した『何か』。

剣の道では『空位』と称されることもあるその境地に至った武蔵の眼光は小太郎でさえ嫌でも理解する力を持っていた。

「へ、言うやないか。なら、見せてみるや!!」

ドバツ、と大量の影を撃ち放つ小太郎。

対して武蔵は二刀の構えのままに笑みを浮かべた。

二体の鬼の対処を他に任せ、リツカたちはひたすらに祭壇へと急いでいた。

例によって礼装で脚力を強化しての移動。もちろん、魔力は『直』に与えている。

先ほど感覚を無くした脚は『また魔力を礼装に入れて無理やり治して』使っている。痛いのが耐えられないほどじゃない。

「距離、400。もうすぐです」

メカエリチャンの言葉に頷く。

ここからは全力だ。もはや身体の心配などしてられない。

正しく神霊のスクナなど顕現させてたまるか。

森を駆けるその途上。

以前の川辺のようにまた拓けた場所に出た。

こういうところ偶にあるなあ、などと考えつつも止まる必要もないので一気に駆け抜けようとした。

その時――

「つ!!!」

凄まじい悪寒が身体中を駆け巡った。

肌を引き裂かんばかりの、特大の殺気。

或いはただの気配だけか。

もはや区別が付けられないほどに強大な力が前方に現れた。

そして、それはつい最近知ったばかりのもの。

ちようどその場所へと到達した俺たちは再度、その脅威を目にすることになる。

「ついさつきぶりだな、人間。」

……いや、言葉は不要だ。ただ『かのマスターを抑えろ』と言われたからには、出来るならばこの場で刈り取り取りたいだけだ」

大剣の騎士、あるいは戦士。または王。

判別がつかないが『凄まじい力を持った存在』とだけは認識できるソレがまたも目の前に現れた。

どこかこちらを見ていないような虚ろな、しかし鋭い瞳を向けながら神霊クラスのセイバーはそう告げた。

告げてすぐに、こちらに剣を振るった。

「っ!？」

反応することなどできようはずもない速度で、いつの間にか目の前に迫った大剣。

今度は宣告もなく即座に振り下ろされる。

「ぐう!!」

「くっ!」

しかしそれを傍らの二人のサーヴァントが防いでくれた。

エリちゃんの槍に、メカエリチャンの拳。二つでようやく『勢いを止めた』だけで、じわじわと押されていた。

「ほう、やはり『この』サーヴァント共は面白いな。

推測されるステータスを超えた動きをする。

剣聖しかり、貴様ら然り」

あくまで余裕のままに語り始めたセイバーは一息吸うと、一気にエリちゃんたちを弾き飛ばした。

「きやあー！」

「ぐっ!？」

セイバーということを鑑みてもあり得ない膂力。軽々とエリちゃんたちの身体を遠くへと飛ばしてしまった。

たった一振り。なす術はなかった。

「だが、貴様らでは相手にならない。

終幕だ、偽なるマスターよ。

偽りの英雄譚はここで終わる」

冷めた目つきでセイバーはそう言い放つ。

ゆつくりと大剣が持ち上げられる。

「……終われるかよ!!」

余裕を見せるセイバーにガンドを撃ち放つ。

しかし、簡単に対魔力で弾かれた。

「脆弱な一撃だ。聞かぬと知っていのように」

だからつてここで終われるか。

俺が倒れればエリちゃんたちは消滅する。

あくまでこの世界に繋ぎ止めているのが俺という存在だとダ・ヴィンチちゃんからも言われている。

なら、ここで終わるわけにはいかない。

「……?」

なぜ、そのような目をする。

貴様の終わりは目に見えているというのに」

訝しむセイバーを他所に、俺は全力で駆け出す。

礼装に全力で注いでおいた魔力を一気に解放して走り出す。

「つ!? が、ああ!!」

しかし、同時に両脚を襲った痛みにより思わずその場に転げた。

引き裂かれるような鋭い痛みは、しかし段々と消えて、またも、今度は両脚の感覚が無くなつていく。

「……見るに耐えん。」

今、首を落としてやろう。せめて安らかに眠れ」

言つて、呆気なくセイバーは大剣を振り下ろした。

なんの感情もなく、ただ作業のように軽く振るっただけなのに凄まじい速さで迫る刃に、俺はただ見ているだけしか出来なかつた。

「おつとおー！」

だが、ここで、『彼女』が現れた。

来てくれた。

「……見ない顔だ。新手か」

二つの刀で大剣を押し留めるのは着物の美女。

派手な着物を着こなす彼女は無双の劍豪。

直にお目にかかるのは初めてだというのに。

その背中、今はひたすらに頼もしい。

ようやく、俺も会えた。

「武蔵、ちゃん」

「久しぶりね、リツカくん。」

「……あれ、なんか雰囲気変わった？」

振り向くなり、不思議そうにそう尋ねてきた武蔵ちゃん。

そんなすぐ分かるもんかね、中身の違いつて。

「……うん。だけど、今は貴女の力が必要だ。」

「どうか、俺を助けてくれ」

それしかない。

今、なんとかこちらに戻ってきたエリちゃんたちがセイバーを囲んでいるが、どう足

掻いても彼女らでは相手にならないだろう。

ならばと俺は情けなくも武蔵に助けを懇願した。

「いいよ。だってそのために走ってたんだし。」

「幾つか拠点も落としたんだから」

軽くそう答えて、彼女はセイバーの大剣をなんと押し返した。

「つ、やるな女剣士よ。」

「……先刻の剣聖のごとき技よ」

「剣聖？」

……ああなるほど。彼ともやったのね。

でもそれは後回し。今は貴方の相手をしてあげるわ」

二刀の構えのまま武蔵は好戦的な笑みで語った。

対してセイバーも大剣を構え直す。

「ふむ。ここで『貴殿を足止めする』のもまた命と判断する。

然らば、ここで斬り伏せても問題なからう」

またも、セイバーの魔力が上昇した。

もはや、サーヴァントで測るべきではないその出鱈目な魔力量に俺は計測を中断する。

「ありがとう。詳しい話は後で必ず」

「いいって。……なんか、サーヴァントとしていながら何となく事情が分かるしね」

サーヴァント。

放浪の彼女本人ではなく、彼女もカルデアの記録から呼び出された存在ということか。

となると——

「……」

俺はポシエツトに伸ばした手を、しかし引つ込めた。



そして『また』魔力を使って脚を動かす。

今度は左耳が聞こえなくなったが、これくらいなら支障は少ない。

「すまない、ここは任せる」

「はいはい、早く行きなさい」

彼女の言葉を受けて、俺は行動を再開した。

走り去るリツカの背を僅かに眺めて、武蔵は粗方の事情を悟った。それは彼女に限らず、『彼の縁』で召喚された殆どのサーヴァントが見るだけで察してしまうもの。

即ち、彼が彼ではないということ。

具体的にどう、という話ではない。

違うのだ、明らかに。しかし、それでも『どこか懐かしいような』、『いつかどこかで、或いはいつも見ていたような』感覚も感じていた。

だからこそ、必ず一度は手を貸す。

なんなのかは分からないが、『彼も彼なのだ』とを感じるが故に。

「解せぬな。」

ダンタリオンめの語るマスターとは別人だろう、アレは。

なれど庇うのか、救うのか。

度し難い、非常にな」

セイバーは、そんな武蔵たちが理解できない。

それは彼とは無縁だからではない。

『人の王でありながら神の要素を取り入れてしまった』彼にとつては人間が複雑な感情で、あるいは『絆』で動くことが本質的に理解できないからだ。

もちろん、誇りを失っていない彼も『義理』と『義務』は理解している。しかし肝心の『仁義』が思い出せない。

何か、どこか、身体の奥底で感じるものはあれど明確に理解することが難しい。

それこそが彼の持つ『バグ』であった。

神にもなりきれず、さりとてヒトに戻ることもない。

狭間で移ろい行くまるで幻霊のような曖昧さ。

逸話の混成は彼に限った話ではないが、彼の場合は『全く異なる伝承が多過ぎた』。加えて原典も定かでなくモデルも不明となれば正式な召喚であっても何らかの不具合と  
いうものが出る可能性があった。

ただしく『地』の英雄でありながら死せず『嵐の王』となった彼は、全盛期と最期の『両方を取り入れていた』。それでも誇りは『王』であった頃のままに、色濃く残ってい

るのはセイバーというクラス故。

だからこそ不安定にして不変。

バグが生じてもその『運用』に支障はない。

「分からなくて結構。

今は、ただ剣を交えるのみ」

剣豪としての顔つきになった武蔵が剣気を研ぎ澄ませた。

「……ふむ、それは分かる。

やはり、此度の我は戦士としての血が一層濃く出ているようだ」

無表情にして無感情な声。

「されど、なんとなく『楽しげ』なのは武蔵でも分かった。

「では、いざ!!」

「勝負」

宣言と共に、両者は刃を交えた。

## 京都・九

——誰か、我を呼ぶ声がする。

——否、我は既に死した身、滅びた者、『拒絶されし者』。故にこそこの地にて眠り鎮め奉られている。

マダ、殺シ足リナイ。

——我が末裔か。いい加減、お主も現実を見よ。

——我らはすでに『過去の遺物』。時代は過ぎ去り、争いの火種は燻るとも、世は太平に等しく。

——もはや、恨み、憎む世界ではなからうよ。

ソレデモ、私ハ、私タチハ、殺サレタ。

『家族』トノ、安寧スヲ、奪ワレ。

許スマジ、人ヨ、人類ヨ。

私ハ、人ヲ殺スモノ、世ヲ呪ウモノ。

忘レサセヌ、イツマデモ、イツマデモ殺シテ殺シテ殺シ、コロ、殺シ殺殺殺殺殺殺――

――ふむ、これも我の不徳の致すところか。

――良からう。我が末裔。その怨み、その無念。

――我が物として、いや、我が力お主のものとするがよい。

「っ、遅かったか!!」

セイバーの相手を武蔵ちゃんに任せ、祭壇まであと一步と迫ったところで、前方に巨大な光の柱が立ち上った。

その中からはゆっくりとだが、見覚えのある巨体がせり上がって来る。リヨウメンスクナ。

二面、四つ腕の大鬼神と呼ばれた古き神。

原作において描写されたそれと同じ容姿にて、そいつは現れた。

「反応あり、前方の光柱内からの反応です。規模はサーヴァントにも匹敵するものかと」  
メカエリチャンからの報告に、そんなにあつたのか、と素直に驚いた。  
いや、それでもまだ神霊としての力は封じられているのだろう。  
ならばその状態のまま封じ直すまで。

「ツ、前方50mにも反応あり！」

……サーヴァントです！」

まだいたのかよ！

「殺す。殺す殺す殺す。」

幼子、老害問わず皆殺しである」

メカエリチャンの報告のすぐあとに、前の木々の間から一人の男性が姿を現した。  
分厚い着物を纏い、裾をずりずりと引き摺りながらも何事か呟いている。

その髪は長くボサボサで、しかし顔は壮年の凛々しい男のものであつた。しかし、赤

く爛々と輝く瞳は狂気に堕ちている。

即座に戦闘態勢に移行する二人と共に俺もガンドを構える。

あと何発打てるか分からないが、この場を超えねば勝利はない。

「邪魔立てするか、またも。またしても。

……良からう、殺す。その傲慢を許し、殺す。生きようと足掻くことを許し、殺す。殺して、殺す。殺す殺す殺す！

貴様ら『ヒト』は全て死に晒せ!!」

発狂したように叫びながら、男は式神をばら撒く。

それらは魔力によって形を変えていく。

鬼。日本の角と巨躯。長い牙と棍棒を担いだ姿はまさしく日本人の誰もが想像するであろう鬼のものであった。

それらが複数体。

「式神使い……いや、『藤原千方』ふじわらのちかたか!!」

先ほど襲ってきた四鬼、そして鬼の形の式神を使うサーヴァントとくればもはやその正体は分かりきったようなもの。

かつて地方の豪族であり、朝廷から討伐軍を出されてもそれらを四体の鬼で撃退して

いたという陰陽師でもある男。朝廷側は千方がその地で悪政を敷いていたと言うが、現地に伝わる話とは真逆であったりもするが定かでない。

だが、こんなにも狂気に陥っている話は聞いたことがないが。

「殺せ、殺せ殺せ。」

全ては死によつて償われる。……いや、死すら生ぬるい。貴様ら『ヒト』はその罪を永劫にして悔いるのだ!!」

もはや理性は感じられない瞳で狂つたように喚く男。

これが、千方だと?

いや、よくよく考えればサーヴァントの真名などあつてないようなものが殆どだった。

アストルフオキゆんだつて女装好きの可愛い男の娘だしね。

「連戦だが頼むぞ二人とも」

「任しといて!」

「戦闘行動に支障なし。指示を、マスター」

士気は上々。ならば突撃あるのみ。

「鬼どもを蹴散らし、サーヴァント本体を叩け。」

「いくぞー!」



「おー！」という可愛らしい掛け声を聞きながら、俺らはサーヴァントとの戦闘に入った。

「ほう、なかなかやりますねあの少年たち」

賞賛しながらダンタリオンが眼下に眺めるのはネギとその生徒たる女子中学生二人。

彼らは祭壇まですでに辿り着き、木乃香奪還を終えてフェイトとの戦闘を繰り広げていた。

その際に刹那が烏族とのハーフであることで一悶着あったものの、結果として木乃香の奪還は成功していた。

『あとはスクナを倒すだけ』。

「セイバーも送り出してしまったことですし。

バーサーカーの降臨まではゆっくりと、英雄の卵の奮闘ぶりを眺めることにしましょう」

そう言つてパチンと指を鳴らした彼の背後に、大きな椅子が現れる。

それに腰を下ろし、足を組んだ。

『人の生み出した殺戮兵器』を前に、彼らはどう戦うのでしょうか。興味深いですね」  
ダンタリオンはあくまでどちらが勝とうとも構わなかった。

彼らが何らかの奇跡で木乃香嬢を奪還するならばそれもよし。あるいは『解き放たれた呪詛』に殺されるならばそれもよし。

結果はどうでもいい、彼にとつては人を理解するためだけのお遊びに過ぎないのだから。過程こそが大事なのだ。

ダメだったならばまた別の機会を探せばいい。

主からは『人形どもとの共闘』を申しつけられているものの、その計画の成否について問わないとも聞いている。

加えて、共闘の命を違えないならば『好きにしている』と。

「ならば自由にさせてもらいましょう。」

……願わくば、かのマスターにもご参加いただきたかったが」

それは無理だろうとダンタリオンは考えていた。

なにせ、あのセイバーを討伐に赴かせたのだから。

些か、過剰戦力であったかとも。

しかし、その程度の修羅場なら『彼はいくつも乗り越えてきた』。だからこそ念入りに、スクナの降臨までの時間稼ぎを行なった。

すでに『封印状態』のスクナは姿を現している。

あとは『枷』を取ってやればいいだけ。

「……いや、それは彼らに任せましょうか」

にやり、と彼は嗤う。

ふと思いついた名案に思わず口角を上げてしまったのだ。

なにせ、

『自らが制御を解いてしまったおかげで現れた神霊に、どう反応するのか、どう争うのか』

という素晴らしい考えを思いついてしまったのだから。

「で、どうするんだい？」

光柱からせり出すリヨウメンスクナを背に、フェイトは冷静に言い放った。

目前では満身創痍のネギたちが荒い呼吸をしながらも立っていた。その瞳に撤退の二字は無く、いずれも『勝つ』という意思が確固として刻まれている。

それはそれとして、戦況は確かにネギたちの圧倒的劣勢であった。木乃香を取り戻したものの、すでに出てきてしまっているスクナと千草、フェイトをどうにかしなければならぬのだ。

それでも彼らは諦めていない。

なぜなのか、そうフェイトが疑問に思ったところで、『ネギは確かにニヤリと笑った』。

「つ、何を企む、ネギ・スプリングフィールド？」

「何も。ただ、時間稼ぎがちゃんと出来たことに安堵しただけさ」

ネギのその言葉にフェイトが何かを返す前に、背後の影から何者かがヌルリと現われ

出でた。

「っー！」

咄嗟に振るわれたフェイトの腕を、しかし『何者か』は容易く受け止める。そしてその全身をズルリと抜け出て露わにした。

些か刺激的な衣装に黒いマントを羽織り、ブロンドの長髪を月光が照らし上げる。

「貴様は!?!」

「くく、うちのぼーやが世話になったな」

幼子の姿をしながら膨大な魔力を放つそれ。

鋭い牙を口の端に覗かせながら黒く縁取られた黄金の瞳を有するそれはまさしく、

『吸血鬼』。

「エヴァンジェリン!!」

魔法界において有名過ぎる悪党の出現にフェイトは苛だたしげに呟いた。

その直後にエヴァは彼の懐に軽く入り、拳を撃ち放った。

「っ!!!」

たったそれだけでフェイトは湖の彼方まで弾き飛ばされる。障壁などあつてないもののように、軽々とエヴァはフェイトを殴り飛ばしていた。

「ふむ、『闇の福音』とやらですか」

その光景を眺めながらダンタリオンは興味深そうに呟く。

彼の預かり知らぬことではあるが、エヴァは事前にネギからの連絡を受けた学園長によつて半ば強引に『呪い』を解いてこの地まで来ていた。

もつと言うと、その直前にネギたちに『念話』を繋いで到着までの時間稼ぎに徹するように言い含めておいたのだ。

まあ、『登校地獄』の呪いの精霊を誤魔化すために今も学園長は『エヴァの京都市行きは学業の一環である』という旨の契約書にハンコを押し続けているのだが。

そんなこんなで現れたエヴァは、一緒に連れて来ていた茶々丸に『結界弾』を撃たせてスクナの動きを封じ込めていた。

科学を取り入れた技術を以って作られたこの結界弾は強力であり、すつぽりとスクナを覆っている。

その間にエヴァは特大魔法の詠唱を行う。

エビゲネーテート  
「来れ！」

タイオーニオンエレボス

「とこしえのやみ！」

ハイオーニエ・クリユスタレ

「えいえんのひようが!!」

エヴァの詠唱と共に、半身が抜け出たスクナを根元から氷が覆っていく。

「おわああ?」

その肩に乗っていた千草は、その衝撃によろける。

それに文句を述べる千草に、エヴァも煽って返しながら追加の詠唱を終わらせた。

コスミケー・カダストロフエー  
「『おわるせかい』」

「……フツ、砕けろ」

パチン、とカツコつけて指を鳴らしたエヴァ。

それに応じて全身を氷漬けにされたスクナの身体にヒビが入る。

「これで、さらに貸しひとつ……ヒビ」

楽しそうに眩きながらポーズを決めるエヴァ。

その背後でスクナは『全身を砕けさせた』。

そのあまりの巨体、それが崩れたことによりいくつものデカイ氷塊が落ちていくのは当たり前ながら、それらが放つ冷気も凄まじく、辺りは煙によって包まれた。

ガラガラと、バチャバチャと落ちていく幾つもの氷塊を前にエヴァは高笑いを続ける。

「バアカめ！」

伝説の鬼神か知らぬが、私の敵ではないわ!!」

その光景にネギたちも沸き立つ。

「や、やったー！」

すごい、エヴァちゃん！」

声援を送る明日菜に、エヴァも満足そうに笑みを浮かべる。

ー同時に、それらの光景を眺めていたダンタリオンも口の端を上げた。



「くそ、なんだこいつら!?

意外に強いぞ!」

一方、キヤスターと戦うリツカたちも苦戦を強いられていた。

すでに連戦ばかりで消耗した彼らにキヤスターが差し向けた式神。鬼の形をしているだけかと思えば、その能力は強力だった。

サーヴァントには流石に及ばずとも、シャドーサーヴァント、その末端には数えてもいくらいには高い能力値を誇っている。

「くつ、ソニックシャワー!」

バババ……、と指からマシンガンを撃ち式神の一体を蜂の巣にするメカエリ。しかし、その周りには未だ何体もの式神が蠢いている。

「どうなってんの!?

幾ら何でも出し過ぎじゃない!」

そこへ、同じく一体の式神の腹に槍を突き入れて仕留めたエリちゃんが降り立って愚痴を述べた。

彼女の言う通り、『これは異常であつた』。

シャドーサーヴァントにも匹敵する式神。そんな代物を湯水のように次々と作り出すキャスターの『魔力量が異常』なのである。

加えて、絶大な魔力を誇ったという逸話もなく、そもそもが四鬼を操ったという人物でしかないキャスターがこれほどの魔力を持つとは、リツカも考えられなかった。

と、苦戦する彼らを他所にキャスターは突然ピタリと動きを止めた。そして光の柱の方へと目を向ける。

「来た。遂に、遂に我が本体が!!」

狂気に満ちた叫びを上げた彼は、直後に一瞬で姿を消してしまった。

「っ!!」

おまけに、溢れんばかりに周囲を覆っていた式神たちも一緒に消え去っている。

あまりにも唐突な出来事にリツカたちは揃って啞然としてしまった。

しかし、最も早く立ち直ったりリツカが声をあげた。

「なんだか分からんが、今のうちにスクナをー」

そして言い掛けた彼の言葉を遮るようにメカエリは、報告を行なった。

「光柱付近の魔力に変動あり！」

「これは……!!」

焦った様子の子のメカエリに、リツカも己の礼装で急ぎ反応の探知を行う。

「……………これが、サーヴァントだと?」

そしてキャッチしたその反応、『サーヴァントでありながら、かの大剣のセイバーをも超える魔力量を誇るソレ』に恐怖した。

「?……………アレは、何でしょう?」

勝利に沸き立つネギたちの中で、最初にその異変に気付いたのは刹那であった。

魔法使いでもなく普通の女子中学生たる明日菜は仕方ないとして、消耗の激しいネギも言わずもがな。

そんな彼女らにカッコいいところを見せられたエヴァも嬉しきで索敵を怠っていた。「え、どうしたの、刹那さん？」

そんな刹那の様子に明日菜が不審そうに声をかける。遅れて、ネギとエヴァも刹那の様子に気がつく。

「何か、巨大なものが……いえ、これは」

煙が晴れていくにつれて、段々と露わになるソレ。

ソレに刹那も段々と最悪の想定を始めていた。

次に、エヴァもソレの反応に気が付いた。

「……おかしいな。確かに壊したはずー」

依然として佇む魔力に訝しむエヴァに、茶々丸からの通信が入った。

『……対象、未だ健在。』

いえ、その魔力も膨張し続けています」

「なんだと……？」

確かに手応えはあった、とエヴァは疑問を深める。

事実としてそれも正しかった。

確かに彼女は破壊した。

『リヨウメンスクナという制御装置を』。

そんな彼女らの元に、燕尾服の紳士が現れた。

宙に浮かびながらステッキ片手に彼女らを眺めている。

「……何者だ？」

得体の知れない闖入者の存在に、エヴァは即座に爪を構えて警戒する。また、この紳士の魔力の『底が知れない』ことも警戒する要因となっていた。

そんなことは御構い無しに紳士は仰々しく拍手をした。

「素晴らしい。」

まさか『魔導師』とやらがここまでの力を持っているとは思いませんでした。

闇の福音はもとより、貴女がた若い世代の力と意地にも感服します。まさに、新世代」

芝居掛かった口調で語り始めた紳士に、エヴァ始め全員が訝しむ。そもそも、この紳士は一体何者なのか、と。

敵なのか味方なのか。

「再度、聞いてやる。何者だ？」

ドスの聞いたエヴァの警告。彼女は既に返答次第では即座に攻撃できるように小さく呪文を唱えていた。

「これは失礼。」

私の名は『ダンタリオン』。いやなに、単にこれから始まるショーのちよつとした種明

かしをしたいと思いますね」

微笑み語るダンタリオンは返答を待つことなく続ける。

「貴女方が復活を止めようとしたリヨウメンスクナ。

本当に、『あんなもの』なのでしょいか?」

少し口角を上げた彼の背後に、『巨大な人型の影』が浮かび上がる。

「っ、バカな!」

それは倒したと思っていたリヨウメンスクナ……ではない。少なくとも同じ姿ではない。

『数多の人面を身体に浮かび上がらせた鬼の形相のまさしく鬼神』。

四つ腕二面でありながら、その体色は先ほどまでの白亜にあらず、もつと痛々しくて悍ましい。黒と赤で彩られた醜悪な巨体。

「飛弾の地にて討ち取られた大鬼神。

かつてはその地を守護する『土着神』でした。

……しかし、朝廷に屈したがために貶められ、その地も荒らされることになった。当時の神官はその暴虐に怒りを覚えました」

彼の語りを他所に、背後の影は明確にその姿を露わにする。

それらはすでに全身が抜け出ており、湖にしっかりと二足で佇んでいた。

「あ…………あ…………」

あまりにも巨大。

半身だけであつた先ほどとは比べものにならない。単純に『二倍でも計算が合わない大きさ』。

「だから最期に呪いをかけました。

『ただ殺すための力を』。『群れなす朝廷軍を討ち滅ぼす力を』。自分たちが受けた屈辱、恨みを全て込めて『神の在り方を捻じ曲げたのです』」

「…………これが、神」

呆然と呟いたネギの言葉は的を射ている。

まさしく神。少なくともその姿は当時のものであるのだから。

「残念ながらそうまでした鬼神は封じられてしまいました。ここからがまた面白いところですね?」

当時、封印を施した者は『それだけでは呪いが抑えられない』ことに難儀してしました。

…………そこで彼らは考えました『恨みを受け止める受け皿を作ればいいのだ』と」  
かつて、滅ぼされ封じられた鬼神には子孫がいた。

当時の陰陽師たちは『その子孫に全ての責を負わせた』。

「そうして出来たのがとある呪術師の家系。

彼らは何世代にも渡り、ずっと全ての恨み辛みを受け止めてきた。

ああ、なんたる悲劇か。

……そうして、世代を経て、遂に彼らは耐え切れなくなつた」

なぜ、自分たちがこんな目に合わねばならないのか？

なぜ、皆、我らを憎むのか？

——なぜ、私は家族を殺されねばならないのか？

「それが『十八年前の真実』。

家族を惨殺された『彼』は無事に『反転』し、自分たちの祖先の真実を知つた！

そしてあろうことかその力を利用してしようとした！

悲劇の人物が、今度は世にあだなす復讐鬼に成り果てるはこの国でもお約束のよう

にありますね」

研究し、ようやく鬼神を操ることに成功した。

「とはいえ、今回はナギ・スプリングフィールドに阻止されたようですが。」

……まあ、今回に至つては『拘束具すらあなたの方が外してくれましたしねえ』？」

にやり、と悍ましく狂つた笑みを浮かべる彼に、ようやくネギたちは彼の語る話の意

味を理解した。



「まさか、『まだ本気ではなかった』と?」

あれだけの魔力、存在感を出しながらスクナは未だ『封印状態にあった』。その事実を正しく理解した時、彼らは初めて今回の敵の強大さに気付いた。

「……そういう魂胆で、私に、破壊させたのか。」

外道め」

憎々しげに呟くエヴァにダンタリオンは心外と言わんばかりに否定する。

「まさか、あなた方が勝手に破壊したのでしょう?」

いえ、いえいえそこには大変感謝しておりますとも。

だからこそこうして、『本体を引きずり出せたのですから』」

心底愉快そうに微笑むダンタリオンに、エヴァは思わず歯を軋ませた。

そんな彼女に見せつけるようにダンタリオンは拳を突き出し、言葉を紡ぐ。

「しかし、私とて『神霊の制御』など面倒ですからね。」

ここは本職にお願いするとうましよう。

……「令呪を以つて命ずる、キャスターよ今すぐ我が下へ」

突き出した拳の甲が赤い輝きを放つと同時に、彼の隣にワープするようにして新たな人物、キャスターが姿を現した。

「おお!!」

我が懐かしき本体!!!」

転移早々歡喜の声を上げるキャスターに、ダンタリオンは冷静に命令を下す。

「キャスター。その本体の制御を。」

……あとは貴方の好きにして構いませんから」

楽しそうに、愉しそうに嗤うダンタリオンの、キャスターは目もくれずスクナの制御を始めた。

一瞬で刻まれた五芒星はスクナの全身を包み、やがてキャスターもその頭の上へと浮かび上がる。

「如何です、いかがですか?」

自らが解き放ちし鬼神の暴虐。

果たしてあなた方に止められるでしょうか?」

楽しみで仕方がないとばかりに高笑いをあげたダンタリオンはやがて、魔法陣を出現させてどこかへと去っていった。

残されたネギたちは一様にして暗い表情をしている。

否、絶望に沈んでいた。

解き放たれた両面宿儺の圧倒的な魔力に。

「……くっ、怯むな!!」

たかが一撃を持ち堪えただけに過ぎん!

……仕留め損ねたならば今一度、食らわしてやるまでだ!!」

エヴァは恐怖に竦む彼らを激励しながらも、再び宙へと飛び立ち魔法の詠唱を開始する。

それと同時に念話にて茶々丸に再度、結界弾を撃つように命じる。

『了解』

指示を受けた茶々丸も、素早く次弾を装填し、二発目となる結界弾を両面宿儺に向けて撃ち放った。

しかし――

『っ、結界弾。弾かれました!』

「なんだと!」

確かに着弾し、結界は展開された。だが、両面宿儺はそれを容易く打ち破った。

それは神霊という存在ゆえのごく当たり前の性能。

神秘の薄れた、いや、『神秘の混迷した現代』においても色褪せることなき確かな神の力。



濃密な魔力の籠ったそれは湖に特大の波を起こすほど。

そして、それを直に受けたものに『堪えきれない恐怖を与えた』。

「うあ……あ……あ……」

全身を突き刺すような鋭い『殺気』。

ネギは思わずその場に尻餅をついた。

刹那ですらガチガチと本能的恐怖から歯を打ち鳴らし膝を震わせている。未だ目覚めない木乃香を抱えたままに。

「……っ」

明日菜は声すら出なかった。

恐怖、ただそれだけが身の内に起こり、絶えず全身を駆け巡っている。気を保つことすら難しい。一瞬の緩みで即座に意識を飛ばしてしまうだろう。

事実としてその咆哮は『殺気』だけではなかった。

ただの殺気ならばまだ、エヴァも耐えられた。

しかし、『数多の怨霊が放つ憎悪』を全身に浴びれば誰であろうと膝を折るより他になかった。

千四百年。ひたすらに『恨み』を溜め込んできたこの巨神の放つ呪詛は並みのもので

はない。

人では到達できない領域にあるまさしく神の力。

幸いにしてサーヴァントである今は、その一声で人が死に至ることはない。ただ、『呪いとして放てばその限りではない』。

今この場にて誰も意識を飛ばしていないのは、ネギが英雄の血を引き『抑止に背中を押されているだろう人物』であること。

明日菜が身に秘めた『幻想を拒絶する異能』によるもの。

刹那が『半分人ではないからこそ完全な理解に及ばない』がためのもの。

木乃香は『その身に秘めた高貴な血筋による』もの。

エヴァは言わずもがな吸血鬼という人外であるが故に、『対人類用呪詛』の影響を受けないだけなのだ。

完全に、抵抗するという行為を忘却してしまった彼女らに。

鬼神はゆつくりと歩みを進め始めた。

その度に、湖の水は『呪詛に穢され』黒く濁り腐っていく。

鬼神が近づくと度に、『ネギたちの肌が黒ずんでいく』。

歩くだけで、ただそこにあるだけで世界を滅ぼしていく鬼神に、しかしネギたちは『どうやって相手にすればいいのか』分からなかった。

ただしく神。サーヴァントの枠にありながら神霊としての能力を保持する鬼神はもはや天災と呼ぶ他にない脅威だった。

その頭上に浮かびながらキャスターは愉悦の笑みをこぼす。

「ああ……素晴らしきかな我が本体、鬼神！」

いや……

『飛弾守護大権現・両面宿儺神』さま!!』

## 京都・十

「ハア……ハア……!!」

刀を地面に刺し杖代わりにしながら武蔵は荒い呼吸を繰り返していた。その身体は傷に塗れ、血に染まっている。

「見事。同じ霊格であれば勝てたかどうか」

対して大剣のセイバーは傷一つなく……否、その鎧に細かな傷を付けていた。さりとして余裕を十分に感じられる佇まいである。

「冗談……あんた、バケモノじゃない」

「否。我が霊基は『揺らいでいる』。

だからこそ貴殿の魔眼も上手く働かぬ。こと我に関することにはな」

加えて『神霊』。

正規ではなくとも確かにこのセイバーの霊基は神霊なのだ。

「……む？」

ふと、セイバーは背後に目を向ける。その先には光の柱が佇むばかり。

「ようやく解き放たれたか」



セイバーの眩きの直後、武蔵も現れたソレの『あまりの魔力量に驚愕した』。ただしくは強大な気配に勘付いた。

「……まさしく神さまってどこかしら」

口では笑いながらも心の底ではかのマスターの心配をしていた。

なにせ、あまりにも強大すぎる力を持つ巨神。武蔵がいる場所までビリビリと伝わってくる『呪詛』はとにかく『痛ましい』がゆえに。

ようやく祭壇のある湖に辿り着いた時、すでにそこには『両面宿儺』が悠然と佇んでいた。

黒と赤の体色をした巨軀の鬼。数十mはある。

「馬鹿でかいな……、いやネギたちの反応は」

全身を視界に収めて改めてその巨体に圧倒されながらも、まずはネギたちの安否を確かめるべく魔力を探る。

「全員無事か、あとエヴァも来てるみたいだな」

幸いにもネギたちの反応は健在で、両面宿儺から逃げるようにして移動していた。

「マ、マスター。水が……」

メカエリチャンの声に水面に目を向けると、両面宿儺の周囲の水が黒く濁り、ブクブクと泡立ち腐っていた。

意識するとほんのりとだが腐臭が漂ってくる。

「なんだありや……腐ってるのか？」

水が腐るなど、どういう原理だ。

「報告。……工房との通信が繋がったようです」

続けて告げられた言葉に俺は僅かな安堵を覚えた。

ダ・ヴィンチちゃんに解析してもらえば対処法が分かるかもしれない。

「通信、繋がります」

ピピ、という機械音の後にメカエリチャンの目から通信映像が投影された。

ザッピング音を交えながら画面が映し出されそこにダ・ヴィンチちゃんが映る。

『やつと繋がった。大丈夫かい、リツカくん?』

どうやらあちらから通信を繋いでくれたらしい。

「すまない。連絡が遅くなった」

それから俺は手短にここまでの経緯を伝える。

通信をしようとして敵に襲われたこと、そのまま敵の追跡に戦闘と続いたために通信する暇がなかったこと。

もちろん、魔神柱や例のセイバーのこともデータ付きで送る。

『……なるほど、魔神柱とはね。』

いや、それならば尚のこと早々に連絡を寄越してもらった方が良かったのに』

全くもって返す言葉がない。

こんなことになるなら追う前に一報入れておいたほうがよかった。

『いや、今は両面宿儺とやらのデータ解析が先だね。』

……メカエリ君から送られたデータを見るに、ああこれは確かに“神霊”クラスだ』

やれやれ、と溜息をこぼしながらもダ・ヴィンチちゃんは話を続ける。

『獅子王ほどじゃない。アレは完全な女神だったが、この巨神は違う。まだ英霊の範疇だ』

「俺も把握している。魔力量はふざけているが、絶対に倒せない相手じゃない」

加えて、あの低速。理性も働いていないように見える。

『ただ、現在進行形で拡張している』

続くダ・ヴィンチちゃんの言葉に息を飲む。

「それはつまり、神霊に至る可能性がある、いや、戻ろうとしていると？」

『この速度だと、あまり時間は残されていないように思える。』

我々は何としても覚醒前にアレを仕留めなきゃならない』

ダ・ヴィンチちゃんが手元で端末を操作して画面内にデータを表示する。

『今分かっている情報を伝えるよ。』

まず、アレは崇り神だ。辺りに強力な呪詛を撒き散らしながら進んでいる。目的地は

不明、ただ特に目標はないと思われる。

また、放たれている呪詛は非常に強力で周囲の水が腐っているのは見間違いない。

い。アレは確かに腐っている。

存在の根本、概念に相当する深部にまで侵し呪い殺している。

現状、アレに近づくだけでも極めて重度な『呪い』をその身に受けることになるだろ

う』

ならば遠距離か。

エヴァがいるのであれば協力してもらいたいが。

『流石に彼女もこんな末路は望まないだろう。彼女自身は無事だったとしてもね。あまりにセンスのない結末だ』

なんか、ここ数日で急激に理解を深めたようなダ・ヴィンチちゃんとエヴァ。予想よりも上手くいつてるようだ。

「そうだな。……よし、ならばメカエリチャンにはスカートフレアとソニックシャワーでの攻撃を。」

エリちゃんには『竜鳴雷声』での超音痴攻撃で」

「音波ね!? あれ超音波!!」

前にも何回か言いそうになってたけど遂に言ったわね子イヌ!」

今はそのようなことを論じている場合ではない。

音波でも音痴でも然程変わらん。結局攻撃だ。

プンスカするエリちゃんは元気そうで微笑ましい。

「マスター。和むのは後で。今は敵の対処を優先させましょう。……あと、和むのなら私のメンテナンスで和んでください」

冷静に言い放つメカエリチャン。さらっと上級者向けの要求をしてきているが俺はロボ娘のメンテナンスでも欲情できる自信がある。

安心してほしい、俺はロボ娘の味方だ。

「よし、やる気出てきた。」

さあて、始めるか二人とも！」

「了解。……武装のロックはもはや必要ありませんね。」

全武装、ロック解除」

ガシヨン、とかっこいいSEを鳴らすメカエリチャン。そういうところマジでイカしてる。

「はあ、流石にこう続けてだと私の喉も渴れてくるんだけど」

喉に手を当てて発声を確認するエリちゃん。今日も可愛いよ。

「エリちゃんの声、まだまだ聴きたいなあ」

「えっ、そ、そう?」

……仕方ないわねー、それじゃあアンコールに応えるわ!」

鶴の一声とはこのことではないだろうか。

声援一つで限界突破する彼女は、その点においては立派なアイドルだと感心している。

『くれぐれも油断はしないように。』

分かってると思うがアレは『確かに神霊級だ』

「ああ、先ずはネギくんたちと合流する。」

別々に動いてもメリツトはないからな」

というか、両面宿儺に追われている現状は看過できない。

だが、今、彼らは祭壇におり湖に架けられた橋は両面宿儺に粉碎されてしまっている。

「メカエリチャン、俺を乗せてくれ」

「ハア!?! い、いきなり何を言っているのですか!」

この状況で……正気ですか!?!」

提案したらいきなり怒られた。

一瞬意味がわからなかったが、すぐに彼女の勘違いに思い至る。というか俺だって、こんな場面でセクハラ働く気力はない。

それよりも度重なる礼装の使用で意識を保つのも少々危うくなってきたのが事実だ。

「違う、背中ね。背中に乗せて飛んでくれってこと」

「え、ああ……紛らわしいですね。」

……ほら」

そう言つて両手を広げてこちらに向くメカエリチャン。

いや、ほら、と言われましても。

「何してるの、早く乗りなさい」

「え、いや、へ？」

背中だつて言つてんだろ。

「どっこつて、私に乗るのでしょう？」

抱っこしてあげるから、ほら」

ほら、て。

マジで？

「え、なに。何してるの二人とも？」

エリちゃんが困惑したようにこちらに問いかけてくる。

別にいやらしいことじゃないのに、なんか恥ずかしくなってきた。

「ええい、まどろっこしいわね！」

と。突然俺を抱き上げるメカエリチャン。

その様はまさしくお姫様抱っこ。

「ひ、ひええ……」

「なぜ顔を覆っているのです？」

……まあいいでしょう、発進します。しつかり掴まっていなさい」

羞恥心で死にそうな俺を他所に、彼女は急速発進。ゴオオ、と空へと飛び上がってしまつた。ふわりと浮く感覚が全身を覆い慌てて彼女の首に抱きつく。



あと、大事な部分がふわっとした。気持ち悪い。

「むう、エリチャンアイの邪魔です。もう少し離れてください」

飛行中に無茶苦茶言ってくるメカエリチャン。

「馬鹿言うなよ、これ以上離れたら落ちちやうだろ！」

「なにを情けないことを……」

この程度で落ちませんよ、落ちても拾います」

落ちてる時点で手遅れだよ！

「子鹿のように震えて、そんなに怖いのですか？」

「悪いかよ。俺、高所恐怖症なんだよ」

アドレナリンマシマシの時は大丈夫。

冷静に認識すると、一步も動けなくなるアレだ。

前世でも飛行機とか毎度死なないように必死に神様をお願いしていたくらいだ。

俺は悪くない。

「……フフ」

「ああ、笑ったな!？」

今、笑ったろ!？」

情けなくて悪かったな！

今もなんとかちびらないように我慢している。

「いえ、卑下したわけではありません。」

意外と、可愛い部分があるのだな、と。

そう思ったのです」

柔らかい笑みで語る彼女に、俺は思わず言葉を詰まらせた。

「……貴重なデータです。」

メモリに嚴重に保管しておきましょう」

「うおい！ やめろ、今すぐ消すんだメカエリ」

「消しません、帰ったら幾つか予備をコピーして……」

やめろお！

ていうかコピーってなんだよ、嚴重に保管するんじやなかったのか!?

「コピーして、それらを嚴重に保管します。」

末代まで残すべきですからね」

なにその壮絶な恥。

死んでもからも情けない姿を子孫に見られ続けるってどんな仕打ちだよ。

「ほら、もう着きますよ」

「ゆっくりな、ゆっくり降りて！」

やれやれ、と言いつつちやんとゆっくり降りてくれるメカエリチャン大好き。

着地時に、お姫様抱っこされている俺の姿にネギくんたちが何とも言えない表情をしていたのを、俺は認識しないようにした。

認めなきや無いのと同じだよ。

「ちよつと、置いてかないでよ子イヌ」

無事に地に着けたところで、隣にエリちゃんが実体化した。

発進時から霊体化して付いてきてるの知ってたからね。

「ちゃんと近くにいたのは感じてたよ」

「感じっ!?! 子イヌって、そういうこと平気で言うけど人としてどうなの? やっぱり

死ぬの?」

なんで死ぬことになるんだ……。

エリちゃんの謎理論は分からないが、俺はエリちゃんを愛しているからこそ堂々と言えるのだよ。

「お前ら、なんでこんな状況でイチャイチャできるんだ?」

「やっぱり死ぬのか、リツカ?」

「げんなりした様子のエヴァにも言われた。」

「だからなんで死ぬことになるんだ……。」

「……いえ、あなた方のおかげで少し、平静を取り戻せました」  
乾いた笑みで語る刹那。

その腕には眠ったままの木乃香。

ネギくんたちは、祭壇の裏手にある方の橋を逃走中だった。

全員、焦燥しきった顔をしている。

……そして、その肌は所々黒く染まっていた。

『おっと、これはかなり呪詛を受けてしまっているね』

「うわ、びつくりした!!」

なに!？」

俺の腕に取り付けられた機器から突然、映像が宙に投射されダ・ヴィンチちゃんが映し出された。

いきなり出てくるなよ。

今回に関しては明日菜に全面的に同意する。

「俺たちの、なんだ、オペレーター？」

いや、上司？」

改めて考えるとダ・ヴィンチちゃんってどういう扱いになるんだろう。オペレーターではあるが技術者でもある。

加えて俺のサーヴァントでもある。

『まあ、細かい話は後にしよう、とりあえず気の良いお姉さんとも認識してくれ。君たちの味方で間違いない。』

……それよりも、君たちの肌。その呪詛の侵食率は捨て置けないな。

誰か、呪詛、いや回復魔法を使える人物はいないのかい？』

ダ・ヴィンチちゃん言葉に、一同沈黙する。

刹那は生粋の剣士、明日菜はそもそも魔法使いじゃないし例の力もある。ネギくんも治療は苦手らしいし、エヴァも不死身の身体にかまけて治療系魔法の習得は怠っていたという。

詰みである。

まあ、木乃香お嬢様がネギくんとチューすれば万事解決なのだがな。どうしてか今も眠っているのが不可解。

『つ、リツカくん！ 今すぐそこから離れるんだ、敵の攻撃が来る！』

急にダ・ヴィンチちゃんが慌てたように伝えてくる。

反射的に両面宿儺の方を見るとー

「グ………  
■■■■■■■■■■  
—————  
!!!」

大口を開けて、獣のような、狂人のような、また明確に形容し難い雄叫びのような何

かを放っていた。

それらは数多の憎しみが文字のような、模様のようなナニカに視覚化され、さながら嵐のごとく風を巻き起こしながらこちらに迫ってきた。

理解が及ぶ以前の問題だった。

アレを目にした瞬間に、無数の死人の怨嗟が身体の内側に溢れてきたのだから。一瞬の思考停止に至るのも至極当然の帰結だ。

「エリチャンフィールド、展開!!」

そんな俺らの前に、メカエリチャンが庇うように立ち塞がった。

その身から『バリアのような何か』を出しながら、両面宿讎の放った咆哮を塞ぎとめる。

「メカエリ!!」

しかし、怨嗟の咆哮が激突した瞬間にバリアは殆ど損壊し、メカエリチャンは自身を覆うバリアを解除してそのリソースを俺らを守るためのバリアに回していた。

そんなことをして、ただで済むはずがない。

咄嗟に回復の礼装を構えた俺に、メカエリチャンが念話を繋ぐ。

『回復は不要です。この程度なら魔力を温存しなさい』

そうは言っても、彼女の身体はみるみるうちに破損し、傷付いている。

やがて、咆哮が止んだ頃には致命傷は無いものの見た目の損壊具合は深刻だった。

「データ解析。やはりあの呪詛は人間種にしかならないようです。」

現に鋼鉄ボディの私は『余波』によるダメージしか受けていません」

冷静にそう述べた彼女。

……彼女の言う通り、今は回復は後回しにしよう。

いざとなった時の『とっておき』、『反則』のために。

『彼女の言う通りだ。おそらくアレは『対人類用』、人を殺すためだけに存在している。

そう考えるならばこの無茶苦茶な現界も一応は筋が通る』

ダ・ヴィンチちゃんも続けて見解を述べた。

人を殺すための呪詛、どこまでを『ヒト』と判断しているのかが不明だが、それならばやはりようはあるか。

『ちなみに、今しがたざっと君たちの身体を調べた結果。

皆、一様に『何らかの要因』で完全な呪詛を受けていない。

まあこれは個々のプライベートに関わることなので言及は控えた方がいいのかもしれないが――』

「いえ、こゝとは一刻を争います。私は構いません。ちなみに私は鳥族のハーフです」

言い淀むダ・ヴィンチちゃんに刹那は強い意志の籠った目で答えた。

「私は今更言わんでも分かると思うが吸血鬼だ。

……おそらく、この中ではあのメカメカしいトカゲ娘に次いで呪いを受け難いと思われる」

それに続いてエヴァが述べた。

「……うーん、私はなんでもか分からないんだけど、アーティファクトのおかげ？」

自信なさげに答えた明日菜だが、彼女の場合は出自の問題かもしれない。ほら、『魔法無効化』とかそういう異能を持った魔法世界人っぽいし。

『木乃香くんに至ってはおそらくその血だろうね。』

『高貴な家柄』に連なる血筋と聞いているよ』

そうだろう。近衛家は確か『やんごとなき系譜』に連なると記憶している。だからつて耐性を持つのは少々こじつけかもしれないが。

「僕は……よく、分かりません。」

すいません、でも一応人間だと思おうのですが」

一番分らないのはネギくんだ。

彼はナギの息子ではあるが、ナギも別段、特殊な血筋というわけでもない。なのに、なぜ。

「いや、それよも今はヤツの対処方か」



見れば咆哮の後に依然としてゆっくりとした足取りでこちらに進んでいるが、他に何かをするようなこともなく、ただ歩いていった。

「とはいえ、放つてはおけまい。」

いずれ街中に至れば膨大な数の犠牲者を出すぞ」

エヴァの言葉に頷く。

現状、彼女とメカエリチャンが攻略の鍵か。

「リツカさん、アレは一体……」

考える俺にネギくんが問いを投げた。

「神霊だ。神話や伝承に語られるままの文字通りの神様。『そうなるからそうなる』なんてふざけた理屈で奇跡を起こす。」

本来なら現代に降臨することはあり得ないのだがな、こうして出てきている」

「神か。なるほど私の魔法を弾くなどというわけかと思っていたが、文字通りの神と違うなら分かんなくてもない。」

ふざけたことに違いないがな」

憎々しげに語るエヴァ。

相当悔しかったらしい。

「神……」

俺の言葉にネギくんは沈んだ表情を浮かべた。

その肩を明日菜が軽く叩く。

「何落ち込んでんのよ。神様でも、なんでも木乃香や皆んなを守るためならどのみち倒さなきゃいけないでしょ」

顔では笑顔を見せているが、その足は恐怖で震えていた。

空元気という奴だろう。

「明日菜さん……」

「先生。私は何としてもアレを倒します。いえ、倒さないといけません。無茶でもなんでも、私はそう決めましたから」

相変わらず刹那はやる気に満ち溢れている。

消耗した様子ではあるが、士気だけは依然高い。

「そう、ですね……すいません皆さん。僕も、生徒のみんなを守るために、頑張ります！」  
なんとか持ち直したネギくんは拳を握りしめた大鬼神をしっかりと見つめる。

これで十歳というのだから未恐ろしいことこの上ない。

いや、そうでなければこの先困るのだから。

「悠長に話しすぎたか、敵が第二波の準備をしているぞ。」

……私は奴の攻撃を阻止しに行く。刹那、援護しろ」

そう言つて、蝙蝠で作つた翼で宙に飛び上がるエヴァ。

遅れて刹那も明日菜に木乃香を託して純白の翼を広げて飛び立った。

「私も行きましょう。よいですね、マスター？」

有無を言わさぬ眼光でメカエリチャンは問う。

「ああ、俺はお前達を『信じる』。

だが無茶は無しだ、いいな？」

「当たり前です。……ではお先に」

そう言つてメカエリチャンも飛び立った。

見た目は損壊が目につくが戦闘に支障はないようだ。

「子イヌ、私は？」

冷静に指示を待つエリちゃん、真剣な眼差しはいつものドジっ子、トラブルっ子の気

質はまるで感じられない。

「当初の予定通り、『竜鳴雷声』で遠距離だ。

メカエリには敵の遠距離の妨害を念話で逐一指示する」

「了解。よし、行くわよー！」

なるべく鬼神の近くまで移動して槍を足元に突き立て、息を吸い込み始めるエリちゃん。

完全に砲台扱いだが、近接技術が別段得意な方でない彼女はこの方が理に適っていると思う。

「僕も行きます」

「待ってくれ。」

ネギくんはおそらく一番呪詛を受けやすい。

何らかの耐性があるとはいえ、なるべく遠距離を心がけるんだ、いいね？」

何の加護を受けているのか分からないが、アレを相手に近接など下策。加えて周囲にばら撒かれている呪詛だけでも強力だ。

極力、射程外から魔法で援護に徹してくれた方が安全と思われる。

「はい、分かっています。」

……エヴァンジェリンさんの魔法が弾かれた以上は僕の魔法も通じるか分かりませんが」

杖に跨りながらネギくんは苦笑する。

いや、君も潜在魔力だけなら膨大なはずだ。それを引きずり出せばあるいは通用するかもしれない。

「まずは命を最優先だ。君はまだ先生になったばかり、それにまだ子どもだ。無茶も無謀も時には必要だが、命だけは大事に……って、戦いだと俺が一番足手纏いなんだがな」

言つて何様だと気づいた。

俺はあくまでエリちゃんたちを世界に繋ぐ楔。それ以外は単なる人間でしかない。

それに、ネギくんが苦難の道に進むのを黙認している。常識的に考えれば齡十の子どもに世界の運命を託してしまうなど外道でなくてなんだと言うのか。

「ありがとうございませす。……なんだか、少しだけのどかさんの言つていたことが分かりました」

屈託のない笑みで告げる彼に、俺は内心動揺した。

違う、と口に出かけた言葉を飲み込む。

「では、行つてきます」

覚悟の決まった力強い瞳で彼はそう告げて、エヴァたちの援護に向かった。

当たり前だが、俺は彼、彼女らの必死の攻撃が必勝に通じるとは思つていない。

少なくとも1400年の神祕を持つ相手に対して、それを上回る神祕を持つ存在がない時点で勝ちが厳しく。カルナなどの最強格のサーヴァントに並ぶ者もない現状で神霊を相手取るのは難しい。

それでも、メカエリチャンの耐久、エヴァによる最上級魔法や、エリちゃんのドラゴ

ンプレス。

それらで足止めをするくらいはなんとか、といったところだろう。

ならば、最後の一押し。『魔性を討ち取る最高峰のサーヴァント』。それを呼ばねばならない。

「……」

メカエリチャンに念話で敵の攻撃の妨害を指示しつつ、俺は『見えない右目』のあたりを手で覆ったり、離したりする。

「ダメか」

やはり、見えない。

もう右目は使い物にならない。礼装の回復も効果がなかった。

左脚もこれ以上酷使すれば危うい。

全身は未だ、『激しい痛みに襲われていた』。

「っ!! ヽッぽっ!!」

少し気を抜いた瞬間に、体内のどこかが激しく痛み、喉の奥から鮮血が駆け上ってきた。思わず膝をついてしまう。

手で押さえるも、指の間からボタボタと血が溢れて地に落ちる。

「っ!?! ちよっと、あんた!!」

その様子を隣で見ってしまった明日菜が慌てて俺の肩を掴む。

「すまん、大丈夫だ。まだ、やれる」

そうだ、ここで倒れるわけには行かない。

『世界の平和のために』。

「つ、くそ、そこまで侵食しているか！」

頭を振って必死に『抑止の干渉を振り払う』。

俺は違う、そんな、誰とも知らん相手のためには命はかけない。

エリちゃんのため、俺を、信じてくれる人たち。彼女たちのために俺は戦うのだ。

「血が、こんなに……」

「まだまだ、まだ……」

俺はまだ屈していない。だが、身体は言うことを聞かず、意識を刈り取ろうと必死に痛覚が『損傷』を訴えてくる。

バカか。そんなので止まるわけには行かないだろう。

「魔性、神性……」

必死に思考を保ちながら、あのクソツタレの神霊を討ち倒しうる英霊を必死に考えながら、俺は『ポシエットに手を伸ばす』。

『やあ、もう出番かい？』

「喋った!？」

取り出して早々に陽気な声を出す精霊に明日菜が驚いていたが、今はそれどころじゃない。

「神性、魔性特攻……いや、この場合は鬼種特攻か？」

なんでもいい、アレを倒せる英霊を教えろ」

『うーん、僕も英霊にはあんまり詳しくないからなあ。』

あくまで記録を保管する者だからね。それにそちらの世界については僕も全てを知ってるわけじゃない。

こればかりは知っている君が考えるんだ』

「使えんやつだ……!？」

答えは分かっていたが、八つ当たり気味に悪態をついた。

だが、もう考えることにリソースを割けない。

さっきの吐血、あれで『どこか内臓がやられた』らしい。

「いほっ、ぐっつ!？」

溢れる血が止まらない。

くそ、ヨーグルトの言う通りか。あくまで身体は人間だと。魂が如何に上位に位置していようと、『器はただの人間』に過ぎない。



それでも活動停止だけは避けねば。

少なくとも、エリちゃんたちとの契約が保持されている間は。

ならばー

「スカサハ……いや、手を貸してくれるとは限らんか」

間違えちゃいけないが彼女はあくまで彼女が気に入った者にのみ力を貸している。俺の縁、『あの世界の記録』からサーヴァントを呼ぶのであれば彼女も召喚可能だろうが。

彼女が従ったのはあくまであの世界の立香だ。

加えて俺の身体の改造などやってくれるとは思えない。

「誰か、だれかいらないのか……」

呼ぶのであれば候補は一応いる。

だが、たぶん今の俺では呼ぶことすらできない。

あるいは、呼ぶと同時に死ぬ。

単純計算で五体ものサーヴァントへ魔力を供給しているのだ。魔力は世界が負担するとして供給は俺の身体を介して行われている。これは事前のダ・ヴィンチちゃんの検査で判明した事実だ。

本来なら既に死んでいる。

それでも俺が今も生きているのは俺の魂の優位性に他ならない。

だが、身体はただの人間だ。これまでは俺が持つ高位の魂で半分誤魔化して保たせていただけ。

ダ・ヴィンチちゃんと言うには『何らかの加護による補正、本来なら肉体はすでに砕け散つていてもおかしくない』らしい。それも精霊やヨーグルトの発言で真相が掴めた。

魂が強いから、肉体の負荷を軽減していたと。

それだって、パライソを加えた途端にこの様だ。

やはり、肉体の脆弱さは欠点でしかない。

『契約はいつでも受け入れよう。もちろん、その身体のままでも召喚するのでも構わない。僕は強制しない。決定権は君にあるからね』

感情のない精霊の言葉が心に刺さる。決意を揺るがす。

確かに、契約すれば何を召喚しようが死ぬことはなくなるのだろう。ただ、それをすれば俺は『世界に全てを支配される』。エリちゃんたちを優先することもできない、それほどばかりか彼女らが世界に不要と判断されれば『俺の手で殺すことになる』。

抑止と契約するというのはそういうことだ。

『君も、気付いているだろう？』

所詮、人間のままの身体では生き残れない。なんの異能も力も持たない君がこの先も生き残るには、彼女たちを守るにはそれなりの代償を払う必要があると』

冷静に、しかし明るい声で精霊は囁く。

理には適っている。

俺は高尚な人間じゃない。ゲーティアに悠然と立ち向かうようなそんな勇氣もない。あるのは、ただ愛しい人たちとの幸せを願う想い。それしかない。

勇氣も力も信念もない。ただの人間。当たり前だ、前世ではちよつと不幸なだけの一般人だったのだから。

これまでの奇跡は、サーヴァントたちが俺に力を貸してくれたのは俺が藤丸立香の皮を被っていたからに他ならない。要は彼の功績を不当に利用していただけに過ぎない。

「グブツ!」

悩む間にも俺は何度目かになる吐血をしていた。

あまりに吐き出し過ぎて、若干貧血気味だ。

「ど、どうしよう……こんな……リツカ、リツカ大丈夫!」

必死に肩を揺すつてくる明日菜。

大丈夫かと聞かれればあまり大丈夫じゃない。

あと、揺すられると余計に吐き気が。

『時間もないようだね。アサシンとの契約で君の身体は限界に達してしまった。このままでは召喚をする前に死ぬよ』

「つ、さつきからごちやごちやと……あんた何様なの!？」

「こんな、こんなひどい状態なのに、どうしてそんなことー」

精霊の言葉に、明日菜はブチ切れていた。まさか俺のために怒ってくれるとは思わず正直嬉しい。だが、これは俺と精霊の問題だ。

『だって、僕は人類の味方だからね。いや、もちろんリツカくんの味方でもあるよ。』

僕はただ、この状況で最も有効な手段を提示しているに過ぎない。アレに君達が勝つための唯一の手段をね』

「ネギたちじゃ、勝てないって言うの?」

ビキリ、と額に血管を浮き上がらせながら明日菜が問う。

精霊はそれを気にした様子もなく、いつも通りの明るい声で応える。

『ああ、無理だろう。君たちにはいまいち感覚が掴みにくいのだろうが、神霊とはそういうものだ。勝つとかそれ以前に、アレは抗うべきじゃない災害、自然現象の具現なんだ。』

リツカくんはその点、十分に理解しているようだけどね』

神霊とは神。神代の終わりと共に誕生したものが神霊。神であったことの名残を残しながら、摂理の改変された現代に降臨することを許されない、文字通り世界の外側の

存在。

神とは、自然現象に自我を与えて信仰の対象にした存在に他ならない。つまりは『自然現象の権化』。

その点は『自然そのもの』のアルクエイドの方がより星に近い存在だが、力関係は不明だ。そも、神代の星の触覚である神霊と、現代の星の触覚であるアルクエイドでは寄る辺とする法則が違い比較にならない。

「契約……すれば、アレを倒しエリちゃんたちを？」

『救えるよ、それは100%保証する。』

……代わりに、その瞬間から君の自由意志は剥奪されるけどね』

まあ、そうだろうとは思っていた。

単なるこの場凌ぎ。それ以降はアラヤの指示に従うことになる。

「じゆういし……それって、『自分の意思が持てない』、そういうことなの？」

信じられないとばかりに明日菜は精霊に問う。

『おや、意外と物分かりがいいね。』

そうだよ？ なにせ、無限に英霊を召喚できるなんて反則にも程があるからね。間違つても世界を害さないように、その意思は、決定権は世界に委ねることになる。

力を得るからにはそれなりの代償を。古今東西、古から現代まで伝わる世界の摂理

さ』

抑止力というのはそういうものだ。

世界を守るためなら少数の犠牲など切り捨てて当然。そも、『人間の社会などそんなものだ』。そのサイクルがうまく回っているから今日までの人間社会が紡がれてきた。

その点は俺も重々理解している。

『世界と契約したならばそれは世界の所有物だ。

以後は世界の敵と戦つてもらうことになる。現状は『あのバーサーカー』が対象だね。他にも、『世界を脅かすモノ』ならば何であれ彼は排除することになるよ。今ある守護者と比較しても彼の能力は**ずば抜けている**からね。テクスチャーが不安定なこの世界にとつては喉から手が出るほど欲する異能だよ。

世界の敵、たとえ誰であろうと敵なら殺す。

それが君や彼が今使役するサーヴァントだろうとね。

心配はいらない。リツカくんの魂ほどになればその気になれば『なんだって思い通り』にできるだろう。生体願望器だ、やったじやないかりツカくん！

もちろん、制御はアラヤのものとなるが瑣末ごとき。

なにせ、以降の自我は無くなるのだから。

懸念する『意思』も無くなっているさ』

「そんな……!」

「そうか」

悲壮な顔をする明日菜をどけて俺は精霊に向き直る。

「ちよつと、まさか、契約つてやつをやるつもりなの？」

「それで救えるならばな」

俺は彼女たちの、『エリちゃんのために生きている』。

「だが。契約には乗らない」

だからこそ、『抑止との契約など真つ平御免である』。

『……ふむ。理由を聞こうか』

興味深そうに精霊はホログラムを出し、顎に手を当てる。

あくまでこいつは『決定権を俺に委ねている』。

ならば答えは否だ。

「俺は俺の意思で戦つて、命をかける。

これまでもこれからもだ。世界など、背負う気はない。

ただ、無いと困る。だから結果として救う必要があるのならやるまでだ」

『そうだね、そう君は以前から言っていた。』

ならば、今のこの状況、どのように収める?』

「決まっている。抑止に頼らずに召喚する」

最初から決まっていた結論だ。

いくら考えても、何をどう議論しようとも。

彼女たちを守るために俺はいる。

そのためなら命など安いものだ。

「ダ・ヴィンチちゃん……の通信は切れてるか。やつてくれたな精霊」

『これは僕と君との話し合いだ。部外者は極力引っ込んでもらわないとね』

本当によく回る口だ。そのポーカーフェイスも一生かけても崩せる気がしない。なるほど『抑止の傀儡』とはよく言ったものだ。

「いいさ、少し勇気と保証が欲しかっただけのこと。

覚悟は決まっている、準備をしろ精霊」

死ぬことなど許さない。俺は俺の身体にそう言い聞かせる。

『……ふむ、筋金入りのバカだな君は。』

いや、いいよ。僕個人としては君のその愚かさは嫌いじゃない。ただしやるとなれば最早君の安全は保証できない。

九割方死ぬよ』

「なら、死んだら彼女たちを現世に留める。消滅させたら絶対に許さない。



その代わり死後はくれてやる」

『なるほど、なるほど。賭けというやつだね？』

面白い。前言撤回だ、君はかしこい。

自分の価値をよく分かっているね、そうさ抑止はなんとしても君が欲しい』

「加えて、お前は中立の立場だ」

『ああ、最初から言っている通りね。』

君にこそ決定権がある。そして僕は人間の可能性が大好きだ。

いいよ、やろう。ぜひとも君の根性を見せてくれたまえ』

言つて、精霊は本を開いた。

その上に俺は手を置く。

「あんた……なにを……？」

「あの鬼神を倒す力を呼ぶ。大丈夫だ、『彼女』なら絶対に勝てる」

神秘に対して圧倒的なアドバンテージがある英霊、その中でも俺の呼びかけに応えて

くれそうな、召喚を受けてくれそうな英霊。

『ふむ、一応聞いておくが、即興と恒常どちらかね？』

「もちろん恒常だ。インスタント感覚でアレを倒せるわけがないだろう」

加えて『バーサーカー』は魔力がすぐに枯渇する。

『はは、そりやそうだ。

ならもう呼ぶ相手はは決まってるんだね？』

精霊の言葉に俺は静かに頷く。

『では、イメージしたまえ。君が呼ぶ英霊を、神霊すら屠るサーヴァントとやらをね』

その言葉の通りにイメージする。

強く念じる、俺に力を貸してくれと。

『彼女』に呼びかけ続ける。

「頼む、来てくれ……！」

『ハハハ、やはり君の縁は凄まじい。いや、『君のそっくりさん』と言った方が適当か。

なんにせよ『契約は結ばれた』。

おめでどう、これで君は神霊に勝つことができる』

褒めているのか貶しているのか分からない精霊の言葉の後に、本から眩い光が溢れた。

「サーヴァント・バーサーカー。『源頼光』みなもとのかいこう」。

召喚の呼びかけに応じ、参上いたしました」

光が治ると、その場には一人の女性が立っていた。

ところどころ『危ない』甲冑に身を包み、弓と刀を手に悠然と佇む長身の女性。

「久しい、と言うべきなのか……いえ、それでも貴方は私を呼んでくださったのですものね。」

ならば……ええ、はい。確かに、貴方の覚悟を受け取りました」

もはや、視界がぼやけて、屈み、こちらを覗き込む彼女の顔が見えない。ただ、片耳で辛うじて聞こえた声は確かに彼女だった。

身体感覚はもう殆ど無い。

「……っ、っ……！」

必死に、事情を説明しようと、指示を出そうとしてももう声も出ないことに気付いた。

「ええ、存じております。あの『虫』を屠ればよろしいのでしょうか？」

……貴方が、命を懸けてまで、そこまでして倒したいと、私にあの虫を屠る鬼になれと申すのならば。

この頼光、喜んで鬼となりましょう。かの災いの神の成れの果てを殺す刃となりましょう」

そうか。

手を貸してくれるか。ありがたい。

……ああ、俺はまた、『彼の名を穢した』。

それに、彼女たちは無事なのか。

『約束』は。

それだけが気がかりでー

『安心したまえ。約束は守るよ。』

だから、今はゆっくり休みなさい』

初めて、『優しい声』で喋った精霊。

その言葉に安堵した。

俺は礼装の機能を『オート』にして『最低限、生命活動を維持するように設定する』。

「っ!!」

ちようど操作を終えたところでピキツと『亀裂が入る音』が聞こえて、フツと力が抜けていく。

そのまま、俺の意識は闇へと沈んでいった。

## 京都・十一

「誅伐、執行」

軽鎧甲冑を身に纏う女性は、静かにそう宣言した。

途端、周囲に天から幾つもの雷いかずちが降り注ぐ。

雷鳴が辺りに響き渡り、湖を割り、砕き、腐り果てた水を焼き蒸発させていく。

天災のごとき有様の中心を女性は歩いていく。

その間も絶えることなく何度も雷鳴が轟き、周囲の黒き水を『呪詛』ごと破壊していく。

「お覚悟を、飛弾の大鬼神」

「こ、今度はなんだ?！」

突如として戦場に現れた雷撃の嵐にエヴァは見渡す。

鬼神への警戒もほどほどに。

それに続いて刹那も雷嵐の中心に目を向けた。

「あの方は……?」

悠然とこちらに歩み寄る一人の女性。

背のほどはあの召喚士の男性よりもなお高い。

片手に弓矢を、もう片方に日本刀を持ち歩いている。

「バーサーカー……まさか、あのバカ!!」

バーサーカーの姿を確認し、メカエリチャンはすぐにマスターの仕業であることに気付いた。

それはつまり、あの身体のままにこのような無茶をしでかしたということ。

「ゴエエエエ!!」

……って、アレ? なんかすっごい雷落ちてる」

音波攻撃の最中、ようやく自身の周囲で雨霰のごとく雷が落ちていることに気付いたエリちゃんはきよとんと首をかしげた。

その横を、バーサーカーはふらりと通り過ぎる。

「うわあ!? え、あんたも、なんで?」

唐突に現れたバーサーカーに腰を抜かすエリちゃんに声をかけることもなく彼女は進み行く。

その身体にはバチバチと電流が走り、纏う雰囲気は怒りに満ちていた。

「グ……?」

大鬼神も突然の雷に意識を向けていた。

そして、その中でこちらに進みゆく一人の女傑に気付く。

「鬼退治の真髓、ここにしかと示してごらんにいれましょう」

誰にともなく眩くと共に、バーサーカー頼光は足場を蹴り、一直線に両面宿儺に斬りかかった。

「■■■■■■■■ー!!」

一閃。瞬きの間に大鬼神の顔に一本の深い斬り傷が刻まれていた。堪らず呻き声をあげて暴れる鬼神を尻目に、頼光は暴れる鬼神の腕を足場として一気に駆け上がり、もう一太刀、今度は縦に一閃を加える。

十文字傷を与えられた鬼神は怒り、その大口から瞬時に呪詛を吐き出す。それらは点



を狙ったこれまでのそれとは異なり周囲を汚染する広範囲型のもの。

「っー！」

直感で攻撃を感知していた頼光は身を翻し、鬼神の腕を蹴って範囲外に逃げる。そうして下部に至った彼女は、駆け抜ける間に鬼神の胴体を斬り刻む。脚を斬り刻む。

怒りのままに振るわれる巨腕の合間を潜り抜けながら、その身に幾つもの刀傷を刻んでいく。

動きの全てが合理の果てにあるかのような効率的な剣舞、しかしそれらが超高速で行われていることがなによりも異常であった。

先ほどまで自分たちが苦戦していたのはなんだったのか、と言わんばかりの無双ぶりに刹那を始め、ネギやエヴァも口を開けて呆然としていた。

尚も、頼光は手を休めることなく。その超高速立体起動の舞いも休むことなくただ鬼神を斬って斬って斬りまくる。

「■■■■■■■■■■ー！！！！」

身体全体から瘴気を撒きながら、剛腕を振り回しながら、『バーサーカーでしかない鬼神』は徐々に体力を削られていた。

「はああっー！」

空を斬る一閃と共に、その斬撃が雷を帯びて鬼神の巨体に叩き込まれる。大きな傷を作るも、それは数多蠢く怨念の顔に覆われて補修されていく。

ほんの僅かな戦闘で数多の傷を付けられた鬼神の身体は、おびただしい数の苦渋を浮かべる怨念の顔で埋め尽くされていた。

「せいっー！」

一息で振るわれた一太刀で鬼神は大きく身を怯ませる。

お返しとばかりに身体から濃密な瘴気が放たれ、頼光は雷撃に『乗って』それから逃げる。

ようやく橋の上に降り立った彼女は、今度は刀を納刀して左手の弓を構える。

腰の矢を瞬時に抜き番えた彼女は、『目にも留まらぬ速さで矢を連射した』。

ズバババ、と鬼神の身体に刺さったそれは雷撃を発して追加ダメージを与える。

それを見届けてから、再度地を蹴った頼光は宙空で刀を抜き、振り下ろした。

「失せなさい!!」

叫びと同時に、鬼神目掛けて特大の雷が天から落下した。

空気を破るような爆音と、目を開いていられないほどの閃光がバチバチと明滅し、それらに混ざって鬼神の悲鳴が辺りに轟いた。

「うわあ!？」

衝撃波を受けたネギは杖から振り落とされそうになりながらも、必死にしがみついて耐える。

「ぬう、なんなのだ彼奴は……あの鬼神をいとも容易く」

閃光に、手で目を覆いながらもエヴァは闖入者たる頼光の力に動揺を隠しきれなかった。

神にも比肩しうる力を持つ女傑。

アレは何者なのか、と。

事実として頼光は牛頭天王の化身である。

生まれてすぐにその強大な力を恐れた父・満仲に捨てられるも、後年にその力を惜しんだ父に呼び戻され主に賊討伐や怪物退治に駆り出された女性。

天賦の才だけでは片付けられない強大すぎるその力の正体は、彼女が身に秘めている『魔性』に由来する。

牛頭天王の化身として生を受けた彼女は、その恐ろしい力を無意識に押さえ込み、心の奥へとしまい込んでいる。

それこそが伝説では兄弟とされている『牛御前』に他ならず。

神と鬼、強大な力を二つも有しそれらの一切を押し付けられた人格こそ牛御前であ

る。

とはいえ、この二人は『同一人物に違いはない』。

人格の乖離は起こしているものの、根本が同じであり他の英霊のように切り離して別側面として出ることもなく、常に彼女の中にあるもの。

百貌のハサンのように分離することもないのはおそらく、どうしようもなくこの二人が同じであるからだろう。

否、二人と数える時点で間違いである。

『常に源頼光は一人でしかない』。

「思い上がりましたねえ！

ふふ、あははははは!!!」

狂気の滲む顔で笑い声を上げる今の彼女もおそらくは『魔性の部分が出過ぎて』状態にあるのだろう。

だからこそいつもの以上に魔力放出の出力が上がっている。

常に周囲に落ち続けている雷がその証左。

対して、両面宿儺も腐っても神霊。

その根本が歪んでいようと、元の信仰が絶大であったために魔性に堕ちながらも強大な力は健在なのである。

次第に頼光の動きに合わせて動くようになっており、効率的な動きで呪詛を吐きながら巨腕を振るう。

無尽蔵に近い体力を有するそのカラクリはしごく単純なもの。

キャスターの陣地作成を利用して作られた四つの拠点。そこから吸い上げられる霊脈の魔力を使つてこうして神霊サーヴァントの降臨と制御を行なっている。

ちなみに、かの四鬼の魔力もここから供給されており、通常の聖杯戦争ではまず不可能に近い『京都のほぼ全域支配』を成し得たからこそ可能となる大規模な手段に違いない。

だが、今はそのうちの三つを『武蔵に陥落させられている』状況であり、予定ではすでに神霊へと戻っていておかしくない両面宿儺がこうしてサーヴァントの範疇にギリギリ収まる状態で停滞しているのも仕方ないことであった。

両者ともに神に近い力を持ちながら、頼光の苛烈な攻めと両面宿儺の膨大な体力により、頼光が優勢ながらも戦いは拮抗していた。

「子イヌ、子イヌ!!」

橋にてリツカの身体を抱き上げながら泣き叫ぶのはエリザベート。

血塗れのままにピクリともしないマスターの姿を確認するや一目散に駆け寄りその身を抱いて必死に呼びかけていた。

「また、このような無茶を……!」

冷静に見えながらも、拳を握りしめて震えるメカエリチャンも内心動揺一色だった。

どうしたらいいのか。センサーで辛うじて生命活動は維持されていると分かっているても、意識を取り戻すほどの体力がないのは事実。

『……一体何がどうなってるんだ。いきなり通信が切れたと思ったら次の瞬間にはこの有様とは』

ホログラム上のダ・ヴィンチちゃんも突然の事態に対応が遅れていた。ただし、どこまでいっても冷静さを欠かない彼はすでにリツカの今のデータを解析しながら、すぐに真相に至った。

『精霊……君だね?』

少しの怒気をはらんだ声に、皆一様に地に放られたままの本に目を向けた。

やがて、沈黙に耐えかねた精霊がホログラムを出す。

『そうとも、僕が召喚を許可した。いや、そもそも僕にそれを決める権利はないからね。

僕はあくまで彼の決定に従うまでさ』

『ああ、君の性格はだいたい理解しているとも。

その上で聞くけど、通信の繋がらない間、何を話した？』

予想はついていた。しかし、当人の口から直接語らせたかった。

『いや、単に今後のプラン。世界に身を委ねるか否かを問うただけだよ。

しかし君たちのマスターは実に強情だね。死ぬと忠告したのにそれでも召喚を強行

した。バカだが、その覚悟は嫌いじゃないよ』

「やはり……」

精霊の言葉にメカエリチャンは歯を軋ませた。

彼は、私たちの力を信じていなかったのかと。

悔しかった。それが。

愛しいからこそ、信じると言ってくれたのに勝つことは信じていなかったことが悲し

かった。

もつと力が欲しいとも。

『なぜ、通信を切った？』

切る必要は無かったはずだ。私も交えて話し合えばもつと無難な策を講じられたかもしれないのに』

『愚問だねキャスター。初めから二択しかなかったよ。』

僕、いや、世界と契約して奴隷になるか。

それを拒絶して勝つ為に命を文字通り賭けに使うか。

……それにこれは彼の問題だ。

彼が自身で悩み決断すべき案件だと僕は判断したまでだ』

『つ………！ 帰ったら覚えていたまえ精霊』

『ははは、八つ当たりとは君らしくない。』

とはいえ、今の状態で保つのか。それは些か心配ではあるね。

どうでしょうか？』

まさか、そんな悠長に重大なことを言うとは思わなかった。とその場にいた誰もが思った。少なくとも『リツカの価値を認めているから従っている』と思っていたメカ工りは精霊の『どう転んでも構わないような態度』に焦りを感じた。

『まあ、死ぬことはないと思うけどね。』

彼は意識を失う前にそう礼装をセットしていたし』



『なに……?』

それは聞き捨てならなかった。

そもそも礼装はそんな長時間仕様に作ってはいない。

つまり、『彼が無理やり魔力を通してそのように酷使している』ということ。

礼装の強度に問題はない。問題は彼自身の体力である。

『そんなことをしたら……』

『ああ、最悪身体自体は使い物にならなくなるだろうね。運が良くてもどこかの機能が死ぬのは間違いないだろう。』

既に片目も見えていないようだったし』

「あなた、そこまで分かっているな。止めなかったの!？」

珍しく感情をシンプルに表に出したメカエリチャンは精霊に食ってかかった。しかしホログラムの身体は触れることも出来ずにすり抜けてしまう。

『何度も言わせなくてくれ、これは彼の問題だ。』

彼が決める権利を有している。君たち部外者が横やりを入れる権利はないはずだよ。

それに君達は『過去の写し』でしかない。今を生きる彼の尊厳を侵害しないでくれたまえ』

「つ!」

ギリツと歯を食いしばったメカエリチャンは即座にソニックシャワーを構えた。

『……何の真似かな?』

精霊も『凄まじい殺気』を放ちながら問いかける。

その場の誰もが精霊の『本質』を垣間見た。

「(ハッ)で排除します。」

貴方は『マスターのためにならない』。

どこまでもあの人を墮としてその上で『全てを奪うつもり』でしょう。そんなことはさせません」

彼女の言葉の意味をダ・ヴィンチだけは理解していた。

この精霊の、否、『人理記録帯』の本質を。

『言い掛かりはやめたまえ。僕は彼を信じている。その上で上司の指示にも従わねばならないのは窮屈だが僕なりに譲歩しているつもりだよ。』

それに、彼の意地は人類には不可欠なもの。

希少価値のあるものだと思っている。

その最期まで、しっかりと見届けるつもりさ。』

透き通るような瞳。空っぽな瞳で語る精霊に、メカエリチャンは思わず射撃してしま  
いそうになる。

『フェアじゃないのは好きじゃないから言っておくけど、僕がいなくても君たちは消えやしないよ。』

ただ、今後新たなサーヴァントを召喚することが難しくなるのは確かだと思うけどね』

『その点に関しては私の方ですでに調査済みだ。』

君が我々の世界から英霊を呼び出していることもね。

……悔しいが君の能力は唯一無二のもの。我々だけでは世界間を超えてサーヴァントを呼び出すのは困難を極めるだろう』

『そうだね。穴を自由に操作できる僕だけの特権だ。ただし、僕でもあちらに行くことはできないけどね。』

専ら招く用なんだよ』

睨み合う三者を他所に、エリちゃんは未だリツカにしがみ付いたままに涙を流していた。

「子イヌ……うう……！」

これが『血の伯爵夫人』と恐れられたエリザベート・バートリーとは余人から見れば分かるまい。

それほどまでに『彼女とマスターは絆を育んできた』。

『複雑な関係』にありながらも二年間、リツカの側にいたのは彼女であり、リツカが今の  
ような情熱を抱くようになったのも全てエリザベートによるものである。

リツカ以外はだれも信じないだろうが『事実である』。

エリザベートとの交流が、生活が一般人でしかなかった彼の中に『だれにも譲れない  
意地』というものを生み出した。

それは数多語られる英雄に匹敵し得る唯一の長所であり、巷に数多語られる強力無比  
な力を手に入れた者たちとも異なる経緯にして結論。

何の力もないがために『文字通り死ぬ気で戦うことにした一般人』それこそが藤丸リ  
ツカの真実、正体である。

死ぬことで彼女らを助けられるならば『本望』と本気で言う歪んだ精神を持つ『異常  
者』。

その点においては『怪物』に近い性質を持つ者。

だからこそ『底なし沼のような愛』を持つ、あるいは欲するモノが集まる結果となっ  
た。

意図せずして集まった彼女らとリツカ、その共通点こそがリツカの本質を見抜く重要  
なピースとなることは明白である。

「みなさん、この場は一旦戻りましょう」

「なに？ 私に逃げろというのか？」

敵前逃亡をしろと言うのか？」

いつになく気が立っているエヴァがネギに食らいつかんばかりに吠える。

「はい、事実として僕たちは『足手纏い』です。」

あの人が味方であるならば、いえそうでなくとも今はこの場に留まる方が危険かと」

「ぬ、う……」

冷静なネギの言葉にエヴァも言葉を詰まらせた。

「私は賛成です。」

……どうにも彼女らの戦いに割って入る勇氣はありませんので」

冷や汗を流しながら頼光と両面宿儺の戦いを見つめる刹那が呟いた。

「く、仕方あるまい。」

……なにやら、待機組の方でも動きがあったようだしな」

ちらり、とエヴァが目を向けたのはリツカたちのいる場所。

そこには『あの精霊』に対して射撃の構えを見せるメカエリと、血塗れでエリちゃん  
の腕に抱かれたリツカの姿。それらを見つめながらどうすることもできない明日菜。

おまけにリツカの礼装からホログラムを出したダ・ヴィンチが一樣に集まり剣呑な空  
気を出していた。

「っ、戻りましょう、エヴァンジェリンさん」

「わかってる」

くだい、と手を振りながらエヴァは先に橋へと戻っていく。その後が続いてネギたち  
もリツカたちのいる場所へと戻った。

『当たり前だが、貴様らに自由はない。』

『我らの加護を受けられるだけありがたく思え』

リツカたちが精霊と揉めている間、木乃香の意識はずっと『誰かの記憶の中』を彷徨っていた。

幼少から始まったその記憶はすでにその『誰か』が成人し、家庭を築いたところまで至っていた。

薄汚れたあばら家のごとき家。

そこに『代々』、『男』の一族は住んでいた。

掘っ建て小屋と言われても、廃屋と言われても不思議ではない家の中で『男』とその妻は正座している。それらを見下ろす男はこの場において場違いなほどの煌びやかな服装をしていた。

『はい、『このえらくぞう近衛六蔵』さま』

高圧的な男の態度に、『男』と妻は肅々と従い頭を下げている。

そして、この嫌な男の性が自らと同じことに木乃香は驚いた。

加えてどうにも見覚えがないことも。

『ふん、殊勝な態度だが腹の中では何を考えているか分からん。常に監視されていることを忘れるな』

吐き捨てるように言い放ち高圧的な男は去っていく。

“なんや、あのおじさん嫌な感じやなあ。べー”

その背に木乃香は精神体のままであつかんべーをする。

これまで『男』が壮絶な迫害を受けてきたのを知っているからこそ、木乃香はすでに彼を虐げる存在に悪感情を抱くようになっていた。

『すまない……お前にまで、こんな仕打ちを』

『気にしていませんよ。私はあなたと一緒になりたくてなつたのですから。何があつても、私はあなたと共にいます』

まるで監獄のようなひどい生活の中でも妻は変わらぬ優しい笑みで夫を支えていた。その姿に夫である『男』は涙し、ゆっくりとしつかりと妻を抱きしめていた。

木乃香もその光景に自然と涙を頬に伝せている。

『ただいま！』

そんな彼らの元に年頃の一人娘が元気に帰ってきた。

だが、その身体は汚れと傷に塗れていて、すぐに彼女が『学校で虐げられている』ことに思い至る。

それでも彼女は気丈に振る舞い、両親に心配をさせないように出来る限り傷を隠して常に笑顔で振舞っていた。

そんな健気な姿に木乃香も彼女に好感を抱いていた。



同時に、なんとかして自分も彼女を守ってあげたいと思った。

時は過ぎ、貧しく厳しく迫害にまみれながらも小さな幸せを喜ぶ穏やかな生活を送っていた彼らの元に、『ヤツラ』が現れた。

その日、『男』は仕事に赴いており家には妻と学校から帰って家事を手伝う娘しかいなかった。

そこに玄関を押し破って男どもが雪崩れ込む。

『つ、ど、どなたですか?』

突然、家に押し入ってきた男たちに妻は咄嗟に、震えながら訪ねた。もしかしたら近衛家の人たちかもしれないと。

そんな彼女に男たちは下卑た笑みを浮かべながら、下品な眼差しを向け舐め回すように女の肢体を眺める。

『へへ、あいつの女は結構な美人だと聞いてたが。こりや予想以上じゃねえか』

男の一人が場もはばからず宣う。

『ふん、盛るな。』

……さて、■■■■。貴様の夫の家柄、血筋。その役目については知っていよう  
『……それが、なんですか？』

『簡単なこと。我らは『反西洋魔導連隊』。』

貴様の夫が呪殺した反大戦派の同志である。

我らは西洋のハイエナどもの下僕にはならぬ。その信念のもとに長年、西洋勢の排斥を訴え続けてきた。

その同志を、奴は殺した』

『ま、早い話が報復よ。薄汚えテメエの旦那に殺された仲間の敵討ちつてところさ』  
リーダー格の男の話を要約するように、傍の男が語る。

『そういうことだ。』

……ただ、殺すだけでは飽き足らんのでな。

此奴らに貴様らをさらなる絶望に落としてもらうことにした』

男の言葉に即座に意味を理解した妻は、駆け出してその場から逃れようとする。

『おっとお、へへ。娘がどうなってもいいのかい？』

『っ!!』

その前に拘束された状態で差し出されたのは最愛なる一人娘。

流石にいつもの笑顔はなく瞳は恐怖に怯え揺らいでいた。

『まったく穢れが往生際の悪い真似をするな。

貴様らに救いはない。長年の罪と共に地獄に堕ちろ』

スツとリーダーの男が手を挙げた途端に一齐に男たちが妻と娘に襲いかかった。

『いやああ！ やめて、私ならなんでもします！

だから娘だけは!!』

当たり前の懇願。しかし男は一切の慈悲のない暗い瞳でそれを一蹴した。

『ダメだ。貴様らに救いはないと言ったはずだ。

穢れの娘共々、この者共の慰み者になるがいい』

『っ!? そんな、だめ……お願い、やめて!』

妻の懇願虚しく、娘共々その衣服を剥ぎ取られ、破られ、露わになる極上の肢体に男どもが舌を這わす。

それからの出来事は壮絶な一言だった。

汚され、貶められ、嘲笑れながらその身をただただ蹂躪されていく。

っ、ひ……うう……!!

木乃香はとも見ていられなかった。

泣き叫ぶ二人の声を上書きするように下卑た笑い声と、何処までも悍ましい穢れた音を響かせる光景を間近で見せられているのだ。当然の反応だった。

だが、臉を閉じようとも、耳を塞ごうとも。

精神体でしかない彼女には克明にその光景と音が伝わってきた。

『いやあ……ごぶ!? だ、あ……う』

『ギャハハハハ!!』

こいつはすげえ、生娘の中でも最高の名器だぜ!』

“やめて……もう、やめてえ!!”

彼女の叫びも虚しく、悪夢のような狂宴は日を跨いで続けられた。

見たくないのに、聞きたくないのに、人間の最も汚い部分の片鱗をまざまざと見せつけられ木乃香の精神は急速に消耗していった。

やがて、丸一日が経過した頃に、『男』が帰ってきた。

“……………”

家の中には無残に蹂躪された家族。

妻はすでに息をしていなかった。暴行の後を鮮明に残す無残な死体のままに、火に包

まれる家の中に転がっていた。

屋外では、『男』の前に同じく死体となった娘の身体が放り投げられた。

『……』

男たちの嘲笑が響く空間で、『男』は呆然と娘の死体を見つめていた。やがてゆつくりと、近付いて。

その頬に手を触れる。

“……”

木乃香はずっと目を閉じていた。耳も塞いでいた。

それでも、これは記憶であり彼女に伝えようとする『誰か』はずっと彼女の精神体に直接映像と音声が届けてくる。

そして、『男』は壊れた。

『ああああああああ!!!』

『血涙』を滝のように流しながら、彼は自身が持つ呪術を最大限解放し『闇に生まれ』ながら男たちを虐殺した。

『ひぎやああ!?!』

『腕が、あ、がああ!?!』

『見えねえ、目が!?!』

『おごお! ゲ、ガ……っ!』

飛び散る脳髓。腑。

千切れ飛んだ手足が木乃香の目前に落下してくる。

“ひ……い……!”

ただ怖かった。何もかもが。

男や、ヤツラが。

このような惨劇を生む人類が。

血と肉片に塗れた阿鼻叫喚の地獄絵図を前に、『男』は嗤い、泣き、叫んでいた。

『人類ニ、報復ヲ!』

光二満チタ、道ヲ歩ム者共ニ、災イヲ!!』

もはや、彼は彼ではなかった。

人類の恨み辛みを一手に引き受ける受け皿としての力を覚醒させていた。

それと共に、記憶の世界は歪み割れる。

後に現れたのは膨大な量の記憶。

男だけではない、それよりも遙か昔から続く人類の負の歴史。

この日ノ本で延々と続けられてきた惨劇の歴史。

古代、『男』の先祖が歪められたその時から悲劇は始まっていた。

『対人類用殺戮兵器』

その名称が用いられるのは近代に入ってからだが、歪められた神の本質は『人を憎むもの』に規定されていた。

その力の源泉たるは『人類の怨み』。この日ノ本で敗者となつた者たち全ての憎しみがエネルギーとなつて鬼神の中に溜まっていた。

『朝廷に逆らう者どもに罰を!!』

時には『独善』を振りかざす官軍によつて、無辜の民が蹂躪された。

『朝廷許すまじ。奴らに報復を!!』

時には蹂躪された者たちが怒りのままに官軍を蹂躪した。

その際に用いられたのが『両面宿儺』という土着神だった。

鬼神と、崇り神となつて数多の敵を呪殺していく。『反転』の影響を受けたその神の力は絶大だった。

しかし、朝廷の派遣した『英雄』の前には成すすべもなく討ち取られることになった。  
『……『住吉双神箭』』

神代よりの守護神となつていた英霊によつて討ち取られた。

その後、鎮庄に赴いた軍にいた陰陽師たちにより嚴重な封印を施されることになる。

その際に封印からも溢れ出る『悪意』をどうにかしようとして鬼神の子孫を『二つ目のキー』とすることになるのだが――

『それが、我らだ』

……!!

突然、目の前に現れた『黒いナニカ』に木乃香はビクリと震えた。

辛うじて人型と分かるものの、『悪意が凄まじく輪郭が認識できなかった』。憎しみや恨みといった強烈な感情が視界さえ阻害するほどに『黒いナニカ』を覆っているのだ。

『我らは背負わされた。古よりの、祖先の咎だけではない。』

日ノ本全ての悪意を。幾千の時の中でずっと背負わされてきたのだ』

それらは『周囲からの異常な敵意』として発現する。

何もかもが『この一族のせいだ』と無条件に信じてしまう悍ましい呪い。それこそが彼らに課せられた『負のサイクル』。

おまけに、それでも彼らを救うおうとした者には『もれなく不幸が訪れる』。如何な幸運の持ち主だろうと『この一族の誰かを愛した時点で悪意に塗り潰されて、全ての運を使い果たしてしまうのだ』。

『我々は、その地を追われた。愛することを知ってしまった祖先の誰かはそうして放浪



の旅に出る。

行く先々で虐げられながらも、必ず安住の地があるはずだと信じて。

しかし、結果はどうだ？

呪術を求めた『貴様らの家』に傳いてみれば、他ならぬ貴様らの命令で動いたツケでこうして家族を失った!!』

“ひっ!?”

ぞわり、と目の前の『ナニカ』からあふれ出した黒い影が木乃香に纏わり付くように蠢く。

『許さぬ、許さぬ。我らを利用するだけして捨てた貴様らを許さぬ。その事実を抹消した貴様らを許さぬ。』

富に溺れる者を許さぬ。

希望に満ちた道を行く者を許さぬ。

生殺に関わらぬ貴様らを許さぬ。

幸運を有する者を許さぬ。

我らの嘆きを知らずして光の道を行く者たちヲ、許サヌ!

全テ、全テ!!

コノ日ノ本二住マウ、生キトシ生ケル者、全テ許サヌ!!

アア、貴様モ、此処デ、共ニ憎悪ニ塗レルガイイ!!!」

『人を殺すモノ』として、もはや人であった頃の面影を残さぬ『ソレ』は木乃香を取り込もうとその身を広げて、飲み込まんと襲い掛かった。

その時――

『――……』

一つの光源が現れた。

天から舞い降りるようにして、『ソレ』の上に手を広げて、抱きつく。

たったそれだけで『ソレ』の動きが止まった。

何が起きているのか、そもそもこの世界は何なのか、訳もわからずにいる木乃香のもとにも、もう一つの光源が現れる。

人型であり、体つきは女性のように見えるそれは、木乃香を優しく抱きしめる。

『――、――』

“っ……!”

何事か、木乃香の耳元で囁くも、それは音として認識できないほどに小さなものだった。

だが、不思議と木乃香は暖かい感覚に包まれて平静を取り戻す。穏やかな想いが身体全体に行き渡り、どこか、懐かしいような感覚さえ覚えた。

ふわり、と連れ去るようにして木乃香の身体が『ソレ』から離れていく。

『逃サヌ、逃サヌ!!』

それに気付いた『ソレ』が必死に『影』を喚けるも全て、二つの光源が発する光によってうちけされ、『浄化されていく』。

応じて、段々と木乃香の意識も遠のいていた。

『大丈夫。私が守るわ』

その時、初めて自分を包み込む光から明確な声が聞こえた。

聞いたことはない、だけど、『知っている』。

殆ど、妄想に近い直感で正体に思い至った木乃香が慌てて声をかけた。

“待って、待って！ お母さん!!”

その叫びも虚しく、直後に木乃香は意識を失った。

## 京都・十二

「御機嫌よう、お嬢さん。

こんな夜更けに、何をしているのかな？」

夜の森。

理解を超えた戦いから逃げている最中に会ったのは『死神』だった。

燕尾服を着ながら、深い闇を垂れ流す瞳のその男を目にした瞬間に私の身体は固まってしまった。

「そう怯えずとも良いですよ。

私はあなたに何をすることもありません」

冗談にしか聞こえない。

もしかして油断させようという魂胆？

「ふうむ、そうですねえ。

ならば……はい。どうぞ」

しばし顎に手を当てて考え込んだ男は、ポン、というコミカルな音を出しながら手に一輪の花を生み出した。

『青いバラ』

それを私へと差し出す。

「貴方には些か上品過ぎましたかな？」

「な、失礼ですね！」

まるで自分は子供だと言わんばかりの物言いに反射的に答えていた。

「ハハハ、やはり貴方のような年頃は面白い。」

固定観念に囚われず常に『変化』の中にいる。

無邪気とも違う。

ある程度の知識があるからこそ、その中から『選択』していくことになる、或いは選択肢そのものを増やそうと知識を渴望する」

急に饒舌になった男を不審に思いながらも、先ほどよりも妙に人間味が増したことに気付いた。

先ほどの見間違い？

考える私に、彼は一礼した。

「それではレディ。」

私はこの後も予定が入っていませんね。

縁あらばまた会うこともあるでしょう」

「あ、待つてくださいい！」

……あなたは、『何ですか?』」

何者か、と問うのは自然と憚られた。

この男は『その範疇にいない』と何故か分かったから。

人間、ではない。そう思った。

「何、と問いかけますか。」

いやはや、どうにも貴方も勘が鋭いようですね。

……私の名は『ダンタリオン』。貴方の想像通り、人間ではありません」

面と向かってハッキリ言われるとゾクリと背筋を悪寒が走る。

「ダンタリオン……それは、ソロモン七十二柱に数えられる」

「おや、意外と博識ですね。そうですとも。」

私はかの王の僕でした。

もつとも『こちら』とは『少々』異なりますが……。

ソロモン七十二柱・序列七十一番、魔神ダンタリオンでございます」

悪魔。

確か、ダンタリオンとは悪魔の名前だった。

なるほど、この男の雰囲気は確かに悪魔そのもの。

「本物……」

「……怯えているわけではなかったのですね。

知ってから怯えるのが普通だと思うのですが。

「どうやら、貴女は『他』と違うらしい」

意外だ、と彼は興味深そうにこちらを見つめた。

私も、そう思う。

だが、初めて、『非日常』に出会ってしまったのだ。

先ほどまで巻き込まれないように必死に逃げていた『人外じみた戦い』ではない、こうして互いに理性ある形で話しあっている事実がなによりも私の好奇心を刺激していた。

自然と、彼からは敵意というか悪意の類は感じられない。少なくとも私に対しては。

「実に面白い。私を、正体を知って尚も平静を保ち対話を望む姿は……ああ、これが『好感』というものですか。

ふむふむ、実に興味深い。

策を弄さずともこうして、対話だけで『好感』というものは生まれるのですね」

彼は少しズレていると思った。

やはり人間と悪魔では精神構造が違うのだろうか？

「あなたは、どうしてここにいるのですか？」

悪魔がなんでここに居るのか。

素朴な疑問。

「そうですね、仕事と言えば仕事なんですが。

半分はぶつちやけ趣味ですね」

趣味。

「ああ、ちゃんと仕事もしましたよ？」

終わらせて空いた時間を有意義に使用しているのです」

そこはいつでもよかった。

「仕事、とはどのような？」

悪魔だからやっぱり契約とかだろうか？

「ヤケに肝が座つてますね貴女……」。

まあいいでしょう。これも『答えを得るため』に必要なものと思うことにします。

それで仕事でしたか。

ええ、もちろん契約主の言いつけですよ」

もう契約相手がいたのか。

もしかしたら私に契約を持ち掛けに来たのかと、ちよつぱり期待していたのに。



いや、契約など怖いからしないけど。

「契約主……」

「おっと、これ以上はプライベートですからね。流石に教えることはできませんよ？」  
顔の前に指を立てながら片目を瞑る彼。

……もしかしてカッコいいと思つてやつてるのだろうか？

「その、やつぱり、魔術とか使えるですか？」

「これが一番気になっていた。」

悪魔なのだから当然、魔法やら魔術やらに精通しているはず。あわよくばその一端でも見せて欲しい。

「勿論、使えますよ？」

召喚術が一番の得意分野ですがね、たいていのことは指先一つで自由自在」

くるっ、と男が指を振るっただけで宙に炎で出来た精巧な馬が現れた。

「おおっ!!」

「ふ、この程度は造作もありません。」

……いかがですか？ お望みでしたらこの森全てを焼き払うことも可能ですが？」

さらつと恐ろしいことを言うのは悪魔だからなのか？

「いえ、結構です。」

それにしても、魔法が実在していたとは――

「ああ、違いますよ。私のは魔法に似て非なる『魔術』。確かに以前はその領域にありましたが……私個人としては魔術の行使が限度ですとも」  
？

「魔法と魔術は、違うのですか？」

「違いますとも。まあ、説明はまた今度にしましょう。かなり時間を費やすことになり  
ますし。

……そろそろ、時間です」

呟き、胸元から懐中時計を取り出す彼。

今時懐中時計など、おしやれのつもりなのか？

確かに服装とは合うと思うが。

「貴女との対話は中々面白そうです。

またお会いしたら、どうか対話の続きを。

綾瀬夕映さん」

「え、私の名前――」

問いかけるも、すでに彼はお辞儀しながらその場から消え去っていた。

『……ふむ。そろそろ仕込みが発動する頃か』

ダ・ヴィンチやメカエリの警戒する中で、呑気に精霊はそう口にした。

『?』 どういう意味だ?』

訝しむダ・ヴィンチに精霊はただ笑みを返していた。

同時刻、武蔵を相手に剣を振るっていたセイバーのもとに念話が届いた。

「っ!!!」

……守護者の襲撃だと?」

それは紛れもなく己のマスターからのもの。

「至急、迎撃に当たられたし」

そう短く伝えられた指令にセイバーは思わず歯噛みしていた。

何処のどいつが差し向けたのか知らんが、このような楽しい斬り合いを邪魔するなど決して許さぬ。と。

とはいえ『義理は果たす』のがセイバーだ。

彼は一太刀、神霊としての魔力を乗せて武蔵の剣を弾き距離を取る。

「お預けだ、劍聖。」

……次の機会まで、首を洗って待っているがいい」

「は？ あ、待ちなさい!!」

ちよつとお!!」

慌てて剣を振るうも、セイバーはすでに『次元の狭間』を開き中へと姿を隠し消えていた。

虚しく空を切る刀。

「くっそ〜〜！ やるだけやってズルくない!？」

……今なら「じいさま」の気持ち分かるわ」

とはいえ、セイバーが桁外れの力を持つていたことも事実。その猛攻を耐えきった武蔵も激しく消耗していた。

「あー、これは最後まで付き合いきれないかもなあ」

疲れからその場にぺたんとして座り込んだ武蔵は大きく息を吐き出す。

あくまでサーヴァントとして現界している彼女はすでに限界だった。

いくらこの世界が魔力に満ちていようとも。

とりあえず消耗分を少しでも補うべく武蔵は、先ほどから周囲に濃く渦巻いている魔力を『吸い込む』ことにした。

慰め程度でしかないが、無いよりはマシだと。

「あ。せつちゃん」

パチリと。木乃香は唐突に目を覚ました。

すでに明日菜から木乃香の身体を返却され大事に抱えていた中での突然の目覚めに、刹那は目を丸くした。

「お、お嬢様……」

やがて、うるうるとようやく目を覚ました最愛の人に喜びを感じ始め――

「せつちゃんーん！」

先に木乃香の方が抱きついていた。

「うわ、こ、このちゃん。……ハッ！」

わたわた、としながら思わず昔のような呼び方をしてしまったことに気がつきすぐに口を手で塞ぐ。

その様子を木乃香はにたあ、と笑いながら見つめる。

これは、絶対いじられる！

そう思った刹那だったが、しかし、その額につん、と人差し指を当てただけで木乃香はすぐに立ち上がった。

「このちゃん……？」

刹那に向けられたその背は、いつもよりも、格段に『逞しく』感じられた。別に体型が変わつたとかじゃなく、なんとなく。

気持ち的にそんな気がしていた。

『おや、お目覚めかねお嬢様方?』

いち早く木乃香の目覚めに気付いた精霊は『いつもの笑顔』で明るく声をかけた。

それによつて他の面々も木乃香が目を覚ましたことに気付く。

「木乃香!!」

「木乃香さん!」

明日菜とネギはすぐにその姿に涙と共に喜色を見せた。彼女らの目的は彼女の救出だったのだから当然ではあるが。

「うわわ、二人とも心配しすぎやう。

でも、ありがとうな」

抱きつく明日菜に戸惑いつつも、その頭を撫でてついでにネギの頭も優しく撫でた木乃香。

その様子にエヴァは、彼女がすでにある程度、状況を把握していると気付いた。

「さて、と。」

「……まずはこの人を治してあげな」

一通り明日菜たちと抱き合い、木乃香は唐突にそう述べた。

視線の先にはエリザベートに抱かれるリツカ。

「治す、つて木乃香?」

「もしかして、魔法のことを……?」

疑問を述べた明日菜たちに彼女は頷く。

「うん。起きたらな、なんかぼわわーって、色んな知識が浮かんできたんや。たぶん、『お母様』が教えてくれたんやな」

「お母様?」

突然の話に首をかしげる一同をよそに、木乃香はリツカのもとに歩み寄り屈む。

「こ、木乃香……?」

涙と鼻水でぐしよぐしよのエリザベートが不思議そうに木乃香を見る。

「大丈夫や、ウチにまかしとき。」

……えーと、かけまく掛巻もかしこ畏かしこ『きびつひこのおおかみ吉備津彦大神』、このひもろぎ神籬あもに天降りませと、かしこ恐かしこみ恐かしこみももう白



す

目を閉じ急に何事か唱える木乃香。

「氣をやつてしまったのか……」

と皆が心配する中で、段々と彼女の背後に魔力が渦を巻き始める。

当初こそ不可視のものであつたそれは、やがて視覚化されるまでに練り上げられていく。

「ハ、ハそれは……!?!」

その異様な光景に、ネギたちもたじろぐ。

やがて、収束した魔力は一つの『形』となつて現れた。

鎧甲冑に身を包み弓を携えた色白の美青年。

煌めく銀髪は艶やかで、鉢巻の下には『髪と同色の瞳』が細く絞られ鋭い眼光を放っている。

『……我を呼んだは貴様か、小娘』

厳かな声で問い掛ける『彼』に、木乃香は元気に答える。

「うん、きびつひこ、さまやったか?」

……え、と。この人を助けてください」

お願いします、と頭を下げた木乃香に、『彼』は少し眉をあげた。

正確には彼女の背後を見て、だが。

『思念体となつてまで構うとは、あのお転婆めがしおらしくなったものよ。』

……で、この者の治療だったか』

こくこく、と頷く木乃香に『彼』はしばし考えるそぶりを見せた。

『待て、それは……サーヴァント、なのか？』

そこへ、通信越しにダ・ヴィンチが声をかけた。

彼の計測器には、木乃香の呼び出した『彼』がサーヴァントに酷似したデータを持っていることが示されていたのだ。

それでいて、どこかが違う、とも。

『「異邦の術師」か。』

……貴様の言うサーヴァントとやらがなんなのかは知らぬが、我は守護を目的に本体より派生した分御霊なり。

「陰陽式守護英霊型決戦兵器・吉備津彦」。

吉備の地にて祀られる本体より派生し、陰陽師どもが守護霊として使役できるよう構築したモノ。

今は近衛の家を守るべくして代々使役されうる存在なり』

それはかつて『吉備の地にて鬼神を討ち倒した神代の英雄』。その武勇を、未だ燦る反

乱分子の鎮圧に活用するため守護精霊として使役できるように当時の陰陽師が構築したシステム。以後は時代と共に改良が加えられ、かの『安倍晴明』の考案した効率的な術式を完成形として、日本の霊的守護を司る家柄の一つ近衛家に下賜され現在に至る。

「図らずもサーヴァントシステムに酷似した形で完成することとなった『この世界の英霊』」。

「それこそが吉備津彦。」

『さて、では小娘よ。我を使役したいというならば契約を結ばねばならん。それは知っているな?』

吉備津彦の問いかけに木乃香は頷きを返す。

『よろしい、ならば名を述べよ』

「近衛、木乃香です」

『では木乃香よ、今よりはお主を主と定め弓を引くこととしよう。神代の力、見事扱って見せよ』

その瞬間、木乃香と吉備津彦の足元に五芒星が浮かび上がり一瞬だが激しい魔力が吹き荒れた。

「木乃香さん!」

慌てるネギに木乃香は手を振る。

「大丈夫や。きつと、みんなを守ってみせる」

その時、木乃香を優しく包み込むようにして抱きつく『女性』の姿を全員が幻視した。一瞬の出来事だったので、見間違いかとみんな思っていたが、精霊とダ・ヴィンチだけはそれが『今の木乃香を守っているモノ』であると看破していた。

直後、吉備津彦は両手を広げ、それに応じてこの場に巨大な五芒星が築かれた。

そこからは淡い光が漏れ出し、それに触れた者から『呪詛』が剥がれ落ち黒ずんだ肌が見るみるうちに回復していく。

『凄まじいな、この世界の英霊は……』

一瞬にして重度の呪いを剥がしてしまった吉備津彦の力にダ・ヴィンチは素直に感嘆の意を述べた。

『当然だ、ここは“我の霊地”。このくらい造作もない』

事実としてこの湖は吉備津彦の依り代とする場所でもあった。

分霊であり仮とはいえ、自身の奉られたこの地は『陣地作成』でいうところの『神殿』に相当する。

ともなればこのくらいの穢れ、“斬り捨てる”ことなど容易であった。

しかし、未だ霊脈の大半は両面宿儺に取られているために彼も本来の力を発揮するには至らないわけだが。

「む…………？」

リツカの『意識を回復させるだけならばできる』。

「あれ…………なんか、目が覚めちゃったけど」

唐突に、本当に唐突に目が覚めた。

確か俺は身体を酷使し過ぎて意識を失ったはずだが。

礼装にも生命活動の維持だけをお願いしてあった。

一体…………。

「子イヌー……!!!」

「うわっ!」

どいうわけか俺を抱きかかえていたエリちゃんが、叫びながら抱きしめてきた。

「痛い痛い……本気でやるな、本気で」

サーヴァントの膂力で本気のハグをされると死ぬ。

ミシミシと骨が軋む音とか聞きたくなかった。

痛い。

「良かった……本当に」

「……」

やがて静かに嗚咽を漏らしながら俺の胸で泣くエリちゃんに、少しだけ罪悪感を感じた俺は、黙って彼女の頭を撫でた。

周囲を見ると、ネギくん、明日菜、エヴァ。メカエリちゃんや刹那など全員が揃っている。

「あ、頼光」

爆音が聞こえ目を向ければ未だ、頼光が両面宿儺相手に激戦を繰り広げていた。

雷とかバンバン落ちて、なんか、すごい神話大戦と形容する他ない戦いが起こっている。

未だひしつとしがみつくとエリちゃんをそのままに立ち上がる。

すると――

「んあ?」

くらり、と足元がふらついて

「む」

メカエリチャンに抱きとめられた。

硬い胸板が地味に痛かった。

「悪い、ちよつとフラついた」

「いえ……あの、本当に、大丈夫なのですか?」

心配そうに尋ねる彼女に腕を振って応える。

「ああ、なんか普通に動くぞ?」

嘘だ。

ふらついて気づいてしまった。この足が魔力によつて無理やり動かしていることに。

足だけじゃない、壊れた内臓や血管など、補填するようにして魔力が形を成して動い

ていた。

治ったわけじゃない。

「よ、よかった……」

ほつと一息吐いた木乃香お嬢様。どうやらいつの間にか目を覚ましていたらしい。

いや、というかもしかして彼女が治療してくれたのか？

と、その隣に見慣れない男が、イケメンがいることに気づいた。

「だれだ、あんた？」

『我は吉備津彦。』

今は近衛木乃香に仕えし守護英霊なり』

守護英霊？

『発言に虚偽はない、彼はこの世界の英霊だ。』

今そちらにデータを送る、確認してくれ』

ダ・ヴィンチちゃんの言葉の後にピピツと音がして受信したそれを確認してみれば。

「吉備津彦、なかなかの大物が出てきたな」

あの桃太郎のモデルの一人だ。

確か七代目の帝の皇子で、吉備の地で暴れていた温羅という鬼を退治した古い鬼殺し。

その際に連れていた家臣が三匹のお供のモデルらしい。

……つて前世の Wiki に書いてあったと思う。

「あんたが治してくれたんだな、礼を言う」

なにやら神様パワーで治療してくれたらしい。



『……いや、構わん。

気づいていると思うが、あまり長くはー』

「ああ、即効でカタを付けよう。

……木乃香ちゃん、君にも礼を言う、ありがとう」

「えへへ、どういたしまして」

照れ臭そうに返す木乃香。

なぜか、以前の彼女とは違うような雰囲気を感じた。

彼女じゃないような、何かが混ざっているような。

『木乃香よ、あとはあの鬼神を滅ぼせば良いのだな？』

銀の双眼でスクナを捉えながら吉備津彦が問い掛ける。

「うん、もう十分だと思っから。

もう、あの人も救ってあげて」

哀愁を感じる表情で木乃香は告げた。

あの人、とは誰のことを言っているのか。

いや、おそらくは『中身』のことを言ってるのだろうか。



「■■■■ー！！！」

着弾と共に凄まじいエネルギーを解放し炸裂する白羽の矢。

おそらくは『鬼殺しの概念』そのものを『神秘』として解放することによる純粋な対鬼種用宝具。

吉備津彦が最高ランクで保有するであろう『鬼殺し』のスキルにより更に威力を上乗せした一撃は一瞬にしてスクナを飲み込む光球を形成する。

その爆風だけでも、俺の身体を吹き飛ばすほどには強烈で、思わずメカエリチャンにしがみついてしまう。

それを分かかってか彼女も俺の肩に手を回してがっちりと掴んで離さない。

やがて、光球が弾けると共に辺りを閃光が包み込んだ。

『……これはもしかして『彼』一人で十分だったんじゃないかい?』

閃光が止み、辺りに煙が蔓延する中でダ・ヴィンチちゃんがそんなことを宣った。

やめてくれ、俺も自分がさつきまで四苦八苦してたのが馬鹿らしくなる。

「本場の鬼殺しとはここまでやるのか……」

軽く身震いしながら語るエヴァ。確かにお前も吸血『鬼』ではあるが、お前の場合は『星』に関係してる可能性もあるし一概には言えないだろう。

「いったい、どうなったの?」

倒したの?」

心配そうに明日菜がネギに問いかける。

おいおい、ちよつとフラグっぽい事言うのやめろよなあ。

「た、たぶん……すいません、僕にも確認することはー」

『いや、反応は綺麗さっぱり。』

確かに両面宿儺は倒された、神霊の降臨は阻止されたわけだ。おめでとう諸君』

慌てるネギくんはダ・ヴィンチちゃんが告げる。

確かに、礼装でも両面宿儺の反応は消えた。

「どうやら今回は桃太郎に全部持ってかれたようだ。いや、倒せたならそれで十分万々歳なのだから。」

「ありがとう、吉備津彦。」

「……貴方には辛い役目をー」

木乃香とは思えないほどにお淑やかな口調で、吉備津彦へと語りかける。

しかし、他ならぬ吉備津彦はそれを半ばで遮った。

『……すまぬ、仕留め損ねた』

その一言に、この場の誰もが耳を疑った。

「……………え？」

『……………なんだ、これは？』

遅れて、ダ・ヴィンチちゃんが通信越しに眩きを漏らした。

「なんだ、何があつたキャスター？」

俺の問いかけに、彼はゆっくりと語り始める。

『新たな魔力反応、いや、これは……』

……これは、なんだ？』

彼の言葉の後に、俺の礼装も何らかの反応をキャッチする。

それは段々と大きくなるようである。

「まさか……あれは」

怯えたような刹那の眩きに、その視線を追う。

そこには煙が晴れ、露わになったスクナ。

半神は碎け散り、下半身だけが湖に膝をついていた。

全身が焼け焦げたように黒く染まり、もはやピクリとも動かない。

……いや、その近くにはまだ『アイツ』が浮遊していた。

「……許さぬ。許さぬ。」

未だ蔓延る数多の不条理を許さぬ。

無限の悲劇の上にあるこの世界を許さぬ。

我ハ、人類ヲ、許サヌ」

敵方のキャスター・藤原千方……ではない。

あのような理性なき憎悪に染まった眼をしている者は断じて英霊などではない。人類を呪い、復讐心などでもない、単なる『殺戮兵器』と化した『アレ』はもはや『ヒト』ではない。

俺の予想が正しいのならば、あいつは――

憎しみに満ちた『彼』の身体は無傷だった。

当然だ、スクナの制御を行うにあたり、自らの全てを『両面宿儺の内側に封じ込めていた』のだから。

ダメージは全て『バーサーカーに計上されている』。

すでにかの鬼神から所有権は譲り受けていた。

あとは、『覚醒するだけ』。

「憎め、非業の死を遂げた数多の『我』よ。

呪え、想い果たせぬうちに絶えた数多の『我』よ。

恨め、『我ら』を貶めた『全てを』」

グズグズと、『彼』の身体が溶けていく。  
人の形を保っていたのはそこまでだった。

液体のように形を崩した『彼』は、苦渋の呻きをあげる亡者の顔を浮かび上げながらグネグネと蠢き、スクナの死体へと纏わり付いていく。

許さぬ、と数多の顔が叫びながら溶けて、また新たな顔が生まれる。

醜悪の極地にあるような悍ましい光景の中で、確かに『彼は生誕しようとしていた』。

『っー だめだ、リツカくん!!』

急いでアレを止めるんだ!

アレは……!!』

ダ・ヴィンチちゃんの言葉に、俺は咄嗟にエリちゃんたちと頼光に念話で指示を飛ばす。

全力で、アレを攻撃せよと。

「ボエエエエエ!!!」

「全武装、展開!!!」

「はああっ!!!」

エリちゃんのドラゴンブレス、メカエリの宝具を除いた全武装、頼光が刀を払って落



とす特大の雷。

全てが『アレ』に集中し、爆発を巻き起こす。

先ほどの吉備津彦の矢には及ばないまでも、それなりの爆風を受けながら、俺は『失敗』を悟った。

「ようやく……ようやく、『この肉体』を手に入れた」

煙の中から悍ましい声が響いてくる。

「苦節、■■■■年。『我ら』の悲願はここに果たされる」

渦巻く煙を吹き飛ばし、『彼』はその全身を露わにする。

鎧甲冑に身を包み、鬼面は先ほどよりも厳かに凜々しいものになり、四つ腕には『弓』、『刀』をそれぞれ携えている。

それら全てが両面宿儺のサイズそのままに。

より明確に理性を宿した状態で、構えすら取っている。

しかしあれはもはや両面宿儺ではない。

「祟り殺そうか、呪い殺そうか。」

……いや、この肉体ならば轢き潰すのも面白い」

ニヤリ、と耳まで裂けた口が嗤う。

二面四つ腕にして剛力の鬼神。

確かにそこには伝承に語られた両面宿儺の姿があった。奇しくもその中身は『別物』に成り果てていたが。

その姿に精霊はぼつりと溢す。

『アラヤの怪物』

それは人類が生み出した破滅の化身そのものであった。

## 京都・十三

アラヤの怪物。

ガイアの怪物ではなく、アラヤ？

「あれが、そうなのか？」

『いや、アレは亜種、本物じゃない。少なくとも『素体』は近しい存在だけど『中身』は……アレは本来の『意義』を逸脱している』

どういふことだ？

恨みを口にするからにはアレも怨霊の類と予想していたのだが。

怨霊というのは末恐ろしい。

ネギま続編である作品では世界滅亡一歩手前までやらかしかけた怨霊が出てたりするし。

『……あれが怨霊だと？』

ばかな、アレはもう概念に至る一歩手前だ！』

ダ・ヴィンチちゃんの言葉に気を引き締める。

引き締めたところで、考えなければ死ぬのだが。

「せいっ!」

冷静に状況を俯瞰する俺に対し、頼光はすでに攻撃を仕掛けていた。怨霊の類であるならば漏れ無く彼女の領分ではあるが果たして。

「ふん……」

やはりというか、ヤツは頼光の一太刀を一本の刀で容易く受け止めていた。

「なっ!?!」

「容易いものよ」

巨大な刀を人のサイズで振るうのと同じように扱い、一閃で頼光を弾き飛ばす。激突した衝撃で橋を粉碎しながらも、頼光は瓦礫に掴まり即座に立ち上がった。

「おい……なんで、お前はそんな冷静なんだ?」

そんな俺にエヴァが声をかけてきた。

いや、なんでと言われても。

「気をやれば現状を打破できるならそうしたいがな。

そんなことを言っているのは死んでしまうだろう」

『……このような状況では君のその『胆力』は長所だ。さてリツカくん、アレを倒すにはどうすればいいと思う?』

ダ・ヴィンチちゃんは常に冷静だ。

そういうところは素直に好感を持てる。

「そうだな、とりあえずあいつはまだ『未完成』なんだろう?」

概念に至る一歩手前とっていた。

ならばそこが奴のゴールと想定する。

『そうだね、受肉に近い状態だが完全じゃない。覚醒すればもはや我々では手のつけられない相手になるが、今ならば仕留めることも或いは出来るだろう』

精霊をして或いは、と前置きするということはそれなりの難度があるということか。いやまあ、あんな『いるだけで絶望する』ような得体の知れないバケモノに勝てるビジョンは早々浮かばないが。

“何事も考えればなんとかできる”。

事実、そうしなければエリちゃん共々死ぬというならそうするしかないわけだ。

頼光がなんとか抑えてくれているうちに打開策を考える。

「なら、倒すだけだ。」

メインアタッカーは頼光。彼女は神秘に対して圧倒的に有利だ。アレがまだ怨霊の

域にいるのならその間に仕留めるしかない。

おそらくだが他の面々でアレに太刀打ちできる戦力はない。

そうであれば、他の全戦力でアレを押しとどめて、出来た隙を頼光に突いてもらおうし  
かない」

おそろしく脳筋な策だ。スパルタの血でも入ってしまったか？

だが、そんな策しか浮かばない。

この場合は、頭一つ抜けてチートな頼光に頼った方が賢い。

「足止め、敵の隙を作るのが私たちの役目ですね？」

冷静にメカエリチャンは問う。

「そうだ。消耗の激しいお前たちに頼むのは気がひけるがー」

「了承します。」

……あと、あなたは私のパイロット候補生なのですから、堂々と命令なさい。知識も、そのクソ精霊とキャスターに次いであなたはあつある。『メタ』知識はあなたの十八番でしょう？

気後れする必要は微塵もありません。存分に命令なさい」

彼女にお叱りを受けた。

いや全く、その通りである。少なくとも、彼女らの命を預かる身として自信なさげに

命令するなど侮辱でしかなかった。

「……子イヌ。あの、あんまり無理しないでね？」

まだ疲れてるなら休んでいてもー」

「大丈夫だよエリちゃん。そもそも戦うには俺が魔力送らないとダメだろ？」

「うう……でも、あなたー」

「問題ない。……エリちゃんは引き続き、砲台役頼めるか？」

頭を撫でながらそう言うと、エリちゃんは最初心配そうに俺を見ていたがやがてゆつくりと頷いた。

「私も行こう。なに、足止めくらいならば余裕だ。」

『対人類用呪詛』とやらも私には効かないようだしな」

確かにエヴァは吸血鬼だ。

加えて再生能力もあるのなら、地力の差も多少は埋まるか。

「ぼ、僕もー」

拳を握りながら申し出る彼を手で制す。

「いや、ネギくんは待つていてくれ。これはもう“俺たち”の領分だ。それに奴がその気になればおそらくー」

言いかけたその時、俺たちをすっぽりと包み込むように『呪詛の塊』が現れた。憎し

みに満ちた呪文の数々が視界を蝕む。

俺は咄嗟にスクナの方を見る。

奴はこちらを視認しただけでコレを発生させていた。

『ぬんっ!』

しかし、俺たちの前に立つた吉備津彦が足元に刀を突き刺すと、俺たちを包んでいた呪詛は丸ごと弾かれた。

同時に、吉備津彦の全身に裂けたような傷が無数に現れ鮮血を飛ばした。

「吉備津彦!!」

『問題ない。……しかし、貴様らを守るのが精々なのは事実。先ほどの一撃で葬るつもりが、失策であった。』

故に、命が惜しくば我の後ろから動くな』

心配そうに駆け寄る木乃香を諫めつつ、吉備津彦は仁王立ちを続けていた。

気づけば俺たちを囲うように今度は五芒星が足元に現れていた。

『霊地に残る魔力を投入しても、なお生き残るとは。』

やはり、1400年の怨みは伊達ではなかったか』

吐血しながら彼は立ち続ける。

「キビ……え、と神様、たぶん私も役に立てると思う」



そんな彼に協力を申し出たのは明日菜だった。

その手に持つハマノツルギを見ながら吉備津彦はしばし沈黙した。

『……やむを得まい。貴殿には補助を頼む。

私の横で剣を構えよ、必ず奴の前に剣を構えておくのだ、ずらせば即座に呪いに蝕まれる』

「はいっ！」

元気に返事をして彼女は、吉備津彦の横で剣を構えた。

その時、彼女の剣に凄まじい量の『呪詛』が当てられた。

「くっ、うう!!」

『焦るな、しつかりと、腰を入れて構えておれば大丈夫だ』

吉備津彦の助言通りに彼女はしつかりと構え直す。

剣に分かたれるようにして呪詛は左右に避ける。吉備津彦の張った五芒星の結界に沿うようにして他所へとはけていく。

それを見ながら俺はサーヴァントたちに念話で指示を出していた。

「むんっ!!」

頼光が振り下ろす刀がスクナの持つ巨大な刀で受け止められる。遅れて発生した雷撃すらも甲冑と兜で防ぎきる。

「フハハハハハ!!」

平安の怪異殺しすら、この通り!

軽い、軽いわあ!!!」

高笑いしながら頼光を弾き飛ばすスクナ。

事実として、このスクナは実に俊敏に動く。先ほどまでの理性なき獣のような単純な動きではない。確かな知性を感じる太刀筋に頼光は舌打ちをした。

単純に、この巨体でサーヴァントの動きをするのだ。

流石に魔力放出を全力で使う頼光ほどの俊敏さは無いものの、技量としては中々に高い。

「1400年、ひたすらに貴様ら『ヒト』どもに復讐するためだけに存在してきたのだ! 剣の腕くらいは磨いておるわ!!」

厳密には、彼の取り込んできた怨霊が持っていた技量をトレースしているに過ぎない。

い。しかし、無名であれそれなりの剣士を何万人、あるいは何億と吸い続けた彼は、それらを元に独自の型を編み出すまでに至っている。

『ヒト』としての剣士の技量はないが『プログラム』としての技量』ならば完璧と言つて相違ない。

また、受肉し『クラスが変わつた』ことによりスクナの肉体が変化したこともある。生前、というよりも本来の両面宿儺としての肉体がようやく現れたと言つた方が適當であるソレは、鎧甲冑と兜。確かな武技を有する威厳ある鬼面もその影響。

しかし、本来であれば『両面宿儺はバーサーカーでしか辛うじて現界することができない』。

皮肉にも『中身が入れ替わつた』ことにより、それに侵食される形ではあるものの正しい両面宿儺としての肉体を手にする事が出来た。

とはいえ、あくまでサーヴァントの範疇。姿形が本来のものに近づいても未だ彼はサーヴァントであつた。

『アヴェンジャー・両面宿儺』

人類を憎む極東の大怨霊は未だ名を持たずにいる。

それこそが弱点。未だ何者でもないならそれはまだ『怨霊、死霊というカテゴリーに  
いるのだから』。

逆を言えば何らかの名前を得たが最後、この怨霊は『人を呪い殺す概念』として日本  
どころか世界を脅かす真なる脅威となる。

だからこそ今倒し切らねばならない。

それがリツカと頼光が共通して認識する事柄である。

そんな彼女にマスターから念話が入る。

曰く、『宝具の開帳を求む。味方の援護によつて隙を作るのでそこに全力の宝具を  
放つてほしい』と。

「っ、正気ですか!？」

私が言うのも何ですが、私を戦わせるだけでも相当な魔力を消費します。それに加え  
て宝具など発動すれば……」

マスターは死んでしまう。

無茶なのだ、六人も従えてあまつさえそのうちの四人に全力戦闘をさせている時点  
で。

加えて頼光はバーサーカー。その中でも特に消費の激しいサーヴァントと自覚している。消費量だけでいえばあの大英雄にも引けを取らないだろうと自虐もしている。

だからこそ、頼光はその判断を肯定することができなかった。

せつかく、かつてのマスターに似た誰かに会えたのに。

せつかく、自分を召喚してくれた人に出会えたのに。

ここで、死んでほしくはない。

そう告げる。簡潔に。

『いや、これしか策はない』

なおもマスターは策を取り下げない。

その間にもメカエリやエヴァ、エリザベートの援護により多少ではあるが余裕は出来た。それでも到底、自分が全力の宝具のための溜めをする時間が稼げるようには思えない。

実際、このスクナは先ほどよりも遥かに強力である。

スペックはそのまま、あるいはいくらか上昇した状態で知性もあるのだ。振るわれる神代の力は頼光よりも濃い神秘を纏っており、呪詛に至っては任意の場所を『消しとばす』ほどには指向性と威力を得ている。

明日菜や吉備津彦に守られる面々はともかく、エヴァなど何度も吹き飛ばされている。その度に再生しているが、消耗も見受けられた。

メカエリはそもそも一箇所に止まらないように動き回り、エヴァも彼女に攻撃がいかないように振舞っている。

それでも当たるとは当たるとし、掠ただけで激しい損傷を負っているのも確か。

要するに無茶だった。

彼女たちではスクナは止められない。

「私が押し切ります。このまま、削りきれば……」

『それはダメだ。貴女も分かっていると思うが、奴は未覚醒と推測される。完全に受肉する前に、世界に存在を刻みつける前に何としても滅ぼす必要がある』

もはや死に体であろうに、冷静に述べるリツカに頼光はやはり『彼とは違う』と感じていた。

だが、別にそれは構わない。サーヴァントとはそういうものだ、自分が記録から呼び出された別人であることも理解している。

だからこそ彼女はリツカを守ろうと決めていた。

厳密にはかつてのマスターに向けるほどの深い『愛情』を持ったわけではないが、自分を頼ってくれた彼には多少なりと好感を持っているのは事実だ。

だからこそ、受け入れがたい策なのだ。

「■■■■■■ー!!」

リツカたちが両面宿儺と激闘を続ける最中、足止めに残った千代女と楓も、鬼神となつた隠形鬼相手に奮戦していた。

影に紛れてただ首だけを刈り取りに来る相手に、千代女は呪としてのオロチを多数招くことにより対抗する。

楓はその間に様々な術を編んで、実体化した隠形鬼に叩き込んでいた。

鬼神となつた隠形鬼相手に、アサシンのサーヴァントと生身の人間では実に分が悪

い。戦力差は歴然。なにせ相手は『忍の元』とも言われる古の鬼。

Aランク宝具に値する『オンギョウ・クレオトシ隠形首落とし』の存在がさらに戦力差を広げている。

その効果は『レンジ内にある影に潜み、そこから気配遮断を新たに発動した状態で奇襲を仕掛ける』というものであり、千代女の『呪』と楓の配置した罠によつて辛うじて防いでいる状態。

すでに両人の身体は傷だらけとなっていた。

「三郎!!」

影から抜け出た隠形鬼に、不可視のオロチが襲いかかる。

それを隠形鬼は『獣の勘』で避けていた。

「なんのっ!」

そこへ、すかさず楓が巨大手裏剣を投げつける。

難なく両刃刀でそれを防いだ隠形鬼に、手裏剣に付与された捕縛の術式が襲いかかる。

「っ!」

蛇を模した術式が一瞬にして隠形鬼に絡み付くも、それを糸切れの如く引き千切る。

動きを止められたのは一秒ほど。





た呪いは確実に彼の命を削り取っていた。

本来、千代女はこうした『持久戦』に秀でている。

地味ながら確かなダメージを与えられる呪いを付与し続け、結果的に相手を呪殺するのだ。

もちろん、効きにくい相手やそもそも効かない相手もいるが、この鬼はあくまで『サーヴァントの宝具で召喚された鬼』であり、加えて適正がアサシンともなれば対魔力に相当するスキルを有していないことが仇となった。

いける。そう確信した。

そんな彼女らにまるで計ったようにチャンスが訪れた。

「グッ……■■■■ー!!」

また、唐突に隠形鬼が苦しみだしたのだ。膝をつき雄叫びをあげる様に二人はここが決めどころと判断した。

事実、隠形鬼の魔力は限界に達していた。

魔力供給も儘ならない状態で、鬼神に戻るなどという無茶をしたのだ。本来ならば『拠点に戻り十分な魔力補給を受けた上で発動するもの』。

しかし、アサシンとしての役割を担っていた彼は『他の三鬼と違い十分な補給もせぬままに此度の戦闘に参戦していた』。

以上の二点から隠形鬼は魔力不足に陥ったのだ。

このまま持久戦を続けられれば勝手に自滅する。しかしそんなことは二人の預かり知らぬことであり、この特大のチャンスで一氣にカタをつけることにした。

楓は得意の爆炎術式の中でもとっておきのものを編み始め、千代女は自らの宝具の詠唱を始める。

「〃呪え、我が血を。崇れ、我が罪を……〃」

……だが、隠形鬼も黙って見ているわけではない。

イタチの最後っ屁のごとく、瀕死の身体で自身の得物たる『首狩り刀』を千代女へと投げつけた。

「ぐう!？」

最後の力を振り絞って投げつけられた刀を、千代女は避けきれずに左肩を深く斬り裂かれる。

「千代女さま!？」

思わず声をあげた楓、普段ならばそんなことはないが千代女が自らの祖先だと臆げに悟っていた彼女は声を上げずにはいられなかった。

しかし千代女はそれを手で制し、詠唱を続ける。

「……〃甲賀流・退魔爆鎖円舞〃!!」



バシャン、と周囲に飛び散る肉片、鮮血を二人は黙って見つめる。

「やった、でござるか？」

千代女は周囲の気配を念入りに探り、もはや隠形鬼の魔力が残っていないことを確認した上で楓に頷きを返した。

同時に、気が抜けたようにその場に倒れこんだ。

すぐに楓は走り寄りその小さな身体を抱き上げる。

「千代女さま……！」

「案ずるな。……拙者は忍、すぐにでもお館様の、加勢に」

笑いかける千代女の顔は当然ながら生気がなく、また大量の汗が流れていた。

そんな状態の彼女を楓が放置する筈もなく、元より忍としてはお人好しの気質がある彼女は無言で千代女を抱きかかえた立ち上がる。

「お、おい、お主……！」

「……先の戦いでは幾度も助けられた故に、その恩は返さねば気が済まぬでござる」  
そのまま楓は忍の歩法にて、リツカやネギが向かった先を目指す。

とりあえずは千代女がお館様と呼ぶリツカの元へと届けるべきか、と判断した彼女は、腕の中で抗議する千代女を無視して森を駆けていった。

——本来なら出会うことなどあり得ない祖先。厳密には『この世界の千代女』では無いのだが、彼女がそれを知っているはずもなく、たとえ知っていても、それでも彼女は千代女を助けるだろう。

お人好し、なのもそうだが、なによりも『幼き頃より伝え聞いた伝説のくノ一・望月千代女』を前にして彼女が敬意を示さぬはずがないのだ。

その頃、風鬼をたった一人で抑えていた龍宮も苦戦を強いられていた。

「■■■■■■——！」  
「ぐっ！」

咆哮をあげながら、万物を切り裂くほどの風を操り迫る鬼神。

『魔眼の通常機能』により敵の攻撃は見えてはいても、避けられるかは別問題。

妖怪の中でも最強の一角と語られる鬼、中でも鬼神に至る存在を相手にしては誰であ

ろうとも苦戦は必至と言えた。

術師型であった前の状態とは異なり、バリバリに爪を振るって近接戦を仕掛けてくる風鬼に、龍宮はなんとか銃で対抗し致命傷だけは避ける戦いを続けていた。

そんなことをしていれば、いずれは抑えきれなくなるのは明白。

絶え間なく叩き込まれる暴風に、隙を埋めるように振るわれる鋭利な爪。龍宮の身体は当然深い傷を負っていた。

そんなギリギリの戦いの中で、消耗していた彼女はあろうことか手を滑らせて銃を落とすそうになる。

その隙を風鬼は的確に突いてきた。

迫る大爪、四方より襲い来る竜巻。

それらを前にして、龍宮はようやく『魔眼本来の力の一端』を解放した。

「『座標固定……事象遅延』」

眩くような『呪文』。これだけで彼女の視界内にある、その中でも自分の近くに存在するものは『その動きをスローモーションにする』。

その隙にすぐさま全ての攻撃の射程外に逃れる彼女。

動きが遅くなったのは一瞬で、ギシリ、と空間全体が歪むような奇妙な音を立ててすぐに遅れていたモノたちは動きを取り戻す。

「っ!？」

しかし、先ほどまで『そこにいた』彼女が一瞬にして消えたことに風鬼は少なからず動揺した。空を切る爪と、何者もない場所を通り抜ける竜巻。

龍宮もこの隙を突いて銃弾を浴びせる。

「■■■■■■■■■■ー!!」

だが、いくら彼女の持つ『悪魔殺しの銀弾』だろうとこの鬼神の肉体を貫くには至らなかつた。

単純に、硬いのだ。そこらの召喚悪魔を殺すものでは到底役不足。それは分かっている。でも彼女もおいそれと、とっておきを使うわけにはいかなかつた。

「やはり、貫けないか!」

舌打ちしつつ、すぐにけしかけられた竜巻を避けるべくその場を離れる。  
と。

「なにっ!？」

竜巻を囿にして風鬼はすでに彼女の退路へと回り込んでいた。このような頭脳プレイをするなど聞いていない、そう彼女が思う間に鬼神の剛腕はその細い首をガツチリと掴んだ。

「がっ……………はっ……………ぐー!」



じわじわと締め上げるようにして力を強める鬼に、必死で銃弾やら蹴りやらを入れるもまるで効く様子もない。

「座標……固定……」ロック　「逆」アド・ブラエタリタ　「行!!」

絞り出すようにして『詠唱』を唱える。

途端、彼女の魔眼は『宝石のように煌めき』、今度は『風鬼の動きが逆再生され始めた』。

「■■ツ!!」

自ら獲物を手放した、『動きを逆になぞった』事実<sup>に</sup>風鬼自身も訳もわからずに混乱した。

……当たり前のことだ、時間を操るなどそれこそ真なる魔法で無ければ不可能な<sup>の</sup>から。

「っ！　使い過ぎたか！」

つつ、と左眼から垂れ流される血に悪態をつきながら彼女は即座に魔法陣から中折式水平二連散弾銃を『二丁』取り出し、風鬼の土手っ腹に同時発射した。

「ツ!!」

ズガン、とけたたましい音を立てて放たれるのは魔力による強化を施された特製の弾丸。衝撃で腕が軋む。

しかし風鬼を後方へと弾きとばすことは出来た。



「ブラエタリタ レフェツレ  
過去・参照。

ウオカレレ・モヌメントウム  
記録再現“!!”

詠唱と共に、彼女の魔力が『数倍に跳ね上がる』。

同じく腰の翼はより鮮明に姿を現し、身体には『呪文のような模様が浮かび上がる』。  
それらは等しく『緑色に発光していた』。

応じて左眼からの出血も増える。

……しかし負っていた傷は急速に塞がりつつあった。

## 京都・十四

“お前は鍵だ”

昔、誰かにそんなことを言われた気がする。

“人の世を恨む素体……『■■■■・■■■■』の実験に相応しい”

誰かは思い出せない。でも、あれは確かー

“さあ我が手を取れ。『■■■■の■■■■』を取り戻すために、その栄誉を貴様に授けてやろう”

ーああ、思い出した。

邪悪に満ちているのに、どこか『聞き逃せない』。『魅力に溢れた悪の極致』。おまえ

はー



「ハハ……自らが育てた『兵器』に殺されるのだ。自業自得だろう」  
はて、兵器とは誰が言ったのだったか？

『彼等』の中の中心、要となつてゐる『男』はふと疑問に思った。

同時に、敵対している奴らの中に、なぜか懐かしい雰囲気を感じていた。

『近衛 ■ ■』

ーかつて、自らを助けようと、救おうとしてくれた、あのー

「つー、まだ調整が不完全だったか。思考にノイズが入るー」

フラツシユバックするように、何かのイメージが思考をかき乱してくる。

思わず頭を抱えた隙を突いて頼光たちは総攻撃を仕掛ける。

雷撃、氷撃、ミサイルなど一手に注がれ彼はその衝撃にたたらを踏む。

「ぐ、小蠅どもが……まとめて吹き飛ばせ!!」

一瞬にして矢を番えた彼は限界まで引き絞る。

ギシリ、と空間ごと歪ませる魔力が一瞬にして凝縮され、今まさに放たれんとした

時ー

「せえい!!」

二刀の斬撃が彼の背中を直撃した。

「ぐお!？」

堪え難い強力な一撃に、矢を落としながら振り返る。

「もう一丁!!」

その顔面に二刀による怒涛の斬撃が刻まれた。

仮にも神霊たる彼の顔に傷を与えるなど、それこそ頼光のように神秘特攻を持っているか、神霊レベルの力でしか不可能なはず。

その犯人を見て、彼はようやくよく理解した。

「宮本武蔵……魔眼保持者か」

『体内に溢れるデータを参照』し、この者が異界の宮本武蔵であると判断する。同時にその能力が『必ず勝ちの目を引き寄せるもの』であることも。厳密には『可能性を一つに絞る』のだが。

憎々しげに見つめる彼に、武蔵は快活な笑みで応える。

その身体はこれまたボロボロで、しかし力強さすら感じる剣気を放っていた。

武蔵の魔眼がすでにこちらの『弱点』を探っていることに気付いた『体内の己ら』が騒ぎ出す。

「っ、泡沫の幻風情が!」

自らも魔眼のごときピンポイント爆撃、即ち呪詛による攻撃を行うも、スキル『無空』

を用いた変則的な回避行動に、容易に避けられてしまう。

その間にも、エヴァとメカエリ、頼光による波状攻撃を受け上手く狙いを定められない。  
い。

おかしい、と彼は思った。

スベック上ではとつくに頼光や武蔵をも上回っているはずなのに。

神霊をも超えた『法』に至ろうとしているのに、たかが数匹の蠅に手こずっている現状が納得いかなかった。

そこへ、またも襲ってくる不可思議なノイズ。

もはや誰だったか思い出せないが忌々しい『三人の女』。

見るたびに、どこか自らの奥底が疼き、動きを鈍らせる。

彼は段々と苛立ちを募らせていた。

「おのれ、『ヒト』どもがっ！

〃二面四腕ノ鬼神ハ、剛力ニテ。

……サレド、『まつろわぬ』ト蔑マレシ遺骸ナリ〃」

突然、周囲に呪詛のバリアを張った彼は腕に持った刀を二振りとも足元に突き立て

『衝撃への支えとする』。



残る二つの腕で弓を引きしぼる。

先ほど放とうとした一撃とは異なる『現在の彼の宝具』に値するもの。

「まずいぞ、何かやるつもりだ!!」

「これは……宝具!?!」

メカエリの言葉に、エヴァと頼光も全力で攻勢を仕掛ける。

特に頼光の雷撃は『魔性そのもの』たる呪詛を次々に引き剥がしていく。

それでも、彼が全力で張った防護壁を抜けるには至らず。

永い時間をかけて育まれた怨念は、到底短時間で引きはがせるものではなかった。

「ぐっ……!」

一方、戦いを見守っていたリツカもあまりの魔力の消費に吐血する。厳密には『とめどなく流れる膨大な魔力に身体が耐え切れていない』ことが原因であるが。

「リツカさん!」

「平気。……せめて、燃料だけはちゃんと与えないと」

自分の存在意義が無くなってしまおう。

その意地だけで意識を保つ。

『……今更だが、よく精霊の誘いを断ってくれた。

それだけの覚悟を見せられたら……ああ、その覚悟の半分くらいは背負わせてくれ。

『例の件』、今できる限りで施させてもらおうよ』

「こんなときになんだ、と思いながらも俺はダ・ヴィンチの言葉に安堵した。

「ありがたい」

『ただ……代償は覚悟してくれ。100%はあり得ない。万が一の場合、君の自我は消滅するだろう』

「そうなたらこの身体は好きに使ってくれ。サーヴァントを現世に留める要かなめくらいには使えるだろう」

『そんな悲しいこと言わないでくれ。』

万が一の話だ、私も無茶はしないししたくない』

「ああ当然だ。というか、この戦いに勝つたらの話だ。今はアレをなんとかしないと。

……さあ、いい加減、決着をつけてしまおうか」

俺は礼装に魔力を込める。

『全体強化』。

対象は頼光、エリちゃん、メカエリ、そして武蔵。

全員に今できる援護の最大を叩き込む。

「〃宝具の開帳を許す、何としてもアレを打ち倒せ〃」

「っ!!」

リツカの念話を受けて頼光は、覚悟を決めて宝具の準備に入った。どちらにせよ、アレを放たれたら終わりだ。纏めて吹き飛ばされるのは明白。

桁違いの魔力がスクナを中心に集まってきている。対軍は当然として対城に匹敵するかもしれない。

「〃来たれ、四天王〃！」

「墜チヨ……『崇神・剛力鬼神弓』」

頼光の宝具を待つことなく怨霊は自らの最大火力を撃ち放った。

撃ち放つと同時に周りを包み込んでいた障壁は一瞬で砕かれ、膨大なエネルギー体が、『絶対に人間を殺す呪詛』を纏って周囲へと――

「『南無、天満大、自在天神』」

死が振りまかれる前に、武蔵が剣を抜いた。真の剣を。

『アレを断ち斬る未来へと全存在を投影』し、剣気を解き放つ。

彼女の背後には『剣圧によって写し出された仁王が立つ』。

「剣気にて、その氣勢を断つ！」

やがて、迫る呪詛に対して仁王がその手に持つ四本の剣を振るう。

振るう度に、彼女が生前に納めた五輪の書のうち、地水火風の概念と共に呪詛を否定する。

小天衝。相手の氣勢を剣気にて削ぐべく威圧するもの、その究極で以って武蔵は、呪詛ないし怨霊どもを威圧する。

押し留められた呪詛を前に、武蔵はゆっくりと自らの『剣を上段に構える』。

研ぎ澄まされた剣気が、因果を断ち斬る力が光となつて視覚化され彼女の一刀をきらめかせる。

「この一刀こそ我が空道、我が生涯！ 伊舎那大天象!!」

満を辞して振り下ろされた一刀は、たった一撃にて怨霊の宝具を一刀両断にした。

呆気なく二つに分かれて消滅する呪詛を、その場の全員が圧倒されながら目撃する中、背後では特大の雷が四度落ちるとともに四人の頼光が新たに現れた。

その手にはそれぞれ、鬼火を纏う鬼切、氷を発生させる長巻・氷結丸、風を纏う無銘の剛弓、そして坂田金時の振るう雷電の斧・黄金喰い。

それら魔性を祓う武器を手に一斉に怨霊へと襲い掛かる。

「ぐつ、がああああ!!」

怒涛の連撃に彼の肉体も大きな損傷を受ける。

さらにおまけとばかりに残った本物の頼光は手に持つ刀を構えて雷撃を充填した。

「牛王招来・天網恢々!!」

真名解放と共に振るわれる刀からは特大の紫電が解き放たれる。頼光の獲物・童子切安綱のスペックを全解放して放たれる頼光の宝具。

数多の怪物を斬り伏せた逸話そのものが宝具となった類のそれは神秘に属する存在

に対して絶対的なまでの特攻を發揮する。

「ぬう!？」

怨霊の集合体である彼が直撃を受ければどうなるかなど容易に予想できる。加えてマスターからの強化を最大限施された一撃ともなれば着弾と共に凄まじい衝撃を放つことも当然のことだった。

スパーク、視界を占有する閃光の連続にリツカたちは目を覆う。

空気を破るような破壊音と、神秘の碎ける衝撃から辺りは凄惨たる有様に変貌する。湖の水が弾け飛び、全体を干上がらせんばかりに一切を消滅させていく。

平安最強と謳われることもある彼女の宝具の威力はそれほど凄まじかった。

「はあ、はあ！ あ、あんなバケモン同士の戦い、付き合つてられんわー」  
一方、スクナの解放により戦場から離脱していた千草は京の森の中を必死で逃げていた。

最初こそ、必ずや復讐を果たしてみせると意気込んでいた。スクナを解放すれば必ず成し遂げられるとも。

しかし、二人の仲間を引き入れたことでそれは疑念に塗りつぶされた。  
特に燕尾服を纏ったあの得たいの知れない男。

ダンタリオンを名乗る彼は特に気味が悪かった。

底が知れないという次元ではなく、根本から人間とは異なる精神構造をしているような、根本から人間とは相容れないような。

また、男の連れてきた召喚師も不気味だった。

常にぶつぶつと何事か呟きながら血走った眼でこちらを見つめる、まるで親の敵を見るかのように。

あの狂気を正しく表す言葉を見つけれない。

結局、スクナは破壊され代わりに出てきたあの『常軌を逸した化け物』に本能的恐怖を揺さぶられ咄嗟にここまで逃げおおせてきたのだ。

復讐計画は呆気なく頓挫した。そもそもスクナ一体でいかほどのことが出来ようか？

冷静に思考を巡らせればバカでも分かる答えに千草は半刻前までの自分を恨んだ。

「月読はどこにいったんや!!」

加えて、仲間の一人である祝月読は忽然と姿を消し大事な時に一切姿を見せない。

ダンタリオンの自分を無視した独断専行、裏切りに近い行動、小太郎の呆気ない敗北、そもそもその防衛網の脆弱さ。



度重なる失敗に千草は精神的にも追い詰められていた。

”もう、全てどうでもいい。とにかくここから逃げたい”

変異したスクナの呪詛の波動を浴びて千草の野心は完膚なきまでに粉碎されていた。とにかくアレから逃げたかった。

そんな彼女の思いを見透かしたように『運命』は残酷な仕打ちを与える。

「……自らが呼び出した災厄の後始末もせずに逃げ出すとは」

夜の帳が降りた森の中、重厚でありながら嘲笑の滲み出る声が響く。

地面を踏みしめる音と共に、その声は千草の背後から聞こえてきた。

彼女は咄嗟に振り返る、振り返ってしまう。

或いは全力で走れば僅かでも命が延び、なおかつ『破綻した魔人』の姿を見ずに済んだかもしれないのに。

「本来ならば極上のワインを片手に静観を決め込んでいたかったのだが、『主』の命ならば仕方ない」

『それ』は聖職者の装いをしていた。

その本質はそんなものとは到底かけ離れているのに。或いはそれも『愉悦』を促すための要素なのか。

見た目は至つて普通の『神父』。しかし千草でも『気持ちが悪い』と感じるほどにこの男の狂気は異常であつた。

加えて、『十二カのカの加護を得ている』。

その加護すらも『どこぞの悪しき女神』のものであつたが。

かつて、別の世界にて『聖杯戦争の関係者の心を弄び、悪逆の限りを尽くした大罪人』。

それでいて『歪みながらも揺るぎ無い信仰心を持つ狂信者』。

『生まれた時から破綻した心を持つ者』。

或いはこの世界でも誰かの人生を弄ぶつもりなのか、そんなことは千草には当然分かるはずもない。

ただひとつ確かなのは『千草を殺すためにやって来た』ということ。

濃厚な殺気はスクナには及ばずとも人間が出すものとしては破格のもの。

「お初にお目にかかる。」

私の名は『言峰綺礼』。

早速だが死んでもらおう」

——言峰綺礼。

善を心地よいものと感じられず、悪逆・悲劇にこそ悦びを感じる根っからの破綻者。『この世界の』正史であれば今頃は自らの悪性に苦悩しつつも聖職者として生涯を閉じるはずであった男は『悪しき神々の思惑』によつて覚醒した。

干渉があつとはいえ、彼はこの世界においても自らの答えを得るために、人々を弄ぶことを選択したのだった。

## 京都・十五

「……………くそっ」

煙の晴れる中、奴は未だ生存していた。

「許すまじ……………許すまじ人類。」

我ら敗者を忘却の彼方に追いやり、数多の屍の上に繁栄を謳歌する貴様らを我々<sup>わたし</sup>は許さない。

自らの悦楽のために他者を踏みにじり、謗り、嘲り。

自らの保身のために他者を貶め。

自らの名声のために他者の功績を不当に貶め、或いは掠めとる。

見れば見るだけ、見るに絶えない歴史ばかりよ。

それが人類。賤しき『獣』どもの名だ。

貴様らは理解しているか？

自らがそのおぞましく醜悪な生き物のうちの一匹であることを。恥じるなら理解できる。改善を志すならばまだ破滅への時は遠い。

しかし、貴様らはこの千四百年ひたすらに墮落した。成長することなく、より卑しく矮小で醜い生き物に成り下がった。

もはや破滅は免れない。ならばこうして『我ら』の怨みを果たすのもまた許されるべきだ」

先程までとは一転して冷静な声で奴は語る、語りながら『半壊した身体』をゆつくりと起こした。

四腕は吹き飛び、胴体も中心を大きく抉られながらも奴は未だに生きていた。どころか、欠損部分を黒いヘドロが覆い修復しているようにも見える。

その事実当初、誰一人として声もあげられなかった。

最強格の魔法使いにして吸血鬼エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、対魔性のスペシャリスト源頼光、古の鬼殺し・吉備津彦、そして大剣豪・宮本武蔵。

それだけ揃えて、なお、この怨霊を討ち取るには至らない。

単純に火力が足りないのか、もっと別の要因か。

この期に及んで俺の思考はまだ冷静だった。

すでに次の対抗策を練り始めている。

しかし、どうあがいてもこれ以上の攻略法を見出だせない。  
それだけ、千四百年分の怨念は強大だった。

しばらくして、

「化け物め……」

自らがその化け物の一体のくせにエヴァはそう悪態をついた。

「ふん……」

震脚からの活歩、達人の域にある言峰綺礼のそれは素人目に見れば瞬間移動にも等しい。

一瞬で間合いを詰めた彼は、千草が護衛として召喚した二体の式神、即ち熊鬼と猿鬼の肢体を一撃ずつ拳で打ち抜き瞬きの間に消滅へと追いやった。

「なっ!?!」

驚く千草の目の前にはすでにかの神父が立ち塞がっていた。

長身に加えてその身から得たいの知れない狂気を滲ませる彼の姿は相對する者に耐え難い恐怖と威圧感を与える。

事実として千草はすでに腰が砕けてその場から一步も動けなかった。

怖い。

果たして自分が彼に何をしたというのか、なぜこのような恐怖を味あわなければいけないのか。

なぜ、生まれてこの方、自分はずっと不幸なのか。

巡る思考を、当然ながら彼は知り得るはずもなく知っていたとしても同じようにただ冷静に目標を排除するだろう。

「……」

特に何を告げるでもなく、単なる作業のように彼は拳を振るった。

終わる。

それだけが千草が認識できた唯一のこと。落命に気づくことなく彼女は呆気なくこ

の世から去るーはずであった。

「っ!!」

しかし、彼女の目前にまで拳を振るったところで、綺礼は咄嗟にその場から飛び退いた。

それと入れ替わるようにその場に真空の刃となった斬撃が到来する。

『チツ、勘ノ良イ奴ダ』

遅れて千草の前に降り立つのは小さな『人形』。

その手に大きめのダマスカスナイフのようなものを持つ文字通りの『人形』。

カタカタと音を鳴らしながらどこからか声を出している。

喋る人形。

エヴァンジェリンが初期より所有する人形<sup>ドール</sup>、今の従者たる茶々丸の姉にあたる存在。

チャチャゼロ。

本来であれば千草の逃走を予見していたエヴァの指示により、適当に千草を脅して捕まえておく役目を担っていた彼女。

しかし、この局面において突如、千草の『命を狙ってきた何者か』の登場により彼女



は急遽予定を変更。

今事件の最重要参考人たる千草の身柄確保のために己む無く彼女を助ける選択を取った。

「……予定に無い増援だ。

いや、素性は知り得ている。

『闇の福音』の従者にして彼女の『最初の』<sup>ドール</sup>人形。

チャチャゼロ」

『彼』は動揺することもなく冷静に敵の分析を行う。

動く人形というのは綺礼をして初めて戦う相手ではある、が。

『代行者としての戦歴』がある彼にしてみれば、不死身でも何でもないただの操り人形の相手など片手間に済みますことができると判断していた。

対して、チャチャゼロも敵対する男の力を静かに測っていた。

この苦悩が刻まれた顔の筋骨隆々な黒コートの男、常人であれば嘔吐感すら抱く異様なオーラを持つ男。

青白い肌を持つ彼は、『チャチャゼロの目には』魔法使いであるように見えた、それも『日本の仏教の流れを受け継ぐ僧兵』。

「きゆう……」

命を落とすまであと一歩、というところまで迫った危機に千草は失神してその場に倒れこむ。

『アーアー、情ケネーナー。コノ程度デ気ヲ “ヤル” 覚悟シカ持タネーナラ、コンナコトスルジヤネーッテノ』

それを横目にチャチャゼロは僅かにため息を漏らし、すぐに敵の方へ注意を戻した。  
「クク、これは面白い。」

かの魔王とも呼ばれし吸血鬼の僕が、よもやこのような『些事』に首を突っ込むとは。私の見立てでは、いや、以前の君ならば放置すると思っていたのだがな。

どうやら主人共々、くだらぬ感傷を抱くほどには “落ちぶれた” らしい」  
『ハツ、テメエカラハオレト同ジ臭イガスルゼ。

……イヤ、トモスレバオレ以上ノ悪党……モ違ウナ。  
アンタハ、生マレナガラノ “悪人” ダ。

ナア、 “魔法使イノ坊サン” ヨ』

チャチャゼロは、その『悪には機敏』な感性により彼の本質を見抜いていた。  
生まれながらに悪にしか生きられない真性の外道。

悪党とは違う、真性の悪人。

「ふむ、君にはそう見えるか」

綺礼はそう呟くや否や、またも震脚を用いた歩法にて瞬時に攻勢に移る。

『ツ！』

殺人術として独自の改良を施された綺礼の武術は、数百年を主人と共に戦いに費やしたチャチャゼロをして驚嘆するほどであった。

彼女の核を的確に狙った拳に寸でのところでナイフを合わせ、なんとか致命傷を防ぐ。

そして、すぐさまその腕を切り落とすべくナイフを振るう。

『ナツ!?!』

しかし、一振り、二振りと振り下ろす度にナイフを素手で捌かれ一太刀すら入れられない。

接近戦は不利と瞬時に悟ったチャチャゼロは素早く後方に退き、その最中にも斬撃を複数飛ばして対抗する。

「ふん……」

だが、綺礼が懐から取り出したる幾つもの剣の柄。それらを両手に三本ずつ持つと同時に『刀身が生え』、それらによって斬撃は全て斬り落とされる。

おまけに、彼女の攻勢の隙を狙ってそれら剣を『投げ飛ばす』。

『ヌオツ!?!』

咄嗟にナイフで防いだ彼女だったが、それは悪手であったとすぐに悟る。

その間に目の前まで移動していた彼の拳が、すでに撃ち放たれんとしていたからだ。

しかし――

「ハイヤー!」

またも新しく乱入してきた輩によって綺礼の必殺は中断されることになる。

自らと同じく中国拳法を使う道衣の少女。

その拳を横つ腹に受け、今度は綺礼が弾き飛ばされる。

が、空中ですぐに体制を立て直し着地と共に乱入者の姿を目視する。

「なるほど、同じ流派の遣い手か」

道衣の少女・古菲の構えを見てすぐに相手も八極拳の遣い手であると察した綺礼は、同時に彼女の技量をも見抜いていた。

自らが邪道にも等しき殺人術の使い手ならば、彼女は真つ当な拳士のままに達人の域に達した正道の武術家であると。

「しかし、節操が無いな。八極拳だけに飽き足らず他の拳法にも手を出しているとは」

また、彼女が特定の流派に縛られず『中国拳法』という大きなカテゴリーの中で広くその腕を磨いていることも。

「綾瀬を探しに来たら、どうにも『良くない気配』がしたから来てみたアルが……」

古菲は、自らが交戦していた金鬼がエリザベートの宝具によって倒された後、龍宮たちの救援に向かおうとしてすぐにその頂上決戦にも等しき高度な戦闘を見てそれを諦めていた。

観戦に徹しようと考え始めたところで、ふと、綾瀬の行方が不明となっていることを思い出した彼女は、森の中で綾瀬の搜索に専念していた。

その時、ふと感じた『悪しき気配』に誘われて来てみれば、綺礼が今まさに『人命を奪う直前』であったために止めに入ったのだ。

『助カツタゼ、バカイエロー』

「誰がバカアルかー！」

……つて、人形が喋って動いてるアルー!？」

なんとかか体制を立て直し礼を述べたチャチャゼロに反射的に反応した古菲は、チャチャゼロが動いて喋る人形であることに驚いていた。

『アー、ソウイウノハ今ハ後ニシヨウヤ。

……奴サンモ、痺レヲ切ラス頃ダ』

チャチャゼロの視線の先では『黒コートの破戒僧』が静かに、佇む。

そして『古菲の視線の先では』黒髪長髪の青年が静かに、狂気の笑みを浮かべていた。

古菲からの第一印象は『どう見てもラスボス吸血鬼』。

「クク……今回は何の面白みもない雑務だと思っていたのだが。

なかなかどうして……面白いことになりそうだ」

彼は一人嗤う。

その思考を正しく理解できるものは当然ながらこの場にはおらず、理解しようとする者もない。

それでも彼は確かに、『愉悦』を見出した。

「……ウム、全く状況が理解できないアルよ！」

そして、古菲は今のこの状況が一から十までさっぱり理解できなかった。

殺生が行われようとしているから反射的に止めに入ってしまったが、果たして、この場において誰が悪で誰が『正』なのか？

『トリアエズ、オレハ味方ダ。何タツテオレノ主人ハ、エヴァンジェリン・A・K・マク

ダウエル”ダカラナ。

オレハ、オ前ノクラスメイトノ人形ダ」

「おお、あのエヴァンジェリンの……下僕？」

……とゆーことはエヴァも魔法使いアルか!？」

人類の極致に迫る力量を持ちながらも、今日この日初めて『神秘』を認識した彼女にとつては驚愕の真実、当然ながら不死の魔法使いであることなど知り得ようはずもない。

ただ、今の状況で説明も面倒だし時間もないと判断したチャチャゼロは適当に流して共闘を促す。

『ソーソー、ソウイウコト。』

……ダカラ、トリアエズハ共闘スルノガ得策ダト考エルゼ』

「む……分かったアル。事情は知らぬがクラスメイトの関係者の頼みとあれば拳を振るうのも”やぶさか”ではないアル」

再度、構えを取り綺礼への警戒を始めた古菲だが、実のところ、本音を言えば綺礼が武術の達人であることを先の初撃で悟ってしまったがために純粹に仕合たいという気持ちの方が大きかった。

かくして、『人形使い』<sup>ドールマスター</sup>の一の従者と拳法少女・古菲は一夜限りの共同戦線を張る。

「……ふむ。しかし、ここで『君』のデータを仕入れておくのも悪くない。なにやら、偏りも見受けられることだ。

恐らくは秘宗拳。となれば候補は限られてくるが……

なに、戦えば分かることだ」

瞬間、彼の身体から得体の知れない『邪悪な魔力』が湧き出る。

刹那、二人は彼の背後に『漆黒のドレスを纏った美女』を幻視する。

それは今の彼を彼たらしめている『原因』であり、彼がこの世界にて道を踏み外す切っ

掛けとなった神『の眷属』。

『悪しき女神』そのものであった。

『魔力量、更に増大！



ダメだ、これ以上「成長」されたら本当に手に負えなくなる」

グジュグジュと音を立てて再生する怨霊を見つめながら、ダ・ヴィンチちゃんの報告を聞く。

そんなことは分かっている、分かっているがこれ以上どうしろというのだ。

……いや、今一度、二度、三度と俺が魔力を注いで宝具を連打させれば或いは――  
『ならぬぞ、召喚士。』

今のお主は私の魔力で無理矢理動く木偶でも同然。

先の魔力消費でさえ危うかったものを、これ以上使えば最早我が動かす間も無く弾け飛ぶぞ。』

すかさず吉備津彦が俺に小声で告げる。

まあ、だろうとは思う。今も立っているのがやっただし。

「ダ・ヴィンチちゃん、アレに弱点とかある?」

霊核みたいな、そういう。

『残念だが、無い。』

いや、正確にはアレそのものが核。

分かりやすく言えば魔人○ウダ』

なるほど。

「無理ゲーだな」

そうなるといよいよ元〇玉くらいでしか倒す手段が見当たらない。

いや本当にどうすればいいんだ。

その時、傍に武蔵ちゃんがやってきた。

「いやあ、咄嗟に剣抜いちやっただけど。

……しくじったかな。ごめん」

何を謝る必要があるんだか。

「いや、あれは最善の行動だった。貴女が剣を抜かなければ今頃は諸共に呪詛に焼き殺

されていたからな。

礼を言う」

俺の返答に武蔵ちゃんは少し驚いたような、困惑したような顔を見せた。

しかし何も言うことなく視線を怨霊へと移す。

その周囲には濃厚な呪詛が渦となって現れており、もはや近づくだけでも一瞬で呪い殺されてしまうだろう。

確かに、奴は『成長していた』。

「……………ここまで、か。」

もう少し、この子を見守っていてあげたかったんだけど」

ぽつり、と木乃香は呟いた。その声はどこか儂げで、悲しげ。しかし、なんとなく満  
 足げでもあった。

『逝くか、紫苑』

その声に反応したのは吉備津彦。

「うん……………いやあ、若い身体つてのもなかなか楽しかったんやけどね。お肌ピチピチや  
 し」

『フ……………齡二十余で命を落とした貴様が何を。』

……………良いのだな?』

少し、考える素振りを見せてから吉備津彦は真剣な声音で問う。

対して『彼女』は満面の笑みで応える。

「もちろん。それが『この家、この時代に生まれた巫女の役目ならば』。

……………この子の近くには『あの世界の巫女』もいるようだしね、私はもう必要ない」

ちらりと視線を向けた先には、必死に呪詛を抑え込む明日菜。

『ならば最早何も言うまい……………いや、一つだけ。』

貴様との契約、存外、悪くはなかった。歴代の巫女と比べてもなかなか楽しい日々であつたぞ』

「あはは、いつも鉄面皮な貴方がそんなことを言うなんてね。

……この子のこと、よろしくね」

その言葉を最後に、木乃香の身体から抜け出した『彼女』はふわりと宙に浮かび、その朧げな霊体のままに怨霊のもとへと向かう。

同時に、木乃香の身体は糸の切れた人形のようにぱたりとその場に倒れこんだ。

「お嬢様!？」

その姿を少し離れた位置で視界の端におさめた刹那は一目散に木乃香の元に駆け寄りその身体を抱き起す。

『案ずるな。気を失っているだけに過ぎん。』

……しかしー』

慌てる刹那を窘めつつ、吉備津彦は思案する。

(我が力、ここまで削がれるとはな……『奴』め、大人しく魔界に引つ込んでおけば良いものを。)

……これは、あまり、力になってやることはできぬかもしれぬ)

有り体に、彼の状態は良くなかった。

それもそのはず、

此度の騒乱、スクナの解放に乗じて間接的に干渉してきた『何者か』の妨害により吉備津彦の霊基はズタズタにされ、その力を大幅に削がれていたのだから。

――はて。

――私は、いったい何をしていたのだったか。

暗闇の中、『彼』が眩く。

それから暫くして、『此度の肉体』に蓄積された記憶を順繰りに呼び覚ましていくと共に。自らが置かれた状況をゆつくりと理解していく。

「ああ、なるほど。『不正召喚』か。

「なるばこそ、このような不安定な霊基も納得がいくというもの。

理解すると同時に彼の中に耐え難い怒りが込み上げる。

それは、自らの力が、肉体が他者に不当に操られたからではない。

なによりも自分の力が『民草を不幸にする所業に使われたこと』。それに憤慨していた。

もとより、彼とは『民を想い、良き統治を目指す為政者』であつたがゆえに。

少なくとも『この世界の』彼はそうであつた。

『かの世界』と『この世界の』己が混ざり合つた歪なサーヴァント。しかし、その信念は『善性』に拠っていることが此度の騒動においてリツカたちの幸運となる。

やがて、ゆつくりと目を開き『現実』を直視した彼は「

「ああ、なるほど。『アレ』を操るためだけに、そのためだけに『器』とされたか」  
「断じて、許し難い。」

「ならば、その終幕も請け負つてやろう。それでこの茶番は終わりだ」

鬼神を操る、もとい呼び覚まし『アレ』を降臨させるためだけに呼ばれたのならば、その逆もまた然り。

あくまで『アレ』の肉体が鬼神であるというならば、操れぬ道理はない。

もとい、彼はそれだけのために呼ばれたのだから。

その能力だけは特筆すべきもの。

——ここまでの罪を清算できる、とは思わない。

——だが、無念のうちに、二度目の負け戦を味わわせてしまった『彼ら』に対してせめてもの償いとなればと思う。

彼は覚醒したその場からゆつくりと歩き出す。

もはや走る余力も残されていない。それにこの後、あの大鬼神を抑え込む大仕事があると考えれば、幾分も無駄にできる魔力はない。

やがて、視界に収め声をかけたのは『かのマスターであった』。

「っ!! あんたは!!」

彼の姿を確認し驚きの声をあげるリツカに、彼は冷静に応える。

「サーヴァント・キャスター。」

真名を『藤原千方』。

……かの怨霊の討伐、私も協力させてもらおう」

# マテリアル1 オリジナルサーヴァントその1

【元ネタ】 太平記、伊水温故、地方伝承など

【CLASS】 キャスター

【マスター】 ※通常霊基での召喚時

【真名】 藤原千方

【性別】 男

【身長・体重】 176cm・70kg

【属性】 混沌・善

【ステータス】 筋力D 耐久C 敏捷D 魔力A++ 幸運C 宝具A++

【クラス別スキル】

陣地作成：A++

かつて一部地域を治めた豪族であったキャスターは高いランクでこのスキルを持つ。

また、朝廷軍を幾度も退けた逸話から陣地内ではステータスや判定へのプラス補正が加えられる。

この陣地は新たな地域に魔術的改修を加えることにより広げることができる。



道具作成：D

【固有スキル】

陰陽道：A＋

陰陽師として高い実力を持つ。また召喚術に関してはさらにプラス補正が働く。四体の強力な鬼神を使役した実力から高ランクでのスキル取得となっている。

【宝具】

『千方の四鬼（ちかたのよんき）』

ランク：A＋＋ 種別：召喚宝具 レンジ：???

最大捕捉：???

陣地内にて使役できる強力な鬼たち。

しかし、陣地の外での行動は基本できない。

また、それぞれに簡易拠点を作成しなければ使役すらできない、加えてそれらの破壊によつて容易に送還されてしまうという使い辛さ。

おまけにこれの発動時にはキャスト自身は殆ど何もできないほどに使役に集中しなければならぬ。

これらの制約がありながらも、呼ばれる鬼たちは非常に強力であり、一体一体が高いステータスを有したサーヴァントに匹敵する。

それら実に四体を同時使役できるのがキャストの強みである。

『逆柳の甌穴（さかやなぎのおうけつ）』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1

血首ヶ井戸。

キャスターが討ち取った敵の首を入れたとされる池。

転じて、討ち取った敵を魔力エネルギーへと変換して補填に充てることのできるエネルギー炉としての宝具となる。

対象が霊体であれ肉体を持つものであれ、魔力リソースに変換し、キャスターへと送る機能を持っている。

なお、レンジ、最大捕捉はあくまで『陣地』としては一つのみを対象とし、供給対象はキャスターのみ』という性質から。

効果にも制限があり、先ず『本拠』とした陣地内にある『池』を基にして作成する。

加えて、効果はこの宝具が設置された陣地内のみで有効となる。逆を言えばこの宝具の設置された陣地内であればキャスターは供物次第で多大なバックアップを受けることができる。

原理としてはキャスター自身の『敵であれ、命を奪った者の無念も背負わねばならぬ』という責任感から、最も的確な所縁の場所であるこの甌穴が選ばれ、このような宝具として登録された。

なので千方自身はあまり使いたがらない。

【備考】

太平記に記される朝敵の一人。

強力無比な四体の鬼神を操り、官軍を苦しめたが右将軍・紀朝雄が和歌によつて鬼神を奈落に落としたことで劣勢となり、後に矢で射抜かれ戦死した。

太平記を始め、多くの書で反逆者として記載される人物。

しかし、その詳細は未だ謎が多く、ある史書においては、地方の領主で強大な軍事力を持ち愚かで傲慢、粗暴な暴君のように語られており、朝廷に敵対した理由も自らの力を驕り高い地位を朝廷に求めたが拒否されたためとされる。

だが、この書においては太平記などの記載との相違点が多く四鬼の面々も異なっている。

結局のところ、キャスターを正確に後世に伝える記述は存在しておらず、ただ『朝廷に逆らった地方領主がいた』という事実のみが広く語り継がれているに過ぎない。

——ただ、少なくともこの世界においては彼は民を想う立派な為政者であった。

【メタい話】

今作においては千方は基本いい人としています。

理由としては、単純な悪鬼外道だと記述の乏しさから反英雄にすらなれないと思われるため。

あと、彼の協力無くしてはスクナ倒せなくなるから。

日本に限った話ではなく、昔の歴史書は勝者の都合の良いように書かれていることが大半なのでそのまま鵜呑みにするのは慎まれるべき、と思った次第。なので妄想設定モリモリにしました。

まあ、ぶつちやけ有名なのはどちらかという配下の四鬼のほうなのですがね……千方エ

他にも石とか窟とか宝具追加したかったけど、最早別物になりそうなので自重しました。

あと、助力に関しては次話以降語らせていただきます。  
待っててね☆

※今回の不正召喚時のステータス

【元ネタ】 太平記？

【CLASS】 キャスター（アヴェンジャー）

【マスター】 ダンタリオン

【真名】 藤原千方（とある呪術師の怨念）

【性別】 男

【身長・体重】 176cm・70kg

【属性】 混沌・悪

【ステータス】 筋力D 耐久D 敏捷B 魔力A++ 幸運E 宝具A+

【クラス別スキル】

陣地作成：A++

通常時と変わらず高ランク。

また、今回はすでに『京都そのもの』を陣地にするとんでもないことを事件前の暗躍で成し得ているのでバックアップは無限大。

そのため、四鬼の簡易拠点も『本拠』の内部に作成しており武蔵によつて幾つかの簡易拠点を落とされても四鬼が即消滅することは無かった。

道具作成：B++

千方として、というよりは中身の素質。

魔法産の鬼神ボディをスクナ制御装置に作り変えるという地味に凄いことをしているため。

あと、呪術系の道具作りに関しては彼はもともとサーヴァントに匹敵する能力を有していた。

※不正召喚の影響により、アヴェンジャーとの二重召喚状態ダブルサモンとなっている。

復讐者：A++

忘却補正：A++

自己回復（魔力）：A++

【固有スキル】

陰陽道：C-

厳密には本人ではないために十全な行使は難しい。ただし、呪法を混じえた行使ならば得意。

【宝具】

『千方の四鬼（ちかたのよんき）』

ランク：A | 種別：召喚宝具 | レンジ：???

最大捕捉：???

不正召喚の影響でうまく機能しない。

本来、条件を満たせば完全使役が可能となるものを『京都を手中に収めても』従えられない。

そのため、キャスターの『中身』が得意とする呪法と、ダンタリオンが『自らの蔵書』から引き出した秘術で無理矢理従わせている。

なので京都という大霊地を得ても尚、定期的に拠点に戻り魔力供給を行い強制力を高めるというリスクが発生している。

尚、四鬼はキャスターの中身が違うことを理解しておりそれ故に反逆を目論んだ。

『鬼神使い』

ランク：？ 種別：??? レンジ：??? 最大捕捉：???

本来、宝具ですらない特性を『今回の事件のために』ダンタリオンとキャスター自身が呪法によって改造を施し作成した謂わば人工宝具。

【Weapon】

なし

【解説】

『人理記録帯』としての力を十全に使えない『黒幕』が無理矢理召喚（不正召喚）したことで、色々と混ざっちゃった人。

一応、呪術師自身が死の直前に『とある神』と契約したことで今回の憑依召喚が可能

になった。

加えて、祖先を討ち果たした英雄の『正体』が、本来のキャスターを討ち果たした英雄の『正体』と同じ。という微妙にどうでもいい設定もあるが忘れてもらって構わない（おい）

復讐に燃える怨霊。とある神様との契約で怨霊と融合しており最早彼の自我は無きに等しい。

その様は正しく怨霊であり、道理や合理を理解する知性はない。

自身の祖先であるスクナさんの肉体を乗っ取ることにより、この身体は放棄された。

——ただ、霊核が無事だったために本来のキャスターが覚醒したことは完全に予想外。



## 京都・十六

——彼の者は常に独り、劍の丘で勝利に酔う。

その男に救いは無かった。

生涯を『他者』のために捧げ、全てを救いたいと願った末に救った者に欺かれ死を迎えた。

——ただの一度も敗走はなく。

——ただの一度も理解されない。

けれど男はそれで満足だった。

自らの死で救われる人々がいるのなら、彼は喜んで自らの命を差し出す。

……だが、そこからが。死後こそが彼にとっての苦難の本番だった。

国家崩壊という結末を回避するために『老若男女殺し尽くした』。

またある時は『世界滅亡の芽となる紛争地域の人々をテロリスト、民間人、政治家間  
わず皆殺しにした』。

多数の救済のために少数を切り捨てた。

彼の意味ではない。

『人類種そのものがそう願ったのだ』。

その選択はかつて彼の養父が選び、後悔したもの。そうやって殺し尽くした果てに得  
た平和に果たして意味はあるのだろうか。

生前、ある人々を救うために死後を世界に売り渡した彼は、その意思のもと『永劫に  
近い時を酷使されることになった』。

果たしてそれは契約時に告げられただろうか？

告げられていたなら、知っていたなら彼は死後を売り渡すなどという愚行を犯さな  
かっただろうか？

否。

結局、彼は死後を売り渡すことを選ぶ。

どのような苦難が待ち受けようと、彼は『その時の人々を救うために動く』。常軌を逸した奉仕精神、いや、そのような次元ではない。

彼は『絶対に誰かを救うために動く』。

本気で彼は『世界を救おうとした』。

その末路。

故に受け入れる他に選択肢はなかった。

少なくとも『この異世界の彼は』。

「つ、謀ったか！ 『我が片割れ』よ!!」

「ー時が動く。否、『私』の時は止まったままだ。」

動くのは目の前にて異形の姿を見せる『ナニカ』だ。  
『混沌』。そう表す他に無い異様な姿をしている。

此度の任務は『抑止力そのものを破壊せんとする大罪人の排除。例のごとく『私の意思はない』。』

ただ冷静に状況を、情報を分析するのみだ。

頭が霧がかかったような不明瞭な意識のなかで私はいつものように『投影』する。

トレス・オン  
「同調開始」

『キー』を合図に無数の剣が現れる。

身体に染み付いた戦闘の感覚、経験。

己の根本である『固有魔術』。

私の意思一つで無数の剣群は『敵』へと向かい行く。

「『贗作屋』ごときが……！」

私の悲願を否定するか!?

他ならぬ貴様自身が望んだ希望ある未来を拒むのか!?

敵が何事か喚く。

しかし今の私に返す言葉はない。

ただ、命令通りに『人類の脅威』を摘み取るだけだ。

奴は『渦巻くナニカ』から『あらゆるモノ』を現出させ空間を覆う剣群を一瞬で粉碎した。

「認めぬ、私は認めぬ!!」

『人類が自らに枷を設ける』など！

人は羽ばたけるはずだ!!

その生命続く限り前へと進み続けるのが『人間というものだろう』!?

ならば『失敗を恐れるな』!!

『抑止力セーフテイなど設けずとも貴様らは未来を勝ち得る』はずだ！

そのための知恵であり、なにより『そのおぞましく醜悪な生き汚さ』だろう？

『薄汚い虫けらのような繁殖力』で星を覆い尽くし、尚も留まることを知らぬ！

遂には『浅ましくも』宇宙ソラにまでその手を伸ばさんとしている！

実に、実に素晴らしい!!

私達わたしが夢見た通りだ！

だが、なればこそ『枷』を取り払うべきである！

貴様らの未来に抑止力アラクヤなど不要だ!!」

こいつは『狂っている』。

人類至上主義を装いながら『根元は私怨』。

加えて抑止力破壊のために全人類を抹殺しようとしている。

目的からして矛盾している『破綻者』。

何がどうしてこうなったのか。駒でしかない私には一切の情報は与えられていない。ただ、何らかの外的要因があつたことは確か。

「……」

……これ以上の推測は無意味。今はただ目の前の敵を排除することに全てを注ぐのみだ。

それこそが『今の私の唯一の存在意義』。

「いずれにしても、このまま放置するわけにはいくまい。

現状、動ける奴はどれだけいる？」

動かなくなった左脚を悟られないように庇いつつ、辺りを見渡す。

何度も消し飛ばされて真っ裸のエヴァを筆頭に、ネギくん、刹那、明日菜、エリちゃんにメカエリチャン。

それと頼光と武蔵ちゃん。

トップ陣はもはや戦闘継続に疑問を感じるほどに消耗が激しく、ネギくんと刹那では些か厳しい相手。明日菜も俺たちへと襲い来る呪詛を吉備津彦と共に抑えており仮に戦闘を行えたとしても、やはり『アレ』の相手は厳しい。

ならば、どうするか。

と、あまりにも手詰まりな状況に呻いていると、ダ・ヴィンチちゃんならびにメカエリから報告が入る。

『む、そちらに接近する反応あり。微弱だが、これはー』

「サーヴァントです。警戒を」

即座に反応があると思しき方向にマシンガンを構えるメカエリ。

俺は礼装の機能を回復に全振りしているので探知は彼女ら任せにならざるを得ない。ともかく、彼女が向いている方向へと振り向く。

「っ!! あんたは!!」

視線の先、湖の上を歩きながらこちらにゆっくりと近づくのは、先ほどまで敵対していたサーヴァント。

藤原千方。

確かに奴は『アレ』になったはずだが、いったい……??

いや、まて。

以前までの奴はあのように穏やかな顔を、雰囲気醸し出していたか?

或いはー

「マスター? 迎撃します、よろしいですね?」

何も指示を出さない俺に、焦ったようにメカエリが告げる。



見れば他の面々も一様に戦闘態勢だ。

「待て。……もしかしたら、アレは、違うのかもしれない」

「は？ ……しかしー」

俺の返答に一瞬惚けた表情をしてから、彼女は慌てて反論を始める。と、そうこうしているうちに千方はすぐ近くまで来てしまっていた。

しかし一向に攻撃する素振りは見せない。

それどころかー

「サーヴァント・キャスター。

真名を藤原千方。

……かの怨霊の討伐、私も協力させてもらおう」

強い意志の籠った瞳で、そんなことまで告げてきた。

「……っ、なにを今更！」

度重なる激戦の疲労、危機的状況から喰らい付かんばかりに猛るメカエリを、なんとか制止して応える。

「……千方。本当に、本人なんだな？」

「ああ。

……これまでの無作法、許せとは言わぬ。

だが、あの災厄を野放しにすることはできぬ。

故に、そなたらに助力を求めたい。我一人では到底太刀打ちできぬゆえに」  
 そう言つてこちらに頭を下げる千方。

さすがにメカエリも、他の面々も彼の豹変ぶりに戸惑いを隠せない。

だがこれでようやく納得いつた。いや、確信を持たた。

『リツカくん、確かに彼の靈基は『通常のキヤスター』に相違ない。

こちらで観測した限りではね。

おそらく、彼の言うことは本当だ』

「ああ、俺もそう思う。……いや、そうであれば『アレ』の正体も——」

——そこまで考えて、俺は致命的なことに、今、ようやく気がつく。

両面宿儺。

飛驒の地にてかつてあつた大鬼神、朝廷に逆らい滅ぼされたかつての領主であつたと  
 も語られる『まつろわぬ者』の一人。

確かに、鬼神として二面四つ腕の剛力の者としては伝わっている。

——だが、果たして前世にて崇り神などと伝えられていただろうか？

「つ！ なら、『アレ』は。

……『アレ』はなんだ？」

「……マスター？」

飛驒の鬼神。まつろわぬ者。

日本書紀の記述では単なる化け物。しかし地方伝承においては豪族であったり、はたまた賊より民草を守る英雄とも語られる。

しかし、いずれにおいても『崇り神などとは呼ばれていない』はず。

そのような伝承はこの世界でだけ語られている内容だ。

『理』の相違、いや基本骨子から異なる……世界間の『ズレ』。

仮に、ここが『神代を経て、f a t eの世界にならずにネギまの世界になった世界』だとするならば、その経緯、歴史、人理さえ大きくズレている可能性がある。

ラグナロク、ギガントマキア、いずれの神話の中でも特に大きな戦いに相違があるのか？……だめだ、そこまで詳細な前世の記憶など思い出せるはずがない。

少なくとも最終的な結果は総じて……

そもそも魔術基盤の上から魔法という異質な体型を『上書き』しているという状況が……

いや待て。なら、単純に、それぞれの『神話の最後にもズレが生じて……』

「マスター！……いつもの悪い癖はその辺で！」

千方（仮）がどうしたものとオロオロしてますよ！」

唐突にメカエリパンチ（手加減）を腹部に喰らい意識を現実に戻される。

そうだった、今はそんな考察をしてる場合ではなかった。

「子イヌって、偶に宇宙と交信してるみたいな雰囲気出すのよね。」

……電波なのかしら？」

なぜか、エリちゃんには言われたくないと感じた。

少なくともお前も『同じ部類』だろうに。

「いや、すまん。」

それでキャスター、いや千方。とりあえずはそちらの発言を信用する仮定で話を進める……いいか？」

一応、ダ・ヴィンチちゃんならびにメカエリに確認を取る。

『本来なら不確定要素が多い選択はしない方が得策なんだが……状況的にそうも言っていられない。』

私は賛成だ』

「……確かに、観測データでは“先ほど”とは異なる霊基です。スペック上は寧ろ大幅にダウンしていますが。」

……仮に、『アレ』が抜け出たという話であれば一応の筋は通るか判断します。要す

るに、『とりあえず認めますけど不審な動きをすれば即座に抹殺します』ということですよ」

メカエリチエックも無事に合格のようだ。

「私は？　ねえ、子イヌ。私には聞かないの？」

なにやらエリちゃん物が物欲しそうな顔をしている。

これは、ご褒美が必要か？

とまあふざけるのは無しにして。

「エリちゃん、いい？」

「仕方ないわね！　マネージャー兼プロデューサーの判断なら従うわ！」

とりあえず聞いてみたものの予想通りの答えに「なら聞くなよ……」と思わなくもない。

まあ、ただ、彼女も『庇護対象』であるからして。

俺は極力彼女を前線には出したいくないという本音なのだな。

罷り間違つてもそれを口に出すことは控えねばなるまい。

言ってしまうえば逆説的に『それ以外は死んでも構わない』と言うようなものだし。

「それで、キャスター・千方。

何か策があつて来たのだろう？」

でなければここまで鬨気を滾らせてこちらに接触してくるはずもない。

「無論だ」

そう言つて彼は頷き、懐から一枚の巻物を取り出す。

それは煌びやかな装飾が施されたもの——ではなく、簡素で、悪く言えば小汚い質素なものだった。

「私の時代にはこのようなものすら無かつたが……今は『けえたい』とやらで文通はよろか話すら可能とか。

まこと、便利な世の中になつたものだ」

どこか感慨深そうに語りながら彼はそれを広げる。

「鬼とは即ち魔性の具現。

然るに『良くないもの』の総称と語られる抽象的なものだ。

元来、それらと人は相容れず互いに殺しあう関係にある。

……だが、古代よりそれらを操るといふ偉業を成し得たものたちもいた。

現代において役小角が最たる例だが、陰陽道で言えば人ではないが赤舌神も六体の鬼を使役すると伝わるし、私としてその一人だ」

そこに描かれているのは、およそ陰陽術とは言い難い『様々な秘術の寄せ集め』。

日本だけにあらず、仙術道術、外来の呪術など古今東西のあらゆる『鬼を操る術』だけを抽出し合成したもの。

「……私を呼び出した輩どもは、これらを習合し、鬼神使役の適合者たる私に刻み付けた。

反動で霊基はだいぶ『汚染』されたが、『ヤツ』の去った今となつてはそれも軒並み掻つ攫われた。

だからこそ、貴殿らに手を貸すこともできる」  
鬼神使役。

本来はスキルになることも叶わない脆弱な特性に過ぎないものをこうして宝具として精製した今となつては『鬼神にカテゴリーされる存在を強制的に従わせる』ことも可能となる。

「コレに名はない。当然だ、本来は宝具になんぞ成れぬ概念ゆえに。

……だが、作り物とはいえ仮にも宝具として登録されたならば『アレ』を抑え込むこととて不可能ではない！」

最後の一言を述べると共に広げた巻物が光り輝く。

それは数多の秘術が『ダンタリオンの有する膨大な知識によつて調整され』『呪術師が

有する物作りの才能』が奇跡的に噛み合い成立した『世界の秘術の集合体』。それらの混じり合う奇跡の光であった。

「? 何をしたとて今の我われらには届かない」

黒泥に塗れ、もはや鬼神としての体裁すらかなぐり捨てた『黒いナニカ』はその光が自らに放射される様を余裕の構えで眺める。

武蔵の反則剣、頼光の神秘特攻すら凌いだ自らに今更敗北などあり得ず、すでに相手方の手札も切れたことを知っていたから。

……ただ、そこに自らが残してきてしまった術があることを、その術こそが今の彼らの肉体にとつて致命的な効果を発揮することを、彼らは考えなかった。

全能感にすら似た圧倒的な力を獲得したがゆえの慢心。怨霊とて意識を持ち思考する存在であるならば当然、発生しうる知的生命の致命的な欠陥の一つの所為とも言えた。

結果、事実として眩いばかりのその光に包まれた彼らは『完全にその動きを止められてしまった』。



「っ、ぬう!?!」

それに初めて気付いたのは光が着弾して数秒後であった。

神の腕、神の脚、そして神のごとき全能。望む座標を呪詛で消滅させることすら可能とする自らが、その体が、その瞬間からピクリとも動かさなくなっていた。

「馬鹿な、あり得ない!」

神霊すら超え、全人類を呪殺する『法』<sup>のり</sup>として成立するはずの己が、たかが壊れかけの霊基持つサーヴァント一体に文字通り手も足も出ない。おまけに呪詛すら発動不能となっている。

それは本来あり得ないこと。

自らの内側の『数多の自分』が演算した結果にも表れていない。

そもそも――

「なぜ、貴様が消滅していない!?!」

あの身体は放棄したはずだ。自分が存在の要になっていたのでからもぬけの殻となったあの肉体も然るに消滅するはずである。

だのに。

「ぬううん！」

なぜ、そうも鬨気を滾らせて我を阻むのか。

自らの靈基が崩壊するのも厭わず、そのいびつな宝具を行使するのか、いや、そもそもなぜ貴様が行使できるのか？

……それに、貴様として『人々同に拒絶された存在類』だろうに。

「……それでも、私は『民を愛した』、『人を愛した』。

『無謀な相手に果敢に立ち向かう勇氣ある少年を見た』。

『その少年を守るために、巨大な闇に立ち向かう勇氣を見た』。

『自らが敬愛する主のために、恥じを偲んで立ち向かう勇氣を見た』。

そして『愛のために自らの命を賭す覚悟を見た』。

……見る者によつてはありふれた光景なのだろう、だがしかし。

我ら英靈にとつてはそれで十分戦う理由になる」

彼は英雄であつた。

たとえ歴史に負の情報を記載されようと、時の大勢力に逆らつた気概は伊達ではなく。

自らが信じる正義のために動く典型的な英雄であつたのだ。

……彼の活躍は、情熱はここで終わる。当然だ、このような宝具を行使して無事でいられるはずもなし。

そもそも、これは彼の物語ではなく、ボクシヨウ役割も脇役に過ぎないのだから。そして、それは彼に限った話ではない。

『今度こそ、自分のお尻は自分で拭かないとね』

キャスターの宝具によって『アレ』の動きが止められている最中、夜空を浮遊する『霊体』があつた。

英霊でもエネミーでもない。当然『人間ではない』。

十年以上も前に死に絶えた一人の女の無念が形となって残っていたものに過ぎないソレ。

取るに足らない『ゴースト』の一体に過ぎないソレ。

それでも、『彼女』は一人の勇氣ある女性であり『母』であつた。

『アルヤーマー・イシユヨー……は違うか。ええっと、その大元だからー』

動きを止められた怨霊の上空に来て、彼女は慌てていた。そのおつちよこちよいを詠春は愛おしく想い、天真爛漫な有様を我が子に引き継ぐことになったのだ。

ーそして、『この世界において』日本創世記より受け継がれる中東の女神の力を有していた。

『…… 神聖なる敬虔、神聖なる献身。数多習合せし慈母神の御業を以ってして、我、自らの心に従う者なり』

それは『善神』が、いずれ訪れる悪神の侵略に対抗するために人々へと授けた力。

数多の地母神の性質を集め、成立した神格を奉ずる巫女へと代々受け継がれてきた力。

優しく、暖かで、柔らかな光を放出しながら彼女は『その身に女神を降ろす』。

『つ、仮称スクナ上空にもう一つ魔力反応あり』

「なに？ まだ、何かいるのか？」

ダ・ヴィンチちゃんの報告を受けリツカは僅かに眉を顰める。

すでにキャスター千方の宝具により『アレ』の動きは止められ、今まさに全力の総攻撃を敢行しようとしていた最中のことであつたから。

『いや……これは、イシユタル？』

違う……それだけじゃない。

メドウーサに女王メイヴ、アルテミスの反応すら混成されている……！』

「なんだそれ」

単純に、理解が不能だとリツカは思った。

ただ、複数の神格を有する存在は一つというか一種類だけは知っている。

しかし、それは電脳空間でのみ許された所業であり、仮に『FGO』の記録から呼び出そうにもおそらくは『このリツカ』の呼びかけにも応えないと予測していた。

……まあ、それらは的外れな予測に過ぎず、この存在を正しく理解することが出来たのは『本の精霊』以外にはこの場にはいなかったのだが。

霊体に女神を降ろす、それは矛盾したコンセプトであり破綻した概念である。

ただ、『この女神』に限った話、実のところこれは神降ろしにカテゴリされない。

そもそも『複合神性』なればこそ、その性質も『一種の魔術』に近いものとなっている。

厳密には女神本体は別に存在していたりするのだが、要するに『この神降ろしは神降ろしに非ず。かの女神の力を神降ろしと同等の規模と条件で行使できる大魔術』なのである。

彼女の霊体はすでに彼女のものとは大きく乖離していた。

慈愛の極地にある優しき双眸、豊かな胸、包み込むように柔らかな雲のごとき白衣。そして豊かな胸。

極大の神威を放つソレにその場の誰もが圧倒される。

そして、リツカは――

「アレが、ママ……」

頼光をも凌駕する圧倒的な母性の象徴に釘付けになっていた。

## マテリアル1 オリジナルサーヴァントその2

【元ネタ】日本書記、地方伝承

【CLASS】バーサーカー？

【マスター】アヴェンジャー

【真名】両面宿儺

【性別】？

【身長・体重】？cm・？kg

【属性】混沌・狂

【ステータス】筋力A++ 耐久A++ 敏捷E 魔力A+ 幸運C 宝具—

【クラス別スキル】

狂化：EX

A++ランク相当の狂化、さらに特殊な狂化であるため規格外のステータス補正を受けられる可能性を秘めている。

【固有スキル】

災いの崇神：A++

魔性でありながら神でもある存在。

現存するなかでも崇りに特化した最強クラスの神格を有する。

原型には存在しない後天的に得たスキル。

サーヴァント化に際してランクダウンしているが一人呪い殺すくらいは容易。

呪術にカテゴリーされるためにもともと障壁を貫通する性質を持っている。

『混在する異物』の影響から『対人類用』に特化しており、純粹な人間にとっては近くにいるだけで呪い殺されてしまうほどの効果を発揮する。

また、近くでなくとも一定範囲内であれば対象は自動で恐怖状態に陥る。これを完全に防ぐには彼を凌ぐ神格による加護か、そもそもが人外種である必要がある。

変転の魔：A―

英雄や神が生前に魔として変じたことを示す。過去に於ける事実を強調することでサーヴァントとしての能力を著しく強化させるスキル。

これによりバーサーカーは最上級の筋力値と耐久値を獲得している。

神性：C―

れつきとした土着神だが、様々な要因によりランクダウンしている。

【宝具】

なし



【Weapon】

なし

【解説】

飛驒の大鬼神。

元は伝承にある通りの鬼神であったが、『とある神』の策略によつて在り方を歪められ崇り神となつてしまった。

【元ネタ】  
—

【CLASS】アヴェンジャー

【マスター】—

【真名】両面宿儻なま

【性別】無

【身長・体重】? cm・? kg

【属性】混沌・悪

【ステータス】筋力A++ 耐久A++ 敏捷C+ 魔力A++ 幸運E 宝具A++

【クラス別スキル】

復讐者：A+

自己回復（魔力）：EX

忘却補正：C—

【固有スキル】

呪術：EX

神性：E—

剛力鬼神：A—

伝説に語られる強大な鬼神としての証。

『怪力』『鬼種の魔』などの複合スキル。

特筆すべきはA++相当の怪力と同ランク相当の戦闘続行にこそあり、また、軍略スキルもCランク相当で付与される。

ただし、中身が違うために実質Cランクまでランクダウンしている。

黒化の泥? : ?

悍ましい数と密度の憎悪が泥として視覚化され、常にアヴェンジャーの体内を巡っている。

性質は『別世界』で知られている“とある泥”に酷似する。

【宝具】

『崇神<sup>死</sup>・剛力鬼神弓<sup>招</sup>』

ランク：A++ 種別：対人類宝具 レンジ：1〜???

最大捕捉：1〜???

崇神としての力を込めた純粋な呪殺宝具、呪詛をレンジ内にばら撒くという単純な力技……ただし、その威力は対城に匹敵する。またばら撒かれる呪詛も『触れるだけで焼き消える』ほど濃厚なものであり、放たれば一地域を文字通り消滅させ得る。

そして、それらは『単なる攻撃として放たれた場合に限る』。

その本質は『全人類呪殺能力』にこそあり、完全に成長したアヴェンジャーが覚醒と同時に放つ場合のそれは文字通りの『全人類呪殺兵器』となり、その時点でこの星から人類種は姿を消す。

宝具名も未だに鬼神の身体に頼っている状態のものである。

【Weapon】

なし

【解説】

解放された両面宿儺と “とある怨念” が融合したことで誕生した全く新しいサーヴァント。

ゆえに知名度補正は両面宿儺のものから大幅に劣化し、実質『内部に飼っている泥』によつて稼働している。

厳密には両面宿儺の内部に蓄積されていた膨大な数の怨霊の集合体であり、“とある怨念”はその司令塔になっているに過ぎない。

その数は到底計測できるものではなく、1400年分の極東の怨念そのもの。

ーだが、怨霊集合体すらも仮の姿に過ぎない。

その本質はとある邪悪な神の????である。

## 京都・十七

スパンダルマド。

或いはスプンタ・アールマテイ。

未だ謎多き拝火教において、善なる神々、即ちアムシャ・スプンタの一柱として数えられる善神・女神である。

同じく拝火教で語られる邪悪なる神々、即ちダエーワ。その中でも特に強大な魔王の一柱である背教の女神タローマテイを敵対者ライバルと定める大いなる神である。

元はアフラ・マズダより大地の守護神としての役割を任されていたが、後々に人気であつた中級神のアナーヒタに役割を譲り、女性の守護を主とするようになる。

とここまでが俺の知るアールマテイの全てだ。

『スパンダルマド、或いはスプンタ・アールマティ』

彼女の顕現と同時に、そのようなイメージが自然と脳内に浮かび上がった。

精神干渉系、或いは念話と同じ原理か。

情報を直接脳内に叩き込んだ上でそれを信用させるなんていう芸当を可能とするのは彼女が本当にかの善神だからとでもいうのか。

少なくとも、その場の全員が彼女をかの善神として認識していたのは確かである。

『スプンタ・アールマティ……それは古く拝火教に伝わる、あの』

「情報の精度は不明だ、がしかし俺たちの脳内にそういう情報が流れ込んできたのは確かだ」

「ええ、どういう技術か測りかねますが私のデータバンクにもその情報が送信されています。よもや極秘回線にまで容易く入り込まれるとは」

俺や他サーヴァント、ネギくんたち。そしてメカエリのメモリにも情報は送られていた。

まさしく神の御業、しかしそれを論ずる時間はなかった。

『――、――――！』

次に、スパンダルマドはその威光を保ちながら厳かに右手を上げる。

応じて、『ヤツ』の表皮を覆っていた泥たちが苦しげに蠢き、みるみるうちに萎縮し、剥がれ落ちていった。

その際に彼女は何か口にしていたが、生憎と『俺たち人類に理解できる言葉ではなかった』。

「おお……落ちる、剥がれていく！

私の腕かいな、数多の私が……!!」

しゅうしゅう、と音を立てて白い煙となって消えていく泥たち。

ヤツは苦悶の声を、醜悪な呻きをあげてのたうちまわる。

――消えたくない――

――許さない――

――まだ、復讐終わってしていないのに――

聞くだけで魂まで腐り落ちそうな醜悪な金切り声が無数に木霊する。

それは、これまでヤツを動かしていた原動力。即ち1400年分の日本の怨念たちの

断末魔。

否、すでに終わった者たちであるのに未練、執念から現世に囚われ続けていた哀れな魂たち。

「……何様だ、俺は」

哀れだ、などと。

そんなことをどうでもいいと感じているのに。

やがて、殆どの泥が消え去った頃にようやく、『本体』たる『彼』が姿を現した。

「許、さない。殺す、コロ、ス。

ヒト、は、全て、コロ、す。

……私の、大切な、家族を。

奪った者たちを、全てコロス!!」

それは人の形をした泥だった。

人として死に、魂すら捧げ、もはや自我すら失われたであろう状態で、尚も彼は個人的復讐を忘却せずにいた。

あんな、訳も分らない泥に成り果てても。

常軌を逸した執念だ。おそらくは、常人であれば先ほどの怨念と完全に溶け合い混じりあっていただろうに。



彼にとつて、家族を直接殺した者たちだけが復讐の対象ではなかつたのだろう。『家族が奪われるに至つた原因、家族を傷つけた者たち、それら全てを容認した世界そのものを彼は憎んでいる』。

——まだ、動く。

——数多の『我』はずでに消え去つた。使えん奴らだ。

——だが、まだ、私は動ける。

——ならば続けよう、殺戮を、破壊を。終わるまで止まれない死を破滅を、復讐を。

『……』

崩れかけの泥で、必死にこちらに向かつて来る彼を、彼女はとても悲しそうな目で見つめる。

「コロ、ス！ 私たちを、見殺シ、にした。貴様らを!!!」



『あなた』

ーっ!!!?

ーお前、たちは……。

死んだはずだ。自然とその言葉が出てこなかった。

それは今更口に出すまでもない事実であり、墓にも継る思いで異郷を巡って蘇生法を探した末に『死者は生き返らない』と当たり前の事実を突きつけられた時にすでに確信していた。

ならば、この、彼女たちはおそらくは情報に過ぎないのだろう。

そこまで私は推測した。だがー

『もう、いいのよ』

『お父さんは、もう苦しまなくていい』

私の身体を包む暖かさは確かに彼女たちのものだった。

十年以上も前に失われた、私のもっとも大切なモノ、そのものだった。

思えば、私として既に取り返しつかないほどに穢れてしまった。汚れてしまった。

肉体を捨て、魂を捧げ、その果てに復讐のみを願う『ナニカ』に成り果てた。もとより、私にはすでに彼女たちを厭う権利すら無くなっていたのだ。

『それでもー』

『それでも私たちは、お父さんを助けたいよ』

「っ!!!」

ーその一言で十分だった。

私が欲しかったもの、この『情報』に成り果てて求めたもの。

それら全てが霧散して、廃棄孔に捨てされるほどに、その言葉の重みは、大切だった。

復讐は苦しい、今ならば『アヴェンジャーたち』の言い分も理解できる。魂が、精神

が、軋んで軋んで、磨耗して。それでも最早止まれないのだ。

あれは地獄だ、あれこそ地獄だ。

そのようなものに私は足を踏み入っていた、頭のとっぺんまで浸かりきっていた。

だからー

「ああ……お父さんも、もう、疲れたよ」

欲しかったもの、私が、本当に欲しかったもの。それはー

『お父さん』

きつと、もうー

「それでも……この、瞬間だけはー」

ー私は、私たちは、安らぎを、得られた。

『……三体の魂の消滅を確認。もはや、アレは動かない。

あとは、肉体を破壊するだけだ』

一連の出来事に、誰一人として割って入ることは出来なかった。

それはあまりにも悲しい終わりだったから。

『ヤツ』の消滅と同時に多くの情報がこの場に拡散した。

それは過去の大戦によって生まれた悲劇と、それによって本気で世界を壊そうとした

一人の復讐鬼の一生。

それほどまでに彼が忘れずに溜め込んでいた情報だ、消滅によつて辺りに撒き散らされても不思議はない。或いは、それを知つて欲しかったのかもしれないが。

結果として、彼を止められたのは彼の身内だった。

部外者たる俺たちに付け入る隙などなく、見方を変えればそれは彼の勝ち逃げにも等しい。

何はともあれ、怨霊は、あの呪術師の怨念は完全に消滅した。

「む、う……あまり、悠長にしている時間はないぞ。そろそろ私の拘束も保たなくなってきた」

さて、残つた依代を破壊するか、と考え始めたところで千方が苦しげな声で告げて来

た。

しかし最早怨霊は消え去り、あの肉体は抜け殻。抑え込む必要はない。

「もう怨霊は消えた、拘束はもういいよ」

わざわざ死体蹴りをする必要もない。いや、破壊するにはするのだが、縛ることはやめてやろう。

そう思つての発言だったのだが。

「よく見る。……まだ終わっていない」

「え？」

真剣に語る千方の言葉に、俺は背筋を凍らせた。

ー妬マシイ、妬マシイ、妬マシイ、妬マシイ、妬マシイー

——憎イ、憎イ、憎イ、憎イ——

——ドウシテ、アイツダケ——

——殺シタイ、殺シタイ、殺シタイ、殺シタイ——

数多の声が呼んでいる。

恨め、憎め、殺せと。

ならば叶えよう、その望みを。その破滅を。

だからもつと憎め、もつと恨め。

それこそが我が力となる。

—— 『存在証明』 70%

—— 『実在証明』 55%



――依代適合率45%

――『受肉実験』、続行可能数値と断定

――『深奥』、第0隔離区域からの投射を開始

????????????

????????????

―――――投射、成功。これより『稼働実験』に移行します

散々に弄ばれた鬼神の身体は、色を無くし、熱を無くし、静かに湖面に沈んでいた。もはや動かない抜け殻。せめて破壊することで永遠の安らぎを与えるべきと考えた

一行は、その遺骸にそれぞれの得物を構える。

その時だった。

『っ!! 総員退避! その場から全力で離れるんだ!!』

突如としてダ・ヴィンチちゃんの声が響き渡った。

その声にいち早く反応した頼光、メカエリは俺とエリちゃんをそれぞれに抱えてその場から即座に飛び退る。

遅れてエヴァもネギと明日菜を連れて。

刹那は元の場所で、その腕に抱えた主の身体を一層強く抱きしめる。

それらが間一髪であったと知るのにそう長くはかからなかった。

大鬼神・両面宿儺の肉体を食い破り、ソレは現れる。

膨大な黒の奔流が先ほどまで彼らのいた場所を覆い尽くし、尚も獲物を求めて這いずり回る。

『……!!』

耳をつんざく金切り声、聞くに耐えない醜悪な叫び。  
しかし、俺はなんとなく聞き覚えがあると感じた。

頭蓋、腕、胴体、関係なく内側から強引に食い破りながら噴出する『泥』。

消えたはずだった、終わったはずだった。

理解が及ばない。なぜ、まだ現れるのか？

理屈は単純である。そもそもアレらに『依代』たる資格はなく、この肉体こそが相応しき素体であったのだから。

アレらは単なる呼び水、『本命』を引き寄せるためだけの撒き餌に過ぎなかった。だからこそ1400年前にすでに仕込みは済ませておいた、17年前のものは単なる保険に過ぎない、単なる切っ掛けキに過ぎない。

すでに演算装置は続行を決断した。ならばプログラム通りに、『あの大災厄』を現世に投影するだろう。

それこそが今回の事件の大本命、行き着く結果なのだから。

『ソレ』の姿は不明瞭であり、不定形。

伝説に伝え聞くダイダラボッチ、リツカが前世にて拝見したとある映画に出て来たダイダラボッチに似ている。

身体は泥、果てしない黒に染まった悍ましい代物。

口は無い、無いのに絶えず聞くに耐えない叫びが木霊している。

先ほどまでの怨霊たちとはベクトルが違う。アレらは本気で世界を憎んでいた、明確な指向性、いや『懇願にも似た憎しみだった』。

誰か、助けてくれと。

しかし、今回のソレは違う。救いなんて甘い考えは抱いちやいけない。根本からして『破滅』で出来ている怪物など、救う選択肢はない。

怨霊など生易しいものじゃない、あれは『終わり』だ。

世界の全てを喰らい尽くして終わらせるためだけの兵器。

魂はない、自我はない、知性もない。

ただし、本能から『世界を殺す』。

単純な『終末兵器』。

一体全体、何がどうしてあんなものが、どういう経緯でこの世界に誕生したというのだ。

世界の淵、世界が『要らない』と軽蔑した『モノ』、それらが『創世記』より積みもりに積みもった果て。

多くの知性体が『悪』と断じた情報全ての集合体。

本来ならばこのような形で出て来るなど、それこそ聖杯、それも第三魔法を可能とする聖杯が無ければ不可能なはずである。

しかしながら、この世界の『ソレ』は些か事情が異なっていた。少なくともとある村で人身御供とされた少年は存在しなかった。

現出したものの強大きさを、俺は肌で感じていた。

両面宿儺、大怨霊、そんなものはあれの前ではちっぽけな存在にすぎない。

あれだけ苦労して、結局、自滅した強敵がものの数秒で可愛く思えてしまう出来事などそうそうない、今後の人生でも多分ない。

しかし、俺は知っている、少なくともあの叫び声を知っている。

それは前世で娯楽として消費したものの、その一節に過ぎない。  
或いは一年前のアレもー

「アンリマユ……」

自然と口に出ていた。当然だ、アレを見てその言葉が出てこないはずがない。

この世全ての悪と定義された恐るべき魔王、しかしてその実態は文字通りの『この世全ての悪の具現』。

型月で登場したのはあくまで、アヴェンジャーアンリマユの特性である『この世全ての悪であれ』という人々の願いを、受け皿になつた聖杯が叶えてしまったために起きた事故だが、果たしてその影響力は絶大であり、その後の聖杯戦争を凄惨なものにする元凶となった。

俺が知るアンリマユとはその状態のもの、そして目の前のソレは先に語つた『聖杯の泥』としてのアンリマユと酷似していた。

ならば、この世界でも『聖杯、ないしそれに纏わる戦争・儀式が起きていた』ということだろうか？

『アンリマユだと？ ……確かに反応はアンリくんの発するモノと似ている、ひいては

あのティアマトの放ったケイオスタイドとも酷似するが。

だが、これは……』

言い淀むダ・ヴィンチちゃんをよそに、エヴァが口を開く。

「なんだ、アレは？」

あれほどの密度を持つ魔素の塊なぞ見たことがないぞ!？」

狼狽した様子の子の彼女だが、それよりも彼女の発した単語に疑問を抱く。

「魔素？」

そういえばネギま!でそんな単語がちよくちよく出ていたと記憶する。

しかし、詳細は語られていなかったと思うし、俺もネギくんマギア・エレベアの魔法verが魔素中

毒だかに陥ったとか、デユナミスさんが闇の魔素で編んだ魔物の影を操ったとかしか知らない。

俺の疑問を偶然にも聞き取ったネギくんが親切にも教えてくれた。

「魔素とは、魔界に満ちるとされる元素です。」

一般的に、魔法という技術が生まれる基礎となった元素とされていますがその原理、作用等未だに未解明の部分が多く、魔族の方々の身体を構成しているモノともされますが、それも魔族側に研究に協力してくれる存在が少ないことから明らかにはなっていません。



そのことから別名、第五真説要素、真エーテルとも呼ばれています。

あ、ちなみにエーテルというのはー」

「っ!!!」

真説要素、真エーテルだと？

それは確か型月において、神代の星に豊富にあったとされるマナ、神々を構成するモノとも言われている神代の魔力。

詳細は例のごとく俺の知るところではないが、その名前は这个世界ではあり得ないもののはず。

「いや……アレが真エーテルだとするならば魔族とは、まさかー」

……憶測に過ぎない、しかしこうも怒涛の勢いで新事実がわんさか出てこられては、俺の凡才な頭では理解が追いつかない。

幸いというか通信越しにダ・ヴィンチちゃんがいることだし、それら考察は帰ってからにしよう。

「……というか、それどころではないしな」

つぶやき見つめるのは眼前に広がる泥の池。

ただの泥ではない、あの聖杯の泥やケイオスタイドと酷似する反応を放つ泥だ。

触ればまず間違いなく死ぬだろう、というか見た目からして触れたくない。

「ーというのが四元素でして、つまりは他の四元素はそれぞれに対応した……つてア  
イタ!？」

「難しいことごちゃごちゃ言ってる場合じゃないでしょ！」

「とうかりツカもとつくに聞いてないわよ!？」

俺がスルーしているのも構わず熱心に解説を続けていたネギくんの頭を、明日菜嬢が  
引っ叩く。

それによって、無事に意識を現実に戻還させたネギくんは眼前の光景に息を呑む。

さて、それはそうとどうしたものか。

「真エーテルとはまた厄介な代物が出てきたが、俺も詳しいわけじゃないので如何とも  
し難い。」

それにこの世界の真エーテルがあつちの世界の真エーテルとは異なる可能性もある。  
下手を打てば藪蛇になるやもしれん。

まず、俺の知る真エーテルとは星の息吹だ。

……いや、かつこよく言つたけど、神代に満ちていた、今のエ<sub>マ</sub>テ<sub>ナ</sub>ルとは異なるエー  
テル<sub>ナ</sub>マナとしか知らないが、とにかく現代人には猛毒であるのは確か。

次に、あくまでこの世界においてアレは魔素と呼称されるらしい。それも魔族の本拠

地・魔界に満ちる未知の元素だとかいう話だ。

この魔素、俺が知る原作ならば闇の魔法マジック・エレベーターの原理にも使われているっぽいけどやはり詳しくない。

最後に、上記二つの考察も『この世界では違う』という言葉一つで容易く瓦解してしまうものだ。

つまりー

「情報収集が先決か」

何をするにもやはり情報である。敵を敗るにはまず敵を知らねばならないということだ。

「そ、そんな悠長なこと言ってられなくない!?

なんか物凄い速さで広がってるけど!」

明日菜の懸念は最もだ。事実、視線の先で泥が池を広げつつある。

「マスター。ここは迎撃が先決かと。」

……私の魔力放出で斬りはらいます」

と、俺の隣を過ぎながら述べた頼光が、手に持つ刀に紫電を充填させる。

「つ、仕方ない。とにかくアレは外に出しちやまずいものだろう、エリちゃん、メカエリも遠距離攻撃でまず対処を試みてくれ」

「了解!」「わかったわ!」

両人も了承の後に、それぞれドラゴンブレス、スカートフレアその他武装を展開。頼光も紫電を撃ち放つ。

しかし――

「つ、ダメです、復元速度が速すぎる!」

結果はメカエリの報告の通りであった。確かに泥は一時的に飛ばせた。しかし、瞬間に周囲の泥によって元に戻ってしまった。

幾ら何でもあの速さでは、現在進行形で広がり続ける泥の全てを対処することなど不可能だ。

というか、考えてる間にもどんどん溢れ出してくる。

「いやどうすりゃいいんだ、これ?」

などと軽く言ってみるがもちろん事態は好転しないどころか秒単位で悪化している。

「くっ、マスター! 私たちは引き続き泥への攻撃を続けます、バーサーカー、よろしいですね?」

メカエリの言葉に頼光もすぐに頷き、二人は即座に別々の方向に飛んでいく。

おそらくはエリちゃんも――

「……エリちゃん?」

ふと視線を移した先では、エリちゃんがひどく消耗した様子で荒い息をついていた。すぐに駆け寄る……ことは出来ず、声しかかけられない。こんな時に役目を果たせない俺の左脚が憎い。

「大丈夫……ちよつと、魔力が足りなくなってきただけ。でもまだ頑張れるから」

そうは言うが、顔色も悪い。ここまで、宝具の解放にドラゴンブレスの連発と無茶をさせすぎた。間違えちゃいけないが彼女はそれほど強い英霊ではないのだ。

「もういい、大人しく休んでおけ。……なに、頼光にメカエリもいる。後は任せろ」

なんとか彼女のもとまで足を引きずりながら赴く。そして肩に手を回したところで、彼女の身体がふわりとこちらに預けられた。とつくに限界だったらしい。

「そのまま休んでろ、あとは俺らがやるから」

「子イヌ……つて、貴方、その足!」

おっと。無意識に足を引きずってまで来てしまったが、有り体にやらかした。

片足が動かないことが彼女にバレた。

「目も!」

おまけに至近距離で見つめられた挙句に失明まで見抜かれた。

……これは何としても、騒がれる前に気絶させなければ。

「待て、落ち着け。俺はまだ大丈夫だ。

その桃太郎のおかげで活動に支障はない」

ちらり、と視線を向けた先では吉備津彦が相変わらずの無愛想で佇んでいる。

「そういう問題じゃ……!」

「ガンド」

「うきや!」

即座に彼女の腹部にゼロ距離でガンドを撃ち込む。この礼装のガンドにダメージ効果はないので出力を調整して撃ち込めば持続時間すら操作可能だろう、と今さっき思いついた。

果たして、目の前の彼女はビリビリと痺れながらスタン状態に陥っていた。よしよし。

「よついでしよ」

そのまま彼女をお姫様抱っこして完璧だ。

これでサーヴァントの指揮に集中できる。

と、頼光たちの方へと意識を向けようとして、水上を文字通り走りながらこちらに向かってくる人影を発見した。

「召喚師殿！」

「長瀬さん！」

血相変えて駆け寄ってきた人影は、何を隠そう千方の四鬼の対処を任せた長瀬楓だった。彼女が来たということはまさか、本当にあの鬼を仕留めてしまったということか？ いや、そもそも千方が正気に戻っている時点であの鬼たちの扱いがどうなっているかなど知る由もないが。

「っ！」

しかしその腕に抱えられた少女・パライソが酷い怪我を負っているのを見て、楓が血相変えてこちらに来た理由を理解した。

「ともかく、まずは治療か」

エリちゃんをそつと下に降ろし、パライソの身体へと手をかざす。

「召喚師殿、千代女さまは？」

「大丈夫だ、俺が治す」

お嬢様はまた気絶してるようだし、治せるのは俺だけだ。

『召喚師、良いのか？』

先に述べた通り、今の貴様は辛うじて形を保っている状態。今、そんなことをすれば――』

「あんたこそ、大丈夫なのか？」

なにやら随分と消耗しているようだが」

吉備津彦の苦言をそのまま返す。

長い期間サーヴァントと一緒に過ごしたせいか、僅かな霊基の揺らぎであつてもそれなりに感じ取れるようにはなつた。

だからこそ、今の吉備津彦が俺の治療だけで精一杯なのは目に見えている。原因までは分からないが。

『分かっているなら尚更だ。我にもこれ以上魔力を行使する余力は残っていない。そんな中、貴様が今治療魔術を使えば、そんな使い魔の治療などという大仕事を行えばどうなるか。』

分からぬほど馬鹿ではないだろうに』

「まあな。……ただ、まあ、死ぬことはない俺の勘が告げている。というか意地でも死なん」

俺には愛する彼女たちとの平和な生活という夢があるのだ、そのためならば今ここで死ぬことなど俺が許さん。



『感情論でどうにかなる問題ではー』

「治療はする、だから、悪いがあんたも俺の身体が最低限死なないように踏ん張ってくれ」

俺の答えに、吉備津彦は惚けたように目を見開き、すぐに苦笑に変わった。

『なるほど……つくづく、人間とは度し難い。』

いいだろう、私個人としてはそういう馬鹿は嫌いではない』

「そりやどうも」

言いつつ、千代女の治療に魔力を回す。

「ぐっ、ぐう!!」

魔力を使うたびに身体がさらに悲鳴を上げる。

ビシビシ、と何処かが壊れる音がする。

メカエリにやった治療に匹敵する大仕事だ、それほどに彼女の傷は深い。

幸い、核は外れているためにあれを超える魔力は要らないが単純な治療面積、怪我の

酷さはどっこいどっこい。

なら、さつさと済ませるに限る。

ー結果、俺は千代女の治療によって右腕を失った。

## 京都・十八

「お館、様？」

「楓嬢から話は聞いた。良くやった、お前は無事に任務を果たして帰ってきたんだ、今はゆっくり休め」

うつすらと目を開けた彼女に、優しく声をかけて頭を撫でる。

「……ですが、まだ戦いは」

「いや、俺たちの勝利は確定してる。お前の任務は既に終わっている、心配せずに休んでくれ」

俺の言葉に、千代女は少し訝しみながらも、消耗からかやがて静かな寝息を立て始めた。

「よし。それじゃあ楓くん、もう一つ頼みごといいかな？」

「なんなりと。千代女さまが忠義を捧げるお方の頼みならば」

おおう、なんでか好感度高いんだが？

さり気なくパライソの真名も知ってたみたいだからこちらも真名で声をかけてしまったが。

「いや難しいことじゃない、千代女と、ついでにエリちゃんのことも見といてくれないか？」

そう言つてビリビリ状態のエリちゃんを預ける。

「え、えりぎべーと殿？　なにやら痺れている様子でござるが」  
「気にするな」

満面の笑みでそう告げてさっさとその場から離れる。そうしないと、万が一にも麻痺状態を自力で解除したエリちゃんに止められかねん。

現状、戦況はよろしくない。

両サーヴァントの攻撃によって泥はその侵食速度を落としているが、それでもじわじわと周囲に広がっている。

或いは『蛇口』が狭いせいなのか。

何れにせよ、別の対処を講じないと敗北は必至。京都大火災どころでは済まない大惨事になる。

というか、いい加減、俺たち全員の消耗もピークだ。ここからはスピード勝負になるだろう。

先ほどの女神アールマティも消えてしまったようだし。

「リツカくん、私も迎撃に出た方が良くない？」

ほら、私も斬撃飛ばせるし」

確かに、彼女はある程度の距離ならば斬撃を飛ばせる。

が、泥の対処は他のサーヴァントにお願ひし、彼女には別の任務を与えたい。

「武蔵ちゃんは依代の撃破を優先。俺がもう一回、魔力を与えるからそれで奥義を発動してくれ」

「不可能だ。すでにお前の身体は限界を迎えているはずだぞ。

……まったく、側から見ても丸わかりだというのが分かるのか？」

エヴァが呆れたように告げた。まあ、そうだろうな。

だって、今俺、左手と右足でなんとか身体を支えている状態だし。

『……』

ダ・ヴィンチちゃんはもはや何も言わない。優先するべきは何かをきちんと理解しているからだろう。

理解しているからその良心を押し殺して黙っている。

「大丈夫よ、リツカくん。あと一発くらいならなんとか撃てる余力は残ってるし。どこに当てればいいかが分かれればそれで」

とは言うが、武蔵とて消耗している。撃てば十中八九、消滅するだろう。

……まあ、最悪、それも選択肢の一つとして頭に置いておこう。

英雄王の言葉を思い出せ、俺は天才でも聖人でも英雄でもない。

凡才なただの現代人なのだ。

分不相応なことを望めば即座に破滅する。

ならば切り捨てる選択だって当然、用意するべきだ。

俺は、正しい。

——京都への五日間の修学旅行は、いつの間にか壮絶な戦いへと変わっていた。

魔法先生として、初めて修学旅行の引率を任されて浮かれてしまっていたのは確かだ。

それに僕自身、日本の古都・旧首都でもあり魔法学としても興味深い京都への旅は心踊るものだった。

だからこそ、当初、学園長に京都行きの中止を匂わされた時は本気で落ち込んでしまった。

しかし、魔法先生たる僕の京都行きを渋る先方・関西魔術協会へと親書を届ければ解決すると聞き、またはしやいでしまった。

確かに、学園長の懸念した通り、道中で嫌がらせじみた妨害はあったものの、警護で付き添ってくれたリツカさんたちの助けもあり無事に本山まで辿り着き、親書も先方の長たる近衛詠春さんに届けることができた。

おまけに本山は強力な結界がかけられており、詠春さん自身もあの父さんと肩を並べたほどの剣士であった。

それにエリザベートさんや、めかえりちゃん？という二人の強力な使い魔を従えるりツカさんが一緒ということもあり完全に気を抜いてしまった。

……そこからが、恐ろしい戦いの始まりだった。

本山の结界を容易く破り潜入してきた銀髪の少年・フエイト。彼によつて本山の人々は軒並み石化させられてしまい詠春さんまでやられてしまった。

そんな相手に僕らが叶うはずもなく、木乃香さんは攫われ、それを追つて僕たちは京都の森を駆けた。

途中、エリザベートさんのライブ……と呼ぶのは憚られる壮絶な音痴攻撃を目の当たりにしたり、本物の鬼と呼ばれる強力な魔物が現れたりしたが、なんとか祭壇まで辿り着き、木乃香さんを奪還した。

その際に刹那さんの秘密を知ってしまったたり、封じられていた鬼神が復活してしまつたりもしたが、駆けつけてくれたエヴァンジェリンさんによつてその鬼神も倒された……はずだった。

突然、現れたダンタリオンを名乗る男の語るところによれば、エヴァンジェリンさん

の破壊したのは『制御用外骨格』であつたらしい。

そして、制御から解き放たれた本当のリョウメンスクナの力は、想像を絶していた。

崇り神。

日本に限らず世界にはありとあらゆる神話が散らばっているが、その中でも特に忌まれる存在である恨みと憎しみ、呪いの象徴。

それがリョウメンスクナの本質であるという。

僕たちは元より、闇の福音と恐れられた吸血鬼の真祖・エヴァンジェリンさんの魔法さえあの崇り神は容易く弾いた。

そこからは怒涛の展開だった。

リツカさんが新たに召喚した使い魔……もとい、過去の英雄の写し身と呼ばれている英霊なる存在。

その力は凄まじく、エヴァンジェリンさんでさえ歯が立たなかつたあのリョウメンスクナと互角の戦いを繰り広げていた。

そこへ、ずっと気絶していた木乃香さんが目を覚まし、唐突に召喚して見せたキビツヒコと呼ばれる使い魔。彼も英霊という存在らしく、しかも鬼という存在に対して特に



力を發揮する存在だと語られた。

その彼の攻撃によってリョウメンスクナの半身は吹き飛ばされ、ようやく戦いは終わったと思われた。

……続けて、壊れたりリョウメンスクナから現れたのは神などではなくなった、膨大な数の怨霊の集合体だった。

もう、誰もが絶望を感じる中、依然として戦意の衰えないリツカさんとその英<sup>サイヴァント</sup>霊たちは果敢に戦った。

しかし、決定打とされたライコウさんの攻撃は凌ぎ切られ、万事休すとなったところに、今度は、なんと女神が現れた。

実在すら疑問視される神を一日に二柱も見ることになるなど、僕は神話の世界に紛れ込んでしまったのかと錯覚してしまった。

……怨霊が消滅する最中、数多の『イメージ』が溢れ出した。それを見た僕は、怨霊の正体、その経緯、動機を知るに至り、『彼』を敵として憎むことができなくなった。

いずれにせよ、女神アールマティによって怨霊は調伏され、中身の無くなったスクナの身体は湖面に沈み、今度こそ終わったと胸を撫で下ろした。

その直後であった。あの、名状し難い『悍ましいモノ』が現れたのは。

僕は、この夜のことを決して忘れないだろう。

神と神の戦い、英霊と呼ばれる存在の輝き、そして、あの魂まで凍てつく『この世全ての悪』の恐ろしさを。

「……以上が作戦の概要だ。異論は認めないし、これしか策はない」

目の前で召喚師のリツカさんが語る。

その全身はボロボロで、口からは絶えず血が滴り落ちている。あれでは近く失血死してしまうだろう。

おまけに、エヴァンジェリンさんの話が本当なら彼はもう『右目、右腕、左脚』を失っているらしい。治療は不可能なほどに『概念がズタズタ』なのだという。

思えば、彼は段々と身体を動かさなくなっていくていた。吐血もしていた。しかし、ここまで酷い状態になったのはついさっきだ。

今までは消耗、疲労によるものかと思っていたけど、それが、まさか英霊使役の許容量を超過したデメリットだったなんて。それも、治療さえ出来ない傷だなんて。

僕は改めて、今回の事件の壮大きさに眩暈を感じた。

僕は、もつと、平和な修学旅行を望んでいた。そのためなら頑張れると、そう思っていた。

でも、事態は既に『世界規模にまで拡大していた』。

あの泥、見るだけで、近くにいただけで意識を持っていかれそうになるほどの負の感情を放ち続けるモノ。

リツカさんは『アンリマユ』と呼んでいた。

しかし、アンリマユなどという存在は聞いたことがない。

どこの神話にも存在していないし、地方伝承だつてそれなりに詳しい僕でも全く聞いたことがない名前だ。

或いは極限られた地域で語り継がれてきた秘神の類なのかもしれないが。

「アンリマユとは『この世全ての悪』であれと語られた悪神の名前だ。聞いたことがある

だろう、拜火教のAVEUSTARに語られる、あの」

「それは、アンラ・マンユのことでは？」

「つ!!! ……なるほど、そういうことか」

リツカさんの説明に当てはまる存在をなんとなく口にする、彼はしばし黙り込んでしまった。

なにか、まずいことでも言ってしまったかと慌てていると。

「いや、ありがとう。貴重な情報提供だったよ」

「??」

よく分からないがお礼を言われてしまった。

いや、今はそれよりもー

「先に言っておくが、アレは今度こそ手に負える相手ではない。唯一の望みが『蛇口の破壊』だ。残った泥を払いきれぬ自信はないが、まずは止めどなくアレを垂れ流す依代を破壊しないことには世界滅亡は必至だ。

……幸い、ダ・ヴィンチちゃんの解析によれば『冬木の二の舞』にはならないらしいからな。なんでも、依代たるスクナの遺骸を『ゲート』にして他所から送り込まれているらしい」

フユキ、というのとは分からないがとにかく先ほどまで暴れていたあの鬼神の肉体を破

壊しないことにはダメらしい。

「君は聡いからな、疑問も多いと思うが、そこはどうか勘弁して欲しい。『神秘』とはそれほどまで扱いに気をつけないといけない分野なんだ」

神秘……。

それは、魔法とは違う概念のことなのか。

と、すぐに自分の世界に入ってしまうのが僕の悪い癖なのだと言われた。

今は、アレをなんとかしないとイケない。

見れば、すでにライコウさんとメカエリさんが全力の攻撃で広がる泥をなんとか遅らせている。

そこにエヴァンジェリンさんが加わり、更に侵食を遅らせる。

しかし、三人では到底賄いきれない規模だ、現に、他の回らない部分は湖を越えようとしている。

一刻も早い対処が求められている。

その時、リツカさんの指示を受けたムサシさんが依代へと向かおうとしているのが見えた。

これまでのリツカさんたちの会話、与えられた情報、そこから導き出される僕が取れる最善の選択。

それを、僕は意を決して告げた。

「ネギくんが、武蔵ちゃんのマスターに？」

突然、ネギくんから告げられた提案は、しかし、すぐに頷けるものではなかった。

別に、武蔵ちゃん恋しとかそういうのではなく、寧ろネギくんの身体を心配してのことだ。

単純に、サーヴァントの現界維持、それだけでも常人にできるものではない。おまけに宝具発動に際する魔力まで賄うとなればそれはもう外部からの魔力供給が必至となる。

俺の現状がいい例だ。もはや、この戦いが終わってもこれまで通りの生活は厳しいだろう。

逆を言えば、俺であつてもなんとか四体までなら大丈夫だったということではある。戦闘に関しては四体でキャパオーバーだがそれはバーサーカーという特に魔力消費の激しい個体を交えてのこと。

最優のセイバー、一体だけならば、膨大な魔力を秘めているネギくんならばなんとか使役も可能かもしれない。

少し考えた俺は、彼の申し出を了承することにした。

「精霊、本当にあの詠唱で合ってるのか？」

『ああ、リツカくんならば僕が弄れば容易に再契約となるんだが、他だと形式上は必要だね。なんだって『抑止の管轄』なんだから。』

とはいえ、形だけだからね、『意味さえ通れば』問題ないよ』  
相変わらずよく分からない説明だが、だいたいわかった。

目の前では既に両人が向かい合っていた。

「え、と。本当にいいの？　自分で言うのもなんだけど、サーヴァントの使役ってだいぶ魔力使うらしいよ？」

心配そうな武蔵ちゃんの言葉に、ネギくんは覚悟を決めた目で応える。

「はい。」

……では、始めます」

応えて、右手を翳す。

「——告げる！」

汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！

抑止の精霊のよるべに従い、この意、この理に従うのなら我に従え！

ならばこの命運、汝が剣に預けよう！」

さすが天才魔法使い、俺ならメモ読みながらじやないと出来ない長文詠唱を、丸暗記でスラスラと述べる。

「セイバーの名に懸け誓いを受ける！」

貴方を我が主として認めよう、ネギ・スプリングフィールド！」

対して武蔵ちゃんも、さりげなく覚えにくい外国人の名前をぶつつけ本番でさらりと述べている。

……さては、ネギくんが美少年だからだな？



そんなくだらないことをつい考えてしまっていると、赤い輝きと共にネギくんの右手の甲に令呪が刻まれていく。

ちなみに形は『ネギ』。まんまネギ。

いや、それはどうかと思うぞアラヤくん。いくら三角に無理やり裁断してあるからつて。

「これは……」

突然、手の甲に刻まれた刺青に困惑するネギくん。そりやいきなり刺青いれられたら戸惑うわな。そういうえば温泉とかプールはどうなるのだろう……？

というか、令呪の説明をしていなかった。

さて、そもそも英霊という強大な存在を他者に預けてしまっている時点でマスター失格なのではあるが、ネギくんならば大丈夫と樂觀しての対応だ。

無論、最優先がアレの排除であることが大きいが。

それに、武蔵ちゃんが比較的善よりでありながら合理的な思考を常とする性格であるのも大きい。相性はいいはずだ。

「それは令呪。英霊に対して三回まで行使できる魔力ブーストだな。使用することで絶大な魔力リソースとしての機能を果たす。

本来は強制命令権なんだが、武蔵ちゃんに限って必要になるとも限らんし、あくまで

機能の一つとして覚えておいてくれ」

人間は二つの説明を受けた時、先に受けた方の説明を強く意識する。加えて悪いイメージは特に。

なのでこういう説明にしてみたが、意識し過ぎだとも思う。

ネギくんも武蔵ちゃんも比較的良好な奴だ。『悪しき思考』を持つやつ、例えば俺とかならもつと警戒するが、そもそも英霊をむぎむぎ与えることもない。

戦後処理よりも今は目先の対処を優先すべきだ。

「いいか？ 絶対にあの泥には触れるな。触れれば即死だ。

肉体、精神共に呪いで食い潰される」

この世全ての悪とはそういうものだ。

幸い、アレはまだ対処の余地がある。

「分かりました。では、行ってきます！」

箒に跨りながらネギくんは凛々しい顔つきで明日菜、刹那たちに告げる。

「(バ)武運を」

「ネギ……絶対、無茶はしちやダメよ」

静かに敬意を払ってこうべを垂れる刹那とは対象的に、明日菜は心配で仕方ない様子だった。

まあ、相手は別世界では七つの人類悪に入るかもしれない輩だ。  
全人類の悪意の具現、などと言えば分かりやすいほどに強大だ。

——視線の先ではライコウさんメカエリさん、そしてエヴァンジェリンさんが必死に泥へと攻撃を加えている。

「ムサシさん、大丈夫ですか？」

自らの箒に乗せた彼女、飛行手段を持たないということ箒に乗せて運ばせてもらうことにしたが。

「……へっ!？」

あ、うん！ 大丈夫、大丈夫!!」

「……………」

……………見間違いだと思っけど、涎を垂らして凄まじい形相をしていたような気がする。見間違いだと思っけど、どうかそう思わないと怖い。すごく怖い。

「え、えつと……………そろそろ目標地点なんで、準備をー」

ーそこまで言いかけて、突如として『泥が触手となつてこちらに攻撃を仕掛けてきた』。

「うわっー！」

慌てて回避して事なきを得たが。

「まさか……………意思を持つている?」

これまで泥として広がるだけだったソレは、確かに明確な意思を持つてこちらに向かつてきた。

見れば、迎撃隊の三人にも触手が襲いかかっている。

「……………まずいわね。成長してる。」

マスター、ここから仕掛けるわ。準備を」

「は、はい!」

箒の上に立ちながら、彼女は剣を抜いた。

それを見て、慌てて令呪を発動する。

「令呪を以って命ずる！」

セイバー、全力でリヨウメンスクナの遺骸を破壊せよ！」

ローリツカさんの作戦、僕をマスターとすることで魔力の供給は安定するが、宝具を発動するとなれば僕でも危険なのだという。

そもそも、英霊という存在を現界させるだけでも常人には不可能らしい。

僕はたまたま魔力量が多く、その出力に耐えられるだけの強度があつたから大丈夫なのだとか。

そこで、宝具発動の際には令呪を魔力リソースとして消費することを提案された。

「これで……！」

——これで、この長い夜が、長い悪夢が終わることを、僕は強く願った。

「南無、天満大、自在天神……」

セイバー・宮本武蔵の言葉とともに、再び、この場に仁王が出現する。

「馬頭観音、憤怒を以つて諸悪を断つ」

仁王を形作る剣気によって、一瞬、周りの泥が抑え込まれる。

そのまま、蛇口となつている依代に剣気を直撃させ、身体を覆う泥を弾き飛ばし丸裸にする。

そこに、剣を構える。

剣気が光となつて刀身を包み、再びの絶技を現出させる。

「この一刀こそ我が空道、我が生涯。

……伊舍那大天象!!!!」

一直線。

箒の上という不安定な状態を物ともせず、武蔵は魔眼にて捉えた『依代を斬り捨てる』という結果に向けて全存在を投射する。

それこそがこの絶技、六道五輪りくどうごりん・俱利伽羅天象くりからてんしやうの正体。

果たして、その一撃は寸分違わず依代であるリヨウメンスクナの遺骸を両断した。

それと同時に、依代という概念そのもの、リヨウメンスクナの肉体としての在り方さえ斬り捨てる。

「????????????  
——!!!」

絶えず響いていた悍ましい叫び声は、極大の音量で断末魔へと変わる。

思わず耳を抑えた数人をよそに、依代であったモノは光の粒子となって即座に消滅。

事前にダ・ヴィンチの推測していた通りに、泥の出現はピタリと止まり、これ以上の増大は防がれた。

「……空とは即ち無の観念。無念無想すら断ち切らん。

つて驕り過ぎかあ、私」

「終わった……のですかね？」

激戦に次ぐ激戦。長い長い京都の夜は終わりを告げた、そう確信したメカエリは無意識にそう呟いていた。

「ええ。これで、あの人の子が懸念していた事態は回避されたでしょう」

「ーまた一つ、乱痴<sup>ラ</sup>気騒<sup>ブ</sup>ぎの種を残したまま。」

「終わった、か。」

「……ふいー」

依代の消滅を見届けたリツカは、その場に寝転がる。

身体を蝕む痛みは消えていない。しかし、目下の危機が去ったことに少なからず安堵したからこそ、やっと、気を抜けたからこそ、もはや限界を迎えている身体を投げ出した。

『良くやってくれた。……ついては、君の身体を一秒でも早く治療しなければならない』



ダ・ヴェインちゃんの声は暗い。

そりやそうだ、これから俺が令呪を使ってまでお願いした『忌まわしい手術』を行わないといけないのだから。

『どうして君はそう……いや、すまない。君の覚悟は理解したつもりだ。』

だが、それでも私は君が心配だ』

“その、なんでも自己完結してしまうところがね”。

そう、彼女は悲しそうに告げた。

だが、今更変えようもない。性分なんだ。

後天的なね。

――霊核、形成前に崩壊。ならばに霊基投影状態32%で中断

――『存在証明』 85%

――『実在証明』 68%

――『靈基固定率』 0%

――受肉実験、失敗。稼働実験を中断

――『case. 両面宿儺』存在理論、崩壊

――ああ、また失敗か。

――いや。

――辛うじて、『分霊』の顕現には成功したか。

――ならば僥倖、今後のサンプルとして記録させてもらおうとしよう

――……なに、心配することはない、眷属同志諸君。

「……まだまだ、我々には途方も無い時間續予があるのだから。

「……嘘」

メカエリは眼前の光景に、計測した魔力数値、その他データに絶望していた。確かに、依代は破壊した。

しかし、残った泥は、『まだ死生きてんでいる』。

「つー……どこまでも悍ましい……」

源頼光牛御前は舌打ちした。

目の前の怪異……否、『悪神王』に対して、己は遥かに無力であることに。

「……バカな」

その存在の『重さ』に、エヴァは絶句した。

同時に、これまで常に感じ続けていた『確かな違和感』と同一なものを、目の前のアレが放っていることに動揺した。

「……くそつたれが」

一瞬で全身を駆け巡った『特大の悪寒』に、俺は、即座に元凶を視界に収めた。

そうして理解するのは『絶対的な力の差』。

いや、存在の差とでもいうべきか。  
ともかく、アレには誰も勝てない。

そう、魂にまで刻みつけられる。

全人類の悪意の具現、それが意思を持ち、神としての体裁を整えて、君臨したのな  
らー

ーそれはこの上ない『天災』として、人類存続の危機となるだろう。

ソレは確かな形を得ていた。

漆黒で覆われた骨格、実に悪魔らしい蝙蝠型の羽根。足の先に生える三本の長い鉤  
爪。

四対の捻れた角が額に輝く真紅の宝玉を讃えるように歪に伸び回り、その手には『全  
ての悪を支配する杖』を携える。

『フウウウ……』

吐息は『全てを殺す毒素』となって辺りの『あらゆる概念』を死滅させていく。

存在の基盤、降り立つ階層からして異なるレベルの圧倒的な『重み』。

ただそこにあるだけで空間が悲鳴をあげ、軋み、『今の法則を捻じ曲げていく』。

『さて……』

その一言で、全ての生物が死を幻視する。

コレのあらゆる仕草、動作がその都度『全生命』に死を実感させる。

『原初の悪、根源の悪、すべての悪』

全人類、『過去から現在までの』全ての悪意が神として君臨するということを、この場の誰もが嫌でも理解する。魂に刻みつけられる。

『????????、ここに顕現した』

名前を聞いてはならない。理解してはならない。認識してはならない。視てはなら

ない。感じてはならない。思い出してはならない。

これを、この世界へと降ろしてはならない。

全ての悪意が、『痛み』が、周囲すべての生命を縛り付けた。

「……」

静かだった。／絶えず、『世界』が悲鳴をあげている。

何も、なかった。／悍ましさを超えたナニカがそこにある。

それでも――

――俺の魂は平静だった。

「気持ち悪い感覚だ。肉体はとつくに屈しているのに、魂だけが、精神だけが落ち着き  
払っているのは」

周りの全員が時間を止めたように、『諦めていた』。

ただ、現れただけなのに。

「くそつたれ……」

平静ではある、あるのだが……憎たらしいことにこの身体は『一般人』なのだ。仙人でも英霊でも神でも、真性悪魔でもない。

人。ちっぽけな、いち平民なのだ。

全く抵抗しようともしない身体。

唯一、『己の意思を発する』口だけは動く。これではただのおしやべり人形だ。

「クソ……」

だから、俺には結局何もできない。『意地でも守る』とか『死ぬことは許さない』とか。カッコつけても、結局、このザマだ。

何が、マスターか。何がフジマルリツカだというのか。

フジマルリツカなら最期まで諦めない、正義のために戦う、誰かのために戦う。

ああ、やっぱり、俺は『ニセモノ』か。



——瞬間、俺の目の前で『門が開いた』。

ひたひた、と『空間の裂け目』から人外の足音が響く。

『ああ……マスター。こんな、こんな——』

——可哀想な姿』

見下しているのに、所有物のように見ているくせに、どこまでも深い慈しみを備えて俺を見ている。深淵の如き愛情を向けてくれる。

それは、外宇宙より訪れた『神』の依代。

『銀の鍵』。

狂気に塗れた創作と、不幸にも繋がってしまった一人の少女。

『時空を統べるモノ』の巫女。

「……ああ……悪い子だ。来ては……いけない、とー」

そしてこのマスターは、そんな彼女に惹かれていた。

愛おしいと、この状況において感じていた。

それを理解しているからこそ、彼女はマスターを優しく抱き寄せ、深い眠りへと。一時の安息へと導く。

ーそして、このような事態を招いた存在へと最大の敵意を剥き出しにして相対する。

青白い肌、人外の手足、紅い瞳。

背後の『空間』から這い出て蠢く悍ましい触手の群れ。

手に持つ巨大な銀の鍵は、あらゆる時空を開くもの。繋ぐもの。

フォーリナー……『アビゲイル・ウィリアムズ』。

その場にて動けるもの、抵抗できるもの、『生きること』を続けられるものはいなかった。

誰もが、草木さえ『死』を実感して枯れ果て土に還つていく。

『神代からの』悪意は、世界を覆い尽くしても尚、余りある。

対して、この場に降り立ったのは『この世界の理から外れたモノ』。

『法則』の異なる遙か外宇宙の彼方より飛来して狂気を撒くモノ。

あらゆる枷を無効とする反則的な存在こそが、フォーリナー。

とある創作神話群を『切っ掛け』とする恐るべき高次存在。

かつて、コレを、『アビゲイルを依代に干渉してくる存在』を打倒できた者はいない。

英雄、神、星にさえ比肩する強大過ぎる存在の『化身』として振る舞う今の彼女を、抑

えることができる存在は、未だ、確認されていない。

己の意思で、明確に、『敵』を葬ると決めた『今の彼女』には、まだ誰も勝っていない。

『小さい。白き巨人に類する脅威とカテゴリするが、その力は、未だ小さ過ぎる』  
 神は、これを小さいと認識定義した。

かつての『神代に起きた大災害』に匹敵する脅威と認識定義しながら、尚、自らよりも遥かに小さき存在であると認識定義した。

『かの賢人より篡奪せしめた叡智を有する我にとつては……触殺すれるに値せぬ』

この、神をも『凌駕する』存在は、神代の終わりにて絶大な叡智の欠片を得ていた。故に、その存在の階位を大幅に引き上げることに成功しているのだ。

ーしかし、そんなもの。彼女にとってはどうでもいい。

『殺すわ。痛み救いを与える必要もない。』

確実に、『この世界』から葬ってあげる』

その敵意に呼応するように、背後の触手はその数を増やし、禍々しき狂気の渦はその範囲を拡大させて、法則ごとく乱していく。

対して、『神』<sup>死</sup>は、厳かに杖を掲げ、その全てを殺し尽くす。

魔力、命、大気、大地、草、花、空、海、塵の一片、概念ごとく殺していく。

『消えよ、小さき来訪者』

権能。その中でも絶大にして絶対、何者も逆らえぬ『滅びの宿命』。その概念を、何の気なしに、『神』<sup>死</sup>は解き放つ。

「ーそれでも、『彼女』ならば、大丈夫。」

『ええ。だから、微睡みの中で見ていてマスター。』

あなたを、死なせはしないわ』

額に蠢く第三の目が暗闇に沈む光り輝く。

あらゆる法則を無視して、遙か宇宙の彼方への『門を開く』。

『ー我は禁断の秘鑰ひやく、導くものなり』